三重県埋蔵文化財調査報告２１８

嶋　抜　Ⅲ

２００１年3月

三重県埋蔵文化財センター

環濠SD 572出土土器

墨書土器「田井」（報告番号337）

水銀朱付着状況（報告番号892）

ベンガラ塗布状況（報告番号901）

序

三重県の中央部を流れる雲出川の流域は、現在では津市・久居市・一志郡および松阪市の一部を含みますが、かつては大きく一志郡とされていた地域であります。この一志郡は、著名な三重県下の歴史上でも特徴的な文化を担った地域で、重要な遺跡が数多く所在するところです。弥生時代の稲作文化がまず受け入れられたのがこの地域と考えられますし、古墳時代前期において前方後方墳が集中する地域でもあります。また、古代律令期における中央的な文化が伊勢に受け入れられる状況を考えるうえでも、この地域の動向は非常に重要です。

今回発掘調査を行いました雲出島貫遺跡は、雲出川河口近くの左岸部で、現在は津市雲出島貫町にあたりますが、旧の一志郡内に相当します。今回の発掘調査は同じ開発事業に伴う３次目で、最終年度にあたりました。今回の調査では、古墳時代前期から平安時代末期頃までの濃密な遺構を確認しました。なかでも古墳時代前期では、集落跡とそれを囲う環濠のほか、墓域（方形周溝墓群）や生産域（水田）を確認することができ、当時の集落のあり方を考える上で貴重な資料が得られました。

平成９年度から３ヶ年をかけて行った当遺跡の調査によって、これまで比較的実態が不明であった三重県下の低地部の遺跡の状況がかなり明らかとなってまいりました。このような貴重な成果の影には、開発による遺跡の部分的な消滅という残念なことがありますが、ここで得た成果を迅速かつ明確なかたちで、県民の皆様はもとより全国的に向けて、三重県がいにしえに育んだ重要な文化を公表していきたいと考えます。

発掘調査にあたっては、地元津市および近隣在住の方々、雲出島貫地区自治会をはじめ、津市教育委員会、県土整備部道路整備課・津地方県民局津建設部から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

２００１年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　藤　澤　英　三

例　言

1　本書は、三重県津市雲出島貫（くもずしまぬき）町字町中・藤本ほかに所在する雲出島貫遺跡の、第３次発調査にかかる報告書である。

2　調査は、平成11年度一般地方道嬉野津線国補橋梁整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　発掘調査は平成 11 年度に、報告書作成業務は平成11 ・ 12年度に行った。発掘調査は三重埋蔵文化財センター調査第一課が行い、調査第一課主査兼調査第二係長森川常厚の調整のもと、技師伊藤裕偉、技術補助員川崎志乃が担当した。

4　調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構写真は伊藤・川崎が、遺物写真は伊藤・萩原義彦が撮影した。報文の執筆は伊藤・川崎が適宜分担して行い、文末・目次などに明記した。全体の編集は、調査第一課主査兼第二係長野原宏司（平成12年度）の調整のもと、伊藤が行った。

6　調査にあたっては、津市・久居市・嬉野町在住の各位、雲出島貫地区、津市教育委員会、および県土整備部道路整備課・津地方県民局津建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

7　報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等を頂いている。記して感謝いたしたい。
青木哲哉（立命館大学）、赤澤徳明（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、赤塚次郎（(財) 愛知県埋蔵文化財センター）、石黒立人（(財) 愛知県埋蔵文化財センター）、奥義次（三重県立松阪高等学校）、萱室康光（津市教育委員会）、川畑和弘（守山市教育委員会）、鈴木敏則（浜松市教育委員会）、高橋学（立命館大学）、田村陽一（三重県立相可高等学校）、外山秀一（皇學館大学）、早野浩二（(財) 愛知県埋蔵文化財センター）、坂靖（奈良県立橿原考古学研究所）、樋上昇（(財) 愛知県埋蔵文化財センター）、広瀬和久（三重県農業技術センター）、深澤敦仁（(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団）、大川勝宏（斎宮歴史博物館）、

8　当地は国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏 6°30′、真北方位は西偏 0°17′34”（平成 11 年度、当遺跡航空測量時の測定）である。

9　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

10　当報告書での用語は、以下の通り統一した。
つき‥‥‥‥‥「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん‥‥‥‥‥「椀」「碗」「埦」があるが、「椀」を用いた。

11　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。
ＳＡ‥‥柱列　ＳＢ‥‥掘立柱建物　ＳＤ‥‥溝・環濠（墳墓の周溝を含む）
ＳＦ‥‥焼土坑・カマド　ＳＨ‥‥竪穴住居　ＳＫ‥‥土坑　ＳＲ‥‥流路
ＳＸ‥‥墓・周溝墓　ＳＺ‥‥水田面・落ち込みなど　pit ‥‥ピット、柱穴

12　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

13　表題の「嶋抜」は、中世以前の当地域の呼称である。

14　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……伊藤…（1）
1　調査の契機……（1）
2　調査の経過……（1）
3　調査の方法……（3）
Ⅱ　島貫をとりまく諸環境……伊藤…（6）
1　地形的環境……（6）
2　雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境……（6）
3　雲出の「蓮光坊」について……（7）
Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～……伊藤…（11）
1　調査区の地形と基本層位概要……（11）
2　Ｂ２・Ｂ４・Ｂ５区の遺構……（12）
a　弥生時代の遺構……（12）
b　古墳時代前期の遺構……（19）
c　古墳時代中後期の遺構……（25）
d　飛鳥～平安時代の遺構……（26）
e　中世の遺構……（30）
3　Ｂ６拡張区の遺構……（31）
a　第２遺構面の遺構……（31）
b　第１遺構面の遺構……（35）
4　Ｂ７区第２遺構面の遺構……（35）
a　弥生時代の遺構……（36）
b　古墳時代前期の遺構……（38）
c　古墳時代中後期の遺構……（46）
d　飛鳥～平安時代の遺構……（50）
Ⅳ　調査の成果～出土遺物～……伊藤・川崎…（60）
1　Ｂ２区出土の遺物……（60）
a　縄文時代晩期の遺物……（60）
b　弥生時代の遺物……（60）
c　古墳時代前期の遺物……（60）
d　古墳時代後期以降の遺物……（62）
e　中世の遺物……（63）
f　その他の遺物……（63）
2　Ｂ４区出土の遺物……（63）
a　弥生時代の遺物……（63）
b　古墳時代前期の遺物……（64）
c　奈良・平安時代の遺物……（66）
3　Ｂ５区出土の遺物……（66）
a　弥生時代の遺物……（66）
b　古墳時代前期の遺物……（67）
c　古墳時代中後期の遺物……（74）
d　飛鳥～平安時代の遺物……（74）
e　中世の土器……（75）

4　Ｂ６拡張区出土の遺物……（75）
a　飛鳥・奈良時代の遺物……（75）
b　中世の遺物……（75）
5　Ｂ７区第２遺構面出土の遺物……（75）
a　弥生時代の遺物……（75）
b　古墳時代前期の遺物……（75）
c　古墳時代中後期の遺物……（79）
d　飛鳥～平安時代の遺物……（81）
6　出土木製品……（83）
Ⅴ　雲出島貫遺跡の成立と展開～総括に代えて～……伊藤…（159）
はじめに……（159）
1　雲出島貫遺跡の時期区分……（159）
2　古墳時代初頭の環濠集落と集落景観の変化～Ｃ・Ｄ期の動向～……（162）
3　土地開発と検出遺構の関連～Ｅ期の動向～……（168）
4　中世前期（Ｆ期）の遺跡動向……（170）
おわりに……（170）
付編
一　古墳時代前期の雲出島貫遺跡……川崎…（172）
二　雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器……伊藤…（194）
三　雲出島貫遺跡における古代の土器……伊藤…（204）
四　雲出島貫遺跡のプラント・オパール分析……外山…（207）

挿　図　目　次

fig.1　事業地内調査区位置図
fig.2　遺跡位置図
fig.3　調査区周辺地形図
fig.4　Ｂ２・４・５区平面図
fig.5　Ｂ４区南壁東西土層断面図
fig.6　Ｂ５区北壁東西土層断面図
fig.7　Ｂ５区竪穴住居SH569平面・断面図
fig.8　Ｂ５区環濠SD572土器出土状況
fig.9　Ｂ４区環濠SD572土器出土状況
fig.10　Ｂ２区環濠SD532調査区北壁土層
fig.11　Ｂ２区竪穴住居SH509平面・断面図
fig.12　Ｂ２区竪穴住居SH530平面・断面図
fig.13　Ｂ５区竪穴住居SH552平面・断面図
fig.14　Ｂ５区水田遺構SZ504　３面畦畔土器出土状況
fig.15　Ｂ５区水田遺構SZ504土層
fig.16　Ｂ４区落ち込みSZ575土器出土状況
fig.17　Ｂ５区竪穴住居SH550平面・断面図
fig.18　Ｂ２区竪穴住居SH533平面・断面図
fig.19　Ｂ2･4･5区掘立柱建物SB577･579･581･582平面・断面図
fig.20　Ｂ２区井戸SE522概略図
fig.21　Ｂ４区落ち込みSZ502土器出土状況
fig.22　Ｂ５区井戸SE567平面・立面図
fig.23　Ｂ２区土坑SK507平面・断面図
fig.24　Ｂ６拡張区平面・断面図
fig.25　Ｂ７区第２面平面図
fig.26　Ｂ７区東壁土層
fig.27　Ｂ７区第２面集積遺構SZ519平面･立面図
fig.28　Ｂ７区第２面周溝SX364･365平面・断面図
fig.29　Ｂ７区第２面周溝SX469平面・断面図
fig.30　Ｂ７区第２面周溝SX475･477平面・断面図
fig.31　Ｂ７区第２面周溝SX484平面・断面図
fig.32　Ｂ７区第２面周溝SX486平面・断面図(1)
fig.33　Ｂ７区第２面周溝SX486平面・断面図(2)
fig.34　Ｂ７区第２面周溝SX489平面・断面図
fig.35　Ｂ７区第２面周溝SX491平面・断面図
fig.36　Ｂ７区第２面周溝SX520・521平面・断面図
fig.37　Ｂ７区第２面土器群SZ396平面・立面図
fig.38　Ｂ７区第２面竪穴住居SH413平面・断面図
fig.39　Ｂ７区第２面竪穴住居SH467･474平面・断面図
fig.40　Ｂ７区第２面竪穴住居SH478･479平面・断面図
fig.41　Ｂ７区第２面落ち込みSZ367平面・断面図
fig.42　Ｂ７区第２面竪穴住居SH374平面・断面図
fig.43　Ｂ７区第２面竪穴住居SH380･492平面・断面図
fig.44　Ｂ７区第２面掘立柱建物SB590･591平面･断面図
fig.45　Ｂ７区第２面掘立柱建物SB593･594平面・断面図
fig.46　出土遺物実測図(1)縄文土器・石器
fig.47　出土遺物実測図(2)Ｂ２区弥生
fig.48　出土遺物実測図(3)Ｂ２区
fig.49　出土遺物実測図(4)Ｂ２区SD532
fig.50　出土遺物実測図(5)Ｂ２区SD532下層
fig.51　出土遺物実測図(6)Ｂ２区SD532ほか
fig.52　出土遺物実測図(7)Ｂ２区・Ｂ４区
fig.53　出土遺物実測図(8)Ｂ４区SD572
fig.54　出土遺物実測図(9)Ｂ４区SD572
fig.55　出土遺物実測図(10)Ｂ４区
fig.56　出土遺物実測図(11)Ｂ４区SZ504
fig.57　出土遺物実測図(12)Ｂ４区
fig.58　出土遺物実測図(13)Ｂ５区SH569
fig.59　出土遺物実測図(14)Ｂ５区
fig.60　出土遺物実測図(15)Ｂ５区SD572
fig.61　出土遺物実測図(16)Ｂ５区SD572
fig.62　出土遺物実測図(17)Ｂ５区SD572
fig.63　出土遺物実測図(18)Ｂ５区SD572
fig.64　出土遺物実測図(19)Ｂ５区SD532
fig.65　出土遺物実測図(20)Ｂ５区SD532
fig.66　出土遺物実測図(21)Ｂ５区SD532

fig.67　出土遺物実測図(22)Ｂ５区SD532
fig.68　出土遺物実測図(23)Ｂ５区SZ504
fig.69　出土遺物実測図(24)Ｂ５区SZ504
fig.70　出土遺物実測図(25)Ｂ５区
fig.71　出土遺物実測図(26)Ｂ５区・Ｂ６拡張区
fig.72　出土遺物実測図(27)Ｂ７区弥生・古墳前期
fig.73　出土遺物実測図(28)Ｂ７区古墳前期
fig.74　出土遺物実測図(29)Ｂ７区古墳前期
fig.75　出土遺物実測図(30)Ｂ７区SX486
fig.76　出土遺物実測図(31)Ｂ７区古墳前期
fig.77　出土遺物実測図(32)Ｂ７区古墳前期
fig.78　出土遺物実測図(33)Ｂ７区SZ367
fig.79　出土遺物実測図(34)Ｂ７区SZ367
fig.80　出土遺物実測図(35)Ｂ７区SZ367
fig.81　出土遺物実測図(36)Ｂ７区SZ367
fig.82　出土遺物実測図(37)Ｂ７区古墳中後期
fig.83　出土遺物実測図(38)Ｂ７区古墳中後期
fig.84　出土遺物実測図(39)Ｂ７区古墳中後期
fig.85　出土遺物実測図(40)Ｂ７区古墳後期～古代
fig.86　出土遺物実測図(41)Ｂ７区古代
fig.87　出土遺物実測図(42)Ｂ７区古代
fig.88　出土遺物実測図(43)Ｂ７区古代ほか
fig.89　出土遺物実測図(44)Ｂ５区SE567木製品
fig.90　出土遺物実測図(45)Ｂ５区SE567井戸枠材
fig.91　雲出島貫地内地籍図
fig.92　地籍図と調査区の関係
fig.93　調査区内遺構変遷図(1)
fig.94　調査区内遺構変遷図(2)
fig.95　高杯Ａの変遷概念図
fig.96　高杯Ａの変遷①
fig.97　高杯Ａの変遷②
fig.98　Ｓ字状口縁台付甕の変遷概念図
fig.99　Ｓ字状口縁台付甕と類似する土器群
fig.100　島貫Ｃ期土器編年案①
fig.101　島貫Ｃ期土器編年案②
fig.102　島貫Ｃ期土器編年案③
fig.103　島貫Ｃ期土器編年案④
fig.104　島貫Ｃ期土器編年案⑤
fig.105　島貫Ｃ期土器編年案⑥
fig.106　甕口縁部の組成
fig.107　甕底部の組成
fig.108　雲出島貫遺跡出土搬入土器分布図
fig.109　赤色顔料の見られる土器
fig.110　島貫Ｄ期土師器分類図(1)
fig.111　島貫Ｄ期土師器分類図(2)
fig.112　島貫Ｄ期土器変遷図
fig.113　島貫Ｄ期並行期における土師器壺Ａ１・鉢Ａの分布
fig.114　島貫Ｅ期土器変遷図

表　目　次

tab.1　遺構一覧表(1)
tab.2　遺構一覧表(2)
tab.3　遺構一覧表(3)
tab.4　遺構一覧表(4)
tab.5　遺構一覧表(5)
tab.6　出土遺物観察表(1)
tab.7　出土遺物観察表(2)
tab.8　出土遺物観察表(3)
tab.9　出土遺物観察表(4)
tab.10　出土遺物観察表(5)
tab.11　出土遺物観察表(6)
tab.12　出土遺物観察表(7)
tab.13　出土遺物観察表(8)
tab.14　出土遺物観察表(9)
tab.15　出土遺物観察表(10)
tab.16　出土遺物観察表(11)
tab.17　出土遺物観察表(12)
tab.18　出土遺物観察表(13)
tab.19　出土遺物観察表(14)
tab.20　出土遺物観察表(15)
tab.21　出土遺物観察表(16)
tab.22　出土遺物観察表(17)
tab.23　出土遺物観察表(18)
tab.24　出土遺物観察表(19)
tab.25　出土遺物観察表(20)
tab.26　出土遺物観察表(21)
tab.27　出土遺物観察表(22)
tab.28　出土遺物観察表(23)

tab.29　出土遺物観察表(24)
tab.30　出土遺物観察表(25)
tab.31　出土遺物観察表(26)
tab.32　出土遺物観察表(27)
ab.33　出土遺物観察表(28)
tab.34　出土遺物観察表(29)
tab.35　出土遺物観察表(30)
tab.36　土器計測表

図　版　目　次

ＰＬＡＴＥ表紙　Ｂ７区周溝ＳＸ491の古墳時代前期土器
PL.1　Ｂ２区　全景
PL.2　Ｂ２区　全景・遺構
PL.3　Ｂ２・Ｂ４区　遺構・全景
PL.4　Ｂ４区　遺構・土層
PL.5　Ｂ２・Ｂ５区　環濠SD532
PL.6　Ｂ４・Ｂ５区　環濠SD572(1)
PL.7　Ｂ４・Ｂ５区　環濠SD572(2)
PL.8　Ｂ４・Ｂ５区　環濠SD572(3)
PL.9　Ｂ４・Ｂ５区　環濠SD572(4)
PL.10　Ｂ５区　水田遺構SZ504
PL.11　Ｂ５区　遺構
PL.12　Ｂ５区　竪穴住居SH550(1)
PL.13　Ｂ５区　竪穴住居SH550(2)
PL.14　Ｂ５区　遺構・土層
PL.15　Ｂ６拡張区　遺構
PL.16　Ｂ７区第２遺構面　全景
PL.17　Ｂ７区第２遺構面　周溝(1)
PL.18　Ｂ７区第２遺構面　周溝SX486
PL.19　Ｂ７区第２遺構面　周溝(2)
PL.20　Ｂ７区第２遺構面　周溝(3)
PL.21　Ｂ７区第２遺構面　周溝(4)
PL.22　Ｂ７区第２遺構面　遺構(1)
PL.23　Ｂ７区第２遺構面　竪穴住居(1)
PL.24　Ｂ７区第２遺構面　竪穴住居(2)
PL.25　Ｂ７区第２遺構面　掘立柱建物
PL.26　Ｂ７区第２遺構面　遺構(2)
PL.27　出土遺物(1)　縄文土器
PL.28　出土遺物(2)　石器・弥生土器
PL.29　出土遺物(3)　Ｂ２区　弥生土器・石器
PL.30　出土遺物(4)　Ｂ２区　土師器
PL.31　出土遺物(5)　Ｂ４・５区　弥生土器ほか
PL.32　出土遺物(6)　Ｂ５区　弥生土器・土師器
PL.33　出土遺物(7)　Ｂ５・７区　土師器
PL.34　出土遺物(8)　Ｂ７区　土師器・石製品
PL.35　出土遺物(9)　石製品類
PL.36　出土遺物(10)　Ｂ２・４区
PL.37　出土遺物(11)　Ｂ４・５区
PL.38　出土遺物(12)　Ｂ４区
PL.39　出土遺物(13)　Ｂ４・５区
PL.40　出土遺物(14)　Ｂ５区
PL.41　出土遺物(15)　Ｂ５区
PL.42　出土遺物(16)　Ｂ５区
PL.43　出土遺物(17)　Ｂ５区
PL.44　出土遺物(18)　Ｂ５区
PL.45　出土遺物(19)　Ｂ５・６区
PL.46　出土遺物(20)　Ｂ７区
PL.47　出土遺物(21)　Ｂ７区
PL.48　出土遺物(22)　Ｂ７区
PL.49　出土遺物(23)　Ｂ７区
PL.50　出土遺物(24)　Ｂ７区
PL.51　出土遺物(25)　Ｂ７区
PL.52　出土遺物(26)　施文・調整手法
PL.53　出土遺物(27)　施文・調整手法
PL.54　出土遺物(28)　施文・調整手法
PL.55　出土遺物(29)　施文・調整手法
PL.56　出土遺物(30)　施文・調整手法

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

三重県下の道路網は、幹線となっている国道23号線以外は、概して劣悪な状況にある。県道嬉野津線では雲出川に架かる雲出橋が脆弱であり、軽自動車がようやく通行できる程度のものである。

この雲出橋を新たに造成し、自動車を中心とした交通網に耐えうる路線としての機能を目して、当該県道は新たに設定されることとなった。その結果、今回発掘調査対象になった地点がその路線として選定されることとなった。

津市雲出島貫町地内の対象路線敷内には、雲出島貫遺跡が存在している。この遺跡は、津市雲出島貫町の旧参宮街道以西から久居市木造町にかけて広がる周知の埋蔵文化財包蔵地(津市遺跡番号484)としてすでに認識されていたものである。

三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の埋蔵文化財の実態を確認するため、平成８年12月から平成９年１月にかけて、当センター係長杉谷政樹を担当者として試掘調査を実施した。その結果、旧参宮街道以東にも遺跡の広がることが判明し、この時点で事業地内の約8,500㎡に、遺跡の存在することが確認された。各試掘坑からは、古墳時代から室町時代にかけての多くの出土遺物が認められ、極めて良好な遺跡が埋蔵されていることが予測された。

この結果を基に当センターおよび文化芸術課（当時、現在は生涯学習課文化財保護室）では、県土木部と埋蔵文化財保護協議を重ね、事前に事業地内の発掘調査を行うことで合意した。

当初、調査は平成９年度から２ヶ年行うこととしていた。しかし、平成９年度に実施した第１次調査によって、検出遺構面が複数存在していることが明らかとなり、当初予定していた面積をはるかに上回る調査面積を対応していく必要のあることが認識されるに至った。そのため、調査期間は平成 11年度までの、都合３ヶ年となった。

今回報告する平成11年度は第３次調査で 当事業最終調査年度にあたる。対象とした調査区は、Ｂ２区（西部）、Ｂ５区（東部）、Ｂ４区、Ｂ６拡張区、Ｂ７区（第２面北半部）である。第３次調査区の調査面積は、2,750㎡であった。

なお、第１次調査から第３次調査までの調査累積面積は、13,755㎡（複数遺構面）に及んでいる。

2　調査の経過

a　調査経過概要

第３次発掘調査は、平成11年４月26日から重機による表土掘削を開始し、同年８月31日に現地作業を全て完了した。

平成11年度の調査は、道路改良工事期限との関係で春先からの調査となった。低地部に所在する当遺跡の宿命ともいえる水との闘いは、当年度は田圃に水をたたえる時期と重なったため、全調査次を通じて最大最悪の事態となった。調査区は導排水路と田圃との間で、その間を仮設パイプで水通しした。そのため、当然ながら水漏れがあり、一夜明けると調査区全体が水浸し、という日が何日も続いた。調査に支障をきたさないために、日曜日の夕方に排水ポンプをかけ、月曜日の作業に備えたことも何度かあった。そして、地下湧水もこれまで同様激しかった。上下左右から水の攻撃を受けながらの調査であり、なおかつ遺構の内容が非常に濃かったため、充分に調査ができない場面も多かった。関係各位のご尽力はことばに尽くせないものがあるものの、低地部の調査体制を再考する必要がある調査であった。

このような調査であったため、雲出島貫町在住の方々をはじめ、調査区近隣に耕作地を持つ方々には様々なご迷惑をかけたはずである。それにもかかわらず、有形無形のご理解いただいたことに対しては、心からの御礼を申し上げたい。

さらに、このような環境下のなか、発掘調査作業員の各氏には大変なご迷惑をかけることになった。それにもかかわらず積極的に作業にあたっていただ

き、概ね恙なく終了することができた。当遺跡の3ヶ年にわたる長い調査が終了することができたのも、作業員各位の御努力の賜である。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

飯田悦子、飯田信代、伊藤八重子、梅基慶一、尾市しず、倉田厚子、倉田きよ子、倉田よし子、後久治、小寺キヨ子、後藤幸子、佐藤峯子、島上昌、白藤茂、杉山奏、鈴木徳子、林定、原田隆、松原要、松原忠秋、宮崎幸夫、八幡貞子、山口貞子、吉田寿夫、

b　調査日誌（抄）

4月26日　第2次調査区のB7区下層の第2面から重機による掘削を開始。

5月6日　B7区第2面重機掘削終了。地区杭を設定する。

5月10日　B7区第2面から人力掘削作業開始。

5月11日　検出。遺構は極めて見にくい。

5月13日　B7区中央部で古式土師器の土器群を検出。壺・高杯などあり。

5月21日　SX484から把手付大形台付鉢出土。

5月26日　B4区の表土掘削。地区杭設定。

6月1日　埋蔵文化財町村研修で、浅川充弘氏（朝日町）が合流（～7月31日まで）。

6月3日　B7区f20グリット付近で布掘り状のピットを検出。

6月8日　B7区実測用ポイントの設定。B4区東端部の検出。黄灰色系土のベースに褐色系埋土で非常に見易い。

6月9日　B7区遺構実測（森川常厚・水谷豊・豊田祥三）。B4区遺構掘削。

6月10日　B2区調査開始。B5区表土掘削開始。

6月16日　B7区調査区東壁断ち割り。B4・B2区調査続行。

6月17日　青木哲哉氏（立命館大学）来。土層に関する指導。県教育長来訪。

6月21日　調査区水没。B2区で井戸を確認。

6月25日　A6区東端第2面竪穴住居の清掃・写真。

7月1日　B7区補足写真、実測。B7区の終了。

7月2日　B6拡張区の表土掘削。津建設部・日本土建㈱（現場主任）と現道下の取り扱いについて協議。工法変更により遺構を痛めない工事とすることで合意。

7月5日　B6拡張区・B2区の調査。B4区は水抜き。すぐに水たまりとなる。

7月6日　B2区SH530に床面に砂が敷かれていたことを確認。

7月7日　三重県埋蔵文化財担当者会議で現地見学会場となる。

7月8日　B2区SH530から瑪瑙の原石出土。

7月9日　B5区検出開始。竪穴住居などあり。

7月12日　B5区から円面硯出土。

7月15日　B2区清掃・写真。B2・4区の遺構実測を開始（杉崎淳子・川崎）。

7月16日　実測の続行（金子智子・杉崎・豊田）。

7月21日　B6拡張区、清掃・写真。

7月22日　B5区SH550のカマドに据えられた台付甕を確認。

7月23日　B6拡張区終了。B5区西端に落ち込み地形（SZ504）を確認。

8月2日　B2区SE522内に木枠を確認。

8月4日　B5区SD532が西へ曲がる。その上に大形方形ピットを確認するも、水浸しである。外山秀一氏（皇學館大学）、高橋学氏（立命館大学）来訪。SZ504は水田と判明。

8月9日　調査区水没。B5区SZ504の上には奈良時代の掘立柱建物がある。

8月10日　B5区実測（金子・杉崎・豊田・浜邊一機）開始するも、3時頃に大雨。

8月12日　B5区SZ504、5世紀末頃の面まで確認。

8月17日　B5区SD572から完形を含む多量の土器が出土。環濠か？

8月18日　B5区SH569は弥生中期前葉頃の竪穴住居。SD532から大量の土器出土するも、常に水浸し状態である。

8月19日　B5区清掃・写真。

8月20日　B4区SD572の掘削。やはり土器多い。

8月23日　B5区北壁土層の断ち割り。

8月25日　B4区南壁土層の断ち割り。B5区土層図作製（杉崎）。青木哲哉氏に土層観察の指導を再度いただく。

8月30日　B4・5区土層図の補足。B2区SE522内の木枠を採り上げる（湧水激しいため、

重機を併用する)。Ｂ２・４・５区終了。
８月31日　作業終了。津建設部へ現場引き渡し。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。
・法第５７条の３第１項（文化庁長官あて）
平成９年６月６日付け道建第765号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
平成11年４月28日付け教生第166号（県教育長報告）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津警察署長あて）
平成11年10月４日付け教生第4-22号（県教育長通知）

3　調査の方法

a　作業部門委託について

当センターでは、調査の迅速な対応と調査員の調査そのものへの専念のための労務管理軽減を主な目的とする作業部門委託を行っている。当遺跡第３次調査では、(財）三重県農業開発公社と当センターとで契約締結のうえ実施した。

今回の調査では、上記公社主幹丸山寛氏と同嘱託北角光津子氏が当遺跡の担当として、当センターの担当である伊藤・川崎とともに作業にあたった。

b　掘削について

今年度の遺構掘削の方法は、大地区によって若干の異なりがある。

Ｂ７区　この調査区は、第１遺構面の全体と第２遺構面の一部を既に前年度に実施している。したがって、第３次調査では第２遺構面の残りの部分を調査している。

掘削は、第２遺構面の遺構が明確に確認できる黄灰色系砂質土層までを重機により掘削し、以下を人力によって除去している。

なお、この黄灰色系砂質土を検出面としたのは、あくまでも調査担当者の力量の範囲で確認可能な層という意味でしかない。出土遺物の状況を考えると、本来はもう少し上のレベルから遺構は掘り込まれていたに違いない。方形周溝墓も、単なる溝としてしか把握することができなかったが、墳丘上に相当する場所から土器が出土していることから、実際には盛土も遺存していたと考えられる。これは、調査を進めていく中で認識したことであり、その意味では悔いの残る結果となってしまった。

Ｂ６拡張区　第２次調査のＢ６区で検出した木棺墓（ＳＸ329）の周辺の状況を知るために、現道部分ではあるが関係各位の理解が得られたので調査を行った。

調査は、時間的な制約のなかで東半部のみ第２面まで調査を行い、西半部は第１面の確認に止めた。第１面直上まで重機による掘削をし、以下は人力で行った。

Ｂ２・４・５区　昭和50年代に実施された圃場整備事業による削平があり、耕作土と床土の直下が遺構面となっている。そのため、床土直上付近までを重機による掘削とし、それ以下を人力で除去していった。

Ｂ４・５区ＳＺ504　Ｂ４・５区西部では、古墳時代後期頃までの水田（ＳＺ504）があり、概ね３面に大別できる。

Ｂ５区の水田１・２面については部分的に人力による面の確認を行ったが、最下面の３面については湧水の関係もあり、重機による掘削で確認するに留めた。なお、３面以下でも水田の存在が充分考えられたが、激しい湧水によりその確認は全く不可能であった。

Ｂ４区は、２ｍにも満たない調査区幅のため、危険を伴う深部の掘削には耐えない。そのため、調査最終段階に可能な限りの断ち割りを行い、水田面と微高地との関係を追求することとした。

c　地区設定について

大地区設定については、平成９年度に既に行っており、それに準じている。先述のように、このうちのＢ２区（西部)、Ｂ５区（東部)、Ｂ４区、Ｂ７区（第２面北半部)、さらに今年度追加したＢ６拡張区が今年度の調査区である。なお、Ｂ７区は、先述のように第２面の一部を前年の第２次調査で行っ

ているが、その成果は第３次と併せ、Ｂ７区第２面として一括し、今回報告する。

調査区内は、４m四方の升目で切ることによって小地区（グリット）を設定している。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。

Ｂ７区およびＢ６拡張区は、第２次調査の際に設定したグリットと対応させている。Ｂ２区（西部）・Ｂ４区・５区（東部）は、第１次および第２次で調査したＢ２区（東部）・Ｂ５区（西部）とは対応させずに、今回新たに設定したものである。第３次の調査対象範囲であるＢ２区（西部）・Ｂ４区・５区（東部）は、全体として一連のグリットを設定したが、Ｂ６拡張区およびＢ７区のそれとは連携していない。

なお、ここで設定した小地区方眼は、国土座標軸とは無関係である。

d　遺構図面について

今回報告する調査区の平面図は、全体を1/20で手書き実測した。竪穴住居・土坑・溝などで良好な遺物出土状況を伴うような遺構は、原則的には個別に1/10の実測図を作成している。また、調査区の土層断面図は、1/20で実測している。

これらの実測図における国土座標については、平成９年度に配置した基準点を用いている。

e　遺構番号について

平成９年度から３ヶ年継続して行った発掘調査であるため、遺構番号の重複は避けた方が無難である。第２次調査の遺構最終番号が「455」であるため、第３次調査は「461」からとしたが、前年度調査遺構と明らかに同一のものについては既に付加されている遺構番号を用いている。なお、遺構番号は、大調査区に関係なく通し番号となっている。

fig. 1　事業地内調査区位置図（1：2,500）

Ⅱ　島貫をとりまく諸環境

1　地形的環境

a　雲出島貫遺跡の位置

雲出島貫遺跡は、現在の行政上では津市雲出島貫町字藤本・町中を中心として広がる埋蔵文化財包蔵地である。西は久居市木造町に、南は雲出川を挟んで一志郡三雲町に、それぞれ接している。

遺跡は、三重・奈良県境の高見山系を水源地とする雲出川の北岸部に位置する。雲出川は遺跡の3㎞ほど下流で伊勢湾へと注いでいる。当地は雲出川下流域にあたり、雲出川が運んできた土砂によって遺跡は展開している。当地の微高地は雲出川に沿って東西に長く広がっている。したがって当遺跡は、行政上は津市雲出島貫町域の埋蔵文化財包蔵地として把握されているとはいえ、実態としては久居市木造町五位殿地区付近までをも含む広大な遺跡と考えるべきであろう。

b　雲出島貫遺跡周辺の地形

当遺跡は標高3ｍ前後の低地部に相当する。この遺跡の基盤は、雲出川がその北岸に形成した堆積土である。その堆積土は一様ではなく、各所において特徴的な様相が観察できることが、当遺跡の3次にわたる調査によって確認できた。この状況については後で触れるが、重要なのは居住地と生産地とが地形の状況によって明確に区分されていることである。

当遺跡を考えるうえでとくに重要なものとして、雲出川が運んできた土砂が伊勢湾を北上する沿岸流によって形成された砂堆ものである。雲出島貫遺跡では、字町中が所在する場所がそれにあたる。これは雲出川が伊勢平野部に形成した最初の砂堆にあたり、その後、現在の海岸線までの間に4・5条の砂堆を形成している。このことにより、雲出島貫遺跡では砂堆の東西によって土質的な差異が生じることとなっている。

雲出島貫遺跡北方には、潟湖が存在していた。現在の津市藤方付近は、かつての潟湖“藤潟”であり、この潟湖を大いに利用した港町が安濃津である[1]。安濃津についてはここで詳述するまでもないが、潟湖“藤潟”が近世になって新田開発により消滅することを考慮すれば、中世以前の雲出島貫遺跡が、南に雲出川、北に藤潟といういずれも水域に挟まれた環境下にあったことが理解されよう。

2　雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境

雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境についてはこれまでの報告書中で記述しているので、ここでは重複を避け、古墳時代までの大まかな動向を中心に見る。

雲出川下流域における遺跡は、地形的に大きく分ければ方雲出島貫遺跡のような低湿地部と、遺跡北方に所在する「高茶屋台地」と呼ばれる台地部とに分かれる。これらを、潟湖“藤潟”をめぐる遺跡群として把握することもできる。

高茶屋台地では、旧石器時代以降の遺跡が連綿と確認されている。なかでも四ツ野Ｂ遺跡から工事中に不時発見された2個体以上の銅鐸[2]は重要である。これは近畿突線紐式のもので、高茶屋台地南東端部に埋納されていた。この付近では、四ツ野Ｂ遺跡あるいは雲出島貫遺跡など、丘陵部・低地部ともに濃密な遺跡が拡がっており、銅鐸はそれらを含めた周辺の複数集落に関わる遺物と推測することができる。その中でも、この埋納地点が低地部を睨む位置にあることから、雲出島貫遺跡などの低地に展開する遺跡を最も意識した埋納であることも考えられよう。

古墳時代前期後半ないしは中期初頭頃には、全長約90ｍの前方後円墳である池の谷古墳が台地東端部に造成されている[3]。雲出島貫遺跡の形成時期とも重なる古墳時代前期では、四ツ野Ｂ遺跡[4]や高茶屋大垣内遺跡[5]で多数の竪穴住居跡が確認されている。他にも、前田町屋遺跡[6]、小野江甚目遺跡[7]、松本権現前遺跡[8]、香良洲西山遺跡[9]など、近隣に古墳時代前期の遺跡は数多く確認されており、弥生時代後期までの遺跡がほとんど確認されないことと明確な対照をなしている。

古墳時代中期頃の高茶屋大垣内遺跡では、計画的に配置された複数の掘立柱建物と、その周囲に区画溝や一部板塀を用いた区画を持つ建物群が形成され、当地に関わる階層的に上位な人物の存在が想定できる。また古墳時代後期頃に、この丘陵一帯に土師器・須恵器・埴輪などの土器生産が展開しており[10]、発掘調査では奈良時代頃の土器焼成遺構も確認されている。これらは、『日本書紀』雄略天皇17年3月条にある「藤形の村」[11]から送られた土師器工人の記述との関連が非常に興味深い。

低地部では雲出川を挟んで当遺跡の対岸にあたる小野江甚目遺跡や舞出北遺跡[12]からは、5世紀末頃から6世紀前葉頃にかけての古墳群が検出されている。これらの古墳群からは円筒埴輪のほか馬形や家形の形象埴輪も出土しており、台地部に存在する初期群集墳と何ら変わらない様相が確認されている。また、当遺跡のすぐ西にあたる久居市木造町の五位殿地区からも円筒埴輪の出土が知られている[13]。これらのことを総合すれば、5世紀末頃から6世紀前葉にかけて、低地部の微高地上には集落とともに初期の群集墳がそこかしこに形成されていたと考えてよかろう。

このようなあり方は、当遺跡を含めた当地近隣で見られる古墳時代前期の集落と周溝墓群との関係に共通する部分がある。時期的には異なる両者の景観的類似については、古墳時代中期頃の空白期を挟む問題とともに今後充分な検討が必要である。

古代に至ると、当地は一志郡嶋抜郷として把握されている[14]。嶋抜郷は、『正倉院文書』に所収されている史料中に、その戸主が「壹志君挨祖父」である旨が記されており[15]、当地の豪族である一志君との関係が窺われる重要地であることが窺われる。

3　雲出の「蓮光坊」について

『嶋抜』Ⅰの第Ⅰ章で、伊勢参宮のために伊勢へと赴いた山科言継が、弘治3（1557）年3月の往路、同年4月の復路の、いずれも「雲出（雲津）」の「蓮光坊（運光院）」に逗留していることを紹介した。その後、「蓮光坊」について判明したことを記しておく。

まず、史料を掲げる。

＜往路＞

廿二日丙子天晴（中略）木森過雲出に到、是迄音部衆十人計送に来、馬以下返之、尚半里馬場新右衛門中間了、雲津之蓮光坊、坊主徳利出之、一盞有之、同所迄送了、此所迄大澤迎に来、馬一疋に荷物持之、予乗馬等來、従雲出過二里細結、（後略）

＜復路＞

三日（中略）仰蔵主細組迄二里被送來、於彼所一盞有之、次過二里着雲出運光院、一盞有之、茶五袋、やきん一遣之、（後略）[16]

以上の日記記録により、言継は雲出に逗留する際には、「蓮光坊」「運光院」が関与しているといえる。両者には「蓮」と「運」、「坊」と「院」の違いがあるが、記入ミスと呼称の違いと考えられ、同じものを表現していると考えてよかろう。

これを「蓮光坊」を示すものと考えると、鈴木敏雄氏がまとめられた「一志郡雲出村考古誌考補記其二」[17]に、関連記事が見られる。そこに収録された「浄蓮寺古記録」に、同寺（現在も津市雲出本郷町内に所在する）住職の系図が掲載されている。それには、浄蓮寺の元祖は「蓮光坊浄覚院梅山大徳」で、彼は羽柴（豊臣）秀吉に従った小島若狭守宗俊の舎弟であると記されており、蓮光坊梅山の実弟も小島宗俊の許にあったという。蓮光坊梅山は天文元(1532)年9月に90歳で卒していると記されている。しかし、蓮光坊梅山の実弟で浄蓮寺第二世の宗順は元和6（1620）年に死去していると記していることから、どうやら記載に矛盾があると考えざるを得ない。ただし、寺伝として蓮光坊をその元祖に置いているということそのものには批判すべき材料は見られず、浄蓮寺の前身が蓮光坊に相当すると考えてよかろう。

山科言継の記載状況から見ると、蓮光坊付けの坊主が居ると考えられ、蓮光坊は個人名ではなく、寺院とみてよい。とすると、言継は安濃津を出立し、八幡（津市八幡町）・木森（小森、津市高茶屋小森町）を経、その後、やや東へ道程をとって現在の雲出本郷町を経由して細組（細頸、現在の松阪市松ヶ嶋町）へと至ったのである。雲出川の渡河後は、現在の星合・笠木・曽原（以上、いずれも三雲町）を

経由していると考えられる。

中世後期の伊勢参宮街道は、これまでに指摘されているように海岸寄りを通過していることが改めて指摘できる。そして、現在の津市雲出島貫町付近は、近世の段階で街道が設定され、宿場町として機能したものであり、中世後期の参宮街道沿いからはやや離れた立地であったと考えることができよう。

註

(1) “藤潟”および安濃津については、伊藤裕偉「安濃津に関する基礎検討」(『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997) を参照されたい。

(2) 高茶屋銅鐸の詳細は、今のところつぎの文献が最も詳しい。津市埋蔵文化財センター編『埋文センターニュース』第10号 (1999年)

(3) 藤田充子「津市池の谷古墳の円筒埴輪」(『三重の古文化』81 1999年)

(4) 以下、四ツ野Ｂ遺跡については、村木一弥「津市四ツ野Ｂ遺跡の発掘調査」(『三重の古文化』74　三重郷土会　1995年) を参照。

(5) 田中久生・川畑由紀子『高茶屋大垣内遺跡(第３・４次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　2000年)

(6) 新名強『前田町屋遺跡第２次調査』(三重県埋蔵文化財センター 1999年)

(7) 大川勝宏『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告書』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)

(8) 村田匡『松本権現前遺跡発掘調査報告』(三雲町教育委員会 1999年)

(9) 齋藤直樹ほか『香良洲西山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)

(10) 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について」(『皇學館論叢』15−2　1982年)

(11) 『日本書紀』巻第14 (『日本古典文学大系』67　岩波書店)

(12) 川畑由紀子「舞出北遺跡」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』ＸⅡ　2000年)

(13) 鈴木敏雄「考古学からみた一志郡」(『一志郡史』下巻 1955年)

(14) 『倭名類聚抄』(『諸本集成倭名類聚抄』外編　臨川書店 1966年)

(15) 『正倉院文書』所収「西南角領解？」(『大日本古記録』編年之13) この史料は年欠であるが、当文献中では天平勝宝９(757) 年と考えられている。

(16) 『言継卿記』第三　(国書刊行会　1914年)

(17) 鈴木敏雄『三重考古誌考』第24巻 (私家版　三重県埋蔵文化財センター架蔵)

fig.2　遺跡位置図（1：100,000）（国土地理院1／500,000，『津西部』，『津東部』，『二本木』，『松阪』より）

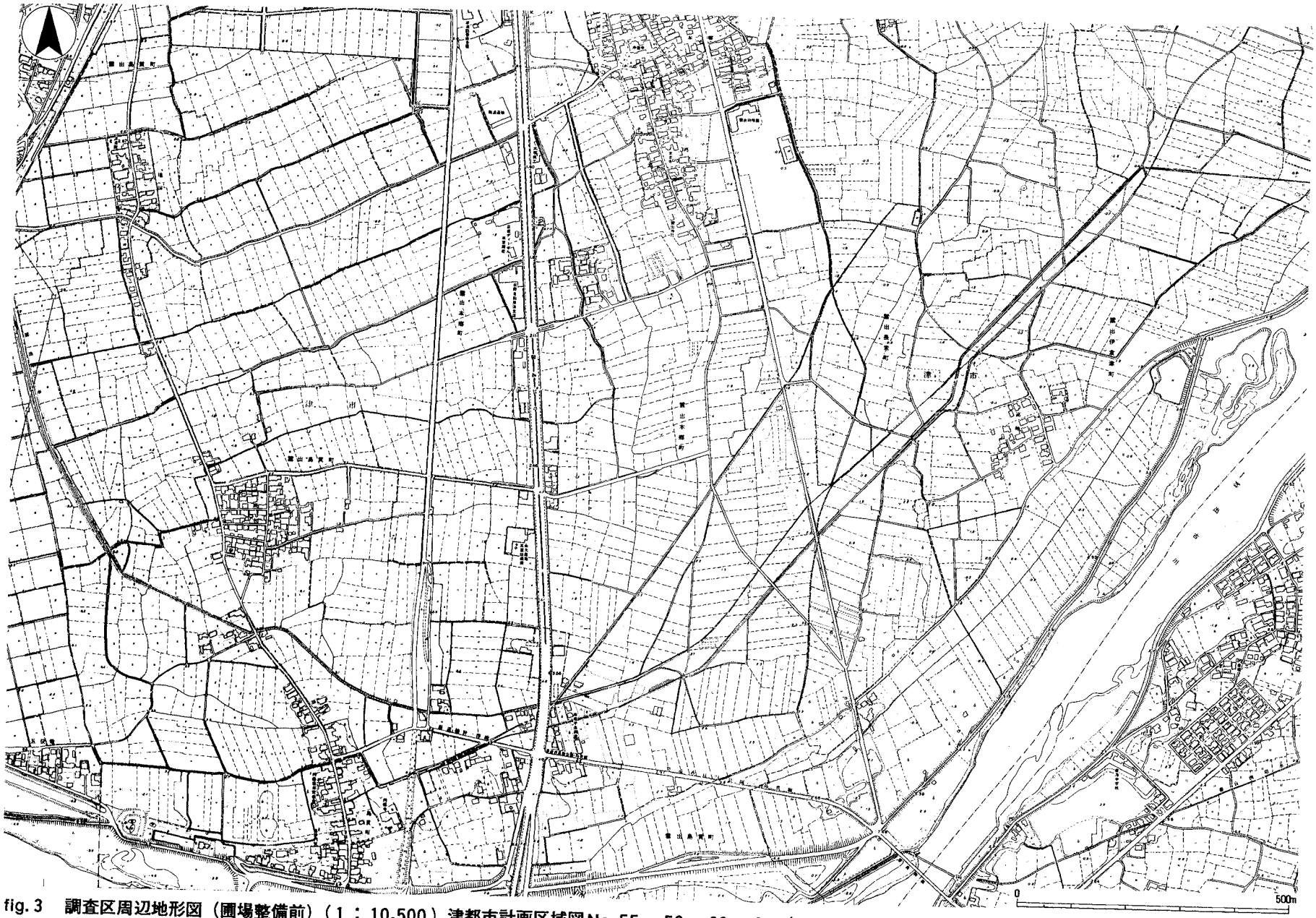


fig. 3　調査区周辺地形図（圃場整備前）（1：10,500）津都市計画区域図No. 55・56・60・61（1975年撮影）より

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～

1　調査区の地形と基本層位概要

第３次調査として今回報告するのは、Ｂ２区（西半部）・Ｂ４区・Ｂ５区（東半部）・Ｂ６拡張区・Ｂ７区第２遺構面である。Ｂ２区東半部は第１次調査（『嶋抜』第１次調査　三重県埋蔵文化財センター　1998年として報告済み。以下、第１次調査の報告書を『嶋抜Ⅰ』とする）で、Ｂ５区西半部・Ｂ６区・Ｂ７区第１遺構面は第２次調査（『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　2000年として報告済み。以下、第２次調査の報告書を『嶋抜Ⅱ』とする）で、それぞれ調査・報告した。第３次調査の対象地とはこれまでの２次分の調査区に挟まれた間ということになる。

調査区は、雲出川がその左岸部に形成した沖積地に相当する。今回の調査区は、Ｂ２・４・５区の現況で水田部分の調査区と、Ｂ６拡張区およびＢ７区という雲出川寄りで現況が畑地であった調査区とに大別できる。その層位的概況を記す。

ａ　Ｂ２・４・５区（fig.５・６）

現況が水田のこの調査区における基本的な層位状況は、『嶋抜Ⅰ』のＢ２区で見られた状況と類似するが、西部の状況はかなり異なる。概略的にいえば、微高地部分を中心とした東半部（B2区およびB4・Ｂ５区東部）と、谷状地を基本としたＢ４・５区西部ということになる。

微高地部分　微高地部分では、標高約1.8mで黄灰色系細砂～細砂質シルト層にあたる。この層が、『嶋抜Ⅰ』で報告したＡ１・３区における縄文時代晩期の遺構基盤面となる層に相当する。今回は、第Ⅰ章にも触れたとおり激しい湧水があったために、この面の追求は全くできず、わずかに土層断面図作成の際の断ち割りで確認したに過ぎない。ただ、Ｂ５区北壁断面図（fig.６）の第37層中に縄文時代晩期頃の遺物を含んでおり、そしてこの層の起伏は比較的激しいことがわかる。この層は、Ｂ５区のグリット20ライン以西で急激に下降し、後述する古墳時代以前の水田が形成される谷状地に至ることが土層図から読みとれるが、古墳時代前期の遺構面が形成される以前にかなりの起伏のある地であることが確認できたのは、今後の低地部の調査に当たって重要な認識事項となろう。

Ｂ５区グリット17～21ラインにかけて、この砂層上に４層ほどの灰褐色系細砂層が堆積し（fig.6－31～35層）、それ以東には黄灰色系細砂質シルト層（同36層）が堆積する。Ｂ５区およびＢ２西端では標高約2.1mで見られる。この層上面が古墳時代前期初頭～奈良時代頃の遺構面となる。なお、微高地西部では部分的に10㎝程度の堆積土によって古墳時代と奈良時代遺構面とが分層しているが、今回は両者を同一遺構面で検出している。微高地を形成する層が下降するあたりに古墳時代前期の環濠（ＳＤ572）があり、環濠が自然地形に沿って形成されていることが窺われる。

なお、古墳時代前期～奈良時代までの遺構面となる層は、昭和50年代に行われた圃場整備事業により、かなりの削平を受けているものと考えられる。

谷状地部分　谷状地部分は、前述の微高地部分の西側一帯に広がるものである。調査区の制限からその東端がどこまで及ぶのかは分からないが、Ｂ４区土層（fig.５）を見ると、下部の土層が西側で次第に上昇している状況が観察できるので、Ｂ４区西端からさほど遠くないところで別の微高地が存在していると考えられる。また、後述のＢ７区の状況から見て、南端は『嶋抜Ⅱ』で報告した人工流路ＳR321付近であると考えられる。谷状地部分のベースとなる層は、前述のような湧水の関係から確認できなかった。

谷状地の東側外縁部には古墳時代前期の環濠が存在し、また中世前期には『嶋抜Ⅱ』でも報告した人工流路SR337が掘削されている。古墳時代には、この部分を水田として利用しており、土層断面からは

少なくとも３面の水田面が確認できる（fig.15）。最も深いところで標高0.9mまで確認したが、さらに下部があると考えられる。最も古いものは弥生時代まで遡る可能性があろうが、残念ながらこの点については明確にし得なかった。

谷状地は奈良時代頃にはほぼ埋没しているようで、Ｂ５区西端ではこの時期の掘立柱建物がこの上に建てられている。

なお、『嶋抜Ⅱ』で報告したＢ５区（西半部）は中世遺構面のみで調査を終了している。これは、この下層に古墳時代以前の水田が存在していることを調査担当者が認識できなかったことによる。遺憾の極みである。

b　Ｂ６拡張区・Ｂ７区(fig.26)

Ｂ６拡張区の土層は『嶋抜Ⅱ』で報告したとおりであり、ここではＢ７区の状況を概説する。

Ｂ７区では、調査区東壁沿いで土層堆積状況の確認のための断ち割りを行った。最深標高約1.2mまで掘削している。そこから標高約2.5mの黄灰色系細砂～細砂質シルト層までの間に、河性の褐色～褐灰色系中・細砂質シルト層が堆積する。これらの層のさらに下部については、河性の粗砂層が堆積していたが、図示することはできなかった。これら遺跡のベースとなる層は北側ほど低くなっており、雲出川が形成した自然堤防であることを明確に物語ってる。

黄灰色系細砂～細砂質シルト層この面が、第１次調査区域で確認している縄文時代晩期頃の基盤層に相当すると考えられる。Ｂ７区ではこの時期の遺構は確認していないが、中世遺構に混入した状態で弥生時代前期の土器が出土しており、希薄ながら遺構の存在も想定できる。また、ｉ20グリット付近で確認した磨製石斧や軽石製砥石の散布（ＳＺ519）も概ねこの面での確認となる。

この層の上に堆積しているのが黄灰色系砂質土である。Ｂ２・４・５区付近の微高地部分における古墳時代前期～奈良時代の遺構面に相当し、Ｂ７区でも同様である。今回報告する第２遺構面は、この層で確認したものである。

黄灰色系砂質土の上には、同系の土にやや褐色味で粘質を帯びた層がある。この層は、場所によっては0.7mほど厚く堆積する。これがB7区における第１遺構面となっている。

2　Ｂ２・Ｂ４・Ｂ５区の遺構

Ｂ２・Ｂ４・Ｂ５区で検出した遺構は、弥生時代・古墳時代前期・古墳時代中後期・飛鳥奈良時代・平安時代・中世およびその他の時期のものがある。この３地区は隣接しており、確認した遺構も関連のあるものが多いため、以下では各時代ごとにまとめて記述する。また、前節で用いた「微高地」あるいは「谷状地」という呼称も、便宜的に随時用いることとする。

なお、今回の調査では弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての時期の土器がかなり豊富に出土している。この時期は、土器によって弥生時代か古墳時代なのかを判断することは困難であり、ここでは便宜的にこの時期を古墳時代前期として扱うこととする。

a　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構として、竪穴住居跡および周溝などがある。

竪穴住居ＳＨ569（fig.7）　B5区東部の微高地上、g24グリット付近で検出した遺構である。遺構の過半は調査区外に及ぶ。また、検出範囲内も井戸ＳＥ567や竪穴住居SH562で破壊されている。

平面形は判然としないが、円形ないしは楕円形と考えられる。埋土内には多くの炭が見られたが、建築部材と考えられるような大形のものは無かった。遺構底面にピットを１基確認しており、主柱穴のひとつかと考えられる。貼床は見られなかった。また、壁周溝も判然とはしなかった。

遺構中央部で、床面直上かやや浮いた状態で甕・壺・高杯などがまとまって出土している。これらの土器から、この遺構は弥生時代中期前葉頃のものと

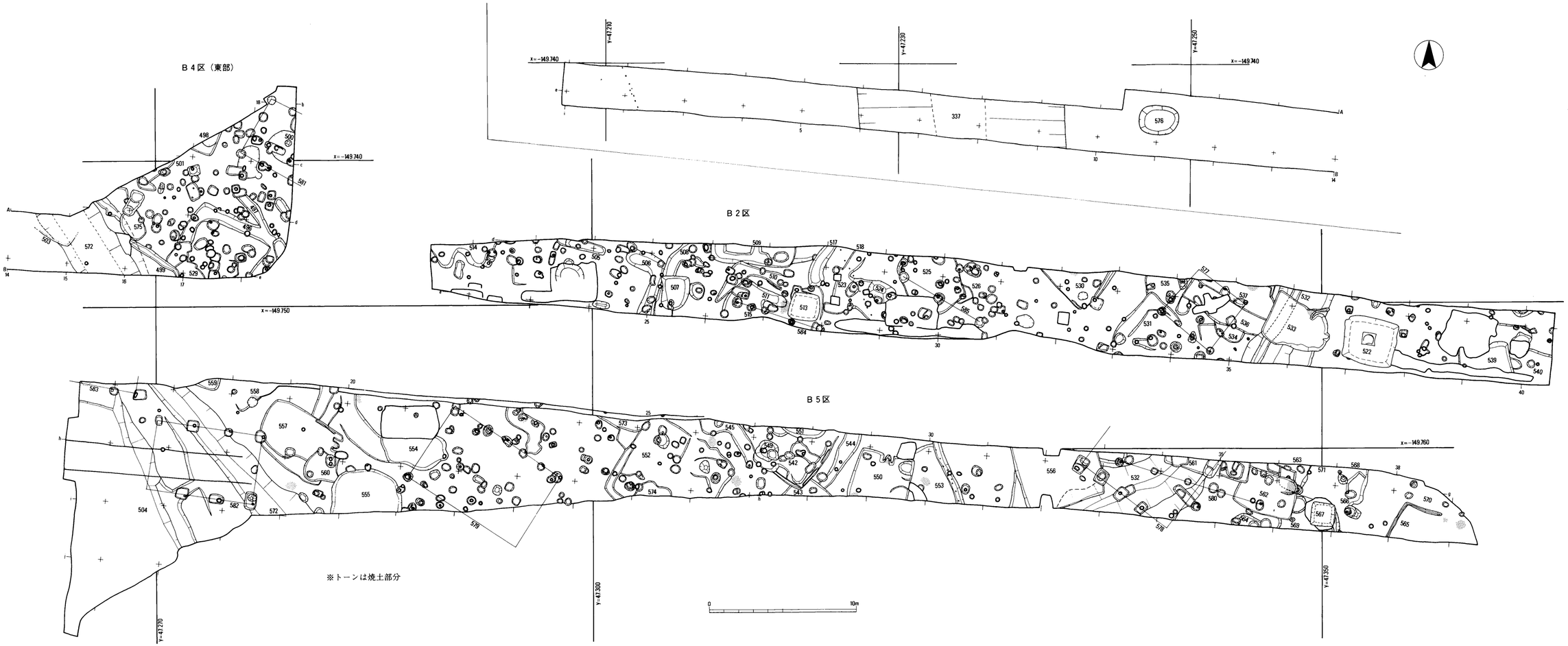
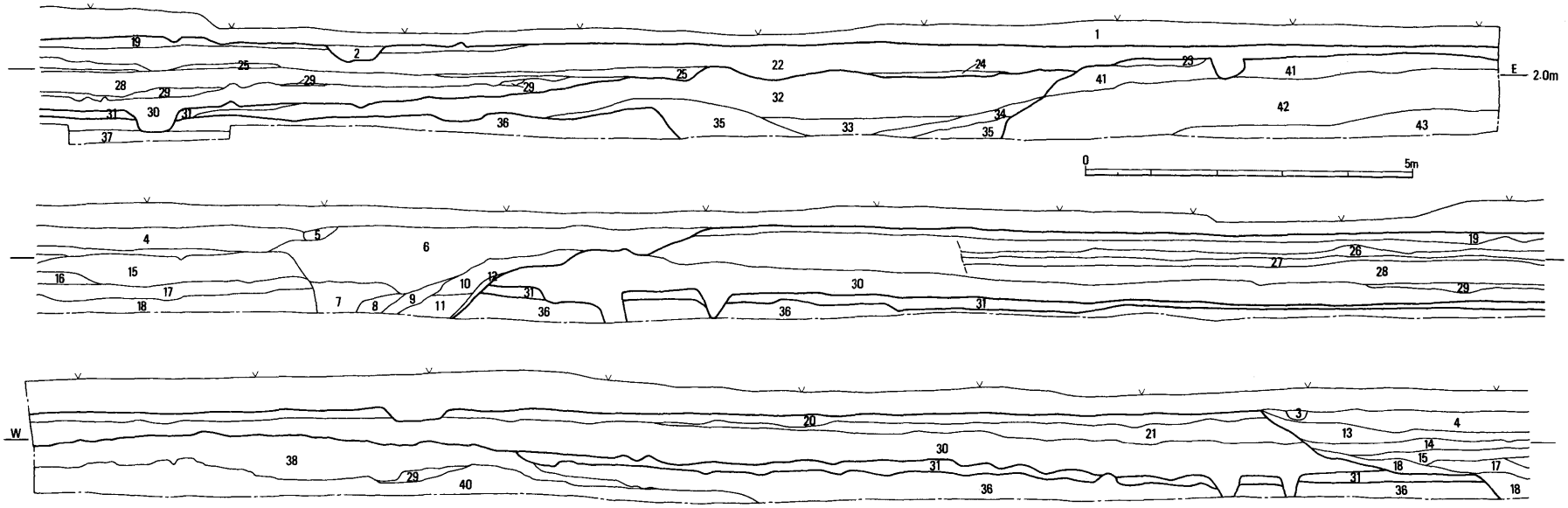


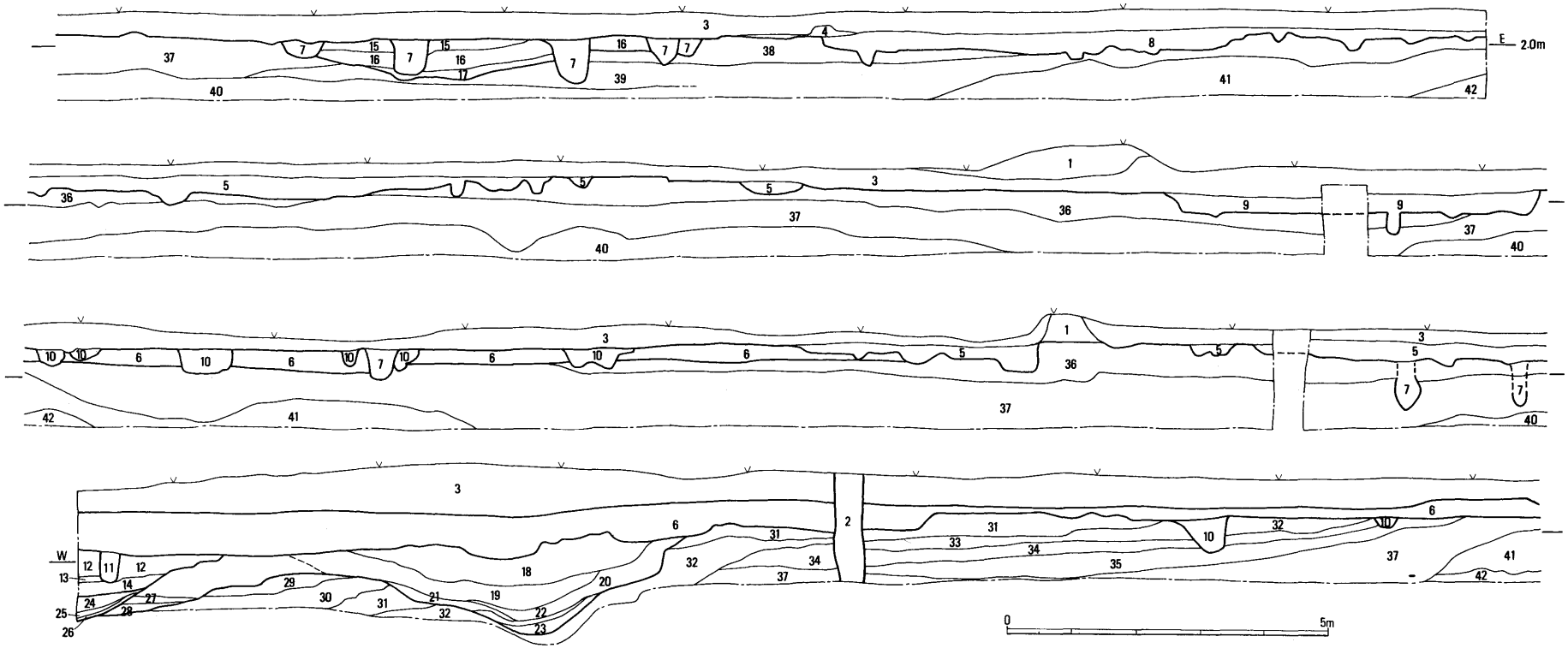
fig.4　B２・４・５区　平面図（1：200）



1. 表土
2. 暗灰色粗砂
3. 灰褐色砂質シルト
4. 灰褐色シルト質砂
5. 黄褐色中砂
6. 灰褐色細砂質シルト
7. 褐灰色粗砂
8. 褐色細砂質シルト
9. 灰色シルト
10. 褐灰色細砂質シルト
11. 褐灰色細砂まじせりシルト
12. 褐灰色シルト
13. 灰褐色砂
14. 褐灰色砂質シルト
15. 褐灰色シルト質砂
16. 褐灰色砂質シルト
17. 褐灰色砂質シルト
18. 灰色シルト
19. 黄褐色細砂質シルト
20. 灰褐色砂まじりシルト
21. 未記入
22. 褐灰色細砂まじりシルト
23. 焼土層
24. 灰色シルト質粘土（SH499 貼床）
25. 褐灰色細砂まじりシルト
26. 黄褐色シルト
27. 暗褐灰色細砂シルト
28. 暗褐灰色細砂まじりシルト
29. 黄褐色シルト
30. 暗褐灰色シルト
31. 黄褐色シルト
32. 灰褐色シルト質中細砂
33. 褐灰色細砂質シルト
34. 褐灰色シルト質細砂
35. 灰褐色細砂質シルト
36. 淡灰色質シルト
37. 灰色砂質シルト
38. 暗褐灰色シルト質細砂
39. 暗灰褐色細砂
40. 褐灰色細砂質シルト
41. 灰褐色シルト質細砂
42. 黄褐色細砂質シルト
43. 褐灰色中砂

※4～18：人口流路ＳＲ337埋土
32～35：環濠ＳＤ572埋土
19～32・36・37：水田遺構ＳＺ504

fig. 5　Ｂ４区　南壁東西土層（１：100）原図を反転して製図しているため、右が東、左が西である。土層は、青木哲哉氏による分層を基にした。



1. 表土（現代畦畔）
2. 撹乱土
3. 表土
4. 褐灰色砂質シルト
5. 暗褐色細砂質シルト
6. 褐灰色砂質シルト
7. 暗褐色シルト
8. 暗灰褐色シルト
9. 暗褐色砂質シルト（SH556）
10. 暗褐色細砂質シルト
11. 暗灰色質シルト
12. 暗褐灰色砂質シルト
13. 黄褐色シルト（SZ504 第11層相当）
14. 褐灰色細砂シルト（SZ504 第14層相当）
15. 暗褐色シルト（SD532 上層）
16. 暗褐灰色シルト黄褐小ブロック多い（SD532 下層）
17. 暗灰色砂質シルト（SD532 最下層）
18. 灰褐色シルト質中細砂
19. 灰褐色細砂質シルト
20. 灰褐色シルト質細砂
21. 褐灰色細砂まじりシルト
22. 灰色シルト
23. 灰色細砂質シルト
24. 炭まじり褐灰色細砂質シルト
25. 焼土層
26. 黄褐色細砂質シルト
27. 淡灰色細砂質シルト、やや粘性
28. 淡黄灰色細砂質シルト
29. 褐灰色細砂まじりシルト
30. 暗褐灰色細砂質シルト
31. 灰褐色細砂質シルト
32. 灰褐色シルトまじり細砂
33. 灰褐色砂
34. 灰褐色シルト質細砂
35. 褐灰色細砂
36. 黄褐色細砂まじりシルト
37. 灰褐色細砂質シルト、縄文晩期土器含む
38. 灰褐色細砂質シルト
39. 黄灰色シルト
40. 暗灰褐色シルト質細砂
41. 暗褐灰色シルト質細砂
42. 暗灰色砂

fig. 6　B 5区　北壁東西土層（1：100）

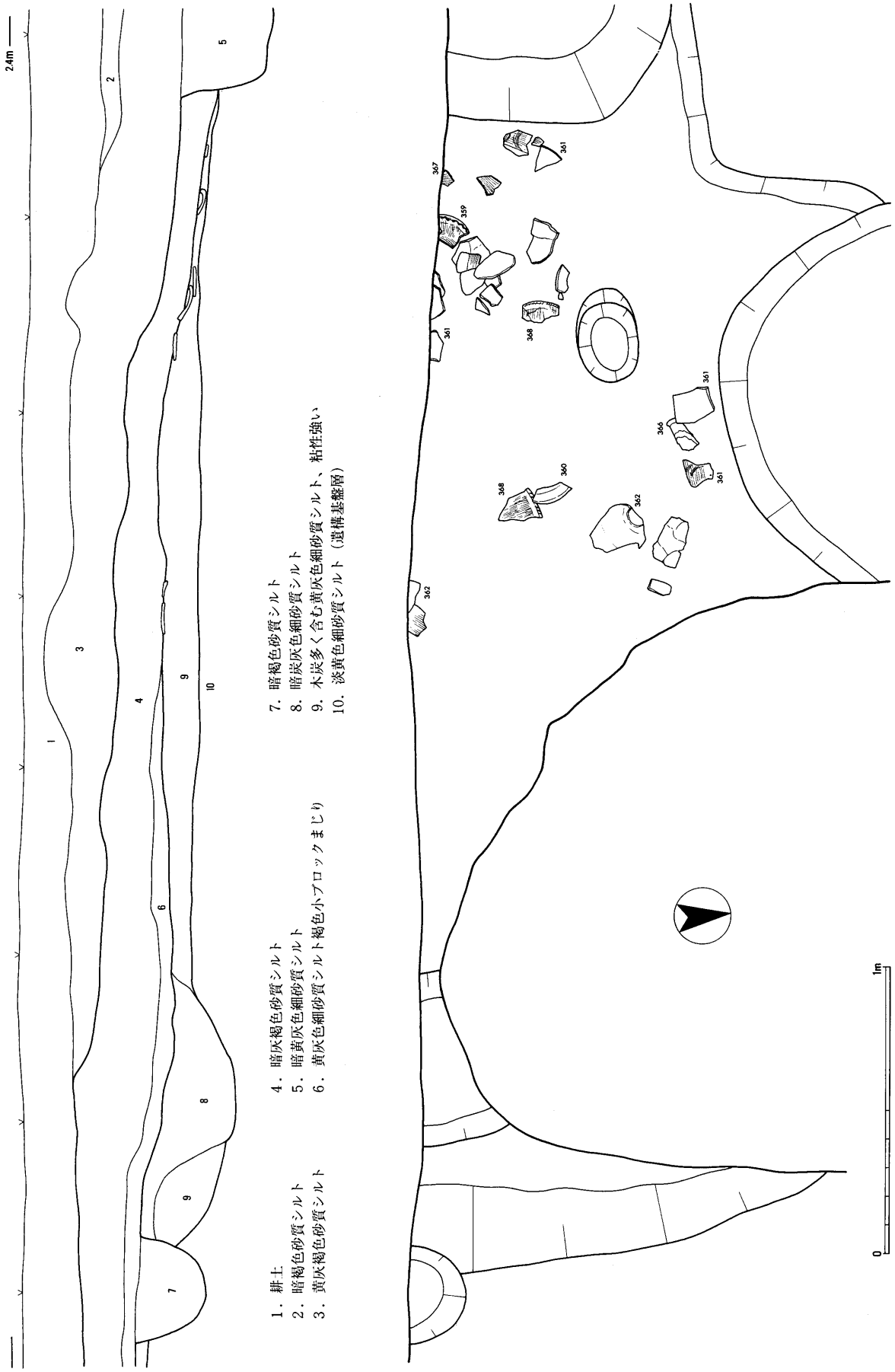


fig. 7　B５区　竪穴住居ＳＨ569　平面・断面図（1：20）

考えられる。

周溝ＳＤ 496・497　B4区東端のｃ17グリット付近で検出した遺構である。ＳＤ496とＳＤ497は重なっているが、残念ながら両者の前後関係は分からなかった。

いずれも幅約1.2ｍで、検出面からは10㎝程度が残存しているに過ぎなかった。いずれも方形周溝墓の北・東辺である可能性が考えられる。溝の断面形は

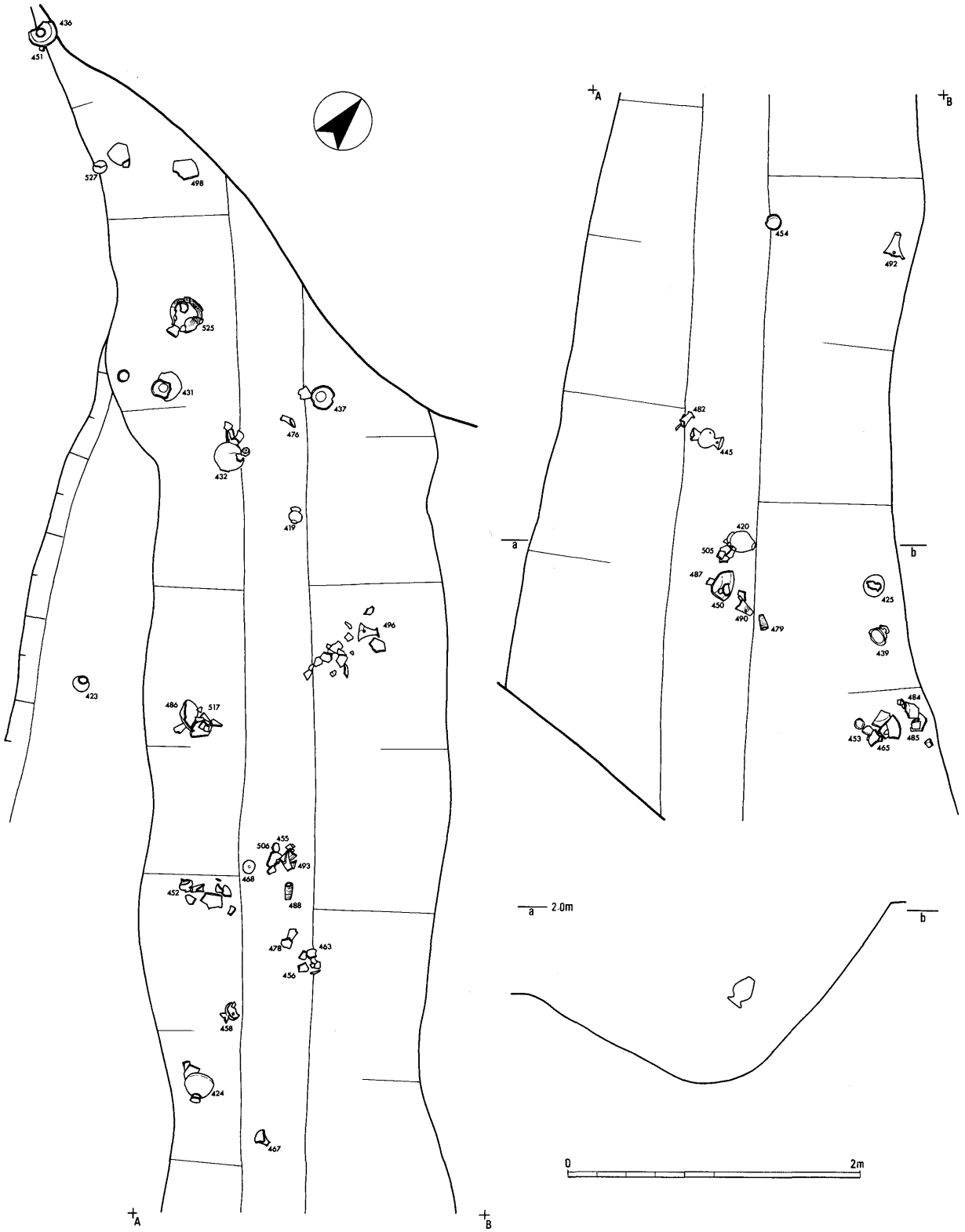


fig. 8　Ｂ５区環濠ＳＤ 572　土器出土状況（１：40）

緩やかなU字形であり、墳丘がこれらの溝でL字形に囲まれた側としても、溝法面に明確な差は見られない。

ＳＤ497の南東辺は、おなじＢ４区内で検出したSZ501と平行関係にあることから、この2遺構でひとつの方形周溝墓を形作っている可能性もある。そうすると、東西約9ｍの墳丘規模を考えることもできる。ただし、SZ501からは、重複遺構を検出できなかったことによるのかも知れないが須恵器片も出土しており、これらが１基の方形周溝墓を形成すると断定することはできない。

溝埋土中からは弥生時代中期前葉頃の土器が見られ、この頃の遺構と考えられる。

周溝ＳＤ 505・506　B2区西端部のd24グリット付近で確認した遺構である。SD505とSD506を一連の遺構と考え、周溝とした。溝幅は1.4m程度、深さも検出面から15cmほど確認したにとどまる。ＳＤ505とSD506間は陸橋状になっているように見えるが、これも遺構の残存が浅いことによる溝底の起伏の程度の違いと考えるのがよかろう。

溝埋土中からは弥生時代中期前葉頃の土器が出土している。

溝ＳＤ 508・落ち込みＳＺ 515　B2区西部のd27グリットで検出した遺構である。弥生時代の遺構というよりは、奈良時代前後の遺構と判断できるものであるが、調査区南端部分で弥生時代中期に相当する細頸壺１個体分がまとまって出土していることから、一部当該時期の遺構が遺存していたと考えられる。そうすると、先述のSD506と重なるかたちで検出している溝SD508が周溝の西辺から北辺の一部であり、SZ515部分にそれと一連の溝が続いていた可能性を考えることができる。確実とはいえないが、これも方形周溝墓と考えることもできる。

b　古墳時代前期の遺構

この時期の遺構には、環濠・竪穴住居跡・土坑および水田遺構など、多種多様なものがある。

環濠ＳＤ 572（fig.8・9）　B4区東部のｄ15グリット付近から、現道をはさんでＢ５区西端部のg17グリットにかけて延びる溝である。Ｂ５区南部で調査区外へと延びたこの溝は、後述のSD532つながるものと考える（後述の第Ⅵ章参照）ことから、ここでは「環濠」として扱う。

この遺構は、微高地部と谷状地の境目に掘削されている。最大幅約3.5m（Ｂ４区）で断面形はＶ字である。遺構の底は標高約0.6mに達し、微高地側からの比高約2.0m、谷状地側からの比高は約1.0mである。Ｂ５区側で延長約12m、Ｂ４区では延長約６ｍを確認した。なお、Ｂ４区側では遺構のちょうど中央に試掘坑が相当している（fig.9）。

溝埋土は、下層に粘性の強い細砂質シルトが堆積し、遺構機能時には滞水していたことを窺わせる。遺物は、下層相当部分にはほとんど見られない。

埋土中層部分からは、完形品を含む多量の土器が出土している。明確な分層はできなかったが、溝全体に遺物の広がりが見られた。遺物の出土は微高地側に偏る傾向も見られることから、微高地側からの投棄と考えられる。

埋土上層部分にも土器は見られ、後述のＢ４区ＳＺ575はＳＤ572の上層埋土である可能性もある。

最も大量に出土した中層の出土遺物は、概ね弥生時代後期末から古墳時代前期初頭頃のものである。ただし、埋土下層相当部分からは弥生時代中期頃の土器のみが見られるので、溝の掘削時期はこの頃まで遡るのかも知れない。上層からは古墳時代前期の土器が出土していることから、この溝の最終的な廃絶はこの時期に求められよう。

環濠ＳＤ 532（fig.10）　B2区東部のｃ36グリット付近から、現道をはさんでＢ５区ｇ34グリット付近にかけて延びる溝である。Ｂ５区南部で調査区外へと延びたこの溝は、西へ迂回して前述のようにSD572へとつながるものと考える。B2区では直線的であるが、Ｂ５区では西側へ大きく曲がっている。

この遺構は、微高地部を掘削して造成されている。幅約３ｍで、断面形はＢ２区側では深さ80cmの２段掘り形をなし、Ｂ５区側では緩やかなＶ字形をなしている。溝底で標高約1.2mで、ＳＤ572よりも浅くなっている。

埋土は上層・下層・最下層の３層に大きく分かれる。このうち最下層は、Ｂ２区では粘性が強く、Ｂ５区では砂の堆積が見られ、溝の機能時には滞水していたものと考えられる。

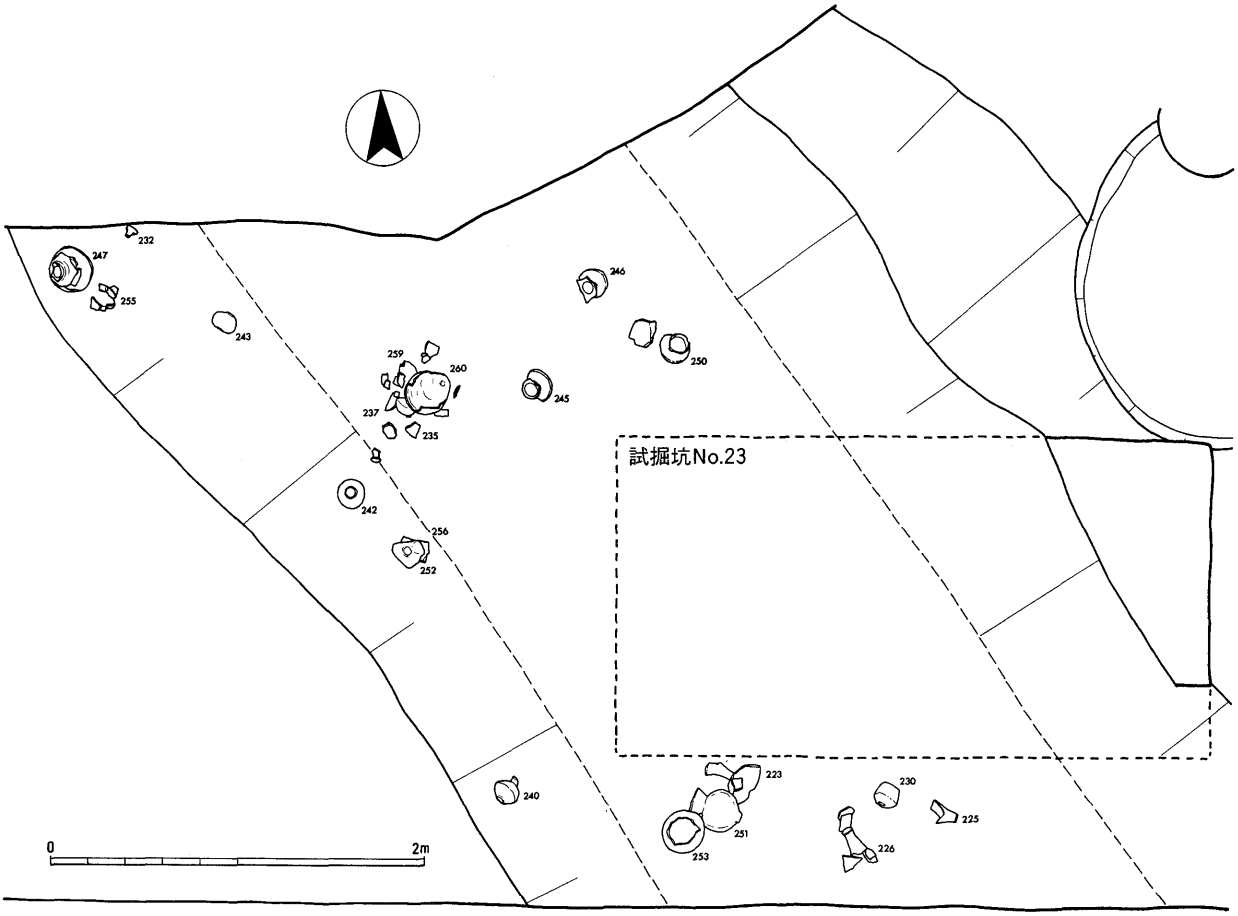


fig.9　B４区　環濠ＳＤ572　土器出土状況（１：40）

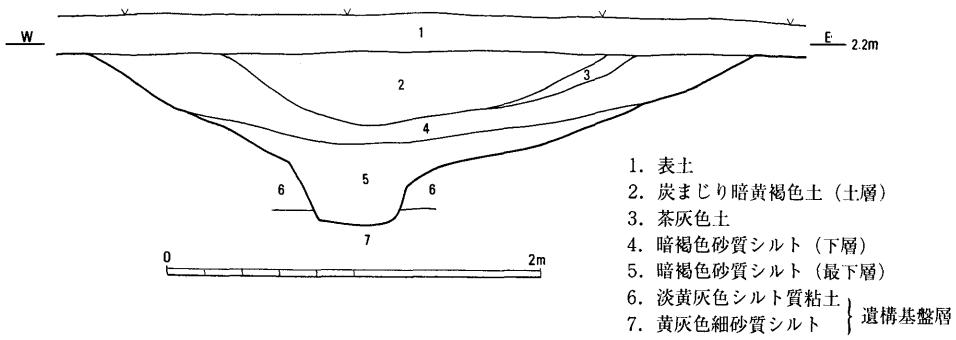


fig.10　Ｂ２区　環濠ＳＤ532　調査区北壁土層（１：40）

全体として古墳時代前期の土器が出土しているのであるが、３層では細かな所属時期の違いが見られる。SD532最下層は、概ねSD572の上層に相当する。つまり、ＳＤ532の方がＳＤ572よりも長く機能していたと考えられる。前述のようにＳＤ572とＳＤ532はつながると考えられるが、溝の廃絶時期に違いがあることから、調査区外南部に陸橋状の途切れを考えることもできる。

溝ＳＤ544　B5区中央部のg28グリット付近で確認した遺構である。幅約１m、深さ15cm程度の溝状を呈する。西に隣接する竪穴住居ＳＨ542と平行するので、関連があるのかも知れない。

土器が、遺構北部から少量ながらまとまって出土している。古墳時代前期でもやや新しい時期の遺構と考えられる。

竪穴住居ＳＨ509(fig.11)　Ｂ２区西部のｃ26グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられ、南辺部を中心に一部を確認したにとどまる。南辺は約5.8mである。

南辺東寄りに貯蔵穴があり、その周囲には壁周溝

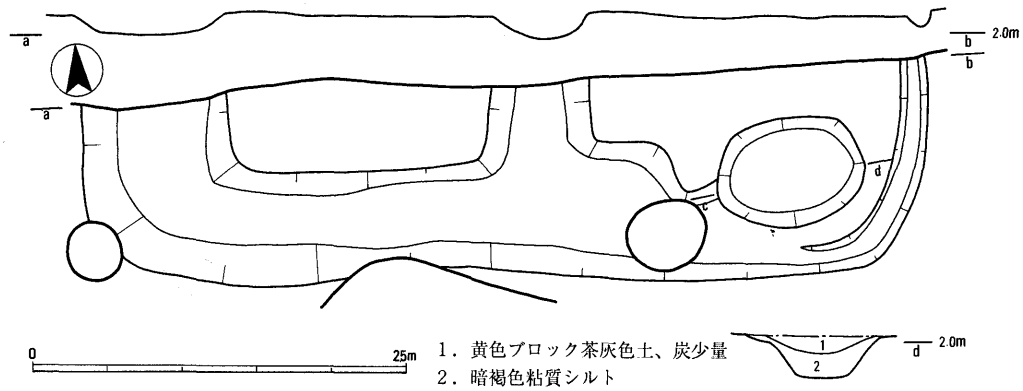


fig.11　B２区　竪穴住居ＳＨ509　平面・断面図（１：50）

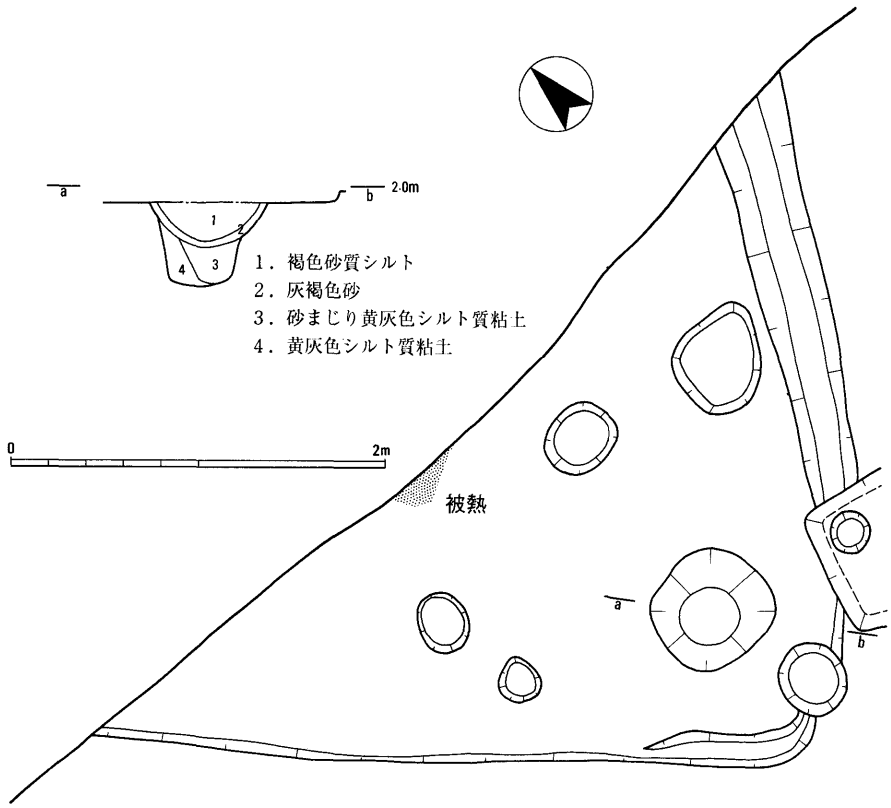


fig.12　B２区　竪穴住居ＳＨ530　平面・断面図（１：40）

が確認できる。壁周溝は、東壁沿いのもので幅約20㎝、南壁沿いでは約70㎝で、南壁沿いの方がやや広くなっている。

出土遺物は少量であるが、古墳時代前期中頃の遺物が見られる。

竪穴住居ＳＨ530(fig.12)　Ｂ２区中央部のｄ32グリット付近で確認した遺構である。方形の竪穴住居跡で、南辺および東辺の一部を確認した。規模は南北で3.2m以上である。

遺構の全面には粗砂混じりの貼床が見られる。調査区北壁際には焼土があり、地床炉と考えられる。

検出範囲内の南隅に貯蔵穴がある。貯蔵穴埋土の中層付近には、貼床と同質の粗砂層が見られる。貯蔵穴内からは赤橙色を呈した瑪瑙の原石が出土した。

出土遺物は少ないが、古墳時代前期の中でも古い時期のものが見られる。なお、水銀朱が断面に付着した土器が出土していることも重要である。

竪穴住居ＳＨ540　Ｂ２区東端部のd40グリット付近で確認した遺構である。撹乱坑などにより全体形は分からないが、炭粒が見られたことから竪穴住

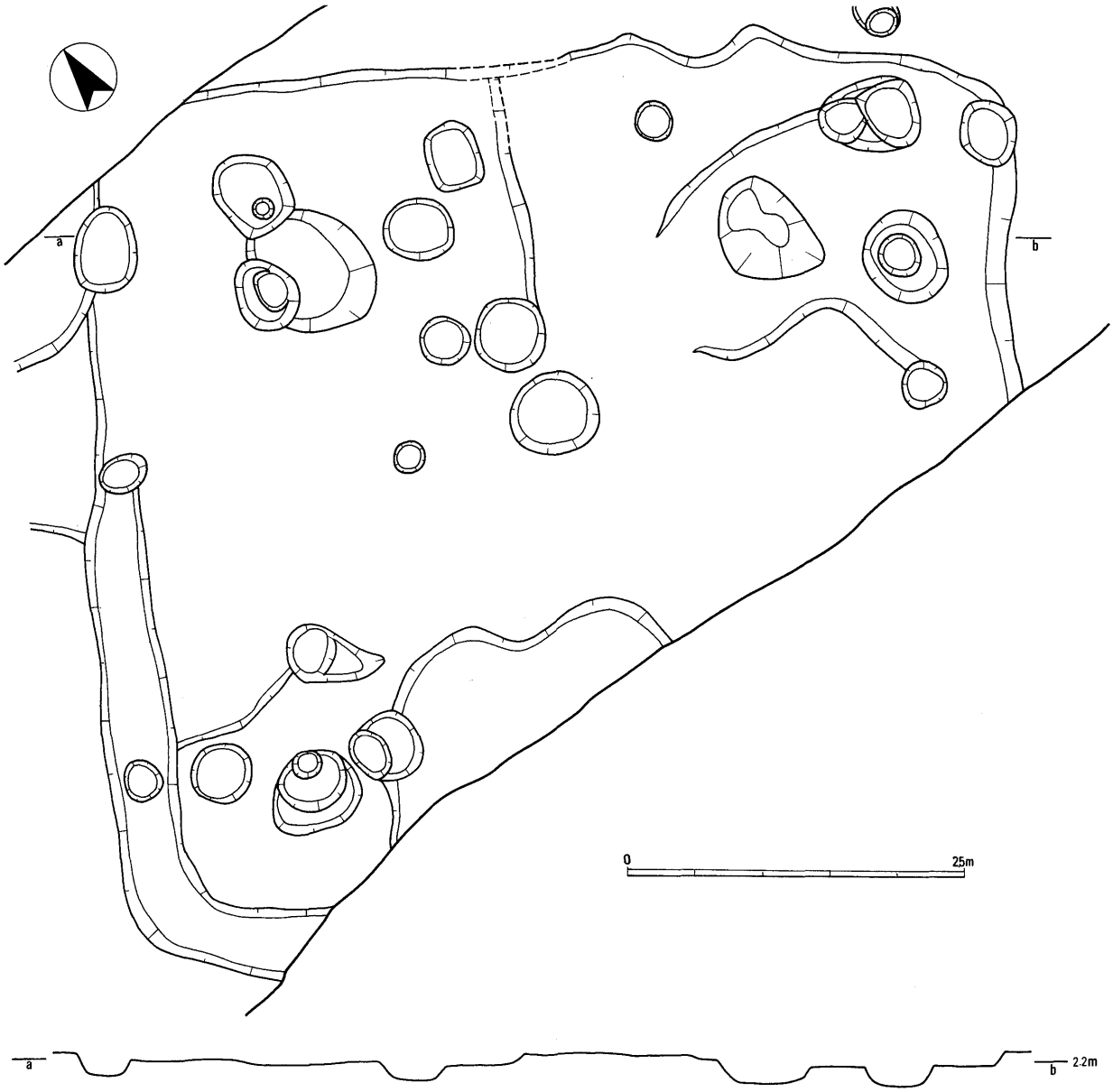


fig. 13　B５区　竪穴住居ＳＨ552　平面・断面図（１：50）

居の残骸と考えた。

検出した範囲での遺構の中央にピットがあり（d 40－ pit. 1）、この遺構に伴うものと考えられる。ここから、体部上半が遺存した壺が出土している。古墳時代前期でも前半の遺構であろう。

竪穴住居ＳＨ542　Ｂ５区中央部の微高地上、g 28グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡で、南・東辺を確認したが、西辺は他遺構の重複によって明確に認識できなかった。東辺で約５mあり、それ以上の規模と考えられる。確認した南・東辺の壁際には壁周溝が見られる。

遺構の上部には古墳時代後期や奈良時代頃の別遺構が重複する。そのためか、出土遺物は極めて少なく、この遺構の時期を確定することは難しいが、少ない出土土器から見る限り、古墳時代前期でも古い時期のものと考えられる。

竪穴住居ＳＨ552(fig. 13)　Ｂ５区西部の微高地上、g 25グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡で、南辺の大部分は調査区外に及ぶが、東西約７m、南北約６mの規模である。これは、当該時期における竪穴住居跡としては、第１次調査で検出したＡ４区ＳＨ63に次ぐ規模である。

遺構の東・西壁沿いには壁周溝が見られる。主柱穴は、遺構内隅寄りに3カ所が確認できた。

この遺構は、別遺構の重複が激しいためか、出土遺物はあまり無い。少ない遺物から判断すると、この遺構は古墳時代前期の前半頃のものと考えられる。

竪穴住居ＳＨ553

Ｂ５区中央部の、ｇ29グリット付近で検出した遺構である。遺構の西側を、古墳時代後期の竪穴住居ＳＨ550が破壊している。全体形は分からなかったが、炭が一面に確認できたので竪穴住居跡とした。

出土遺物は古墳時代前期の中頃のものが見られる。

水田遺構ＳＺ504

(fig.14・15)

Ｂ５区西端およびＢ４区で確認した。前記の谷状地部分に相当する。Ｂ５区西端に設定した東西方向の土層断面（fig.15）でいう第１層上面では、後述のように、奈良時代の掘立柱建物ＳＢ582・柱列ＳＡ583を検出しているので、この水田遺構がそれより古いものであることは確実である。

fig.15に示した水田面は、第11層（明黄色粘質土）を間層として大きく２面に分かれる。そして、第14層と第15層にも色調および若干の土質的な違いが見られることから、この間でも区分できる。このことから少なくとも３面以上の水田面が存在すると考える。調査の段階では、この３面を上から順にＳＺ504第１～３面として扱った。

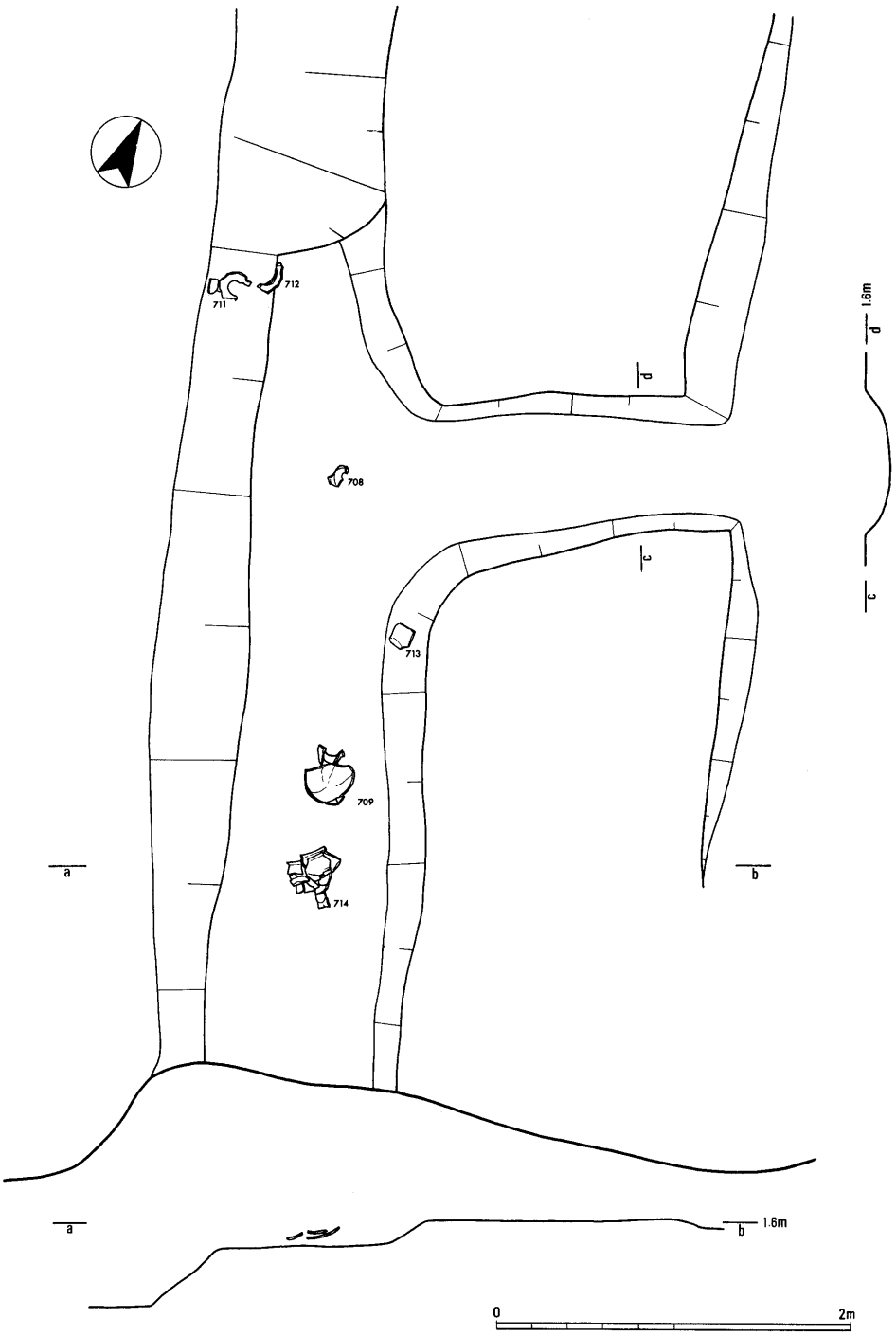


fig.14　Ｂ５区　水田遺構ＳＺ504　３面畦畔土器出土状況（１：40）

なお、第15～17層がいずれも水平堆積を示す状況であること、第7～10層にも水平堆積層の見られることを考慮すれば、細かく見ればさらに多くの水田面が存在すると考えられる。

fig.15の第11層はＢ４区土層断面図（fig.5）の第31層に相当する。この層は前述の環濠SD572埋没後に形成される層であり、古墳時代前期以降の層と考えることができる。fig.15の第14層中からも田辺昭三氏の陶邑編年によるTK47型式相当頃の須恵器を含んでおり、fig.15の第11層直下の水田面（ＳＺ504第2面）の形成時期は古墳時代中後期頃であろう。

ＳＺ504第３面では、環濠ＳＤ572の西に隣接して土器群を確認している（fig.14）。土器群の東側には若干の高まりがあったので、これを畦畔と考えた。畦畔を横断するかたちで浅い溝があり、これはＳＤ572に接続している。これらのことから、ＳＺ504第3面を環濠SD572と併行する時期、すなわち古墳時代前期に相当する水田面と考える。

fig.15の第17層直下は、黄灰色系の砂質シルト層で、水田土壌とは考えられない。しかし、湧水の点からこの層以下の追求ができなかったことと、土層

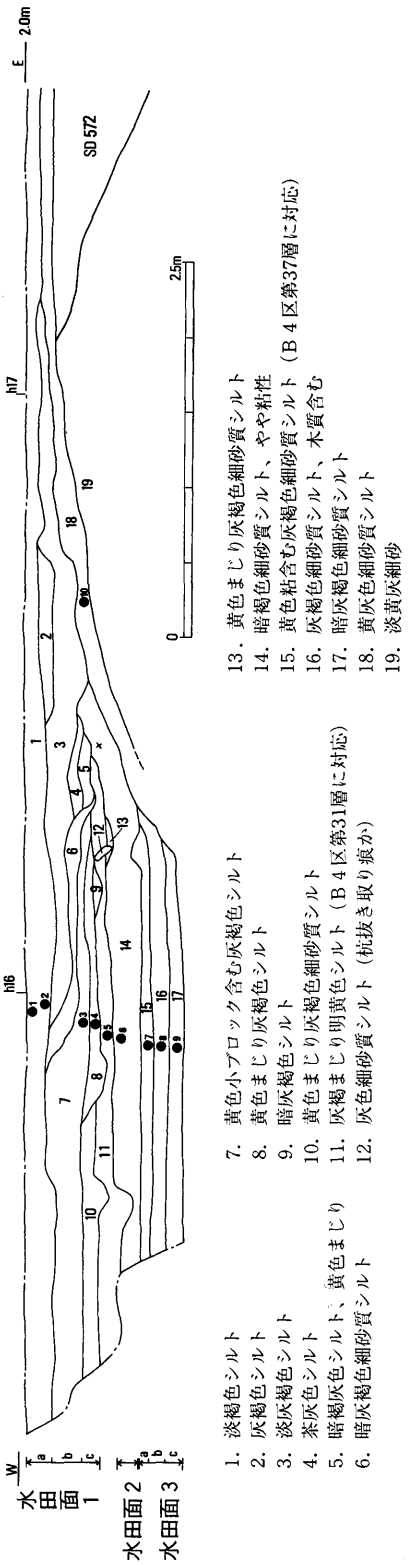


fig.15　Ｂ５区　水田遺構ＳＺ504土層（1：50）

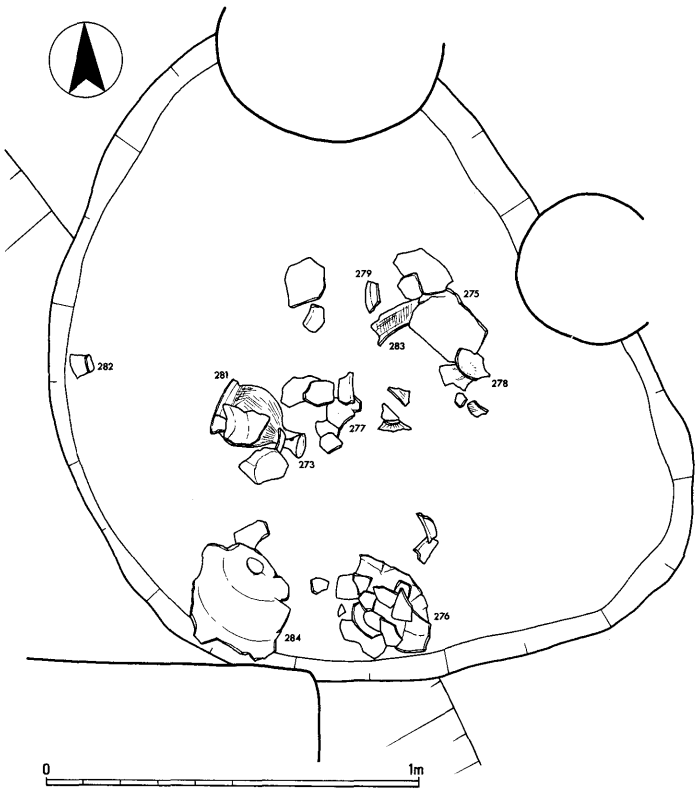


fig.16　Ｂ４区　落ち込みＳＺ575
土器出土状況（1：20）

図作成範囲が短く、決して充分ではないことを考えれば、より西側（第２次調査のＢ５区部分）のさらに深い位置に、古墳時代前期以前の水田面が存在する可能性もある。

なお調査では、時間と調査対象面積上の問題もあり、残念ながら水田面を丹念に調査することはできず、畦畔も上述のように基本的なものの確認にとどまってしまった。最低限のデータしか提示できていないことを念のため記しておく。

落ち込みＳＺ 575(fig. 16)　Ｂ４区東部のd16グリット付近で検出した遺構である。東西約1.6m、南北約2.2mの不整楕円形で、深さ20cm程度の浅い落ち込みである。一応個別の遺構として扱うが、この形状と、環濠ＳＤ572の東肩部に相当すること、そしてB5区側のSD572上層相当部分に同じ時期の土器が含まれていることから、ＳＤ572の最上層部埋土に相当すると考えるのが適切であろう。

出土土器にはほぼ完全なかたちの台付甕が含まれている。古墳時代前期初頭頃のものである。

c　古墳時代中後期の遺構

この時期の遺構には、竪穴住居跡および落ち込みなどがある。また、前述の水田遺構もこの時期まで確実に機能している。なお、掘立柱建物もこの時期のものが存在すると考えられるが、明確にはし得なかった。

竪穴住居ＳＨ 550(fig. 17)　Ｂ５区中央部のｇ29グリット付近で確認した遺構である。方形の竪穴住居跡である。南端が調査区外のため南北規模は分からないが、東西辺は約4.2mである。

検出面から約15cmで床面に達する。比較的残りの良い遺構といえる。床面には、一部貼床が認められた。主柱穴は確認できなかった。

北壁中央にカマドがある。カマドの中央には支柱石があり、その上に脚台部を乗せた状態で１個体分の台付甕があった。台付甕をカマドで使用した状況を示す好例といえる。カマド前庭部からは土師器鉢が出土した。

カマドに向かって右手には貯蔵穴がある。ここからは、貯蔵穴底からは浮いた状態でやや小形の台付甕がほぼ完形で出土した。

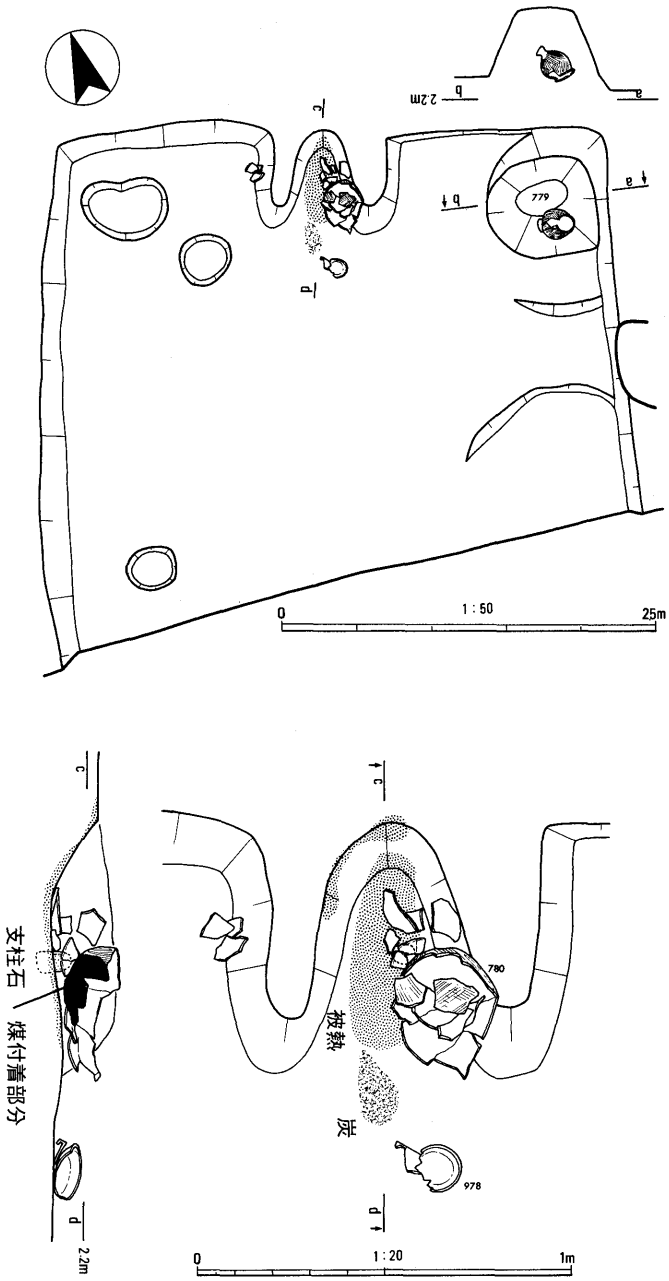


fig. 17　Ｂ５区　竪穴住居ＳＨ 550　平面・断面図

出土土器には須恵器が認められないが、土師器類は明らかに須恵器出現以降のもの形態的特徴を備えている。出土遺物から、この遺構の時期は概ね６世紀前半頃に比定できよう。

竪穴住居ＳＨ 556　Ｂ５区中央部のｇ32グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられる。北側は調査区外で、東西約5.8mの規模である。

床面は、一部貼床が認められる。東壁沿いには壁周溝と考えられる溝が見られるが、前述の環濠ＳＤ

532との重なり合いと湧水の関係で明確にはできなかった。カマドは調査区外の遺構北壁にあると考えられる。なお、主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は少ないが、概ね5世紀末から6世紀前葉頃の遺構と考えられる。

d　飛鳥～平安時代の遺構

この時期の遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・土坑などがある。この時期には、前述のように谷状地がほぼ埋没し、その埋土上に遺構が形成されている。

竪穴住居ＳＨ533(fig.18)　B5区東部のd36グリット付近で検出した遺構である。先述の環濠ＳＤ532とほぼ重複して検出した。

やや不整形ながら、長方形を呈した竪穴住居跡と考えられる。東西約4.3m、南北約3.2mのやや小形のものである。遺構北壁の中央やや東寄りにカマドがある。カマドの煙道は北壁に直交せず、大きく東に傾いているという、やや特異な形態をなす。床面には薄く貼床が認められた。

カマド前庭部やや手前に土師器杯や皿・小形甕などがまとまって出土した。奈良時代頃の遺構と考えられる。

竪穴住居ＳＨ557　Ｂ５区西端部のｇ19グリット付近で検出した。長方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。古墳時代中後期までは残存していた微高地と谷状地のちょうど境目あたりに見られる遺構である。

東西約６ｍ、南北約４ｍの規模である。東壁やや北寄りにカマドがある。貼床は判然とせず、主柱穴も明確に認識できなかった。出土遺物から、７世紀頃の遺構と考えられる。

竪穴住居ＳＨ562　Ｂ５区東部のｇ25グリット付近で検出した遺構である。長方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。

東西約４ｍ、南北約３ｍの規模である。北壁東端にカマドがあるが、遺構検出面からわずかしかのこっておらず、その形状は判然としない。

出土遺物は極めて少ないが、奈良時代前半を中心とした時期のものと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ577(fig.19)　Ｂ２区東部のｄ24グリット付近で検出した遺構である。東西３間、南北３間の総柱建物と考えられるが、柱筋がやや歪である。主軸はN40°Eであるが、これも柱筋の採り様によって数度の振れがある。柱掘形は円形ないしは楕円形で、規模は40cm程度である。

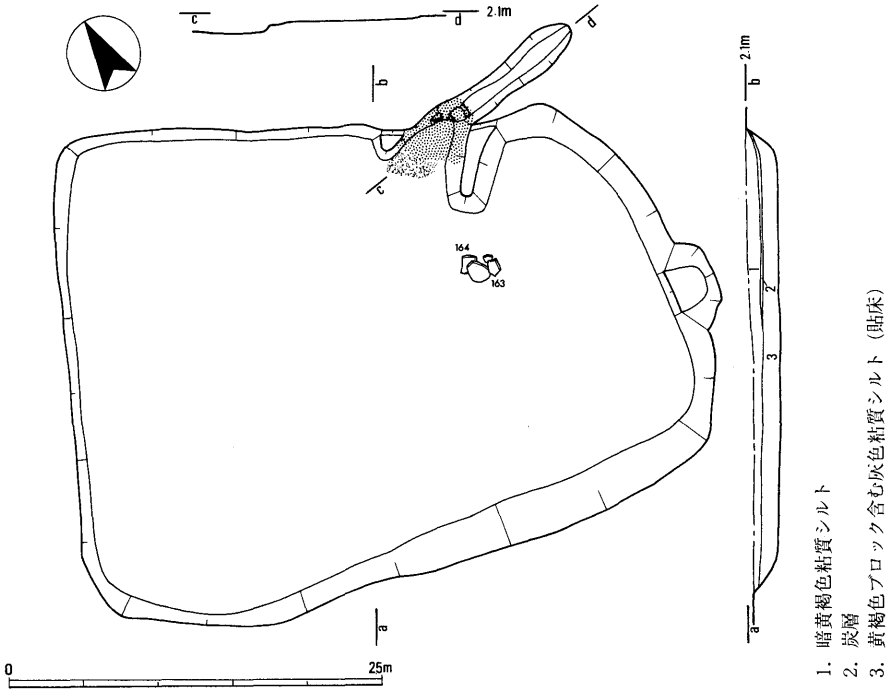


fig.18　Ｂ２区　竪穴住居ＳＨ533　平面・断面図（１：50）

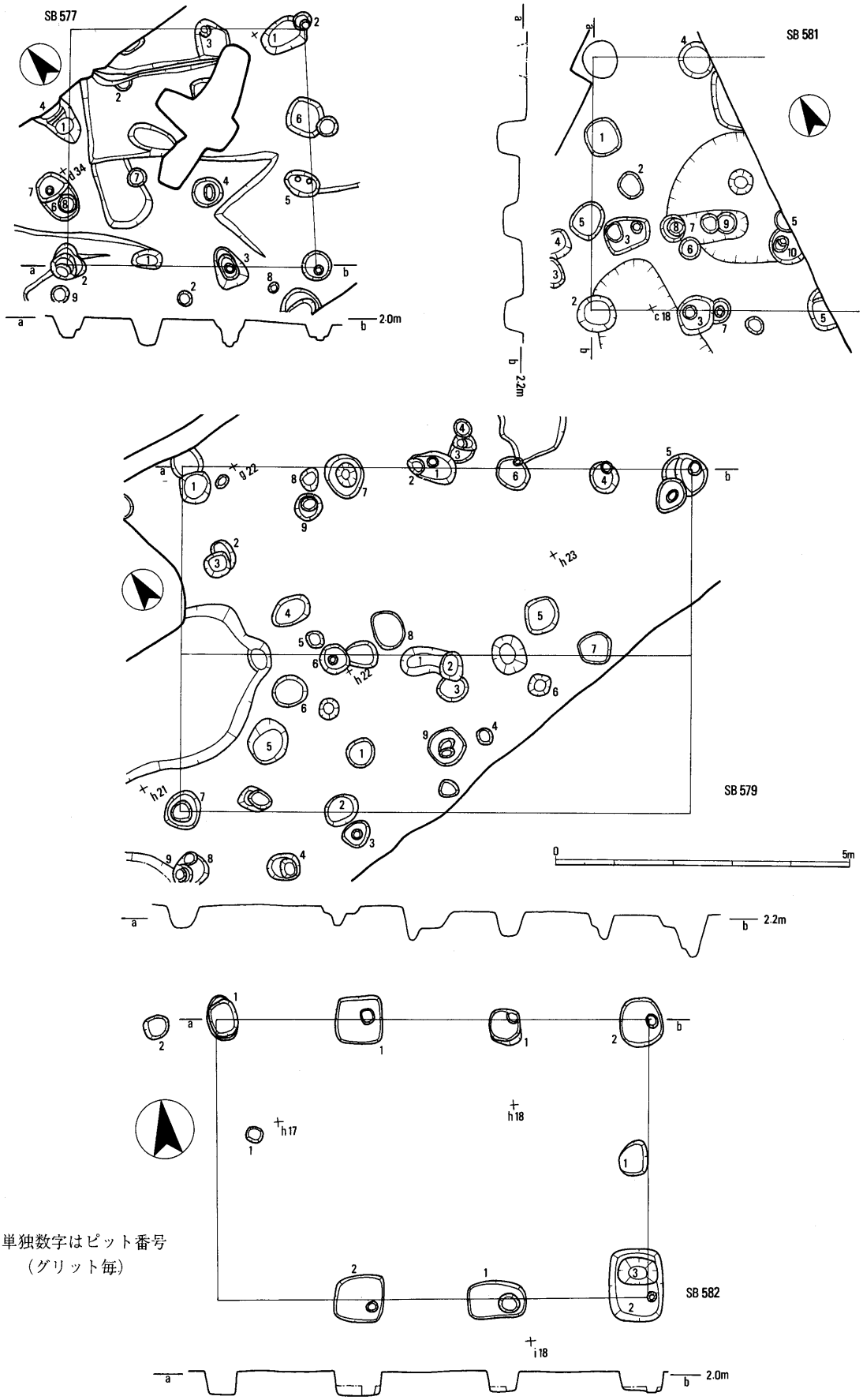


fig. 19　B 2・4・5区　掘立柱建物　S B 577・579・581・582　平面・断面図（1：100）

出土土器は少ないが、7世紀後半を前後する時期の遺構と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ578　Ｂ５区東部のｇ33グリット付近で検出した遺構である。前述の環濠SD532および竪穴住居SH556と重複し、なおかつ湧水の激しい地点であったために、ピット底の確定は困難を極めた。

柱掘形は長方形で、長辺約1.2m、短辺約80cmと大きい。南側柱列と考えられるものが3間分検出できた。東側柱列に相当するピットもあり、それから考えると東西4間の東西棟の側柱建物と思われる。南北方位の主軸はN37°Eである。

出土遺物の大半は下部に存在するSD532からのまき上げであり、明確な時期は分からないが、概ね7世紀後半から8世紀にかけての頃の遺構であろう。

掘立柱建物ＳＢ579(fig.19)　Ｂ５区西部のｇ22グリット付近で検出した遺構である。東西3間(約9.6m)、南北2間（約6.0m）で、東西棟である。棟方向中央には側柱に対応するピットが存在するため、総柱建物として把握できる。南北の主軸方向はＮ34°Ｅである。

ピットはいずれも直径50cm程度の円形の柱掘形である。柱痕跡は、掘形底に沈降するような状態で確認されている。出土遺物は少なく、須恵器および長胴甕片が見られるにとどまる。そのため、古墳時代中後期の遺構である可能性も考えられるが、一応ここに含め置く。

なおSB579付近には、この建物と同じ軸方向に並びそうなピットがいくつか見られるため、何回かの建て替えがあった可能性がある。

掘立柱建物ＳＢ581(fig.19)　Ｂ４区東部の北端部分で検出した遺構である。東西2間（約3.8m）以上、南北3間(約4.1m)の側柱建物と考えられる。南北の軸方向はN14°Eである。

柱掘形は略円形で、柱痕跡はSB579と同様、掘形底に沈降する状態で確認した。

出土遺物は少なく、須恵器片が見られる。6世紀後半から7世紀にかけての幅を考えざるを得ない。

掘立柱建物ＳＢ582(fig.19)　Ｂ５区西端部のｇ17グリット付近で検出した遺構である。谷状地が完全に埋没した後に建てられている。

東西3間（約7.5m)、南北2間（約4.8m）の側柱建物である。東西棟で、南北の軸方向はＮ6°Ｅである。南西部の柱の一部は、前述の水田遺構ＳＺ504の土層図作成のための断ち割りを設定した場所にあたったため、破壊してしまっている。柱掘形は方形を基調としつつ、正方形・長方形など様々なものがある。大きいもので長辺1mほどである。

出土遺物には奈良時代後半のものが見られるので、その前後の時期のものと考えられる。

柱列ＳＡ580　B5区東部のg33～35グリットにかけて検出した遺構である。直径約60cm程度の略円形のピット列で、東西方向に4間分（約10.0m）を検出した。掘立柱建物の側柱列である可能性は高い。南北の軸方位はN17°Eである。所属時期は不明とせざるを得ない。

柱列ＳＡ583　B5区西端部のg15グリット付近で検出した遺構である。SB582の西に相当し、谷状地の埋没以後に建てられたものである。

柱掘形を3カ所確認したにとどまるが、SB582と同様、灰色系砂質土が入り込むものであったために、一連の柱列として扱えるものと判断した。おそらくは北部の調査区外に広がっている掘立柱建物の南側柱列に相当すると考えられる。

明確な出土遺物は無いが、SB582との埋土の共通性から、ほぼ同じ時期の遺構と考える。

柱列ＳＡ584　B2区西部のe27グリット付近で検出した遺構である。東西方向に4基のピットが間隔をほぼ揃えて並ぶので、柱列として扱う。柱掘形は直径50cm程度の略円形である。南北の軸方位はN19°Eである。

出土遺物は少量で、須恵器を含むことがわかる程度である。6世紀代の可能性もあるが、一応ここに含めておく。

柱列ＳＡ585　B2区中央部のd30グリット付近で検出した遺構である。3基のピットのみであるが、形状と規模が類似しているため、柱列として扱えると判断した。東西方向に並ぶ。柱掘形は直径約60cmの略円形である。南北の軸方位はN31°Eである。

SA584と同様、出土遺物には須恵器を含むことがわかる程度であるが、一応ここに含めておく。

井戸ＳＥ522（fig.20）　B5区東部のd37グリ

ット付近で検出した遺構である。ちょうど全体が調査区内に収まるかたちで検出した。一辺約3.6mの正方形の掘形である。

遺構検出面から約2.1m下、標高－約0.1mで遺存した側枠を検出した。側枠は約88cmの平面正方形で、縦板を基本に、部分的に押さえ板として横板を用いるものである。側枠隅には縦木があり、全体の輪郭を整えているものと考えられる。

側枠内には、直径約74cmの丸太刳り抜きの井筒がある。井筒の高さは約46cmで、最深は標高－1.0mにまで達している。ここまで深い井戸は、この遺跡ではじめての例である。

出土遺物は少量であるが、平安時代中期、10世紀前半頃に相当すると考えられる。

なお、この井戸の側枠板を確認した深さでは、排水ポンプを4台稼働させても追いつかないほどの湧水があった。非常に危険な状態であったため、充分な実測はできなかった。そのため、fig.20の図は極めて模式的なものであることを明記する。

井戸ＳＥ555　B5区西部部のh20グリット付近で検出した遺構である。形状および埋土の状態から井戸と考えてまず間違いないが、調査区外にも及ぶために完掘はあえてしなかった。

埋土上層部分からは緑釉陶器や黒笹90号窯併行の灰釉陶器などがあり、9世紀後半から10世紀初頭頃の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ554　B5区西部のg21グリット付近で検出した遺構である。北部は試掘坑で破壊されてい

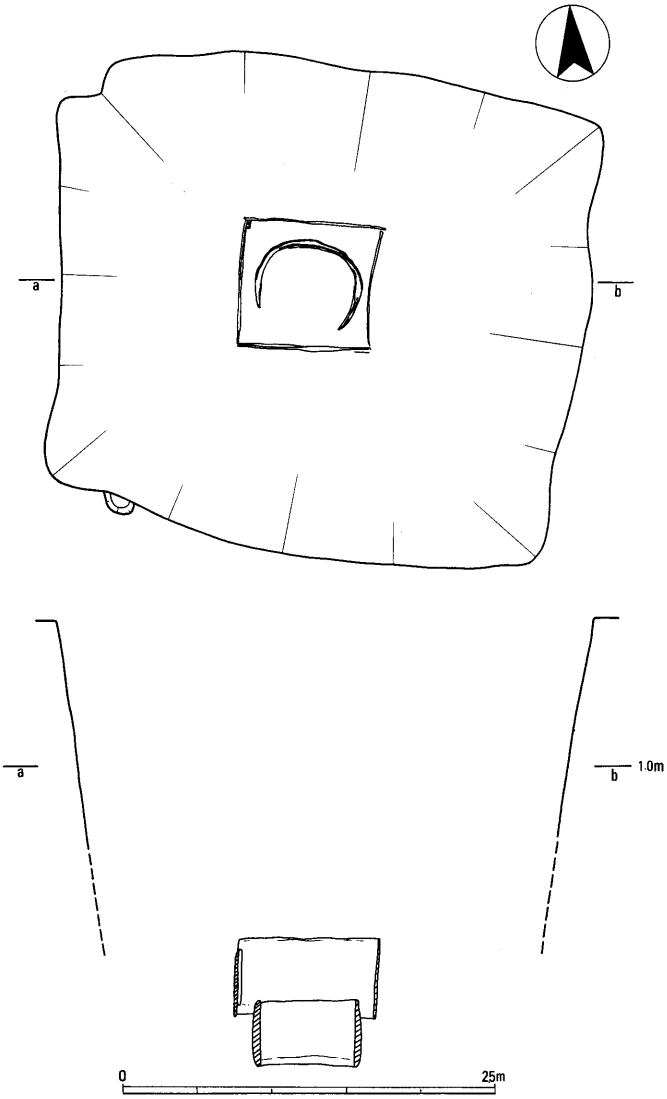


fig. 20　Ｂ２区　井戸ＳＥ522　概略図（１：50）

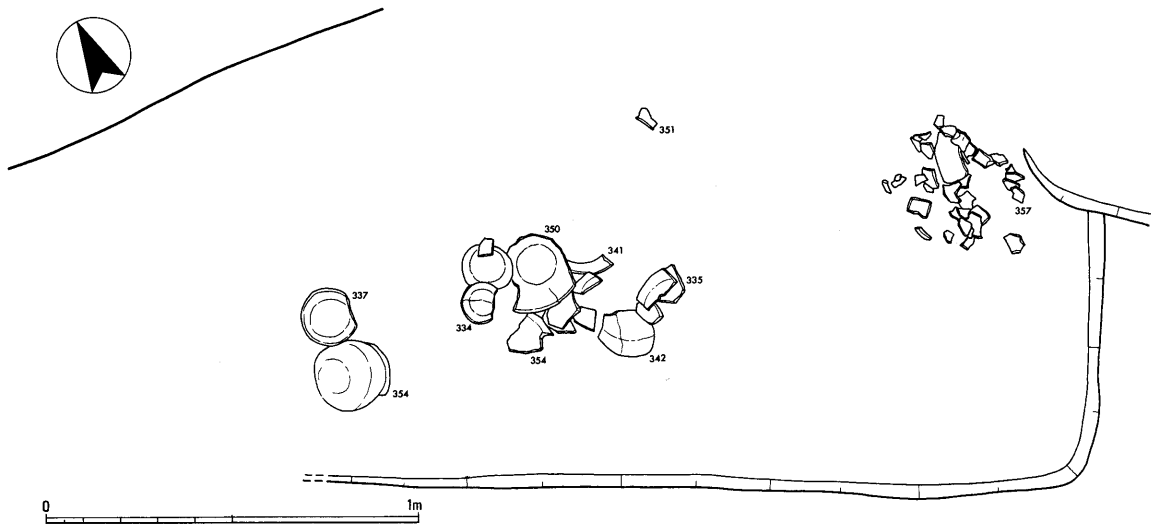


fig. 21　Ｂ４区　落ち込みＳＺ502　土器出土状況　（１：20）

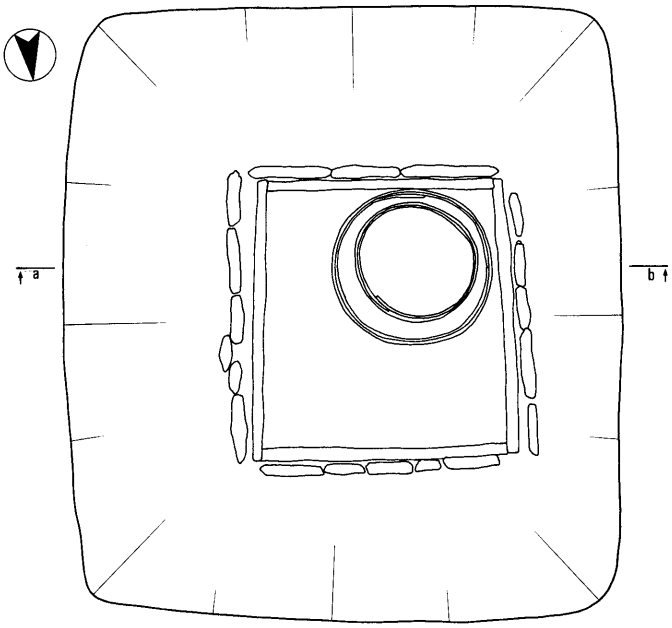
る。また、遺構東部は掘立柱建物SB579と重複する。

東西約4.4m深さ約30cm程度の浅い遺構であるが、埋土内には土師器杯類、灰釉陶器、製塩土器などがまとまって出土している。黒笹14号窯併行の灰釉陶器があり、9世紀前半頃の遺構と考えられる。

落ち込みＳＺ502(fig.21)　B4区東部のd14グリット付近で検出した遺構である。方形のプランが見えたので竪穴住居の可能性もあるが、明確ではないので落ち込みとしておく。前述の環濠SD472の埋没後、それと重複している遺構のためか、極めて認識しにくかった。

土師器杯・鉢・甕のほか、須恵器・製塩土器などが良好な状態で出土しており、一括資料として認識できるものである。なかでも、土師器杯には「田井」と墨書されたものが2点ないし3点あり、非常に興味深い。

これらの土器群から、遺構は奈良時代後半頃のものと考えられる。



e　中世の遺構

平安時代末期（12世紀）から鎌倉時代（13世紀）頃を中世として報告する。この時期の遺構には、井戸および土坑がある。また、Ｂ４区の西部では、第２次調査で検出した人工流路ＳＲ337を検出した。

井戸ＳＥ513　B2区西部のd27グリットで検出した遺構である。一辺約1.8mのほぼ正方形を呈する掘形である。検出面から約１m下で人頭大よりやや小さい礫が数個見られたが、石組井戸の残骸ではない。井戸枠および遺構の底は、湧水のために確認できなかったが、木枠の残骸が出土しているため、後

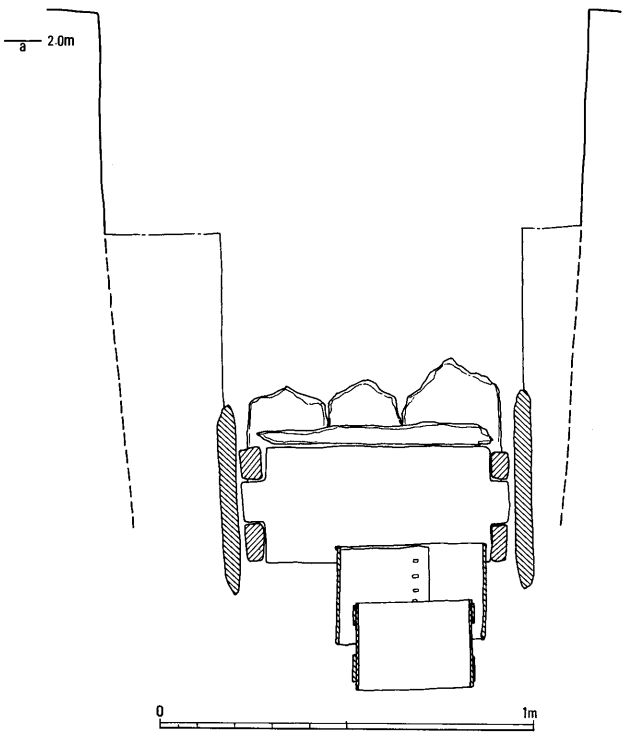


fig.22　Ｂ５区　井戸ＳＥ567　平面・立面図（１：20）

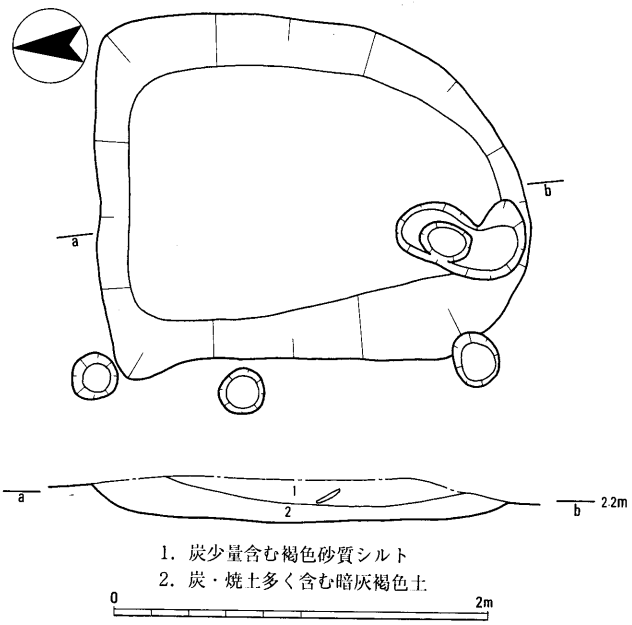


fig.23　Ｂ２区　土坑ＳＫ507　平面・断面図（１：40）

述のSE567と同様の枠を有した井戸であったものと考えられる。

遺構埋土内からは曲物片のほか、少量の土器が出土している。12世紀後半頃の遺構と考えられる。

井戸ＳＥ 567(fig.22)　Ｂ５区東部のg36グリット付近で検出した遺構である。一辺約1.6ｍのほぼ正方形を呈する掘形である。

検出面から約60㎝下で枠痕跡を検出し、さらに40㎝下の標高約1.1ｍで側枠を確認した。側枠は縦板を用い、標高約0.5ｍの深さまで確認できる。側枠の最下部には臍組みの横板が４枚ある。横板に囲まれた内法はほぼ正方形で、一辺は66～71㎝である。

側枠内には曲物を２個体組んで井筒としている。曲物は、外側が約38㎝、内側が約30㎝のもので、いずれも底を抜いて用いている。曲物の底は、最も深いところで標高約0.2ｍに達している。

出土遺物は少量であるが、12世紀後半から13世紀前半頃のものが見られる。

土坑ＳＫ 517(fig.23)　Ｂ２区西部のｄ25グリットで検出した遺構である。東西約1.8ｍ、南北約2.3ｍの不整長方形を呈する。埋土内には人頭大程度を最大とする礫が数個見られた。また、埋土下層部分には炭・焼土も認められた。

埋土内からは比較的多くの土器類が出土している。これらの土器類から、12世紀中葉頃の遺構と考えられる。

人工流路ＳＲ 337　Ｂ４区西部のｄ7グリット付近で検出した。調査区の関係上、検出範囲は極めて狭いものの、最大幅約14ｍ、遺構検出面からの深さは約1.5ｍまで確認した。第2次調査区で確認していた遺構の幅が最大約８ｍであったので、この遺構は北側ほど幅広いことがわかった。

遺構西側埋土の状況を見ると、この遺構が一度埋没した後に、遺構西側部分のみ通水していた時期のあることを示している。

出土遺物は少量で、12世紀後葉までにはほぼ埋没していると考えられる。

ｆ　その他の遺構

その他の遺構には、圃場整備前の水路跡や時期不明の遺構などがある。

杭列　Ｂ2区c28グリットからＢ5区g30グリットにかけて、杭列を検出している。これは、圃場整備前の地形図と合わせると、その段階で機能していた水路（fig.3参照）の位置にちょうど符合するので、その水路に伴う護岸などの施設と考えられる。

3　Ｂ６拡張区の遺構

Ｂ６拡張区は、第２次調査で対象としたＢ６区の南面に接した部分である。調査前は道路である。第2次調査で検出したB6区木棺墓SX329の南側に、同種の中世墓が広がっていないかどうかを確認することが最大の目的であった。結果的にはSX329と同様な墓は検出されず、SX329は単独墓であることが確認できた。

なお、調査対象地は現在も使用されている道路部分であったため、調査期間は極力短くする必要があった。そのため、ｇ・ｈラインを境に東は第２遺構面の調査まで行ったが、西は第１遺構面までの調査とした（fig.24）。

ａ　第２遺構面の遺構

竪穴住居、溝、掘立柱建物などを検出した。

竪穴住居ＳＨ 547　h14グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられる。遺構東側はその他の遺構との重複で不明瞭となっており、西壁および南北壁の一部を検出した。

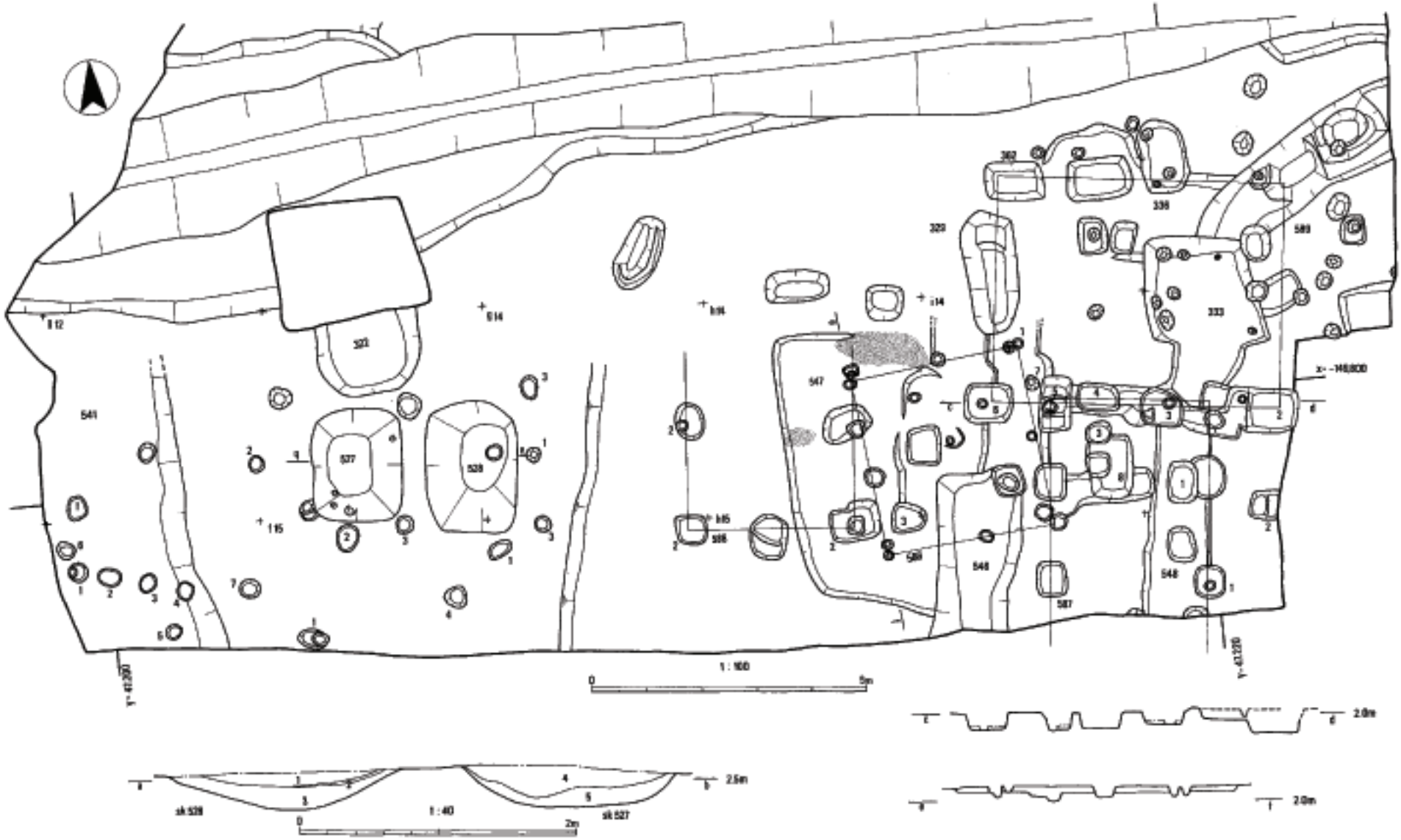
北壁中央付近にカマドと考えられる焼土のまとまりがあるが、形態は明確にできなかった。主柱穴および貼床も明確ではない。

出土遺物から、この遺構は飛鳥時代頃のものと考えられる。

溝ＳＤ 548　j15グリット付近で検出した遺構である。検出面からは10㎝程度を確認したに過ぎない浅いものである。第２次調査区で検出した溝と接続すると考えられる。

出土遺物は少なく、時期の特定はできない。

掘立柱建物ＳＢ 586　h14グリット付近で検出した遺構である。柱痕跡のみが確認されたものである。



1. 黄褐色砂質土
2. 炭まじり黄褐色土
3. 黄褐色まじり灰色砂質土
4. 暗黄褐色土、炭少量
5. 暗灰褐色土、炭多い

fig. 24　B 6 拡張区　平面・断面図

Fig.25　B17区第2面　平面図（1：200）　※トーンは焼土部分

東西２間（約3.2m）、南北２間（約3.3m）の、小規模な側柱建物である。建物主軸はN6°Wである。

出土遺物が無く、遺構の所属時期は分からない。なお、第１面に見られる建物群と類似するため、その時期のものである可能性も考慮する必要がある。

掘立柱建物ＳＢ587　ｉ14グリット付近で検出した遺構である。東西2間（約2.9ｍ）、南北3間以上の南北棟の側柱建物と考えられる。主軸はＮ５°Ｅである。遺構の重複関係からは、後述のSB589よりは古いと考えられる。

柱掘形は長方形で、長辺約60m、短辺約40m程度である。柱痕跡が明確に認識できたものは少ない。

出土遺物には奈良時代後半頃の土師器杯があり、その前後の遺構と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ588　ｇ14グリット付近で検出した遺構である。東西2間（約3.0ｍ）、南北1間以上の、南北棟の側柱建物と考えられる。建物北側は第２次調査区内に及び、検出時に見逃したと考える。主軸方向はＮ５°Ｅである。

出土遺物は少なく、明確な時期は分からないが、主軸方位の点から、SB587と前後する時期と考えられる。

掘立柱建物ＳＢ589　ｉ14グリット付近で検出した遺構である。Ｂ６拡張区では建物南側柱列を確認したが、第２次調査区内で確認していたピット等と合わせることで１棟分になると考えた。

東西３間（約5.3m）、南北２間（約4.3m）の東西棟の側柱建物と考えられる。柱掘形は長方形で、最大のもので長辺約90m、短辺約80mである。主軸方位はN6°Eである。

出土遺物は少なく明確な時期は分からないが、奈良時代前後のものであろう。

ｂ　第１遺構面の遺構

土坑、落ち込み、およびピットを検出した。

土坑ＳＫ 322　ｆ14グリットで確認した遺構である。Ｂ６拡張区では、第２次調査区（Ｂ６区）から続く南側延長部分を確認した。

試掘坑により破壊されている北部から、およそ1.5ｍで収束する遺構であることが確認された。形態的には、後述の土坑SK527･528とほぼ同じで、この３基が一連の遺構であると考えられる。

出土遺物から、12世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑SK527(fig.24)　ｆ14グリットで検出した遺構である。平面形は隅丸の長方形を呈する。埋土下層中には隅を多く含んでいるが、遺構内に被熱は無かった。

遺構埋土上層を中心に、完形品を多く含む土器類が出土した。出土遺物から、12世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ 528(fig.24)　ｆ14グリット付近で検出した遺構である。ＳＫ527と東西に並ぶ。平面形は隅丸の長方形を呈する。埋土中層には炭混じり層が確認できた。

出土遺物から、12世紀中葉頃の遺構と考えられる。落ち込みＳＺ541 ｅ14グリット付近で検出した遺構である。浅い落ち込み状を呈する。大区画溝ＳＤ330（第2次調査で検出）南側に広がる浅い落ち込みと一連のものと考えられる。時期的には12世紀中葉頃のものと考えられる。

ピット群　ｅ～ｇライン付近に、中世のものと考えられるピット群がある。建物としてまとまらないが、掘立柱建物の一部と考えられる。

4　Ｂ７区第２遺構面の遺構

Ｂ７区第２遺構面（以下、「第２面」と略記）は、第２次調査で確認した11～13世紀代の居館遺構の下層部分に相当する。

Ｂ７区第２面の調査は、調査区南端と北端に道路下ボックス設置の理由から、ボックス相当部分を第２次調査時に行い、その間の、当面の工事に差し支えない部分を第３次調査として行っている。そのため、fig.25に示した図は、2回にわたる調査区を合成したものとなっている。

さて、Ｂ７区第２面の調査では大いなる反省点がある。それは、北側ボックス部分（グリット19・20ライン以北）の遺構が明確に確認されなかった（そ

の時点ではそう見えた）ことにより、fig.25に示した遺構図の北部が不明となってしまったことである。この遺構図を見る限り、後述の周溝SX491や掘立柱建物SB590などがこの北側ボックス部分に及んでいることは確実であるが、それを確認することができなくなってしまった。調査担当者の認識が及ばなかった点をここに明記しておく。

Ｂ７区第２面で確認した遺構は、弥生時代から平安時代前半に及ぶものがある。以下、各時期ごとに遺構を概観する。

a　弥生時代の遺構

弥生時代に相当する可能性のある遺構として、集積遺構がある。また、遺構としては確認できなかったが、弥生時代前期の遺物も出土しているため、この時期の遺構も近隣に残っている可能性がある。

集積遺構ＳＺ519(fig.27)　調査区北部のｉ20グリット付近で検出した。標高約2.3ｍの黄灰色系砂質シルト層上に、軽石製の砥石5点と磨製石斧1点がまとまって出土した。砥石の中には線状の研磨痕があるものもある。

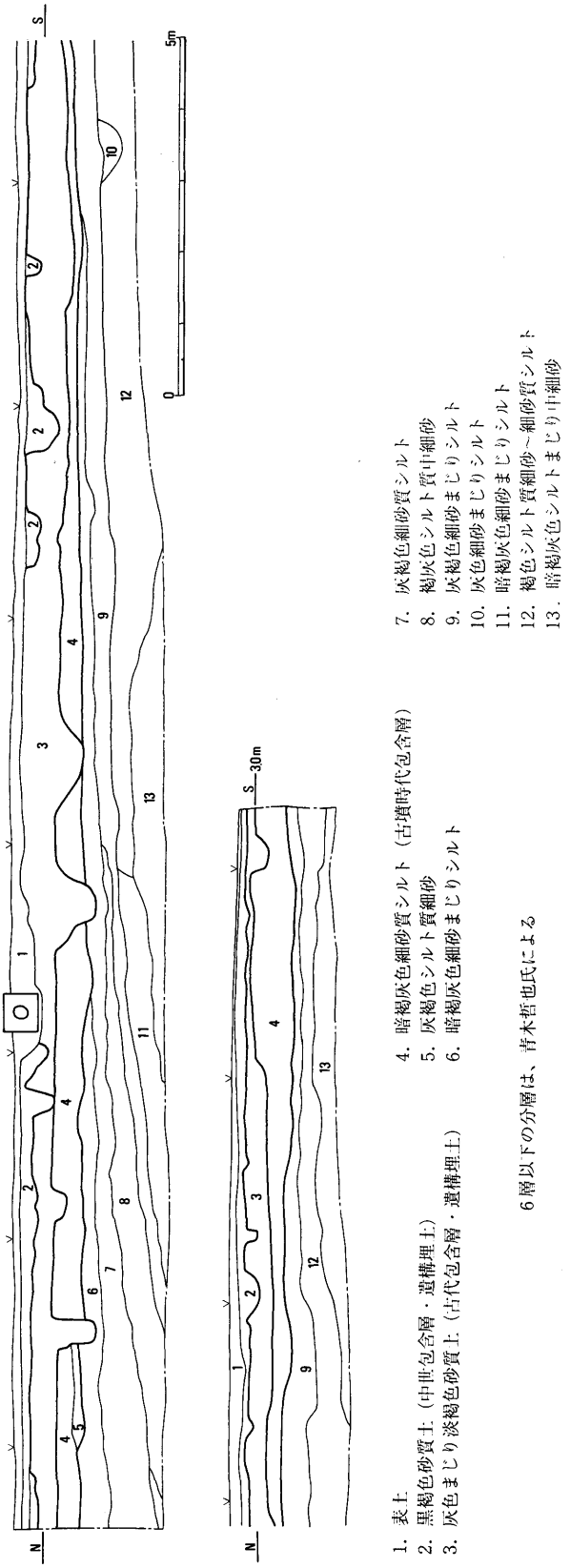


fig.26　Ｂ７区　東壁土層（１：100）

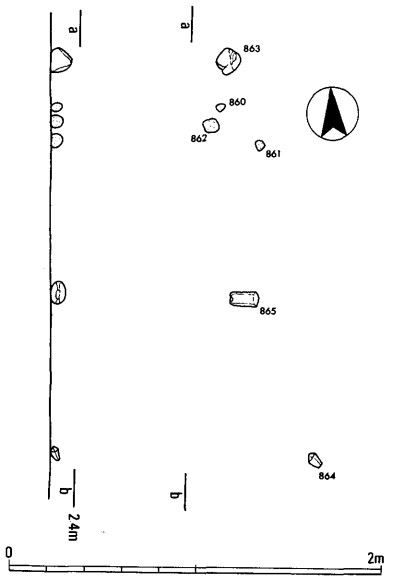


fig.27　Ｂ７区第２面　集積遺構ＳＺ519
平面・立面図（１：40）

fig. 28　B 7区第2面　周溝ＳＸ364・365　平面・断面図（1：100）

土器が無いので明確ではないが、磨製石斧の形態からは弥生時代中期頃の一群かと思われる。

b　古墳時代前期の遺構

ここで扱う時期は、厳密には前述のように弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての時期に相当するが、便宜的にこの時期を古墳時代前期として扱うこととする。

この時期の遺構としては、周溝墓と考えられるものが、不確実なものも含めて18基ほどある。

以下で「周溝」としたものは、ひとまず周溝墓として扱う。墳丘規模は、周溝の内側法尻間の距離を測っている。

周溝ＳＸ364(fig. 28)　調査区南部のg30グリット付近で検出した遺構である。溝が全周する形態をなす。墳丘部分は、東西約9.5m、南北約8.2mで、やや歪んだ長方形である。溝の断面はU字形で、とくに墳丘側が意識して整形されているわけではない。

北周溝内の遺構底面からやや浮いたいた状態で870の壺が出土している。その他の破片から見ても、この遺構は古墳時代前期初頭頃と考えられる。なお、871の小形壺については、後述のSX395に伴う可能性も考えられる。

周溝ＳＸ365(fig. 28)　調査区南部のe30グリット付近で検出した遺構である。前述のSX364と隣り合う。遺構南部は近代の溝による削平が及んでいる。そのため、遺構が完周するかどうかは分からない。

墳丘部分は東西約9.6m、南北約8.4mで、やや歪んだ長方形である。溝の断面形はU字形である。

出土遺物は少ないが、SX364と同様、古墳時代前期初頭頃と考えられる。

周溝ＳＸ381　調査区南部のb30グリット付近で確認した遺構である。遺構南側は、後世の撹乱のために削平されている。また、検出範囲内も古墳時代後期から奈良時代頃の竪穴住居が重複している。そのため、平面形が非常に判断しにくくなっているが、東・西辺の状況から周溝と判断した。東西約9.3m、南北約7.8mの長方形を呈する。溝は、検出面から約20cmほど下がっている程度である。

溝内からは、古墳時代前期初頭頃の土器が出土している。880の壺は南周溝西端の溝底から出土した。

周溝ＳＸ386　調査区南部のb27グリット付近で検出した遺構である。北側は中世の大区画溝SD247で破壊されている。

東西約9.6mである。南辺は一直線にならず、歪んでいる。南辺中央部は墳丘側にやや入り込み、特異な形状をなす。これは、先述のSX381との溝の共有を避けた結果とも考えられる。

南側周溝内の溝底からは、壺が(891)が出土している。出土土器からは古墳時代前期初頭頃の遺構と考えられる。

周溝ＳＸ392　調査区中央やや南部のd25グリット付近で検出した遺構である。遺構の東部は撹乱坑により破壊されている。

南北約9.6mで、南側に開口部を持つ周溝である。この開口部が南辺中央とすれば、東西規模は約10mとなる。開口部の溝法面整形は直線的ではなく、丸くなっている。

開口部東側溝内の底面からやや浮いた状態で台付甕(869)が出土している。この土器から、古墳時代前期中頃の遺構と考えられる。

周溝ＳＸ395　調査区南端のj33グリット付近で検出した遺構である。北側周溝はSX364と重なる。北側周溝のみが辛うじて残っており、南側は後世の撹乱で破壊されている。南側周溝の状況から見て、東西約8.8mほどの規模と考えられる。

出土遺物は明確ではないが、先述のように871の小形壺がこの遺構に伴う可能性がある。古墳時代前期の範疇で考えてよかろう。

周溝ＳＸ419　調査区中央西部のc27グリット付近で検出した遺構である。周溝は、東側および北・南側の一部を検出した。南北約10.1mの規模である。

出土遺物は少量であるが、古墳時代前期中頃のものが見られる。

周溝ＳＸ459　調査区北部のc21グリット付近で検出した遺構である。北・東辺の周溝の一部を確認したと考え、一応周溝に含める。規模は分からない。

周溝外でガラス製の管玉が出土しており、この遺構に伴う可能性がある。

周溝ＳＸ469(fig. 29)　調査区北端部のb20グリット付近で検出した遺構である。南・東周溝の一部

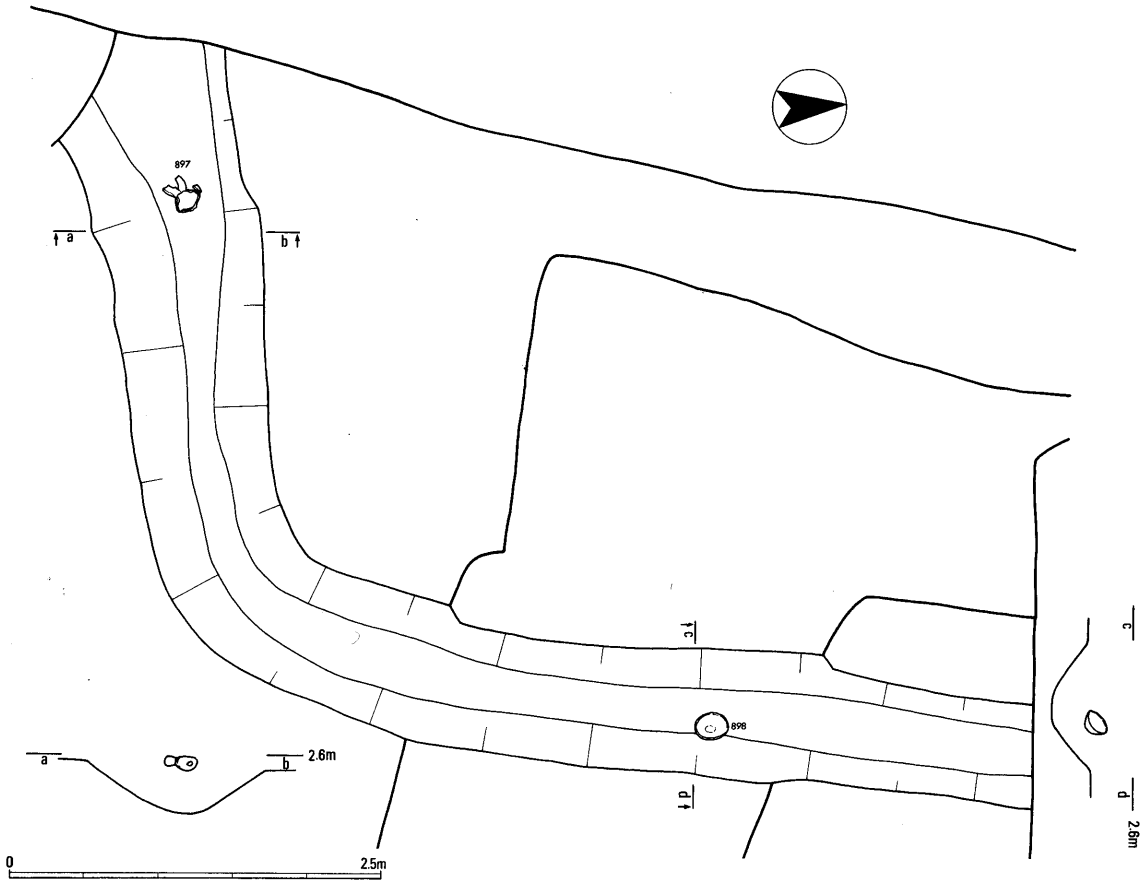


fig. 29　B 7区第2面　周溝ＳＸ469　平面・断面図（1：50）

を検出したのみであり、規模は分からない。東周溝には古墳時代後期の竪穴住居SH474･467が重なっている。溝の断面はU字形である。

南周溝からは壺（897）、東周溝からは高杯（898）が出土している。古墳時代前期初頭頃の遺構と考えられる。

周溝ＳＸ475(fig. 30)　調査区北端部のｄ20グリット付近で検出した遺構である。周溝S477と重なり、それよりは古い時期のものである。

遺構は南・東周溝の一部を確認したにとどまり、全体の形状は不明である。SD472が一連の溝である可能性もある。

南周溝からは、溝底からやや浮いた状態で壺（903）および高杯（902）が出土している。出土土器から、古墳時代前期初頭頃の遺構と考えられる。

周溝ＳＸ477(fig. 30)　調査区北部のｄ20グリット付近で検出した遺構である。東西約7.8ｍ、南北約7.2ｍの隅丸長方形を呈する。西周溝は古墳時代後期の竪穴住居SH447などと重複するが、竪穴住居の下に西周溝が辛うじて残っていた。溝は遺構検出面から約15cm程度しか残っていなかった。

南周溝から壺（907）と台付甕（908）が、西周溝から小形壺（909）が出土した。また、北周溝の埋土上層部分からは石杵（910）が出土した。これらの遺物から、この遺構は古墳時代前期中頃のものと考えられる。

周溝ＳＸ484(fig. 31)　調査区北部のｅ21グリット付近で検出した遺構である。南北規模は不明であるが東西は約13.5ｍで、この地区では最大の規模である。

南周溝の西隅寄りのところが開口する。西周溝で検出面からの深さ約40cm、東周溝では約20cmである。西周溝は、先述の周溝SX477と重なり、検出の状況からこの遺構はSX477に先行する遺構と考えられる。

墳丘上と考えられる部分から壺（904・905）が、西周溝内の底からは把手付の台付鉢（906）が出土している。これらの土器から、この遺構は古墳時代前期初頭頃のものと考えられる。

周溝ＳＸ486(fig.32・33)　調査区中央部ｇ24グ

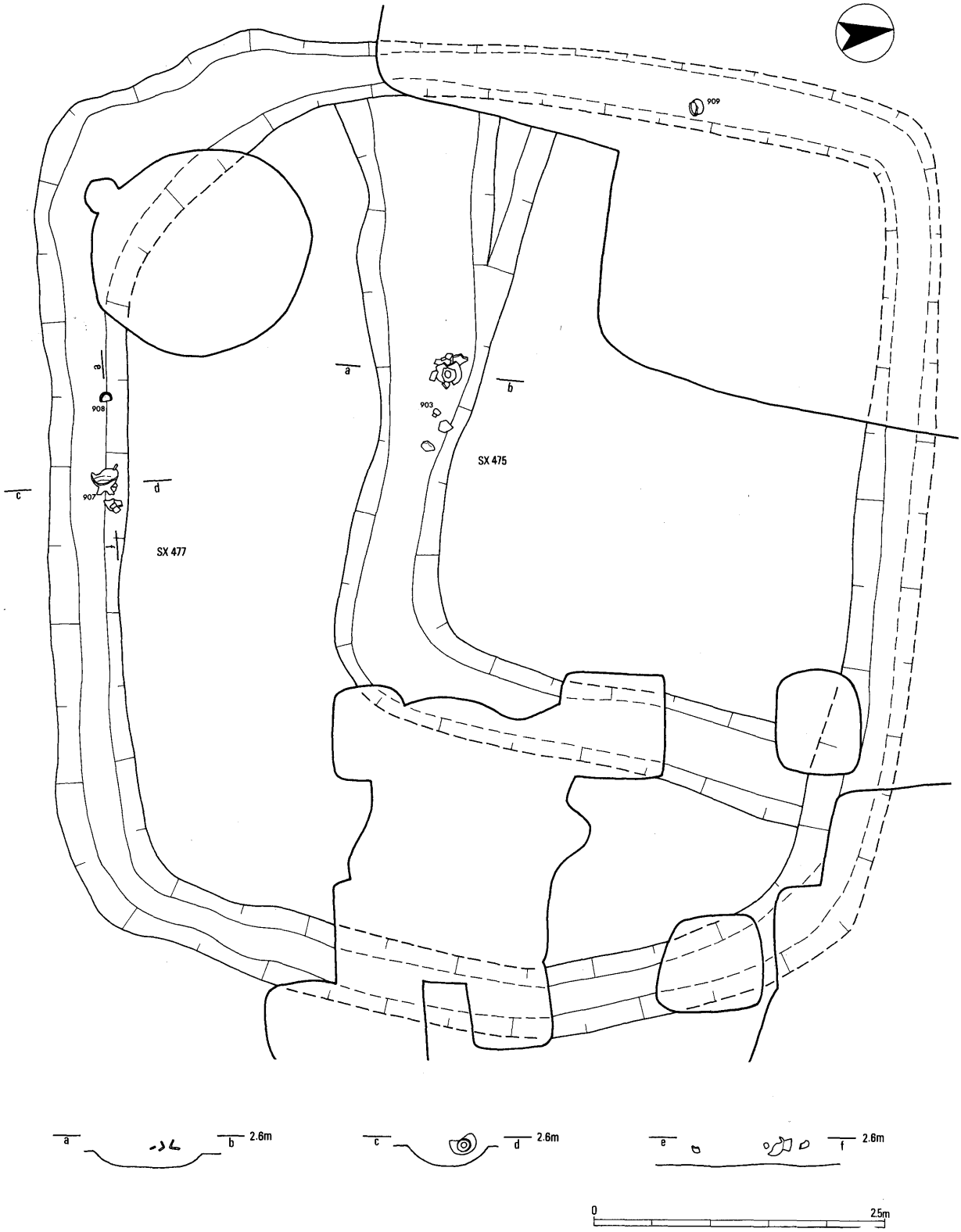


fig. 30　B 7 区第 2 面　周溝 S X 475 ・ 477　平面・断面図（1 ： 50）

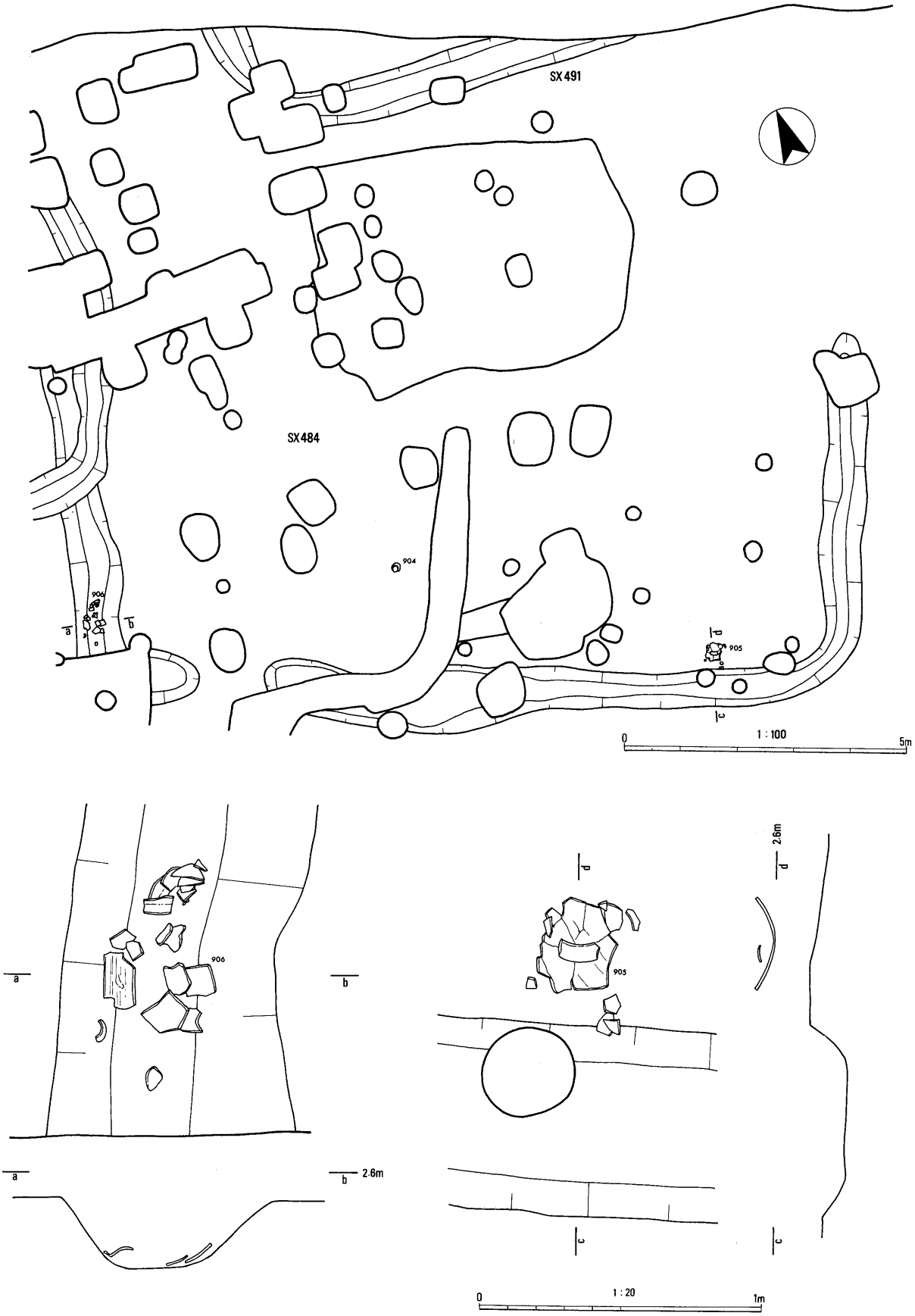


fig. 31　B７区第２面　周溝ＳＸ484　平面および土器出土状況

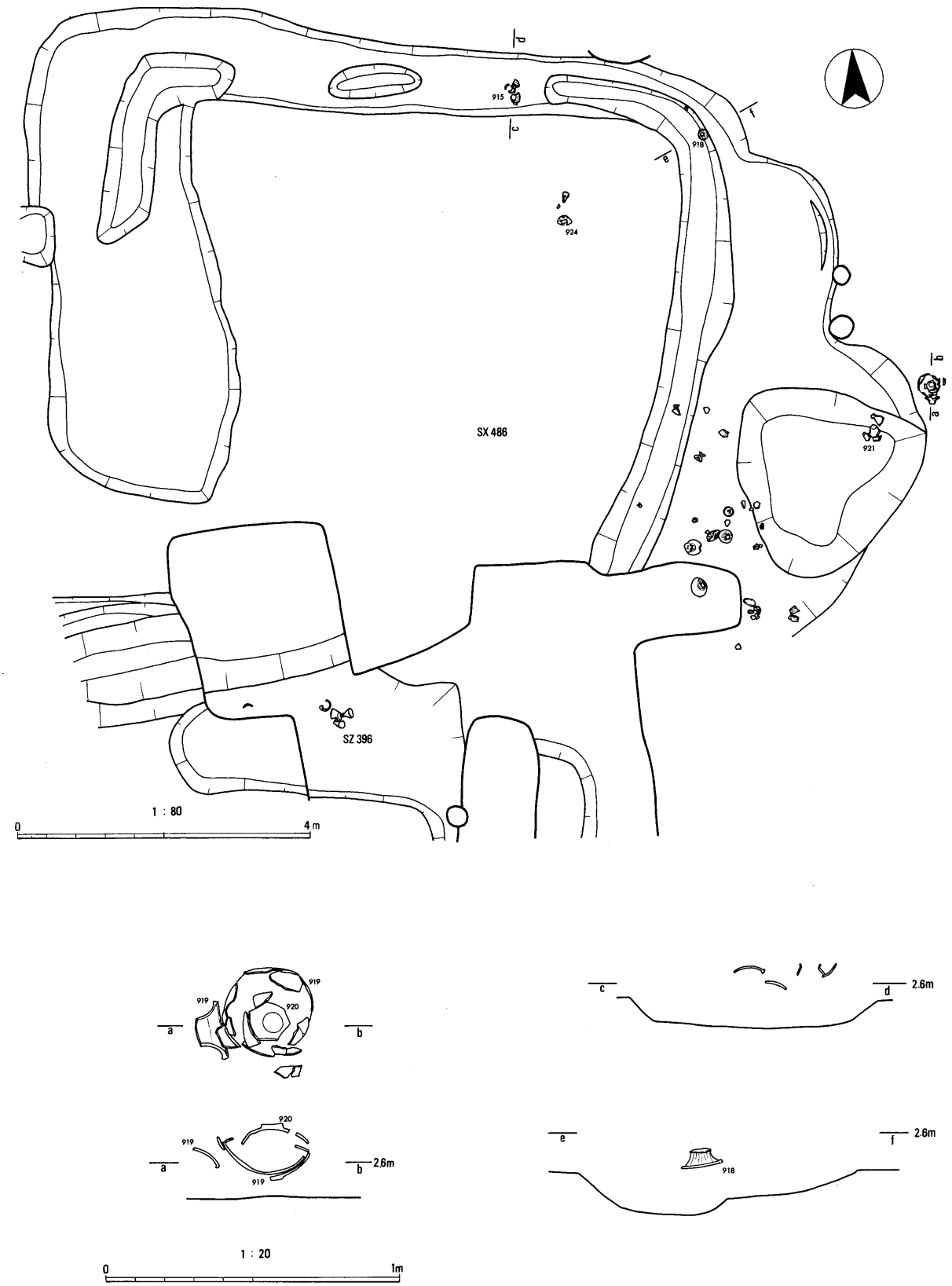


fig. 32　B 7区第2面　周溝ＳＸ 486　平面・断面図（1）

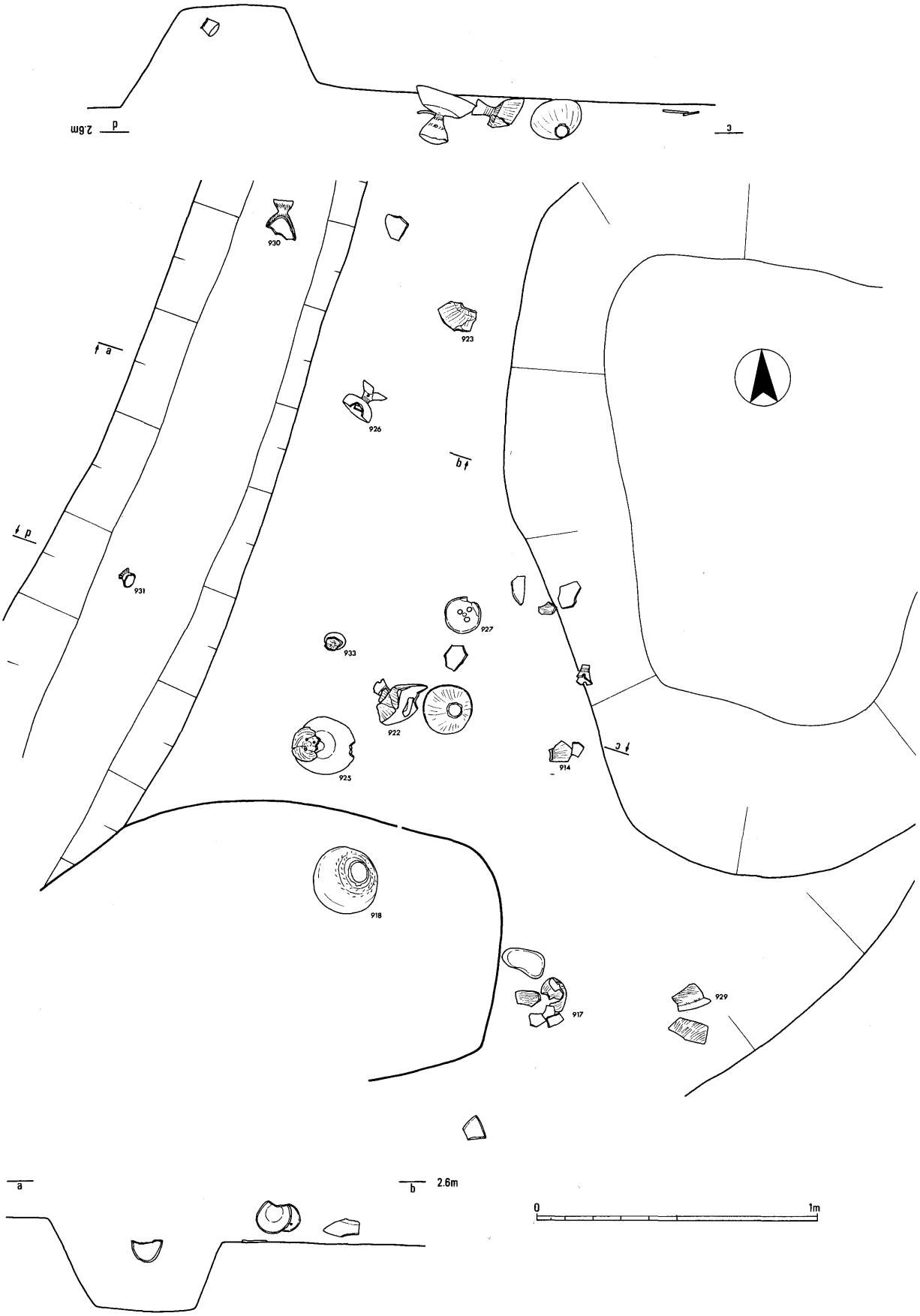


fig. 33　B 7区第2面　周溝ＳＸ486　土器出土状況（2）　（1：20）

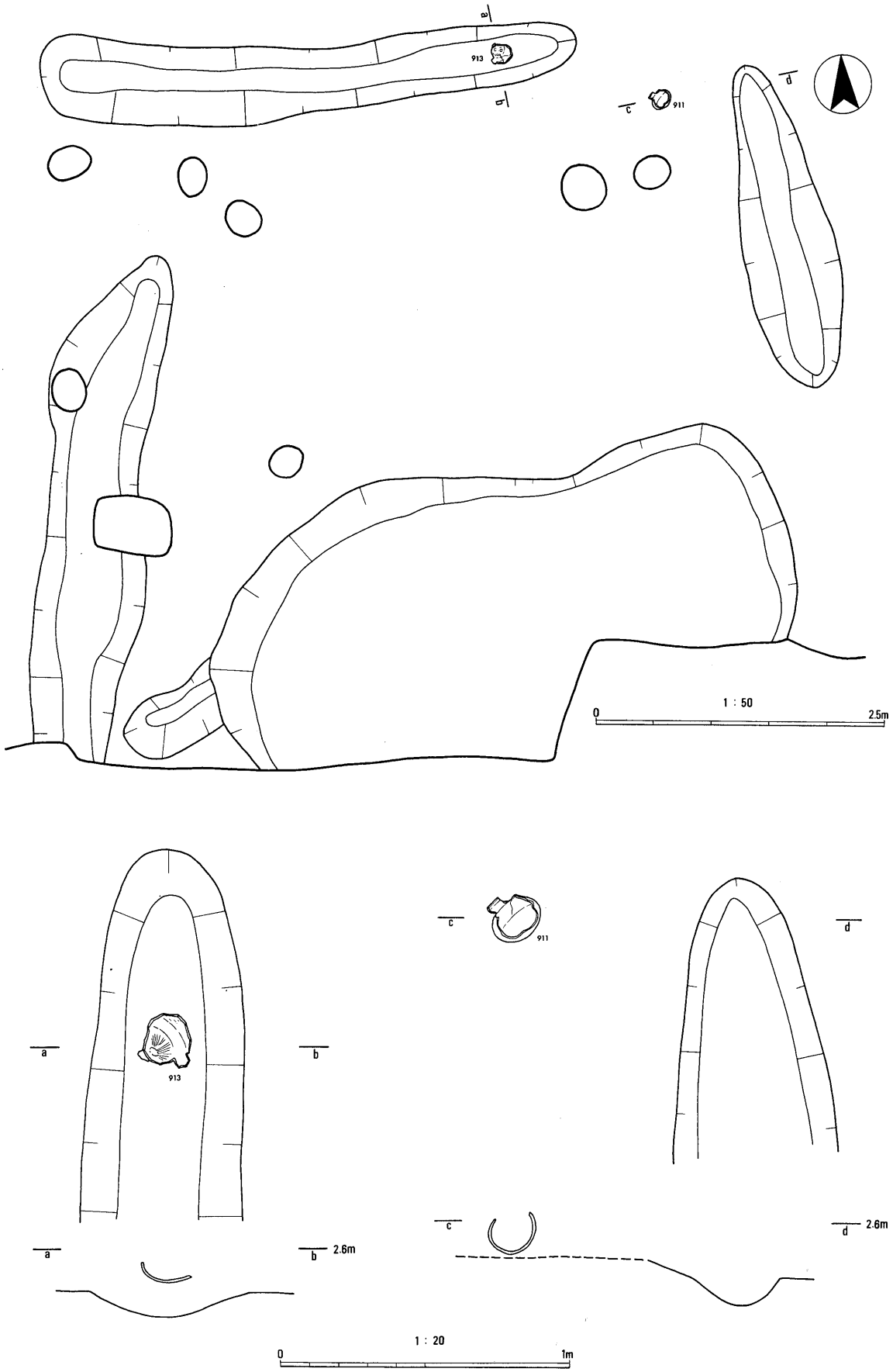


fig. 34　B 7区第2面　周溝SX 489　平面および土器出土状況

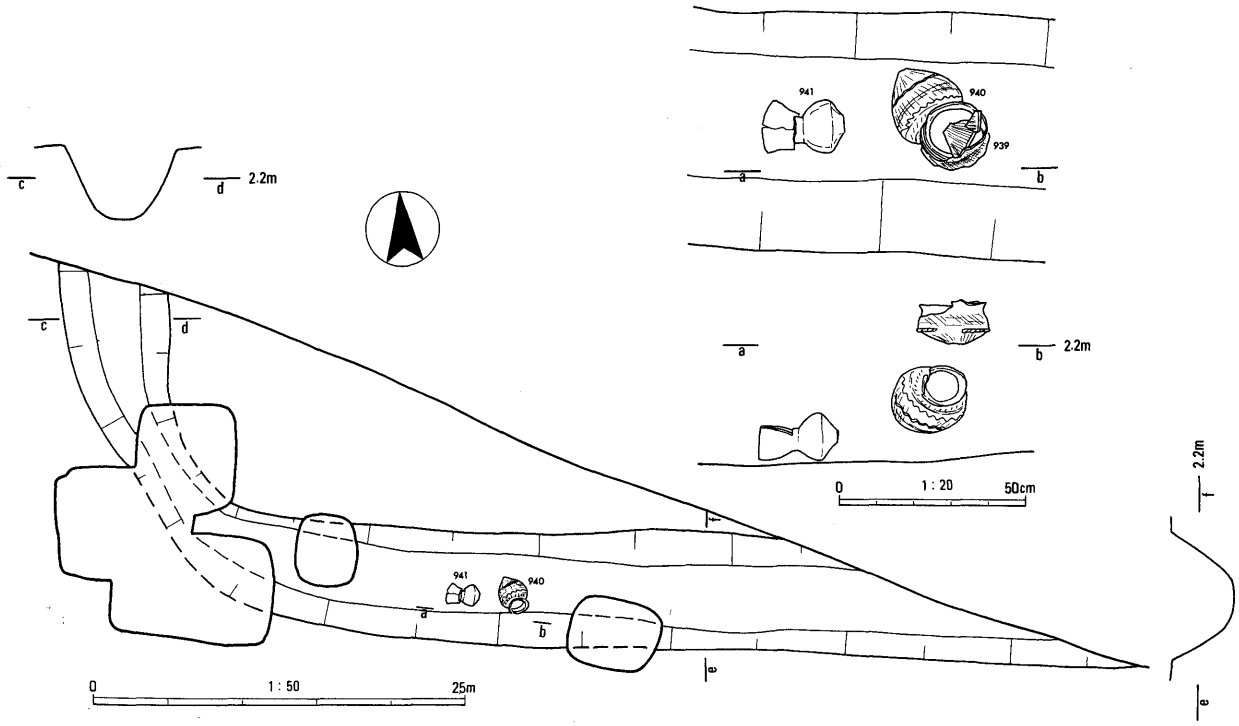


fig. 35　B 7 区第 2 面　周溝 S X 491　平面・断面図（1 ： 40）

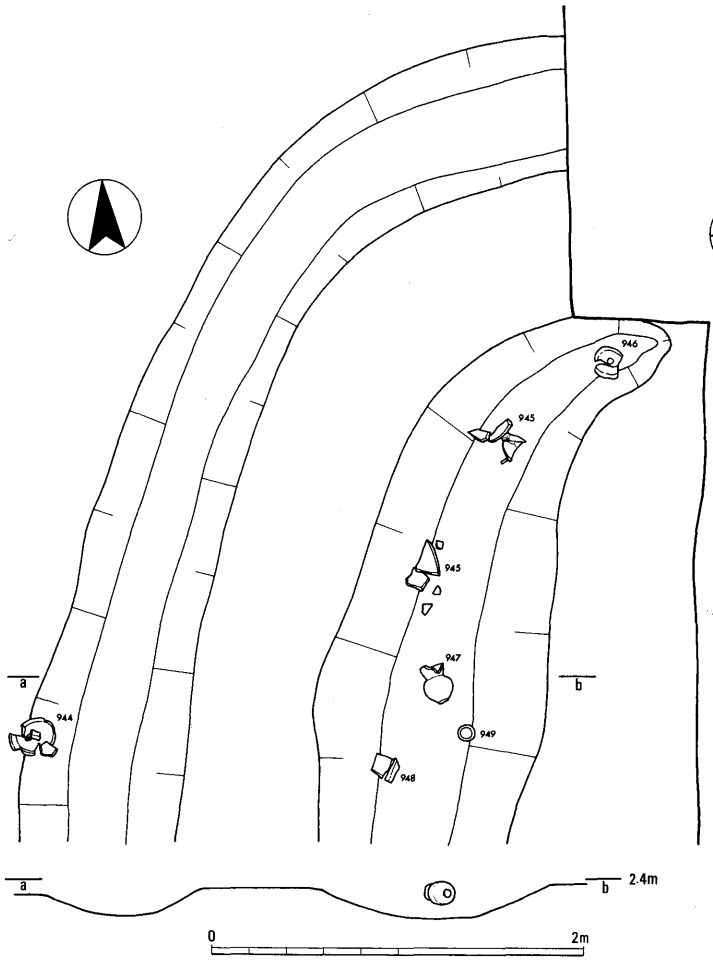


fig. 36　B 7 区第 2 面　周溝 S X520（左）521（右）
平面・断面図（1 ： 40）

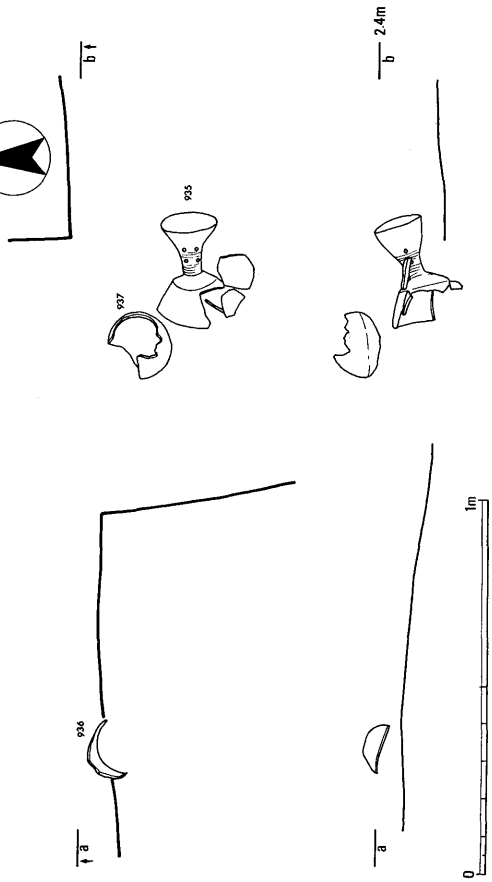


fig. 37　B 7 区第 2 面　土器群 S X 396
平面・立面図（1 ： 40）

リット付近で検出した遺構である。東西約8.0mで、南北規模は不明である。後述の土器群SZ396がこの遺構の一部と考えると、南北は約8.0mとなる。

周溝は、東側は暗褐色系砂質土が入り込むので比較的明瞭に確認できたが、西側は非常に見にくい。溝の断面はU字形である。

東周溝外側の落ち込み部分を中心に多くの土器が出土している。この落ち込みは、墳丘の盛り土をかなり広範囲に掘削した結果できたものと考えられる。土器には、墳丘上に置かれていたと考えられるもの(924)もある。918の壺は、口縁部は東周溝の北部で、体部は東周溝の南部から出土しており、直線距離でも6mほど離れている。これも、墳丘上にあったものが転落する際に2方に分かれたのであろう。

919と920の壺は、919の体部を下にして、体部下半のみである920を蓋状に置く。さらに、919の口縁部は同じ個体の体部に横付けされている(fig.32参照)。この状況から、これは土器棺の可能性があろう。

これらの土器類から、この遺構は古墳時代前期初頭頃のものと考えられる。

周溝SX489(fig.34)　調査区北部のi22グリット付近で検出した遺構である。3本の溝として検出したが、これも一応周溝として扱う。

南側以外の3辺の周溝である。いずれも交差せず、それぞれで独立している。ただし、この付近も遺構が非常に見にくいところであったため、このような検出になった可能性もある。

北周溝内からは、台付壺(911)と台付甕(913)が、溝底付近から出土した。これらの土器から、この遺構の時期は古墳時代前期初頭頃と考えられる。

周溝SX491(fig.35)　調査区北部のh19グリット付近で検出した遺構である。全体は窺えないが、南周溝と西周溝の一部を確認した。

南周溝内のほぼ同一箇所から手焙り形土器(939)・近江系甕(940)・壺(941)がまとまって出土した。この土器群から、この遺構の時期は古墳時代前期初頭頃と考えられる。

周溝SX520・521(fig.36)　調査区北部のi20グリット付近で検出した遺構である。いずれも南にあるSD494と一連の溝となり、周溝になると考えられる。SX521が内側、SX520が外側となる。両者の先後関係は中世の井戸(SE256)の存在によって明確ではない。内側となるSX521からはまとまった土器が出土しており、この土器類から古墳時代前期初頭頃と考えられる。

溝SD407　調査区南部のx30グリット付近で検出した遺構である。東側を中世の大区画溝(SD400)で破壊されているため、この遺構がどのように延びるのかはよくわからない。一応溝としたが、周溝の一部である可能性もある。

埋土内からは高杯・壺などが出土しており、古墳時代前期前半頃の遺構と考えられる。

土器群SZ396(fig.37)　前述の周溝SX486の南側、試掘坑の底を精査する段階で検出した。高杯と壺がそれぞれほぼ完形の状態で出土している。SX486の南周溝の一部である可能性もあるが、この土器群の精査が第2次調査の段階であったため、両者の関係は明確にはできなかった。

c　古墳時代中後期の遺構

この時期の遺構としては、竪穴住居、溝および落ち込みがある。また、掘立柱建物も存在する可能性が高いが、建物としてまとめることはできなかった。

竪穴住居SH413(fig.38)　調査区南部のf29グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられる。東西約4.6m、南北約4.6mで、ほぼ正方形を呈する。北壁中央に焼土があり、カマドと考えられる。貼床と主柱穴は明確にできなかった。

出土遺物は少量であるが、陶邑田辺編年のTK47型式併行前後の須恵器がある。

竪穴住居SH415　調査区中央西部のb27グリット付近で検出した遺構である。西側に撹乱坑があり、遺構検出面から数cmほど残存していたに過ぎないものであるが、東壁と北壁が直線的であること、東壁中央付近にカマドの残骸と考えられる焼土が見られたこと、カマドに向かって右手に貯蔵穴(旧称SK417)があることなどから、竪穴住居跡と判断した。

貯蔵穴や床面上から須恵器・土師器が出土している。須恵器は、陶邑田辺編年のTK23型式に併行すると考えられる。

竪穴住居SH463　調査区中央西部のd26グリット付近で検出した遺構である。第2・3次調査区の

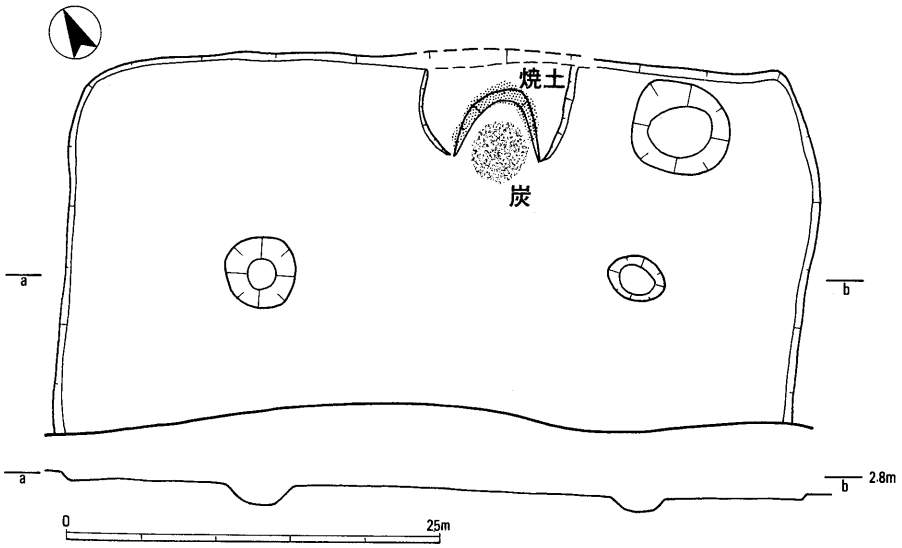


fig.38　B７区第２面　竪穴住居ＳＨ 413　平面・断面図（１：50）

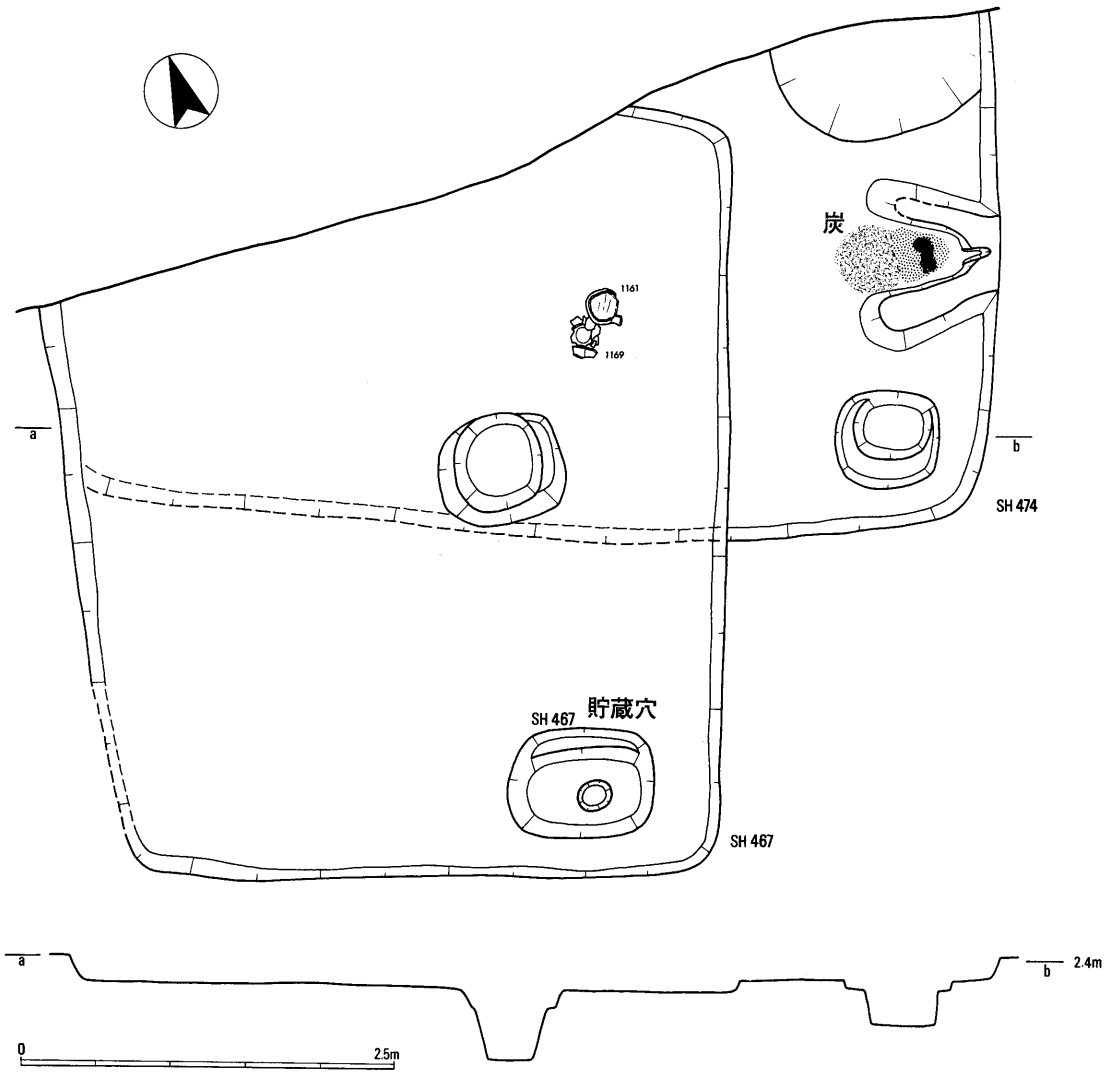


fig. 39　B７区第２面　竪穴住居ＳＨ 467・474　平面・断面図（１：50）

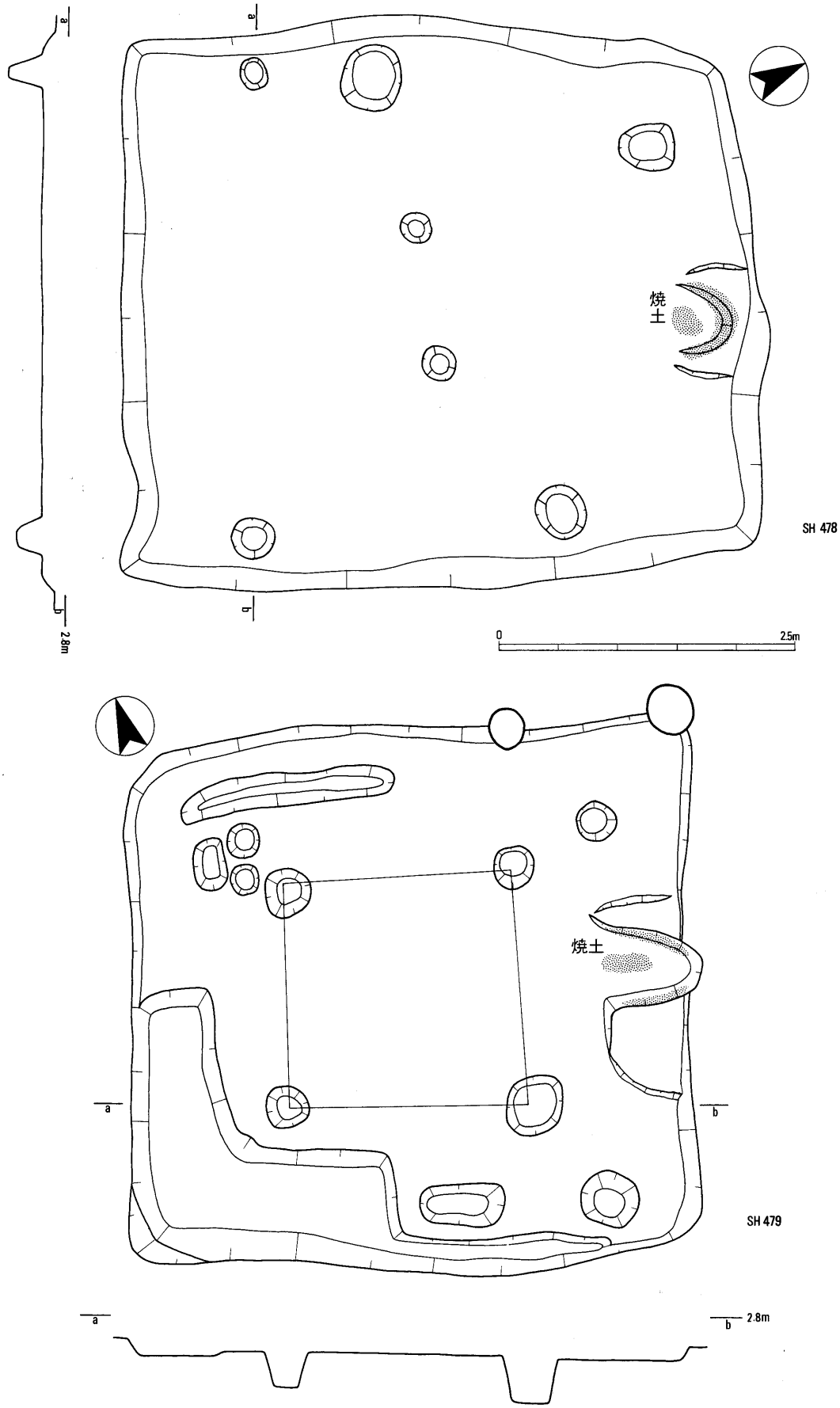


fig. 40　B 7 区第 2 面　竪穴住居ＳＨ 478 ・ 479 平面・断面図（1 ： 50）

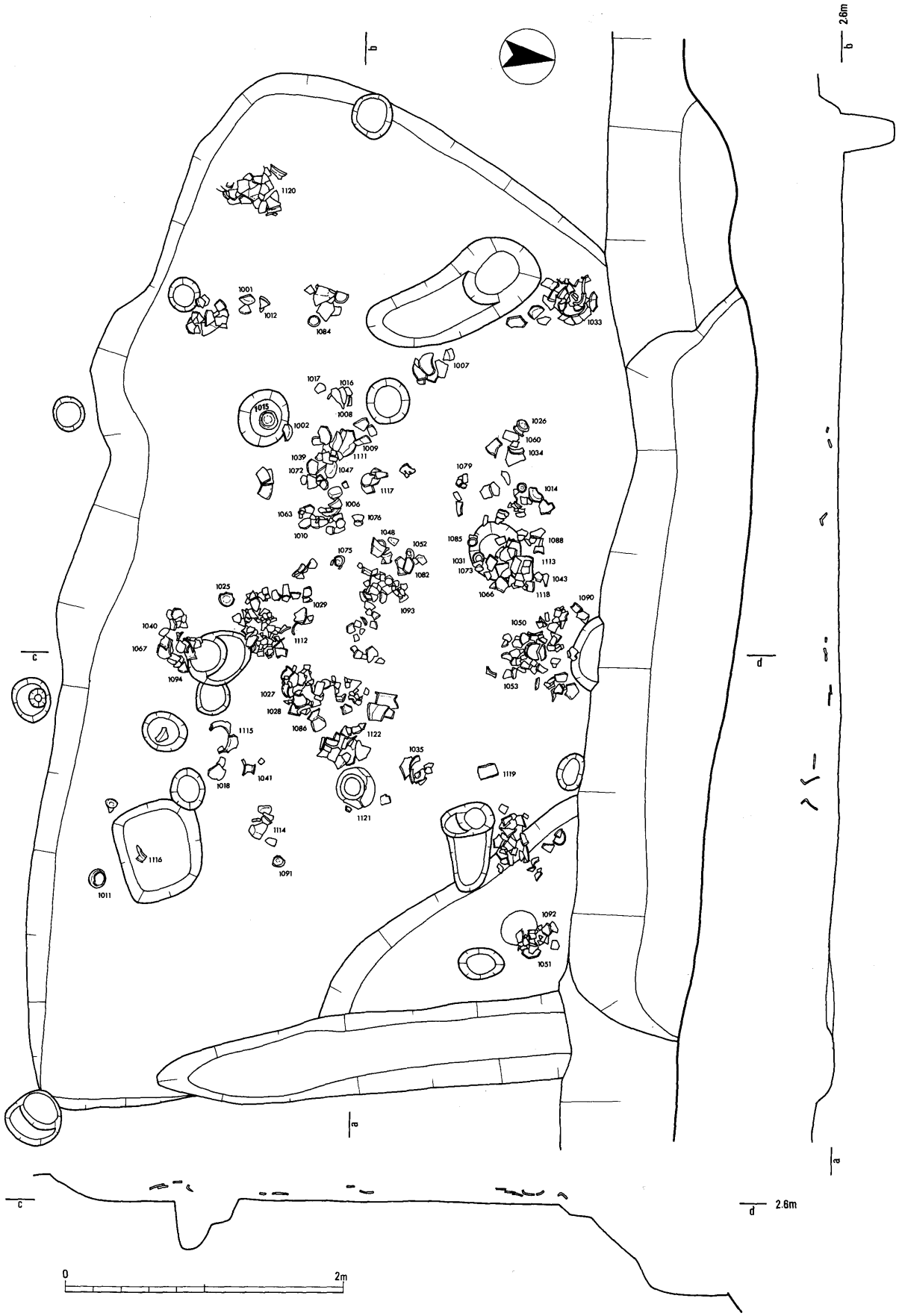


fig. 41　B 7区第2面　落ち込みＳＺ 367　平面・断面図（1：40）

境目にあたり、第３次調査区内でのみ検出できた遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられ、東西約5.2ｍである。北壁中央にカマドがあり、その右手には貯蔵穴と考えられるピットがある。

出土遺物には、陶邑田辺編年のMT85型式頃の須恵器のほか、土師器がある。

竪穴住居SH467(fig.39)　調査区北部のd19グリット付近で検出した遺構である。東西約4.6m、南北約5.1mの方形の竪穴住居跡と考えられる。後述のSH474と重複し、それよりも新しい遺構であるため、北壁にカマドがあるものと考えられる。ただし、遺構内南東隅には貯蔵穴と考えられるピットがあるため、１時期カマドが東壁にあり、その後北壁に作り替えている可能性もある。

遺構内からは土師器・須恵器などが比較的まとまって出土している。須恵器は、陶邑田辺編年のMT15型式に併行するものと考えられる。

竪穴住居SH468　調査区北西部のc22グリット付近で検出した遺構である。東西約5.4m、南北約5.80mの方形の竪穴住居跡と考えられる。

東壁のやや南寄りにカマドがある。ここからは台付甕が出土しており、先述のＢ５区ＳＨ550と同様、カマドに用いた台付甕の資料として重要である。

出土遺物には、陶邑田辺編年のTK47～MT15型式併行の須恵器がある。

竪穴住居SH474(fig.39)　調査区北部のd19グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられ、東西約6.1mである。前述のSH467と重複し、それに先行する遺構である。東壁にカマドがあり、その右手には貯蔵穴がある。

出土遺物には、陶邑田辺編年のTK47型式に併行する須恵器がある。

竪穴住居SH478(fig.40)　調査区中央西部のc24グリット付近で検出した遺構である。東西約4.7m、南北約5.2mの方形の竪穴住居跡と考えられるが、遺構の検出は極めて困難であった。北壁中央付近にカマドがある。

出土遺物は少量で、明確な時期は分からない。

竪穴住居SH479(fig.40)　調査区北部のe22グリット付近で検出した遺構である。東西約4.8m、南北約4.4mの方形の竪穴住居跡と考えられる。東壁中央にカマドがある。主柱穴は４カ所認められ、壁沿いには壁周溝も確認できた。

出土遺物には土師器長胴甕のほか、陶邑田辺編年のＴK23型式に併行する須恵器がある。

土坑SK408　調査区南部のx29グリットで検出した遺構である。幅約1.5mの不整円形で、東側は中世の大区画溝（ＳＤ400）で破壊されている。

土器群が比較的良好な状態で出土している。須恵器は、陶邑田辺編年のＴK10～ＭＴ85型式に併行するものであろう。

落ち込みSZ367(fig.41)　調査区南部のe29グリット付近で検出した遺構である。北側は中世の大区画溝（ＳＤ247）で破壊されている。東西約8.2m、南北の残存範囲で約3.2mという広い範囲の落ち込みである。平面形は明確ではないものの、方形を意識したものと考えられ、あるいは竪穴住居なのかも知れない。

ここからは完形品を数多く含む大量の須恵器・土師器が出土しており、何回かにわたって投棄されたものと考えられる。中には、断面楕円形となる筒形土器という珍しいかたちのものもある。

出土した須恵器は陶邑田辺編年のTK23～47型式に併行する時期を中心とし、一部にはMT15型式に相当するものも見られる。廃棄時期にはさほどの時間差は無いと考えられることから、これら一見雑多に見える型式群も、この地域の特徴として把握できるのかも知れない。

落ち込みSZ416　調査区南部のx28グリットで検出した遺構である。先述のSK408と重なる。SK408と一連の遺構である可能性もあり、時期的にも似通っている。

焼土SH461　調査区中央西部のb24グリットで検出した遺構である。南に開口するカマドであり、北壁にカマドを持つ竪穴住居跡が検出できなかったものと考える。

カマド内からは土師器長胴甕のほか、石製の紡錘車が出土した。

d　飛鳥～平安時代の遺構

この時期の遺構としては、竪穴住居、掘立柱建物、溝および土器群がある。

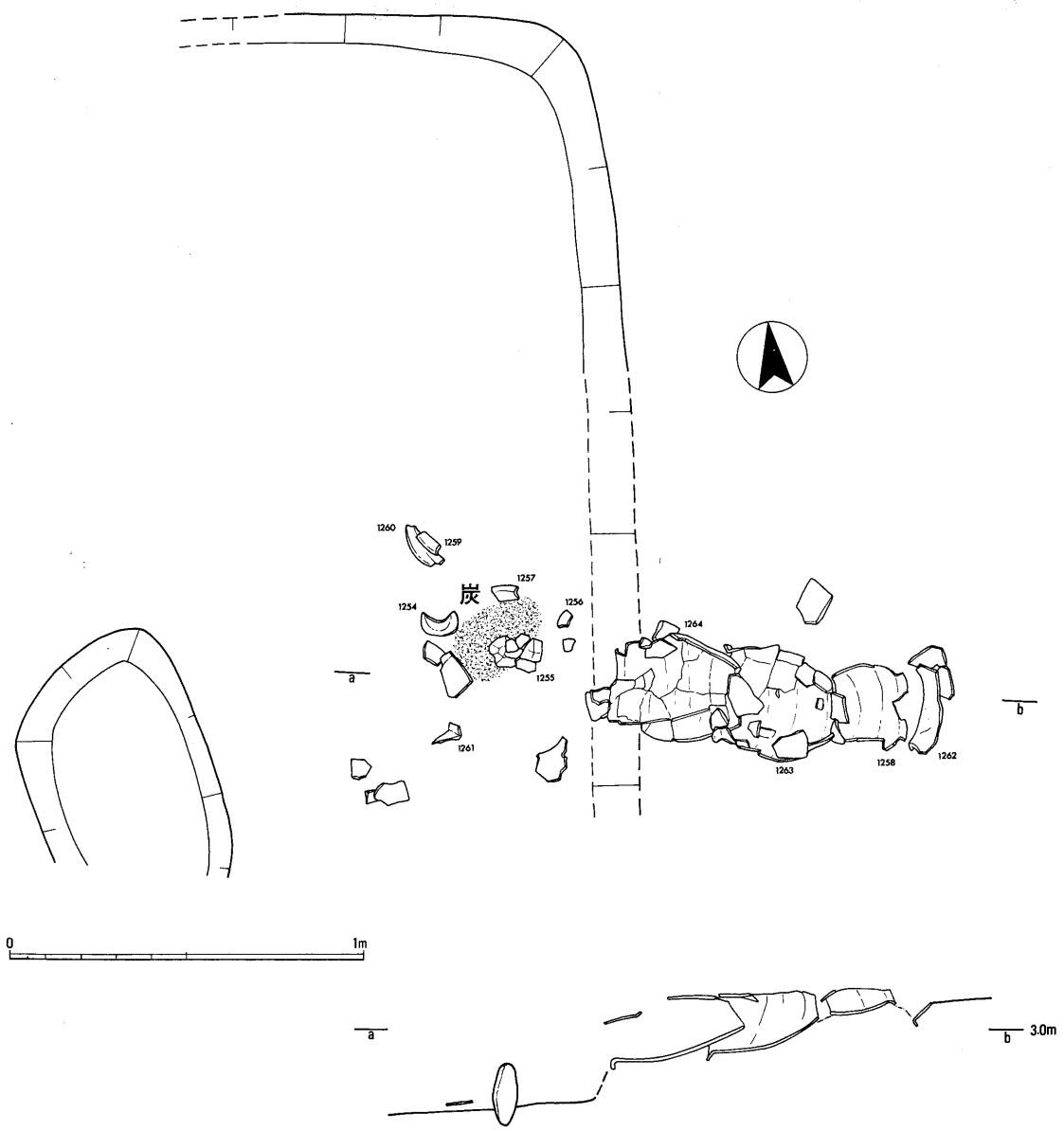


fig. 42　B７区第２面　竪穴住居ＳＨ 374　平面・断面図（１：20）

竪穴住居SH374(fig. 42)　調査区南部のb 30グリット付近で検出した遺構である。遺構は極めて検出しにくく、全体形は分からなかったが、カマド・東壁および北壁の一部を確認したため、方形の竪穴住居跡と考えた。

カマドは東壁中央にあたると思われる。カマドの煙道は、底部を打ち欠いた長胴甕を４個体分並べて形作っている。カマドには支柱石があり、その周辺には土師器杯類や土師器甕の破片が散乱していた。

出土した土器は、飛鳥・藤原京および平城京編年（以下、この編年を「都城編年」と呼称する）の平城Ⅳないしは Ⅴに併行すると考えられる。

竪穴住居SH376　調査区南部のｚ30グリット付近で検出した遺構である。方形の竪穴住居跡と考えられる。遺構南部はその他の遺構の重複のため、明確ではなく、北壁部分のみ確認できた。北壁中央にはカマドがある。

出土遺物は土師器杯・台付皿などがあり、都城編年の平城Ⅱに相当しよう。

竪穴住居SH380(fig. 43)　調査区南部のｃ30グリット付近で検出した遺構である。東西約4.8m、南北約3.9mの長方形を呈した竪穴住居跡と考えられる。北壁やや東寄りにカマドがある。このカマドは、土師器小形甕(1250)を逆さまにして支柱としていた。

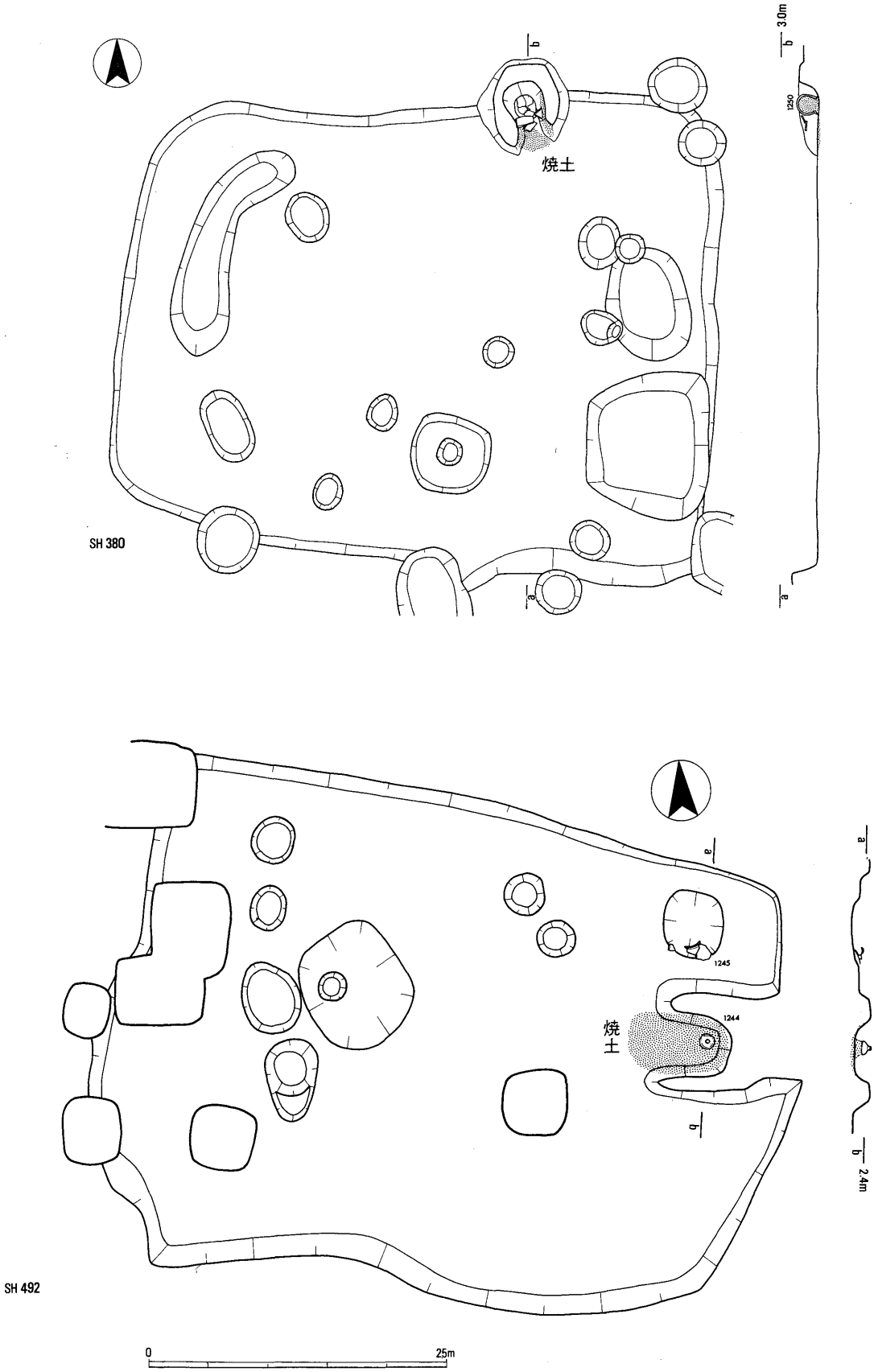


fig. 43　B 7区第2面　竪穴住居SH 380・492　平面・断面図（1：50）

出土土器から都城編年の飛鳥Ⅳよりも古い時期のものと考えられる。

竪穴住居SH492(fig.43)　調査区北部のh20グリットで検出した遺構である。東西約5.2m、南北約4.0mの不整長方形を呈した竪穴住居跡と考えられる。東壁中央付近にカマドがあり、脚裾を打ち欠いた土師器高杯（1244）を支柱として用いていた。

出土遺物には、刀子と考えられる鉄製品や土師器類がある。時期的には7世紀代頃のものであろう。

土器群SZ425　調査区北部のe21グリットを中心に確認した土器群である。第1遺構面の検出中に既に確認されていた。土師器甕を中心に、少量の須恵器で構成されていた。遺構の形状は全く不明である。なお、この下部に竪穴住居SH479が存在するが、時期的には異なるものである。

出土土器は甕が圧倒的大部分であるが、共伴する須恵器は都城編年の平安Ⅰでも新しい段階に併行するものと考えられる。

土器群SZ493　調査区北東隅のk21グリット付近からは、土師器甕を中心とした土器群がまとまって出土した。遺物が出土した付近からは焼土や炭も比較的多く観察されたので、遺構としては検出できなかったものの、この土器群が竪穴住居に伴うものである可能性は高い。

出土遺物は、概ね都城編年の平城Ⅱに併行する時期と考えられる。

掘立柱建物SB590(fig.44)

調査区北部のf19グリット付近で検出した遺構である。東西2間(約4.2m)、南北3間（約5.6m）以上の側柱建物である。南北棟で、主軸はN1°Eである。柱掘形はほぼ正方形で、最大のもので1辺80cm程度である。西側柱列を中心に、掘形内に2カ所の柱痕跡が見られるものがあるが、建て替えに伴うものかどうかはわからない。

出土遺物は少ないが、B4区SZ502出土土器と類似したものが見られるため、奈良時代末期頃以降の建物と考えてよかろう。

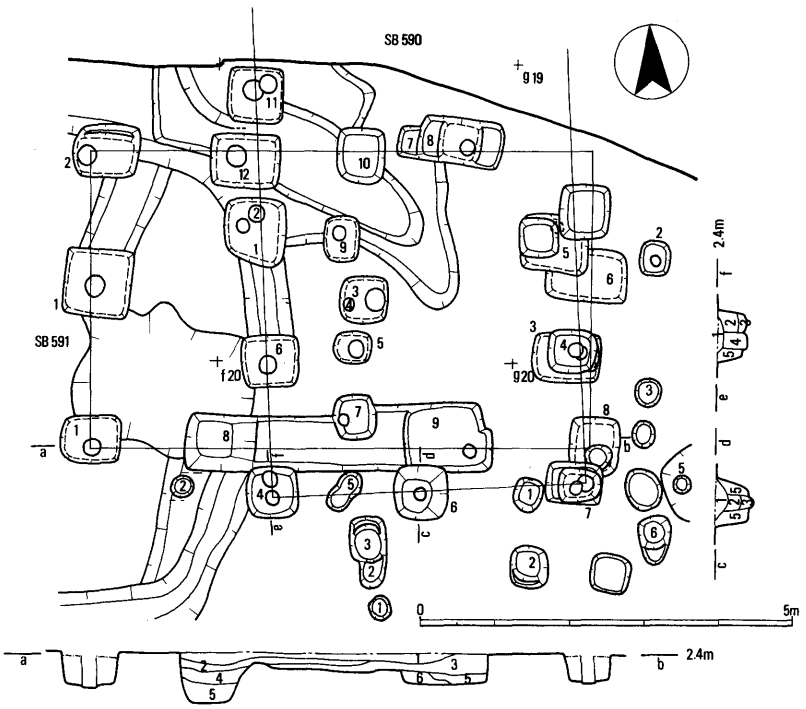
掘立柱建物SB591(fig.44)　調査区北部のe19グリット付近で検出した遺構である。東西3間（約6.9m)、南北2間（約4.0m）の側柱建物である。東西棟で、南北の軸方位はN3°Eである。柱掘形は正方形ないしは長方形で、最大のもので1辺1m程度である。南側柱列の中央2基のピットは布掘りを呈する。

出土遺物は少ないが、奈良時代頃のものと考えてよかろう。

掘立柱建物SB592　調査区北部のf19グリット付近で検出した遺構である。東西3間（約6.0m)、南北3間（約5.2m）以上の側柱建物である。南側柱列は中央1間分が狭くなっている。南北棟と考えられ、主軸はN1°Eである。柱掘形は正方形で、最大のもので1辺60cm程度である。

出土遺物は少ないが、前述のB4区SZ502やB5区SK554に近い土器があり、都城編年の平安I頃に併行する頃と考えてよかろう。

掘立柱建物SB593(fig.45)　調査区北部のf21グリット付近で検出した遺構である。東西3間（約



1. 炭まじり黄灰褐色砂質シルト
2. 黄灰褐色砂質シルト、炭少量
3. 黄色小粒含む、黄褐色砂質シルト
4. 黄褐色砂質シルト炭少量
5. 黄褐色砂質シルト、やや粘質
6. 黄色粘多い黄褐色砂質シルト

fig.44　B7区第2面　掘立柱建物SB590・591　平面・断面図（1：100）

6.1m)、南北2間（約4.0m）の側柱建物である。東西棟と考えられ、主軸はN4°Eである。柱掘形は不整正方形ないしは楕円形で、最大のもので1辺80cm程度である。東側柱列の北端東側にある、炭が多量に入ったピットは、この建物との関連が考えられる。

出土遺物は少ないが、都城編年の平城Ⅳから平安Ⅰに併行する時期のものがある。

掘立柱建物ＳＢ594(fig.45)　調査区北部のｉ21グリット付近で検出した遺構である。側柱建物で、東西4間（約7.5m)、南北2間（約4.5m）の側柱建物である。南北の側柱列はともに4間と考えられるが、柱間は異なっている。東西棟と考えられ、主軸はN4°Eである。柱掘形は正方形ないしは長方形で、最大のもので1辺1m程度である。

出土遺物は少ないが、奈良時代頃のものと考えてよかろう。

掘立柱建物ＳＢ595　調査区北東部のｊ23グリット付近で検出した遺構である。東西1間（約2.1m）南北1間（約2.6m）を確認したもので、東側は調査区外へ続き、西側は中世の大区画溝（ＳＤ231）および撹乱坑で破壊されている
ものと考える。総柱建物である可能性がある。

出土遺物は少量であるが、都城編年の平城Ⅳに併行すると考えられる土師器皿がある。

柱列ＳＡ596　調査区中央北部のｈ23グリット付近で検出した遺構である。東西3間（約4.8m）の柱列としたが、この柱列を北側柱とする掘立柱建物の可能性が高い。

出土遺物には奈良時代頃の須恵器杯蓋があり、その頃の遺構と考えられる。

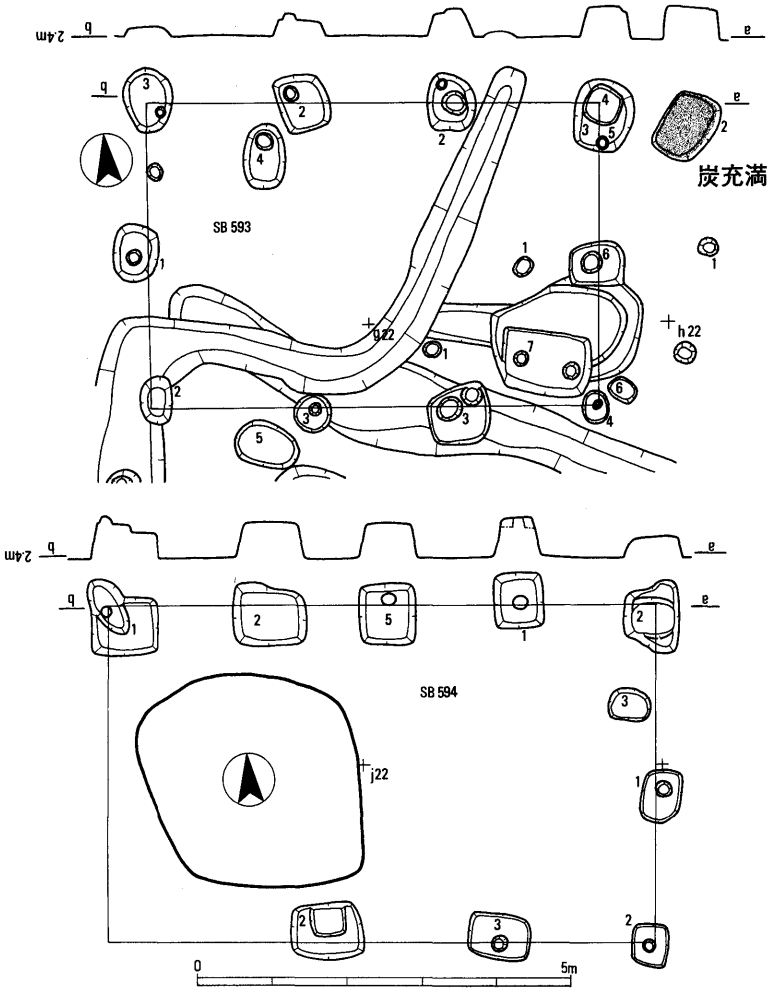


fig.45　Ｂ７区第２面　掘立柱建物ＳＢ593・594　平面・断面図（1：40）

<註>

検出遺構の時期を考えるにあたっては、以下の文献を参照した

・赤塚次郎ほか『廻間遺跡』（(財）愛知県埋蔵文化財センター　1990年）
・田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）
・奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』ＸⅣ（1993年）
・古代の土器研究会編『古代の土器１』（1992年）
・齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』古代の土器研究会　1994年）
・伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜』第１次調査（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
・伊藤裕偉『嶋抜』Ⅱ（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

遺構番号	性格	時期	地区	遺構面	グリット	特徴・形状・計測数値など
SX364	周溝	C期古	B7	2	g～i30・31	東西約9m、南北約8.5m
SX365	周溝	C期古	B7	2	e～g30・31	東西約9.5m、南北約9m
SD366	溝	D期～	B7	2	g30	竪穴住居SH413より新
SZ367	落ち込み	D期	B7	2	d・f29・30	土器多量
SZ370	落ち込み	D期	B7	2	d・e28	SZ367と一連?
SK371	土坑	C期	B7	2	e29	
SH374	竪穴住居	E期中	B7	2	b30	東辺にカマド、甕4個使用した煙道
SH376	竪穴住居	E期中	B7	2	a30・31	北辺にカマド、南はSH406と重複
SK377	土坑	D期～	B7	2	g32	
SK378	土坑	不明	B7	2	h32	
SK379	土坑	不明	B7	2	h29	
SH380	竪穴住居	E期中	B7	2	b・c30・31	北に焼土(カマド?)
SX381	周溝	C期	B7	2	a30	東西約9.5m、南北約8m
SK382	土坑	不明	B7	2	c30	
SK383	土坑	D期	B7	2	c31	方形
SK384	土坑	D～E期	B7	2	c31	柱掘形?
SK385	土坑	不明	B7	2	c31	
SD386	周溝	C期古	B7	2	c・d29・30	SX387と一連、南辺中央で溝が曲がる
SX387	周溝	C期古	B7	2	b30	SD386・SX391と一連
SK388	土坑	D期	B7	2	b30	
SK389	土坑	D期	B7	2	z32	
SK390	土坑	E期新	B7	2	d29	ピット、製塩土器
SX391	周溝	C期古	B7	2	a29～	SD386・SX387と一連
SD392	周溝	C期新	B7	2	e27～	SX481と一連、南北約10m
SD394	落ち込み	C期	B7	2	j33	
SD395	周溝？	C期	B7	2	j33	周溝墓の東辺が溝
SZ396	土器群	C期古	B7	2	e・f24・25	SX481と一連?
SZ397	落ち込み	C期	B7	2	f24	SX486の一部につき、抹消
SK401	土坑	不明	B7	2	x28	
SK402	土坑	不明	B7	2	x28	
SK403	土坑	不明	B7	2	y28	
SZ404	落ち込み	E期中	B7	2	x28	土器群
SH405	竪穴住居	D～E期	B7	2	b・c32	方形、北隅のみ検出
SH406	竪穴住居	E期古～	B7	2	a31・32	北辺にカマド、2棟の重複
SD407	溝	C期	B7	2	x30	水銀朱付着の高杯あり、周溝？
SK408	土坑	D期新	B7	2	x29	土器群、焼土含む
SK409	土坑	D期？	B7	1・2	z30	鉄滓
SH410	竪穴住居	D期	B7	2	z30	
SK411	土坑	E期古	B7	2	a31	竪穴住居SH406の下
SH413	竪穴住居	D期	B7	2	f・g29・30	北辺にカマド、東西4.5m、南北4.5m

tab.1　遺構一覧表(1)

遺構番号	性格	時期	地区	遺構面	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD414	土坑	D期	B7	2	x30	
SZ415	竪穴住居	D期	B7	2	b27	東辺にカマド、貯蔵穴(SK417)
SZ416	落ち込み	D期新～	B7	2	x28	
SK417	土坑	D期	B7	2	b28	竪穴住居SH415の貯蔵穴
SZ418	落ち込み	D・E期	B7	2	z29·30	
SX419	周溝	C期新？	B7	2	b·c27	SX480と一連、南北約10m
SZ420	落ち込み	D・E期	B7	2	z31	
421						抹消
SD422	溝	C期	B7	2	d32	周溝墓か?
SK423	土坑	不明	B7	2	c26	
SE424	井戸	H期以降	B7	1	z28	
SZ425	土器群	E期新	B7	1・2	e21	土師器甕を中心とした土器群
SX459	周溝？	C期？	B7	2	c21·d22	付近から管玉出土
SZ460	落ち込み	D期	B7	2	a·b25	旧称SH419、竪穴住居の残骸か?
SF461	焼土	D期	B7	2	b24	カマドの残骸、南向き、石製紡錘車·長胴甕
SK462	土坑	F期？	B7	1	j27·28	
SH463	竪穴住居	D期	B7	2	c25～d26	須恵器、TK23～
SK464	土坑	F期？	B7	1	e25	
SK465	土坑	F期？	B7	1	e25	
466						抹消
SH467	竪穴住居	D期	B7	2	c19·d20	
SH468	竪穴住居	D期	B7	2	b21～c22	須恵器TK23～
SX469	周溝	C期古	B7	2	b·c20	南·東辺のみ確認
SD470	溝	D期？	B7	2	b19～20	須恵器·土師器椀
SD471	溝	不明	B7	2	b20～c21	
SD472	溝	不明	B7	2	b～c19	SH467の東辺か?
SD473	溝	不明	B7	1	b22	
SH474	竪穴住居	D期	B7	2	d19	東辺にカマド
SX475	周溝	C期古	B7	2	d19～	
SD476	溝	C期	B7	2	b21·22	
SX477	周溝	C期	B7	2	d20	東西約7.5m、南北約7.0m、SX484より新
SH478	竪穴住居	D期	B7	2	b23～c25	長胴甕片
SH479	竪穴住居	D期	B7	2	d21～e22	長胴甕、須恵器TK43～
SX480	周溝	C期古	B7	2	a24～c26	欠山期
SX481	周溝	C期古	B7	2	d25～f24	欠山期
SZ482	落ち込み	D期	B7	2	b25	土師器把手
SD483	溝	E期	B7	2	f22～	鈎の手に曲がる　宝珠摘みの須恵器
SX484	周溝	C期古	B7	2	e20～i21	東西辺約13m、把手付台付鉢あり
SD485	溝	D期？	B7	2	f～g22	長胴甕
SX486	周溝	C期古	B7	2	g23·24	欠山期

tab.2　遺構一覧表(2)

遺構番号	性格	時期	地区	遺構面	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD487	溝	C期古	B7	2	h23·24	SD489と一連で周溝墓になると考えられる
SD488	溝	C期古	B7	2	j23	SD489と一連で周溝墓になると考えられる
SD489	溝	C期古	B7	2	h22～j23	欠山期、SD487と同一?
SZ490	落ち込み	D期	B7	2	b·c23	長胴甕片、SH468の一部か?
SX491	周溝	C期古	B7	2	g19	手焙り形土器、近江系甕・長頸壺完形
SH492	竪穴住居	D期新	B7	2	g19～h21	6世紀代?
SZ493	土器群	D期	B7	2	k20·21	長胴甕がまとまって出土　焼土有り　竪穴住居の残骸か?
SD494	溝	C期	B7	2	i～k22	SX520と一連?
SZ495	落ち込み	D期	B7	2	f19	台付甕
SX496	周溝	B期	B4	1	c17～d18	弥生中期前葉頃?周溝墓か?
SD497	周溝	B期	B4	1	c17～d18	弥生中期前葉頃?周溝墓か?
SH498	竪穴住居	C期?	B4	1	b17	遺物なし、炭多く含む
SH499	竪穴住居	D期古	B4	1	d16	北辺のみ検出、壁周溝残る
SZ500	落ち込み	E期前後	B4	1	b·c18	
SZ501	落ち込み	E期前後	B4	1	c16	須恵器含む
SZ502	落ち込み	E期	B4	1	d14·15	竪穴住居か?土器良好　墨書「田井」あり、製塩土器
503			B4	1	d15·16	SZ504に含む
SZ504	水田遺構	C～D期	B4·5	1	d1～h18	田面は3面以上、畦畔あり、下部に弥生水田ある可能性大
SD505	溝	B期	B2	1	d23·24	周溝墓の可能性あり、弥生中期前半
SD506	溝	B期?	B2	1	d24·25	SD505の続き?C期の遺物含むが重複遺構か?
SK507	土坑	F3期	B2	1	d25	焼土·大礫含む
SD508	溝	B・C期	B2	1	c·d25	弥生(周溝墓)の可能性あり、C期の遺物含む
SH509	竪穴住居	C期新	B2	1	c·d26·27	貯蔵穴あり
SH510	竪穴住居	C期新	B2	1	d26·27	SH509より新、S字C類
SH511	竪穴住居	D期新～	B2	1	d·e26·27	カマドあり、須恵器TK209
512			B2	1	c·d26·27	SH509と同一につき抹消
SE513	井戸	F3期	B2	1	d27	方形、井戸側枠検出できず
SZ514	落ち込み	C期新	B2	1	d21·22	竪穴住居の可能性あり
SZ515	落ち込み	B～E期	B2	1	d26·27	奈良頃の竪穴住居の残骸?弥生中期の壺まとまって出土
SZ516	落ち込み	E期?	B2	1	c·d29	
SD517	溝	C期	B2	1	c·d27·28	弥生中期の可能性もある
SD518	溝	E期?	B2	1	c·d28	
SZ519	集積遺構	B期	B7	2	i20	石斧と軽石(砥石)がまとまって出土
SX520	周溝	C期古	B7	2	i·j20·21	SD494と一連?
SX521	周溝	C期古	B7	2	i·j20·21	
SE522	井戸	E期新	B2	1	d37	縦板側枠、井筒は丸太刳り抜き
SZ523	落ち込み	C～D期	B2	1	d28	弥生中期土器片含む
SK524	土坑	D期～	B2	1	d28	浅い落ち込み状
SH525	竪穴住居	C期	B2	1	c·d29·30	炭広がる、S字C類
SK526	土坑	不明	B2	1	d30	

tab.3　遺構一覧表(3)

遺構番号	性格	時期	地区	遺構面	グリット	特徴・形状・計測数値など
SK527	土坑	F３期	B6拡	1	f14	下部に炭層あり
SK528	土坑	F３期	B6拡	1	f·g14	炭混じる
SK529	土坑	E期	B4	1	d·e17	須恵器杯G
SH530	竪穴住居	C期新	B2	1	c·d31·32	水銀朱?付き器台、瑪瑙原石
SH531	竪穴住居	C期新	B2	1	d·e33	S字甕C類
SD532	環濠	C期	B2·5	1	d·e35、g35～h32	幅約3m、深さ約0、8m、B2区側は2段掘りになる
SH533	竪穴住居	E期中	B2	1	c35～d36	煙道が斜めに取り付く
SK534	土坑	～D期新	B2	1	d34·35	
SZ535	落ち込み	D期古？	B2	1	c33	
SH536	竪穴住居	E期中？	B2	1	d34·35	縄文土器片混入
SH537	竪穴住居	E期中	B2	1	c34·35	北部に焼土あり
SH538	竪穴住居	E期古	B7	2	b20	須恵器TK217含む
SZ539	落ち込み	C期新	B2	1	d39	S字甕C類、竪穴住居か？
SH540	竪穴住居	C期	B2	1	d40	竪穴住居の残骸か?
SZ541	落ち込み	F３期	B6拡	1	e14·15	2次調査区のSD324に続くか?
SH542	竪穴住居	C期古	B5	1	g27·28	壁周溝、上層には奈良あり
SH543	竪穴住居	E期中？	B5	1	g27·28	土器は細片のみ
SD544	溝	C期新	B5	1	f·g28	浅い、土器群あり
SD545	溝	E期中？	B5	1	f·g26	浅い
SD546	溝	E期以前	B6拡	1	i14·15	
SH547	竪穴住居	E期古	B6拡	2	h·i14·15	北辺にカマド
SD548	溝	E期以前	B6拡	2	j14·15	2次調査区で検出の溝と一連
SZ549	落ち込み	E期中？	B5	1	g27	SH542の上、竪穴住居の残骸か?
SH550	竪穴住居	D期	B5	1	g28～30	台付甕を用いたカマド
SZ551	落ち込み	E期中？	B5	1	f26·27	土器は細片のみ
SH552	竪穴住居	C期新	B5	1	g25·26	東西辺約7m、壁周溝あり
SH553	竪穴住居	C期新	B5	1	g29·30	炉跡あり、平面形不明
SK554	土坑	E期新	B5	1	g20·21	土器一括
SE555	井戸	E期新	B5	1	h19～21	完堀せず　緑釉陶器·製塩土器
SH556	竪穴住居	D期	B5	1	g31～33	東西辺約6m、SD532の上
SH557	竪穴住居	E期古	B5	1	g18～h19	東辺にカマド
SH558	竪穴住居	E期中	B5	1	f·g17·18	東辺にカマド
SK559	竪穴住居	E期古	B5	1	f17	須恵器
SK560	土坑	E期新	B5	1	h19	浅い落ち込み
SH561	竪穴住居	E期古	B5	1	f34	コーナー部分のみ検出
SH562	竪穴住居	E期中	B5	1	f35～g36	北辺東隅にカマド、残り悪い
SH563	竪穴住居	E期中	B5	1	f36	コーナー部分のみ検出
SK564	土坑	C期新	B5	1	g35	
SH565	竪穴住居	C期新	B5	1	g38	炉跡あり、平面長方形
SH566	竪穴住居	C期新	B5	1	g37	突帯文土器の混入あり

tab.4　遺構一覧表（4）

遺構番号	性格	時期	地区	遺構面	グリット	特徴・形状・計測数値など
SE567	井戸	F３期	B5	1	g36	方形の掘形、縦板枠・曲物の井筒
SZ568	落ち込み	B期～	B5	1	g37	SH566の下、弥生中期か?
SH569	竪穴住居	B期	B5	1	g36	土器がまとまって出土
SH570	竪穴住居	C期新	B5	1	f・g38	炉あり、平面形不明
SH571	竪穴住居	E期？	B5	1	g36	コーナー部分のみ検出
SD572	環濠	B？～C期	B4・5	1	c15～e16,g・h16	断面V字形、土器良好・多量、微高地縁辺部にめぐる
SZ573	落ち込み	～E期	B5	1	～18	竪穴住居の残骸か?
SZ574	落ち込み	～E期	B5	1	f・g24・25	C期の遺物含む
SZ575	落ち込み	C期新	B4	1	h25	土器一括状態、SD572上層部の可能性あり
SK576	土坑	～F期	B4	1	d15	SZ504上部を切る
SB577	掘立柱建物	E期	B2	1	d10	東西3間、南北3間、総柱
SB578	掘立柱建物	E期中？	B5	1	f・g32～34	柱掘形大きい、側柱か?
SB579	掘立柱建物	D～E期	B5	1	f～h21～23	東西3間以上、南北2間以上
SA580	柱列	D～E期	B5	1	f・g33～35	東西2間以上、南北2間以上
SB581	掘立柱建物	E期	B4	1	a～c17・18	東西2間以上、南北3間か?側柱建物
SB582	掘立柱建物	E期中	B5	1	g・h16～18	東西3間、南北2間、側柱
SA583	柱列	E期中	B5	1	g15・16	東西2間以上
SA584	柱列	E期？	B2	1	d・e26・27	3間分
SA585	柱列	E期？	B2	1	d29・30	2間分
SB586	掘立柱建物	不明	B6拡	2	h・i14・15	2間×2間
SB587	掘立柱建物	E期中	B6拡	2	i・j14・15	東西2間、南北3間以上、側柱
SB588	掘立柱建物	E期中？	B6	2	i・j13・14	東西2間、南北4間以上、側柱
SB589	掘立柱建物	E期中？	B6	2	i・j14・15	東西3間、南北2間、側柱、SK362をピットとする
SB590	掘立柱建物	E期中	B7	2	f・g19・20	東西2間、南北3間、側柱
SB591	掘立柱建物	E期中	B7	2	e～g19・20	東西3間、南北2間、側柱
SB592	掘立柱建物	E期新	B7	2	i～k21・22	東西3間、南北3間以上、側柱
SB593	掘立柱建物	E期中	B7	2	f・g21・22	東西3間、南北2間、側柱
SB594	掘立柱建物	E期中	B7	2	i・j21・22	東西4間、南北2間、側柱
SB595	掘立柱建物	E期中	B7	2	j・k23	東西1間以上、南北1間以上
SA596	柱列	不明	B7	2	g・h23	3間分

tab.5 遺構一覧表（5）

註）　遺構一覧表の時期については、遺構全体の状況と時期的なまとまりを考えて、次のように区分した。

A期…縄文時代晩期～弥生時代前期（今回の該当遺構は無い）

B期…弥生時代中期

C期…弥生時代後期末～古墳時代前期

D期…古墳時代中期～後期

E期…いわゆる飛鳥時代(古)～奈良時代(中)～平安時代前半（新）

F期…11世紀～13世紀中葉（１～４小期に細分）

G期…室町・戦国期（今回の該当遺構は無い）

H期…近世～近代

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

今回報告の対象調査区から出土した遺物は、整理箱にして約350箱である。時期的には縄文時代晩期から中世にまで及び、古墳時代前期の土器が最も多い。土器が大部分で、若干の木製品・石製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に記述する。個々の土器の詳細については、遺物観察表（tab.6～35）を参照されたい。

1　Ｂ２区出土の遺物

a　縄文時代晩期の遺物

この時期の遺物は調査区内各所から出土したもので、１地点からまとまって出土したものはない。

１～８は同じような調整・手法を持つもので、２以外は同一個体の可能性もある。口縁部はやや外反して開く。口縁部外面は凹線状の強いナデによって区画されている。口縁部内面にはヘラ状工具の押し引きによる施文がある。５では、頸部付近から体部にかけて、口縁部内面と同様な工具による縦方向の施文がある。３あるいは８のような施文となるのであろう。そして体部のどこかに１のような瘤状で中央を窪めた浮文が施されるものと考えられる。これらは、１のみを見ると縄文時代後期前葉頃のものともいえるが、１～８までを総合すると、晩期末、あるいは弥生時代前期に併行する時期の土器として評価できる。

9・10は晩期中頃のもの。9は波状口縁をなす浅鉢、10は体部片で下半にはケズリが施される。

11～27は突帯文系の土器。外面には二枚貝あるいは粗いハケ状工具による条痕文が見られる。18は突帯上に押し引きで二枚貝条痕による施文が見られる。18は馬見塚式併行、その他は五貫森式から馬見塚式併行であろう。

28～31は石器。29・30はサヌカイト製、28・31はチャート製である。28は成形痕が無く、剥片とせざるを得ないが、ここから石鏃を形作る可能性もある。29は五角形状の石鏃。30・31は楔形石器である。

b　弥生時代の遺物

溝ＳＤ505出土土器(32～34)　32は壺。面をなす口縁端部の外面に刻目文が施される。口縁端部内面には瘤状突起が３個残っている。33は鉢。内外面ともにハケメ調整で、口縁端部には刻目文がある。34は甕で、口縁端部は面をなし、下部に刻目がある。弥生時代中期中葉頃のものであろう。

落ち込みＳＺ523出土土器(35・36)　遺構は新しい時期のものであり、弥生土器は混入である。35は壺。36は甕で、口縁部下に櫛描の横線文が４条見られる。前期の様相を残すが、中期前葉頃のものと考えられる。

溝ＳＤ508出土土器(37)　図示できるのは37の壺のみである。体部片で、３本１単位の複合櫛描文が施されている。

溝ＳＤ518出土土器(38)　甕を図示した（38）。短い口縁部が大きく開くもので、口縁端部下部には刻目が施されている。

落ち込みＳＺ515出土土器(39)　ここからは、口縁部を欠損した壺（39）が1個体分まとまって出土している。39は棒状工具の先端を刺突して区画を作り出し、その中をハケ状工具による条痕やミガキで充填している。体部は下半で明確な屈曲をもっている。弥生時代中期前葉に相当するものであろう。

包含層出土遺物(40～51)　遺構に伴わないものを「包含層」として一括する。

40・41・49・50は甕。42～48は壺である。43は受口状の口縁部で、外面には２単位の波状文を施し、さらに櫛状工具の刺突がある棒状浮文を貼り付けている。44も同様なもので、これには浮文が２単位ある。46と47は同一個体と考えられるもので、ヘラ描沈線間を縄文とミガキで充填している。

51は有茎の石鏃で、サヌカイト製である。

（伊藤）

c　古墳時代前期の遺物

竪穴住居ＳＨ509出土土器(52・53)　Ｓ字状口縁台付甕(52)が出土している。53は弥生時代中期の広口壺体部片であり、混入資料である。外面には、縄文が施文されている。

落ち込みＳＺ514出土土器(54)　小形器台(54)が出土している。

竪穴住居ＳＨ530出土遺物(55～58)　土器では小形器台(55)・高杯(56・57)があり、その他に瑪瑙原石が出土している。

瑪瑙原石(58)は貯蔵穴の埋土上面で出土しており、当竪穴住居に帰属する遺物と考えられる。原石の周囲を、交互の面から約1㎝単位で打ち欠いている。

55には、受部内面と割れ口に水銀朱と考えられる発色の良い赤色顔料が付着している。外面には煤が付着しており、被熱を受けているものとみられる。

d 40pit 1出土土器(59)　壺(59)が出土している。

竪穴住居ＳＨ531出土土器(60・61)　Ｓ字状口縁台付甕(60・61)が出土している。60は口縁端部上面が強くなでられているものであり、61は口縁端部が外面に拡張するタイプのものである。

包含層出土遺物(62～67)　遺構に伴わない当該時期の遺物を包含層遺物として報告する。壺(62・63・66)、高杯(64)、小形器台(65)、石杵(67)が出土している。

62は口縁端部に押し引き施文が見られ、Ｓ字状口縁台付甕の仕上げに類似する。65は横方向のヘラミガキで仕上げられていることや透孔の径が小さいことから、近畿地方からの搬入品である可能性が考えられる。

石杵(67)は粗製の敲石であり、周囲と平坦な面に敲打痕が残る。一部の石材の隙間にわずかに水銀朱が残存している。

環濠ＳＤ532最下層出土土器(68～77)　壺(73～75)、鉢(72)、甕(68～71・77)、高杯(76)が出土している。

壺には、加飾されている73・74とそうでない75がある。73・74の加飾には、いずれも櫛状工具が使用されている。73はいわゆるパレス壺であり、外面には赤彩が施されている。

72は外面がヘラミガキで仕上げられており、口縁部が開いていることから鉢と考えられる。

甕には、Ｓ字状口縁台付甕(68～67)のほかに71と脚台部(77)がある。71は口縁部が短く、端部が外側に向かって強くヨコナデされている。器壁はやや薄く、頸部の屈曲は弱い。脚台部(77)は器高が低く、折り返しが無い。

高杯(76)は、中実で細い脚柱をもつ。杯部の器壁は薄く、内彎気味である。

環濠ＳＤ532下層出土土器(78～134)　小形器台(78～80)、高杯(81～89)、小形鉢(90)、手焙形土器(91)、壺(92～115)、甕(116～134)などが出土している。

小形器台(78・79)は、中空の脚台部に受部を載せる作りをしている。80は、65と同様に近畿地方からの搬入品の可能性が高い。脚裾には、3方向に欠損が見られ、3方向の透孔に対応している。

高杯は有稜高杯(81・82・89)と椀形高杯(84)がある。いずれも縦方向のヘラミガキで仕上げられている。脚部は屈折する83は、布留式の影響を受けているものである。その他は、脚柱部からそのまま広がるタイプであり、3方向に透孔が開けられている。

90はヘラミガキで仕上げられており、小形鉢と考えられる。器壁は厚い。

手焙形土器(91)はS字状口縁台付甕と同様の口縁部をもつ鉢に、覆部を付加して作られている。体部の外面調整は、Ｓ字状口縁台付甕に独特のハケメを用いており、ナナメハケ＋ヨコハケはＳ字状口縁台付甕Ａ類までの特徴と共通する。また、口縁部に押し引き施文を施す点でもＳ字状口縁台付甕Ａ類[1]と共通する。ただ、口縁部に沈線が施文される点は近江系土器と共通する特徴でもある。

壺には、広口壺(96～98・103～105)と直口壺(93～95)と中形壺(92)がある。直口壺(94)は、外面がヘラケズリされている。95の外面肩部には、籠目状の編み物の痕跡が残る。広口壺は口縁端部外面に面をもつタイプであり、このうち97・105はさらに口縁を付加した二重口縁を呈している。97は円形浮文と波状文によって加飾されている。98はいわゆる柳ヶ坪形壺であり、口縁部内面の羽状文は櫛状工具よる施文である。101の押し引き施文も同様に櫛状工具が用いられている。99・104はＳ字状口縁台付甕

に類似する胎土が用いられている。特に99の体部外面のハケメ調整は、S字状口縁台付甕A類と共通している。99は口縁部が全周打ち欠かれている。104の体部には円形に焼成後穿孔されている。102・104の底部には砂の充填が施されている。

106は胎土が粗く、形状も肩を張ることから異質である。菊川式[2]に類似すると考えられる。

107～114は、胎土が粗く、重量もとても軽いことから、異質さが際立っている。厳密には、肩部の円形施文が円形浮文であるかそれとも竹管文によるものかの2種類に分けることができ、駿河・東遠江からの搬入品と考えられる。これらは大廓式の壺と称されているものに相当する[3]。なお、この異質な胎土の土器は一連の壺以外の器種を確認することができなかった。115も縄文が施文されているが、上記の大廓式土器とは異なる。胎土も粗く、駿河よりもさらに東部からの搬入品と考えられる。

甕にはS字状口縁台付甕(120～134)、く字状口縁甕(116・117・119)、布留形甕(118)がある。S字状口縁台付甕はA類からD類までが出土しているが、主体を占めているのは口縁部が立ち上がり端部に内傾する面をもつ類であり、B類に相当する。脚台部は126以外は全て折り返しのあるS字状口縁台付甕の脚台部である。127～133は底部に砂の充填が見られる。く字状口縁甕は頸部の屈曲のゆるやかな116・117と器壁が厚く、ハケメ調整の目立つ119がある。布留形甕(118)は内面がヘラケズリされているが、頸部までは及んでいない。

環濠SD532上層出土土器(135～149)　小形器台(135)、小形壺(136)、器台(137)、壺(143～148)、甕(138～142)、敲石(149)が出土している。

小形器台(135)は脚部接合面に工具痕がネガで残っている。脚は中実となるものが接合する。

小形壺(136)は粗製化しつつある段階の土器であり、器壁は比較的薄く成形されているがナデで仕上げられている。

器台(137)は、脚部が貫通している。受部内面の器壁が剥離しているために、本来は貫通していなかった可能性もある。貫通している空洞は、軸芯を用いているかのようにきれいに空いている。これは、脚製作時に基軸を用いたために生じた空洞と考えられる。

壺には、直口壺(143)、広口壺(144～146)、底部(147・148)がある。144は口縁部が折り返して成形されている。145は竹管文＋波状文で加飾されている。148は底部内面に砂が充填されている。

甕には、S字状口縁台付甕(138～141)と布留形甕(142)がある。S字状口縁台付甕(139・140)は口縁部が立ち上がり、端部内側に面をもつB類である。外面のヨコハケは、頸部から離れている。脚台部(141)は器壁が厚くなっている。布留形甕(142)は器壁が厚い。敲石(149)は、両端部に敲打痕が明瞭に残る。

環濠SD532出土土器(150～157)　層位を把握する以前に採り上げたものである。壺(150・151・153)と甕(152・154～157)がある。

壺には二重口縁壺(150)、加飾壺(151)、および底部(153)がある。150は器壁が厚い。擬口縁の痕跡を明瞭に残さず内面のヨコナデが強いことから、一気に作り上げていると考えられる。153は底部外面に木葉痕が残る。

甕にはS字状口縁台付甕の脚台(154)、く字状口縁甕(157)、タタキ甕(152)、布留形甕(156)などがある。154は器壁が厚く、折り返しの幅も広い。157の内面は頸部まで強い工具ナデで仕上げられており、頸部は鋭利に折れ曲がる。152は外面に粗いタタキ痕跡が残る。底部は厚く、それ自身で正立する。156は内面がヘラケズリされているが、頸部までは及んでいない。155も台付甕の脚台であるが、磨滅が著しい。　(川崎)

d　古墳時代後期以降の遺物

竪穴住居SH511出土土器(158～159)　須恵器・土師器がある。158は須恵器杯蓋で、田辺昭三氏による陶邑編年(以下、陶邑田辺編年)[4]のTK43型式に併行するものであろう。159は土師器椀である。

竪穴住居SH533出土土器(160～165)　160は土錘で、球形をなす。161は須恵器で、杯蓋としたが身の可能性もある。陶邑田辺編年のTK217型式に併行する。162～165は土師器。162は高杯の脚柱部で、短脚とみてよい。163は杯で暗文は見られない。164は皿で、斜放射状の暗文がある。165は小形の甕。これ

らは飛鳥・藤原京および平城京における編年[5](以下、「都城編年」）の平城Ⅲ以前と考えられる。

竪穴住居SH536出土土器(166)　166は須恵器で杯身と考えられる。奈良時代前半以前のものであろう。

竪穴住居ＳＨ537出土土器(167・168)　167は須恵器杯蓋、168は土師器甕である。都城編年の飛鳥Ⅳ前後であろう。

井戸ＳＥ522出土土器(169～171)　169は土師器杯、170・171は土師器甕である。この他に、灰釉陶器と考えられる破片も出土している。概ね平安時代中葉頃のものであろう。

各ピット出土土器(172～175)　Ｂ２区検出のピット出土土器のうち、図下可能なものである。173は掘立柱建物ＳＢ577を構成するピットから出土した。須恵器杯身で都城編年の飛鳥Ⅱ～平城Ⅰの範疇であろう。174は土師器甕、175は土師器鉢で、いずれも古墳時代後期のものと考えられる。

e　中世の遺物

土坑SK507出土遺物(176～195)　この遺構からは土器類がまとまって出土している。

176～179は土師器小皿。176・177は南伊勢系統で、『嶋抜』Ⅱにおける分類[6]（以下、中世土器類の分類はこの「島貫分類」に従う）の小皿ｆ、178・179は島貫分類の小皿ａ３である。180は土師器皿ａ３、181は皿ｂ１である。

182は白磁小皿で、内面に沈線がめぐる。183～185は土師質土器。183・184は小皿b1、185は小形壺である。

186は瓦器椀で、外面に4単位のヘラミガキを施す。内面のミガキは緻密で、底部内面の連結輪状文は７個の輪で一周している。山田猛氏による伊賀の瓦器編年（以下、「山田編年」と呼称）[7]のⅡ段階第２型式に相当する。

187～191は陶器椀（山茶椀、以下、とくに断らない限り「陶器椀」と呼称）類で、187～190は小椀の範疇、191は椀である。いずれも尾張型の範疇で、藤澤良祐氏による山茶椀編年（以下、「藤澤編年」と呼称）[8]の４型式に相当しよう。

192は砥石、193は土錘である。194・195は南伊勢系統の甕である。

これらの遺物は島貫Ｆ３期に相当し、そのなかでも前半期の良好な資料といえる。

井戸ＳＥ 513出土土器(196～201)　196は土師器小皿で、小皿ａ３に相当する。197は土師質土器皿。198は瓦器椀で、山田編年のⅡ段階第２型式に相当する。199は陶器椀。200・201は土師器甕である。島貫Ｆ３期に相当する。

f　Ｂ２区出土のその他の遺物

202～209は遺構に伴わない遺物で、所属時期の明確にし難いものである。

202～204は砥石。204は軽石製で、後述の資料と比較すると、弥生時代中期頃のものかも知れない。

205～208は土錘。管状のものと球状のものがある。209は結晶片岩を円棒状に整形し、両端に横線状の切り込みを入れたもので、石錘の一種かと考えられる。時期的には古墳時代以前のものであろう。（伊藤）

2　Ｂ４区出土の遺物

a　弥生時代の遺物

包含層出土土器(210・215～218)　210は甕。口縁端部には刻目がある。頸部下には半裁竹管による横線文が２単位分施されている。いわゆる亜流遠賀川系土器で、弥生時代前期後葉に相当する。

215は壺か。ハケ状工具による条痕と沈線が施されている。後述の362と類似したものと考えられる。216は壺の体部片。3本を1単位とする櫛状工具による3単位の複合櫛描文が施されている。218は外面に流水文と見られる施文がある。

周溝SX496出土土器(211～213)　211・212は甕。いずれも口縁端部下部に刻目が施されている。213は壺の体部片で、沈線間を縄文で充填している。弥生時代中期前葉頃のものであろう。

周溝ＳＸ496・497 出土土器(214)　214は壺で、SX496とSX497の交点付近で出土したものである。受口状を呈し、口縁端部外面に刻目、口縁部から頸部にかけての外面に櫛描の波状文と横線文を施す。（伊藤）

b　古墳時代前期の遺物

環濠ＳＤ572出土土器(221～272)　器台(221)、高杯(222～227・230)、脚付土器(234～237)、壺(240～253)、甕(254～269)、砥石(270～272)などが出土している。

器台(221)は脚部に櫛描直線文＋貝殻腹縁による刺突で加飾されている。

高杯には有稜高杯(222)などがある。224～227の脚部は、有稜高杯の脚部と考えられる。いずれも櫛描直線文が加飾されており、３方向に透孔が空けられている。226は３方向透孔に加えて上段１ヶ所に透孔が穿たれており２段の透孔になっている。脚の内面には絞り痕が残る。223は稜が目立たず、杯部上半部が短くわずかに外反する。器壁調整は外面が縦方向のヘラミガキで仕上げられているが、稜がその単位にならずに杯部下半部の半ばで単位が見られる。内面は横方向に短く曲線的なヘラミガキで仕上げられている。器形・手法的に西遠江周辺からの搬入品と考えられるが、胎土は極端に異質なものではない。230は学史的にワイングラス形高杯と称されることもあるが、以下の脚付土器の一群に含まれるものであろう。

壺には、中形壺(240・242・243・252)と大形壺(244～251・253)などがある。241はやや小振りの壺で器壁が厚い。外面にはかすかに水銀朱が付着している。中形壺はいずれも器壁が厚い。大形壺には広口壺(244～247)と直口壺(248～251)などがある。244の口縁部には、Ｓ字状口縁台付甕と同様の押し引き施文が見られる。247の体部上半部には直線文と羽状文が交互に施されている。直口壺はやや小振りの248が体部外面もハケメ調整で仕上げられている。249～251は口縁端部に内傾する面をもつ。251は底部が厚く小さい。底部外面は磨滅している。体部内面はナデで、外面はヘラミガキで丁寧に仕上げられている。

甕はバリエーションに富む。底部形態では、255が平底を呈するほかは、脚台を持つものが量的に圧倒する。よって、底部が欠損している個体が多いが、大部分の甕は台付甕と予想される。Ｓ字状口縁台付甕と確実にいうことができるのは、脚台(269)のみである。269は折り返し部が欠損しており、底部内外面には砂が充填されている。その他の脚台部は直線的でハケメの目立つ(262～264)と外反気味でハケメの目立たない(261・265～267)などがある。いずれの器壁も厚い。口縁部では、く字状を呈する甕(254～256)と受口状を呈する甕(257～260)に分けられる。255はいわゆるＶ様式系甕である。254は外面と口縁部内面にハケメ調整がよく残る。頸部はゆるやかで、口縁端部にわずかに面を持つ。

256は口縁部が長く、内彎している、類例の少ない甕である。強い工具ナデにより薄く成形されている。劣化が著しい。受口状口縁甕は一見まとまりのない土器群に見えるが、決してそうではなく、それぞれに細部で共通点がある。器壁は厚い257・259と薄い258・260がある。口縁部に注目すると、257・258は口縁部内面が外側に広がり端部は外面に面をもつ。259・260は口縁部が立ち上がり端部が上方を向く。外面調整では257・259がヨコハケ仕上げという点で共通する。258・259は口縁部に刺突が施文される点で共通する。258・260は口縁部と肩部の装飾および頸部直下のヨコハケという文様構成では共通するが、厳密には258は板状工具により施文されており、260はハケメ工具で施文されている。そして、刺突の施文方法も260の場合は刺突（工具を当てる）ではなく押し引いている。260は器壁が薄く、体部下半に擬口縁の痕跡を明瞭に残す。また、体部の亀裂はナナメ方向に走っており、タタキ出しによる成形が彷彿とされる。頸部はゆるやかに屈曲し、口縁部は直立に近い。口縁端部は水平に近い角度で丸く収まる。底部内面には砂を充填している可能性がある。そして、器壁調整にはＳ字状口縁台付甕に独特のハケメを用いている。ナナメハケ＋ヨコハケ＋押し引き施文という次段階のＳ字状口縁台付甕と共通する施文を用いており、次段階に肩部の押し引き施文が省略されると考えれば、この土器はＳ字状口縁台付甕の前身に相当すると考えられる。脚台部は脚裾が欠損しているが、欠損した端部が磨滅していることから、欠損後も使用されたと考えられる。

砥石は砂岩製の271と軽石製の270・272がある。いずれも面単位の研磨痕が見られる。

落ち込みＳＺ575出土土器(273～284)　小形器台(273・274)、高杯(275)、壺(276)、甕(277～284)

が出土している。小形器台(273・274)の受部内面には水銀朱と考えられる発色の良い赤色顔料が、外面には煤が付着している。

高杯(275)は有稜高杯であるが、杯部の稜が目立たない。脚は脚柱上部から外反が始まっており、透孔も脚上部に近い位置に開けられている。

壺(276)はS字状口縁台付甕に類似する胎土を有する。球胴状の体部に、外面に大きく開く口縁部が付加されている。

甕は全てS字状口縁台付甕である。いずれも口縁部が直立し端部に内傾した面をもつ。体部外面は左上がりのハケメ+左下がりのハケメ+ヨコハケという定型化した調整が施されている。底部にはいずれも砂が充填されている。脚裾部は282が折り返しをしきっていないが、278・281は折り返している。これらはS字状口縁台付甕B類に相当する要素であり、極めて一括性の高い資料といえる。細部を検討すると、283は口縁部に押し引き施文が残っている段階の土器である。283・279・280・284は頸部内面にハケメが見られるが、281ではハケメが形骸化して板ナデに変化している。277は底部に焼成後穿孔されている。また、脚裾部は打ち欠かれている。

包含層出土土器(288～291)　遺構に伴わないものを包含層出土土器として報告する。図示できたのは甕のみである。288はく字状口縁甕で、頸部がゆるやかに屈曲し口縁端部に面をもつ。291は器壁の厚い受口状口縁甕で、頸部が鋭利に屈曲し口縁部は外側に向かって広がる。290はS字状口縁台付甕の脚台部で器壁が厚く、粗雑である。

水田遺構SZ 504 2面下出土土器(292～296)

甕(292～296)が出土している。295以外はS字状口縁台付甕である。292・293・294は口縁部が外反し、端部が丸く収まるようになる。294の頸部には板ナデが見られるが、他2点ではそれすら見られなくなる。外面調整は定型化したナナメ2方向のハケメと頸部から離れたヨコハケで構成されている。292は小形甕であるためか、脚裾部の押し返しが無い。296の脚台部は器壁が厚く、粗雑な印象を受ける。295は口縁部と外面がヘラミガキで仕上げられているが、外面には煤が付着しており被熱を受けている。

水田遺構SZ 504 出土土器(297～324)　水田面を認識する以前に出土したものであるが、概ね2・3面に該当する土器群である。脚付土器(297・298)、高杯(299～301)、小形壺(315)、壺(302～303・324)、甕(304～314・316～324)が出土している。

297はいわゆるワイングラス形高杯である。298は器高が低く脚付土器の脚部と考えられる。299は小形の脚部で外面に赤彩が施されている。300・301は有稜高杯である。300は杯部上半部が短く外反する。301は杯部が大きく内弯し、口縁端部に内傾する面をもつ。脚部は3方向の透孔に加え1ヶ所に透孔が開けられて2段の透孔となるが、比較的近接した高さに開けられている。

小形壺(315)は器壁が厚いが、外面下半部にはヘラケズリが見られる。

壺(302・303)は二重口縁壺であり、302は欠損しているが303と同様に頸部が直立するタイプの可能性が高い。302は口縁部内面が繊細な櫛描波状文により、外面は竹管文により加飾されている。302には焼成後の可能性が高いと思われる穿孔を2ヶ所確認することが出来た。2ヶ所の孔は類似する場所に開けられているが、各土器片が接合しないことから補修孔と判断するのは困難である。直口壺と予想される324は口縁端部が打ち欠かれている。

甕には、S字状口縁台付甕(316～323)、タタキ甕(309～311)、布留形甕(308)などがある。

S字状口縁台付甕は316・318のみ器壁が薄く、その他は器壁が厚くなっている。319～323は体部外面のヨコハケが欠落しており、その単位も粗く粗雑になっている。323に至っては、頸部外面の沈線も欠落し、頸部下の一般的に左下がりのハケメが放射状に見られる。脚台部(316)は脚裾部が磨滅していることから、欠損後も使用されていたと考えられる。318の底部内面には砂が充填されている。

タタキ甕は309・311にやや粗めの左上がりのタタキメが見られる。内面はヘラケズリされているが、頸部までは及んでいない。311は体部の器壁が薄く仕上げられており、タタキ後に細かいハケメが見られる。310の体部外面には細かい左下がりのタタキメが見られる。内面のハケメ調整は頸部まで及ばず、器壁も厚い。

布留形甕(308)は、口縁端部はさほど肥厚せず、

外側に向かってわずかに張り出す。内面のヘラケズリは肩部付近までしか及んでいない。体部外面のハケメ調整にはヨコハケが入る。なお、この土器には図化できなかった底部から体部下半部にかけての細片があり、底部付近の外面は摩滅している。

304～307は内面にヘラケズリが見られる。314は径が小さいことと、立ち上がり方が強いことから甕に含めた。（川崎）

c　奈良・平安時代の遺物

水田遺構ＳＺ504出土土器(325～331)　ＳＺ504の上層から出土したものをここに含めた。ただし、第Ⅲ章で見たように、ＳＺ504は奈良時代には埋没していることから、ここで触れる遺物は確認できなかった何らかの遺構に伴っていたのか、あるいはＳＺ504の上部にできた落ち込み状地に含まれていた遺物ということになり、厳密な意味での水田の時期を示す遺物ではない。

325は土師器蓋で、外面には粗雑なミガキを施す。326・327は須恵器。326は杯蓋としたが、杯身かも知れない。これらは都城編年の平城Ⅵから平安Ⅰに併行するものであろう。

328は土錘。329は叩石で、小口部分に敲打痕がある。

330は鍔付の円筒形土器で、甑の一種であろうか。斎宮跡でいくつかの類例が知られる。331は片刃の鉄斧で、鋳造製品と考えられる。遺存状況が劣悪なため、明確なことは言えないが、装着部分はソケット式となり、刃部側が欠損しているものと思われる。

落ち込みＳＺ502出土土器(334～358)　全体形を明確にできなかったために落ち込み遺構としたが、本来は竪穴住居ないしは土坑と考えられる遺構である。遺物は極めてよくまとまっており、一括遺物として扱うことができる一群である。

334～337は小形の杯、340～343はやや大形の杯である。ほぼ全面をミガキ調整するものが多く、一部には口縁部内側の斜放射状暗文や底部内面の螺旋状暗文が見られる。

338は土師器皿で、内面には崩れた螺旋状暗文が見られる。339は土師器蓋で、内外面にはミガキが施されている。

344～347・356は須恵器。344は、口縁部の長い蓋と考えた。345は蓋、346・347は杯身である。356は壺で、外面には釉をハケ塗りしたような痕跡も見られる。

348～350は土師器で鉢と考えられる。直線的な口縁部のもの(348～350)と、屈曲して開く口縁部のもの(355)がある。

351～354は土師器甕。頸部内面は丸く、口縁端部はやや内側に突出し、丸め込んで収める形態をなす。354を見ると、体部下半には内外面ともにケズリが認められ、外面のものは横方向に施されている。

357は志摩式製塩土器。製塩土器片はこの他にも図化しなかった破片があり、少なくとも３個体分はあると考えられる。358は土錘である。

これらは都城編年の平城Ⅵ～平安Ⅰに併行する時期のものと考えられる。

墨書土器「田井」　落ち込みSZ502からは、3点の墨書土器が出土している。いずれも「田井」と書かれたと考えられるものである。

337は口縁部および底部の2カ所に墨書が見られる。口縁部外面は横方向に書かれており、おそらく左手で口縁部を持った状態で書かれたのであろう。二つの墨書は明らかに同筆である。

334も口縁部と底部の2カ所に墨書が見られるが、底部のものは不鮮明で判然としない。口縁部の墨書は337と同様横方向に書かれており、「田」と読めるが、その下（土器では左側）は欠けていて不明である。337に書かれたものを参考とすれば、334に書かれた墨書はいずれも「田井」である可能性が高い。

342は口縁部の1カ所に墨書が見られる。先の2例とは異なり、これは縦に「田井」と書かれているものである。（伊藤）

3　Ｂ５区出土の遺物

a　弥生時代の遺物

竪穴住居ＳＨ569出土土器(359～371)　359は壺。口縁端部は下へわずかに拡張し、その部分に押圧による刻目が施される。360も壺。剥離のため明瞭ではないが、口縁端部には刻目が見られる。

361は壺の体部。上半部を櫛描文部分とミガキ部分

を交互に配して6分割し、櫛描文部分には櫛描弧文を施している。体部下半はミガキが施されている。367も基本的には同様のものである。

362も壺の体部。付加沈線によって体部上半を5分割し、その間を櫛描文とミガキで交互に充填している。体部下半はミガキが施されている。

363・364は二枚貝ないしはハケ状工具による条痕文が見られる。他の土器よりも時期的には古いものであり、混入の可能性がある。

365は壺の体部片。2単位の櫛描文が3対用いられている複合櫛描文である。

366は高杯。外面はミガキが施されている。

368～370は甕。368は体部からあまり締まらない頸部に至り、そこから短く外反する口縁部に至る。口縁端部外面には刻目が施される。369も口縁端部に刻目を施すものである。

これらは、東海地方でいう貝田町式の範疇で、その中でもやや古手のものに相当する。石黒立人氏による朝日遺跡編年[9]の朝日Ⅳ期－1前後かと考えられる。

B5区包含層出土土器(372～380)　遺構に伴わない弥生時代相当の土器を一括する。

372は甕ないしは鉢。接合しない2片があり、それぞれの頸部付近に瘤状突起がある。前期の遠賀川系統の土器と考えられるが、「亜流遠賀川」ではない。373は甕の底部で、中央に焼成後の穿孔がある。374・375は甕の口縁部で、両者は同一個体の可能性がある。口縁部を外側に折り返して拡張し、上下に刻目を入れる。376・377も甕で、377はやや垂下する口縁部の下に押し引き状の刻目を入れる。いずれも中期前半頃か。378・379は壺の体部片で、沈線間をミガキと縄文で充填する。380は壺で拡張垂下口縁をなし、口縁部外面には波状文、内面には櫛描刺突文と瘤状浮文および竹管文を施す。　(伊藤)

b　古墳時代前期の遺物

土坑SK564出土土器(381・382)　壺(382)と小形甕(381)が出土している。

壺(382)はいわゆるパレス壺を模している。口縁端部は擬凹線と棒状浮文で、内面は波状文で加飾されている。なお、赤彩はされていない。

小形甕(381)は口縁部が立ち上がる受口状口縁甕である。口縁部外面に丸みがあり、口縁部と肩部には櫛状工具による刺突が施されている。

竪穴住居SH565出土土器(383・384)　甕(383・384)が出土している。

383は台付甕の脚台部であるが、大廓式の壺に類似する胎土である。細かいハケメ痕が見られる。384は頸部がゆるやかに屈曲する。

竪穴住居SH552出土土器(385・386)　壺(386)と小形甕(385)が出土している。

広口壺(386)の頸部には、突帯が巡っている。口縁端部を除く内面は色調が変色しており、内容物の影響による痕跡と考えられる。

385は小形のS字状口縁台付甕であり、口縁部が外側に広がり、端部は上方に面をもつ。

竪穴住居SH553出土土器(387・388)　壺(387)と甕(388)が出土している。

387はいわゆる伊勢型二重口縁壺[10]であり、器壁が薄い精製品である。口縁部には板状工具による刺突が巡っている。

388のS字状口縁台付甕は口縁部が外側に広がっている。端部の鋭利な面はなくなり、外向きに丸く収められている。

竪穴住居SH570出土土器(389～391)　甕(389)、高杯(390)、小形有段鉢(391)が出土している。

389のく字状口縁甕で頸部が鋭利に屈曲する。

390は椀形高杯と考えられる。

391の小形有段鉢は器壁が薄い精製品である。一部に横方向のヘラミガキの痕跡が残存している。

溝SD544出土土器(392～396)　小形器台(392)、高杯(393)、壺(394・395)、甕(396)が出土している。

392は中空の小形器台であり、内外面に赤彩が施されている。

393は高杯の脚部と考えられる。短脚で脚上部から外反が始まっている。

壺(394)は387と同様に伊勢型二重口縁壺である。外面には赤彩が施されている。395は櫛描直線文・廉状文風の押し引き施文・波状文・板状工具による羽状文の加飾が見られる。加飾は頸部からはじまり、下方へと順番に施されている。

396はS字状口縁台付甕であり、口縁部が外側に

大きく広がるC類である。端部は丸く収められている。口縁部外面にも強いヨコナデが見られる。

包含層出土土器(397～416)　遺構に伴わない当該時期相当の土器を包含層出土土器として報告する。小形器台(397)、小形壺(412)、壺(398～410・415)、甕(414・416)、ミニチュア土器(413)などが出土している。

397は中空の小形器台で受部は椀状を呈する。内外面が赤彩されている。

412は体部が扁平な器形を呈しており、器壁が厚い。体部外面の下半部にはヘラケズリが見られる。

398は頸部が直立するタイプの二重口縁壺である。部分的に赤彩が施されている。399はいわゆるパレス壺である。板状工具による加飾に加え、山形文と刺突部分の下方に赤彩が施されている。広口壺(400)は口縁端部に内傾する面をもつ。口縁部外面には繊細な櫛描波状文が、内面には外面同様の櫛描波状文に加え竹管文が配されている。402は板状工具により、直線文と波状文が頸部から交互に施文されている。頸部には突帯が巡っている。401・415は口縁端部がさほど発達しない広口壺である。415の口縁端部内外面には、板状工具による刺突が施されている。

409・410は口縁部を折り返すことで二重口縁を呈している。

403～408は搬入品であり、大廓式土器である。口縁部は折り返し口縁を有する403・404と丸く収められる405の2種類が見られる。口縁部内面には縄文が施文されており、404には竹管文、405には円形浮文も見られる。406は屈曲のゆるやかな頸部であり、外面にはS字状結節文の可能性がある縄文が施文されている。407・408の肩部には縄文と円形浮文が施されている。

416はS字状口縁台付甕であり、口縁部が立ち上がり端部に鋭利な面をもつことからA類に相当する。口縁部には押し引き施文が施されている。外面はヨコハケの後で下方の左上がりのハケメが見られる。体部内面にもハケメが見られる。414は台付甕の底部を打ち欠いている。

411は高杯の脚部と同様の成形である。器形そのものだけでなく、ハケメ調整で仕上げられている点や透孔が空けられていない点からも違和感のある個体である。

ミニチュア土器(413)は手捏ねのものである。脚台が付いている。

環濠SD572出土遺物(417～527)　甕(417・512)は弥生時代中期の土器であり、混入の可能性がある。体部はハケメ調整で仕上げられており、口縁端部は刻目が施されている。

壺(418～432・436～438)、鉢(439)、手焙形土器(440)、脚付土器(445～470)、高杯(471～498)、甕(499～527)、石製品(441～444)などが出土している。

中形壺(418～426)と大形壺(427～432・436～438)がある。424・425は肩部に貝殻腹縁による刺突で装飾されている。436は頸部が直立するタイプの二重口縁壺であり、一次口縁部を境に胎土が変化している。擬口縁部に立ち上げて面を持たせていないこと外面が横方向のヘラミガキで仕上げられていることから、当地で見られる一般的な二重口縁壺のあり方とは異なる。437は438と同様に口縁端部が上下に拡張された面をもつ広口壺であるか、あるいはその上に二次口縁が付加される可能性がある。429・432は中形壺426・430のように口縁部が内彎するが、端部外面にヨコナデを巡らせて変化をつけている。429は、刺突文の位置も外面でなく上面である。428は折り返し口縁を有する。胎土の肌理が細かく、大きさもさほど大きなものではないと考えられる。類例の乏しい土器であるが、口縁部を折り返すという手法から、遠江以東からの搬入品である可能性を考えておく。

底部(433～435)は、壺(423)あるいは甕(507)に相当するのか判断が難しい。

439は脚台のつく鉢である。

440は受口状口縁を有する手焙形土器である。覆部は口縁部内面から取り付けられている。覆部は短めであり器高も低い。体部外面には櫛描直線文と刺突文が交互に配置され、下半部には突帯が貼り付けられている。突帯の上には沈線が巡り、更に板状工具による刺突文で装飾される。口縁部の刺突は円管状工具を土器に対して平行に近い角度で当てており、端部が円管状を呈していることが知られる。体部内面の一部と覆部の内面端部は薄く汚れている。

脚付土器はいずれも精製品であり、確実な個体は

いずれも短脚である。445は櫛描直線文と貝殻腹縁による刺突で加飾された短脚が付加されている。全体に縦方向のヘラミガキで仕上げられており精製品である。体部には焼成後穿孔されている。

有稜高杯は杯部上半部が短く外反するタイプ(471～475・481～482)から杯部上半部が伸び直線上になるタイプ(483～486)、そして内彎するようになるタイプ(487～498)まで存在する。口縁端部は外面に面を持つものから上方に面をもつようになり、その後内傾するようになる。脚部は483以外が長脚であり、脚裾部に向かってゆるやかに外反するタイプ(482・489～490・492～496)、直線的に開くタイプ(487)、内彎するタイプ(497)がある。櫛描直線文を複数回巡らせ、3方向に透孔を空ける個体が多い。一部に3方向の透孔の上段1ヶ所に透孔を空け、2段透としている個体(477・488・490)も見られる。なお、497の場合は上段に2ヶ所の透孔が空けられている。478・479は脚付土器と同様に櫛描直線文と貝殻腹縁による刺突が交互に配されている。493・495・496は櫛描直線文の装飾がなされておらず、493は透孔すら空けられていない。異質であり、高杯ではなく器台の可能性もあろう。

甕には受口状口縁甕(499～506・510～511)・S字状口縁台付甕(525)・く字状口縁甕(507～509・512～515)がある。511は口縁部の3ヶ所に内面から打ち欠きが見られる。525は頸部がしっかりと屈曲されており、口縁部が直立し端部には内傾するシャープな面をもつS字状口縁台付甕である。外面調整は左上がりのハケメ＋ヨコハケで、定型化する以前のタイプであり、口縁部外面には押し引き施文が施されている。A類に相当する。脚裾部はわずかに内側に折り返されている。底部内面には砂が充填されている。脚台部は527が脚裾部を折り返すS字状口縁台付甕であり、その他は折り返しのないタイプである。523は底部内面に砂が充填されている。502・503・506は器壁が薄く、頸部の屈曲がゆるやかである。口縁部は直立し、強いヨコナデが巡っている。櫛状工具により刺突文と直線文が配される。505・511は口縁部が内彎する。刺突文や直線文は板状工具による。499・500・501は口縁部が直立するが、ヨコナデが強くないためにやや丸みがある。刺突文は板状工具と考えられるが、505とは角度が異なり、木口の角を当てている。く字状口縁甕は口縁部の形態が多様であるが、514以外はハケメ調整で仕上げられる。515は関東方面からの搬入品の可能性がある。脚台部は直線的な520～524と、内彎する516～518・526などがある。

441は平らな2面と端部の一方を敲部として利用している。442～444は砥石であるが、442・443は軽石である。特に442は研磨によって窪むほど、よく使い込まれている。444は平らに研磨している。

環濠SD532最下層出土遺物(528～573)　現地調査においては、B5区のSD532最下層・下層はB2区SD532の最下層に相当すると判断した(第Ⅲ章参照)。遺物の内容を詳細に検討した結果、B5区SD532下層は、上層遺物を含むものの基本的にはB5区SD532最下層と併せてB2区SD532最下層に相当すると考えられた。

籠目土器(534)、小形坩(535・537・538)、器台(541)、小形器台(550)、高杯(551)、壺(539・540・542～549・555)、手焙形土器(553・554)、甕(559・560・562～573)、土製品(528～530)、ミニチュア土器(536)、石製品(531～533)などが出土している。

534は籠目土器の口縁部であり、外面には籠目の痕跡がよく残っている。

器台(541)の口縁部外面には擬凹線が巡っている。外面の曲線的なヘラミガキが特徴的である。

小形器台(550)は、横方向のヘラミガキで仕上げられている精製品である。透孔は3方向に空けられている。受部接合面には工具痕が見られる。

551・552は有稜高杯である。552は杯部上半部が大きく内彎し、端部は内傾する面をもつ。551は脚上部に近い所に3方向の透孔が空けられており、短脚と考えられる。脚上部内面には竹管状工具痕が複数見られる。

壺には中形壺(544)と大形壺(539・540・542・545～548)がある。544はいわゆる瓢壺であり、外面には貝殻腹縁による刺突を巡らせ、端部内面のヘラミガキは方向を変化させるなど装飾性が高い精製品である。大形壺のうち、545以外は広口壺である。口縁端部を上下に拡張して面を造るタイプ(539・540・546)と折り返すタイプ(542)がある。539は竹管文と

櫛描文が多用された加飾性の高い個体である。頸部直下には櫛描直線文と櫛描刺突文が巡っている。口縁部内面には竹管文と櫛描刺突文が巡っている。外面には間隔を空けて別粘土による円形浮文が付加されており、その上に竹管文が施文されている。円形浮文間は竹管文で隙間なく埋められている。542は口縁部内外面に羽状文を施文するパレス壺の系譜を引くタイプであり、前者とは異なる。547～549は肩部である。547は櫛描波状文と円形浮文で加飾されている。円形浮文の上には、竹管文が施文されている。器壁が薄く、断面が球形に曲がることからさほど大きくはないと考えられる。548は櫛描直線文と櫛描波状文が交互に配されている。549は細かい櫛描波状文の下方に円形浮文と刺突文が配されている。円形浮文の上には竹管文が施文される。

555は器壁が薄く、器種が判然としない。頸部下で胎土が変化しており、色調差を意識して成形された可能性がある。

手焙形土器(553・554)はS字状口縁を有する鉢部に、口縁部内面から覆部が付加されている。553は外面調整が左上がりのハケメ＋ヨコハケで調整されており、口縁部には押し引き施文が施されている。S字状口縁台付甕のA類と全く同じ施文である。

556は鉢であろうか。

甕にはS字状口縁台付甕(570～573)がある。570～572は口縁部が立ち上がり端部が内傾する鋭利な面をもつS字状口縁台付甕である。572は左上がりのハケメ＋ヨコハケから成る外面調整であり、570・571は定型化した左下がりのハケメ＋ヨコハケの外面調整である。573は口縁部が外側に向かって広がり気味になっている。口縁端部には面が残っているが、頸部内面の板ナデが欠落していることや外面の沈線が見られる点では、C類の中でもb型式に相当よう。

543は頸部内面が鋭利に屈曲する。口縁部が長く、壺である可能性もあろう。脚部は平底(557・558・561)と脚台付き(559・560・562～569)がある。平底は壺の底部の可能性もある。脚台部は564が脚裾を折り返すが、その他は折り返しのないタイプである。569は底部内外面に砂を充填しており、S字状口縁台付甕との関連が注目される。

528は両端部に孔を空けるタイプの土錘の可能性がある。529・530は球形の土錘である。

打製石斧(531)は端部が磨滅している。532・533は敲石であり、533は周囲と平坦な面に使用痕がよく残っている。

環濠SD532下層出土遺物(574～678)　壺(574～628)、手焙形土器(630)、甑(631)、小形器台(632～635)、高杯(637～645)、甕(646～669)、ミニチュア土器(629)、土製品(674～678)、石製品(670～673)などが出土している。

608～610は中形壺であり、いわゆる瓢壺である。外面は貝殻腹縁による刺突で加飾されている。609は頸部直下に横方向のヘラミガキが見られる。大形壺には広口壺と直口壺があり、広口壺の方が概して加飾性が高い。口縁端部はヨコナデで仕上げられるものの他に、擬凹線の入っている575・583や板状工具による刺突文が刻まれている577・579・580・581がある。刺突文は同じ方向でナナメ方向に施文されている577、その上に交差させている579、羽状文になっている580・581がある。581は口縁端部に2ヶ所ずつ4方向に円形浮文が付加されていた可能性がある。体部は頸部直下から櫛描直線文と櫛描刺突文が交互に配されており、2個1単位となった円形浮文が剥離した痕跡が残る。578は折り返し口縁であり、他の個体と成形が異なる。582は頸部に締まりがなく、類例の乏しい土器である。白っぽい胎土に、赤褐色のチャート？らしい混和材が含まれている。静岡県元島遺跡[11]で類似する土器が出土していることから、遠江地域からの搬入品である可能性がある。596・602の胎土は、S字状口縁台付甕に見られる胎土と極めて類似する。596の押し引き施文はS字状口縁台付甕と共通する。そして、602の外面は定型化したS字状口縁台付甕と共通するハケメで調整されている。頸部突帯の上に施文されている刺突は、板状工具によると考えられる。

611～613はいわゆるパレス壺であり、611は山形文に赤彩が見られる。612は山形文が貝殻腹縁による刺突に変化しているが、同様に赤彩が施されている。613は貝殻腹縁による刺突文が見られるが、施文に合わせて赤彩されることはない。

605・614～616・618は大廓式土器である。614

は折り返し口縁を呈しており、やや小振りの壺に多いタイプである。615・616の肩部には、縄文が施文された上に円形浮文(615)・竹管文(616・618)がそれぞれ配されている。616は肩の張らない器形が特徴的である。羽状縄文の下方にはS字状結節文が見られる。617も外面に縄文が施文されている。上下に3段の施文は、同時に施されていると考えられる。頸部直下の文様は結節文の可能性がある。大廓式土器とは胎土・施文ともに異なり、器壁も厚い。おそらく、さらに以東の関東方面から搬入された土器と考えられる。

底部の中では、624～628が大形壺の底部である。624は底部内面に砂の充填が見られる。625～628は底部外面に木葉痕が見られる。627・628は重ねて2枚の痕跡が見られる。625は胎土の点から、大廓式土器の可能性が挙げられる。

630は手焙形土器の体部である。体部下半部の突帯には刻目が入れられている。

甑(631)は焼成前に底部が穿孔されている。

小形器台は中空になるタイプ(633)と中実になるタイプ(632・634・635)がある。634はナデ成形により、器壁が薄く仕上げられている。透孔は3方向に空けられている。635は細かい横方向のヘラミガキで仕上げられており、近畿地方の影響を受けていると考えられる。632～634の受部内面は器壁が荒れて凹凸になっている。

高杯(637・638・643)は有稜高杯の脚部と考えられる。脚上部から近い位置に3方向の透孔が穿たれており、いずれも短脚を呈すると考えられる。642は椀形高杯であろう。636・640は脚部が強く屈折するタイプの高杯である。636の内面は放射状のヘラミガキで仕上げられている。近畿地方からの搬入品の可能性がある。脚接合面には板状工具による痕跡がネガで残っている。640は脚内面の屈折や脚柱部を面取りした後で横方向のヘラミガキで仕上げる点、および透孔の径が小さい点で近畿地方の高杯を彷彿させられる。しかし、内面のヘラケズリが確認できない点では近畿地方からの搬入品とは認めがたい。

644・645は椀形高杯である。短い脚柱部をもち、脚裾部に向かって大きく広がる。外面は基本的に横方向に、脚裾部は形状に合わせて、ヘラミガキで仕上げられている。杯部内面は暗文風に放射状のヘラミガキで仕上げられている。脚裾部内面はハケメ痕が残る。透孔は4方向に径の小さいものが空けられている。この2点も近畿地方からの搬入品の可能性がある。

甕には、く字状口縁甕(646～648)、受口状口縁甕(649)、S字状口縁台付甕(650～655・667)と脚台部(656～666・668・669)がある。底部片は全て脚台付きであることから、これらの甕は脚台が付く可能性が高い。

く字状口縁甕(646)は胎土の肌理が粗く、駿河以東からの搬入品の可能性がある。受口状口縁甕(649)は、頸部内面のハケメや外面調整および押し引き施文の点でS字状口縁台付甕と共通する要素を多分に見出すことができる。頸部が強く屈曲していないことや口縁端部に鋭利な面が見られないことから、S字状口縁台付甕の前身に相当すると考えられる。

S字状口縁台付甕は、650が外面調整が定型化する以前のA類に、651が定型化したB類に相当する。651は頸部にヨコナデが見られる。652～654は口縁部が外側に向かって拡張するC類である。細部をみていくと652は口縁端部に面が残り、頸部外面にヨコナデが施される。653・654は口縁端部が丸く収められ、頸部にはヨコナデが形骸化した沈線が入る。655は口縁部を拡張したものであり、S字状の擬口縁が残る。667は体部下半部に擬口縁が明瞭に観察できる。擬口縁を境に、胎土の色調が異なる。底部内外面には砂の充填が見られる。

脚台部は、668がS字状口縁台付甕である。底部内外面には砂の充填が見られる。

ミニチュア土器(629)は高杯であろう。

土錘(674～676)は球形を呈しており、棒状工具により孔が開けられている。677・678はS字状口縁台付甕の底部を用い、それを打ち欠いて加工円盤状に整形している。

670の平面部は滑らかになっているが、花崗岩質であり砥石とは考えにくい。石皿や台石として利用されたのであろうか。671の砥石は、1面のみが滑らかになっている。断面形が三角形を呈しており、安定感がない。敲石(672)は周囲に敲打痕がよく残存している。673は砂岩製の砥石である。1面には、

鋭利な刃状の研磨痕が複数条平行して残っている。側面と裏面は面単位の研磨痕が見られ、反り返る程によく使い込まれている。部分的に被熱を帯びて変色している。

環濠ＳＤ532上層出土土器(679～684) 高杯(679)、壺(680～683)、Ｓ字状口縁台付甕(684)が出土している。

高杯(679)は脚部が屈折するタイプの高杯である。脚柱部は面取りされている。

壺には、二重口縁壺(680･682)と加飾壺(681)がある。680はミニチュア土器とも考えられる小さいものであるが、細部まで丁寧に造られている。682も頸部の直立するタイプである。681は直立する頸部から口縁部が大きく広がるタイプであり、口縁端部は折り返す。口縁端部には均等に円形浮文が付加され、その上に竹管文が施文されている。683は617と同様に縄文が施文されており、頸部直下の文様帯は結節文の可能性がある。関東方面からの搬入品と考えられる。

684はＳ字状口縁台付甕の脚台部である。器壁は薄く、丁寧な作りである。底部内外面には砂が充填されている。

環濠ＳＤ532出土土器(685～706)　層位を把握する以前に採り上げた土器である。小形器台(685・686)、壺(687～698)、高杯(699～701)、手焙形土器(702)、Ｓ字状口縁台付甕(703～706)などが出土している。

686は小形高杯の可能性もある。

689は頸部から広がる二重口縁壺である。694は頸部に突帯を貼り付けその上に刺突文を巡らせている。頸部直下は、単位の短い櫛描直線文で加飾されている。693は頸部のくびれが弱い。688は特徴的な折り返し口縁を有する大廓式土器である。口縁端部は欠損するが、当遺跡出土の口縁部としては唯一の大型品のそれである。403･405のような口縁端部ではなく、内側に折り返すタイプと考えられる。胎土の点でも、東遠江から駿河にかけてからの搬入品と考えられる。底部(698)の外面には木葉圧痕がある。

699･700は有稜高杯であり、699は杯部上半部が直線的に大きく開く。700は長脚から短脚へ移行する過渡期的な土器と考えられる。３方向透孔の上方１ヶ所に透孔が空けられている。外面には、水銀朱と考えられる発色の良い赤色顔料が付着している。701は脚部が屈折する。脚柱部は面取り後横方向のヘラミガキで仕上げられる。透孔の径は小さい。近畿地方の影響を強く受けている。

手焙形土器(702)は、Ｓ字状口縁を有する鉢部に覆部が付いている。

703～706はS字状口縁台付甕の脚台部および底部である。703は小振りであるが、丁寧な造りである。706の底部内外面には砂が充填されている。695～697は類例の乏しい土器群である。695は口縁部が頸部から直立するような形状を呈する。内外面共にハケメ調整で仕上げられている。696は頸部から口縁部にかけて外面に接合痕を残す。このような形状を呈する土器自体がみられないことから、関東方面からの搬入品[12]あるいはその影響下にある土器の可能性を考えておく。697はＳ字状口縁台付甕が形骸化して、器壁が厚くなったものかも知れない。

水田遺構ＳＺ504　３面畦畔出土土器(707～714)

畦畔相当部分からまとまって出土したものである。小形器台(707)、壺(708～709)、甕(710～714)がある。

小形器台(707)は受部内面の器壁が荒れ、凹凸になっている。

二重口縁壺(708)は内外面が赤彩されている。口縁端部に面を持つ広口壺の上に、二次口縁が付加されている。709の口縁部内外面は板状工具による羽状文で加飾されている。体部上半部も、頸部直下から刺突文と櫛描直線文が交互に配されている。

甕には、Ｓ字状口縁台付甕(710～712)・く字状口縁甕(713・714)がある。712は口縁部が直立するＢ類であるが、頸部にヨコナデが見られる点や口縁端部が外側に広がりつつある点から新相の要素が見いだせる。710・711は口縁部が外側に拡張する点からＣ類に相当する。711は口縁端部が丸く収まるが、頸部外面にはヨコナデが見られる。く字状口縁甕はいずれも頸部が鋭利に屈曲する。713の口縁部は２単位のヨコナデからなる。714は口縁部が１単位のヨコナデで内彎気味に仕上げられている。短くしっかりとした脚台部が付く。

水田遺構ＳＺ504　２面上出土土器(715～716)

小形鉢(715)、壺(716)が出土している。

小形有段鉢(715)の内面は、横方向のヘラミガキで仕上げられている。

716は折り返し口縁を有する壺である。

水田遺構SZ504　2面土壌内出土土器(717～719)

脚付土器(717)、壺(718～719)が出土している。

717は内面にハケメが見られることから、椀形高杯ではなく脚付土器と判断できる。

壺(718)は口縁部を折り返す。外面には、わずかであるが円形浮文の痕跡が残る。719は直口壺の口縁部に粘土紐が半円形に付加されている。906のような把手をモチーフにした装飾であろうか。

水田遺構ＳＺ504　1面東出土土器(720～727)

壺(720・721)、器台(722)、高杯(724・725)、甕(727) などが出土している。

720の口縁端部には、板状工具による刺突文が施文されている。頸部突帯の上にも同様に施文されている。721は、外面調整に放射状のハケメ＋ヨコハケというＳ字状口縁台付甕Ａ類と同じ手法が用いられている。胎土もＳ字状口縁台付甕に類似するものである。

722は器台であろうか。受部内面にハケメが残るが、脚接合部が高杯などの杯部と類似することから、受部とした。透孔は５方向と推定される。

723は短脚にもかかわらず、櫛描直線文が施文されていることや脚上部がやや太いことから脚付土器の脚の可能性を考えておく。

725は長脚の有稜高杯である。脚裾の径はさほど大きくなく、端部のみがわずかに広がる。724は、外面は横方向のヘラミガキで、杯部内面は放射状のヘラミガキで仕上げられている。脚部内面はヘラケズリされており、鋭利に屈曲する。３方向に小さい透孔が空けられている。近畿地方の高杯と手法的に何ら異なることがないことから、搬入品あるいはその影響が強い土器と考えられる。

726は、内面が丁寧に仕上げられているわけでもないことから、脚部とした。

水田遺構ＳＺ504　1面西出土土器(728～730)

脚付土器(728)、甕(729)、須恵器(730)が出土している。

728は短脚であるが、櫛描直線文と貝殻腹縁による加飾が見られることから、脚付土器の可能性がある。

729は折り返しのない台付甕の脚台部である。

水田遺構ＳＺ504　1面出土土器(732～751)

高杯(734～737)、壺(732・738～740・750)、甕(741～749)、ミニチュア土器(733)、敲石(751)が出土している。

734・736・737は有稜高杯である。735は脚柱部をもつ椀形高杯である。645と同様に近畿地方からの搬入品の可能性がある。736・737の脚部は短脚で加飾がない。

732は瓢壺の口縁部である。口縁部にわずかに内傾する面を残す。738～740は広口壺である。738の口縁部内外面は櫛状工具により刺突及び押し引き施文で加飾されている。口縁部外面には、その上に竹管文を等間隔に施文している。739の口縁部内外面は板状工具により刺突文が施文されている。口縁部内面は刺突文を交差させている。750は壺の底部である。

甕はバリエーションに富む。受口状口縁甕(742)はＳ字状口縁台付甕の前身となるタイプのものである。口縁部外面には刺突文が見られる。743・744は口縁部が外側に拡張するタイプのＳ字状口縁台付甕である。頸部外面には沈線が巡っている。748は口縁端部に刻目が刻まれている。弥生時代のものである可能性がある。749は外面に粗いタタキ痕が残る。タタキ後、外面下方をヘラケズリしている。脚台部(745)は折り返しがなく、内彎する。746は弥生土器と考えられる。

敲石 (751)は敲打痕が明瞭に残る。

水田遺構ＳＺ504出土土器(762～770)　水田面確認以前に出土した当該時期の土器である。壺(762・763)、脚付土器(767)、高杯(768)、小形壺(764・765)、甕(766～770)が出土している。

762は口縁端部に刺突が巡っている。

767は櫛描直線文と貝殻腹縁による刺突文が交互に施文されている。脚裾部は外側に面をもたせている。脚部としては類を見ないが、広口壺の口縁部外面に面を持たせるものと類似している。透孔は４方向に空けられている。

764・765は小形壺と考えられる。口縁部と外面が

縦方向のヘラミガキで仕上げられている。765の底部外面には木葉痕が見られる。このような小形壺では珍しい。

766・769は甕の底部である。甕(770)は弥生土器である。口縁端部には刻目が入れられている。

(川崎)

c　古墳時代中後期の遺物

竪穴住居ＳＨ550出土土器(778～780)　778は土師器小形鉢。丸底で、口縁部はやや内傾し、底部にはケズリを施す。779・780は台付甕。体部調整は、いずれも体部下半にケズリ状のナデを施した後、いわゆる羽状ハケメを施す。780はカマドの支柱石上に置かれていたもので、台付甕を用いたカマドの使用方法を考えるうえで重要な例となる。

土坑ＳＨ560出土土器(781)　781は土師器小形鉢。形態的には前述の778と同様と考えられる。

竪穴住居ＳＨ556出土土器(782・783)　須恵器の蓋杯を図示した。陶邑田辺編年のＭＴ85～TK43型式に併行するものと考えられる。

竪穴住居ＳＨ557出土土器(785～787)　785は須恵器杯で、陶邑田辺編年のＴＫ４３型式に併行するものであろう。786は土師器小形鉢。前述の778・781よりも口縁部のヨコナデが弱く、そのためか外反しない。786は土師器甕である。

Ｂ５区包含層出土遺物(798～800)　古墳時代後期を中心とした遺構に伴わない遺物である。798は須恵器高杯の脚部。円形の透穴が６方向に開けられている。799は須恵器高杯の杯部。下部にヘラ記号がある。800は須恵器台付椀。形態から、金属器を模倣したものと考えられる。古墳時代後期末から飛鳥時代にかけてのものであろう。　(伊藤)

d　飛鳥・奈良・平安時代の遺物

竪穴住居ＳＨ563出土土器(788)　土師器皿を図示した。内面は剥離のため明確ではないが、おそらくは暗文があると考えられる。奈良時代頃のものであろう。

竪穴住居ＳＨ558出土土器(789～791)　789は土師器皿。口縁端部は丸くわずかに肥厚する。790は土師器長胴甕、791は土師器把手付甕である。これらは概ね都城編年の平城Ⅱ～Ⅲにかけての時期であろう。

Ｂ５区各ピット出土遺物(792～797)　古墳時代から平安時代にかけてのピット出土遺物を一括する。

792は結晶片岩を円棒状に加工整形し、両端部をグリップ状に残すもの。石錘の一種であろうか。古墳時代前期以前のものと考えられる。793は砂岩製の砥石。細かな削痕が３面に見られる。

795・797は掘立柱建物SB582を構成するピットから出土した。795は土師器皿で、全体的にミガキが見られる。796は土師器杯で、内面のミガキは暗文の可能性がある。これらは都城編年の平城Ⅳ～Ⅴに併行すると考えられる。

Ｂ５区包含層出土土器(801～808)　飛鳥・奈良時代前後と考えられる、遺構に伴わない土器をここにまとめた。

801・802は須恵器杯蓋。801は焼成後に、摘部分を打ち欠き、その部分を頂点として全体を三角形に整形している。裏返すと安定感があり、裏面に研磨痕が見られるため、硯として用いるために上記の調整を行ったものと考えた。ただし、この面に墨の吸着はあまり無い。

803は飛鳥時代前半頃と考えられる土師器椀。古墳時代後期の土師器小形鉢(778ほか)の系統である。底部は丸底で、木葉圧痕が見られる。804～806は土師器甕。807は上面形が方形となる土師器で、器種は不明。ハケメ調整の施し方を見ると、奈良時代頃のものかと考えられる。

808は須恵器の円面硯。脚部にはヘラ切りによる方形の透かし穴が密接してほぼ等間隔（全周すると36カ所か）に開けられる。奈良時代初頭前後のものと考えられる。

土坑ＳＫ554出土土器（809～816）　比較的まとまりの良い一群である。

809～814は土師器杯。口縁部内面は斜放射状暗文を意識してミガキが施される。底部内面には螺旋状の暗文が見られるものもある。815は灰釉陶器の椀。口縁端部が外側に引き出される。灰釉は比較的丁寧に施されている。黒笹14号窯式[13]に併行するものと考えられる。816は志摩式製塩土器の底部片。

この土器群は伴出の灰釉陶器から、９世紀前葉から中葉にかけてのものと考えられる。

井戸ＳＥ555出土土器(817～821)　817～819は灰釉陶器。817・818は椀、819は壺であろう。黒笹90号窯式に併行するものと考えられる。820は緑釉陶器の皿で、内面には陰刻花文、口縁部には輪花が見られる。軟胎である。

これらは伴出の灰釉陶器から、9世紀後半10世紀初頭頃のものと考えられる。　(伊藤)

e　中世の土器

井戸ＳＥ567出土土器(822～824)　陶器椀を図示したが、この他に常滑産の甕片が数点出土している。陶器椀には尾張産のほか、渥美産のものも含まれる。概ね藤澤編年の4型式に相当する。

4　Ｂ6拡張区出土の遺物

a　飛鳥・奈良時代の遺物

竪穴住居ＳＨ547出土土器(825～827)　825は須恵器杯蓋。陶邑田辺編年のＴＫ217型式に併行するものである。826は須恵器高杯、827は土師器甕である。概ね飛鳥時代後半頃のものと考えられる。

B6区ピット出土土器(828・829)　828は土師器杯。掘立柱建物ＳＢ587を構成するピットから出土したものである。内外面ともにミガキが施される。底部外面には「申」の墨書がある。都城編年の平城Ⅲに概ね相当しよう。

B6区包含層出土土器(830・831)　830は土師器杯蓋。831は土師器椀で底部は丸底である。

b　中世の遺物

土坑ＳＫ322出土土器(832～839)　『嶋抜』Ⅱでも報告した遺構の続きから出土したものである。832は白磁椀。小形の玉縁が付くもので、博多分類の白磁椀Ⅱ類に相当する。833は土師器皿で、島貫分類の皿ａ3に相当。834・835は土師質土器の小皿。836～838は土錘。839は南伊勢系統の甕である。

これらは島貫Ｆ3期に相当する。

土坑ＳＫ527出土土器(840～853)　椀皿類が比較的まとまって出土した。

840は白磁小皿、841は陶器小椀。842～849は土師質土器小皿で、842のような扁平なものは例が少なく、その他は概ね島貫分類の小皿ｂ1ないしは小皿ｃ1に相当する。850は土師質土器皿。851はやや緑味がかった釉の白磁椀で、外面には縦線文が見られる。852も白磁椀で、小形玉縁の付く博多分類椀Ⅱ[14]類である。853は陶器椀。

これらは概ね島貫Ｆ3期に相当する。この遺構も土師質土器の比率が高いものとして認識できる。

落ち込みＳＺ541出土土器(854～856)　854は土師器小皿で、島貫分類の小皿ａ3に相当。855は土師質土器小皿、856は陶器椀である。概ね島貫Ｆ3期に相当する。

Ｂ6拡張区ピット出土土器(857・858)　857は土師質土器小皿、858は土師器甕である。掘立柱建物としてはまとまらないが、これらの資料から、概ね島貫Ｆ2～3期の建物が付近に存在していたものと考えられる。　(伊藤)

5　Ｂ7区出土の遺物

a　弥生時代の遺物

Ｂ7区包含層出土土器(859)　859は壺である。体部片で、外面全体をミガキ調整のうえ、体部最大径部のやや上にヘラ描沈線を3条施す。弥生時代前期後半の遠賀川系のものである。

集積遺構ＳＺ519出土石器(860～865)　860～864は砥石。いずれも軽石製で、側面を中心に丸く研磨痕のあるものが多いが、864のみは研磨部が面をなし、条線状の削痕もある。865は太形蛤刃石斧である。結晶岩製で刃部には削痕が残っている。

これらの遺物は土器を伴わないため明確な時期は分からないが、弥生時代の範疇、なかでも中期頃のものと考えてよいであろう。　(伊藤)

b　古墳時代前期の遺物

周溝ＳＸ392出土土器(866～869)　高杯(866)、壺(867～868)、Ｓ字状口縁台付甕(869)が出土している。

高杯(866)は、脚柱部に櫛描直線文が施文されている。3方向透孔の上方1ヶ所にも透孔が穿たれており、二段透孔としている。

壺(868)は、器形的に体部上半部の張りが弱い。

外面はハケメ調整で仕上げられている。

869は、口縁部が外側に拡張するS字状口縁台付甕であり、C類に相当する。口縁端部にはかろうじて内傾する面が残っている。擬口縁付近には、内面にケズリ状のナデ痕跡が見られる。底部外面には砂が充填されている。

周溝SX364出土土器(870～873)　壺(870・873)、小形壺(872)、甕(871)が出土している。

870は頸部が細く絞まらない壺である。口縁部は短く外反する。873は体部外面に直線文と波状文が交互に施文されており、更に板状工具により刺突文が配されている。

小形壺(872)は精製品である。内面はヘラケズリされているが、頸部までは及んでいない。外面調整にはヨコナデが入っている。成形は布留形甕そのものである。

受口状口縁甕(871)は、口縁部外面に押し引き施文が施されている。S字状口縁台付甕の前身となるタイプである。

周溝SX365出土土器(874～878)　高杯(874)、甕(875～878)が出土している。

874は口縁端部を丸く収める。有稜高杯と考えられる。

甕には、く字状口縁甕(875)と、受口状口縁甕(876・877)がある。876は口縁部を直立させ、外面には板状工具による刺突文が施文される。S字状口縁台付甕の押し引き施文とは、施文する角度および方向が異なる。877は口縁部内面のヨコナデが弱いために、内彎する程度である。脚台部(878)は折り返しがない。器高は低い。

周溝SX381出土土器(879～885)　壺(879～885)が出土している。

879はいわゆるパレス壺である。口縁部内面には羽状文が施文され、部分的に赤彩することで装飾効果を挙げている。880は、板状工具による羽状の刺突文と竹管文で加飾されている。刺突文は口縁部内外面に、竹管文は口縁部内面と頸部突帯の上に施文されている。882は中形壺の可能性がある。器壁が厚く、口縁部内面に接合痕を明瞭に残す。底部(883・885)の外面には砂が付着している。

周溝SX387出土土器(886～891)　小形壺(886)、高杯(888・889)、壺(890・891)、甕(887)が出土している。

886は口径がさほど広がらないことから、小形壺と推定される。縦方向のヘラミガキで仕上げられている。

888は小形の高杯であろう。889は長脚と考えられる。

直口壺(891)は、体部上半部のみに横方向のヘラミガキが入っている。890は底部の立ち上がりがしっかりと成形されている。

受口状口縁甕(887)は、口縁部が立ち上がり、端部に面をもつ。口縁部外面に押し引き施文も施されており、S字状口縁台付甕の前身となる甕と考えられる。

溝SD407出土土器(892～894)　高杯(892)、壺(893・894)が出土している。

高杯(892)は直線的な器形を呈する。小形化し、短脚で加飾も見られない。脚裾部付近外面には、水銀朱と考えられる発色のよい赤色顔料が付着している。

中形壺(893)は口縁端部に内傾する面をもつ。器壁は厚くなっている。

周溝SX419出土土器(895・896)　壺(895)、S字状口縁台付甕(896)が出土している。

895は頸部が締まる形態を呈していることと、ヘラミガキで仕上げられていることから壺と判断した。

S字状口縁台付甕(896)は口縁部が立ち上がり、端部にに鋭利な面をもつ。

周溝SX469出土土器(897・898)　壺(897)、高杯(898)が出土している。

897・898は中形壺と高杯という器種に差はあるが、いずれも長く内彎する口縁部および杯部を有し、端部に内傾する面をもつ点で共通する。897の体部は算盤玉状に押し潰されたような形状を呈している。

周溝SX476出土土器(899～901)　小形鉢(899)、壺(901)、甕(900)が出土している。

899は口縁部は大きく開く形状であることから鉢としたが、脚が付加される可能性がある。

壺(901)の口縁部内面は放射状に赤彩されている。一本ずつ柔らかいハケあるいは筆状の工具を用いて彩色されていると考えられる。

甕(900)は薄い受口状口縁甕であり、外面には板状工具による刺突が施文されている。

周溝ＳＸ475出土土器(902・903)　高杯(902)、壺(903)が出土している。

902は杯部が椀状を呈する。脚部には櫛描直線文が施文され、脚上部から外反が始まっていることから短脚と考えられる。

直口壺(903)は口縁端部の外側に面をもち、沈線が入る。体部外面は疎らな横方向のヘラミガキで仕上げられる。底部は厚く、しっかりとしている。

周溝ＳＸ484出土土器(904～906)　壺(904・905)、鉢(906)が出土している。

中形壺(904)は体部が球形を呈している。底部はわずかにヘラケズリにより成形されている。905は肩部が張る形状を呈する。

鉢(906)には脚台が付く。頸部下に把手が付加されている。松阪市草山遺跡[15]で類例が出土している。器形的には、在地の系譜を引く土器とは考えにくく、静岡県元島遺跡[16]で類例があることから、遠江地域からの搬入品もしくはその影響下にある土器の可能性がある。

周溝ＳＸ477出土土器(907～910)　壺(907)、小形鉢(909)、Ｓ字状口縁台付甕(908)、敲石(910)が出土している。

直口壺(907)はSX475出土の903との比較により、遺構の前後関係と型式変化を再確認することのできる好資料である。全体にシャープさがなくなり、丸みを帯び、ヘラミガキで丁寧に仕上げている。底部も薄くなっている。

小形鉢(909)は872よりやや扁平である。成形は布留形甕そのものである。内面はヘラケズリされているが、頸部とその直下をケズリ残している。口縁端部はわずかに肥厚する。肩部にはヨコハケが入っていない。

Ｓ字状口縁台付甕(908)は小形ではあるが、丁寧に作られている。口縁部が外側に広がるＣ類に相当する。

910は粗製の石杵であり、端部には敲打痕が見られる。端部の片側には、水銀朱と考えられる発色の良い赤色顔料がわずかに残存している。

周溝ＳＸ489出土土器(911～913)　壺(911)、甕(912・913)が出土している。

911は脚台の付く受口状口縁壺である。口縁部は直立し、端部には内傾する面をもつ。体部内面上半部から頸部にかけては、粗いハケメがみられる。口縁部外面に板状工具による刺突文が施文されている。施文は押し引き気味である。

912は、く字状口縁甕と考えられる。913は器壁の薄い台付甕である。肩部には板状工具による刺突が施文されているが、押し引き気味の施文である。Ｓ字状口縁台付甕の前身と予想される260と類似するが、外面のハケメ調整が定型化していない点や押し引き施文が異なる点で一線を画する。また、底部に砂の充填は見られない。

周溝ＳＸ486出土土器(914～934)　壺(914～921)、高杯(922～927)、甕(928～934)が出土している。

中形壺(914・916・917)はいずれも精製品である。口縁部は長く、内彎する。体部は、916は球状に近く、914・917は最大径が下半部の擬口縁付近に下りている。

918は口縁部と体部が全く離れ、墳丘墓の南北で出土した。よって、当初は墳丘上に位置していたと推定される。口縁部と肩部には、同様の板状工具による刺突文が配されている。刺突文は、押し引き施文風の角度で施文されている。919の体部には、貝殻腹縁による直線文と刺突文が交互に配置されている。刺突文は口縁部にも配されており、羽状に施文されている。貝殻は、高杯などの脚部や中形壺に多用されるアーチ状のタイプではなく、凹凸のあるタイプを利用している。920は体部下半に赤彩が施されており、いわゆるパレス壺と考えられる。921は厚い底部を有し、しっかりと立ち上がる。

高杯は922～925が有稜高杯である。杯部は長く直線的で、端部は内傾する面をもつ。脚部は長脚から短脚へと移行する過渡期であり、924→927→925と短くなっていく。脚裾は内彎する。925の脚部には、直線文と貝殻腹縁による刺突文が交互に配置されている。貝殻は919にもみられるが、普遍的にみられるアーチ状のタイプではなく、凹凸のあるタイプを利用している。926は脚付土器である。脚部は短脚であり、内彎する。

甕はハケメの目立つく字状口縁甕が出土している。

底部形態は、折り返しのない脚台のみの出土である。

土器群ＳＺ396 出土土器(935～937)　高杯(935)、壺(936・937)が出土している。

高杯(935)と壺(936)は、杯部あるいは口縁部が長く内彎し、端部に内傾する面をもつ点で共通する。935の脚部には3方向の透孔が2段に空けられている。

壺(936・937)は、出土状況や外面調整・胎土の特徴などから、同一個体の可能性が高い。底部には、粘土が栓状になっている部分がある。

周溝ＳＸ491 出土土器(938～941)　壺(941)、手焙形土器(939)、甕(940)などが出土している。

中形壺(941)は、長い口縁部を有する精製品である。

手焙形土器(939)は、Ｓ字状口縁を有する鉢部の口縁部内面に覆部を付加して成形されている。外面の左上がりのハケメ＋ヨコハケ調整や頸部内面のハケメ及び口縁部の押し引き施文はＳ字状口縁台付甕Ａ類の特徴と何ら変わりない。体部には突帯が付加されており、その上に板状工具による刺突文が施文されている。また、覆部端部に付加されている耳部にも、同様の刺突文が施文されている。

940は頸部から口縁部にかけて強く屈曲し、口縁部が直立する。端部は上方に強い面をもつ。体部に比べ、口縁部は厚みがある。外面は櫛描直線文・刺突文・波状文と突帯で加飾されている。櫛描直線文は波状文と同じ程度の単位で静止しながら施文されている。波状文は波というよりも弧状を描いている。突帯には沈線が入れられており、更にその上に板状工具による押し引き風の刺突文が施文されている。特に、野洲川下流域のものと類似[17]しており、搬入された可能性が高い。体部下半部には煤が付着しているが、底部付近で煤が付着していない部分が三日月状に残っている。底部が辛うじて正立する程度のものであることと、顕著な磨滅が見られない点を合わせると、支脚あるいはそれに相当するものをセットで使用していると考えられる。

938はヘラミガキがみられることから、壺などの脚台部である可能性がある。

周溝ＳＸ520 出土土器(942～944)　壺(942･943)、甕(944)が出土している。

942は口縁部外面に擬凹線が巡っており、円形浮文が付加されている。円形浮文には、竹管文が施文されている。

944は、頸部がシャープに屈曲する受口状口縁甕である。く字状口縁甕の頸部の屈曲の仕方と類似していることから、く字状口縁甕の端部に面をもたせているようにも摂れる。

周溝ＳＸ521出土土器(945～949)　高杯(945・946)、壺(947)、甕(948・949)が出土している。

高杯(945)は杯部が大きく内彎し、端部は内傾した面をもつ。脚部は脚上部から広がっており、短脚化が進んでいる。946は椀形高杯と考えられる。

壺(947)は、分厚い器壁の体部に、短い口縁部が付く。

948は、ゆるやかな頸部から口縁部が直立する受口状口縁甕である。口縁端部には鋭利な面がないが、上方が平坦になっている。外面の左上がりのハケメ＋ヨコハケ調整と押し引き施文および頸部内面のハケメの点でＳ字状口縁台付甕と共通する。肩部の押し引き施文が次段階に欠落すると考えれば、Ｓ字状口縁台付甕の前身に相当する。949は折り返しのない脚部であるが、底部外面に砂が充填されている。

落ち込みＳＺ460 出土土器(950)　壺(950)が出土している。口縁端部がわずかに内彎している。

落ち込みＳＺ421 出土土器(951)　甕(951)が出土している。

頸部を強く屈曲させ、口縁部は外側に広がる。口縁部外面には、板状工具による刺突文が施文されている。

土坑ＳＫ371 出土土器(952)　Ｓ字状口縁台付甕(952)が出土している。口縁部は外側に向かって広がり、端部は内傾する面をもつ。頸部外面には沈線が巡っている。

土坑ＳＫ377 出土土器(953)　遺構は古墳時代中後期のものであり、ここで報告するのは混入品と考えられるものである。

有稜高杯(953)が出土している。杯部上半部は直線的に伸び、端部は丸く収まる。

包含層出土遺物(954～994)　遺構に伴わない当該時期相当の遺物を包含層出土として報告する。

小形器台(969)、小形鉢(958)、壺(957～968・993・994)、高杯(956・970～984)、甕(985～992)、

管玉(954)、軽石(955)が出土している。

969は中空の小形器台である。脚部内面はヘラケズリされている。

958は、口縁部を外反させる小形鉢である。体部下半部はヘラケズリされている。

中形壺(959・960・964)は、体部が球状を呈する。960は底部に立ち上がりがある。底部(993・994)も中形壺と考えられる。広口壺は口縁端部が垂下する961・962と面状になる965・967がある。965の口縁部内面には板状工具による羽状文が巡っている。

968は口縁部が短く外反する。二重口縁壺と考えられるが、高杯の可能性もある。外面には円形浮文が付加され、その上に竹管文が施文されている。

966は器台の可能性がある。口縁部外面に擬凹線が巡り、内面には櫛状工具による刺突文が施文されている。

高杯は979・980が椀形高杯である。この他は、加飾性が高い短脚がないことから、基本的に有稜高杯の脚部と推定される。976は近畿系の高杯の脚部である。内面がヘラケズリされていない点や脚柱部に面取りした形跡がみられない点および縦方向のヘラミガキで仕上げられている点などから、搬入品とは考えにくい。杯部接合面には、工具を刺した孔が空いている。982は透孔がなく、高杯よりは壺などの可能性が高い。

甕には、く字状口縁甕(985・986)・受口状口縁甕(987)・S字状口縁台付甕(988～990)がある。く字状口縁甕(985・986)は頸部が鋭利に屈曲する。受口状口縁甕(987)は屈曲の弱い頸部から口縁部が直立する。外面には押し引き施文が見られる。S字状口縁台付甕はいずれも口縁部が外側に向かって広がるタイプである。990は頸部内面にハケメが残る。脚台部(991・992)は折り返しのないタイプである。

管玉(954)はガラス製であり、緑色で透き通っている。孔は一端が広がることもなく、均一に貫通している。軽石(955)は面単位で研磨されており、砥石として利用されている。　(川崎)

c　古墳時代中後期の遺物

落ち込みSZ367出土遺物(995～1122)　多くの土器がまとまって出土したが、遺構自体が広いために厳密な意味では一括遺物とはいえない。しかし、比較的短期間に継続して廃棄された土器群であると考えられるため、一括遺物に準じる扱いは可能なものであろう。

995～1023は須恵器蓋杯。杯蓋(995～1010)には小形で非常に精緻に作られている998のほか、やや大形で立ち上がり部分に湾曲のある1007のようなものまでいくつかある。1009・1010の外面上部には同一と考えられるヘラ記号が見られる。杯身(1011～1023)も杯蓋と同様、1011のような小形で精緻なものから1018・1021のように口径が13cmを越えるものまである。1006はやや腰高、1020が腰高で瓦質を呈しており、他のものとはかなり異質である。

1024～1031は須恵器高杯類。1024・1025は有蓋高杯蓋、1026～1028は有蓋高杯、1029・1030は無蓋高杯、1031は有蓋高杯と考えられる脚部である。1026～1028は脚部に方形の透かし孔を3方に穿つものであるが、1028はその透かし孔の関係が上から見て二等辺三角形状にずれるため、当初は4方向に穿つつもりであったのかも知れない。有蓋高杯の1029・1030は外面に波状文を施している。1030は脚部上端の透かし孔がわずかに残っており、方形透かし孔を伴う形態と考えられる。1031は円形の透かし孔を持つものである。

蓋杯・高杯類には、黒色の吹き出しが見られるものがあり(1003・1004・1014・1016～1018・1021・1023・1027)、とくに1003・1004・1021は色調も一致するため、同一窯での焼成と考えられる。このような観点からこの資料を見ると、3・4カ所の窯から搬入されているのではないかと想定できる。また、1008・1012・1016・1027の杯部内面には同心円当て具痕が残っており、手法的な共通性も窺える。

1032～1038は須恵器壺・甕類。1036は口縁下部外面を突帯状に整形し、内面はナデを施すというやや古い手法を残している。1037は長い頸部を3区画に区分し、それぞれに2単位の波状文を施している。

1039は土師器で長頸壺と考えられる。おそらく底部は丸底になるものと考えられる。

1040・1041は土師器高杯。1041は、屈曲を持つ杯部で口縁部はヨコナデにより内面がやや窪んでいる。

1042～1095は台付甕。法量差があり、口径11cm前後の小形のもの(1059～1065)と、口径15～17cm前後の大形のもの(1042～1058、1066～1070)に大別できる。須恵器併行期においても台付甕の法量差が継続していることを明確に示している。この資料中に見られる口縁部外面の調整は、頸部から口縁端部までを1回のヨコナデで処理するものが圧倒的に多い。体部外面には羽状のハケメを施しており、頸部から脚台部上端までを２工程で処理するものである。体部外面調整は、このハケメで終了するものが多いが、1055・1069のように体部上半にナデ線を入れるものや、1068のようにハケメを入れるものも見られる。ただし、これらは全周の1/3程度で終わっているものがほとんどである。

体部下半に擬口縁を有している(1049・1092)点は、これ以前の台付甕と同じである。ただし、この時期のものは擬口縁の乾燥期間が短いのか、あまり明瞭でないものが多い。

脚台部は「ハ」の字形に大きく開き、脚裾内面には折り返しを持たない。脚台部外面には縦方向の板ナデが施されており、この点これ以前の台付甕と共通するが、この時期のものには体部外面の調整に用いた工具とは異なった板状工具によるナデである場合が多い。

1096～1103は土師器大形鉢。口縁部形態あるいは外面の羽状ハケメなど、前述の台付甕と基本的に共通しており、同じ系統の土器として取り扱うことができる。口径22cm前後のやや小形のもの(1096～1098)と、40cm近くなる大形のもの(1102・1103)があり、台付甕と同様、法量差があると考えられる。

1104は土師器甑。外面は弱い板ナデないしはケズリである。1105は甑の把手と考えられる。

1106は石製の紡錘車で、片岩系の素材で作られている。外面は丁寧に研磨されている。

1107～1117は土師器広口壺。平底である。口縁部は「く」の字形に外反する。体部外面には台付甕と類似したハケメが見られる(1111・1112・1116)ことや、体部下半には擬口縁を有する(1114・1117)ものであることから、台付甕と同じ系統の製作手法を持つ一群として取り扱うことができる。

1118・1119は土師器。高さ30cm前後の円筒形の土管状を呈する。横方向の断面は楕円形を呈し、口縁部は全体を整形した後に弧状に削り込まれている。図示した２点以外にも別個体の破片がある。三重県内では、高茶屋大垣内遺跡（津市）[18]と古轡通りＢ遺跡[19]に類例があるが、極めて珍しいものである。用途も不明とせざるを得ない。

1120～1122は土師器長胴甕。頸部は締まり、そこからやや外反する口縁部となる。口縁端部は外側に面をなし、やや上方に摘み上げる。外面は縦あるいは斜縦方向のハケメ、内面はハケメと下半にケズリが見られる。手法的には、台付甕の一群とは全く異なるものといえる。

これらの土器群は、須恵器では陶邑田辺編年に照らせば、TK23型式からMT15型式に併行するものをである。そのなかでも中心となるのはMT15型式であろう。

Ｂ７区ｄ28グリット出土土器(1123～1148)

ここで取り上げる土器群は、第１遺構面の大区画溝ＳＤ247の掘削中に出土したものである。SD247は、前述のＳＺ367あるいは後述のＳＤ370を破壊して造成されている。したがって、遺構に伴わないとはいえ、ＳＺ367を補完するある程度のまとまりを持った一群として扱うことができると考える。

1123～1132は須恵器蓋杯。1126の内面には同心円当て具痕が見られる。1131には黒色の吹き出しが見られる。

1133は土師器台付鉢。脚台部を除けば、形態的には土師器小形鉢と共通する。

1134～1143は土師器台付甕、1144は土師器壺、1145・1146は土師器大形鉢である。1144～1146の体部外面のハケメは、原体・施し方ともに台付甕のそれと極めて類似している。

1147・1148は須恵器壺・甕である。

溝ＳＤ470出土土器(1149)　土師器の鉢を図示した。時期的には古墳時代後期の小形鉢の系統上にあるものであろう。7世紀前半代頃のものかも知れない。

溝ＳＤ370出土土器(1150)　土師器壺を図示した。体部下半に擬口縁を有し、体部外面のハケメは台付甕のそれと類似する。先述のSZ367と時期的に併行するものであろう。

竪穴住居ＳＨ468出土土器(1151～1157)　1151・

1152は土師器大形鉢。1153は須恵器杯蓋で、陶邑田辺編年のTK43型式に併行するものであろう。1154は須恵器有蓋高杯。

1155～1157は土師器台付甕。1156は頸部から口縁端部までを2回のヨコナデで処理する。

竪穴住居SH467出土土器(1158～1170)　1158・1159は須恵器杯身。陶邑田辺編年のMT15型式に併行するものであろう。1160は土師器高杯。杯下部の稜線が不明瞭なものである。1161は須恵器壺。体部上半から頸部にかけてカキメを施す。1162・1163は土師器大形鉢。1164～1168は台付甕。1169・1170は土師器壺で、2点は同一個体と考えられる。体部上半のハケメは台付甕のそれと類似する。

落ち込みSZ495出土土器(1171)　1171は台付甕の脚台部。概ね先述のSH468の時期のものであろう。

竪穴住居SH415出土土器(1172～1175)　1172は須恵器杯身。外面の回転ケズリは丁寧に施されている。陶邑田辺編年のTK23型式に併行しよう。1173～1175は台付甕。口縁部外面のヨコナデは2回で処理している。1175の体部下半には擬口縁が見られる。

落ち込みSZ420出土土器(1176～1178)　1176は土師器高杯の脚柱部。外面には縦方向の粗いナデを施す。1177は台付甕であろう。1178は長胴甕ないしは丸底の甕と考えられる。

竪穴住居SH463出土土器(1179～1184)　1179～1181は須恵器杯身。1181の内面底部には同心円当て具痕がある。1179と1181は陶邑田辺編年のMT85型式併行であるが、1180はやや新しくTK43型式併行と考えられる。1182は須恵器無蓋高杯。1183は土師器高杯。1184は土師器長胴甕で、頸部が締まらずに大きく開く口縁部をなす。これらの土器のうち、1184のみがやや新しい要素を持つため、遺構は古墳時代後期以降のものである可能性もある。

竪穴住居SH474出土土器(1185～1191)　1185は須恵器杯蓋。腰高で立ち上がり部がやや湾曲する。陶邑田辺編年のTK47～MT15型式に併行するものであろう。1187～1188は土師器大形鉢。口縁部形態および外面のは台付甕のそれと共通する。1189～1191は台付甕。口縁部外面のヨコナデは1回で処理している。1190の体部外面上半には、ハケメ後に横方向のナデを1単位施す。

B7区包含層出土土器(1192～1217)　遺構に伴わない、古墳時代中後期の土器類を一括する。

1192～1197・1217は須恵器。陶邑田辺編年のTK47～TK10型式のものが見られる。1198・1199・1201～1203は土師器台付鉢。脚部は、鉢部完成後その底部に貼り付けて整形する。1200・1204～1206は土師器高杯。1200は杯下部と上部を途中で断絶することなく連続整形している。1207～1210・1212～1214は台付甕。1212の体部外面上半には、ハケメ後に施された横方向のナデが見られる。1211は土師器壺。1215は土師器大形鉢。1216は土師器長胴甕。

土坑SK408出土土器(1218～1229)　1218～1220は須恵器蓋杯。陶邑田辺編年のTK10～MT85型式に併行するものであろう。1221は土師器鉢。丸底であるが、外面にケズリは見られない。1222～1225は土師器高杯。1222は、杯上部の成形前に擬口縁をなす。1226は土師器で甑の把手か。体部に穿孔して把手部を挿入付加する方法である。1227～1229は土師器甕。いずれも長胴甕ないしは丸底甕になると考えられる。

焼土SF461出土遺物(1230・1231)　1230は石製紡錘車で、滑石製である。中央部が若干高くなり、面をなしている。1231は土師器長胴甕。概ね先述のSZ367に併行する時期のものであろう。

竪穴住居SH479出土遺物(1232～1236)　1232・1233は須恵器蓋杯。陶邑田辺編年のTK209型式に併行するものか。1232は口縁部が大きく開き、やや腰高となる。1234は土師器で、高杯の杯部と考えられる。1235は土師器甕。1236は砥石で、4面の研磨部があり、1面には線状の削痕がある。

落ち込みSZ416出土土器(1237～1242)　1237～1241は土師器甕。長胴になると考えられるもの(1237・1238)と、小形で丸底になるもの(1239～1241)がある。1242は土師器大形鉢と考えられる。

(伊藤)

d　飛鳥・奈良時代の遺物

竪穴住居SH492出土遺物(1243～1245)　1243は鉄製品で、刀子の一部と考えられる。1244は土師器高杯。倒立状態でカマドの支柱に利用されていた

ため、脚裾部は意図的に打ち欠かれている。1245は土師器甕で丸底となる。概ね飛鳥時代のものであろう。

竪穴住居ＳＨ380出土土器(1246～1251)　1246は土師器杯で、口縁端部を内側に丸め込む。口縁部外面にのみミガキを施す。1247～1250は土師器甕。いずれも丸底を呈するものであろう。1250はカマドの支柱として倒立状態で利用されていた。1251は土師器で台付椀の脚台か。

土器群ＳＺ493出土土器(1252・1253)　いずれも土師器長胴甕である。奈良時代のものであろう。

竪穴住居ＳＨ374出土土器(1254～1264)　1254～1256は土師器杯。1254は内外面に丁寧なミガキを施し、口縁部内面には斜放射暗文がある。1256もわずかに暗文が残っている。1257～1264は土師器甕類。小形のものと長胴のものとがある。1262～1264はカマド煙道に用いられていたため、底が意図的に打ち抜かれている。これらは概ね都城編年の平城Ⅳ～Ⅴに併行すると考えられる。

土坑ＳＫ411出土土器(1265)　須恵器杯蓋を図示した。陶邑田辺編年のＴＫ217型式に併行すると考えられる。

竪穴住居ＳＨ538出土土器(1266・1267)　1266は須恵器杯身。陶邑田辺編年のＴＫ217型式に併行するものか。1267は土師器甕。

竪穴住居ＳＨ376出土土器(1268～1272)　1268・1269は土師器杯。1269は外面に丁寧なミガキ、内面には２段の斜放射暗文を施す。口縁端部は丸く、内側にやや肥厚する。1270は土師器皿。口縁端部は内外面にやや肥厚する。1271・1272は土師器甕で小形である。これらは概ね都城編年の平城Ⅱに併行するものであろう。

竪穴住居ＳＨ478出土土器(1273)　土師器甕を図示した。概ね奈良時代前半のものであろう。

溝ＳＤ483出土土器(1274)　須恵器杯蓋を図示した。概ね奈良時代前半のものであろう。

土坑ＳＫ390出土土器(1275)　志摩式製塩土器である。奈良時代の範疇で考えてよかろう。

溝ＳＤ472出土土器(1276)　挿入付加手法によって取り付けられる把手である。時期は決しがたいが、把手付椀の可能性を考え、一応ここに含め置いた。

落ち込みＳＺ404出土土器(1277～1280)　1277は須恵器杯蓋。外面の一部に布目の圧痕が残る。整形時に用いた道具のひとつであろうか。1278は須恵器杯身。1279・1280は土師器甕。概ね都城編年の平城Ⅱに併行しよう。

土器群ＳＺ425出土土器(1281～1297)　1281は須恵器皿。内面には煤が付着している。1282は須恵器高杯の脚柱部。長脚二段透かしになると考えられる。他の土器よりも古く、混入であろう。1283～1297は土師器甕。1290は鉢かも知れない。いずれも口縁端部外側に比較的明瞭な面をなす。口縁端部が内側に突出するものや内側に折り返されているようなものもある。この土器群は都城編年の平安Ⅰに概ね併行しよう。

Ｂ７区ピット出土土器(1298～1310)　Ｂ７区第２面のピット出土土器を一括した。1298～1301は古墳時代前期の土器。1299は口縁端部外面に刻目を施すもので、三河地域以東からの搬入品の可能性がある。1302は古墳時代後期頃の土師器壺の口縁部。1303～1306は須恵器。1305は高杯で、内面にヘラ記号がある。1306は高杯の脚部と考えられる。小さな三角形状の透かし孔が一部残存している。1307は掘立柱建物ＳＢ595を構成するピットから出土した土師器皿。都城編年の平城Ⅳに併行するものであろう。

Ｂ７区包含層出土遺物(1311～1349)　古墳時代後期から平安時代にかけての、遺構伴わない遺物を掲載した。特徴的なものを記述する。

1315は土師器高杯。口縁部外面に櫛状工具による横線文と考えられるものがある。古墳時代後期あるいは中期のものである可能性もある。1318は土師器杯で、前述のＢ5区ＳＫ554とほぼ同じ時期かやや後出のものであろう。平安時代前期頃と思われる。

1325～1329は須恵器杯身。陶邑田辺編年のＴＫ209～ＴＫ217型式に併行するものであろう。1330～1333の須恵器は、奈良時代前後のものである。1338は須恵器杯蓋と考えられる。上部には木葉を模したと思われるヘラ記号がある。1341は土師器で、前出の330のような形態となるものであろう。７世紀前半頃のものであろう。1337は須恵器甑で、体部に穿たれた注口は使用時と思われる破損が見られる。　(伊藤)

6　出土木製品

今回の調査区では、井戸を中心に数点の木製品が出土した。後述のSE567以外では、B2区SE522から刳り抜きの井戸枠と側枠（横板）が、Ｂ２区ＳＥ513からは曲物の残片が出土している。

井戸ＳＥ567出土木製品(1350～1356)　1350は下駄。一木作りのものである。鼻緒の位置関係から右足用と考えられるがはっきりしない。下駄歯は使い込みが激しく。とくに後側はほとんど残っていない。表面は腐朽が進行している。

1351・1352は曲物。いずれも底部を抜き、入れ子状態で井筒として用いられていた。ともに、内側に縦方向の切り込みを入れて曲げやすくしている。1351は、直径約34.5cm、高さ約24.0cm。側枠が完存しており、底部には底を留めていた目釘穴が見られる。２条のタガ枠が見られる。1352は底が欠損している。直径約40.8cmで、タガ枠は２条分残っている。

1353～1356は井戸側枠最下段の横板。東・西面が凸、南・北面が凹となって組み合わせている。一部腐朽が進行しており、南面（1354）の孔はそれによるものである。板材は、1355を除きいずれも原材の外縁部で、外皮を除去しただけの状態である。内法は、最も狭い南面で66.0cm、最も広い北面で70.8cmで、その差は５cm近くある。したがって、ほぼ正方形であるとはいえ、かなりの歪みが生じている。このように、この井戸に見られる側枠は、第２次調査で検出したＢ７区井戸ＳＥ233（『嶋抜』Ⅱ）と同様な手法ながら、非常に粗雑なものといえる。

この他に、井戸側枠の外側に用いられた縦板がある。調査時に湧水が吹きあがったため、１枚だけしか取り上げられなかったので、図示はしなかった。

（伊藤）

＜註＞

(1) 以下の分類に関しては、付編１を参照されたい。

(2) 鈴木敏則「遠江・駿河（後期）」（『YAY!』弥生土器を語る会　1996年）

(3) 鈴木敏則氏（浜松市教育委員会）の御教示による。（渡井英誉・竹内順一「大廓式と呼ばれる大型壺－大廓式土器の成立と移動」『静岡県考古学研究』31　静岡県考古学会　1999年）

(4) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）

(5) 古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(6) 伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」（『嶋抜』Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター　2000年）

(7) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　1986年）

(8) 藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990年）ほか

(9) 石黒立人ほか『朝日遺跡』Ⅴ土器編・総論編（（財）愛知県埋蔵文化財センター　1994年）

(10) 田口一郎『元島名将軍塚』（高崎市教育委員会　1981年）

(11) 岩本貴『元島遺跡』Ⅰ（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999年）

(12) 比田井克仁「南関東における庄内式併行期の土器」（『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会　1994年）などを参照した。

(13) 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』古代の土器研究会　1994年）

(14) 森本朝子「博多出土貿易陶磁分類表」（『博多－高速鉄道関係調査（1）－』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　福岡市教育委員会　1984年）・森本朝子ほか『博多』第６次調査報告（福岡市教育委員会　1986年）・森本朝子「博多出土の貿易陶磁－その分類試案（1）－」（『博多研究会誌』第５号　博多研究会　1997年）

(15) 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』No.9（1983年）

(16) 岩本貴『元島遺跡』Ⅰ（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999年）

(17) 川畑和弘氏（守山市教育委員会）の御教示による。畑本政美『守山市文化財調査報告書第５２冊　古高遺跡第７次発掘調査報告書』（守山市教育委員会　1994年）を参照した。

(18) 田中久生・川畑由紀子『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

(19) 奥野実・田上稔・坂倉一光『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

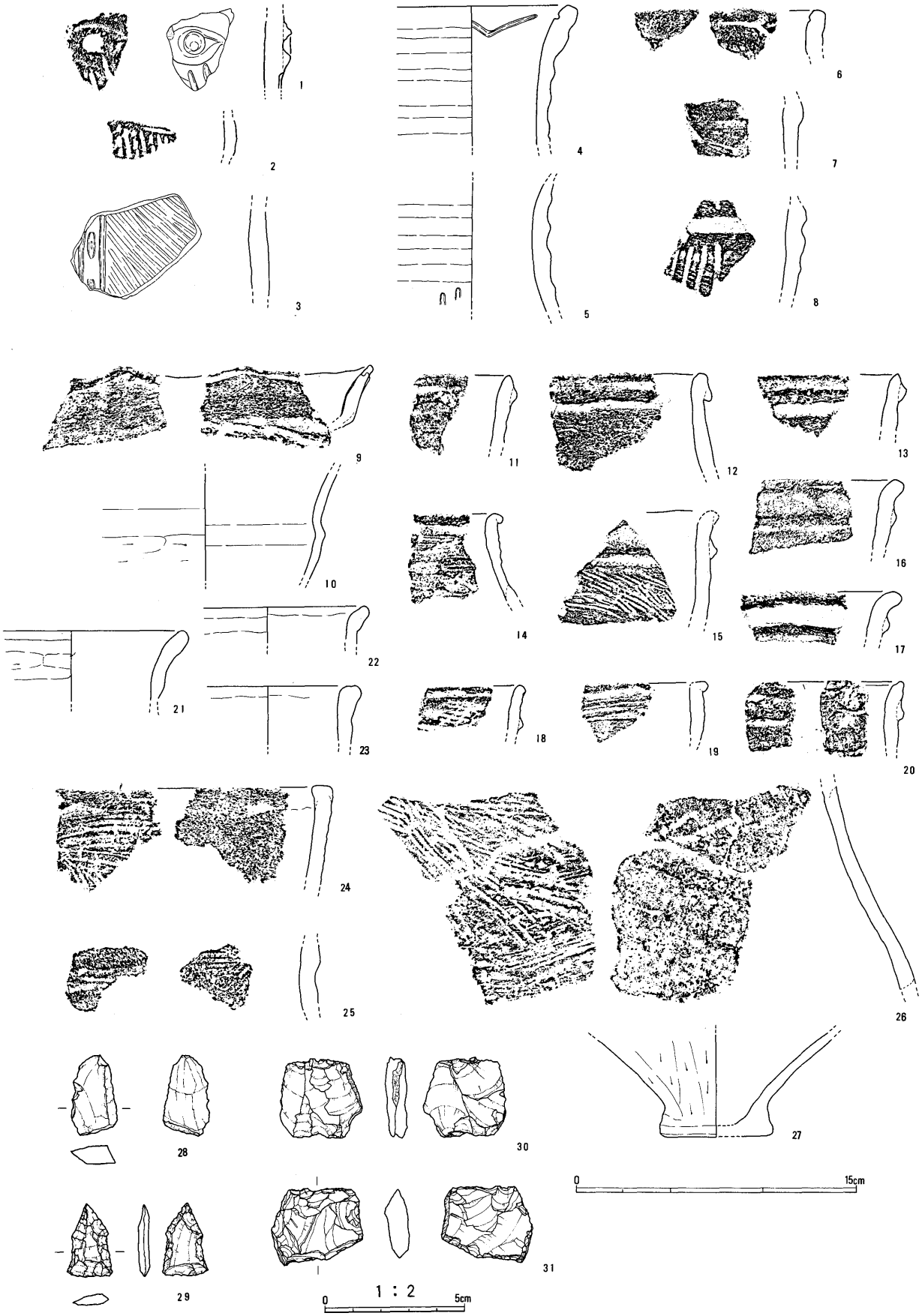


fig.46　出土遺物実測図(1)　縄文土器（1：3）石器（1：2）

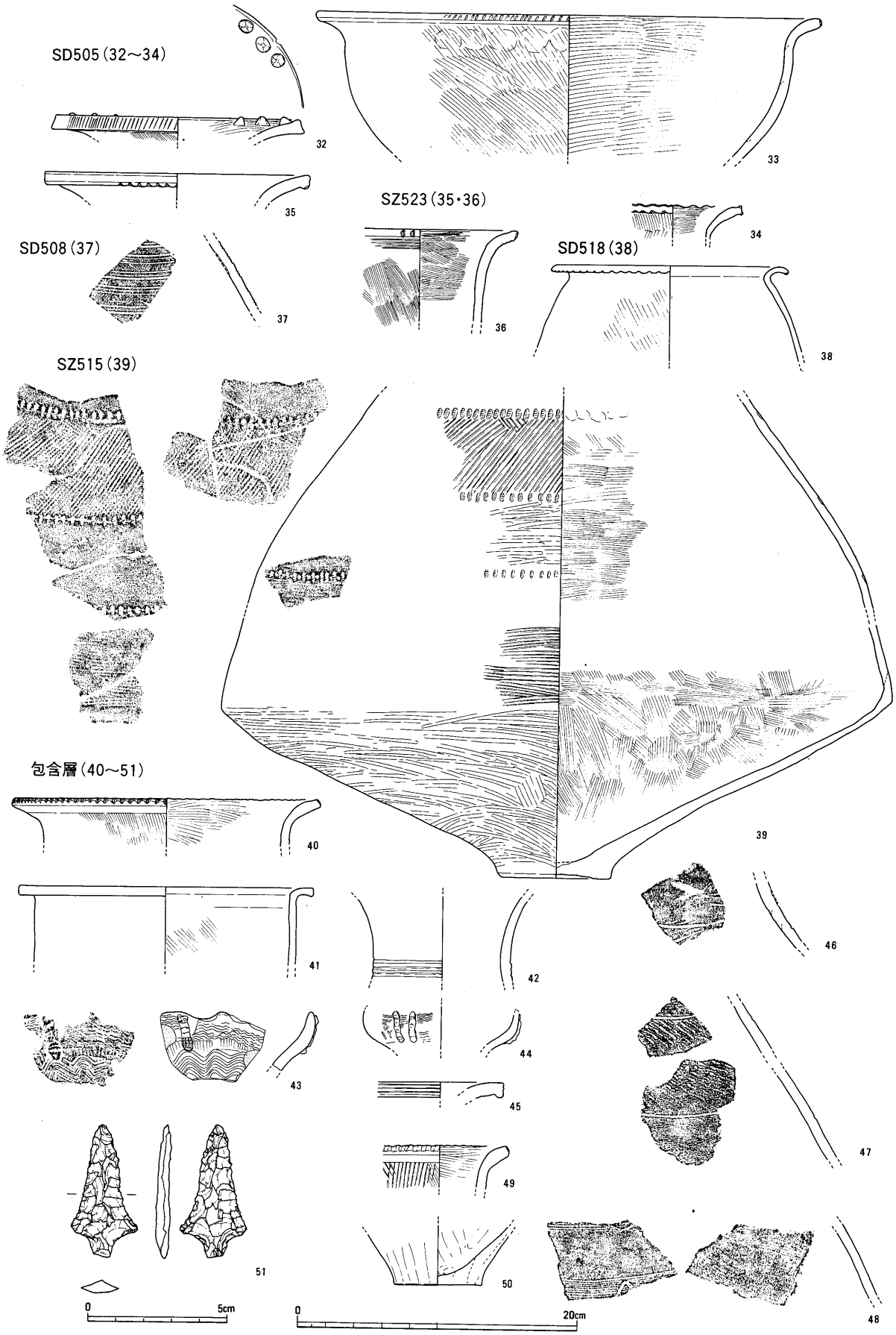


fig. 47　出土遺物実測図 (2)　B 2 区弥生

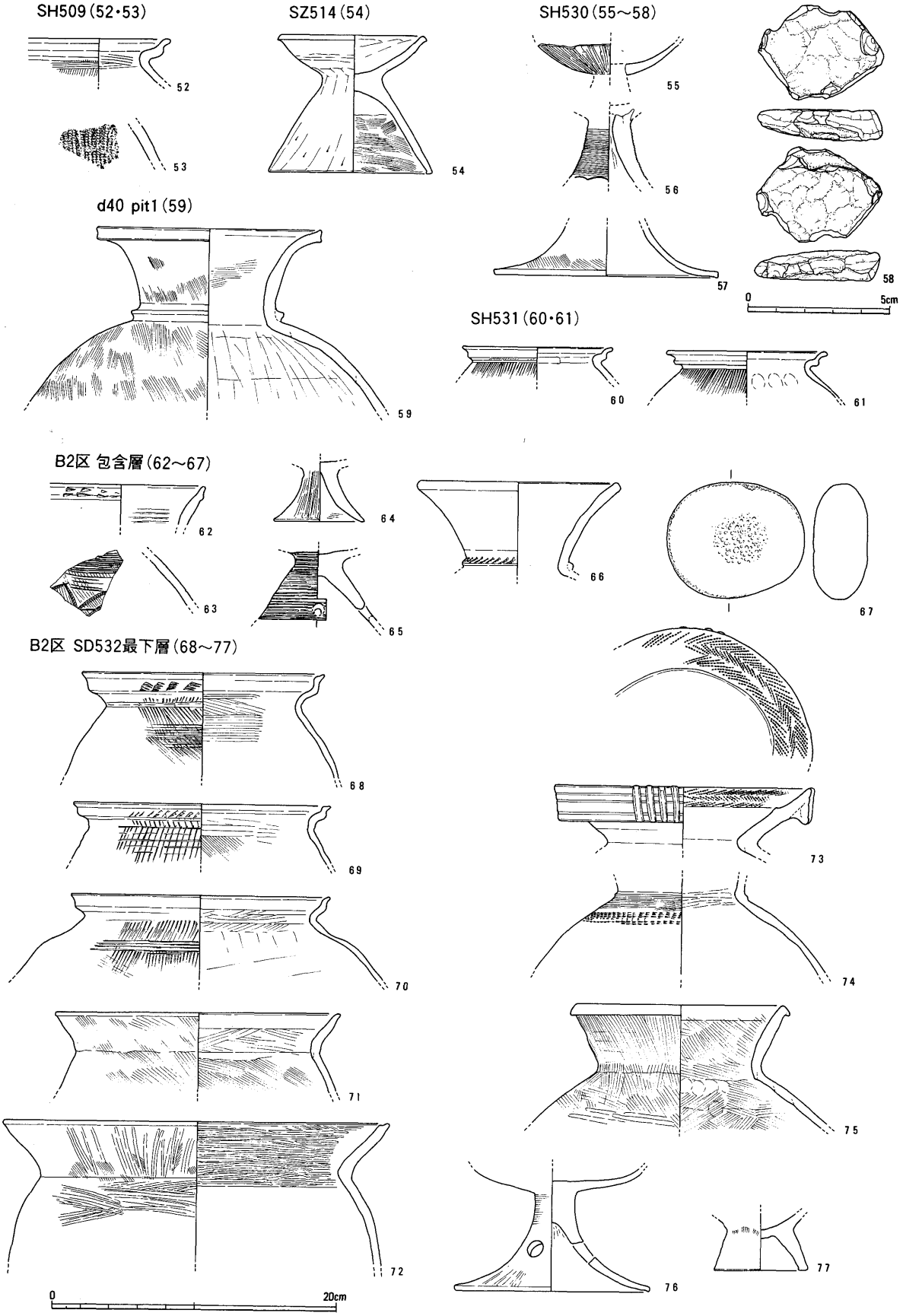


fig.48　出土遺物実測図(3) B 2 区（58 は 1 ： 2 、他は 1 ： 4 ）

B2区 SD532下層(78～102)

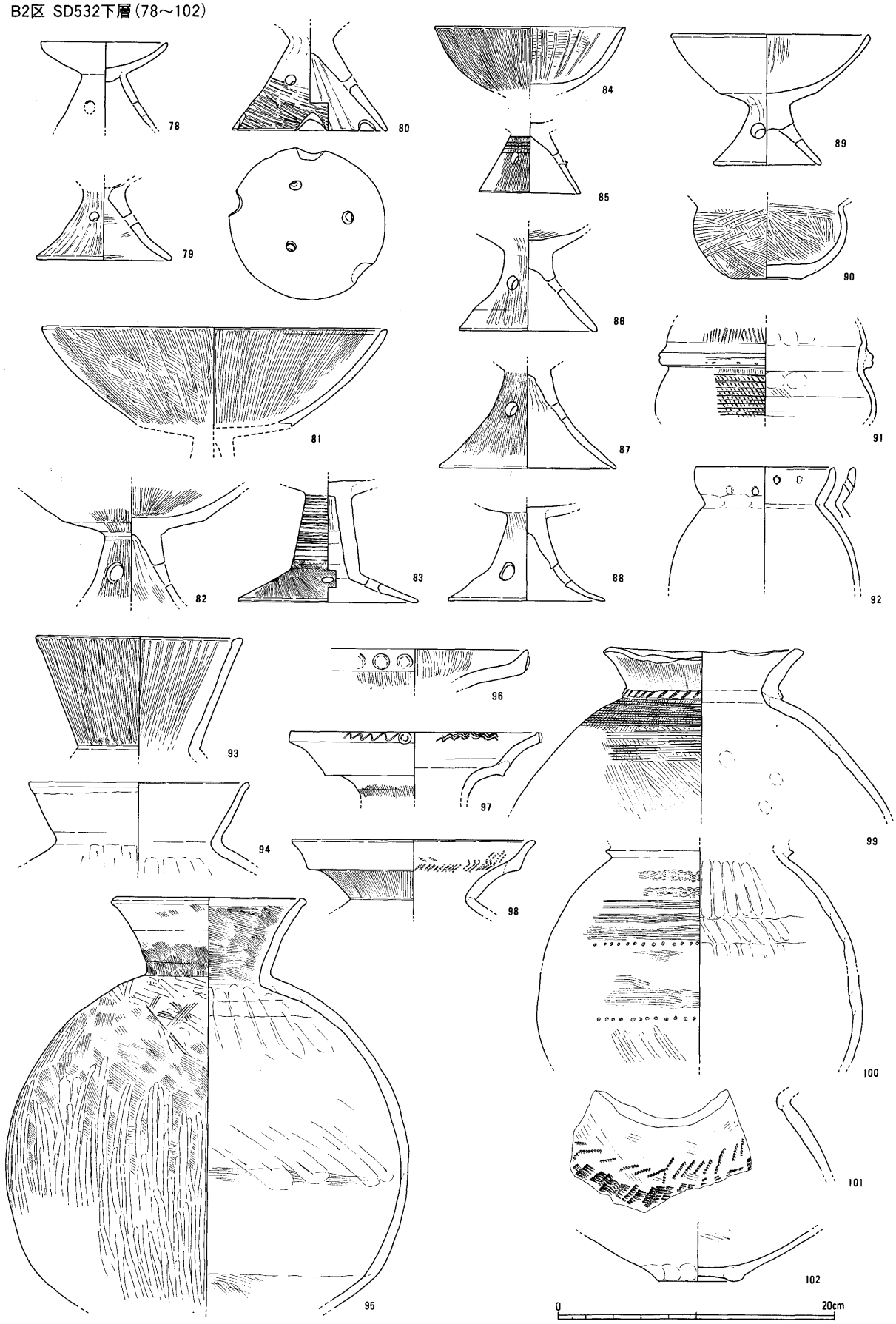


fig.49　出土遺物実測図(4) B 2区SD 532 (1：4)

SD532下層(103～134)

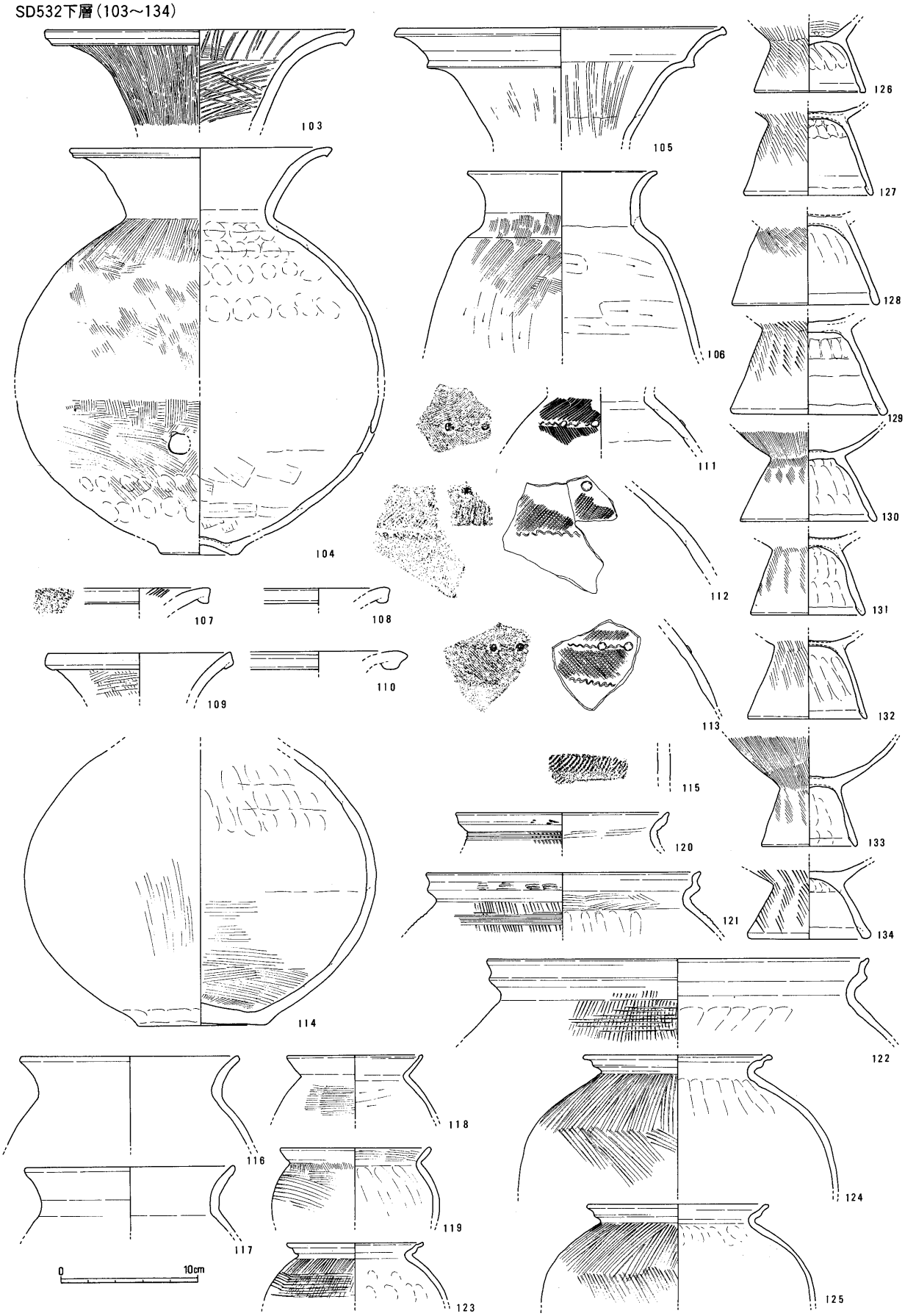


fig.50　出土遺物実測図(5)　B 2区SD 532下層（1：4）

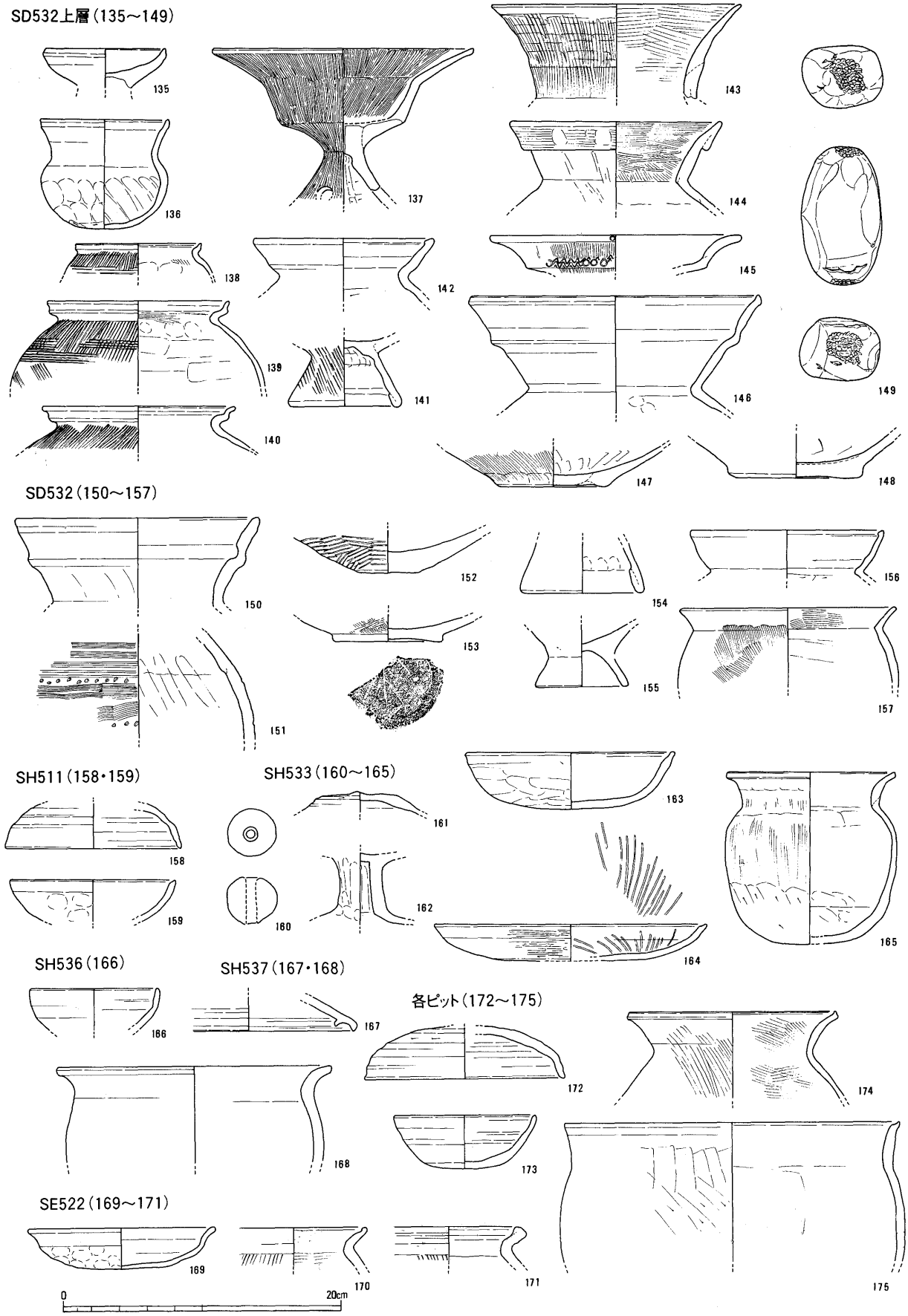


fig.51　出土遺物実測図(6)　B 2区SD 532上層ほか（1：4）

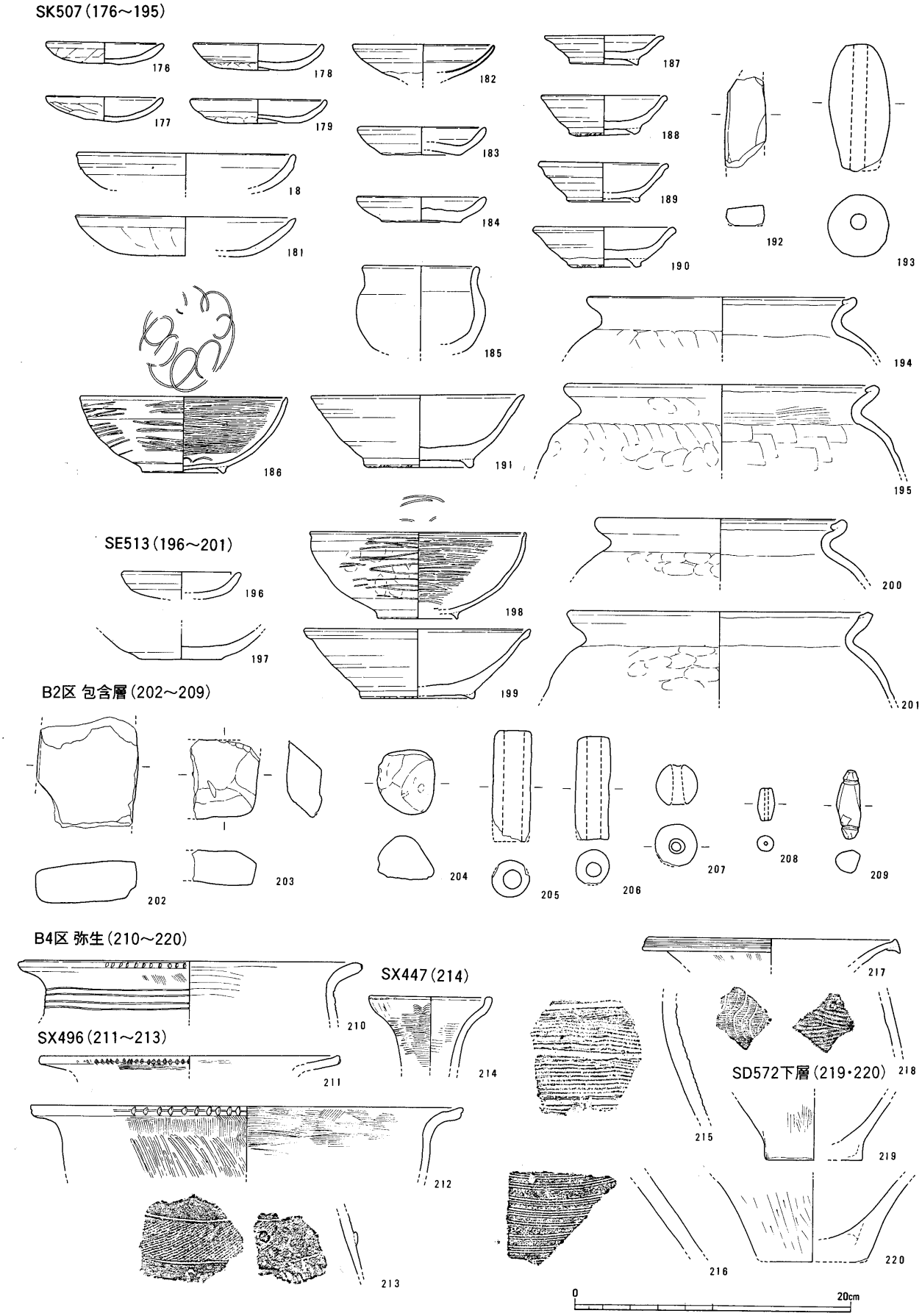


fig.52　出土遺物実測図(7) B2区・B4区 (1：4)

B4区 SD572(221～247)

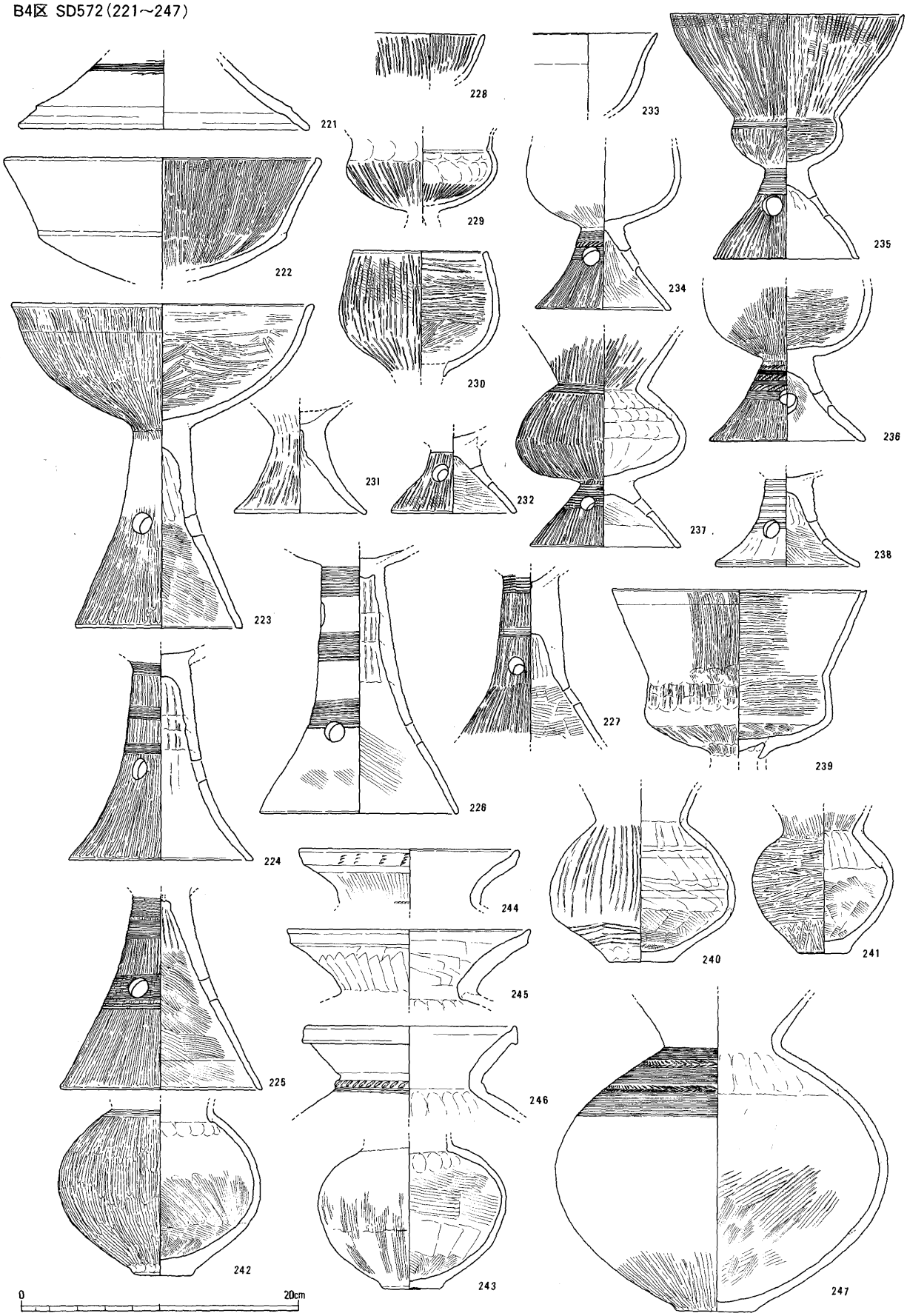


fig.53　出土遺物実測図(8)　B 4 区 S D 572　(1 : 4)

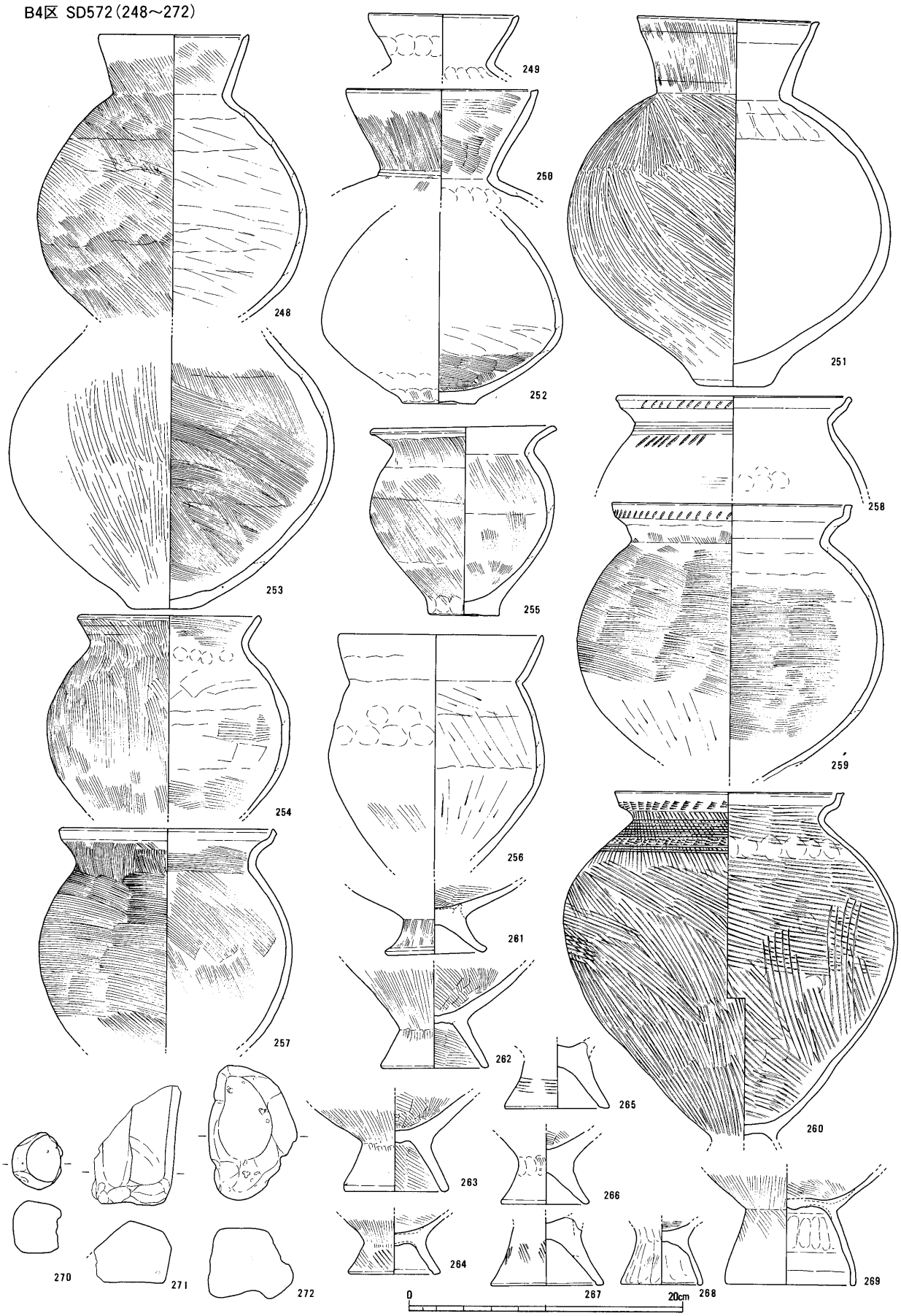


fig.54　出土遺物実測図(9)　B 4区SD 572　(1：4)

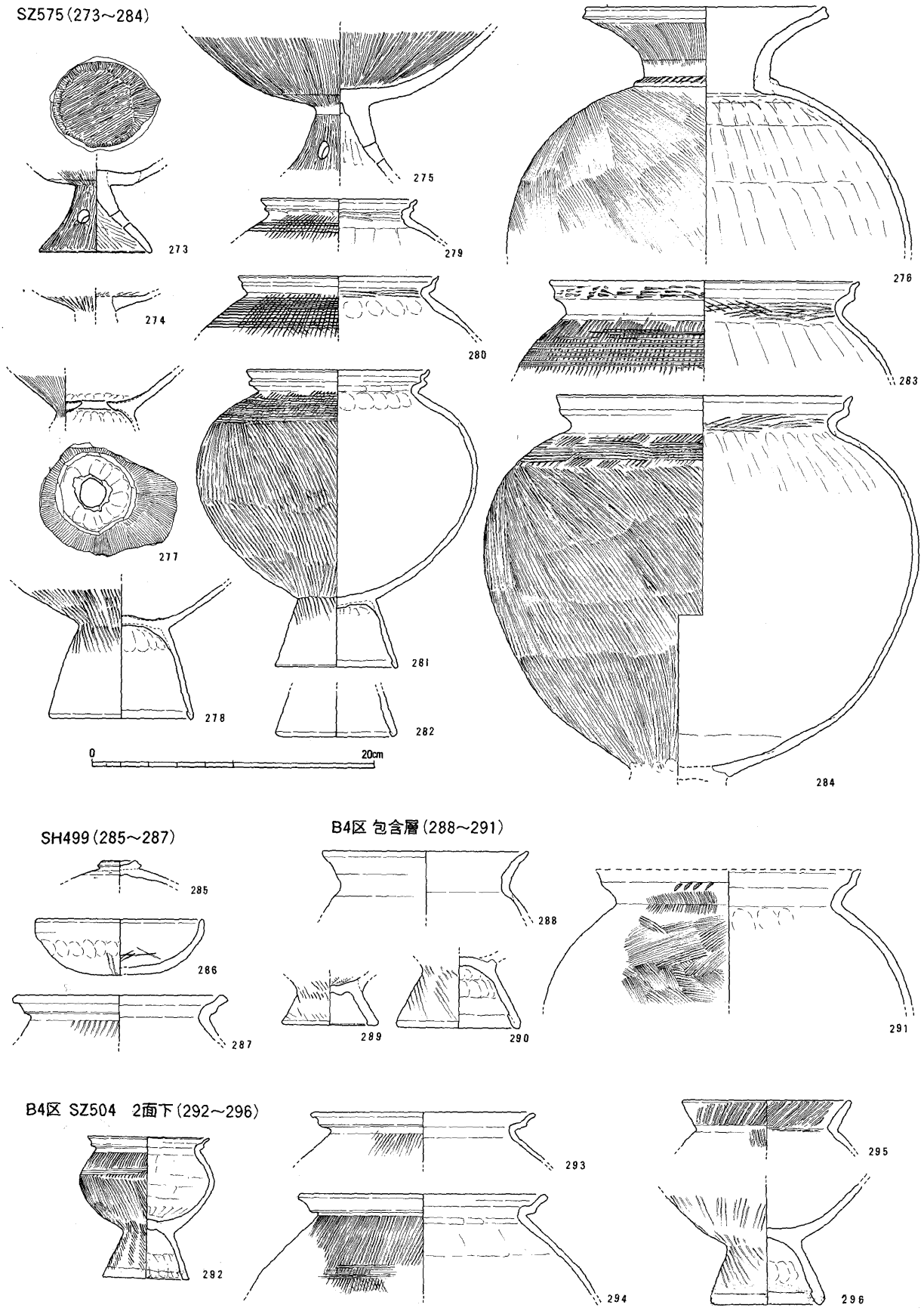


fig.55 出土遺物実測図(10) B 4区 (1 : 4)

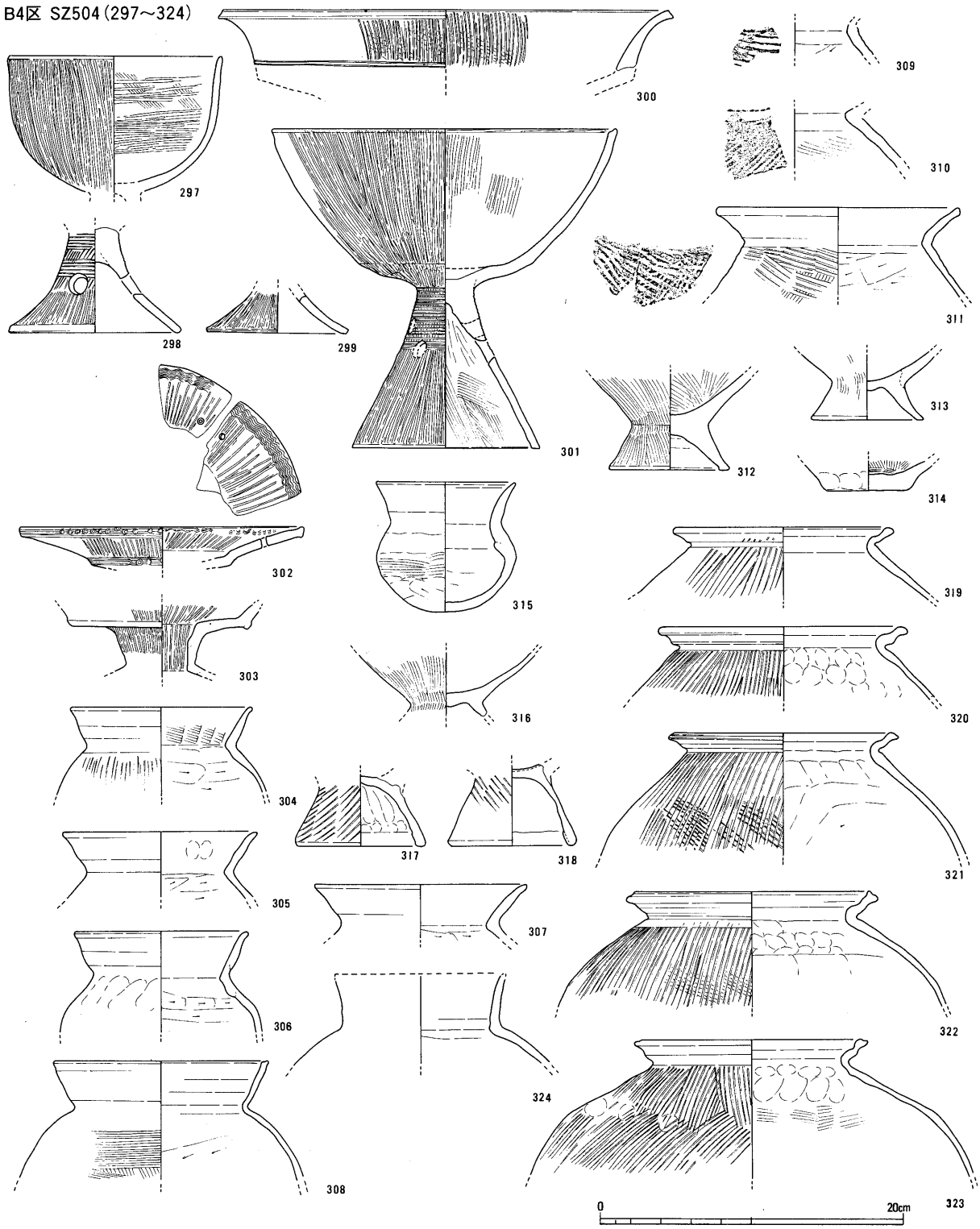


fig.56　出土遺物実測図(11) B4区SZ504 (1：4)

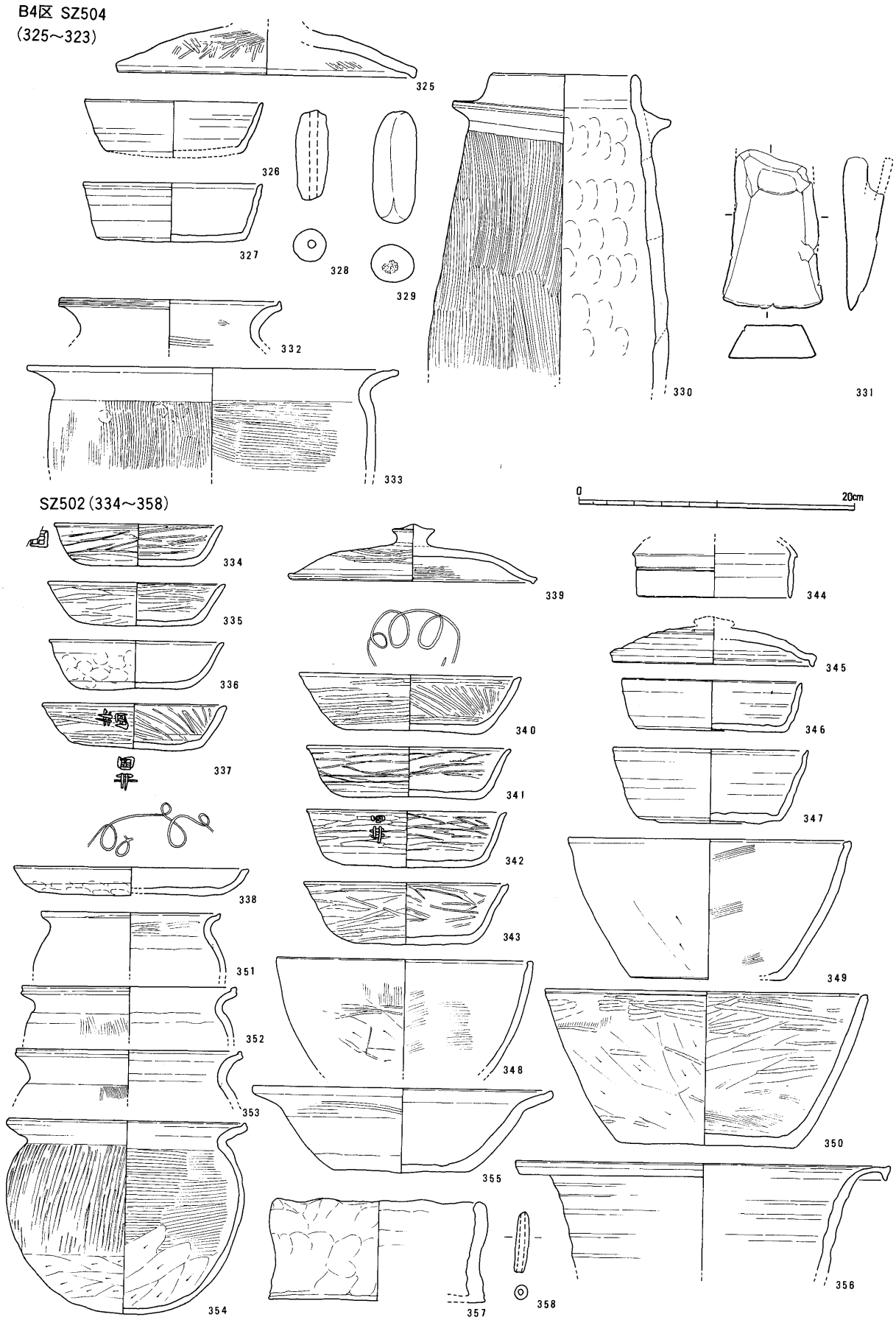


fig.57　出土遺物実測図(12) B 4区 (1：4)

SH569(359～371)

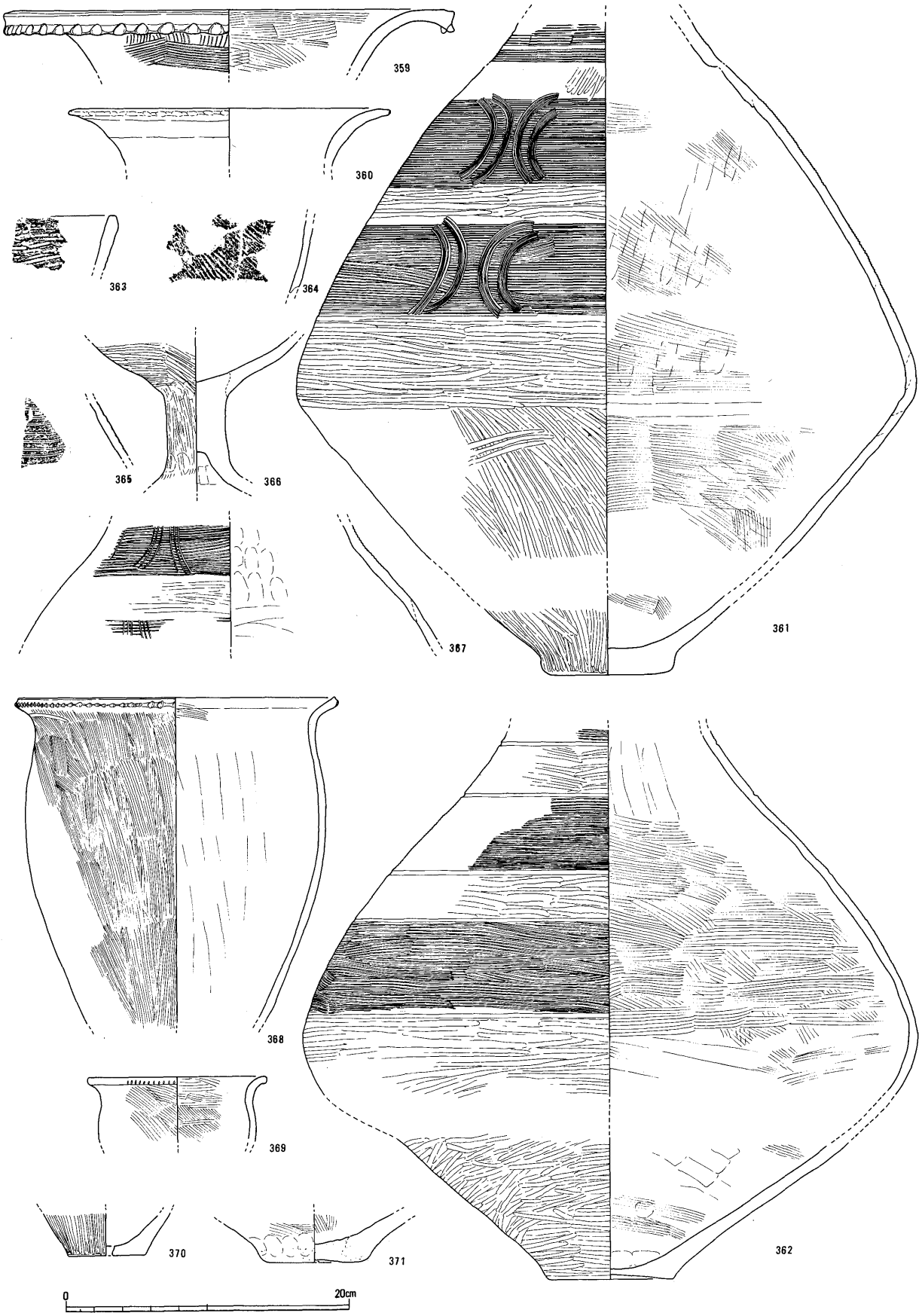


fig.58　出土遺物実測図(13)　B5区SH569　(1：4)

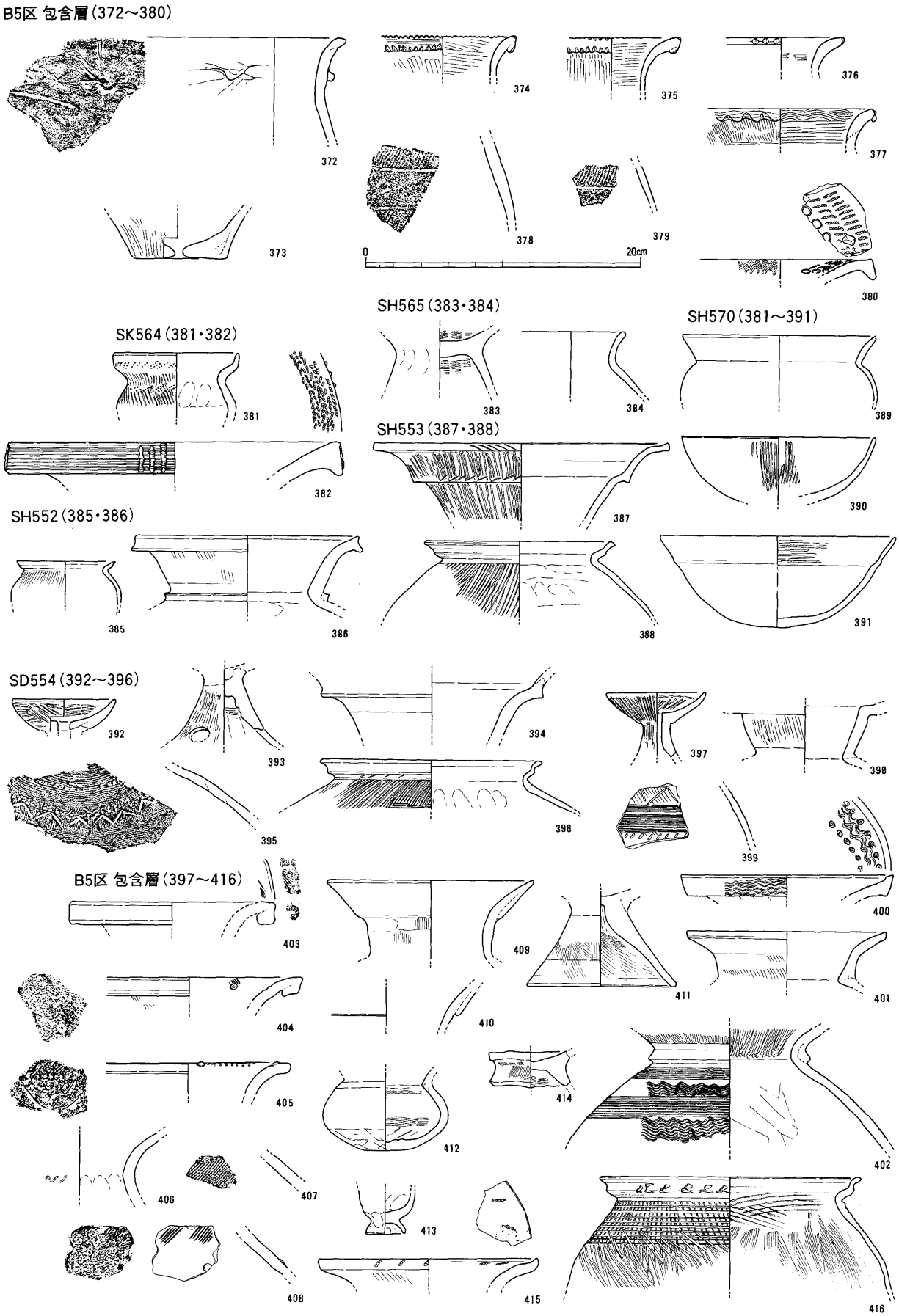


fig.59　出土遺物実測図(14)　B５区（１：４）

B5区 SD572(417～444)

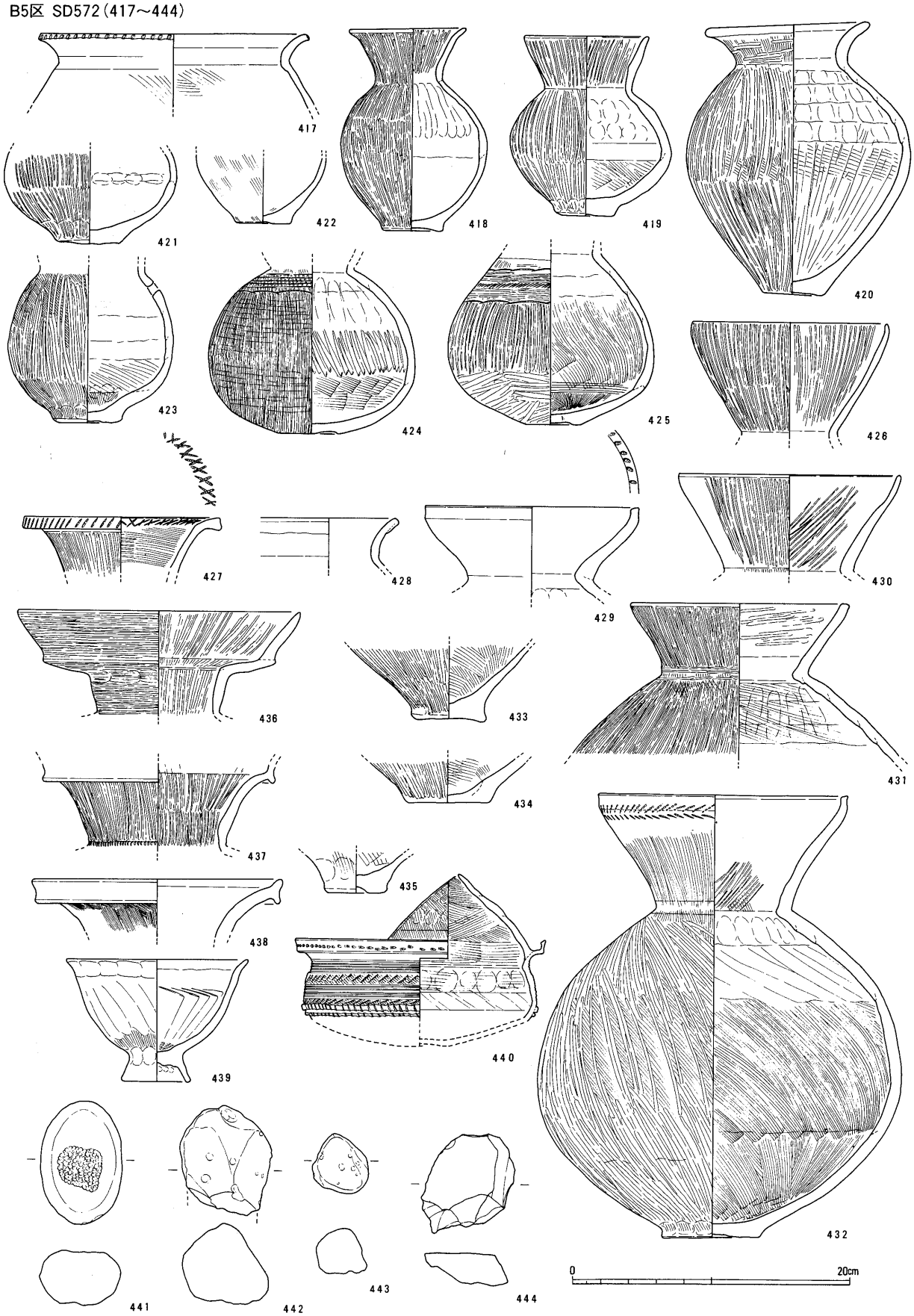


fig.60　出土遺物実測図(15) B5区SD572 (1：4)

B5区 SD572(445～479)

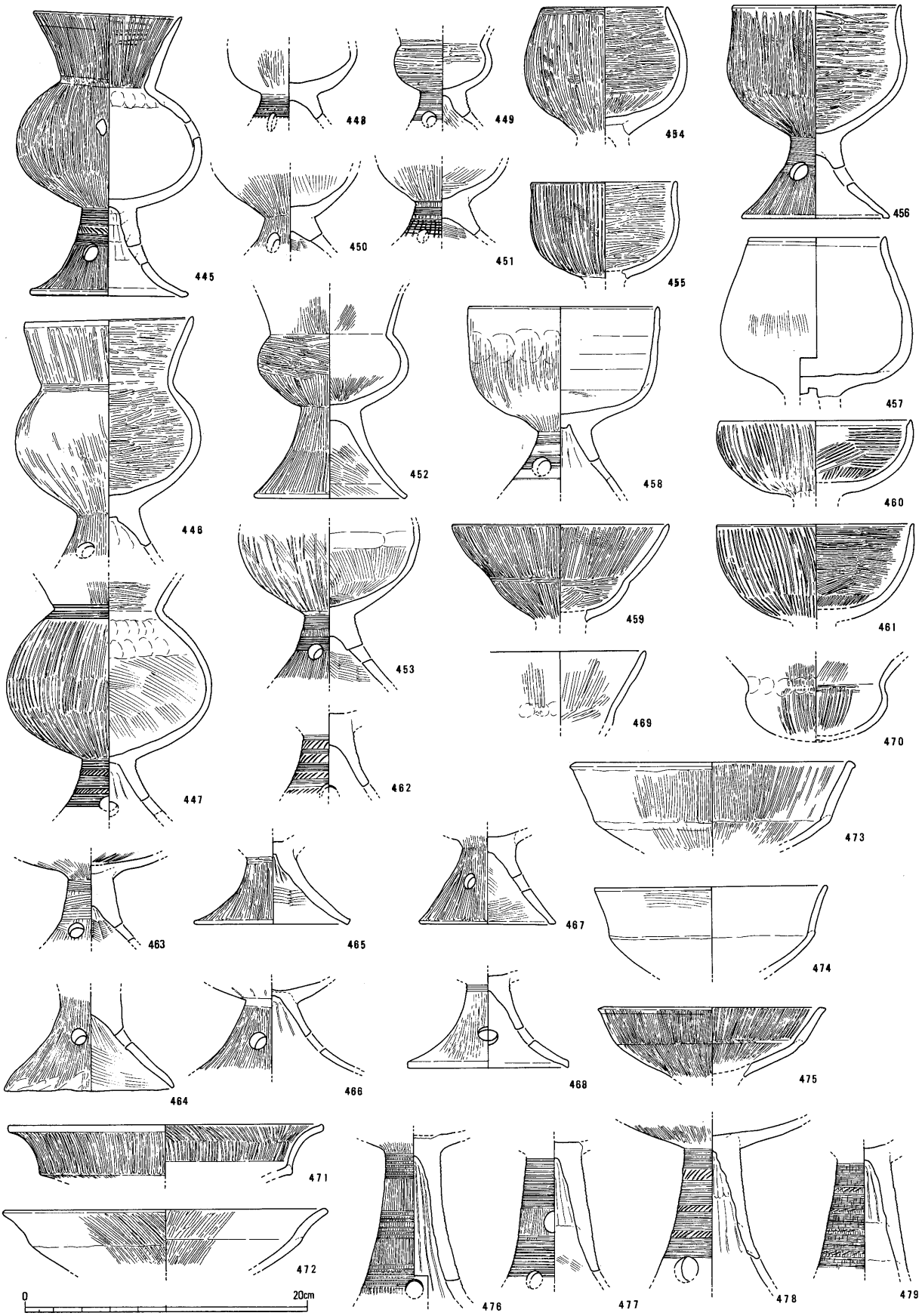


fig.61　出土遺物実測図(16) B5区SD572 (1：4)

B5区 SD572(480～498)

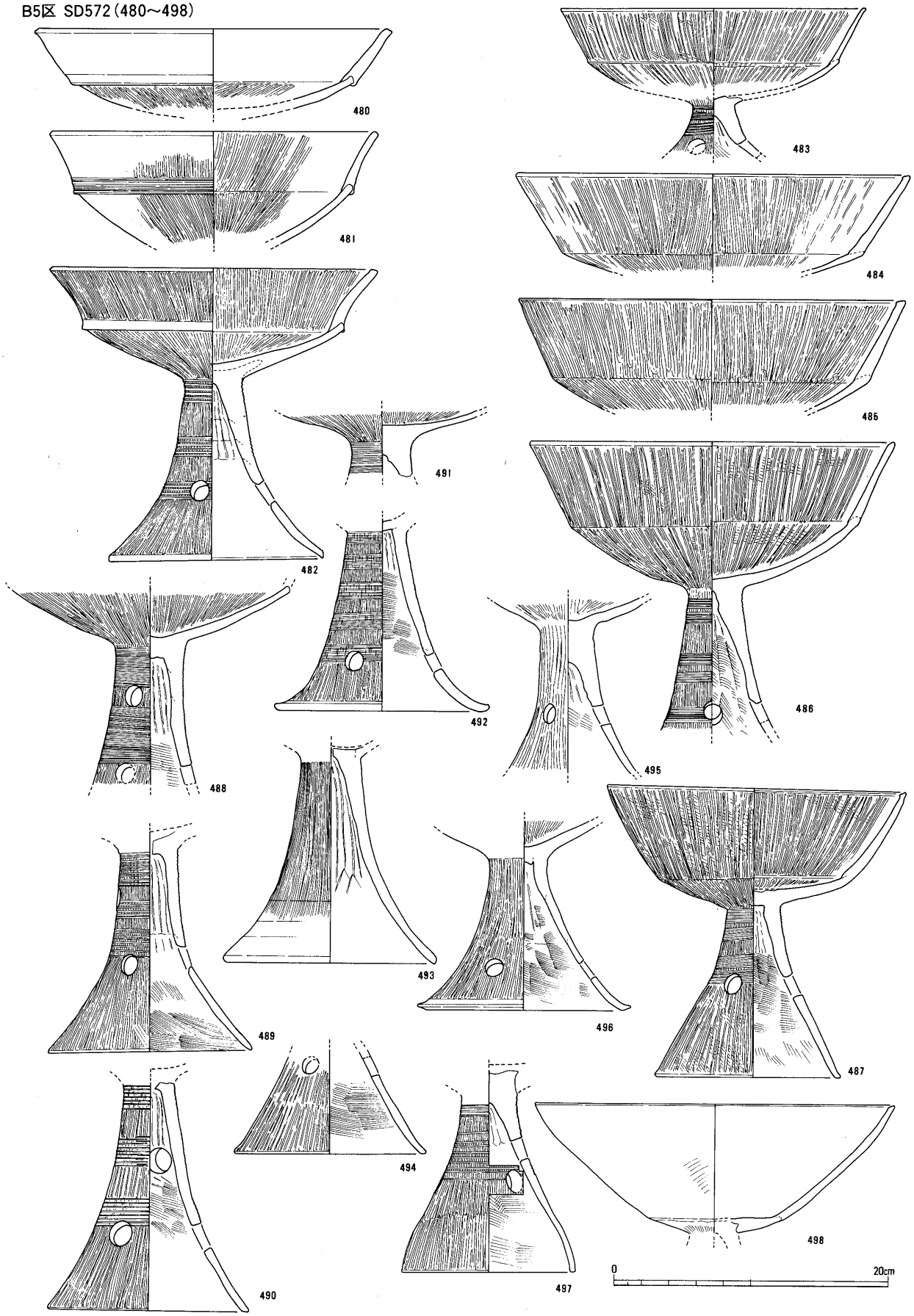


fig.62　出土遺物実測図(17) B 5区SD 572 (1：4)

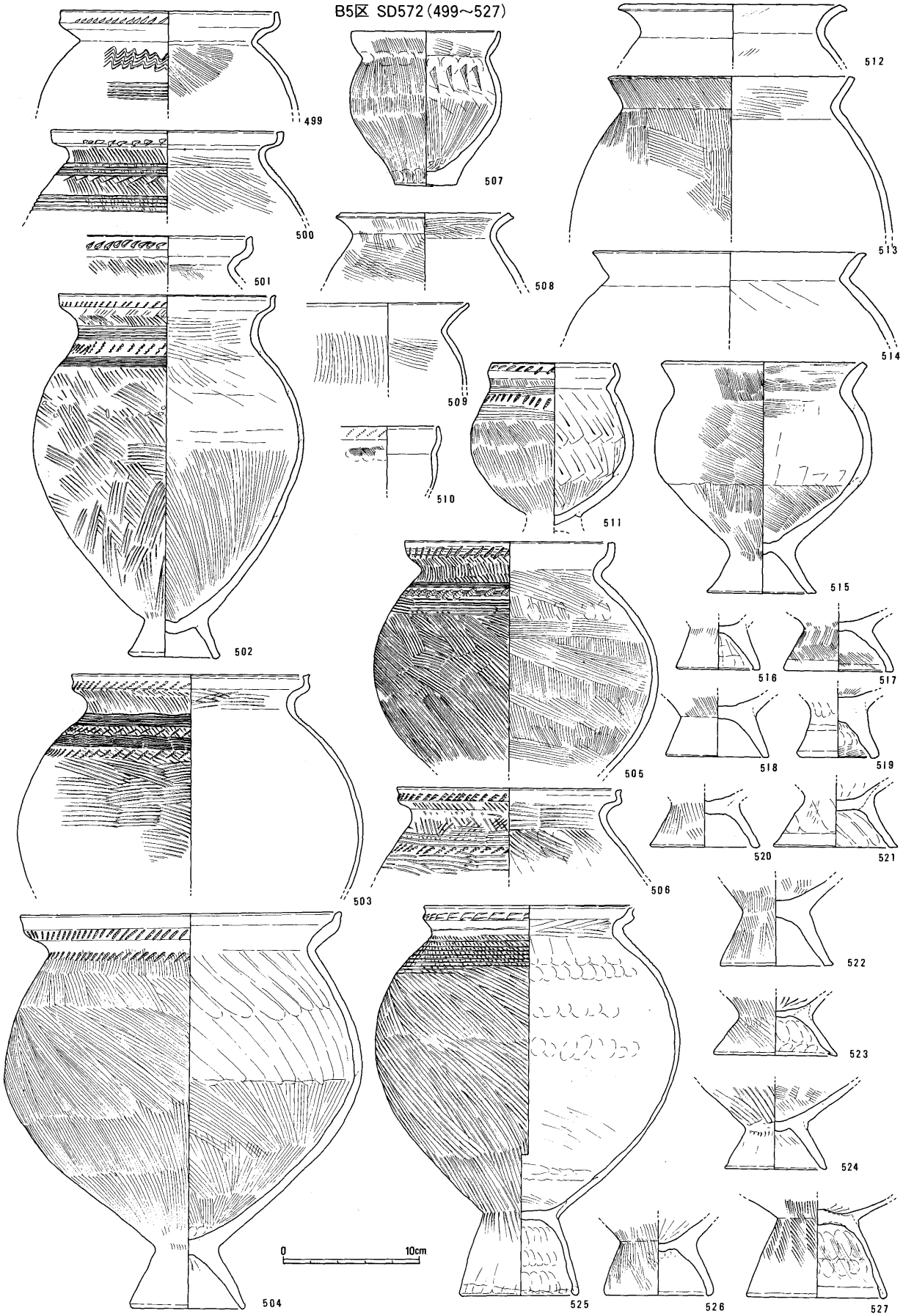


fig.63　出土遺物実測図(18) B5区SD572 (1：4)

B5区 SD532最下層(528～573)

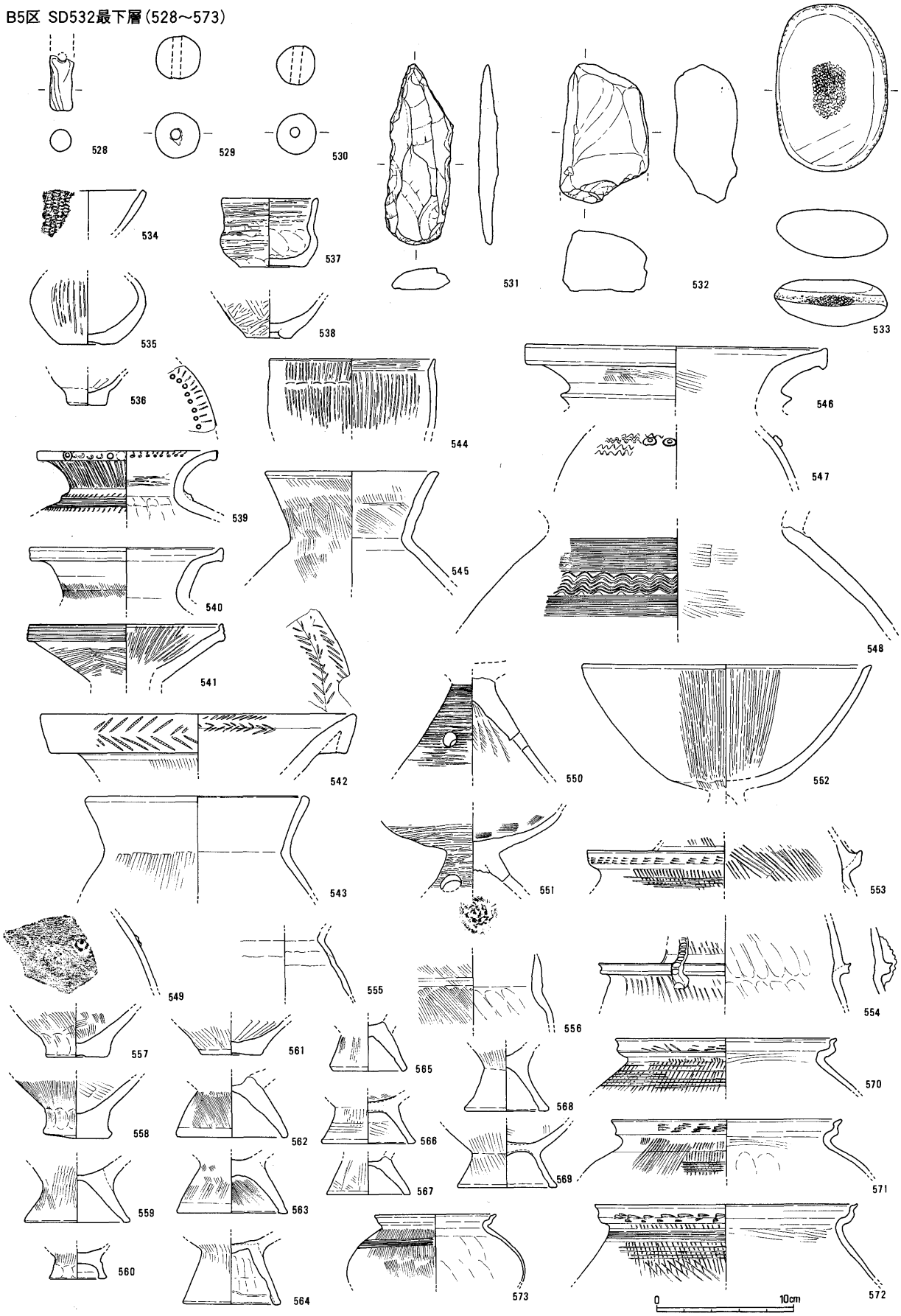


fig.64 出土遺物実測図(19) B5区SD532 (1：4)

B5区 SD532下層(574～613)

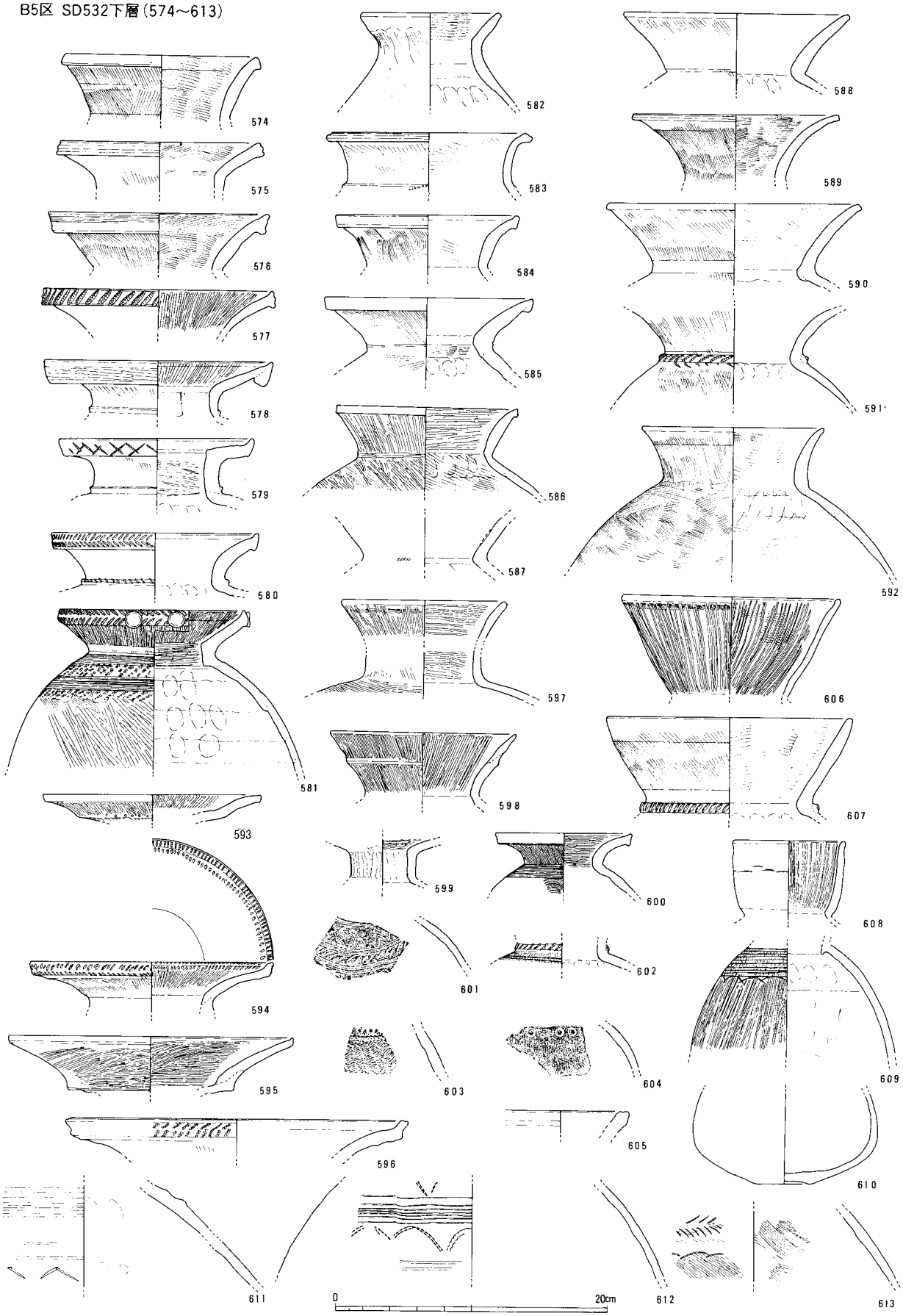


fig.65　出土遺物実測図(20) B５区ＳＤ532 (１：４)

B5区 SD532下層(614～669)

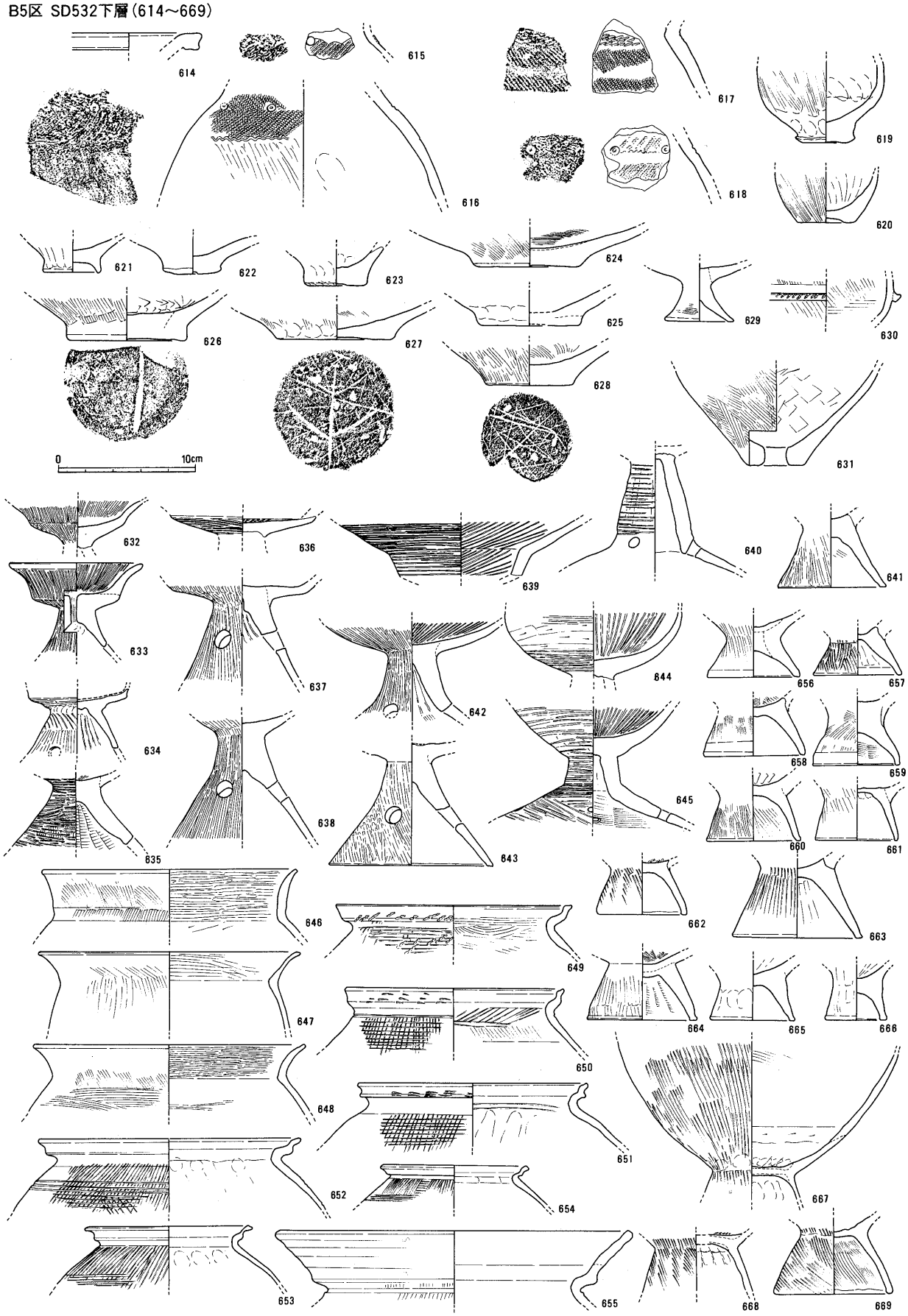


fig.66　出土遺物実測図(21) B 5区SD 532 (1：4)

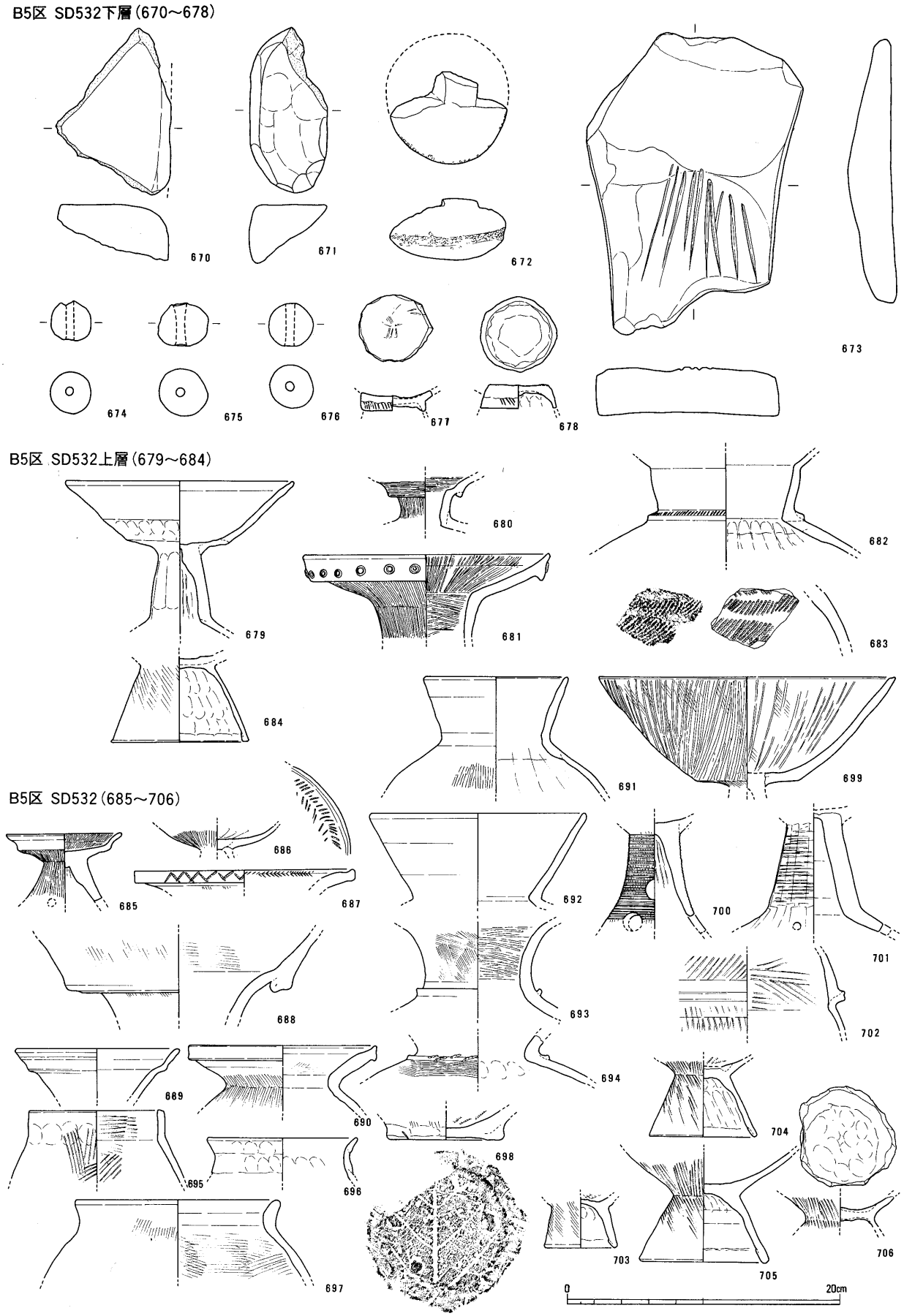


fig.67　出土遺物実測図(22) B5区SD532 (1：4)

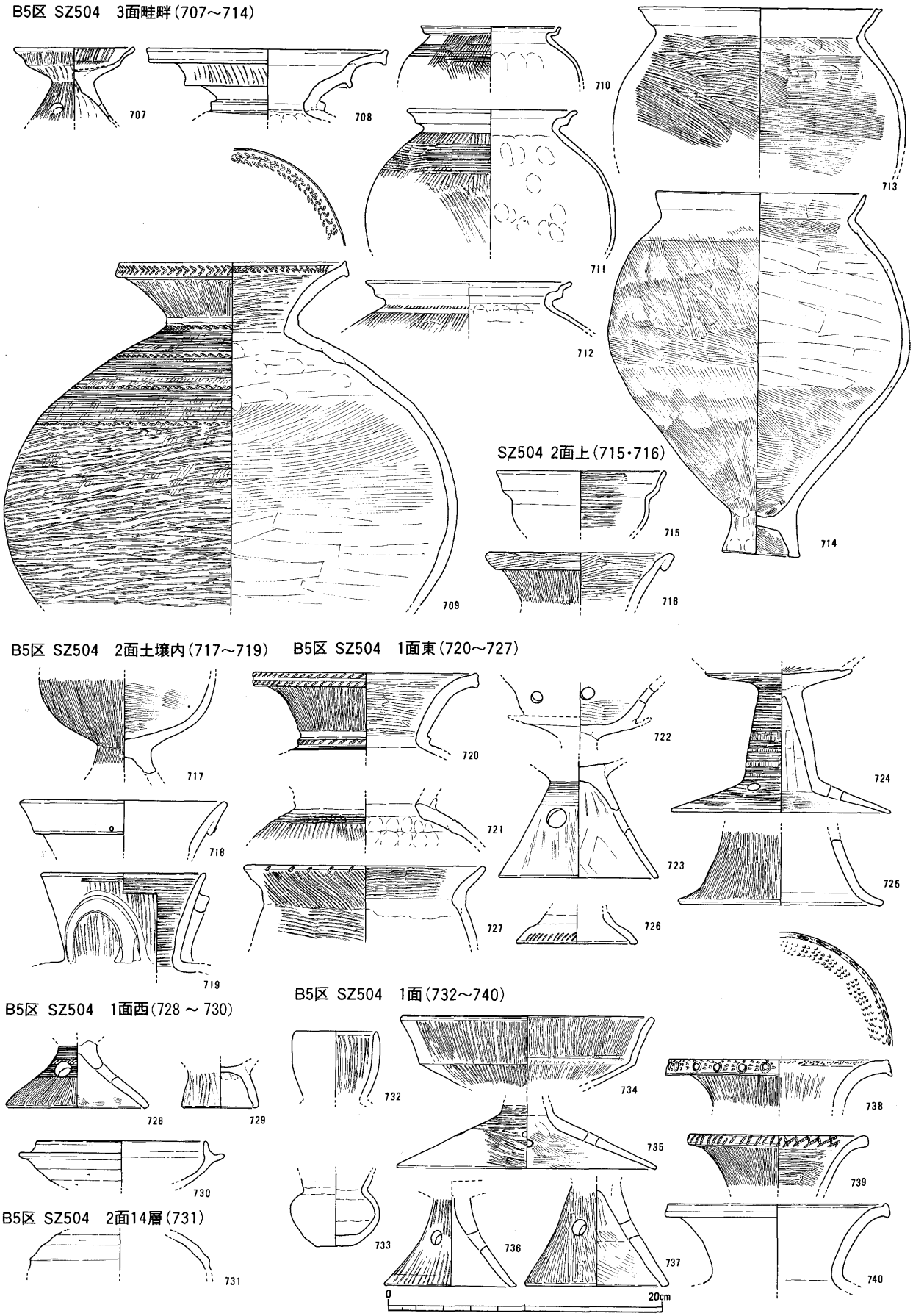


fig.68 出土遺物実測図(23) B 5 区 S Z 504 (1 : 4)

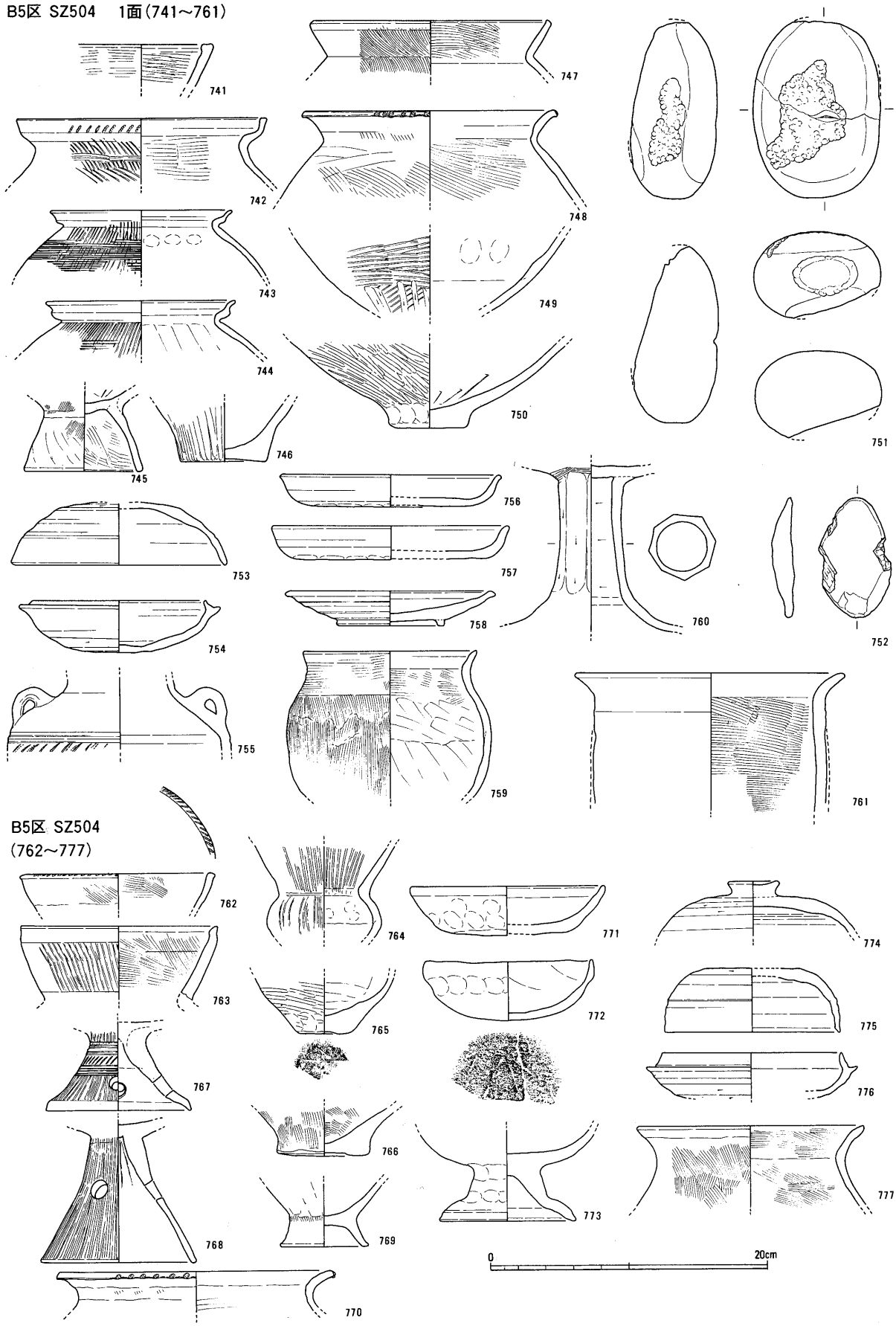


fig.69　出土遺物実測図(24)　B 5 区 S Z 504

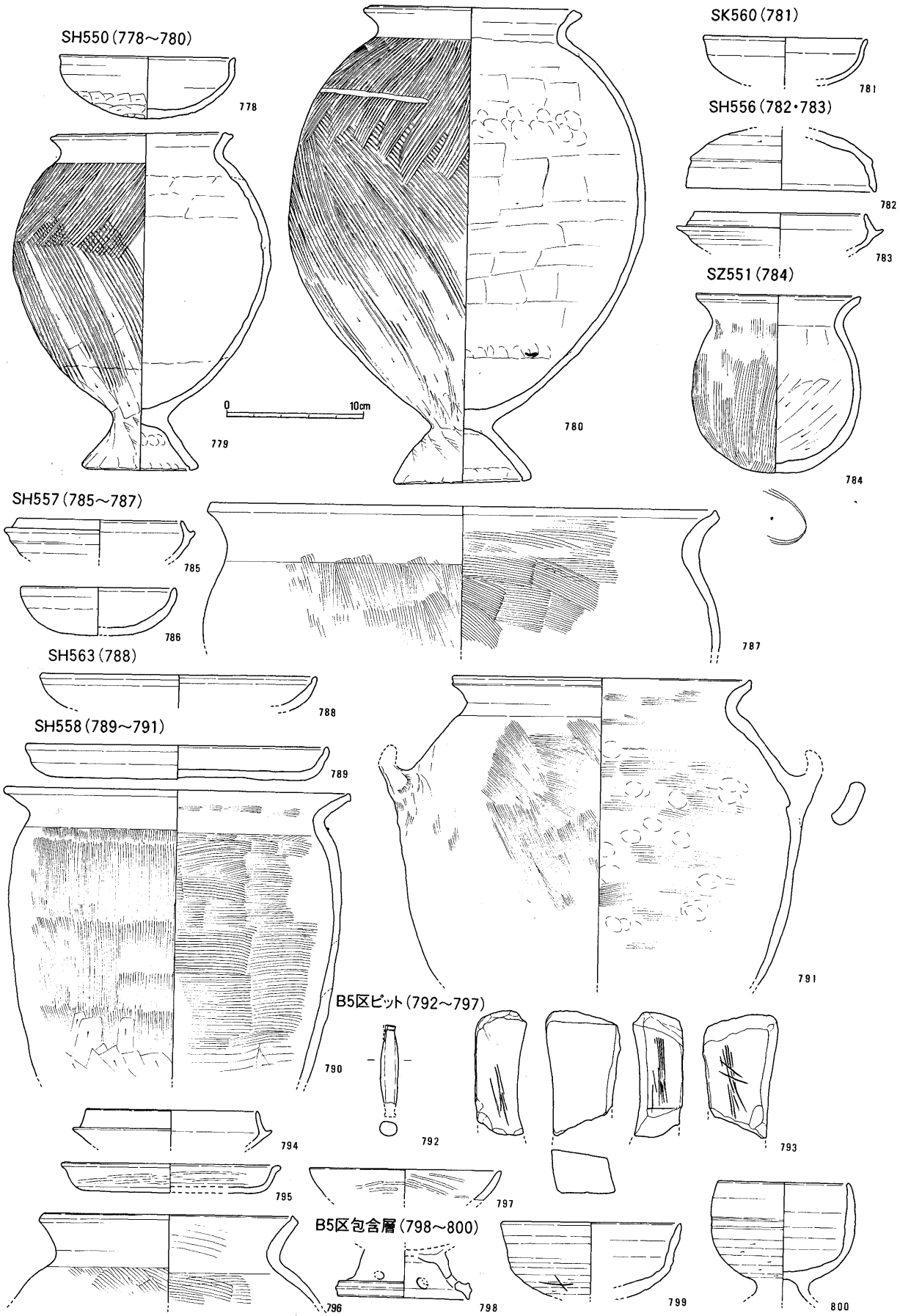


fig.70　出土遺物実測図(25)　B５区（１：４）

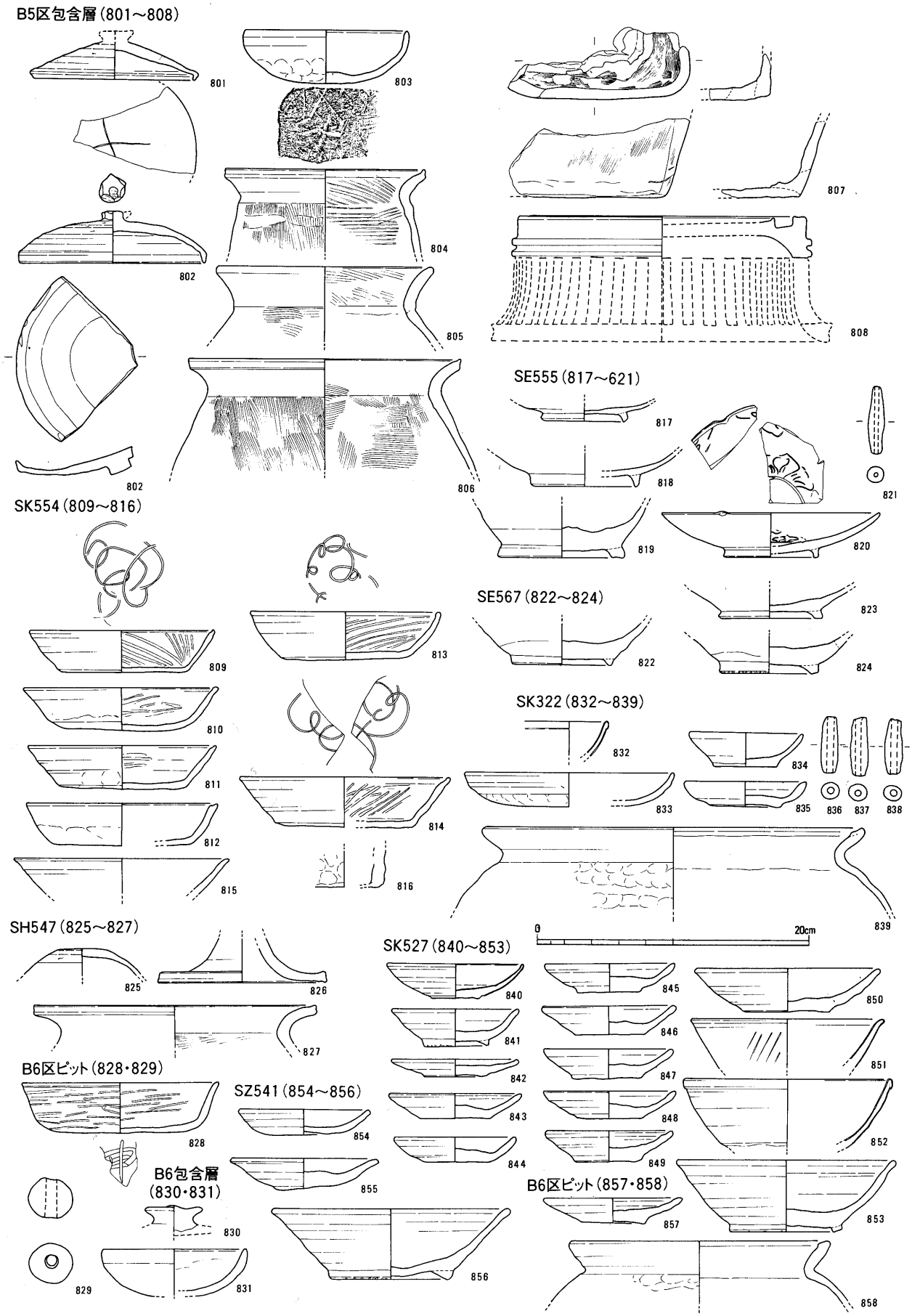


fig.71　出土遺物実測図(26)　B５区・B６拡張区（１：４）

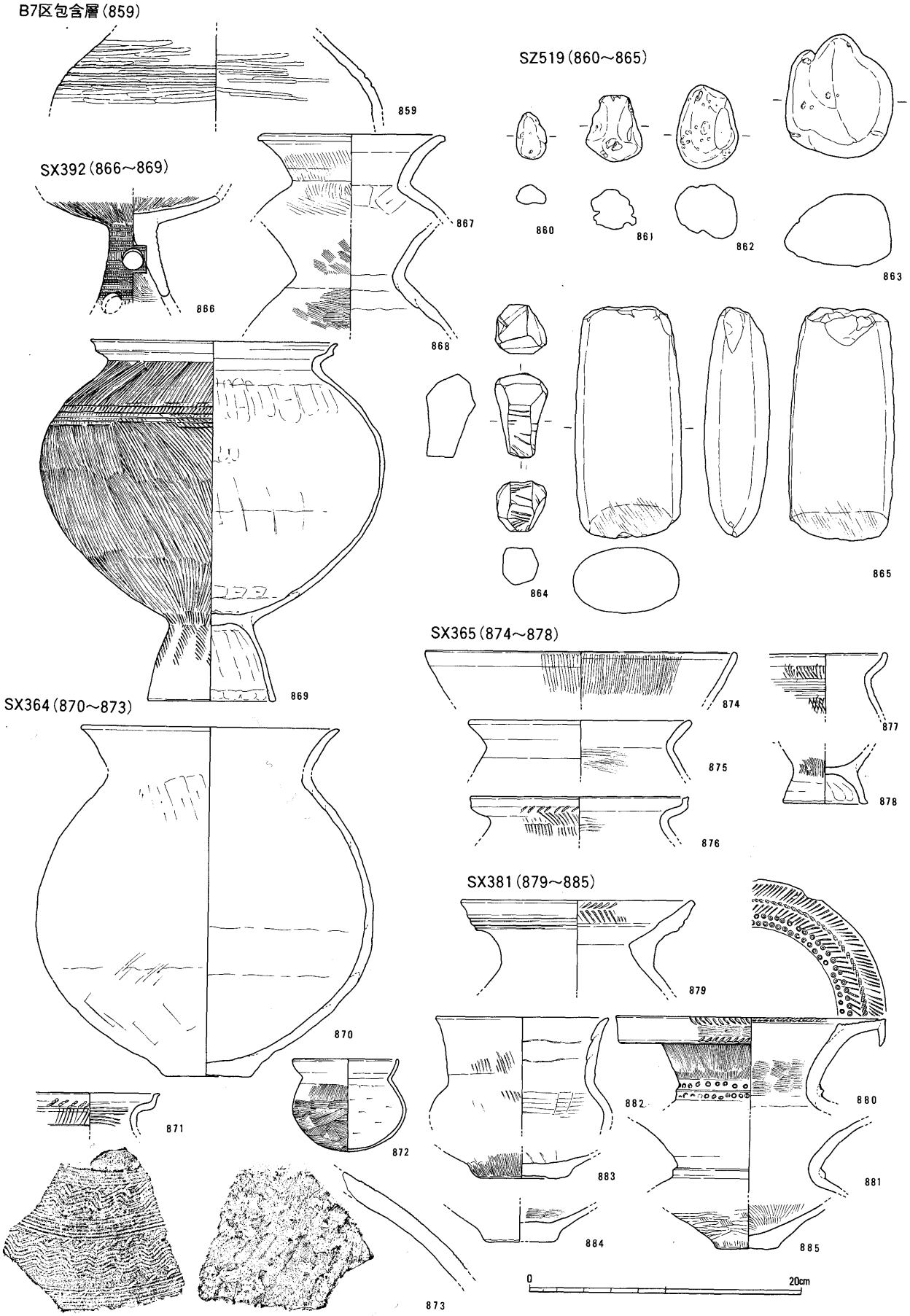


fig.72　出土遺物実測図(27) B 7 区弥生・古墳前期（1：4）

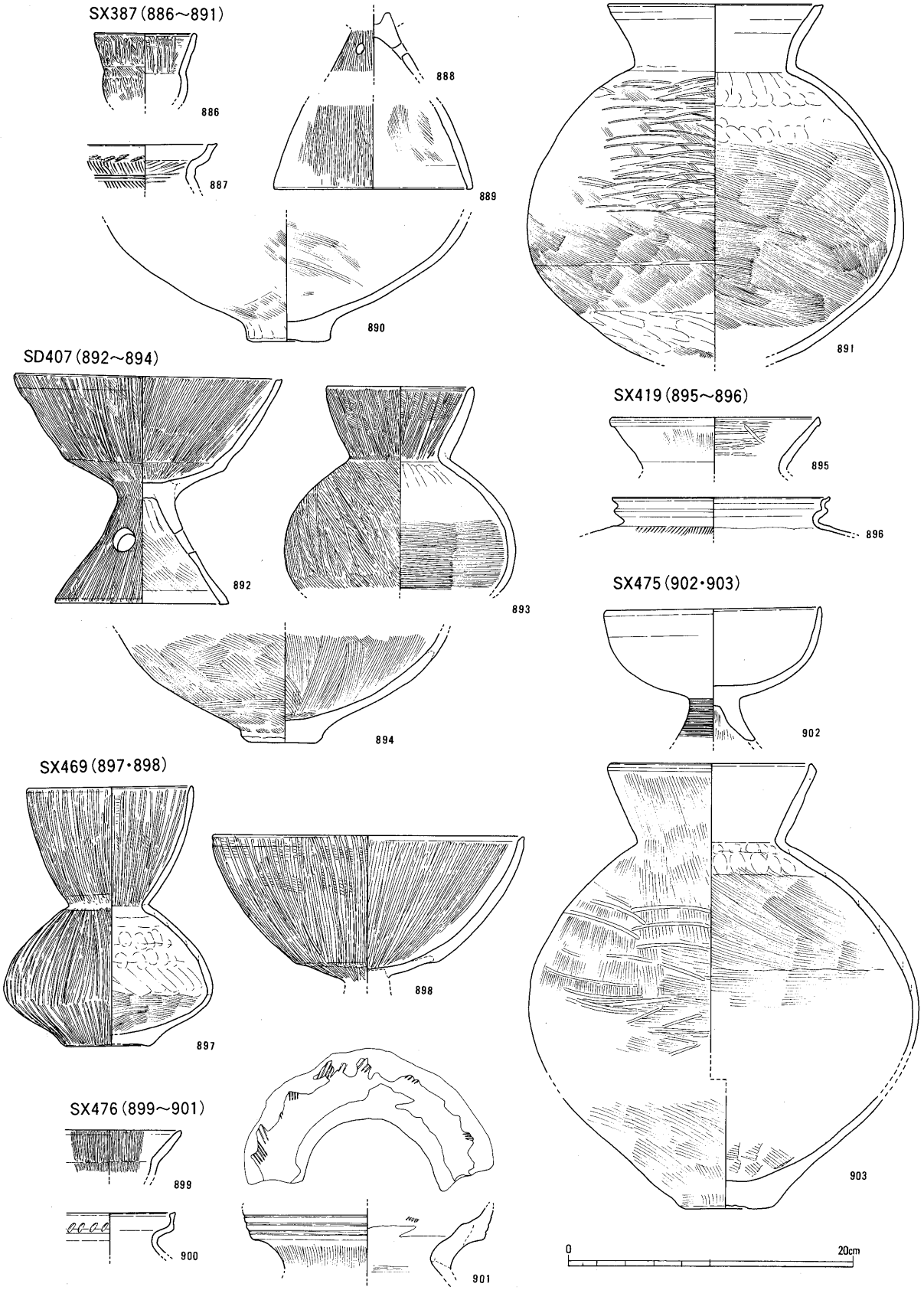


fig.73　出土遺物実測図(28)　B７区古墳前期（１：４）

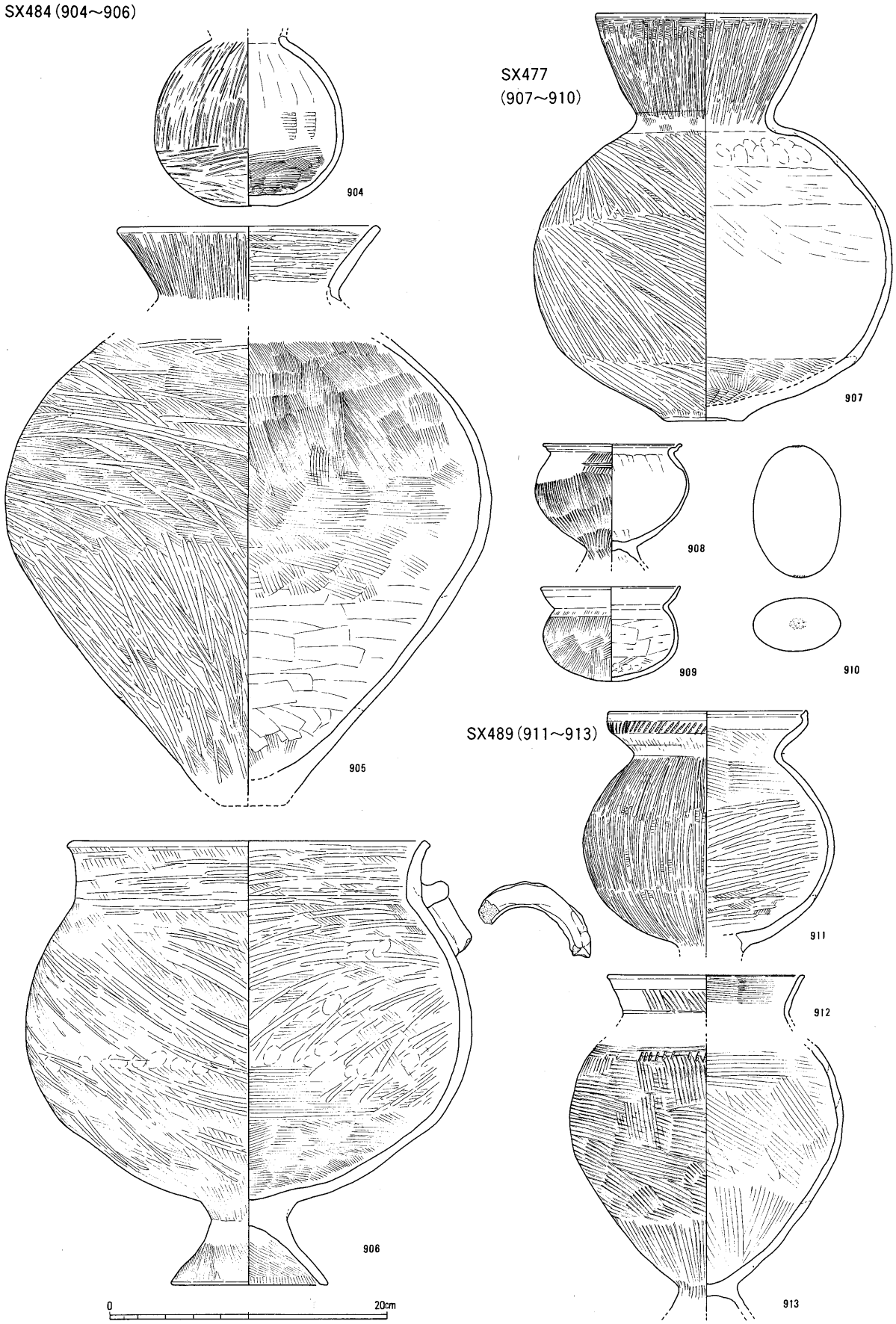


fig.74　出土遺物実測図(29)　B７区古墳前期（１：４）

SX486(914～929)

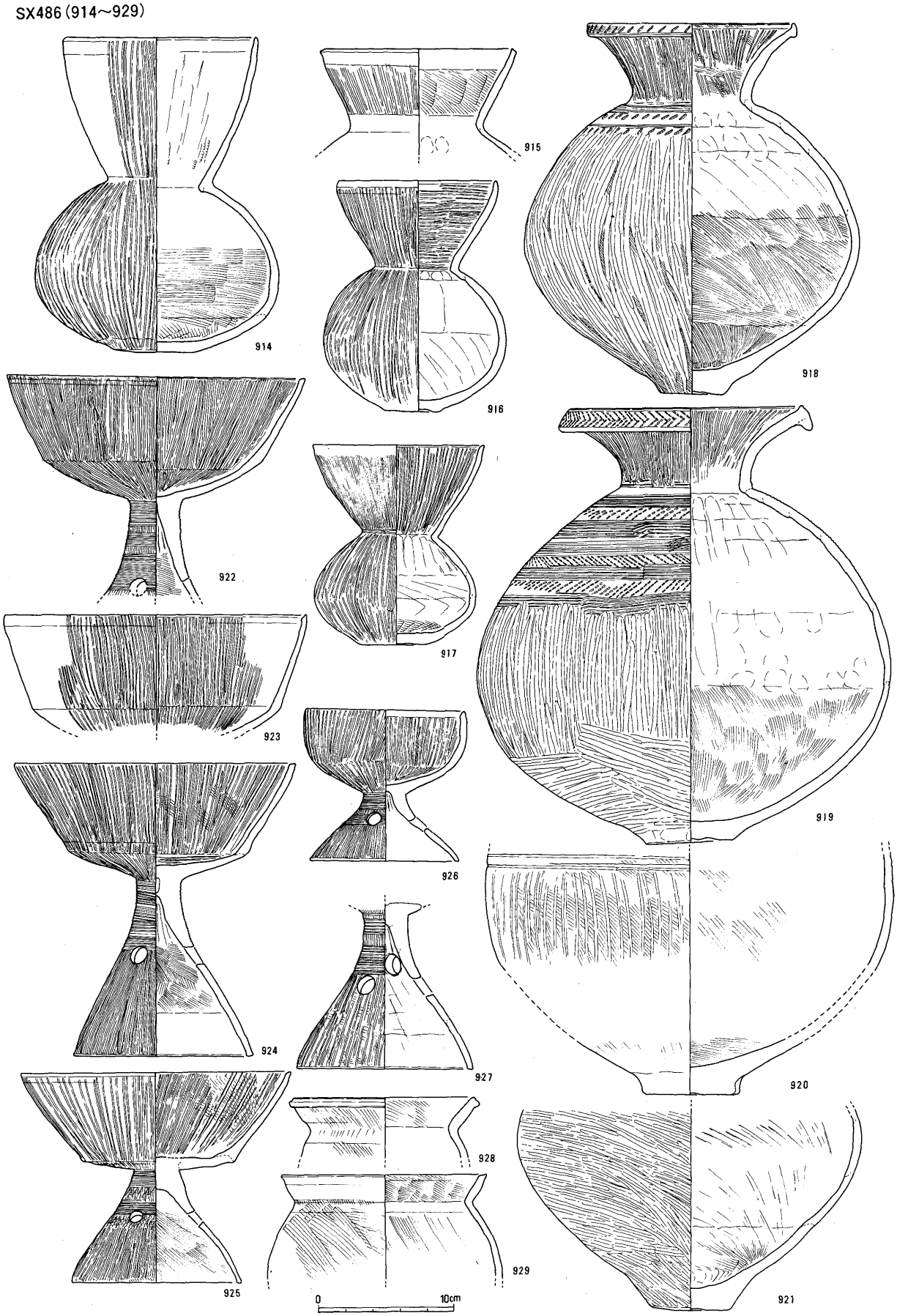


fig.75　出土遺物実測図(30)　B7区SX486（1：4）

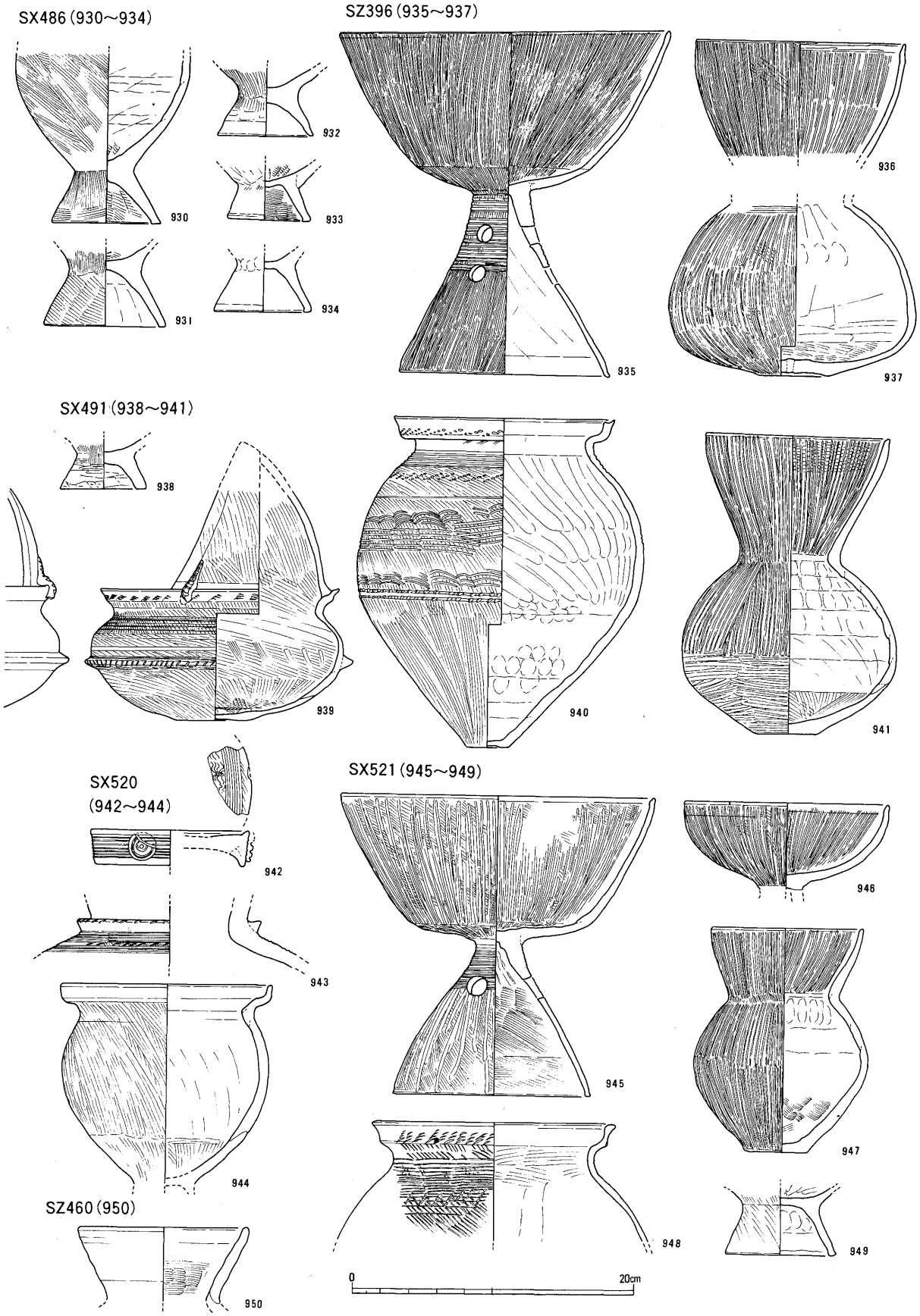


fig.76　出土遺物実測図(31)　B 7区古墳前期（1：4）

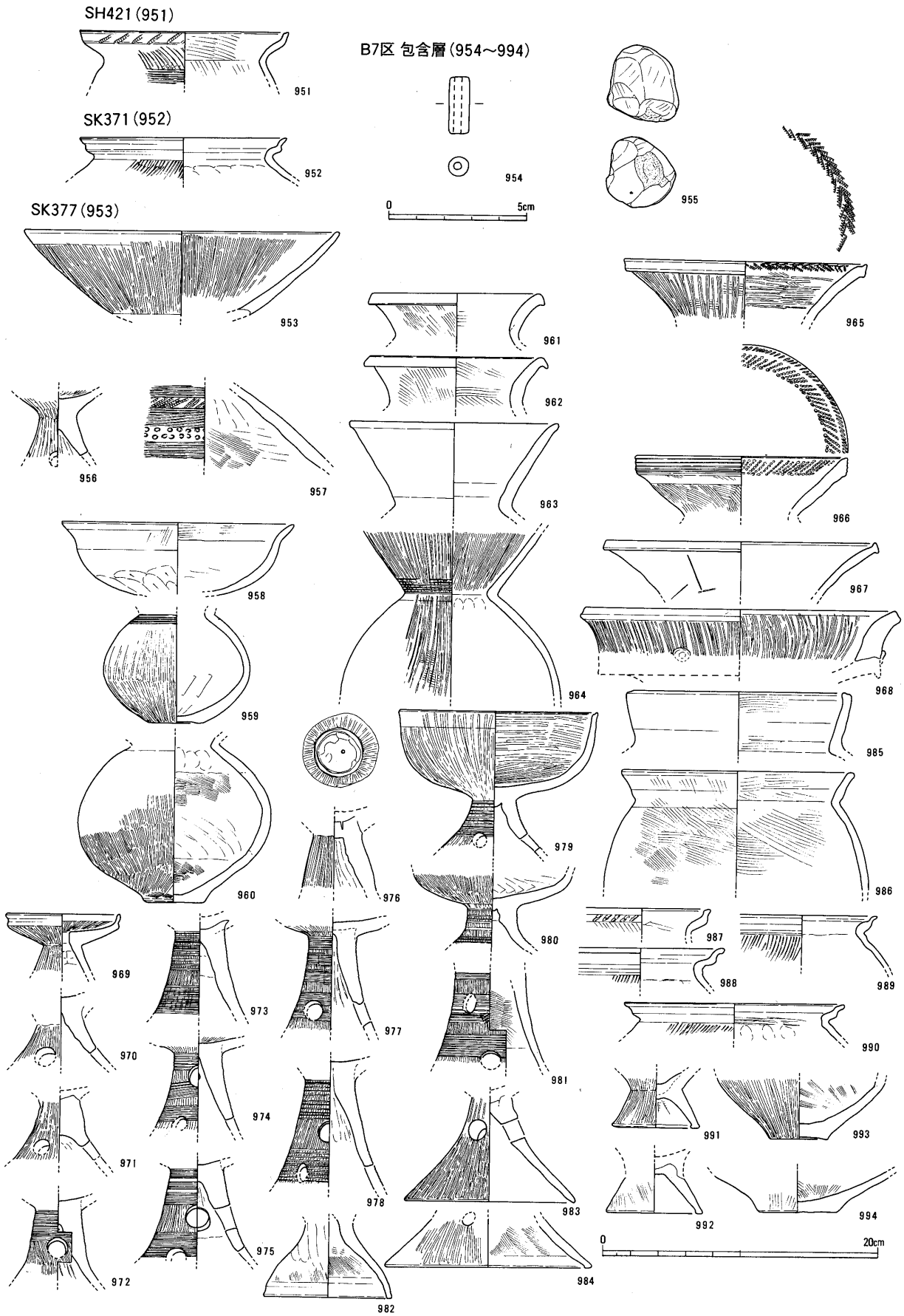


fig.77　出土遺物実測図(32) B７区古墳前期（954は１：２、他は１：４）

SZ367(995～1036)

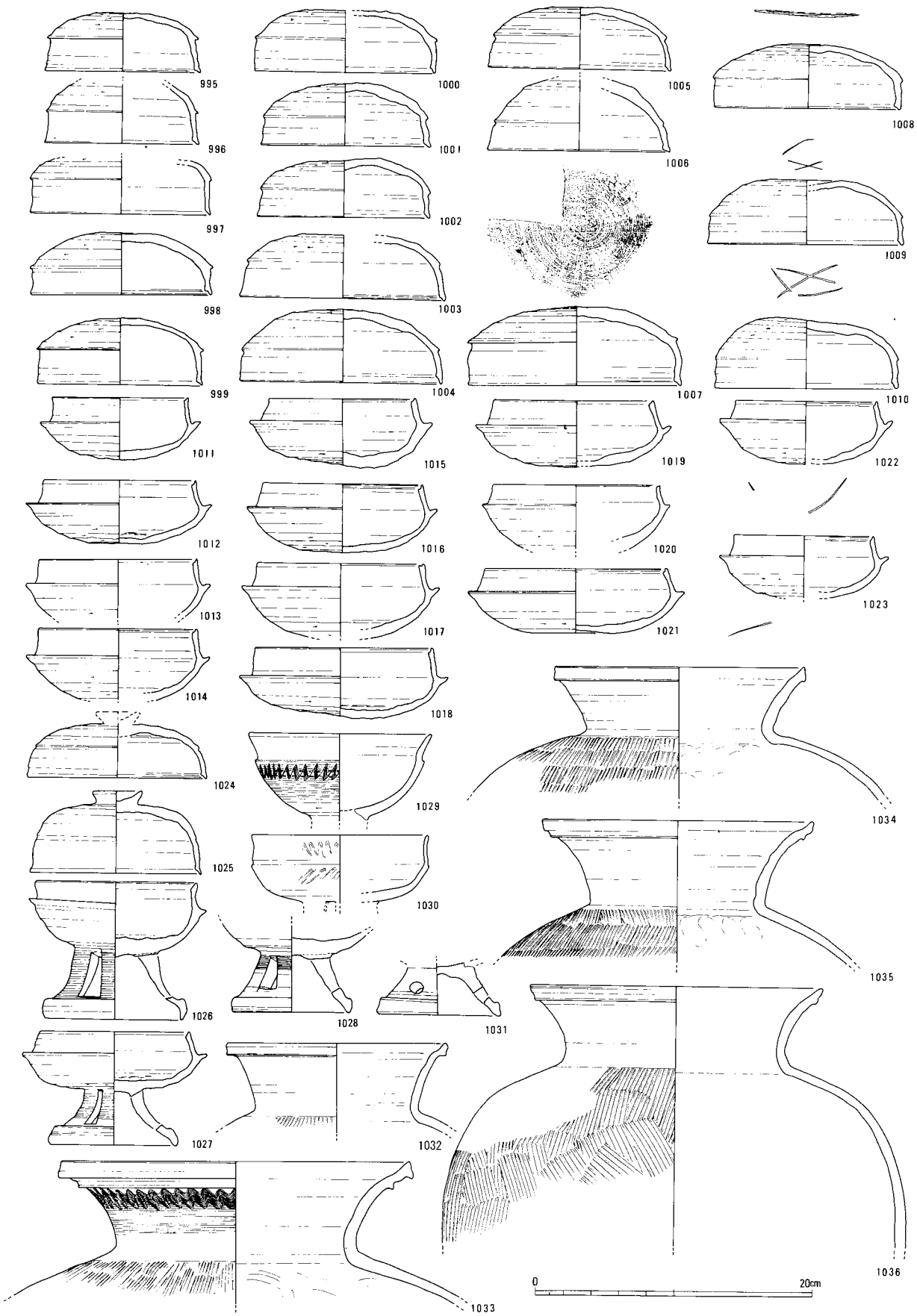


fig.78　出土遺物実測図(33) B 7区SZ 367 (1：2)

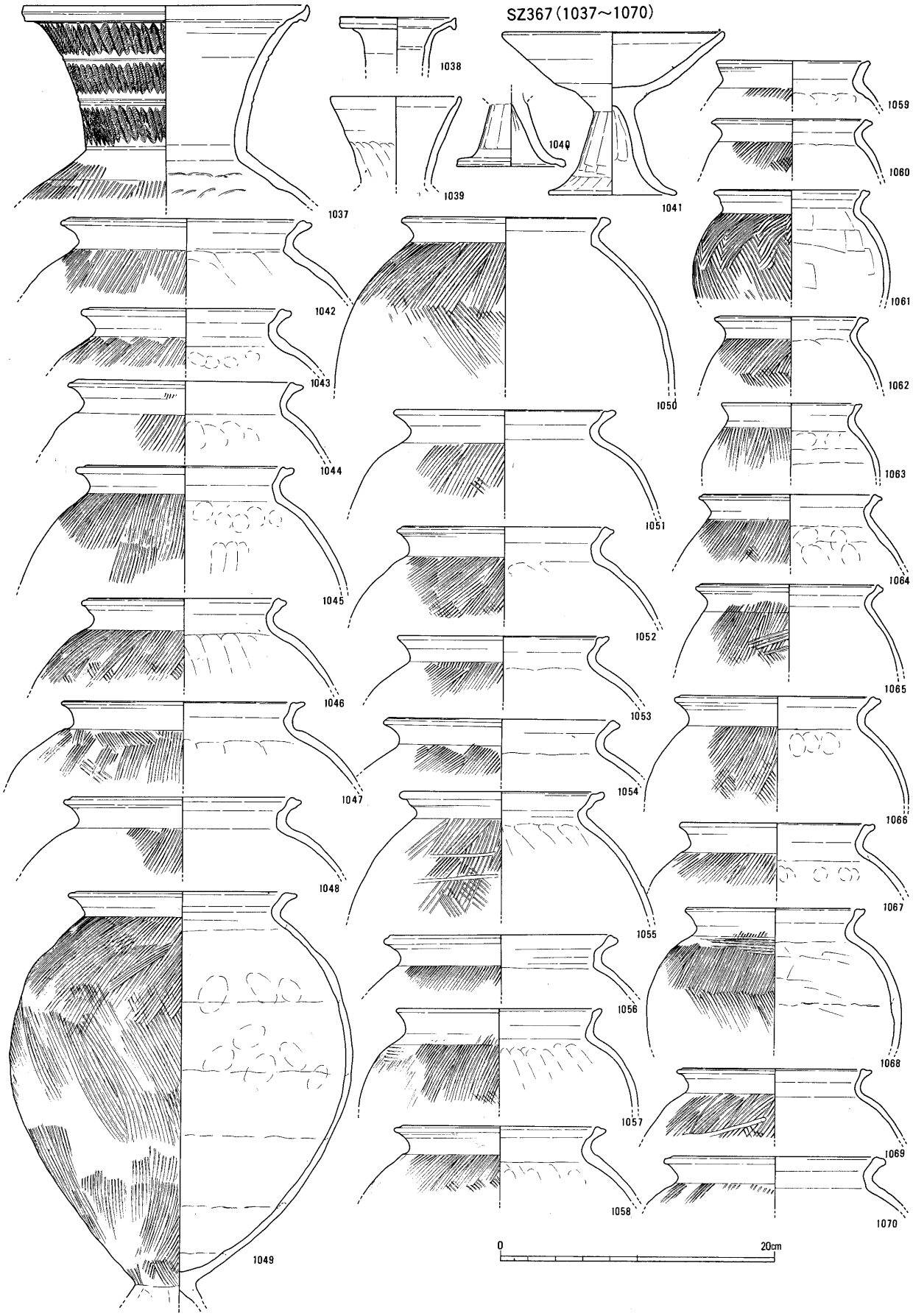


fig.79　出土遺物実測図(34) B 7区SZ 367 (1：4)

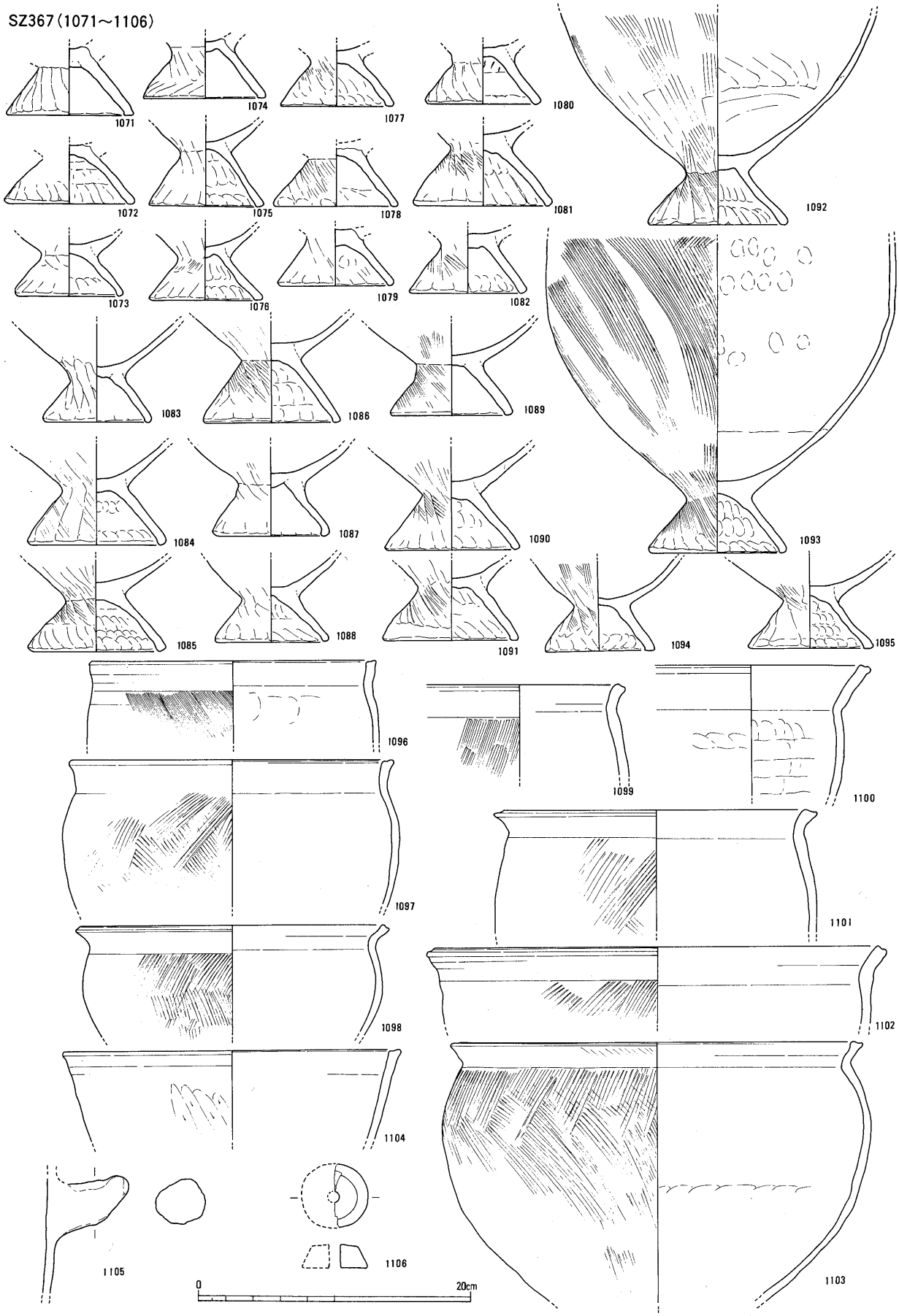


fig.80　出土遺物実測図(35)　B７区ＳＺ 367　(１：４)

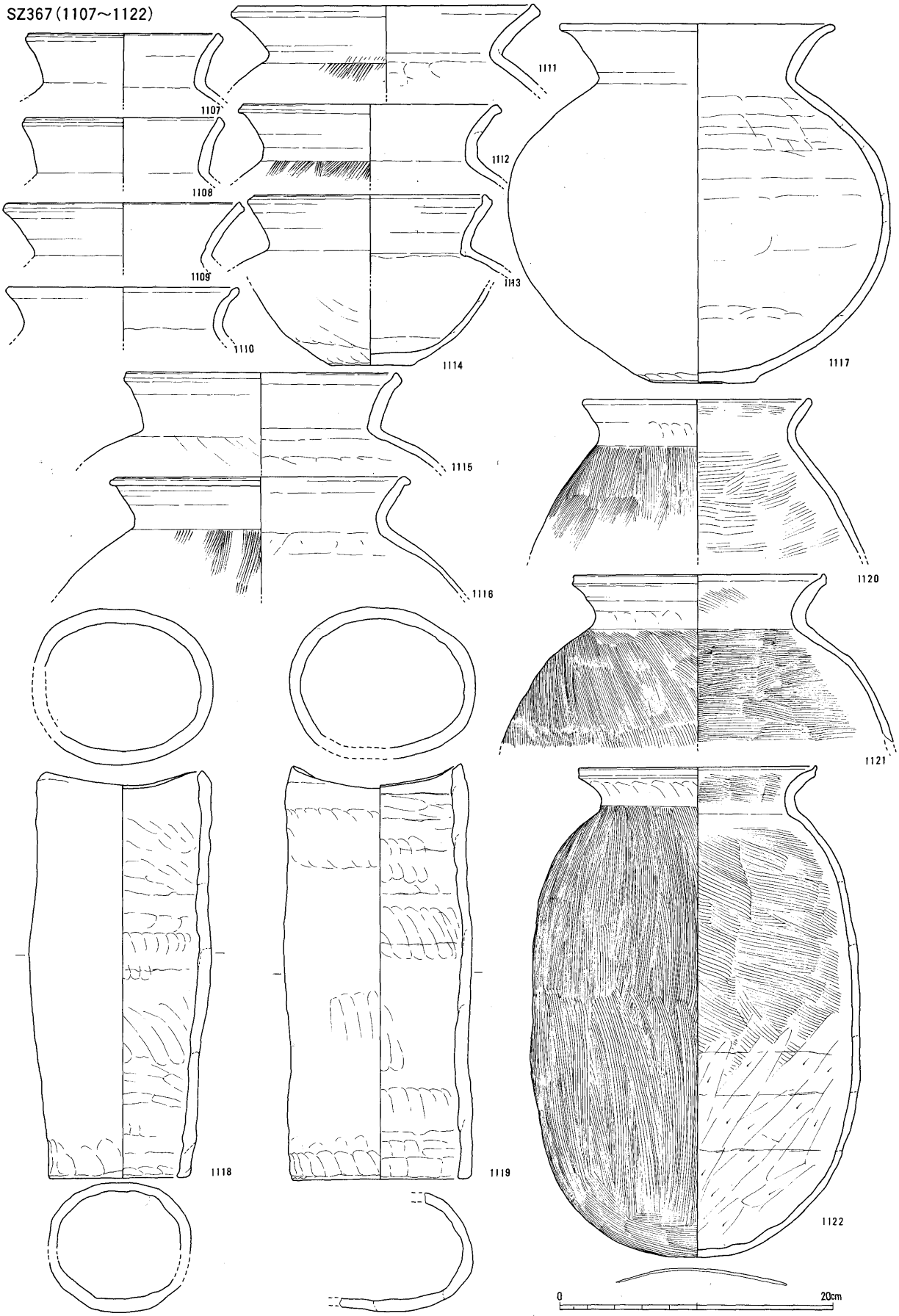


fig.81　出土遺物実測図(36) B 7区SZ 367 (1：4)

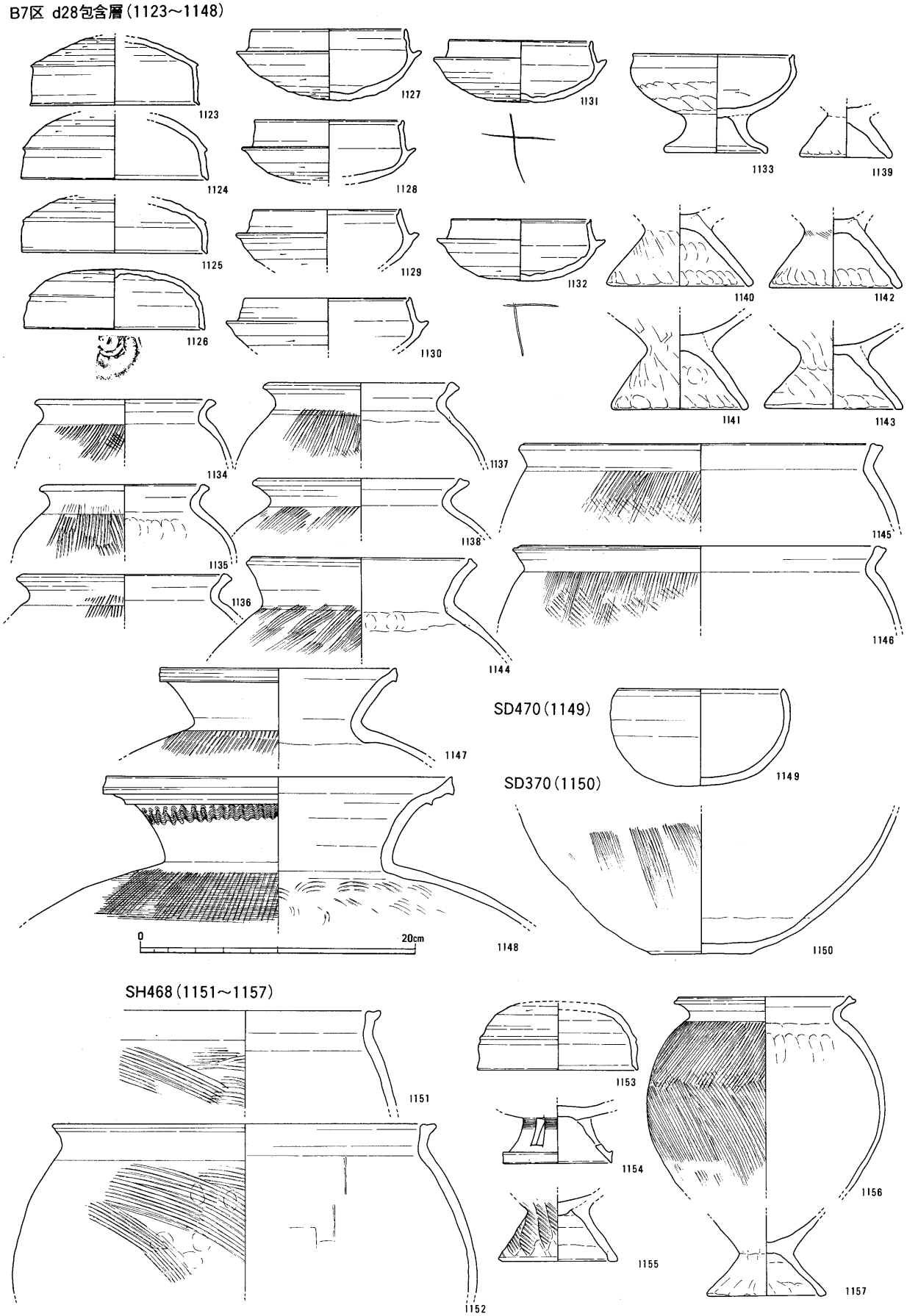


fig.82　出土遺物実測図(37) B 7区古墳中後期 (1 : 4)

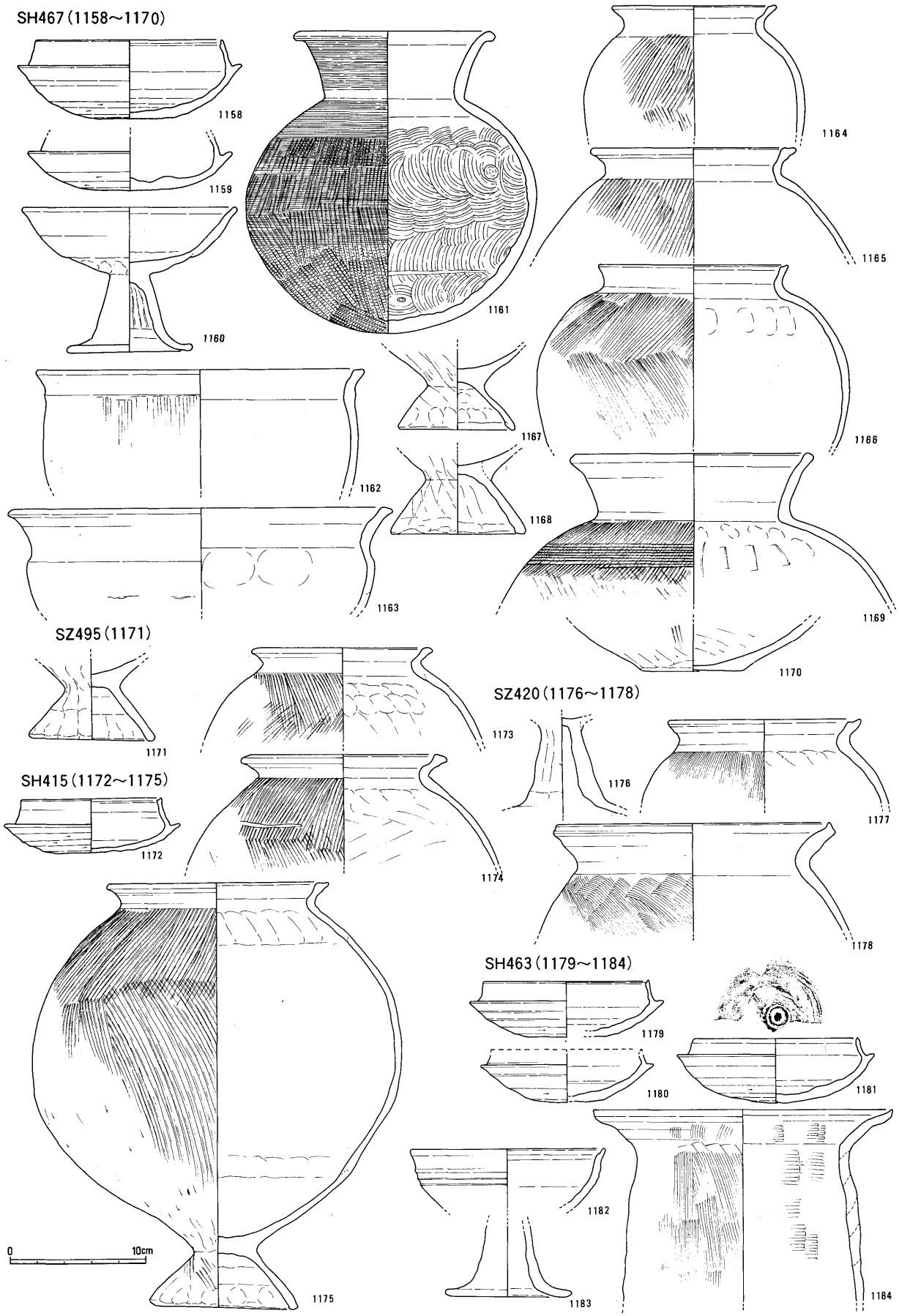
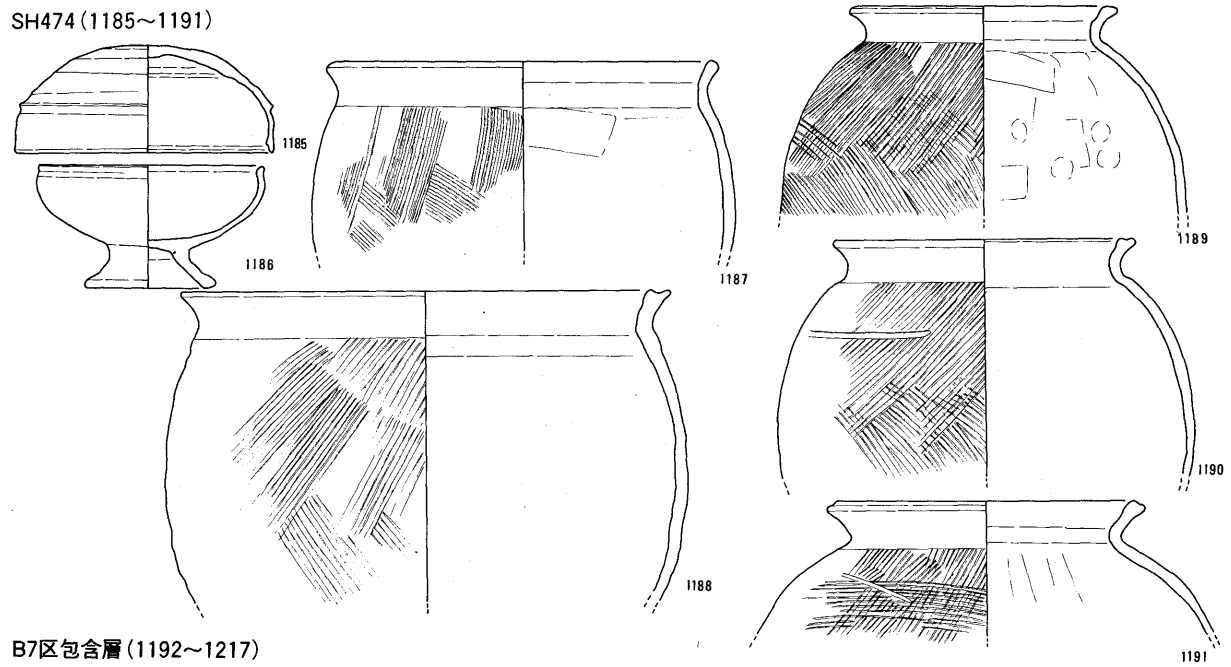


fig.83　出土遺物実測図(38) B７区古墳中後期（１：４）

SH474(1185～1191)



B7区包含層(1192～1217)

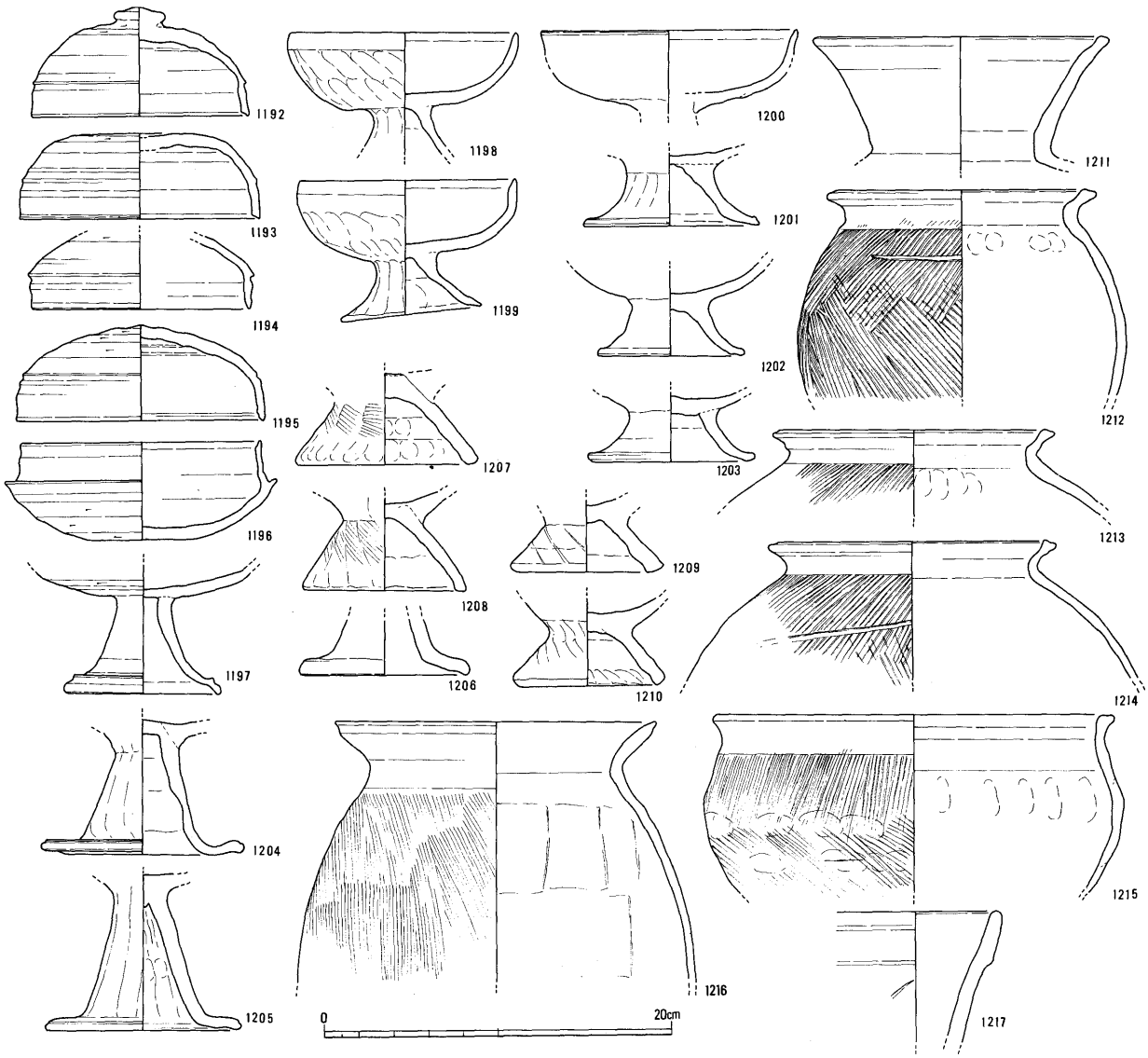


fig.84　出土遺物実測図(39) B 7区古墳中後期（1：4）

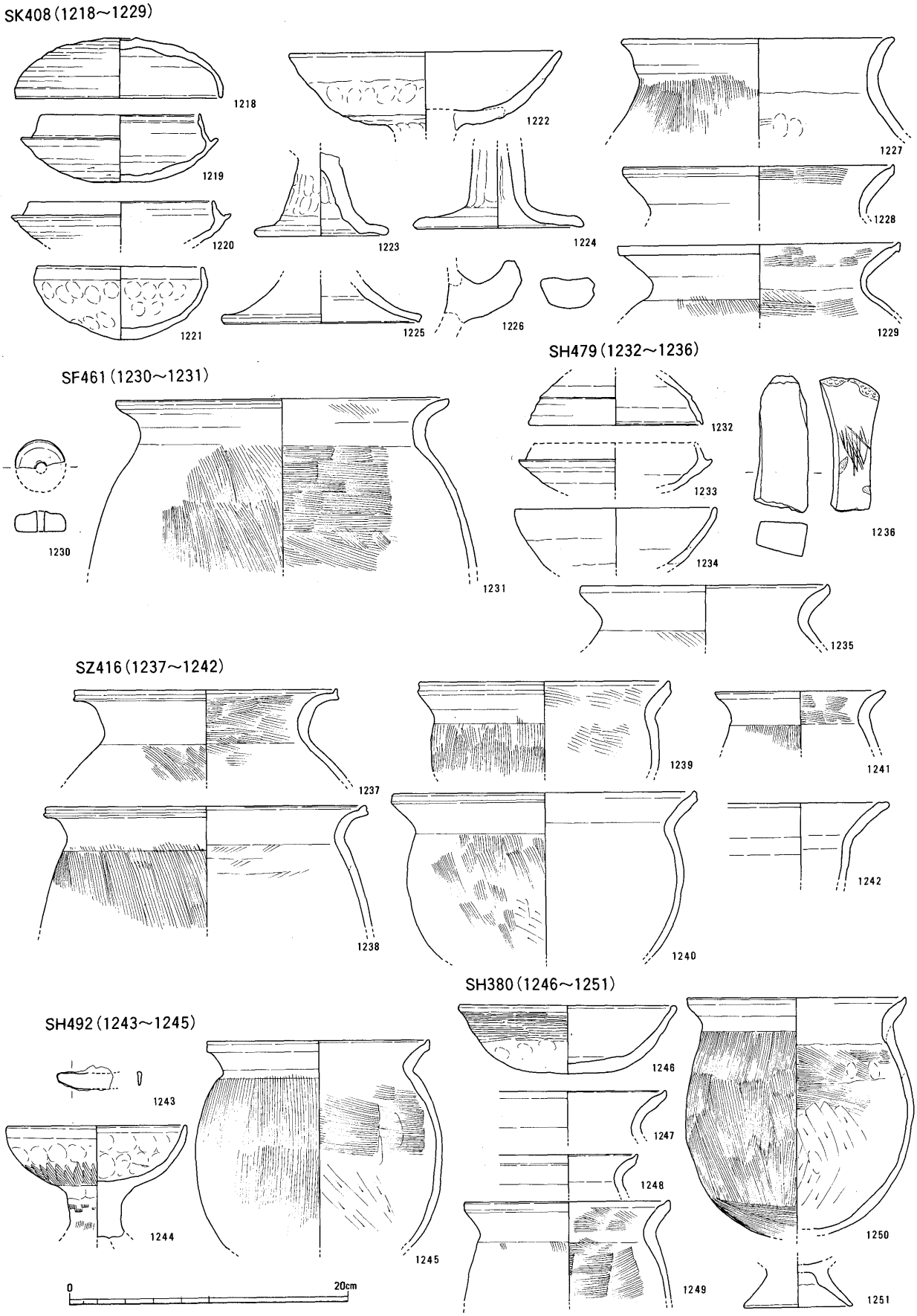


fig.85　出土遺物実測図(40)　B７区古墳後期～古代（１：４）

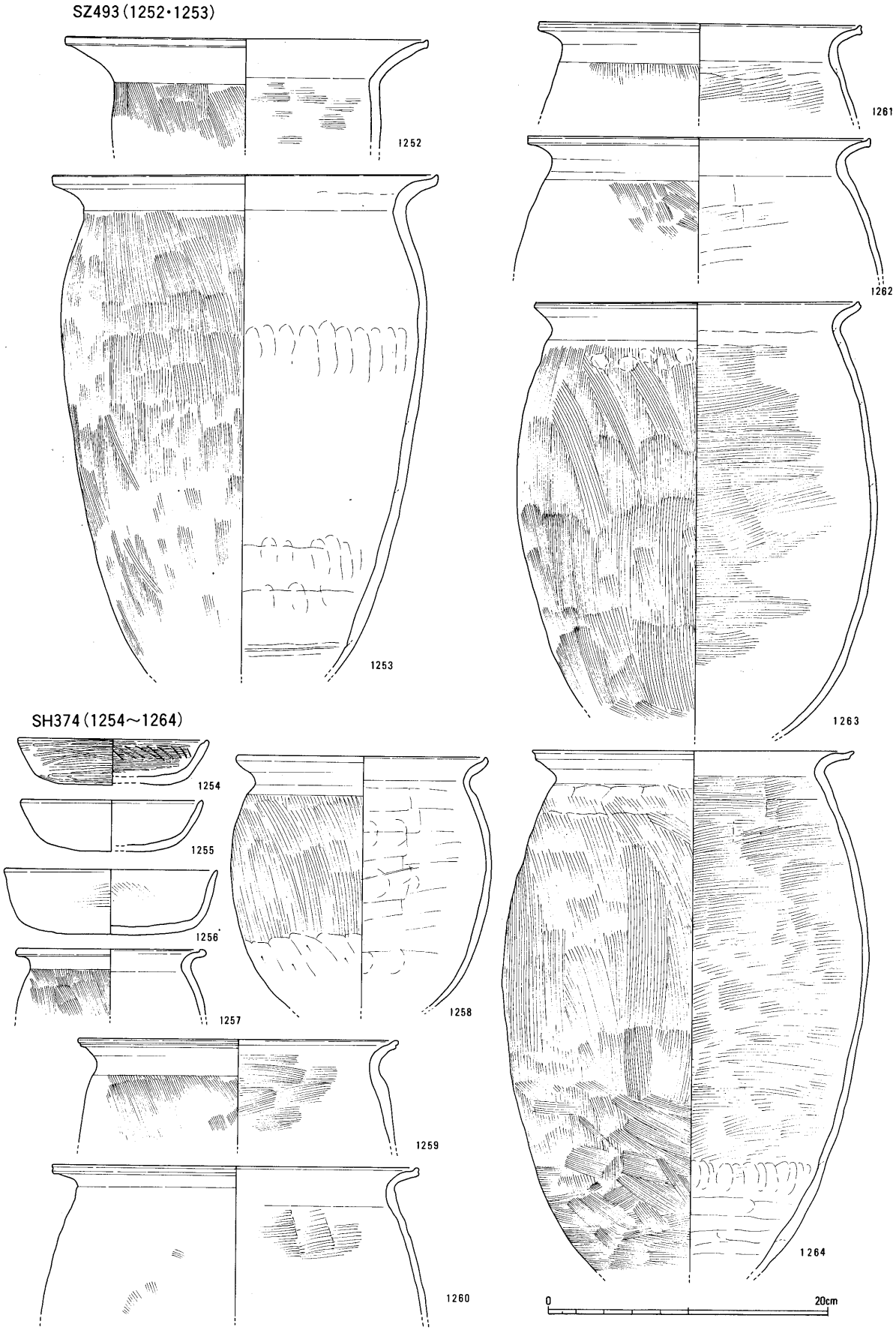


fig.86　出土遺物実測図(41)　B７区古代（１：４）

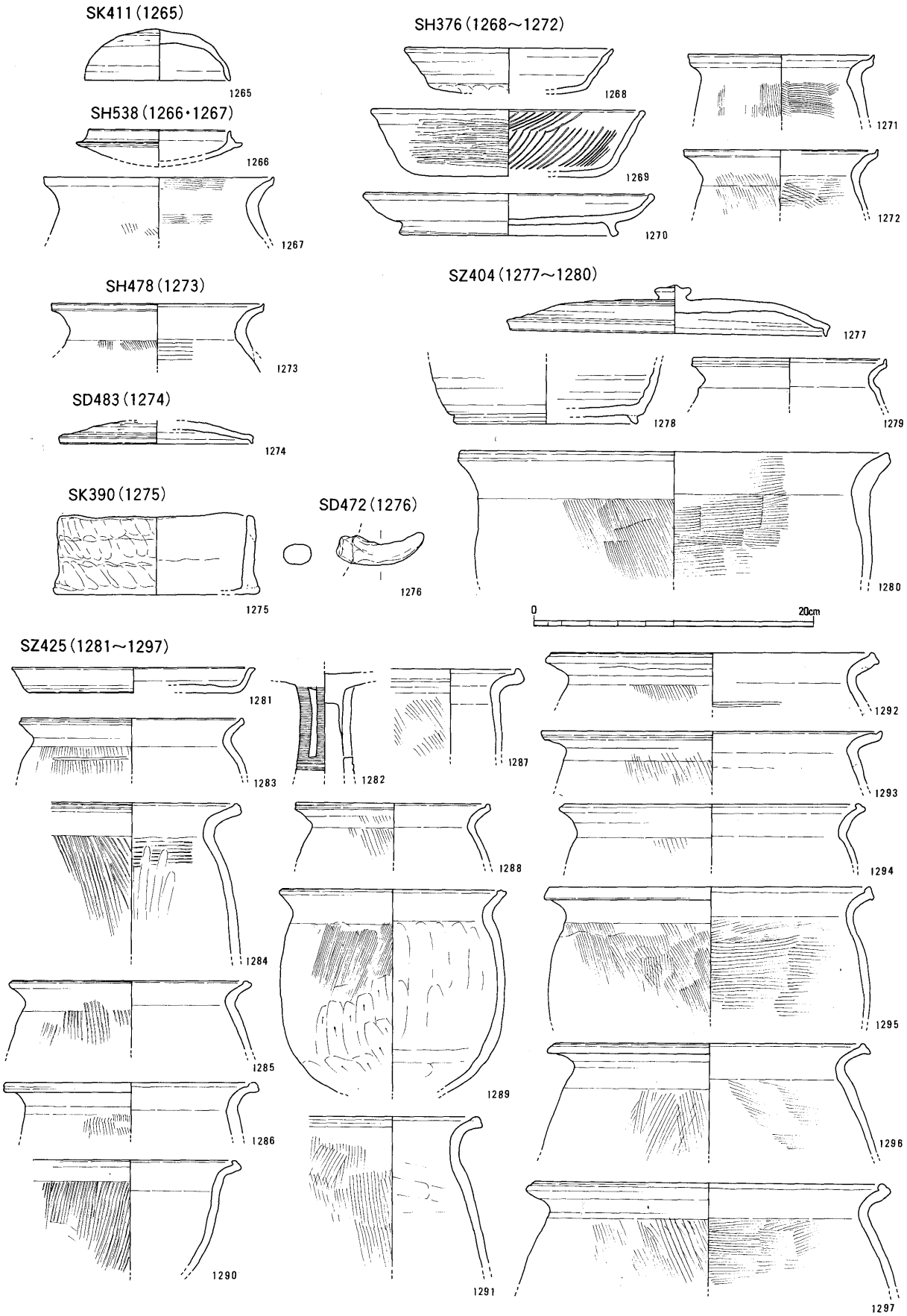


fig.87　出土遺物実測図(42) B７区古代（１：４）

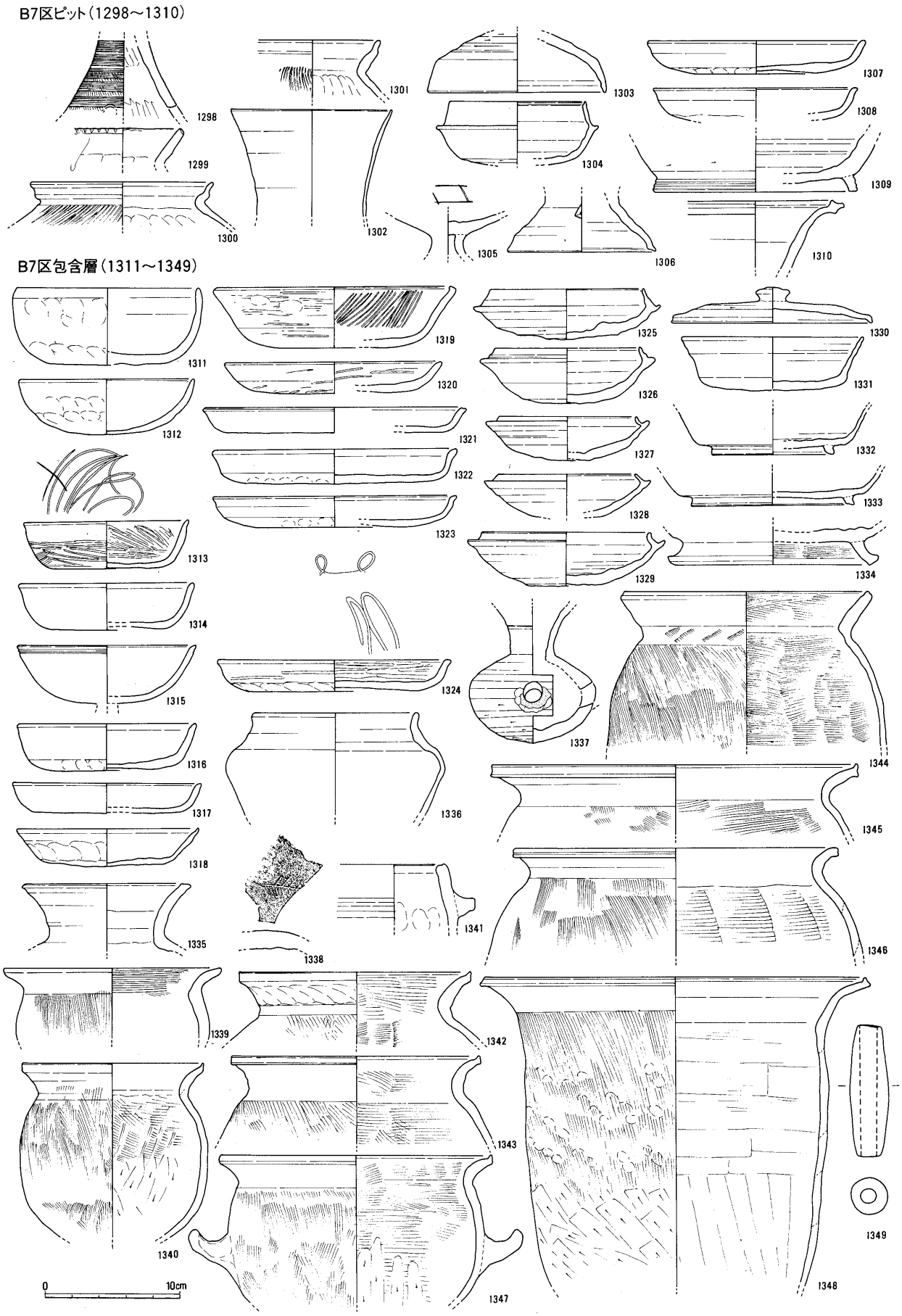
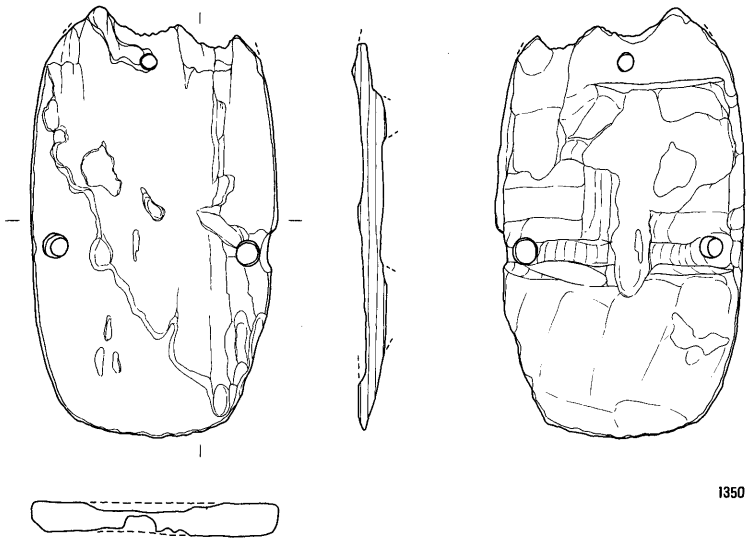
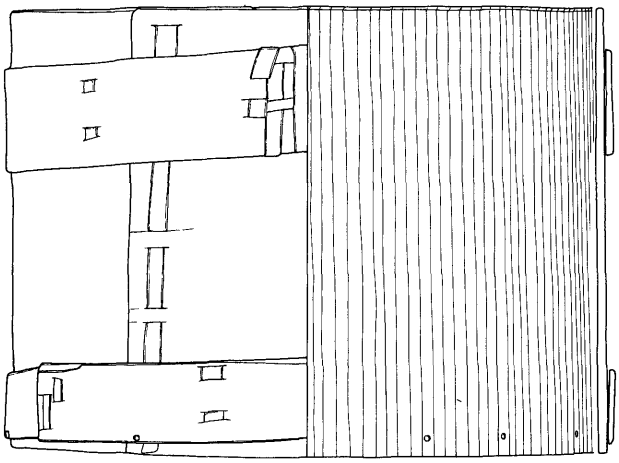


fig.88　出土遺物実測図(43)　B７区古代ほか（１：４）





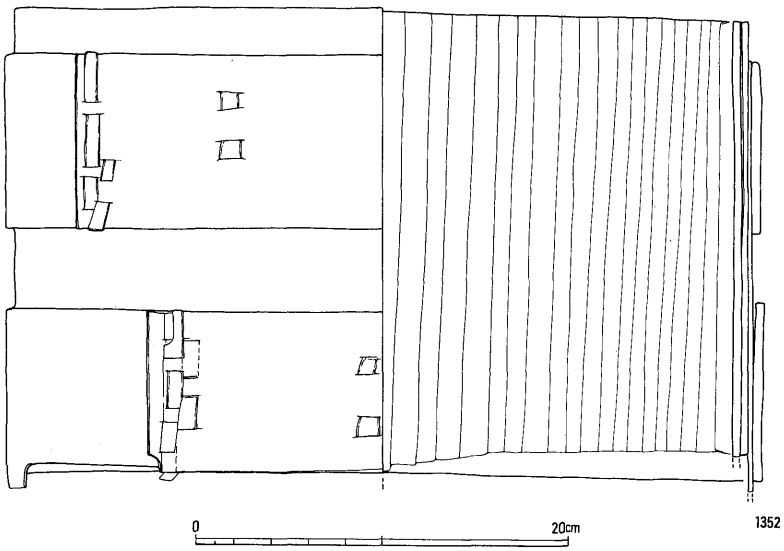


fig.89　出土遺物実測図(44) B 5区SE 567木製品（1：4）

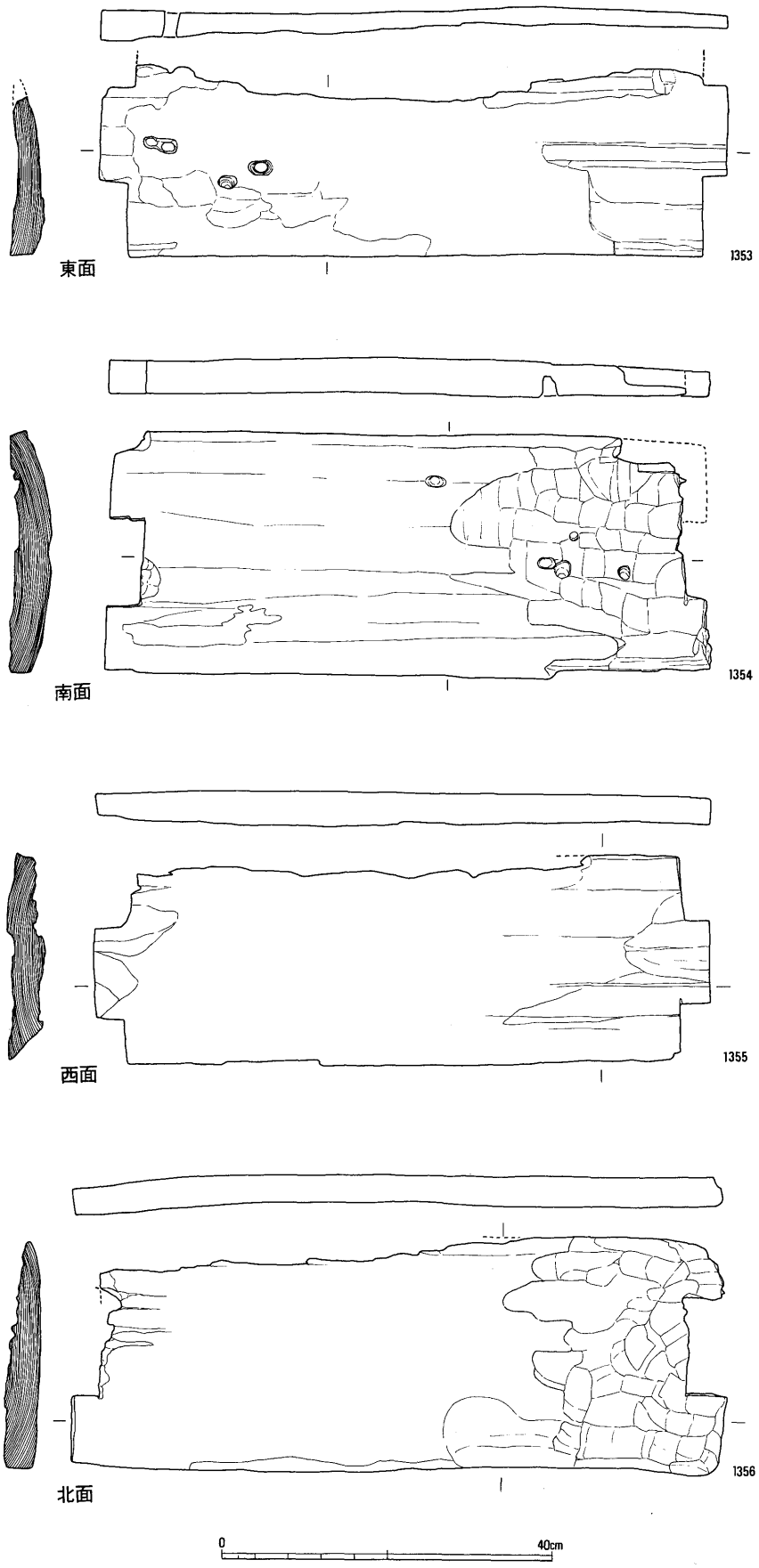


fig.90　出土遺物実測図(45)　B 5区SE 567　井戸枠材（1：8）

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1	30505	縄文土器	深鉢	B2	d38	包含層	−	ナデ→オサエ→沈線	やや粗	2.5YR6/6	小片	
2	30508	縄文土器	鉢?	B5	g27	包含層	−	ナデ→沈線→刺突	やや粗	2.5YR5/6	口小片	
3	30501	縄文土器	深鉢	B5	g33	包含層(SD532最下層)	−	ナデ→沈線→縄文	やや粗	7.5YR7/6	小片	
4	30502	縄文土器	深鉢	B2	c~d34	包含層(SH536)	−	ナデ→沈線	やや粗	2.5YR6/6	口小片	5~8と同一個体
5	30502	縄文土器	深鉢	B2	c~d34	包含層(SH536)	−	ナデ	やや粗	2.5YR6/6	小片	4·6~8と同一個体
6	30503	縄文土器	深鉢	B2	c35	包含層(SH537)	−	ナデ→沈線	やや粗	2.5YR5/6	小片	4·5·7·8と同一個体
7	30507	縄文土器	深鉢	B5	f35	包含層	−	ナデ	やや粗	5YR6/6	小片	4~6·8と同一個体
8	30506	縄文土器	深鉢	B5	g31~32	包含層	−	ナデ→沈線	やや粗	2.5YR6/6	小片	4~17と同一個体
9	30701	縄文土器	浅鉢	B2	d39	包含層	−	ナデ→沈線→ヘラミガキ	粗	N3/	口小片	
10	30703	縄文土器	浅鉢	B2	c35	包含層	−	ナデ→ヘラケズリ	粗	7.5YR5/2	小片	
11	30705	縄文土器	深鉢	B5	f~g37	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	7.5YR6/2	口小片	
12	30602	縄文土器	深鉢	B2	c25	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	2.5YR6/6	口小片	
13	30707	縄文土器	深鉢	B2	d39	包含層(SZ539)	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	N5/	口小片	
14	30706	縄文土器	深鉢	B2	d39	包含層(SZ539)	−	ナデ→条痕→ヨコナデ	粗	10YR7/4	口小片	
15	30606	縄文土器	深鉢	B2	e35	包含層	−	ナデ→条痕→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	7.5YR4/3	口小片	
16	30603	縄文土器	深鉢	B2	d37	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	7.5YR7/4	口小片	
17	30604	縄文土器	深鉢	B2	d38	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	5YR5/1	口小片	
18	30802	縄文土器	深鉢	B2	d37	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	10YR3/2	口小片	
19	30605	縄文土器	深鉢	B5	g29	包含層(SH550)	−	ナデ→条痕→ヨコナデ	粗	7.5YR7/6	口小片	26と類似
20	30801	縄文土器	深鉢	B2	d37	包含層	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	5PB4/1	口小片	
21	30702	縄文土器	深鉢	B4	d15	包含層(SZ575)	−	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	口小片	
22	30803	縄文土器	深鉢	B2	d40	包含層(SZ575)	−	ナデ→ヨコナデ	粗	N3/	口小片	
23	30708	縄文土器	深鉢	B2	d39	包含層(SZ539)	−	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/4	口小片	
24	30704	縄文土器	深鉢	B2	d27	包含層	−	ナデ→条痕→ヨコナデ	粗	5YR4/3	口小片	26と類似
25	30504	縄文土器	深鉢	B4	d17	包含層(1−Pit14)	−	ナデ→縄文	やや粗	5YR7/4	小片	
26	30601	縄文土器	深鉢	B2	d27~28	包含層	−	ナデ→条痕	粗	7.5YR8/6	小片	19・24と類似
27	17405	縄文土器	深鉢	B4	c~d18	包含層	底8.0	ナデ→ヘラケズリ	粗	10YR6/4	底1/4	
28	35201	石製	剥片	B2	d28	包含層	長2.87 重4.0g	ナデ	−	−	完存	
29	35001	サヌカイト	石鏃	B5	g18~19	包含層	長2.57 重1.6g		−	−	完存	
30	34801	サヌカイト	楔形石器	B2	d33	SH531溝	長2.86 重6.28g		−	−	完存	
31	34901	チャート	楔形石器	B2	d35	包含層	長2.74 重8.7g		−	−	完存	
32	16801	弥生土器	壺	B2	d24	SD505	口18.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/4	口1/6	
33	16701	弥生土器	甕	B2	d23	SD505	口36.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや粗	7.5YR6/4	口1/10	
34	16703	弥生土器	甕	B2	d23	SD505	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや密	10YR5/2	口小片	
35	16803	弥生土器	壺	B2	d28	SZ523	口19.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	2.5Y8/2	口1/10	
36	16805	弥生土器	甕	B2	d28	SZ523	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	小片	
37	16604	弥生土器	壺	B2	c~d25	SD508	−	ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや粗	7.5YR6/4	小片	
38	16705	弥生土器	甕	B2	c~d28	SD518	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや密	10YR5/2	口1/5	
39	17901	弥生土器	壺	B2	e27	SZ515P1	最大径48.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突→縄文	やや粗	7.5YR6/4	1/3	
40	16702	弥生土器	甕	B2	c26~d27	SH509	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや粗	7.5YR4/2	口1/5	
41	16804	弥生土器	甕	B2	c30	SH525	口21.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/4	口1/10	
42	16806	弥生土器	壺	B2	d37	SE522枠内	頸10.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR7/4	小片	
43	16601	弥生土器	壺	B2	d27	SH511	−	ナデ→ハケメ→櫛描波状文→棒状浮文+刻目	やや粗	7.5YR5/2	小片	
44	16802	弥生土器	壺	B2	d29	Pit4	−	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/4	口小片	
45	16706	弥生土器	壺	B2	d23	2−Pit2	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/2	口小片	
46	16603	弥生土器	壺	B2	c~d34	SH536	−	ナデ→ヘラミガキ→沈線→縄文	やや粗	5YR 6/6	小片	

tab.6　出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
47	16606	弥生土器	壺	B2	d～e25	包含層	－	ナデ→ヘラミガキ→沈線→縄文	やや密	7.5YR6/4	小片	
48	16602	弥生土器	壺	B2	c26	SH509	－	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文→沈線	やや粗	10YR6/3	小片	
49	16704	弥生土器	甕	B2	d23	包含層	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや密	7.5YR7/4	口小片	
50	21003	弥生土器	壺	B2	d27	SE513	底6.5	ナデ	やや粗	5YR5/4	底1/2	
51	34701	サヌカイト	石鏃	B2	d26	SH511	長4.73 重3.89g		－	－	完存	側縁磨滅
52	17006	土師器	台付甕	B2	c26～d27	SH509	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/2	口1/20	
53	16605	土師器	壺	B2	c26～d27	SH509	－	ナデ→縄文	やや粗	10YR7/3	小片	
54	20903	土師器	器台	B2	d21	SZ514	口10.5	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/5	
55	15102	土師器	器台	B2	c～d32	SH530	－	ナデ→ヘラミガキ	密	2.5Y8/2	2/3	内面・割れ口に水銀朱付着外面に煤付着
56	16904	土師器	高杯	B2	d32	Pit4	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→3方向透孔	やや粗	5YR6/6	脚柱1/3	
57	17101	土師器	高杯	B2	c～d32	SH530	脚31.8	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR7/6	脚1/4	
58	35101	瑪瑙	石核	B2	d32	SH530貯蔵穴	長4.42 重17.8g	両面から交互に打ち欠く	－	－	完存	
59	22002	土師器	壺	B2	d40	Pit3	口15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	7.5YR8/3	口1/2	
60	17005	土師器	台付甕	B2	d33	SH531	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/5	口1/5	
61	17007	土師器	台付甕	B2	d33	SH531	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/2	頸1/6	
62	17103	土師器	壺	B2	d39	包含層	－	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	口1/20	
63	17104	土師器	壺	B2	d28	包含層	－	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	小片	
64	16905	土師器	高杯	B2	d34	SH536	脚6.4	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→3方向透孔	粗	2.5YR7/6	脚部1/2	
65	17102	土師器	器台	B2	d35	SH537	脚柱3.2	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	粗	5YR7/6	脚柱完存	
66	17002	土師器	壺	B2	c～d35	SH537	口14.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口1/5	
67	33502	石製	石杵	B2	d24	包含層	長9.7		－	－	完存	水銀朱付着
68	15003	土師器	台付甕	B2	c36	SD532最下層	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR7/2	口1/10	口縁部外面に煤付着
69	15004	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532最下層	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや密	10YR7/2	口1/10	
70	15002	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532最下層	口18.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口1/6	口縁部外面に煤付着
71	14902	土師器	甕	B2	e35	SD532最下層	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	口1/6	
72	14702	土師器	鉢	B2	d35～36	SD532最下層	口27.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/6	口1/14	
73	14901	土師器	壺	B2	d35～36	SD532最下層	口17.8	ナデ→羽状文（櫛）→棒状浮文→赤彩（ベンガラ）	やや粗	7.5YR7/4	口1/3	
74	14904	土師器	壺	B2	d35～36	SD532最下層	頸9.0	ナデ→ヘラミガキ→貼り付けナデ→櫛描直線文→簾状文	密	7.5YR7/4	頸部1/8	
75	14903	土師器	壺	B2	d35～36	SD532最下層	口14.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR7/4	口1/5	
76	14603	土師器	高杯	B2	c35	SD532最下層	脚13.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	5YR6/6	脚1/2	
77	14607	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532最下層	脚6.5	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	脚4/5	被熱により変色 外面に煤付着
78	14704	土師器	器台	B2	d～e35	SD532下層	口9.1	ナデ→ヨコナデ、3方向透孔	やや粗	7.5YR8/4	口1/2	
79	16103	土師器	器台	B2	c35～36	SD532下層	脚9.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	密	10YR5/3	脚柱完存	
80	14602	土師器	器台	B2	c36	SD532下層	脚11.2	ナデ・シボリメ→工具ナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	7.5YR6/4	脚完存	脚裾に3ヶ所の欠損
81	15401	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層P9	口12.5	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	粗	10YR7/4	口3/8	
82	15603	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層	脚柱4.2	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	密	5YR7/6	脚柱完存	
83	15601	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層P11	脚12.8	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、4方向透孔	やや粗	10YR7/4	脚1/2	
84	16003	土師器	高杯	B2	d35～36	SD532下層	口13.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/6	口1/3	
85	15404	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層P9	脚7.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	密	10YR6/2	脚1/3	
86	15602	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層	脚10.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	粗	5YR7/6	脚ほぼ完存	
87	14601	土師器	高杯	B2	d～e35	SD532下層	脚12.8	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR7/4	脚4/5	
88	15403	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層	脚11.2	ナデ・シボリメ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR8/3	脚1/2	
89	16005	土師器	高杯	B2	d35	SD532下層P12	口14.2 高9.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/8	脚7/10	
90	15503	土師器	鉢	B2	d35	SD532下層P15	底4.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	5YR6/6	底完存	内面に煤付着
91	16202	土師器	手焙	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→沈線＋押し引き施文	やや粗	10YR8/4	1/20	
92	16104	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	口9.8	ナデ→ヨコナデ→焼成前穿孔（2ヶ所）	やや粗	2.5Y8/5	口1/4	

tab.7　出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
93	14802	土師器	壺	B2	d～e35	SD532下層	頸8.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口1/5	
94	15502	土師器	甕	B2	d35	SD532下層	口15.8	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	口1/5	
95	15301	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P18	口13.5 最大径29.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR7/6	口3/4	外面に籠目痕有り
96	14804	土師器	壺	B2	d～e35	SD532下層	－	ナデ→ヘラミガキ→円形浮文	やや粗	5YR6/6	口小片	
97	16102	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描波状文→円形浮文＋竹管文	やや粗	10YR7/4	口1/4	
98	16101	土師器	壺	B2	c35～36	SD532下層	口17.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→羽状文	やや粗	5YR6/6	口1/3	
99	15501	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P16･17	頸11.0	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ→刺突（板）	粗	2.5Y8/2	頸1/2	
100	16203	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→櫛描直線文、櫛描波状文、刺突→ヘラミガキ→赤彩（ベンガラ）	やや密	5YR7/6	体1/8	
101	14701	土師器	壺	B2	d35	SD532下層	－	ナデ→ハケメ→櫛描列点文（押し引き施文）	やや粗	7.5YR7/6	小片	
102	16204	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	底5.4	ナデ→板ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/3	底完存	底部内外面に砂充填
103	16302	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	口22.6	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口1/4	
104	22101	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P19	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	底3/5	底部内面に砂充填 体部1ヶ所に焼成後穿孔
105	16001	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P13	口23.5	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口1/3	
106	15402	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P6	口13.8	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	頸1/2	
107	34304	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→ヨコナデ→単節縄文	粗	10YR8/4	口1/20	
108	34305	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	口1/20	
109	14801	土師器	壺	B2	d～e35	SD532下層	口13.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/6	口1/6	
110	34306	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	底7.0	ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	口1/20	
111	34101	土師器	壺	B2	d～e35	SD532下層	－	ナデ→S字状結節文→円形浮文	粗	7.5YR6/6	頸1/8	
112	34601	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→S字状結節文→円形浮文	粗	7.5YR7/4	肩小片	
113	34401	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→S字状結節文→円形浮文	粗	7.5YR8/6	肩小片	
114	34602	土師器	壺	B2	d35	SD532下層P20	底9.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	7.5YR8/4	底ほぼ完存	
115	16507	土師器	壺	B2	d35～36	SD532下層	－	ナデ→縄文	やや粗	7.5YR5/4	小片	
116	16004	土師器	甕	B2	d35～36	SD532下層	口15.8	ナデ→ヨコナデ	粗	5YR6/6	口1/4	
117	14803	土師器	甕	B2	d～e35	SD532下層	口15.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR5/2	口1/6	
118	16405	土師器	甕	B2	d35～36	SD532下層	口10.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/6	体部外面に煤付着
119	16201	土師器	甕	B2	d35～36	SD532下層	口10.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	
120	14705	土師器	台付甕	B2	c36	SD532下層	口15.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	粗	10YR5/1	口1/12	
121	15001	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	粗	7.5YR7/4	口1/5	
122	16301	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532下層	口28.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/6	口縁部外面に煤付着
123	14703	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	口9.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/2	
124	16403	土師器	台付甕	B2	c35～36	SD532下層	口13.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/6	
125	15202	土師器	台付甕	B2	d35	SD532下層P21	口13.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/3	
126	16503	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532下層	脚8.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/3	脚1/3	被熱により劣化
127	16501	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532下層	脚9.5	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	脚完存	底部内外面に砂充填
128	14606	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	脚10.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	脚1/2	被熱により変色 底部内外面に砂充填
129	16002	土師器	台付甕	B2	c35～36	SD532下層	脚11.3	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚5/6	被熱により変色 底部内外面に砂充填
130	14605	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	脚7.9	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	脚1/3	外面に煤付着 底部内面に砂充填
131	14805	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	脚8.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	脚11/12	外面に煤付着 底部内外面に砂充填
132	16504	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532下層	脚8.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR7/4	脚1/2	底部内外面に砂充填
133	14604	土師器	台付甕	B2	d～e35	SD532下層	脚6.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR7/3	脚完存	外面に煤付着 底部内外面に砂充填
134	16502	土師器	台付甕	B2	c36	SD532下層	脚9.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	脚3/8	
135	15805	土師器	器台	B2	d35～36	SD532上層	口8.6	ナデ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口2/3	接合面に工具痕のネガ
136	16402	土師器	小形壺	B2	c36	SD532上層	口9.2	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/3	
137	15203	土師器	器台	B2	d35～36	SD532上層	口18.6	ナデ・シボリメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	2.5YR7/6	脚柱完存	
138	15804	土師器	台付甕	B2	c35	SD532上層	口9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/5	

tab.8　出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
139	16401	土師器	台付甕	B2	c35	SD532上層	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR4/1	口1/4	
140	15802	土師器	台付甕	B2	e35	SD532上P2	口13.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/4	口縁部外面に煤付着
141	15703	土師器	台付甕	B2	d35～36	SD532上層	脚7.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚1/2	
142	15803	土師器	甕	B2	d35～36	SD532上層	口12.8	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口1/8	
143	16303	土師器	壺	B2	d·e35	SD532上層	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口小片	
144	15801	土師器	壺	B2	e35	SD532上層	口7.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口小片	
145	16304	土師器	壺	B2	c36	SD532上層	口18.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描波状文→竹管文	密	5YR6/6	口1/20	
146	15201	土師器	壺	B2	c35	SD532上層	口20.6	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/5	
147	15705	土師器	壺	B2	d35	SD532上層	底7.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	底1/2	
148	15704	土師器	壺	B2	d35～36	SD532上層	底8.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3	底完存	底部内面に砂充填
149	15902	石製	敲石	B2	d35～36	SD532上層	幅5.7 重400g		－	－	完存	両端部に使用痕有り
150	17001	土師器	壺	B2	d36	SD532	口17.4	ナデ	粗	10YR8/2	口1/6	
151	17105	土師器	壺	B2	d35～36	SD532	－	ナデ→直線文＋刺突（板）	密	5YR7/4	小片	
152	17003	土師器	甕	B2	d35～36	SD532	底4.5	ナデ→タタキ	密	7.5YR7/6	底完存	
153	17106	土師器	壺	B2	d35～36	SD532	底10.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	7.5YR6/4	底1/4	底部外面に木葉痕
154	16506	土師器	台付甕	B2	d35	SD532	脚9.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	脚小片	
155	16505	土師器	台付甕	B2	d35	SD532	脚6.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/3	脚1/3	被熱により変色
156	16404	土師器	甕	B2	d～e35	SD532	口14.0	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/3	口1/12	口縁部外面に煤付着
157	16305	土師器	甕	B2	d35	SD532	口15.6	ナデ→工具ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR4/1	口1/12	
158	17203	須恵器	杯蓋	B2	d26	SH511	口12.7	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	口1/5	
159	17008	土師器	椀	B2	d27	SH511	口12.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/6	
160	17303	土師質	土錘	B2	d36	SH533	径3.6	ナデ	やや密	10YR7/3	完存	
161	20905	須恵器	杯蓋	B2	d36	SH533	－	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N9/	小片	
162	17004	土師器	高杯	B2	d35～36	SH533	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→3方向透孔	密	5YR7/6	脚柱完存	
163	20902	土師器	杯	B2	d36	SH533	口15.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや密	5YR6/6	口2/3	
164	21001	土師器	皿	B2	d36	SH533	口19.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/6	口2/5	
165	20901	土師器	甕	B2	d36	SH533	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR6/3	口1/5	外面に煤付着
166	17206	須恵器	椀	B2	d35	SH536	口9.0	ナデ	やや密	N6/	口1/5	
167	17202	須恵器	杯蓋	B2	d35	SH537	－	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	口小片	
168	16903	土師器	甕	B2	c35	SH537	口19.6	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	口1/8	
169	17207	土師器	杯	B2	d37	SE522	口13.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR8/4	口1/4	
170	17209	土師器	甕	B2	d37	SE522	－	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	2.5YR7/6	口小片	
171	17208	土師器	甕	B2	d37	SE522	－	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口小片	
172	17201	須恵器	杯蓋	B2	d26	Pit11	口14.5	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5B6/1	口1/4	
173	17204	須恵器	杯身	B2	d34	Pit6(SB577)	口10.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/3	
174	16902	土師器	甕	B2	d24	Pit1	口14.8	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/3	
175	16901	土師器	鉢	B2	d27	Pit4	口24.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/4	口1/5	
176	19704	土師器	小皿f2	B2	d25	SK507	口8.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR6/1	4/12	南伊勢
177	19702	土師器	小皿f2	B2	d25	SK507	口8.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	12/12	南伊勢
178	19701	土師器	小皿a3	B2	d25	SK507	口9.5	ナデ・オサエ→工具ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/2	12/12	
179	19703	土師器	小皿a3	B2	d25	SK507	口10.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	5YR4/1	8/12	外面に煤付着
180	19708	土師器	小皿a3	B2	d25	SK507	口16.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/3	3/12	
181	19707	土師器	小皿b1	B2	d25	SK507	口16.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/2	1/12	南伊勢
182	19905	白磁	小皿	B2	d25	SK507	口10.3	ロクロナデ→施釉	密	7.5Y7/1	口3/12	
183	19706	土師質	小皿c1	B2	d25	SK507	口9.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ→糸切り	やや密	2.5YR6/6	6/12	
184	19705	土師質	小皿c1	B2	d25	SK507	口9.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ→糸切り	やや密	7.5YR8/4	4/12	胎土マーブル状

tab.9　出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
185	19902	土師質	壺	B2	d25	SK507	口8.5	ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y8/1	口1/12	
186	19901	瓦器	椀	B2	d25	SK507	口15.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	N6/	底12/12	
187	19903	陶器	小皿	B2	d25	SK507	口8.2	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	N7/	底12/12	猿投・瀬戸
188	19803	陶器	椀	B2	d25	SK507	口9.2	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや粗	N8/	底12/12	知多・猿投 高台にモミガラ痕
189	19804	陶器	椀	B2	d25	SK507	口9.4	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y7/1	底5/12	瀬戸・猿投 重ね焼き痕融着
190	19904	陶器	小皿	B2	d25	SK507	口10.5	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y7/1	底4/12	知多・猿投 高台にモミガラ痕
191	19805	陶器	椀	B2	d25	SK507	口15.5	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y8/1	底12/12	猿投・瀬戸 高台にモミガラ痕
192	20002	泥岩	砥石	B2	d25	SK507	幅3.0 重36g		－	－	－	
193	20001	土師質	土錘	B2	d25	SK507	径4.5	ナデ	やや粗	10YR8/3	ほぼ完存	
194	19802	土師器	甕	B2	d25	SK507	口19.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	2/12	南伊勢
195	19801	土師器	甕	B2	d25	SK507	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/3	3/12	南伊勢
196	21102	土師器	小皿a3	B2	d27	SE513	口16.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/6	
197	21004	土師質	皿b	B2	d27	SE513	底6.0	ロクロナデ→糸切り	やや粗	7.5YR6/4	底1/2	
198	20904	瓦器	椀	B2	d27	SE513	口15.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	N6/	口1/7	
199	21103	陶器	椀	B2	d27	SE513	口9.0	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y7/1	口1/7	知多・猿投白磁玉縁口縁椀模倣
200	21101	土師器	鍋	B2	d27	SE513	口18.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/1	口2/12	
201	21002	土師器	鍋	B2	d27	SE513	口22.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR4/2	口1/12	外面に煤付着
202	17307	泥岩	砥石	B2	d27	包含層	厚2.7		－	－	4面残	4面に使用痕
203	17306	泥岩	砥石	B2	d34	包含層	厚2.5		－	－	5面残	5面に使用痕
204	31103	軽石製	砥石	B2	e35	包含層	重11g		－	－	完存	2面に使用痕
205	17302	土師質	土錘	B2	d33	包含層	径2.7	ナデ	やや粗	N3/	ほぼ完存	
206	17301	土師質	土錘	B2	d31	包含層	長7.5	ナデ	やや粗	10YR6/1	ほぼ完存	
207	17304	土師質	土錘	B2	c～d28	包含層	径3.1	ナデ	やや密	10YR4/1	ほぼ完存	
208	9004	土師質	土錘	B2	d28	包含層	長2.4 直径1.2 重2.76g	ナデ	密	10YR6/4	完存	
209	17305	結晶片岩	石錘	B2	d24	包含層	長5.0	削り出し	－	－	ほぼ完存	
210	17406	弥生土器	甕	B4	d16	包含層	口25.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→沈線（半截竹管）、刻目（板）	やや粗	10YR6/4	口小片	外面に煤付着
211	17504	弥生土器	甕	B4	d18	SX496	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ、刻目（板）	やや粗	2.5Y4/1	口1/9	
212	17502	弥生土器	甕	B4	d18	SX496北周溝	口31.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、刻目（板）	やや粗	10YR6/3	口1/12	
213	17601	弥生土器	壺	B4	d18	SX496北周溝	－	ナデ→沈線→縄文→貼り付け	やや粗	10YR6/3	小片	
214	17603	弥生土器	壺	B4	d18	SX447	口9.0	ナデ→ハケメ→櫛描直線文＋波状文、刻目	やや密	10YR6/4	口1/8	
215	31005	弥生土器	壺	B4		SZ504　3面水田土壌内	－	ナデ→櫛描直線文	やや粗	5YR6/4	小片	
216	31004	弥生土器	壺	B4	d15	試掘坑No.23	－	ナデ→櫛描直線文（1単位3×3が3周）	やや粗	5YR6/6	小片	
217	17503	弥生土器	壺	B4	d～e16	包含層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/9	
218	17602	弥生土器	壺	B4	d18	包含層	－	ナデ→ハケメ→櫛描直線文→沈線（半截竹管）	やや粗	5YR6/4	小片	
219	30901	弥生土器	壺	B4	e16	SD572下層	底7.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	7.5YR6/4	底1/7	
220	30902	弥生土器	壺	B4		SD572下層	底8.0	ナデ→ヘラミガキ	粗	7.5YR5/3	底部1/10	
221	24703	土師器	器台	B4	d15	SD572	脚20.0	ナデ→ヨコナデ→櫛描直線文→刺突（貝）	やや粗	5YR7/6	脚1/10	
222	28701	土師器	高杯	B4	d15	SD572	口21.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR7/6	口1/4	
223	28801	土師器	高杯	B4		SD572P11	口22.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	10YR8/3	口2/3	
224	29002	土師器	高杯	B4	d15	SD572	脚13.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	7.5YR6/4	脚柱完存	
225	24403	土師器	高杯	B4	d15	SD572P5	脚14.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	5YR6/6	脚柱完存	外面に煤付着
226	28202	土師器	高杯	B4	d15	SD572P7	脚14.2	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや粗	10YR8/4	脚7/10	
227	24003	土師器	高杯	B4	d15	SD572上部一群	脚柱4.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	密	7.5YR7/6	脚柱完存	
228	24607	土師器	高杯	B4	d15	SD572	－	ナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR4/2	口1/10	杯部内面に水銀朱付着 外面に煤付着
229	24706	土師器	小形鉢	B4	d15	SD572	－	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口1/6	外面に煤付着
230	28802	土師器	高杯	B4	d15	SD572P6	口9.9	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口ほぼ完存	

tab.10　出土遺物観察表(5)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
231	24104	土師器	高杯	B4	d15	SD572	脚9.5	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	10YR8/3	脚1/4	
232	24004	土師器	高杯	B4	d14	SD572P22	脚9.1	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/6	脚ほぼ完存	
233	24707	土師器	小形鉢	B4	d14	SD572	—	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/10	内外面に煤付着
234	28602	土師器	脚付壺	B4	d15	SD572	脚9.7	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	7.5YR8/4	脚5/8	
235	33101	土師器	脚付鉢	B4	d14	SD572P19	口17.7 高17.5	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透	密	10YR7/4	4/5	外面に煤付着 被熱により変色
236	32002	土師器	高杯	B4		SD572	脚11.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突（板）、4方向透孔	やや粗	5YR7/6	脚完存	
237	24001	土師器	脚付壺	B4	d14	SD572P18	脚11.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	5YR7/6	体完存	
238	24005	土師器	高杯	B4	d15	SD572上部一群	脚10.5	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	10YR7/4	脚完存	
239	33102	土師器	脚付鉢	B4	e15	SD572一群	口18.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	2.5Y6/4	鉢3/10	外面に煤付着 被熱により変色(脚接合部含む)
240	24002	土師器	壺	B4	d15	SD572P12	底5.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	5YR7/6	体1/2	
241	9204	土師器	壺	B4	d15	SD572	最大径10.2 底3.6～4.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/4	底完存	外面に水銀朱付着
242	24402	土師器	壺	B4	d14	SD572P14	底4.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや粗	7.5YR7/4	体完存	
243	24401	土師器	壺	B4	d14	SD572P21	底4.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	5YR7/6	体ほぼ完存	
244	24702	土師器	壺	B4	d15	SD572	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR8/3	口1/8	
245	28803	土師器	壺	B4	d15	SD572P4	口17.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口2/5	
246	24302	土師器	壺	B4	d15	SD572P1	口15.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	5YR6/6	口完存	
247	27201	土師器	壺	B4	d14	SD572P24	頸8.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→直線文(板)→刺突(板)→ヘラミガキ	密	7.5YR8/3	底完存	
248	28502	土師器	壺	B4	d15	SD572	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/4	
249	24201	土師器	壺	B4	d15	SD572	口11.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/3	
250	24301	土師器	壺	B4	d15	SD572P3	口14.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ	やや粗	10YR8/3	口ほぼ完存	
251	33702	土師器	壺	B4	d15	SD572P10	口13.2 高26.9	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	5YR6/8	完存	底部外面磨滅ぎみ
252	28703	土師器	壺	B4	d14	SD572P13	底5.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.YR6/6	底完存	
253	28901	土師器	壺	B4	d15	SD572P9	底5.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	底完存	
254	24303	土師器	甕	B4	d15	SD572P2	口13.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/1	口1/8	外面に煤付着
255	28601	土師器	甕	B4	d14	SD572P25	口13.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	外面に煤付着
256	28501	土師器	台付甕	B4	d14	SD572P13南	口15.0	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/3	外面に煤付着
257	28702	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口2/3	外面に煤付着
258	24503	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→直線文→刺突（板）	やや粗	10YR8/4	口1/6	外面に煤付着
259	28401	土師器	台付甕	B4	d14	SD572P20	口17.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ→刺突（板）	粗	10YR7/3	口3/4	外面に煤付着
260	27301	土師器	台付甕	B4	d14	SD572P17	口16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR8/4	口1/3	底部内面に砂充填の可能性 外面に煤付着
261	24604	土師器	台付甕	B4	e15	SD572一群	脚7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	脚1/2	
262	24102	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	脚7.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚1/2	内面に炭化物付着
263	24103	土師器	台付甕	B4	d15	SD572P8	脚7.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y6/2	脚ほぼ完存	内面に炭化物付着 被熱により変色
264	24107	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	脚6.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	脚完存	底部内外面に砂充填 被熱により変色
265	24603	土師器	台付甕	B4	e15	SD572一群	脚8.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚2/3	
266	24605	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	脚6.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚1/2	
267	24105	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	脚8.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/2	脚1/2	
268	24106	土師器	台付甕	B4	d14	SD572P16	脚5.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	脚完存	
269	24101	土師器	台付甕	B4	d15	SD572	脚9.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	脚1/4	底部内外面に砂充填
270	31304	軽石製	砥石	B4	d15	SD572	重13.75g		—	—	完存	4面に使用痕
271	24202	砂岩	砥石	B4	d15	SD572	重200g		—	—	4面残	4面に使用痕
272	31202	軽石製	砥石	B4	d14	SD572	重70.17g		—	—	完存	5面に使用痕
273	25204	土師器	器台	B4	d15～16	SZ575P3	脚7.7	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	密	5YR6/6	脚完存	受部内面に水銀朱付着 外面に煤付着
274	15103	土師器	器台	B4	d16	SZ575	—	ナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR5/3	1/4	受部内面に水銀朱付着 外面に煤付着
275	25201	土師器	高杯	B4	d15～16	SZ575P6	脚柱3.9	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	密	5YR7/6	脚柱完存	外面に煤付着
276	17701	土師器	壺	B4	d15～16	SZ575P10	口17.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→刺突（板）	やや粗	10YR7/3	頸7/8	外面に煤付着

tab.11　出土遺物観察表(6)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
277	25303	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P8	脚上5.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	底完存	底部内外面に砂充填 底部焼成後穿孔
278	25103	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P6	脚10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/3	脚2/3	底部内外面に砂充填
279	25102	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P6	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
280	25104	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P6	口14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/6	外面に煤付着
281	25101	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P4	口12.8 高21.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	体7/10	底部外面に砂充填 外面に煤付着
282	25203	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P5	脚8.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚1/2	
283	25202	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P6	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/3	口1/4	
284	17801	土師器	台付甕	B4	d15～16	SZ575P1	口21.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/3	口1/3	外面に煤付着
285	17404	須恵器	杯蓋	B4	d～e16	SH499	摘径3.1	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付けナデ	やや密	10YR7/3	つまみ完存	
286	17401	土師器	杯	B4	d～e16	SH499	口11.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
287	17408	土師器	台付甕	B4	d～e16	SH499	口14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/6	
288	25302	土師器	甕	B4	d15	試掘抗No.23	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	頸1/6	
289	17403	土師器	台付甕	B4	d～e15	包含層	脚6.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚完存	外面に煤付着
290	17402	土師器	台付甕	B4	d14	包含層	脚8.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚完存	
291	25301	土師器	台付甕	B4	d15	試掘抗No.23	頸16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	2.5Y6/1	頸1/10	被熱により変色
292	33002	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504　2面下	口8.6 高9.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密		脚完存	
293	24705	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y7/3	口1/10	
294	29001	土師器	台付甕	B4	d14	SD572P23	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	2.5Y8/2	口1/4	外面に煤付着
295	24704	土師器	甕	B4	d14	SZ504	口12.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/4	口1/6	口縁部内面・外面に煤付着
296	24601	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR6/4	脚完存	外面に煤付着 内面に炭化物付着
297	25004	土師器	高杯	B4	d14	SZ504	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR8/2	杯1/4	
298	25604	土師器	高杯	B4	g14	SZ504	脚11.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、3方向透孔	やや密	5YR7/6	脚完存	
299	24806	土師器	高杯	B4	d14	SZ504	脚9.3	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→透孔(1ヶ所残)→赤彩(ベンガラ)	やや粗	5YR6/6	脚1/4	
300	25601	土師器	高杯	B4	g14	SZ504　上面	口29.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	N4/	口1/16	
301	32001	土師器	高杯	B4	g14	SZ504　上面	口23.0 高21.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや粗	5YR7/4	口1/6	
302	24802	土師器	壺	B4	d14	SZ504	口18.8	ナデ→ヘラミガキ→櫛描波状文→竹管文	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	口縁部に穿孔2ヵ所(焼成後?)
303	24606	土師器	壺	B4	d14	SZ504	頸4.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	頸完存	
304	24902	土師器	甕	B4	d14	SZ504	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/3	口1/3	
305	32804	土師器	甕	B4	d15	SZ504　1面	口12.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや密	2.5Y4/1	口1/10	
306	24701	土師器	甕	B4	d14	SZ504	口11.5	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/4	口1/4	
307	24906	土師器	甕	B4	d14	SZ504	口14.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/3	口1/10	
308	24903	土師器	甕	B4	d14	SZ504	口14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR8/4	口1/10	外面に煤付着
309	25006	土師器	甕	B4	d14	SZ504	－	ナデ→タタキ→ヨコナデ→ヘラケズリ	密	N3/	小片	
310	25005	土師器	甕	B4	d14	SZ504	－	ナデ→タタキ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	小片	
311	24905	土師器	甕	B4	d14	SZ504	頸12.4	ナデ→タタキ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	7.5YR5/4	頸1/10	胎土中に角閃石多量に含む
312	24804	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	脚7.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/2	脚1/3	外面に煤付着
313	25605	土師器	台付甕	B4	g14	SZ504　上面	脚7.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR7/3	脚ほぼ完	
314	25003	土師器	壺	B4	d14	SZ504	底5.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5YR6/8	底完存	
315	32003	土師器	小形壺	B4	d14	SZ504上面一群	口9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	7.5YR6/4	頸部1/3	
316	24803	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	脚上4.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/4	底ほぼ完	内外面に煤付着 脚裾部磨滅
317	24805	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	脚8.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR6/6	脚1/2	
318	24602	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚完存	底部外面に砂充填
319	24901	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	口14.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/3	口縁部外面に煤付着
320	24502	土師器	台付甕	B4	e14	SZ504	口16.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口2/3	口縁部外面に煤付着
321	32101	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504上面一群	口12.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/3	
322	32102	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504　1層	口15.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR7/3	口1/6	

tab.12　出土遺物観察表(7)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
323	24501	土師器	台付甕	B4	d14	SZ504	口15.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/5	外面に煤付着
324	24904	土師器	壺	B4	d14	SZ504	頸10.4	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	頸部1/6	口縁端部欠損 口縁部内面に煤付着
325	32103	土師器	杯蓋	B4	d14	SZ504上層	口21.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/6	口1/4	
326	25001	須恵器	杯身	B4	d14	SZ504	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N5/	口1/6	
327	25002	須恵器	杯身	B4	e13	SZ504	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y7/2	口1/2	
328	17604	土師質	土錘	B4	d~e1	包含層	径2.4	ナデ	やや密	10YR6/4	ほぼ完存	
329	24708	石製	敲石	B4	d14	SZ504	長8.0 重105g		－		完存	両端に使用痕
330	32201	土師質	土管	B4	d10	SZ504 1面	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/2	口ほぼ完存	
331	35301	鉄	斧	B4	d9	包含層						鋳造
332	17407	土師器	甕	B4	d17	SX496南溝	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/2	口1/8	外面に煤付着
333	17501	土師器	甕	B4	d~e9	包含層	口27.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/10	
334	32902	土師器	杯	B4	d14	SH502P8	口12.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/8	口5/6	口縁部に墨書「田□」
335	32904	土師器	杯	B4	d14	SH502P2	口12.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/8	口1/2	
336	32602	土師器	杯	B4	d14	SH502	口12.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6	完存	
337	33003	土師器	杯	B4	d14	SH502P11	口6.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/8	口10/12	口縁部と底部外面に墨書「田井」
338	32304	土師器	皿	B4	d14	SH502	口17.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	2.5YR6/8	口1/3	
339	32302	土師器	杯蓋	B4	d14	SH502	口17.6	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR7/6	口1/4	
340	32303	土師器	杯	B4	d14	SH502	口16.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/6	口1/2	
341	32901	土師器	杯	B4	d14	SH502P9	口14.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/8	口5/6	
342	32905	土師器	杯	B4	d14	SH502P3	口14.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/8	口1/3	口縁部に墨書「田井」
343	32903	土師器	杯	B4	d14	SH502	口14.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/8	口1/2	
344	32802	須恵器	蓋	B4	d14	SH502	口11.2	回転ナデ	密	5Y7/1	口1/6	
345	32701	土師器	杯蓋	B4	d14	SH502	口14.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	2.5Y5/1	口4/6	
346	32604	須恵器	杯	B4	d14	SH502	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y4/1	口1/4	
347	32605	須恵器	杯	B4	d14	SH502	口14.2	回転ナデ→回転ケズリ	密	5Y6/1	口1/2	
348	32805	土師器	椀	B4	d14	SH502P6	口18.6	ナデ→ヨコナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	5YR6/5	口1/10	
349	32301	土師器	鉢	B4	d14	SH502	口20.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/8	
350	32601	土師器	鉢	B4	d14	SH502P7	口23.2	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	5YR6/8	口4/6	
351	32603	土師器	甕	B4	d14	SH502P10	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	5YR7/4	口1/6	
352	32803	土師器	甕	B4	d14	SH502	口15.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/6	
353	32606	土師器	甕	B4	d14	SH502P4	口16.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	5YR6/6	口1/4	
354	32202	土師器	甕	B4	d14	SH502P5·12	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	5YR7/3	口3/8	
355	32203	土師器	鉢	B4	d14	SH502	口21.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/6	
356	32801	須恵器	甕	B4	d14	SH502	口27.2	ナデ→ヨコナデ	やや密	5Y6/1	口1/6	
357	32906	土師器	製塩土器	B4	d14	SH502P1	底15.8 高7.3	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	5YR5/8	口1/2	
358	32806	土師質	土錘	B4	d14	SH502	長4.4	ナデ	やや密	10YR6/3	完存	
359	29501	弥生土器	壺	B5	g36	SH569P17	口32.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押圧(指)	やや粗	10YR5/2	口1/4	
360	29503	弥生土器	壺	B5	g36	SH569P7	口22.8	ナデ→ヨコナデ→押圧	粗	7.5YR7/4	口1/4	
361	29901	弥生土器	壺	B5	g36	SH569P1·17南	最大44.4	ナデ→ハケメ→疑似流水文→ヘラミガキ	やや粗	2.5YR6/6	底完存	
362	29801	弥生土器	壺	B5	g36	SH569P6·9·12·16	最大44.0	ナデ→ハケメ→沈線→櫛描直線文→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/3	体1/3	外面に煤付着
363	29701	弥生土器	甕	B5	g36	SH569	－	ナデ→条痕→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	小片	
364	29702	弥生土器	甕	B5	g36	SH569P5	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5YR5/4	小片	
365	29703	弥生土器	壺	B5	g36	SH569	－	ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文(1単位2×3)	密	10YR6/3	小片	
366	29504	弥生土器	高杯	B5	g36	SH569P3	脚柱4.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	2.5YR6/6	脚柱完存	
367	29502	弥生土器	壺	B5	g36	SH569P11·15	－	ナデ→疑似流水文→ヘラミガキ	粗	2.5Y5/2	小片	
368	29601	弥生土器	甕	B5	g36	SH569P4·14·19	口22.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや粗	7.5YR6/4	口1/4	外面に煤付着 外面の器壁表面剥離

tab.13　出土遺物観察表(8)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
369	29705	弥生土器	甕	B5	g36	SH569	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや密	10YR8/4	口1/8	外面に煤付着
370	29603	弥生土器	甕	B5	g36	SH569	底5.5	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	7.5YR6/4	底1/3	底部に焼成後穿孔 外面やや磨滅ざみ
371	29602	弥生土器	壺	B5	g36	SH569	底5.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR6/3	底1/3	底部内面の剥離著しい
372	31902	弥生土器	甕	B5	f35	SH562	−	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	7.5YR6/4	口小片	外面に煤付着
373	30903	弥生土器	甕	B5	g20	包含層	底7.0	ナデ→ハケメ	粗	5YR6/6	底ほぼ完存	焼成前穿孔
374	30906	弥生土器	甕	B5	g33	SD532最下層	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	粗	2.5Y7/3	口小片	375と同一個体
375	30907	弥生土器	甕	B5	g31	SH556	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや粗	10YR7/3	口小片	374と同一個体
376	30905	弥生土器	甕	B5	g28	SD544	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや粗	7.5YR6/6	口小片	
377	31001	弥生土器	甕	B5	g~h19	SH557	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや密	7.5YR4/1	口小片	
378	31002	弥生土器	壺	B5	g29	SH550	−	ナデ→櫛描直線文	やや粗	7.5YR5/1	小片	
379	29406	弥生土器	壺	B5	g35	SK564	−	ナデ→沈線→縄文	粗	10YR6/2	小片	
380	30908	弥生土器	壺	B5	g18	包含層	−	ナデ→櫛描波状文→刺突（櫛）＋竹管文	やや密	2.5Y6/3	口小片	
381	29203	土師器	小形甕	B5	g35	SK564	口9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突（櫛）	やや粗	10YR7/3	口1/4	口縁部外面に煤付着
382	29401	土師器	壺	B5	g35	SK564	口24.5	ナデ→ヨコナデ→刺突（板）→棒状浮文＋刺突	やや粗	5YR5/6	口1/20	
383	29307	土師器	台付甕	B5	g38	SH552	脚上6.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/4	脚柱上完存	
384	29407	土師器	甕	B5	g38	SH565	−	ナデ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	小片	
385	25905	土師器	台付甕	B5	g26	SH565	口7.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	頸1/2	
386	25706	土師器	壺	B5	g25	SH565	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	5YR7/4	口1/6	口縁部から内面に内蔵物?付着
387	29305	土師器	壺	B5	g30	SH553	口21.5	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→刺突（板）	やや密	7.5YR6/6	口1/20	
388	31403	土師器	台付甕	B5	g30	SH553P1	口13.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口1/5	外面に煤付着
389	31704	土師器	甕	B5	g27	SH570	口14.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/5	
390	31601	土師器	高杯	B5	g38	SH570	口14.0	ナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口1/5	
391	31602	土師器	小形鉢	B5	g39	SH570	口17.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口下部1/3	
392	29308	土師器	器台	B5	g28	SD544P1	口7.5	ナデ→ヨコナデ→ヨコナデ→赤彩（ベンガラ）	やや粗	10YR7/4	口1/10	
393	29304	土師器	高杯	B5	g28	SD544P2	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	7.5YR7/6	脚完存	
394	29204	土師器	壺	B5	g28	SD544P4	−	ナデ→ヨコナデ→赤彩（ベンガラ）	やや粗	5YR5/4	擬口1/5	
395	29404	土師器	壺	B5	g28	SD544P4	−	ナデ→ハケメ→櫛描直線文→櫛描波状文→刺突（板）	やや粗	10YR6/4	小片	
396	29202	土師器	台付甕	B5	g28	SD544P3	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/4	口2/5	被熱により変色
397	30204	土師器	小形器台	B5	g35	包含層	口7.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→透孔→赤彩（ベンガラ）	やや密	10YR6/6	口1/4	
398	30103	土師器	壺	B5	g34	包含層	頸7.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→赤彩（ベンガラ）	やや粗	10YR8/2	頸1/4	
399	30401	土師器	壺	B5	g34	Pit8	−	ナデ→ハケメ→直線文＋山形文＋刺突（板）→赤彩（ベンガラ）	やや密	10YR6/2	小片	
400	30105	土師器	壺	B5	g35	包含層	口15.4	ナデ→ヨコナデ→櫛描波状文→竹管文	粗	7.5YR8/4	口1/8	
401	25704	土師器	壺	B5	g32	SZ504	口14.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/3	口1/4	
402	31901	土師器	壺	B5	g35	SH562	頸11.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→貼り付けナデ→直線文→波状文（板）	粗	7.5YR7/4	頸1/4	
403	34303	土師器	壺	B5	g36	SH569(混入)	口14.6	ナデ→ヨコナデ→縄文	粗	10YR8/4	口1/8	
404	34203	土師器	壺	B5	g33~34	包含層	−	ナデ→単節縄文→竹管文	粗	10YR8/4	口1/8	
405	34202	土師器	壺	B5	g33~34	包含層	−	ナデ→単節縄文→円形浮文	粗	10YR8/4	口1/8	
406	34204	土師器	壺	B5	g34	包含層	−	ナデ→S字状結節文？	粗	7.5YR8/4	頸1/8	
407	25906	土師器	壺	B5	g32	SH556	−	ナデ→結節縄文→円形浮文	密	7.5YR7/3	小片	
408	34402	土師器	壺	B5	g31	SH556	−	ナデ→単節縄文→円形浮文	粗	7.5YR8/6	肩小片	
409	30005	土師器	壺	B5	f32~35	包含層	口13.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	頸1/4	
410	29303	土師器	壺	B5	f35	SH562	−	ナデ→ヨコナデ	粗	2.5Y6/1	口1/20	
411	30102	土師器	台付甕?	B5	g35	包含層	脚10.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/3	脚上完存	
412	30202	土師器	小形壺	B5	g18	包含層	頸6.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/3	体部9/10	
413	30006	土師器	ミニチュア土器	B5	g35	包含層	脚2.8	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚完存	
414	30203	土師器	加工円盤	B5	h19	包含層	脚上5.4		やや粗	7.5YR6/4	完存	

tab.14　出土遺物観察表(9)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
415	25803	土師器	壺	B5	g35	SH556	口15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや密	2.5YR6/6	口1/20	
416	31803	土師器	台付甕	B5	g35	SH562	口18.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR7/1	口1/8	
417	22304	弥生土器	甕	B5	g17	SD572	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや粗	5YR6/4	口1/6	外面に煤付着
418	27702	土師器	壺	B5	g17	SD572	口8.5	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR8/3	底完存	
419	23103	土師器	壺	B5	g17	SD572P1	口9.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	ほぼ完存	
420	33801	土師器	壺	B5	g19	SD572P3	口11.0 高19.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/6	完存	
421	23707	土師器	高杯	B5	h17	SD572	底4.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	密	7.5YR7/4	底1/2	外面に煤付着
422	22504	土師器	壺	B5	g16～17	SD572	底3.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	底完存	
423	23102	土師器	壺	B5	g16	SD572P17	底5.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	体ほぼ完存	
424	22901	土師器	壺	B5	h17	SD572P35	底4.2	ナデ→ハケメ→工具ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→刺突(貝)	緻密	5YR6/6	体完存	
425	27403	土師器	壺	B5	h18	SD572P47	底3.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突(貝)	やや粗	5YR7/4	底完存	
426	22502	土師器	壺	B5	g17	SD572	口14.5	ナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR5/3	口1/4	口縁部内面から外面に煤付着
427	22303	土師器	壺	B5	g17	SD572	口13.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突(板)	やや密	10YR7/3	口1/4	
428	23903	土師器	壺	B5	h18	SD572	－	ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/6	口1/20	外面に煤付着
429	23901	土師器	壺	B5	h17～18	SD572	口15.4	ナデ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	10YR7/3	口1/4	
430	23902	土師器	壺	B5	h18	SD572	口16.5	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/6	口1/4	
431	22801	土師器	壺	B5	g16	SD572P11	口15.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/4	口1/4	
432	27001	土師器	壺	B5	g17	SD572P16	口18.0 高31.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突(板)	やや密	N3/	口2/3	
433	23703	土師器	甕	B5	h18	SD572	底5.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	底完存	
434	28103	土師器	甕	B5	h18	SD572	底6.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/4	底2/3	
435	22603	土師器	甕	B5	g17	SD572P15	底4.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	底完存	
436	23201	土師器	壺	B5	g16	SD572P4	口20.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR8/4	口2/3	2種類の粘土使用
437	23002	土師器	壺	B5	g17	SD572P12	頸9.9	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	頸完存	
438	23801	土師器	壺	B5	h18	SD572	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	5YR6/4	口1/4	
439	22602	土師器	台付鉢	B5	h18	SD572P54	口13.1	ナデ→ハケメ→工具ナデ→ヨコナデ	粗	2.5Y7/3	9/10	
440	33201	土師器	手焙	B5	h18	SD572	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文、刺突、貼り付けナデ	密	10YR6/4	体1/3	
441	23805	石製	敲石	B5	h18	SD572	長8.8 重280g		－	－	完存	3面に使用痕
442	31203	軽石製	砥石	B5	g17	SD572	重66.15g		－	－	ほぼ完存	4面に使用痕
443	31302	軽石製	砥石	B5	g16～17	SD572	重9.75g		－	－	完存	
444	23604	石製	砥石	B5	g17	SD572	重95g		－	－	2面残	2面に使用痕
445	33701	土師器	脚付壺	B5		SD572P2	口10.4 高19.7	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文→刺突(貝)、3方向透孔	密	5YR6/6	完存	体部に焼成後穿孔
446	27703	土師器	脚付壺	B5	g16	SD572	口12.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや粗	10YR7/3	口1/2	
447	22301	土師器	脚付壺	B5	g15	SD572西焼土層上	頸7.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、4方向透孔	やや密	7.5YR7/6	体ほぼ完存	
448	23004	土師器	脚付壺？	B5	g16	SD572P10	脚柱4.0	ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/6	脚上完存	
449	27902	土師器	脚付壺	B5	g17	SD572	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	7.5YR7/3	脚柱完存	外面に煤付着
450	22605	土師器	脚付壺	B5	h18	SD572P43	脚柱3.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	粗	7.5YR7/4	脚上完存	
451	23005	土師器	脚付壺？	B5	g16	SD572P5	脚柱3.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	5YR7/6	脚上完存	
452	27402	土師器	脚付壺	B5	g17	SD572P28	脚12.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/6	体完存	
453	27901	土師器	脚付壺	B5	h19	SD572P51	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	10YR7/4	脚柱完存	
454	22803	土師器	高杯	B5	h18	SD572P38	口9.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR7/6	杯1/2	外面に煤付着
455	27904	土師器	高杯	B5	g17	SD572P26	口10.4	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR7/2	口1/2	外面に煤付着 被熱により変色
456	27401	土師器	高杯	B5	g17	SD572P33	口11.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR8/3	口2/3	
457	28102	土師器	高杯	B5	h18	SD572	口9.8	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文	やや粗	7.5YR8/4	口3/4	外面に煤付着 被熱により変色
458	27503	土師器	高杯	B5	g17	SD572P34	口13.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	粗	7.5YR6/4	口1/4	外面に煤付着
459	27604	土師器	脚付鉢	B5	g17	SD572	口15.5	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/6	口7/8	
460	23705	土師器	高杯	B5	h18	SD572	口13.6	ナデ→ヘラミガキ	密	2.5YR6/8	口1/6	

tab.15　出土遺物観察表(10)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
461	23704	土師器	高杯	B5	h18	SD572	口14.0	ナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/6	口1/4	
462	23605	土師器	高杯	B5	h18	SD572	脚柱3.8	ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、4方向透孔	密	5YR6/6	脚柱完存	
463	22704	土師器	高杯	B5	h18	SD572	脚柱3.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/6	脚柱完存	
464	23202	土師器	高杯	B5	h18	SD572	脚12.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→3方向透孔	粗	10YR6/4	脚ほぼ完存	
465	22904	土師器	脚付壺?	B5	h19	SD572P49	脚11.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/4	脚2/3	
466	23203	土師器	高杯	B5	g17	SD572	脚柱3.8	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	10YR6/4	脚柱完存	
467	22604	土師器	高杯	B5	g17	SD572P37	脚9.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	密	10YR8/3	脚2/3	
468	23003	土師器	脚付壺?	B5	g17	SD572P23	脚11.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、4方向透孔	粗	10YR8/1	脚完存	
469	23503	土師器	小形鉢	B5	g17	SD572	口16.5	ナデ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/6	口1/10	
470	22507	土師器	小形鉢	B5	g16～17	SD572	—	ナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/8	頸1/10	外面に煤付着
471	23001	土師器	高杯	B5	g17	SD572	口22.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/4	口1/4	
472	22501	土師器	高杯	B5	g17	SD572	口23.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR6/2	口1/7	被熱により変色
473	27602	土師器	高杯	B5	h19	SD572	口19.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/2	口1/4	
474	28002	土師器	高杯	B5	g15	SD572	口28.1	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
475	28003	土師器	高杯	B5	g17	SD572	口16.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	2.5Y6/3	口ほぼ完存	
476	22703	土師器	高杯	B5	g17	SD572P14	脚柱4.1	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、透孔	粗	10YR8/2	脚柱完存	
477	22305	土師器	高杯	B5	g17	SD572P27	脚柱3.9	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1+3方向透孔	やや粗	10YR6/4	脚柱完存	
478	22902	土師器	高杯	B5	g17	SD572P31	脚柱4.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、3方向透孔	やや粗	2.5YR5/6	脚柱完存	
479	22802	土師器	高杯	B5	h18	SD572P46	脚柱3.8	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、3方向透孔	やや密	10YR8/4	脚柱完存	
480	23601	土師器	高杯	B5	h18	SD572	口26.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
481	23204	土師器	高杯	B5	h18	SD572	口24.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや粗	7.5YR7/6	口1/3	外面に煤付着
482	23301	土師器	高杯	B5	h18	SD572P40	口20.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	5YR6/4	脚柱完存	
483	28001	土師器	高杯	B5	g17	SD572	口22.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	5YR6/8	口1/3	
484	27701	土師器	高杯	B5	h19	SD572P53	口28.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/4	口小片	
485	27501	土師器	高杯	B5	h19	SD572P50·52	口28.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/4	口2/5	
486	23401	土師器	高杯	B5	g17	SD572P18	口26.2	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、4方向透孔	やや密	10YR7/4	杯9/10	
487	27601	土師器	高杯	B5	h18	SD572P44	口21.5	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや密	10YR6/3	口1/2	
488	28603	土師器	高杯	B5	g17	SD572P25	脚柱5.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1+3方向透孔	やや密	10YR7/4	脚柱完存	
489	28301	土師器	高杯	B5	g16	SD572P4下	脚14.9	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1+3方向透孔	やや密	10YR6/4	脚5/6	
490	27903	土師器	高杯	B5	h18	SD572P45	脚15.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、1+3方向透孔	やや密	10YR8/3	脚柱完存	
491	27603	土師器	高杯	B5	h19	SD572	脚柱4.2	ナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR5/3	脚上完存	
492	22903	土師器	高杯	B5	h18	SD572P39	脚15.7	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ櫛描直線文、3方向透	密	5YR7/6	脚5/6	
493	22701	土師器	高杯	B5	g17	SD572P24	脚16.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5Y6/1	脚1/4	
494	22302	土師器	高杯	B5	g17	SD572	脚14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	10YR7/4	脚1/4	
495	23101	土師器	高杯	B5	g16	SD572	脚柱3.9	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	粗	7.5YR8/4	脚柱完存	
496	27502	土師器	高杯	B5	g17	SD572P19	脚14.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR7/4	脚7/10	
497	23701	土師器	高杯	B5	h18	SD572	脚12.8	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、2＋3方向透孔	やや粗	5YR7/6	脚柱完存	
498	22601	土師器	高杯	B5	g16	SD572P8	口26.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	10YR8/3	口1/8	
499	23603	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→直線文＋波状文(板?)、刺突	やや粗	7.5YR3/1	口1/5	外面に煤付着
500	23602	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	10YR7/2	口1/6	
501	22606	土師器	甕	B5	g16	SD572	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	粗	10YR6/4	口1/12	外面に煤付着
502	23501	土師器	台付甕	B5	g16	SD572	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文＋刺突（櫛）	やや粗	5YR6/6	口ほぼ完存	外面に煤付着 体部外面に刺突?
503	27801	土師器	台付甕	B5	g16	SD572	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文→刺突（櫛）	やや密	10YR5/2	口1/2	外面に煤付着
504	27101	土師器	台付甕	B5	g16	SD572P4下	口23.4 高28.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	10YR8/4	口4/5	外面に煤付着
505	28101	土師器	台付甕	B5	h18	SD572P42	口15.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや密	7.5YR8/4	口2/3	外面に煤付着
506	23502	土師器	台付甕	B5	g17	SD572P26	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文＋押し引き施文（櫛）	やや粗	2.5Y7/3	口ほぼ完存	

tab.16　出土遺物観察表(11)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
507	23706	土師器	甕	B5	h17	SD572	底4.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	底完存	外面に煤付着
508	22505	土師器	甕	B5	g17	SD572	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/3	口1/5	外面に煤付着
509	22503	土師器	甕	B5	g16～17	SD572	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR4/2	口1/10	外面に煤付着
510	22506	土師器	小形壺	B5	g17	SD572	－	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→刺突	やや密	7.5YR6/6	口1/10	
511	23302	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	口9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	7.5YR7/6	体ほぼ完存	外面に煤付着 口縁部3ヶ所に内面から打ち欠き
512	23802	土師器	甕	B5	h18	SD572	口16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	口1/4	口縁部外面に煤付着
513	28201	土師器	甕	B5	g17	SD572	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR8/4	口2/3	
514	23803	土師器	甕	B5	h18	SD572	口19.8	ナデ→板ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/8	
515	31603	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	頸13.0 高16.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR4/2	口1/5	外面に煤付着
516	22407	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	脚6.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	脚完存	被熱により変色
517	22403	土師器	台付甕	B5	h18	SD572P48	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/2	脚ほぼ完存	
518	22401	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	脚7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3	脚2/3	外面に煤付着 被熱により変色
519	22406	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	脚6.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR4/1	脚完存	外面に煤付着
520	23702	土師器	台付甕	B5	h18	SD572	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	脚1/2	
521	22405	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	脚9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	脚1/2	外面に煤付着
522	22804	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	脚8.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	脚完存	
523	22404	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	脚9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	脚2/3	底部内面に砂充填
524	23402	土師器	台付甕	B5	g16	SD572	脚7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	脚完存	内面に炭化物付着
525	33301	土師器	台付甕	B5	g16	SD572P9	口15.4 高28.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	密	2.5Y7/3	口完存	底部内面に砂充填 外面に煤付着
526	22402	土師器	台付甕	B5	g17	SD572	脚10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚ほぼ完存	外面に煤付着 被熱により変色
527	22702	土師器	台付甕	B5	g16	SD572P6	脚10.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/2	脚完存	底部内外面に煤付着
528	18407	土師質	土錘?	B5	g34	SD532最下層	径1.6	ナデ	やや密	2.5YR5/6	完存	
529	18304	土師質	土錘	B5	g33	SD532最下層	径3.3	ナデ	やや密	N3/	完存	
530	18305	土師質	土錘	B5	g34	SD532最下層	径2.9	ナデ	やや密	7.5YR6/4	完存	
531	31101	結晶片岩	打製石斧	B5	g33	SD532最下層	幅4.3 重118.0g		－	－	完存	
532	31102	片岩	敲石	B5	g33	SD532最下層	幅6.0 重414.5g		－	－	1端欠	
533	18405	石製	敲石	B5	g33	SD532最下層	重500g		－	－	完存	
534	20806	土師器	籠目土器	B5	g33	SD532最下層	－	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/2	口小片	
535	20302	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	底3.8	ナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR8/4	底完存	底部に砂付着
536	18206	土師器	ミニチュア土器	B5	g34	SD532最下層	底3.0	ナデ→工具ナデ	密	10YR6/4	底完存	
537	18502	土師器	小形鉢	B5	g34	SD532最下層	口7.0	ナデ→ヘラミガキ	密	2.5YR6/6	ほぼ完存	
538	20206	土師器	壺	B5	g32	SD532最下層	底3.2	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	底完存	底部中心のみに刻目？
539	20101	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	口13.0	ナデ→ヘラミガキ→貼り付けナデ→櫛描直線文＋刺突＋円形浮文	粗	5YR6/6	口1/3	円形浮文に別粘土使用
540	20705	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/6	口1/8	
541	20105	土師器	器台	B5	g33	SD532最下層	口14.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→擬凹線	密	5YR7/4	口1/5	
542	18302	土師器	壺	B5	g34	SD532最下層	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→羽状文(板)	やや粗	7.5YR7/6	口1/9	
543	18005	土師器	甕	B5	g34	SD532最下層	口15.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	口1/4	
544	18303	土師器	壺	B5	g34	SD532最下層	口12.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→刺突（貝）	やや粗	5YR6/6	口1/2	
545	18003	土師器	壺	B5	g34	SD532最下層	口14.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/13	
546	18401	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/9	
547	18406	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	－	ナデ→櫛描波状文→円形浮文＋竹管文	やや粗	N3/	小片	
548	18301	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	－	ナデ→ハケメ→櫛描直線文＋櫛描波状文	やや密	5YR6/6	小片	
549	20301	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	－	ナデ→ヘラミガキ→櫛描波状文→円形浮文＋竹管文	やや密	7.5YR6/4	小片	
550	20208	土師器	器台	B5	g32	SD532最下層	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→板ナデ→ヘラミガキ、4方向透孔の可能性有	やや密	7.5YR7/4	脚柱1/2	受部接合面に工具痕
551	18501	土師器	高杯	B5	g33	SD532最下層	脚柱4.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	5YR7/6	脚柱完存	脚内面に竹管状工具痕複数
552	21601	土師器	高杯	B5	g33	SD532最下層	口11.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/6	杯1/10	

tab.17　出土遺物観察表(12)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
553	20702	土師器	手焙	B5	g33	SD532最下層	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文→貼り付けナデ→ハケメ	やや密	10YR7/3	口1/5	
554	20801	土師器	手焙	B5	f34	SD532最下層	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→ハケメ	やや粗	10YR7/2	口1/5	
555	18404	土師器	壺	B5	g34	SD532最下層	−	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	小片	2種類の粘土使用
556	20306	土師器	甕	B5	g33	SD532最下層	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口小片	
557	20205	土師器	甕	B5	g33	SD532最下層	底4.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/3	底完存	
558	20706	土師器	甕	B5	g34	SD532最下層	底4.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/4	底ほぼ完存	
559	20203	土師器	台付甕	B5	g32	SD532最下層	脚7.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/4	脚2/3	
560	20704	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	脚4.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR7/3	脚ほぼ完存	
561	18505	土師器	壺	B5	g33	SD532最下層	底4.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	底完存	
562	20804	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	脚1/3	
563	18506	土師器	台付甕	B5	g33	SD532最下層	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	脚ほぼ完存	被熱により変色
564	20204	土師器	台付甕	B5	g32	SD532最下層	脚7.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	脚3/4	被熱により変色
565	18508	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	脚5.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/2	脚完存	
566	18507	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	脚6.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y5/1	脚ほぼ完存	
567	18504	土師器	台付甕	B5	g33	SD532最下層	脚6.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR4/6	脚3/4	
568	18509	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	脚6.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR4/1	脚1/2	
569	18503	土師器	台付甕	B5	g33	SD532最下層	脚7.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚5/6	底部内外面に砂充填
570	18402	土師器	台付甕	B5	g33	SD532最下層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR4/1	口1/8	
571	20805	土師器	台付甕	B5	g33	SD532最下層	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	粗	10YR8/3	頸1/6	
572	20701	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	粗	10YR8/3	口1/6	口縁部外面一部に煤付着
573	20707	土師器	台付甕	B5	g34	SD532最下層	口9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/2	口1/2	
574	18602	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口14.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/4	
575	19002	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口15.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→沈線	やや粗	5YR7/4	口1/8	
576	20402	土師器	壺	B5	f～g34	SD532下・最下層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/2	
577	20404	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口17.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→刺突（板）	やや粗	10YR8/3	口1/4	
578	21702	土師器	壺	B5	g32	SD532下層	口16.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→貼り付けナデ	やや密	10YR7/3	口2/3	
579	20403	土師器	壺	B5	f～g34	SD532下層	口14.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→刺突（板）	やや密	7.5YR6/4	口3/4	
580	21502	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口15.1	ナデ→貼り付けナデ→ヨコナデ→刺突（板）	やや粗	5YR7/6	口3/4	
581	21501	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文＋刺突→ヘラミガキ、円形浮文	やや密	5YR6/4	口7/8	
582	18606	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	極粗	10YR8/3	口1/3	
583	18905	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→刺突（板）	粗	7.5YR8/4	口1/6	
584	19303	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3	口1/2	
585	18001	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口15.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/3	
586	18601	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口13.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/2	
587	34205	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸9.0	ナデ→単節縄文	粗	7.5YR8/4	頸1/10	
588	20401	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口16.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	口1/4	
589	20104	土師器	壺	B5	f34	SD532下層	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR7/4	口1/8	
590	18002	土師器	壺	B5	e35	SD532下層	口18.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/7	
591	18605	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸10.0	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ→刺突（板）	粗	10YR7/3	頸1/3	
592	21701	土師器	壺	B5	g32	SD532下層	口13.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口完存	口縁端部に煤付着
593	19102	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口15.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→竹管文	密	7.5YR7/4	口1/10	
594	31801	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口29.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突（板）→赤彩（ベンガラ）	密	10YR7/3	口1/3	
595	19001	土師器	壺	B5	f～g34	SD532下層	口20.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→赤彩（ベンガラ）	やや密	10YR7/3	口1/10	
596	20501	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口25.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR7/3	口1/20	
597	18102	土師器	甕	B5	e35	SD532上層	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→赤彩（ベンガラ）	やや密	7.5YR6/4	口1/4	
598	19003	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口13.6	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	口1/8	

tab.18　出土遺物観察表(13)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
599	20606	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸4.7	ナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR5/6	頸完存	
600	19004	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸5.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文＋櫛描波状文→刺突	やや密	7.5YR6/6	頸1/2	
601	18702	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→櫛描直線文→櫛描波状文→刺突（貝）→竹管文	密	5YR6/6	小片	
602	18603	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸7.0	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ→刺突（板）	やや粗	10YR8/3	頸1/3	
603	19103	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	－	ナデ→竹管文＋櫛描波状文→赤彩（ベンガラ）	やや粗	10YR7/3	小片	
604	19506	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→ヘラミガキ→竹管文	やや密	7.5YR7/3	小片	
605	34302	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	口1/20	
606	18104	土師器	甕	B5	g34	SD532下層	口15.6	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	5YR7/6	脚裾1/5	
607	18604	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→刺突（板）	やや粗	7.5YR6/4	口1/6	
608	21603	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	口8.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突（貝）	密	5YR7/6	口1/2	
609	21604	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	頸5.8	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ→刺突（貝）	やや密	5YR6/6	頸完存	
610	21602	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	底4.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR7/4	底完存	
611	18701	土師器	壺	B5	g33	SD532下層・最下層	－	ナデ→直線文（板）＋山形文（板）→赤彩（ベンガラ）	粗	7.5YR8/4	小片	
612	20803	土師器	壺	B5	g32	SH556	－	ナデ→櫛描直線文→刺突（貝）→赤彩（ベンガラ）	粗	7.5YR7/3	小片	
613	19204	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	－	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突（貝）→赤彩（ベンガラ）	やや密	10YR7/3	小片	
614	34301	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	口1/12	
615	34403	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→単節縄文→円形浮文	粗	7.5YR7/6	肩小片	
616	34404	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	－	ナデ→S字状結節文→竹管文	粗	7.5YR7/6	肩小片	
617	34501	土師器	壺	B5	f～g34	SD532下層	－	ナデ→単節縄文	やや粗	7.5YR7/4	肩小片	
618	34405	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→竹管文	粗	7.5YR8/6	肩小片	
619	20504	土師器	甕	B5	g33	SD532下層	底4.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	底完存	底部外面に砂付着
620	18207	土師器	小形壺	B5	g34	SD532下層	底4.0	ナデ→ハケメ	密	7.5YR7/4	底3/4	
621	20407	土師器	甕	B5	g33	SD532下層	底3.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	底完存	
622	19501	土師器	甕	B5	g33	SD532上層	底4.2	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	底4/5	外面・底部に煤付着
623	18805	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	底4.6	ナデ	やや密	7.5YR6/3	底完存	
624	19306	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	底7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	底完存	底部内面に砂充填
625	34307	土師器	壺	B5	f29～30	SD532下層	底9.0	ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	底1/4	底部外面に木葉痕
626	18105	土師器	甕	B5	g34	SD532下層	底8.8	ナデ→板ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	底2/3	底部外面に木葉痕
627	20502	土師器	壺	B5	g34	SD532下層	底8.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	底完存	底部外面に木葉痕2方向
628	20503	土師器	壺	B5	g33	SD532下層	底6.5	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	底完存	底部外面に木葉痕2方向
629	18203	土師器	高杯	B5	g34	SD532下層	脚5.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/4	脚2/3	
630	20408	土師器	手焙	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→押し引き施文	やや粗	10YR8/2	小片	
631	21803	土師器	甑	B5	g32	SD532下層	底4.2	ナデ→工具ナデ→ハケメ→焼成前穿孔	やや密	7.5YR7/4	底完存	
632	20406	土師器	器台	B5	f～g34	SD532下層	－	ナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/6	口1/4	受部内面に凹凸
633	20405	土師器	器台	B5	g33	SD532下層	口9.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、2方向透孔	やや密	7.5YR7/4	口1/4	受部内面に凹凸
634	18202	土師器	器台	B5	g34	SD532下層	脚柱3.8	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR6/4	脚柱完存	受部内面に凹凸
635	20605	土師器	器台	B5	g33	SD532下層	脚柱3.3	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、透孔（1ヶ所残）	密	7.5YR7/4	脚上完存	
636	18801	土師器	高杯	B5	g33	SD532下層	－	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/4	－	脚接合面に工具痕のネガ
637	21706	土師器	高杯	B5	g32	SD532下層	脚柱4.1	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	10YR6/4	脚柱完存	
638	19005	土師器	器台?	B5	g33	SD532下層	脚柱3.2	ナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/6	脚柱完存	
639	18103	土師器	器台	B5	g34	SD532下層	－	ナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/4	－	外面に煤付着
640	18201	土師器	高杯	B5	g34	SD532下層	脚柱3.1	ナデ・シボリメ→面取り→ヘラミガキ→ヨコナデ、透孔（1ヶ所残）	やや密	10YR5/4	脚柱完存	杯部接合面に工具痕
641	20604	土師器	脚付壺	B5	f～g34	SD532下層	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	10YR7/3	脚1/5	
642	19101	土師器	高杯	B5	g33	SD532下層	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/6	脚柱完存	
643	18704	土師器	高杯	B5	g33	SD532下層	脚12.0	ナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	7.5YR6/4	脚1/3	
644	21801	土師器	高杯	B5	g32	SD532下層	脚柱3.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR7/4	杯2/3	

tab.19　出土遺物観察表(14)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
645	18703	土師器	高杯	B5	g33	SD532下層	脚柱3.8	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、4方向透孔	やや粗	7.5YR6/4	脚柱完存	
646	20703	土師器	甕	B5	g33	SD532下層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	2.5YR6/6	口1/8	口縁部外面に煤付着
647	18006	土師器	甕	B5	g34	SD532下層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	5YR7/6	口1/8	外面に煤付着
648	18903	土師器	甕	B5	g34	SD532下層	頸17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/6	口1/6	外面に煤付着
649	21703	土師器	台付甕	B5	g32	SD532下層	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや粗	10YR3/2	口1/8	口縁部外面に煤付着
650	18904	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→沈線→押し引き施文	やや粗	10YR7/1	口1/8	
651	19402	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/4	口1/8	外面に煤付着
652	18101	土師器	台付甕	B5	d35	SD532下層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口1/8	外面に煤付着
653	18004	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	口11.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3	口1/6	外面に煤付着
654	18902	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	口10.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR7/3	口1/4	
655	18901	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	口25.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/2	口5/6	外面に煤付着
656	18205	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	脚6.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	脚1/3	
657	18804	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚6.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	脚3/4	被熱により変色
658	20602	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚1/2	
659	20603	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚6.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚2/3	
660	21704	土師器	台付甕	B5	g32	SD532下層	脚6.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/4	脚完存	外面に煤付着
661	18204	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	脚11.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/2	脚2/3	被熱により変色
662	20601	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚6.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	脚完存	
663	18907	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	脚9.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR5/6	脚3/4	外面に煤付着
664	18803	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR6/3	脚1/4	
665	21705	土師器	台付甕	B5	g32	SD532下層	脚6.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	脚完存	外面に煤付着
666	19406	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚4.5	ナデ→工具ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4	脚完存	
667	21802	土師器	台付甕	B5	g32	SD532下層	脚上6.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	底完存	外面に煤付着 擬口縁明瞭底部内面に砂充填
668	18906	土師器	台付甕	B5	g34	SD532下層	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/3	頸1/3	底部内外面に砂充填 外面に煤付着
669	18802	土師器	台付甕	B5	g33	SD532下層	脚8.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	脚1/2	被熱により変色
670	20607	石製	台石	B5	g33	SD532下層	重428g		−	−	2面残	被熱により変色
671	19201	石製	砥石	B5	g34	SD532下層	長362g		−	−	−	1面使用痕
672	18208	石製	敲石	B5	g34	SD532下層	重285g		−	−	−	
673	21901	砂岩	砥石	B5	g32	SD532下層	長22.0 重1.35kg		−	−	完存	刃状の使用痕（1面）と面単位の使用痕（3面）被熱により変色
674	19603	土師質	土錘	B5	g33	SD532下層	径2.9 重25.1g	ナデ	やや密	10YR7/3	完存	
675	19602	土師質	土錘	B5	g33	SD532下層	径3.5 重37.2g	ナデ	密	10YR7/2	ほぼ完存	
676	19105	土師質	土錘	B5	g34	SD532下層	直径3.2 重29.8g	ナデ	やや密	7.5YR8/4	完存	
677	19203	土師器	加工円盤	B5	g34	SD532下層	径4.4		やや粗	10YR7/3	完存	S字状口縁台付甕
678	19202	土師器	加工円盤	B5	g34	SD532下層	−		やや粗	10YR8/2	完存	S字状口縁台付甕
679	15701	土師器	高杯	B2	d35	SD532上層	口16.6	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→面取り	やや密	10YR7/3	口完存	
680	19503	土師器	壺	B5	g33	SD532上層	頸3.6	ナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR7/4	頸完存	
681	14905	土師器	壺	B5	g33	SD532上層	口17.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→円形浮文	やや粗	7.5YR6/6	口1/5	
682	19301	土師器	壺	B5	g33	SD532上層	頸10.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/6	頸2/3	
683	34502	土師器	壺	B5	g34	SD532上層	−	ナデ→単節縄文	やや粗	7.5YR7/4	肩小片	
684	15702	土師器	台付甕	B2	e35	SD532上層P4	脚10.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/4	脚完存	底部内外面に砂充填
685	19404	土師器	器台	B5		SD532	口8.3	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、透孔（1ヶ所残）	やや粗	5YR5/4	口5/6	煤付着
686	19504	土師器	台付甕	B5	g33	SD532	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/4	脚1/5	外面に煤付着
687	20102	土師器	壺	B5	f～g34	SD532	口15.6	ナデ→ヨコナデ→刺突（板）→赤彩（ベンガラ）	やや密	7.5YR7/4	口1/6	
688	34201	土師器	壺	B5	g33	SD532	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	折返口1/6	
689	20303	土師器	壺	B5	f34	SD532上・下層	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/8	
690	19305	土師器	壺	B5	g33	SD532	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/4	

tab.20　出土遺物観察表(15)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
691	19304	土師器	壺	B5	f34	SD532	口10.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口3/4	
692	21503	土師器	壺	B5	g34	SD532	口16.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/2	
693	19403	土師器	壺	B5	g32	SD532	頸9.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→貼り付けナデ	やや密	5YR5/6	頸1/6	
694	18403	土師器	壺	B5		SD532最下層	頸9.0	ナデ→貼り付けナデ→刺突（板）→櫛描直線文	密	7.5YR6/6	頸1/3	
695	20304	土師器	甕	B5	f～g34	SD532	口10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/2	口1/10	外面に煤付着
696	20305	土師器	甕	B5	f34	SD532上・下層	口11.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR4/1	口1/12	外面に煤付着
697	19302	土師器	甕	B5	g33	SD532	口15.0	ナデ→貼り付けナデ→刺突	やや粗	5YR6/6	口1/4	
698	19601	土師器	壺	B5	g34	SD532	底8.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR6/4	底5/6	底部に木葉痕
699	20103	土師器	高杯	B5	f～g34	SD532	口21.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR8/6	口1/3	
700	20207	土師器	高杯	B5	f～g34	SD532	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや密	7.5YR7/4	脚柱完存	外面に水銀朱付着
701	18705	土師器	高杯	B5	g33	SD532	脚柱4.0	ナデ→面取り→ヘラミガキ、透孔（1ヶ所残）	やや密	7.5YR6/4	脚柱完存	
702	20802	土師器	手焙	B5	f～g34	SD532	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→ハケメ	やや粗	10YR8/3	小片	
703	19405	土師器	台付甕	B5	g33	SD532	脚5.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR7/3	脚1/4	
704	20202	土師器	台付甕	B5	f～g34	SD532	脚7.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚3/5	
705	20201	土師器	台付甕	B5	f34	SD532上・下層	脚9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y6/2	脚完存	
706	19505	土師器	台付甕	B5	g33	SD532	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/2	脚上完存	底部内外面に砂充填
707	26206	土師器	器台	B5	i17	SZ504 3面畦畔	口8.6	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	10YR8/3	受完存	受部内面に凹凸
708	26102	土師器	壺	B5	h17	SZ504 3面畦畔P4	口17.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ→赤彩（ベンガラ）	粗	10YR8/4	頸1/2	
709	25401	土師器	壺	B5	i17	SZ504 3面畦畔p2	口16.4	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ→櫛描直線文→刺突（板）→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR5/6	口3/4	
710	26105	土師器	台付甕	B5	h17	SZ504 3面畦畔	口10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/2	口1/16	被熱により変色
711	31402	土師器	台付甕	B5	h16	SZ504 3面畦畔P7	口12.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/4	口1/2	
712	26103	土師器	台付甕	B5	h17	SZ504 3面畦畔P5	口14.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/3	口縁部外面に煤付着
713	26101	土師器	台付甕	B5	i17	SZ504 3面畦畔P3	口17.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR5/3	口1/8	外面に煤付着
714	29101	土師器	台付甕	B5	i17	SZ504 3面畦畔P1	口13.7～15.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5Y6/2	脚完存	外面に煤付着 被熱により変色
715	26305	土師器	小形鉢	B5	g15～16	SZ504 2面直上	口12.2	ナデ→ヘラミガキ	密	10YR6/4	口1/12	
716	26301	土師器	壺	B5	g15	SZ504 2面直上	口13.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/4	口1/9	
717	26201	土師器	高杯	B5	h～i16	SZ504 2面土壌内	脚柱4.0	ナデ→ヘラミガキ、透孔（1ヶ所残）	やや密	10YR8/2	脚柱完存	
718	26303	土師器	壺	B5	i17	SZ504 2面土壌内	口15.0	ナデ→ヨコナデ→円形浮文	やや粗	2.5YR5/6	口1/8	
719	26302	土師器	壺	B5	i17	SZ504 2面土壌内	頸8.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→貼り付けナデ	やや粗	7.5YR6/3	頸1/4	
720	26401	土師器	壺	B5	g16	SZ504 1面東	口16.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→貼り付けナデ→刺突（板）	粗	5YR6/6	口2/5	
721	26402	土師器	壺	B5	g16	SZ504 1面東	頸10.4	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ	粗	10YR7/3	頸1/3	
722	26304	土師器	器台	B5	g16	SZ504 1面東	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ、5方向透孔	やや粗	7.5YR6/4	－	
723	26204	土師器	高杯	B5	g16	SZ504 1面東	脚11.6	ナデ・シボリメ→板ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	10YR8/3	脚完存	
724	26202	土師器	高杯	B5	g16	SZ504 1面東	脚15.8	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	5YR6/6	脚柱完存	
725	26205	土師器	高杯	B5	g16	SZ504 1面東	脚15.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR8/2	脚1/12	脚裾に煤付着
726	26203	土師器	高杯	B5	g16	SZ504 1面東	脚8.8	ナデ→ヨコナデ→刺突（板）	やや密	7.5YR6/4	脚1/6	
727	26104	土師器	台付甕	B5	g16	SZ504 1面東	口17.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突（板）	やや粗	7.5YR7/4	口1/9	
728	26405	土師器	高杯	B5	g16	SZ504 1面西	脚10.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、3方向透孔	やや密	7.5YR8/4	脚1/3	外面に煤付着
729	26406	土師器	台付甕	B5	g16	SZ504 1面西	脚5.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	脚1/2	
730	26404	須恵器	杯身	B5	g16	SZ504 1面西	口12.3	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y8/1	1/6	
731	26306	須恵器	杯蓋	B5	h16	SZ504 2面	稜13.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	N5/	稜1/12	
732	25805	土師器	壺	B5	h18	SZ504 1面	口6.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR7/6	口1/4	
733	26906	土師器	小形壺	B5	g15	SZ504 1面	頸4.6	ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR6/4	底完存	
734	25701	土師器	高杯	B5	g18	SZ504 1面	口18.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	
735	26601	土師器	高杯	B5	g17	SZ504 1面	脚16.8	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、4方向透孔	やや密	5YR6/3	脚柱1/6	
736	25802	土師器	高杯	B5	h18	SZ504 1面	脚9.2	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	密	7.5YR7/4	脚ほぼ完存	

tab.21　出土遺物観察表(16)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
737	26504	土師器	高杯	B5	g17	SZ504 1面	脚10.6	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	5YR7/6	脚1/4	
738	25702	土師器	壺	B5	g17	SZ504 1面	口16.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突(櫛)→竹管文	やや粗	7.5YR7/6	口1/2	口縁部内面に煤付着
739	26403	土師器	壺	B5	g17	SZ504 1面東	口12.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ→刺突(板)	密	7.5YR7/4	口3/8	
740	26901	土師器	壺	B5	g15	SZ504 1面	口16.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	口完存	
741	25705	土師器	壺?	B5	h18	SZ504 1面	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR6/4	口1/20	
742	25904	土師器	台付甕	B5	h18	SZ504 1面	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突	やや粗	10YR7/3	口1/10	
743	25902	土師器	台付甕	B5	g17	SZ504 1面	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/5	口縁部外面に煤付着
744	25901	土師器	台付甕	B5	g17	SZ504 1面	口13.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR8/4	口1/3	口縁部外面に煤付着
745	26407	土師器	台付甕	B5	g18	SZ504 1面	脚8.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR6/3	脚2/5	被熱により変色
746	30904	土師器	壺	B5	g35	SD504 1面	底6.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	10YR6/4	底ほぼ完存	
747	26501	土師器	甕	B5	g17	SZ504 1面	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	頸1/6	
748	26902	土師器	甕	B5	g17	SZ504 1面	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目(板)	やや粗	5YR7/6	口1/10	外面に煤付着
749	26602	土師器	甕	B5	g17	SZ504 1面	−	ナデ→タタキ→ヘラケズリ	やや密	10YR5/2	小片	外面に煤付着
750	26503	土師器	壺	B5	g18	SZ504 1面	底5.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/4	底完存	
751	26603	石製	敲石	B5	g16〜17	SZ504 1面	長12.6 重993g		−	−	ほぼ完存	現存の4面全て使用痕有
752	26002	石製	石錘	B5	g16	SZ504 1面	長8.6 重77.6g	2ヶ所に打ち欠き	−	−	完存	
753	26802	須恵器	杯蓋	B5	g15	SZ504 1面	口15.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y6/1	口1/4	
754	26803	須恵器	杯身	B5	g15	SZ504 1面	口12.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y6/1	口1/2	
755	26001	須恵器	壺	B5	g16	SZ504 1面	−	回転ナデ→沈線→刺突→貼り付けナデ	密	N7/	体1/5	
756	25804	土師器	皿	B5	i16	SZ504 1面	口15.4	ナデ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/6	
757	25903	土師器	皿	B5	i18	SZ504 1面	口17.0	ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口1/6	
758	26805	灰釉陶器	皿	B5	h15	SZ504	口14.4	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	2.5Y7/2	口1/6	
759	26502	土師器	甕	B5	g18	SZ504 1面	口12.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口2/3	外面に煤付着
760	25801	土師器	高杯	B5	i16	SZ504 1面	脚柱4.6	ナデ→ヘラケズリ→面取り→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	脚柱完存	
761	25501	土師器	甕	B5		SZ504 1面	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/4	口1/9	外面の劣化著しい
762	25502	土師器	甕	B5	h19	SZ504	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや密	10YR5/3	口1/6	口縁部外面に煤付着
763	26904	土師器	壺	B5	h18	SZ504	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/6	
764	25504	土師器	小形壺	B5	h18	SZ504	頸6.6	ナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/3	頸1/10	
765	25603	土師器	小形壺	B5	h17	SZ504	底4.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	粗	10YR8/3	底1/3	底部に木葉痕
766	25506	土師器	甕	B5	h17	SZ504	底6.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	底完存	
767	26702	土師器	高杯	B5	h15	SZ504	脚10.4	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文→刺突(貝)、4方向透孔	密	10YR7/4	脚1/3	
768	26701	土師器	高杯	B5	h15	SZ504	脚11.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	10YR6/3	脚9/10	
769	26704	土師器	台付甕	B5	h15	SZ504	脚6.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚3/4	
770	25503	土師器	甕	B5	h17	SZ504	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刻目	やや密	5YR6/4	口1/10	口縁部外面に煤付着
771	26905	土師器	杯	B5	h15	SZ504	口12.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	5YR6/4	口1/10	
772	25602	土師器	杯	B5	h19	SZ504	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/2	口1/3	底部に木葉痕
773	26703	土師器	高杯	B5	h15	SZ504	脚9.6	ナデ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	脚1/3	
774	26801	須恵器	杯蓋	B5	h15	SZ504	−	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付けナデ	やや粗	5Y7/1	つまみ2/3	
775	25505	須恵器	杯蓋	B5	h19	SZ504	口12.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5PB6/1	口1/6	
776	26804	須恵器	杯身	B5	h15	SZ504	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	7.5Y6/1	口1/6	
777	26903	土師器	甕	B5	h15	SZ504	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR3/2	口1/8	外面に煤付着
778	21202	土師器	杯	B5	g29	SH550P4	口12.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	2.5YR7/6	口5/8	
779	21201	土師器	台付甕	B5	g29	SH550P1	口13.4	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口3/4	
780	21301	土師器	台付甕	B5	g29	SH550P2	口16.0	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラ描き	やや密	5YR7/6	口1/2	外面に煤付着(出土状況と対応) 底部外面に砂充填
781	29306	土師器	杯	B5	h19	SK560	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	口1/5	
782	29301	須恵器	杯蓋	B5	g32	SH556	口14.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y8/1	口1/5	

tab.22 出土遺物観察表(17)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
783	25703	須恵器	杯身	B5	g31	SH556	口12.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	N6/	1/8	
784	31701	土師器	甕	B5	f28	SZ551	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	5YR7/6	口4/5	
785	29302	須恵器	杯身	B5	g19	SH557	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y7/1	口1/10	
786	31802	土師器	杯	B5	g19	SH557カマドP1	口11.4	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	口2/3	
787	29201	土師器	甕	B5	g18	SH557	口37.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/4	口1/4	
788	29403	土師器	皿	B5	f36	SH563	口20.0	ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6	口1/9	
789	29402	土師器	皿	B5	g18	SH558P13	口21.6	ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/4	口1/6	
790	31401	土師器	甕	B5	f18	SH558P2	口25.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/3	口1/5	
791	31501	土師器	甕	B5	f18	SH558P1	口21.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	10YR8/3	口1/8	
792	30404	結晶片岩	石錘	B5	h23	Pit1	幅1.3 重12.8g	削り出し	−	−	一端残	
793	30405	砂岩	砥石	B5	g36	Pit1	重213.6g		−	−	4面残	4面に使用痕 内3面は線状の使用痕もあり
794	30307	須恵器	杯身	B5	h17	Pit2(SB582)	口12.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	小片	
795	30205	土師器	皿	B5	h17	Pit2(SB582)	口16.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	2.5YR6/8	口1/8	
796	30201	土師器	甕	B5	g18	Pit2(SB582)	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/6	
797	30206	土師器	皿	B5	g18	Pit1(SB582)	口14.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/6	口1/8	
798	19502	須恵器	高杯	B5	g33	SD532	脚10.0	ナデ→ヨコナデ、6方向透孔	密	5PB6/1	脚1/6	
799	30003	須恵器	杯蓋	B5	g31	包含層	口13.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/6	外面にヘラ描き
800	31703	須恵器	高杯	B5	g28～29	包含層P1	口9.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	口1/3	金属椀模倣
801	30002	須恵器	杯蓋	B5	g36	包含層	口11.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	口1/4	内面にヘラ描き
802	30001	須恵器	杯蓋	B5	g36	包含層	口13.6	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付けナデ	やや密	N7/	口1/4	硯として転用？
803	29405	土師器	杯	B5	g28	SD544	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/6	口小片	底部外面に木葉痕
804	19401	土師器	甕	B5	g33	SD532上層	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR6/3	口1/6	外面に煤付着
805	30004	土師器	甕	B5	g34	包含層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	口1/6	
806	30101	土師器	甕	B5	g28	包含層	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	
807	30104	土師器	土製品	B5	g25	包含層	−	ナデ→ハケメ	やや粗	5YR7/6	−	
808	33601	須恵質	圏脚円面硯	B5	f32～35	包含層	外縁22.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラ切り	密	5PB6/1	口下1/6	透孔は36の可能性大
809	32502	土師器	杯	B5	g20～21	SK554P6	口13.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR7/4	口3/4	
810	32504	土師器	杯	B5	g20～21	SK554P3	口14.1	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/4	口2/3	
811	32401	土師器	杯	B5	g20～21	SK554	口13.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	5YR6/6	口3/4	
812	32402	土師器	杯	B5	g20～21	SK554	口14.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3	口1/12	
813	32503	土師器	杯	B5	g20～21	SK554P10	口13.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/6	口2/5	
814	32501	土師器	杯	B5	g20～21	SK554P9	口15.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR7/6	口4/5	
815	32403	灰釉陶器	皿	B5	g21	SK554	口15.8	ロクロナデ	やや密	5Y8/1	口1/12	
816	32404	土師器	製塩土器	B5	g21	SK554	−	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	5YR6/6	小片	
817	30305	灰釉陶器	皿	B5	h20	SE555	底6.3	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	2.5Y8/1	底2/3	
818	30306	灰釉陶器	椀	B5	h20	SE555	底8.0	ロクロナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	5Y7/1	底1/4	
819	30303	灰釉陶器	壺	B5	h20	SE555	底9.4	回転ナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	5Y8/1	底1/2	猿投・瀬戸
820	30402	緑釉陶器	皿	B5	h20	SE555	口16.0	ロクロナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ→施釉→ヘラ描き	やや密	10YR7/3	1/6	
821	30403	土師質	土錘	B5	h20	SE555	長4.9 重5.7g	ナデ	やや密	10YR6/3	ほぼ完存	
822	30302	陶器	椀	B5	g36	SE567枠内	底7.3	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	2.5Y6/1	底完存	渥美
823	30304	陶器	椀	B5	g36	SE567枠内	底7.7	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	N7/	底3/4	渥美
824	30301	陶器	椀	B5	g36	SE567枠内	底7.3	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	5Y7/1	底3/4	渥美　高台にﾓﾐｶﾞﾗ痕 内面に炭化物（煤）付着
825	12802	須恵器	杯蓋	B6	h14～15	SH547	−	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	7.5Y7/1	小片	外面磨滅
826	12801	須恵器	高杯	B6	h14～15	SH547	脚12.5	ヨコナデ	密	7.5Y6/1	脚1/4	
827	12702	土師器	甕	B6	h14～15	SH547	口10.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3	口1/5	
828	12902	土師器	杯	B6	j14	Pit1(SB587)	口14.4 高3.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR7/4	口小片	底部外面に墨書「申」

tab.23　出土遺物観察表(18)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
829	12906	土師質	土錘	B6	h14	Pit1	径3.3 重25.04g	ナデ	やや密	5YR6/4	完存	
830	12705	須恵器	杯蓋	B6	h14	包含層	径3.9～4.2	ナデ	やや密	5YR7/6	つまみ完存	
831	12903	土師器	椀	B6	g14	包含層	口11.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	口1/2	
832	12805	白磁	椀	B6	f14	SK322	－	ロクロナデ→施釉	密	2.5Y8/2	口小片	
833	12901	土師器	皿	B6	f14	SK322	口15.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/3	口1/3	
834	12905	陶器	小皿	B6	f14	SK322	口8.0 高2.0	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR6/6	口4/12	
835	12904	陶器	小皿	B6	f14	SK322	口9.0 高1.9	ロクロナデ→糸切り	やや密	10YR7/3	口完存	
836	13207	土師質	土錘	B6	f14	SK527	径1.3 重5.0g	ナデ	やや密	5YR5/6	完存	
837	13206	土師質	土錘	B6	f14	SK322	径1.3 重5.8g	ナデ	密	5YR6/4	完存	
838	13205	土師質	土錘	B6	f14	SK322	径1.4 重5.2g	ナデ	やや密	5YR6/4	完存	
839	12701	土師器	鍋	B6	f14	SK322	口27.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口2/12	南伊勢
840	13108	白磁	小皿	B6	f14	SK527	口10.0 高2.5	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密	素地N8/ 釉7.5Y8/1	口1/12	
841	13105	陶器	小皿	B6	f14	SK527	口9.2 高2.8	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y7/	口2/3	渥美? 内面に研磨痕なし高台にモミガラ痕
842	13007	土師質	小皿	B6	f14	SK527P2	口9.2 高1.3	ロクロナデ→糸切り	やや密	7.5YR7/4	完存	
843	13104	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.6 高1.8	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR6/6	口2/5	
844	13005	土師質	小皿	B6	f14	SK527P3	口8.9 高1.9	ロクロナデ→糸切り	粗	5YR7/6	ほぼ完存	
845	13003	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.6 高2.1	ロクロナデ→糸切り	やや粗	5YR6/6	完存	
846	13102	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.6 高2.1	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR6/6	口1/4	
847	13004	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.2 高2.2	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR7/6	完存	
848	13103	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.6 高2.0	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR6/6	口1/8	
849	13101	土師質	小皿	B6	f14	SK527	口9.2 高2.3	ロクロナデ→糸切り	やや粗	5YR6/6	口11/12	
850	13002	土師質	皿	B6	f14	SK527	口13.2 高3.2	ロクロナデ→糸切り	粗	5YR6/6	口1/8	
851	13107	白磁	椀	B6	f14	SK527	口7.0	ロクロナデ→施釉	密	素地5Y8/1 釉7.5Y6/1	口1/8	
852	13106	白磁	椀	B6	f14	SK527	口7.7	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密	素地5Y8/1 釉7.5Y7/1	口1/12	
853	13001	陶器	椀	B6	f14	SK527P4	口16.0 高5.2	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや粗	5Y7/1	口1/3	知多 高台にモミガラ痕
854	13203	土師器	小皿a3	B6	e15	SZ541	口9.5 高1.9	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口11/12	
855	13006	土師質	小皿	B6	e14	SZ541	口10.8 高2.3	ロクロナデ→糸切り	やや密	5YR7/4	口1/3	
856	13201	陶器	椀	B6	e15	SZ541	口17.2 高5.1	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	7.5Y8/1	口1/8	渥美 高台にモミガラ痕
857	13202	土師質	小皿	B6	e14	1−Pit6	口10.0 高1.9	ロクロナデ→糸切り	やや粗	5YR6/6	完存	
858	13204	土師器	鍋	B6	c14	1−Pit6	口18.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口1/8	南伊勢
859	14201	弥生土器	壺	B7	i25	SE233	－	ナデ→ヘラ描き→ヘラミガキ	粗	2.5YR5/6	小片	
860	31306	軽石製	砥石	B7	i20	SZ519S4	重2.07g		－	－	完存	
861	31104	軽石製	砥石	B7	i20	SZ519S6	重16.48g		－	－	完存	
862	31301	軽石製	砥石	B7	i20	SZ519S5	重19.55g		－	－	完存	1面に使用痕
863	31201	軽石製	砥石	B7	i20	SZ519S3	重78.55g		－	－	ほぼ完存	5面に使用痕
864	15105	軽石製	砥石	B7	i21	SZ519S2	幅4.0 重13.88g		－	－	完存	全面に使用痕有り 一部に線状の使用痕有り
865	9101	石製	太型蛤刃石斧	B7	i21	SZ519S1	長16.9 重1.17kg		－	7.5gY4/1	完存	刃こぼれ有り
866	4301	土師器	高杯	B7	f27	SZ392	脚注3.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや密	10YR7/4	脚柱完存	
867	9902	土師器	壺	B7	d24	SX481	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/5	
868	6404	土師器	甕	B7	e27	SD392	頸8.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	頸1/3	
869	33401	土師器	台付甕	B7	e27	SD392	口18.1 高26.3	ナデ→工具ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2	脚1/2	底部外面に砂充填
870	10801	土師器	壺	B7		SX364北溝	最大径24.6	ナデ→板ナデ→ナデ	密	7.5YR7/4	底完存	
871	2706	土師器	台付甕	B7	e21	SX364南溝	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突	やや密	2.5Y6/3	口小片	
872	7502	土師器	小形壺	B7	h32	SX364南溝	口7.5	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口1/3	
873	12101	土師器	壺	B7	h32	SX364南溝	－	ナデ→直線文＋波状文＋刺突(板)	やや粗	10YR6/4	体小片	
874	6504	土師器	高杯	B7	f32	SX365東溝	口23.0	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口1/6	

tab.24　出土遺物観察表(19)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
875	5107	土師器	甕	B7	d32	SX365南溝	口16.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR4/2	口1/6	
876	4403	土師器	台付甕	B7	d31	SX365西溝	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(板)	やや粗	7.5YR6/6	口小片	
877	4404	土師器	台付甕	B7	d31	SX365西溝	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	口小片	
878	4604	土師器	台付甕	B7	f30	SX365北溝	脚6.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/4	脚1/2	
879	2704	土師器	壺	B7	a32	SZ381南溝	口17.5	ナデ→羽状文（板）→赤彩（ベンガラ）	やや密	10YR8/2	口1/8	
880	5901	土師器	壺	B7	a31	SX381西溝	口20.0	ナデ→ハケメ→貼り付けナデ→刺突（板）、竹管文	やや密	10YR7/4	頸3/4	
881	6401	土師器	壺	B7	a32	SX381	頸11.0	ナデ→ヨコナデ→貼り付けナデ	粗	10YR8/4	頸1/2	
882	3705	土師器	壺	B7	c32	SX381東溝	口12.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/6	口1/5	
883	4803	土師器	壺	B7	a30	SD381	底7.3	ナデ→工具ナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR6/4	底完存	底部外面に砂付着
884	4602	土師器	壺	B7	a30	SD381	底6.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/3	底1/3	
885	3807	土師器	壺	B7	a32	SX381南溝	底4.5	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR7/3	底完存	底部外面に砂付着
886	3704	土師器	小形壺	B7	b29	SX387西溝	口7.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	2.5Y6/1	口1/4	
887	12703	土師器	台付甕	B7	d29	SX386	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	やや密	10YR7/3	口小片	
888	5806	土師器	高杯	B7	b30	SX387南屈曲部	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透孔	粗	5YR7/6	脚柱完存	
889	5804	土師器	高杯	B7	c30	SX386南	脚14.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	脚1/7	
890	5101	土師器	壺	B7	b30	SX387南屈曲部	底6.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR6/6	底ほぼ完存	
891	7401	土師器	壺	B7	b30	SX387P1	口15.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/3	
892	14402	土師器	高杯	B7	x30	SD407P1	口18.5 高14.9	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	7.5YR7/4	脚完存	外面に水銀朱付着
893	5302	土師器	壺	B7	x30	SD407P3	口10.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	2.5Y5/1	口1/4	
894	5401	土師器	壺	B7	x30	SD407P2	底5.6	ナデ→ハケメ	やや密	7.5YR7/4	底完存	底部外面に木葉痕
895	8703	土師器	壺	B7	b27	SD419南溝	口12.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	10YR6/3	口小片	
896	10403	土師器	台付甕	B7	c24～25	SX480	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	口1/8	
897	11602	土師器	壺	B7	b20	SX469P1	口11.6 高18.1	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y6/3	口1/4	
898	9001	土師器	高杯	B7	c19	SX469P2	口21.6	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6	杯ほぼ完存	
899	10601	土師器	小形鉢	B7	b21～22	SX476	—	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	5YR5/4	口小片	
900	10602	土師器	台付甕	B7	b21～22	SX476	—	ナデ→ヨコナデ→刺突（板）	粗	7.5Y6/1	口小片	
901	14301	土師器	壺	B7	b21	SX476	—	ナデ→ハケメ→刺突（板）→赤彩(ベンガラ)	密	10YR8/4	口1/2	
902	11601	土師器	高杯	B7	e20	SX475	口14.8	ナデ・シボリメ→櫛描直線文→ヨコナデ、透孔	やや密	10YR7/4	口3/4	
903	11801	土師器	壺	B7	d20	SX475P1·2	口13.9 底6.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/6	口3/8	
904	9203	土師器	壺	B7	g21	SX484墳丘上P3	最大径13.5	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、底:ヘラケズリ	密	10YR7/3	底完存	
905	12201	土師器	壺	B7	h22	SX484P1	口18.3 最大径35.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/4	口1/2	外面に煤付着
906	12001	土師器	台付甕	B7	e21	SX484西周溝P2	口25.0 高31.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→貼り付けナデ	やや粗	10YR6/4	体ほぼ完存	
907	11901	土師器	壺	B7	d～e20	SX477P1	口15.8 高29.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口2/3	
908	11603	土師器	台付甕	B7	d～e20	SX477P2	口9.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR6/4	1/2	
909	14102	土師器	鉢	B7	c19	SX477P3	口9.8 高6.7	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	密	5YR7/6	9/10	
910	33501	石製	石杵	B7	e19	SX477	長9.4		—	—	完存	水銀朱付着
911	13301	土師器	壺	B7	j22～23	SD489P2	口14.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突(板)	やや密	5YR7/6	口2/3	
912	10402	土師器	甕	B7	i22	SD489	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	口1/10	
913	11701	土師器	台付甕	B7	i22	SD489P1	最大径19.6	ナデ・オサエ→ハケメ→刺突（板）	やや粗	10YR7/4	1/4	外面に煤付着
914	9501	土師器	壺	B7	g24	SX486東周溝外P14	最大径17.8 高22.9	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	体完存	
915	11303	土師器	壺	B7	f23	SX486北周溝P2	口13.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR6/6	口7/8	
916	11401	土師器	壺	B7	f23	SX486北周溝P1	口11.4 高16.8	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	7/10	
917	11402	土師器	壺	B7	f24	SX486東周溝外P20	口12.5 高14.6	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	7.5YR7/4	7/10	
918	9201	土師器	壺	B7	f23	SX486北東角	口15.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突(板)	密	7.5YR7/4	口完存	
918	10701	土師器	壺	B7	f24	SZ397P1	最大径24.4	ナデ→ハケメ→直線文（板）→刺突（板）→ヘラミガキ	密	7.5YR8/4	体完存	
919	21401	土師器	壺	B7	g24	SX486東周溝外P25	口18.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→直線文(貝)＋刺突（貝）→ヘラミガキ	やや密	10YR8/4	体1/2	

tab.25　出土遺物観察表(20)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
920	21402	土師器	壺	B7	g23	SX486東周溝外P24	底6.5	ナデ→ハケメ→直線文（板）→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR8/4	底完存	
921	9401	土師器	壺	B7	g24	SX486東周溝外P23	底5.7	ナデ→工具ナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/4	底完存	
922	10301	土師器	高杯	B7	g24	SX486東周溝外P13	口21.7	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	5YR6/6	口2/3	
923	10501	土師器	高杯	B7	g24	SX486東周溝外P9	口22.1	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/8	
924	10302	土師器	高杯	B7	f23	SX484墳丘上P3	口20.5 高21.3	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、3方向透孔	密	10YR7/6	3/5	
925	14202	土師器	高杯	B7	f24	SX486東周溝外P12	口19.5 高15.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文→刺突（貝）、3方向透孔	やや粗	5YR6/6	口7/8	
926	11501	土師器	高杯	B7	f24	SX486東周溝外P10	口11.6 高11.1	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文→ヨコナデ、3方向透孔	やや密	5YR7/8	4/5	
927	9202	土師器	高杯	B7	g24	SX486東周溝外P16	脚13.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや粗	7.5YR7/4	脚7/8	
928	10502	土師器	甕	B7	g23	SX486	口12.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/8	
929	9301	土師器	甕	B7	g24	SX486東周溝外P22	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR5/3	口1/4	
930	9302	土師器	台付甕	B7	f24	SX486東周溝外P6	脚7.6	ナデ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/4	脚完存	
931	10503	土師器	台付甕	B7	f23	SX486	脚8.4	ナデ→ハケメ	やや密	5YR6/6	脚1/3	
932	9502	土師器	台付甕	B7	f24	SX486東周溝外P7	脚6.7	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR4/1	脚3/4	
933	9504	土師器	台付甕	B7	f24	SX486東周溝外P11	脚5.9	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	脚1/2	
934	9503	土師器	台付甕	B7	f24	SX486東周溝外P4	脚6.9	ナデ・オサエ	やや密	7.5YR6/4	脚1/2	
935	14401	土師器	高杯	B7	e24	SZ396P2	口18.3 高24.2	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3＋3方向透孔	やや粗	10YR7/4	ほぼ完存	
936	14502	土師器	壺	B7	e24	SZ396P1	口14.6	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/2	937と同一個体
937	14501	土師器	壺	B7	e24	SZ396P2	口14.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	底完存	936と同一個体 底部を竹管状工具で一度抜く?
938	13605	土師器	壺?	B7	g19	SX491	脚5.8	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	やや粗	10YR7/3	脚ほぼ完存	
939	34001	土師器	手焙	B7	g19	SX491P1	口16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文→貼り付けナデ→ハケメ	密	10YR8/3	鉢部ほぼ完存	
940	33901	土師器	甕	B7	g19	SX491P2	口15.6 高23.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→櫛描直線文＋波状文＋刺突、貼り付けナデ	やや粗	2.5Y8/3	完存	外面に煤付着
941	33802	土師器	壺	B7	h18	SX491P3	口12.8 高21.0	ナデ→ハケメ→工具ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR6/6	ほぼ完存	
942	13403	土師器	壺	B7	i20	SX520	－	ナデ→櫛描直線文・櫛描波状文・刺突→円形浮文＋竹管文	やや密	10YR7/4	口小片	
943	13402	土師器	壺	B7	i20	SX520	頸11.0	ナデ→櫛描直線文→貼り付けナデ→刺突（板）	やや密	7.5YR6/4	頸部1/4	
944	14101	土師器	台付甕	B7		SX520P1	口14.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR4/1	体完存	
945	22001	土師器	高杯	B7		SX521P2·3	口22.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	7.5YR6/4	口1/3	
946	13303	土師器	高杯	B7		SX521P4	口14.3	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口2/3	外面に煤付着
947	13302	土師器	壺	B7		SX521P1	口10.6 高15.7	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR5/4	体完存	
948	33001	土師器	台付甕	B7		SX521P6	口17.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→押し引き施文	密	2.5Y7/3	口2/12	
949	15101	土師器	台付甕	B7		SX521P5	脚7.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	脚完存	底部外面に砂充填
950	8404	土師器	壺	B7	a25	SZ460	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/4	口1/3	
951	8302	土師器	台付甕	B7	d32	SH421	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突（板）	やや粗	10YR7/3	口1/8	外面に煤付着
952	2405	土師器	台付甕	B7	e29	SK371	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	頸1/8	
953	4606	土師器	高杯	B7	g32	SK377	口22.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	口1/4	
954	15106	ガラス質	管玉	B7	d21	包含層	径0.75 重1.48g		－	緑色	完存	
955	12706	軽石製	砥石	B7	f25	包含層	重34.94g		－	－	ほぼ完存	
956	3706	土師器	高杯	B7	c32	SH405カマド	脚柱2.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、4方向透孔	やや密	7.5YR7/4	脚柱完存	
957	3904	土師器	壺	B7	b32	SH405	－	ナデ→櫛描直線文、刺突（板）、竹管文	やや粗	10YR7/4	小片	
958	13703	土師器	鉢	B7	g20	包含層	口16.8	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	2.5YR6/8	口1/8	外面に煤付着
959	13902	土師器	壺	B7	h19	包含層	底3.8	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや粗	10YR6/4	1/2	
960	8304	土師器	壺	B7	c28	包含層	底4.6	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	粗	5YR6/6	体完存	
961	5605	土師器	壺	B7	b20	包含層	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/6	口1/4	
962	5902	土師器	壺	B7	b30	包含層	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/6	
963	5604	土師器	壺	B7	d17	包含層	口15.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
964	11502	土師器	壺	B7	f21	包含層	頸6.8	ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや密	5YR5/6	頸4/5	
965	14302	土師器	壺	B7	i25	SE233	口8.8	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ→羽状文（板）	密	2.5YR5/6	口1/6	

tab.26　出土遺物観察表(21)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
966	6604	土師器	器台	B7	e29	SZ367	口15.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→刺突(櫛・板)	やや密	7.5YR6/4	口3/5	
967	5502	土師器	甕	B7	h30	包含層	口19.6	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR7/4	口1/8	内面に煤付着 外面にヘラ描き？
968	13401	土師器	壺	B7		包含層	口22.6	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→円形浮文＋竹管文（1ヶ所残）	やや密	7.5YR7/4	口1/7	
969	3801	土師器	器台	B7	e32	焼土(SH)	口8.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ	やや密	7.5YR6/6	口4/5	
970	3804	土師器	高杯	B7	j29	包含層	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや密	5YR6/6	脚柱完存	
971	8508	土師器	高杯	B7	x29	SK408	脚注3.1	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	7.5YR7/4	脚柱完存	
972	8403	土師器	高杯	B7	a31	SH376	脚柱3.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1方向透孔	やや密	7.5YR7/6	脚柱完存	
973	5003	土師器	高杯	B7	c28	包含層	脚注3.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや密	7.5YR6/4	脚柱1/2	
974	3802	土師器	高杯	B7	j29	包含層	脚柱3.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	やや粗	7.5YR4/1	脚柱完存	
975	3803	土師器	高杯	B7	c29	包含層	脚注3.8	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3？方向透孔	やや粗	7.5YR7/4	脚柱完存	
976	15104	土師器	高杯	B7	k21	SZ493	脚柱3.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ	密	7.5YR7/6	脚柱完存	
977	10004	土師器	高杯	B7	g21	包含層	脚柱3.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、3方向透孔	密	5YR6/6	脚柱1/2	
978	404	土師器	高杯	B7	e29	SZ367P36	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、1＋3方向透孔	密	5YR7/4	脚柱完存	
979	14002	土師器	高杯	B7	i20	包含層P2	口14.8	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ→櫛描直線文、3方向透孔	やや粗	5YR7/6	脚柱完存	
980	10504	土師器	高杯	B7	j22	包含層P4	脚柱3.6	ナデ・シボリメ→板ナデ→ヘラミガキ→櫛描直線文	やや密	10YR8/2	脚柱完存	
981	4504	土師器	高杯	B7	j32	包含層	－	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、透孔（2方向残）	やや密	5YR5/4	脚柱1/3	
982	8407	土師器	高杯	B7	x28	包含層	脚9.0	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR6/4	脚1/2	
983	1402	土師器	高杯	B7	e29	SZ367P31	脚12.5	ナデ→ヘラミガキ、3方向透孔	やや粗	10YR8/2	脚5/8	
984	6003	土師器	高杯	B7	y31	包含層	脚15.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→ヨコナデ、透孔（1方向残）	密	5YR7/6	脚1/6	
985	13906	土師器	甕	B7	i23	包含層	口15.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/4	1/20	
986	9903	土師器	甕	B7	e24	包含層	口16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR6/6	口1/6	外面に煤付着
987	5405	土師器	甕	B7	d28	包含層	－	ナデ→ハケメ→押し引き施文	やや粗	7.5YR3/1	口小片	
988	4103	土師器	台付甕	B7	z30	包含層	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5Y8/2	口小片	
989	3703	土師器	台付甕	B7	e32	SH焼土	－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口小片	
990	5704	土師器	台付甕	B7	c31	SH380	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y5/1	口1/12	
991	4302	土師器	台付甕	B7	z30	包含層	脚6.4	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	10YR6/4	脚2/3	
992	10005	土師器	台付甕	B7	g19	SH492	脚7.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR6/4	脚3/8	
993	13501	土師器	壺	B7	j20	包含層	底4.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	やや密	10YR6/4	底完存	
994	4804	土師器	壺	B7	h30	包含層	底6.0	ナデ→ハケメ	やや粗	7.5YR8/4	底完存	
995	1503	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P	口11.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N8/	口1/3	
996	3406	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口11.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	口1/6	
997	3203	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/4	
998	1002	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P42	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5Y6/1	口1/4	
999	1502	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	3/4	
1000	3405	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口13.1	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y7/1	口1/9	
1001	305	須恵器	杯蓋	B7	d29	SZ367P62	口11.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5PB6/1	口1/4	
1002	104	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P2	口12.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5PB5/1	ほぼ完存	
1003	3401	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口14.6	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5Y7/1	口1/4	1004・1021と酷似
1004	1102	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口14.6	回転ナデ→回転ケズリ	粗	N5/	口1/4	1003・1021と酷似
1005	1603	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N4/	口1/7	
1006	3402	須恵器	杯蓋	B7	f29	SZ367P9・12	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y6/1	口2/3	
1007	102	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P7	口15.5	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5PB5/1	口1/3	外面にヘラ描き
1008	8102	須恵器	杯蓋	B7	f29	SZ367P11	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	1/2	内面に同心円当て具痕
1009	1602	須恵器	杯蓋	B7	f29	SZ367P5	口14.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N7/	口3/8	外面にヘラ描き
1010	3502	須恵器	杯蓋	B7	e29	SZ367P29	口13.3	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	口1/3	外面にヘラ描き
1011	105	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367P56	口9.8	回転ナデ→回転ケズリ	粗	N6/	口2/3	

tab.27　出土遺物観察表(22)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1012	303	須恵器	杯身	B7	d29	SZ367P61	口11.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/4	
1013	3404	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367	口11.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	口1/4	
1014	1701	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367P17	口11.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N5/	口1/4	
1015	101	須恵器	杯身	B7		SZ367P1	口10.7	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5PB6/1	ほぼ完存	
1016	1604	須恵器	杯身	B7	f29	SZ367P14	口11.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	10Y6/1	口1/4	
1017	1605	須恵器	杯身	B7	f29	SZ367P5	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N6/	1/3	
1018	103	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367P40	口13.4	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y6/1	口1/3	
1019	304	須恵器	杯身	B7	d29	SZ367	口11.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5PB6/1	口1/6	
1020	1903	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367	口11.8	回転ナデ→回転ケズリ	密	10Y8/1	口1/6	
1021	1505	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	1/4	1003・1004と酷似
1022	1506	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367	口10.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N5/	1/2	外面にヘラ描き
1023	3407	須恵器	杯身	B7	e29	SZ367	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N5/	口1/4	外面にヘラ描き
1024	3204	須恵器	高杯蓋	B7	e29	SZ367	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	10Y5/1	1/4	
1025	3602	須恵器	高杯蓋	B7	e29	SZ367P22	口12.3	回転ナデ→回転ケズリ→摘み貼り付け→ヨコナデ	やや密	N8/	口3/4	
1026	201	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367P15	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ→カキメ、3方向透孔	密	N5/	脚ほぼ完存	
1027	202	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367P44	口10.5	回転ナデ→回転ケズリ→カキメ、3方向透孔	密	N5/	脚ほぼ完存	内面に同心円当て具痕
1028	903	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367P44	脚8.7	回転ナデ→回転ケズリ→カキメ、3方向透孔	粗	5GY5/1	脚ほぼ完存	
1029	1504	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367P37	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ→カキメ→波状文	やや密	N4/	口1/4	
1030	3403	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367	口12.6	回転ナデ→回転ケズリ→波状文、透孔	やや粗	N5/	口1/6	
1031	1001	須恵器	高杯	B7	e29	SZ367P27	脚8.9	回転ナデ→回転ケズリ、3方向透孔	やや粗	2.5GY6/1	脚ほぼ完存	
1032	3304	須恵器	壺	B7	e29	SZ367	口16.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/6	
1033	1101	須恵器	甕	B7	d29	SZ367P8	口25.5	ナデ→タタキ→ヨコナデ→波状文	やや粗	5Y6/1	1/4	
1034	1601	須恵器	壺	B7	e29	SZ367P16	口18.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや粗	5Y5/1	1/4	
1035	902	須恵器	甕	B7	e29	SZ367P47	口21.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/2	口1/3	
1036	6801	須恵器	壺	B7	e29	SZ367	口21.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/2	口1/3	瓦質
1037	703	須恵器	壺	B7	d29	SZ367	口21.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ→波状文	やや粗	7.5YR5/1	1/4	
1038	302	須恵器	壺	B7	d29	SZ367	口8.5	ナデ	密	5Y7/1	口1/8	
1039	503	土師器	壺	B7	e29	SZ367P14	口10.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/5	
1040	2303	土師器	高杯	B7	e29	SZ367P38	脚8.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	粗	2.5YR6/8	脚完存	
1041	7102	土師器	高杯	B7	e29	SZ367P41	口16.0	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	脚1/2	
1042	1703	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P51	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	口1/4	
1043	6601	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口15.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	口2/5	
1044	7201	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/4	
1045	6701	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/5	
1046	3301	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口1/5	
1047	1202	土師器	台付甕	B7	f29	SZ367P10	口17.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/4	
1048	7901	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P33	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR5/2	口1/5	
1049	6301	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口16.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/4	外面に煤付着
1050	601	土師器	台付甕	B7	e27	SZ367P30	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/3	
1051	7503	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P53	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口小片	
1052	1104	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P33	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/4	
1053	7705	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P30	口15.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/4	口1/8	
1054	3302	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/6	口1/3	
1055	2406	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口14.9	ナデ→ハケメ→板ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y6/1	口2/3	
1056	301	土師器	台付甕	B7	d28	SZ367	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/5	
1057	1901	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	口14.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/8	外面に煤付着

tab.28　出土遺物観察表(23)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1058	1401	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/4	口1/4	
1059	1802	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口11.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	N6/	口1/4	
1060	501	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P16	口11.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/6	
1061	6603	土師器	台付甕	B7	d28	SZ367	口11.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→板ナデ	やや粗	7.5YR7/3	口1/2	
1062	405	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口11.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	口1/3	
1063	1902	土師器	台付甕	B7	f29	SZ367P9	口10.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/3	口1/6	
1064	1801	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口13.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/4	
1065	1805	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口13.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/4	
1066	802	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P26	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR7/4	口1/4	
1067	1201	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P38	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/2	
1068	401	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/3	口1/4	外面に煤付着
1069	1803	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	口14.2	ナデ→ハケメ→板ナデ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	口1/4	
1070	3303	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/3	
1071	306	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367P57	脚9.3	ナデ・オサエ	粗	5YR7/4	脚完存	
1072	2004	土師器	台付甕	B7	f29	SZ367P10·14	脚9.6	ナデ・オサエ	やや粗	5YR7/4	脚3/8	
1073	901	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P26	脚8.0	ナデ・オサエ	粗	7.5YR7/6	脚完存	
1074	1501	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P	脚8.5	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	2.5YR6/6	脚完存	
1075	702	土師器	台付甕	B7	f29	SZ367P20	脚8.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/4	脚1/2	磨滅著しい
1076	701	土師器	台付甕	B7	f29	SZ367P9	脚8.3	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	2.5YR6/4	脚完存	
1077	502	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚8.3	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	10YR6/3	脚ほぼ完存	外面に煤付着
1078	1403	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚9.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	2.5YR7/6	脚完存	
1079	1103	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P33	脚8.5	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	5YR6/6	脚完存	
1080	2002	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚8.6	ナデ・オサエ	やや粗	10YR6/3	脚完存	
1081	602	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	10YR6/4	脚3/4	
1082	1204	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P33	脚8.5	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR6/5	脚完存	
1083	1406	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚7.7	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/4	脚7/8	
1084	1203	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367P60	脚10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	7.5YR6/5	脚3/4	
1085	2003	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P24	脚10.2	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	7.5YR6/4	脚2/3	外面に煤付着
1086	1704	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P43	脚10.1	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/4	脚1/2	
1087	1405	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P49·50·46下	脚8.4	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/4	脚完存	
1088	803	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P25	脚8.4	ナデ・オサエ	やや粗	5YR7/6	脚完存	
1089	1404	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367	脚8.5	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	10YR7/3	脚ほぼ完存	
1090	603	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P30	脚10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	10YR6/3	脚7/8	
1091	403	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P45	脚10.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	7.5YR7/4	脚1/2	煤付着
1092	6902	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P53	脚10.3	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/4	脚完存	
1093	7301	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P34	脚9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR4/2	脚完存	
1094	2302	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P38	脚8.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	2.5YR6/6	脚完存	
1095	402	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	脚9.0	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	5YR7/4	脚3/4	煤付着
1096	1702	土師器	甑	B7	c29	SZ367	口21.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/6	
1097	3202	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	口24.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口小片	
1098	2501	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/3	口1/8	
1099	2305	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	口小片	
1100	2304	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	−	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口小片	
1101	7802	土師器	台付甕	B7	d29	SZ367	口24.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口1/12	
1102	3201	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	口32.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR4/2	口1/10	
1103	7001	土師器	鉢	B7	e29	SZ367	口30.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	口1/6	

tab.29　出土遺物観察表(24)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1104	2001	土師器	甑	B7	d29	SZ367	口24.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	やや粗	10YR7/3	口1/9	
1105	6703	土師器	甑	B7	d29	SZ367	—	ナデ・オサエ	やや粗	10YR7/3	把手	
1106	5501	泥岩	紡錘車	B7	d29	SZ367	直径4.6 重16.8g		—	—	1/2	
1107	6602	土師器	壺	B7	d29	SZ367	口14.5	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/3	
1108	3306	土師器	甕	B7	e28	SZ367	口15.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/5	
1109	1905	土師器	壺	B7	d29	SZ367	口17.6	ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5YR6/4	口1/8	
1110	3305	土師器	甕	B7	e29	SZ367	口17.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR3/1	口1/7	
1111	406	土師器	甕	B7	e29	SZ367P14	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	頸1/8	
1112	7902	土師器	甕	B7	e29	SZ367P34	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口小片	
1113	1904	土師器	壺	B7	e29	SZ367P24	口17.8	ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/4	
1114	7203	土師器	壺	B7	e29	SZ367P45	底6.5	ナデ→板ナデ	やや粗	10YR6/4	底完存	
1115	2401	土師器	壺	B7	e29	SZ367P39	口20.2	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR8/3	口完存	
1116	1804	土師器	台付甕	B7	e29	SZ367P55	口21.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/4	
1117	3101	土師器	壺	B7	l29	SZ367P32	口20.0	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/6	2/3	
1118	3501	土師質	抉入楕円形土管	B7	e29	SZ367P28	直径9.4~12.6	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	3/5	
1119	3601	土師質	抉入楕円形土管	B7	d28	SZ367P51	直径9.5~12.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	3/5	
1120	7202	土師器	甕	B7	e29	SZ367P24	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口3/8	
1121	801	土師器	甕	B7	e29	SZ367P46	口18.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/3	口ほぼ完存	外面に煤付着
1122	2901	土師器	甕	B7	x29	SZ367P50	口17.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	ほぼ完存	
1123	7702	須恵器	杯蓋	B7	d28	包含層	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N4/	口1/6	
1124	5106	須恵器	杯蓋	B7	d28	包含層	口13.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N4/	口1/4	
1125	8205	須恵器	杯蓋	B7	d28	包含層	口13.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	N6/	口1/6	
1126	8004	須恵器	杯蓋	B7	d28	包含層	口13.1	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5PB5/1	口1/8	内面に同心円当て具痕
1127	8201	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口11.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/5	
1128	7703	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口11.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N7/	口1/6	
1129	5105	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口11.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/4	
1130	5203	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	口1/4	
1131	8202	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口10.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N5/	1/3	外面に煤付着
1132	8003	須恵器	杯身	B7	d28	包含層	口10.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5PB6/1	1/8	外面にヘラ描き
1133	7803	土師器	高杯	B7	d28	包含層	口11.8	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	5/6	
1134	7903	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/3	口1/6	
1135	7904	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/6	
1136	8705	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/4	
1137	6403	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	口1/4	
1138	5103	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/3	
1139	8806	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	脚6.8	ナデ	やや粗	5YR7/3	脚1/2	
1140	7704	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	脚10.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR6/4	脚完存	
1141	5204	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	脚9.6	ナデ・オサエ→ハケメ	やや粗	7.5YR7/3	脚1/2	
1142	8507	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	脚9.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/4	脚1/2	
1143	8402	土師器	台付甕	B7	f27	包含層	脚10.1	ナデ・オサエ	粗	10YR8/3	脚完存	
1144	5201	土師器	甕	B7	d28	包含層(SZ367)	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5Y8/3	口ほぼ完存	外面に煤付着
1145	7801	土師器	鉢	B7	d28	包含層	口26.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口1/9	
1146	5102	土師器	台付甕	B7	d28	包含層	口27.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/6	
1147	7701	須恵器	甕	B7	d28	包含層	口17.3	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや粗	5Y7/1	口1/6	
1148	7101	須恵器	甕	B7	d28	包含層	口25.5	ナデ→タタキ→ヨコナデ→波状文	やや密	N7/	口1/5	
1149	10404	土師器	椀	B7	b19~c20	SD470	口12.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	1/3	

tab.30　出土遺物観察表(25)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1150	5301	土師器	壺	B7	e28	SD370	底7.2	ナデ→ハケメ	粗	7.5YR8/2	底完存	底部内面に砂付着
1151	11302	土師器	台付甕	B7	c22	SH468竈P6	ー	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口小片	
1152	11301	土師器	台付甕	B7	c22	SH468竈P2	口27.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口1/10	
1153	9703	須恵器	杯蓋	B7	c22	SH468竈	口11.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	7.5YR7/3	口1/4	
1154	9702	須恵器	高杯	B7	c22	SH468竈	脚8.0	回転ナデ→回転ケズリ、カキメ→3方向透孔	密	7.5Y7/1	脚柱完存	
1155	9003	土師器	台付甕	B7	c22	SH468竈P4	脚8.4	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	脚完存	
1156	11101	土師器	台付甕	B7	c22	SH468竈P1	口12.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/4	脚3/8	
1157	11101	土師器	台付甕	B7	c22	SH468竈P1	脚8.2	ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR7/4	口1/2	
1158	9002	須恵器	杯身	B7	c19	SH467	口13.6 高5.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5B6/1	1/2	
1159	10205	須恵器	杯身	B7	c19	SH467	最大径15.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5B6/1	7/10	
1160	11002	土師器	高杯	B7	c19	SH467	口15.4 高10.5	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	1/2	
1161	11201	須恵器	壺	B7	d19	SH467	頸11.3 高22.0	ナデ→タタキ→ヨコナデ	やや密	N4/	体完存	
1162	11001	土師器	鉢	B7	d20	SH467貯蔵穴	口23.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/3	
1163	10203	土師器	台付甕	B7	c19～d20	SH467	口26.8	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口小片	
1164	10102	土師器	台付甕	B7	c19	SH467	口11.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/8	
1165	10103	土師器	台付甕	B7	c19～d20	SH467	口13.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/5	外面に煤付着
1166	10902	土師器	台付甕	B7	c19	SH467	口13.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口1/4	
1167	10903	土師器	台付甕	B7	c19	SH467	脚8.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	脚1/8	
1168	10206	土師器	台付甕	B7	c19～d20	SH467	脚9.8	ナデ→工具ナデ	やや粗	7.5YR7/4	脚2/3	被熱により変色
1169	10901	土師器	壺	B7	c19	SH467P2	口16.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口5/6	
1170	11102	土師器	壺	B7	c19	SH467	底7.2	ナデ→工具ナデ	やや粗	10YR8/3	底1/3	
1171	10401	土師器	台付甕	B7	e19	SZ495	脚8.7	ナデ	やや粗	10YR8/4	脚完存	
1172	2104	須恵器	杯身	B7	b28	SZ415	口12.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y7/1	口3/4	
1173	2201	土師器	台付甕	B7	b27	SZ415	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/8	
1174	2101	土師器	台付甕	B7	b27	SZ415焼土	口15.0	ナデ→ハケメ→板ナデ→ヨコナデ	粗	10YR7/4	口1/6	
1175	6201	土師器	台付甕	B7	b28	SK417	口16.3	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	完存	外面に煤付着
1176	2105	土師器	高杯	B7	z31	SZ420	脚柱2.9	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	脚柱完存	
1177	2103	土師器	甕	B7	z31	SZ420	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	口1/3	
1178	2102	土師器	甕	B7	z31	SZ420	口20.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口ほぼ完存	
1179	9705	須恵器	杯身	B7	c25～d26	SH463	口12.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	5PB6/1	口1/8	
1180	9704	須恵器	杯身	B7	c25～d26	SH463	最大径14.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	N7/	1/4	
1181	9904	須恵器	杯身	B7	d26	SH463	口12.0 高4.7	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	2/3	内面に同心円当て具痕
1182	9706	須恵器	杯蓋	B7	d25	SH463竈	口14.2	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5B6/1	口小片	
1183	9701	土師器	高杯	B7	d26	SH463貯蔵穴	脚9.3	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	脚1/3	
1184	9601	土師器	甕	B7	d25	SH463竈	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5YR7/8	口3/8	
1185	12402	須恵器	杯蓋	B7	d19	SH474	口13.8 高5.7	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5B6/1	口1/2	
1186	12302	土師器	高杯	B7	d19	2-Pit2(SH474)	口12.0 高6.5	ナデ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR6/8	2/3	
1187	10201	土師器	台付甕	B7	c19～20	SH474	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR4/2	口小片	
1188	12301	土師器	台付甕	B7	d19	SH474	口26.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口1/12	
1189	10101	土師器	台付甕	B7	d19	2-Pit2(SH474)	口13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR4/1	口1/5	外面に煤付着
1190	10002	土師器	台付甕	B7	d19	SH474竈	口15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→板ナデ	密	10YR8/3	体1/5	被熱により口縁部・外面変色
1191	10104	土師器	台付甕	B7	d19	2-pit2	口15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口1/6	外面に煤付着
1192	13602	須恵器	杯蓋	B7	b23	包含層	口12.4 高6.2	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付けナデ	密	5P6/1	口1/8	
1193	10405	須恵器	杯蓋	B7	j22	SD494	口13.8	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5B6/1	1/5	
1194	4605	須恵器	杯蓋	B7	f30	包含層	口12.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	2.5Y6/3	口1/6	
1195	5601	須恵器	杯蓋	B7	d32	包含層	口14.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y7/1	口1/10	

tab.31　出土遺物観察表(26)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1196	5602	須恵器	杯身	B7	f25	包含層	口14.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	2.5Y6/2	口1/3	
1197	6002	須恵器	高杯	B7	i31	包含層	脚9.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N6/	脚完存	
1198	13702	土師器	高杯	B7	g21	包含層	口12.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/2	
1199	13701	土師器	高杯	B7	g21	包含層	口12.4 高8.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6	脚3/4	
1200	5903	土師器	高杯	B7	b31	包含層	口14.8	ナデ・シシボリメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	口1/4	
1201	3805	土師器	台付椀	B7	d32	包含層	脚10.0	ナデ→ヨコナデ	粗	5YR6/8	脚1/8	
1202	4603	土師器	高杯	B7	a30	包含層	脚8.2	ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/6	脚小片	
1203	4601	土師器	高杯	B7	a27	包含層	脚9.6	ナデ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/6	脚3/4	
1204	2701	土師器	高杯	B7	i33	包含層	脚11.5	ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	1/4	
1205	5202	土師器	台付甕	B7	b30	包含層	脚11.0	ナデ・シボリメ→面取り→ヨコナデ	やや密	5YR5/6	脚1/3	
1206	4705	土師器	高杯	B7	j32	包含層	脚10.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/3	脚1/4	
1207	13502	土師器	台付甕	B7	f24	包含層	脚9.7	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	脚2/3	
1208	13801	土師器	台付甕	B7	a24	包含層	脚9.2	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/2	脚1/2	底部内面に煤付着
1209	14103	土師器	台付甕	B7	g22	包含層	脚7.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/3	脚完存	
1210	8405	土師器	台付甕	B7	y28	包含層	脚9.0	ナデ・オサエ	粗	5YR7/4	脚1/2	
1211	4903	土師器	壺	B7	w28	SD413	口17.0	ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/9	
1212	22202	土師器	台付甕	B7	f19	2包含層	口15.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラ描き	やや粗	7.5YR6/3	口1/6	
1213	4401	土師器	台付甕	B7	b27	包含層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/4	口1/4	
1214	4402	土師器	台付甕	B7	b27	包含層	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/4	
1215	10001	土師器	台付甕	B7	a24	包含層	口22.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口1/3	外面に煤付着
1216	5001	土師器	甕	B7	i18	包含層	口18.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/3	
1217	5607	須恵器	甕	B7	b31	包含層	—	ナデ	やや密	2.5Y7/2	口小片	
1218	8501	須恵器	杯蓋	B7	x29	SK408	口15.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	5Y6/2	口1/2	
1219	8502	須恵器	杯身	B7	x29	SK408P2	口11.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	10Y4/1	口1/8	
1220	8701	須恵器	杯身	B7	x29	SK408	口13.5	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5B6/1	口1/3	
1221	8503	土師器	椀	B7	x29	SK408P3	口12.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	完存	
1222	8505	土師器	高杯	B7	x29	SK408P1	口20.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR5/4	口1/4	
1223	8506	土師器	高杯	B7	x29	SK408P4	底9.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	脚1/4	
1224	8803	土師器	高杯	B7	x29	SK408	脚13.0	ナデ・シボリメ→面取り→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	脚1/4	
1225	8805	土師器	高杯	B7	x29	SK408	脚14.5	ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	脚1/6	
1226	8604	土師器	把手	B7	x29	SK408	—	ナデ	やや粗	10YR8/2	把手	
1227	8602	土師器	甕	B7	x29	SK408	口20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/3	
1228	2604	土師器	甕	B7	x29	SK408	口19.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5YR6/6	口1/6	
1229	8601	土師器	甕	B7	x29	SK408	口20.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/4	口1/2	
1230	9005	石製	紡錘車	B7	b24	SF461	直径3.7 重 15.24g		—	—	1/2	
1231	9602	土師器	甕	B7	b24	SF461	口23.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	5YR7/6	口1/6	
1232	9802	須恵器	杯蓋	B7	d21～e22	SH479	口12.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	5B6/1	口小片	
1233	9803	須恵器	杯身	B7	d21～e22	SH479	最大径14.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	N6/	1/6	
1234	10202	土師器	椀	B7	d21～e22	SH479	口14.5	ナデ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR8/6	口ほぼ完存	
1235	10204	土師器	甕	B7	d21～e22	SH479	口17.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR7/3	口1/10	
1236	9801	石製	砥石	B7	d21～e22	SH479	幅3.4 重144g		—	—	4面残	4面に使用痕(1面には線状の使用痕有り)
1237	8801	土師器	甕	B7	f29	SZ416	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/2	口1/3	
1238	8802	土師器	甕	B7	x29	SZ416	口23.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3	口1/3	
1239	8702	土師器	甕	B7	x29	SZ416	口18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	
1240	6502	土師器	甕	B7	x29	SZ416	口22.0	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/3	口1/8	
1241	8704	土師器	甕	B7	f29	SZ416	口12.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/7	

tab.32　出土遺物観察表(27)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1242	8706	土師器	鉢	B7	x29	SZ416	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口小片	
1243	13505	鉄製	刀子	B7	h20	SH492	厚0.3		—	—	刃先のみ	
1244	9901	土師器	高杯	B7	h20	SH492竈P1	口12.8～13.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6	口完存	外面の約1/4に煤付着
1245	12401	土師器	甕	B7		SH492竈P2	口16.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/6	口3/8	
1246	4802	土師器	杯	B7	b30	SH380	口15.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	2.5YR5/6	口1/6	
1247	5805	土師器	甕	B7	b·c30	SH380	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口小片	
1248	5803	土師器	甕	B7	c30	SH380カマド	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3	口小片	
1249	8303	土師器	甕	B7	c30	SH380カマド	口15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	2.5YR6/4	口1/4	
1250	7501	土師器	甕	B7	c30	SH380カマド	口16.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/2	
1251	5606	土師器	高杯	B7	b31	SH380	脚8.0	ナデ	やや粗	5YR6/6	脚1/7	
1252	12501	土師器	甕	B7	k21	包含層	口26.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR4/2	口1/6	
1253	12601	土師器	甕	B7	k21	SZ493	口27.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR6/3	口1/8	
1254	4006	土師器	杯	B7	b30	SH374下P5	口14.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	7.5YR6/6	口1/3	内外面に煤付着
1255	8401	土師器	杯	B7	b30	SH374下P4	口13.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4	口1/4	
1256	2301	土師器	杯	B7	b30	SH374下P4	口15.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや粗	7.5YR7/4	底1/5	
1257	2402	土師器	甕	B7	b30	SH374下P2	口13.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/4	口1/4	
1258	6901	土師器	甕	B7	b30	SH374下P2	口18.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	10YR7/2	口1/4	
1259	2306	土師器	台付甕	B7	b30	SH374下P1	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	口1/4	
1260	8001	土師器	甕	B7	b30	SH374下P1	口26.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/5	外面に煤付着
1261	4102	土師器	甕	B7	b30	SH374下P7	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/5	
1262	2502	土師器	甕	B7	b30	SH374煙道P1	口24.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/3	口1/8	
1263	3001	土師器	甕	B7	b30	SH374煙道P3	口23.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR8/4	口1/2	
1264	7601	土師器	甕	B7	b30	SH374煙道P4	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR6/3	口1/4	外面に煤付着
1265	5802	須恵器	杯蓋	B7	a31	SK411	口10.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	N8/	口1/4	
1266	9905	須恵器	杯身	B7	b20	SH538	口10.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	2.5Y8/1	小片	
1267	10003	土師器	甕	B7	b20	SH538	口16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR7/2	口小片	
1268	4703	土師器	杯	B7	z32	SH376	口15.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/6	
1269	8101	土師器	杯	B7	a31	SH376	口20.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	2.5YR7/6	口1/4	
1270	8306	土師器	皿	B7	a31	SH376	口16.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→高台貼り付け→高台にヨコナデ	やや密	5YR6/6	11/12	
1271	8305	土師器	甕	B7	a31	SH376	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR6/3	口1/6	外面に煤付着
1272	4704	土師器	甕	B7	z32	SH376	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3	口1/6	
1273	9603	土師器	甕	B7	b23～c25	SH478	口15.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/2	口1/8	
1274	10505	須恵器	杯蓋	B7	f22	SD483	口13.8	回転ナデ	密	5R6/1	口1/12	
1275	8603	土師器	製塩土器	B7	d29	SK390	口14.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	5YR7/6	口1/2	
1276	10603	土師器	把手	B7	b～c19	SD472	—	ナデ	密	2.5YR6/8	把手	
1277	4101	須恵器	杯蓋	B7	x28	SZ404	口22.7	回転ナデ→回転ケズリ→摘み貼り付け→ヨコナデ	密	N7/	口3/4	外面に布目痕 内外面に紐状の煤付着
1278	4702	須恵器	杯身	B7	x28	SZ404	底14.0	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	2.5Y6/1	底1/6	
1279	4701	土師器	甕	B7	x28	SZ404	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/6	
1280	4901	土師器	甕	B7	x28	SZ404	口31.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口小片	
1281	8206	須恵器	皿	B7	e21	SZ425	口18.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	5Y7/1	口1/6	外面に煤付着
1282	2803	須恵器	高杯	B7	e21	SZ425	脚柱4.0	回転ナデ→回転ケズリ、カキメ→3方向透孔	やや密	N4/	脚柱完存	
1283	4004	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR8/4	口1/8	
1284	5801	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口25.8	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6	口1/8	
1285	4003	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	5YR7/4	口1/8	
1286	2403	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口18.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/8	
1287	2705	土師器	甕	B7	e21	SZ425	—	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	5YR7/1	口小片	

tab.33　出土遺物観察表(28)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1288	2703	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/4	
1289	2603	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口16.5	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/6	
1290	8204	土師器	鉢	B7	e21	SZ425	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/4	口小片	
1291	5703	土師器	甕	B7	e21	SZ425	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y6/2	口小片	
1292	8105	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口24.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/3	口1/8	
1293	3702	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口24.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口1/8	
1294	6405	土師器	壺	B7	e21	SZ425	口22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	口1/6	
1295	2601	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口小片	
1296	4001	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口23.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR8/4	口1/8	
1297	8002	土師器	甕	B7	e21	SZ425	口26.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR7/4	口1/4	
1298	3806	土師器	高杯	B7	f28	2−Pit3	−	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ→櫛描直線文、透孔（1方向残）	やや密	5YR7/4	脚柱1/3	
1299	12704	土師器	甕	B7	i33	1−Pit1	−	ナデ→刻目	やや密	7.5YR3/1	口小片	外面に煤付着
1230	8301	土師器	台付甕	B7	z31	2−Pit5	口14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2	口小片	
1301	4405	土師器	甑	B7	g29	2−Pit3	−	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR5/3	口小片	
1302	4304	土師器	壺	B7	g29	2−Pit6	口12.0	ナデ	密	10YR7/4	口1/10	
1303	3902	須恵器	杯蓋	B7	a30	2−Pit1	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N5/	口1/4	
1304	4202	須恵器	杯身	B7	e29	2−Pit1	口10.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	10Y5/1	口1/3	
1305	12804	須恵器	高杯	B7	e29	1−Pit3	脚柱2.3	回転ナデ→貼り付けナデ	やや密	N5/	小片	内面にヘラ描き
1306	8406	須恵器	高杯	B7	z31	2−Pit5	脚11.0	ナデ→ヨコナデ、透孔（1方向残）	やや密	N4/	脚1/4	
1307	13901	土師器	皿	B7	k23	2−Pit2(SB595)	口15.8 高2.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	1/3	
1308	8504	土師器	皿	B7	x29	2−Pit1	口15.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	7.5YR6/4	口1/4	
1309	4201	須恵器	壺	B7	i30	2−Pit4	底15.0	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	やや密	5Y7/1	底1/8	
1310	4203	須恵器	壺	B7	g30	2−Pit3	−	回転ナデ	やや密	2.5Y7/1	口小片	
1311	4503	土師器	杯	B7	h32	包含層	口13.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/4	
1312	13604	土師器	椀	B7	e19	包含層	口12.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/3	口1/6	
1313	5603	土師器	杯	B7	i22	包含層	口12.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	10YR7/4	口1/2	内面にヘラ描き（焼成後）
1314	4206	土師器	杯	B7	e30	包含層	口13.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口1/4	
1315	10406	土師器	杯	B7	k21	包含層	口13.0	ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR6/4	口1/10	
1316	4204	土師器	杯	B7	e30	包含層	口13.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2	口ほぼ完存	
1317	4205	土師器	杯	B7	e30	包含層	口14.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR7/6	口1/4	
1318	8103	土師器	杯	B7	e21	包含層	口13.5	ナデ・・オサエ→ヨコナデ	密	7.5YR8/4	口3/4	
1319	13907	土師器	杯	B7	i21～22	SE256	口17.2	ナデ・オサエ→ヘラケズリ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	5YR5/6	1/4	
1320	2702	土師器	皿	B7	x29	包含層	口16.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	5YR6/6	口1/8	
1321	6402	土師器	皿	B7	b30	包含層	口19.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/4	
1322	13405	土師器	皿	B7	f22	包含層	口18.0 高2.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口1/6	
1323	13404	土師器	皿	B7	k23	包含層	口18.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/6	口1/5	
1324	4902	土師器	皿	B7	b30	包含層	口17.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	やや密	2.5YR6/6	口1/3	
1325	13603	須恵器	杯身	B7	a24	包含層	口11.4 高3.6	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y6/1	1/4	
1326	13503	須恵器	杯身	B7	f24	包含層	口10.6 高4.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y7/1	口1/4	
1327	13903	須恵器	杯身	B7	i22	包含層	口10.2 高3.2	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	5Y6/1	1/4	
1328	6101	須恵器	杯身	B7	i31	包含層	口10.0	回転ナデ→回転ケズリ	やや粗	N7/	口1/3	
1329	6004	須恵器	杯身	B7	a31	包含層	口13.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	5Y7/1	口1/4	
1330	13905	須恵器	杯蓋	B7	h23	包含層	口14.6	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付けナデ	やや粗	5Y8/2	1/4	
1331	3901	須恵器	杯身	B7	c29	包含層	口13.5	回転ナデ→回転ケズリ	やや密	2.5Y8/2	口1/8	
1332	13704	須恵器	杯	B7	g21	包含層	口9.0	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	N7/	底1/3	
1333	2802	須恵器	杯身	B7	g33	南落ち込み	底12.0	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	N4/	高台1/6	

tab.34　出土遺物観察表(29)

番号	実測番号	質	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1334	13504	須恵器	壺?	B7	i22	包含層	脚7.2	ナデ→貼り付けナデ→カキメ	やや粗	5Y6/1	高台1/4	
1335	4104	須恵器	壺	B7	x30	包含層	口12.0	回転ナデ	密	N7/	口1/3	
1336	13904	須恵器	壺	B7	i23	包含層	口12.0	回転ナデ	やや密	5YR6/6	1/4	
1337	3903	須恵器	甕	B7	c29	包含層	体9.4	回転ナデ→回転ケズリ→孔	やや密	N6/	体完存	
1338	12803	須恵器	杯蓋	B7	g22	包含層	—	回転ナデ	密	5Y5/1	小片	外面にヘラ描き
1339	6103	土師器	甕	B7	c30	包含層	口16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口1/6	
1340	4502	土師器	甕	B7	h32	包含層	口14.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/4	外面に煤付着
1341	4406	土師質	土管	B7	x30	SD407	—	ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/3	口小片	
1342	2602	土師器	甕	B7	g33	南落ち込み	口17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR8/4	口1/4	
1343	3701	土師器	甕	B7	d32	包含層	口18.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	10YR8/3	口1/8	
1344	4501	土師器	甕	B7	h32	包含層	口19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR8/4	口1/8	
1345	6503	土師器	甕	B7	x30	SD407	口27.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/3	口1/8	
1346	13601	土師器	甕	B7	b23	包含層	口24.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	5YR6/6	口5/8	
1347	14001	土師器	甕	B7	i23	包含層	口20.0	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/4	口5/8	
1348	8901	土師器	甕	B7	h23	包含層	口28.4	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	7.5YR7/4	口1/2	
1349	14003	土師質	土錘	B7	d22	包含層	径2.7 重57.83 g	ナデ	やや粗	2.5Y8/2	完存	

tab.35　出土遺物観察表(30)

凡　例

遺物観察表については、以下のような方法によって表記している。

番号；図版に対応する番号である。

実測番号；実測図作成段階での番号である。3桁以上の番号が実測用紙番号で、下2桁の番号が実測用紙内の番号である。(例) 12304→123−04 器種等；弥生土器・土師器などの別と、器種（壺・甕・杯）などを記した。

大地区；調査区名である。

小地区；調査区内のグリット（4m×4m）である。

遺構・層名等；遺構から出土したものについては遺構を表記している。

計測値；口縁＝口縁部径、底＝底径、高台＝高台径、高＝器高などと略した。

調整・技法の特徴；焼成時に生じた特徴的な事項を含め、簡単に記した。甕口縁部の刻みなどについては、刻目＝押し引き施文、押圧の別を記した。

胎土；粗密のみを表記した。胎土中に見られる重要な特徴については「特記事項」に記した。

色調；『新版標準土色帖』(小山・竹原編　9版　1989) を基準とした色調を表記した。

残存；口縁部・底部などの残存の度合いを分数表現した。

特記事項；土器に見られる特徴的な要素などを記した。

V　雲出島貫遺跡の成立と展開

～総括に代えて～

はじめに

県道嬉野津線国補橋梁整備工事に伴う雲出島貫遺跡の調査は、平成９年度から11年度までの、足かけ３カ年を費やした。この間に調査した面積は、遺構面が複数面あった場合も含めると13,800㎡に及ぶ。雲出川堤防寄りの一部を除いてその大部分が既存道路の拡幅であったが、雲出島貫町地内に東西約630ｍの大トレンチを入れたような状態である。そのため、不充分な部分もあるものの、雲出島貫遺跡の内容は概ね把握することができ、それは縄文時代晩期から近世に及ぶもので、時期それぞれの非常に多様なあり方を知ることができた。その点からも、この遺跡で得られた成果は、三重県下における指標的存在となり得るばかりでなく、東海地域、ひいては列島における低地遺跡の状況を知る上でも恰好の材料になると考える。

したがってここでは、第３次調査の内容だけでなく、これまでに報告してきた第１・２次調査の成果も含め、雲出島貫遺跡が提起するいくつかの問題について検討する。なお、検討に当たっては、多岐にわたる重要な調査成果を遺漏無く見ることが必要ではあるものの、筆者の力量と時間的な制約もあって必ずしも充分とは言えないものもあろうが、その点についてはご寛恕願いたい。

さて、ここでは発掘調査で確認した遺構や遺物を考えるために、いくつかの地図を用いて考えていく。用いる地図は、地籍図・津市都市計画区域図がある。

地籍図は、雲出島貫町在住の太田司氏所蔵のものを再トレースして用いた（fig.91）。この地籍図には作成年月日が記されていないので、正確な日付は不明である。しかし表紙に『伊勢国一志郡雲出村大字嶌貫地図』と書かれている。雲出村が存在していたのが明治22(1889)年～昭和28(1953)年であるため、19世紀末から20世紀前半の状況を示していると見てよかろう。

都市計画区域図は、現在でも各市町村で保管・活用されている地図で、土地改変が伴う毎に書き替えがされる性格のものである。小稿で用いる「津都市計画区域図」は1973年に撮影され、1976年に修正図化されたものを用いる（fig.3）。したがって、現在雲出島貫地内は圃場整備が終了した以後の状態を呈しているが、この図はそれ以前の状況を示すものである。この図は、前述した地籍図とは100年近い時間差があるものの、田圃・畠地を中心に地籍図に見られる筆割りが概ね表現されており、地籍図の表現をより正確に見たり、当該地域全体の地形的環境を見たりする上で非常に有効なものである。

以上のような性格の地図と、発掘調査で確認した遺構・遺物とを相互に見ることによって、雲出島貫遺跡の成立と展開を通観していく。

なお、ここでは既に報告している第１・２次調査報告書について、第１次調査分を『嶋抜』Ⅰ、第２次調査分を『嶋抜』Ⅱと表現する。

1　雲出島貫遺跡の時期区分

雲出島貫遺跡で確認した遺跡は、縄文時代晩期から近世までの、かなりの長期にわたって漸次営まれてきた足跡である。これは大きく分けるとＡ～Ｈの８期に区分できる。

Ａ期　縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての時期である。考古学上の時代区分によらず、この時期をひとまとめとしたのは、遺物が希薄な時期であったことだけでなく、遠賀川系土器が存在するであろう時期に相当すると思われる突帯文系土器がいくつか見られることから、遺跡としての断絶を考古学的時代区分に整合させて解釈することができないと考えたからである。

この時期の遺跡がどのように形成されていたのかは明確にはできず、遺構としてはＡ３区検出の土器棺墓SX88・89（『嶋抜』Ⅰ）があるに過ぎない。Ｂ５区東半部（３次）の調査後に行った断ち割りで微高地部分の凹凸が確認されたが、これを調査中に

もう少し明確に認識しておれば、あるいは当該時期の遺構を把握することがでいたのではないかと思われる。その意味では悔いが残る。遺物は、少ないながらもＡ１区からＢ５区までの比較的広範囲に分布している。

Ｂ期　弥生時代中期に相当する時期である。この時期の遺構・遺物ともに、３次調査区のＢ２・４・５区でのみ確認しているので、比較的狭い範囲で遺跡が展開した時期といえるであろう。『嶋抜』Ｉでは、弥生時代を当遺跡の空白期間として考えたが、ここで訂正する。

この時期の遺構としては、竪穴住居や周溝墓と考えられるものがある。また、後述のＣ期に相当する環濠（SD572）も、この時期に掘削されている可能性が、わずかではあるものの考えられる。さらに、後述のＣ期段階で明確となる水田も、この時期に形成されはじめた可能性が大いにある。

Ｃ期　弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての時期である。

この時期に遺跡はＡ１区からＢ７区までの全域に及んでおり、また遺物の出土量もかなり多い。今回の調査区のなかでは、最も充実した時期のひとつである。竪穴住居・井戸・周溝墓群のほか、居住域を区画する環濠や水田もあり、当該時期の遺跡のあり方を示す好例として全国的にも注目できる資料と考える。

この時期における遺構群の展開については、後にもう少し踏み込んで考察してみる。

Ｄ期　古墳時代中後期に相当する時期である。Ｃ期とほぼ連続すると考えられるが、須恵器の出現と遺跡としての展開の相違によって一応区分する。

居住域は、Ｃ期における居住域と重複する（Ａ６～Ｂ５区）が、Ｃ期に周溝墓群が形成されていた部分にも進出している（Ｂ７区）。遺構・遺物はＡ６区からＢ７区にかけて見られ、Ｃ期よりも範囲上は縮小している。しかし、居住域そのものは範囲を狭めず、全体としてＣ期よりも西側に移動していると見ることも可能である。

Ａ６区からは円筒埴輪の破片が、Ａ３区からは銀環が出土している。Ｂ１区南方の旧参宮街道沿いからは、当該時期の須恵器がまとまって出土していることを地元で聞いている。したがって、Ａ３～Ｂ１区の南部に、当該時期の古墳群が存在している可能性も考えられる。

水田は、Ｃ期と同じ場所に形成されていると考えられる。

Ｅ期　いわゆる飛鳥時代から奈良時代を経て、平安時代前半に至る時期である。概ね７世紀から９世紀にかけての時期、すなわち「古代」に相当する時期として把握している。

Ｄ期まで存続していた水田は奈良時代までに埋没しており、その上に掘立柱建物が建てられている。遺構・遺物はＡ１区からＢ７区までの調査区全体に及ぶ。

その中でも、Ａ３区付近には精製品の暗文土師器が集中しており、大形掘立柱建物SB106の存在もあって注目できる地点といえる。また、Ａ６区の大溝ＳＤ165とその付近からは精製品の暗文土師器のほか土馬や穿孔された土師器甕などがあり、祭祀的な匂いがする。

Ｆ期　平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期である。概ね11世紀から13世紀中葉に相当する時期、すなわち「中世前期」として把握している。

この時期の遺構・遺物はＢ５～７区に集中的かつ濃密に見られるものの、A3区に小規模な溝SD16、Ａ６区に比較的規模の大きい溝ＳＤ166、Ｂ１区に土壙墓ＳＫ143があり、小規模ながらＢ７区付近以外にも散在していることがわかる。また、Ｂ２・５区における当該時期の井戸の存在も示唆的であり、後述する。

Ｂ７区付近の状況は、中世成立期における居館遺構を示すものである。この点については『嶋抜』Ⅱおよび別稿[1]で詳細を述べているので、ここでは割愛する。

Ｇ期　室町・戦国時代に相当する時期であり、概ね15世紀中葉から16世紀後半頃と把握している。当該時期の遺構・遺物はＡ１～４区内に集中しており、わずかにＢ１区で当該時期相当の遺物が見られるに過ぎない。

地籍図と調査区との関係（fig.92）を見ると、Ａ１区の区画溝SD1・２（『嶋抜』Ｉ）やＡ４・５区の区画溝ＳＤ25～27・43（『嶋抜』Ｉ）などが、

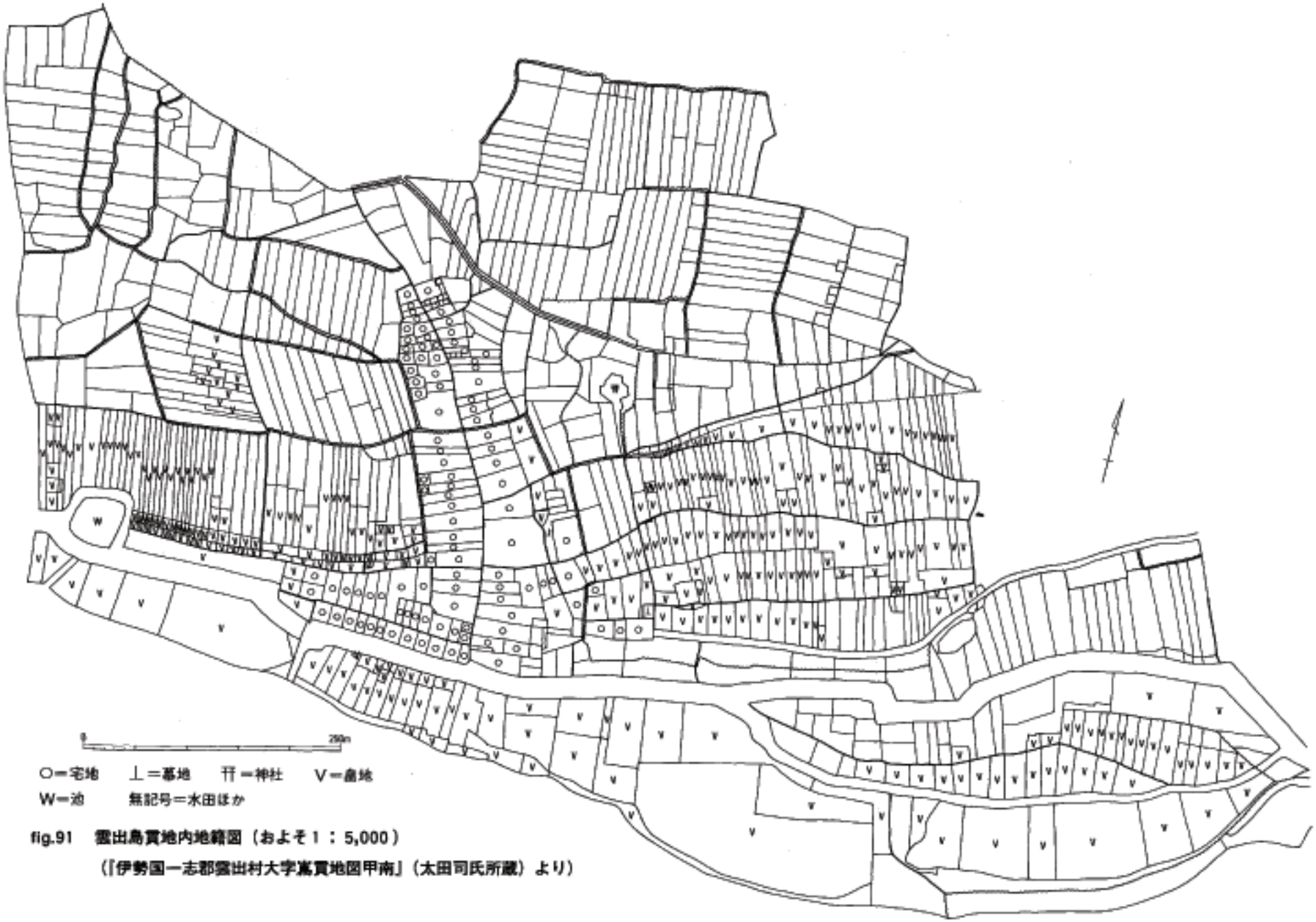


fig.91　雲出島賃地内地籍図（およそ１：5,000）
（『伊勢国一志郡雲出村大字嶌賃地図甲南』（太田司氏所蔵）より）

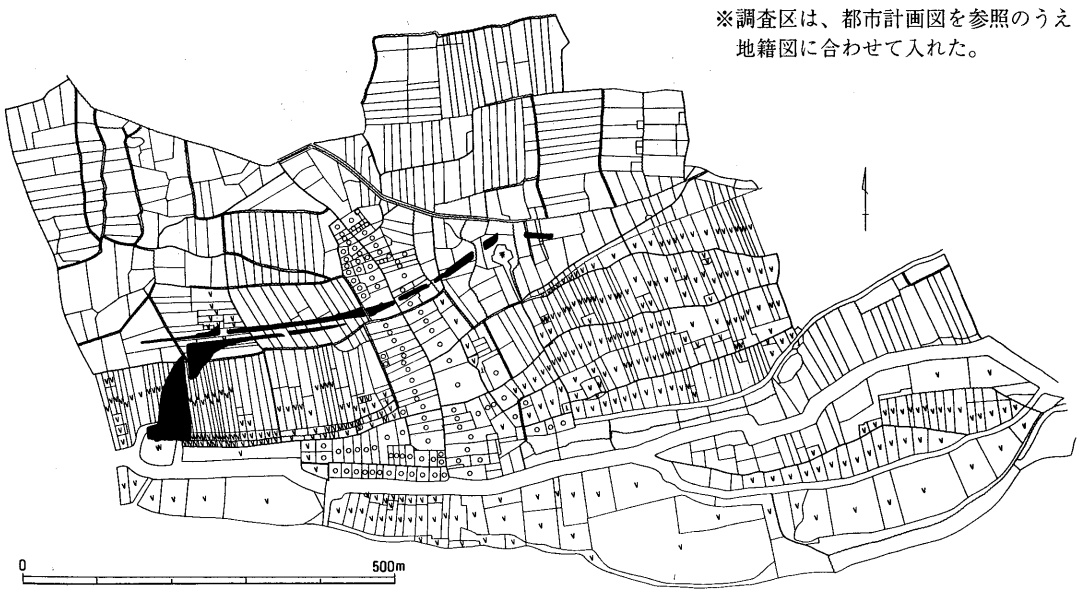


fig. 92　地籍図と調査区の関係（およそ１：10,000）

地籍図に見られる筆割りの方向とほぼ揃った状態であることが読みとれる[2]。とくにSD27・43の間は、中世後期段階における道路を示すものとして把握できるように考えられる。

H期　近世・近代に相当する時期で、概ね18世紀代から19世紀後半頃を中心とする前後の時期である。近世・近代の参宮街道沿いであるA６・B１区に集中的に見られ、「雲出宿」あるいは「島貫宿」の一角と考えられることを『嶋抜』Ⅱで述べた。

地籍図で見ると、A６区相当部分は、東半が水田、西半が宅地である。このような地目の違いは土層図からも確認できる（『嶋抜』Ⅱ）が、東半部分の水田土壌より下層では19世紀以前の土坑なども確認されており、当地の水田化の時期を示していると把握できる。

B１区の部分はA６区に比べて遺構・遺物ともに希薄であった。地籍図でも大きな宅地として表現されている。ここは地元での聞き取りによると、近世には医者の住宅があった場所といい、そのような関係も考慮に入れる必要がある。

以上、各時期単位で概観してきた。つぎに、とくに注目できるC・D・E・F期について、やや詳しく見ていく。

2　古墳時代初頭の環濠集落と集落景観の変化 ～C・D期の動向～

古墳時代前期は、当遺跡が大規模に展開した時期として、後の島貫F期と比肩できる画期的な時期である。いや、A１区からB７区までの広範囲に展開している点からいえば、雲出島貫遺跡を最も特徴付ける時期というべきであろう。

島貫C期遺跡における遺構は、fig. 93・94に示したように今回の調査対象範囲全体に及んでいる。しかし、調査区全体が均一なあり方を呈しているのではなく、それぞれの地点で特徴的なあり方を示している。

大きく見ると、B７区とA４～６区の２カ所に周溝墓群がある。それぞれを「島貫A墳墓群」・「島貫B墳墓群」とする。居住域は、A５・６区を境に大きく２分でき、島貫A墳墓群の東に形成されている居住域を「居住域A」、A・B両墳墓群間の居住域を「居住域B」とする。居住域BとB墳墓群との間には水田が形成されている。

a　C期環濠集落ー居住域B

まず、居住域Bについて見る。B２・４・５区に見られるSD532・572は環濠と考えた。両者の溝は形態もやや異なり、また出土土器についても、若干の時期的な重なりがあるとはいえ、その廃絶時期にも微妙な差がある。これを一連の環濠と考えた最大

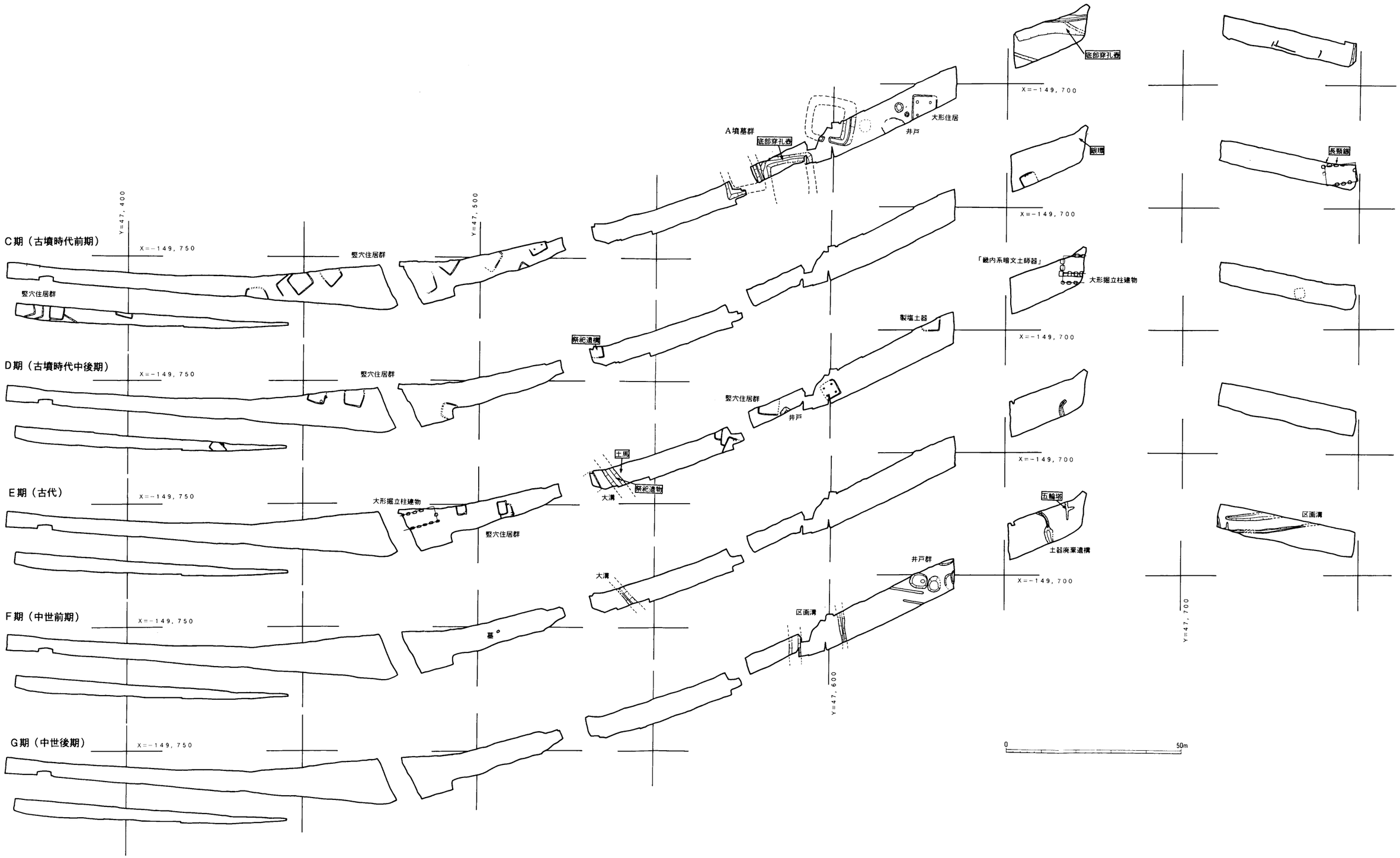


fig.93　調査区内遺構変遷図（1）Ａ１～Ｂ３区（１：1,000）

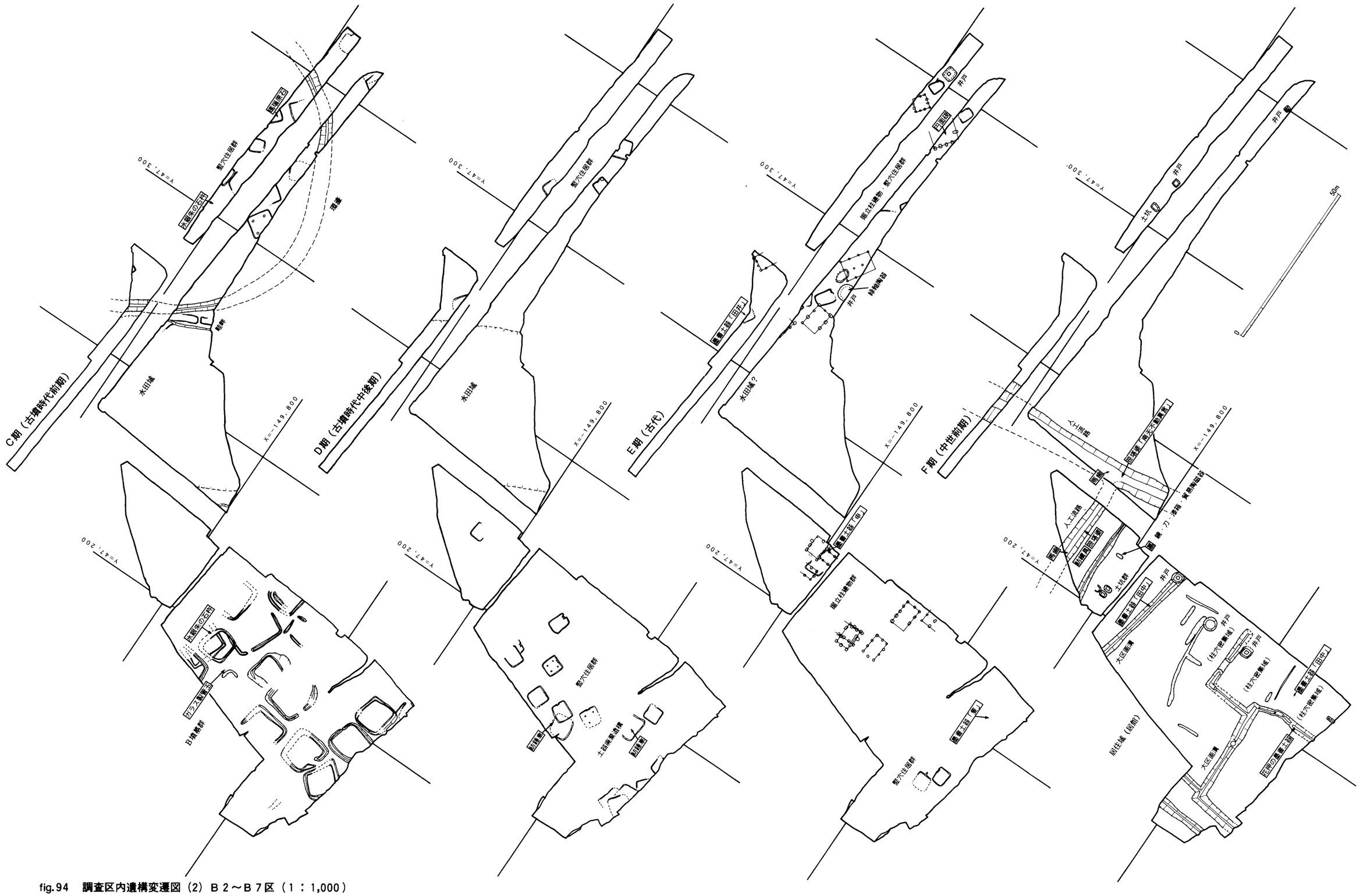


fig.94　調査区内遺構変遷図（2）Ｂ２～Ｂ７区（１：1,000）

の根拠は、fig.92に示した地籍図にある。

この地籍図に表現された畠地・田地・宅地・墓地などをそれぞれ区分してみる。すると、fig.3に示した1976年段階の地図では、B２～５区付近の全域が水田として表現されているが、地籍図の段階にはB２・４区の北部が畠地であったことが判明した。この付近は発掘調査時点でも黄灰色砂質土がもっとも良好に確認できた場所であり、地形的にも安定した場所であったと認識できた場所である。これらのことから、地籍図作成段階以前にこの部分は島畠状を呈していたと考えられる。この部分が島畠であった意味は後に島貫F期の状況を述べるなかでも触れるが、ここでは当該時期にこの部分が微高地であったことを確認しておく。

そのように考えると、先ほどの２条の溝はちょうどこの微高地の外縁部に相当することになり、そのことからSD532・572は一連の環濠と認識できるのである。

この部分を環濠と考えると、当遺跡は環濠集落として認識できることになるが、実態はそれほど単純ではない。というのは、環濠外部、とくに環濠の東側にも広く当該時期の集落が展開しているからである。この差が何に起因するのかはにわかには決しがたいが、環濠ＳＤ572から水田へと延びる導水路が存在することから、水田部分の管理とも関連していると考えられ、そうすると環濠内に居住する者（集団内小集団）はその外部に居住する者よりも優位な位置にあると考えることもできる。

b　C期居住域Aについて

A墳墓群の東では、竪穴住居と考えられるものは、その可能性があるものも含めて３棟存在するに過ぎない。しかし、居住域Aからは広範囲に当該時期の土器が出土しており、量的には居住域Bを凌ぐといってもよい。

居住域Aで特徴的なのは、大形の竪穴住居（ＳＨ63)とそれに近接した位置にある井戸の存在である。SH63からは、焼失家屋ではないにもかかわらず完形品に近い土器が多く出土している。また、Ａ１～３区では、竪穴住居は検出できなかったものの、二重口縁壺の出土が目立つ。地域外搬入と考えられる土器が多いのも居住域Aである。その意味から、この区域は居住域Bとは異なり、祭祀的な意味も含め、やや特殊な空間として評価しておきたい。

c　C期島貫A・B墳墓群について

当該時期の周溝墓と考えられる遺構は、大きく２地点で見られる。いずれも方形を呈するものである。

東部の島貫A墳墓群では３基の周溝墓が確認できた。ここでは、最大のＳD54で東西辺約12mであり(『嶋抜』Ⅰ・Ⅱ)、周溝規模も含め、調査で確認できたなかで最大のものである。時期的には、Ａ１・２号墓（島貫Ｃ２期）→Ａ３号墓（島貫Ｃ３期）という変遷が考えられる。したがって、B墳墓群よりもやや後出する墳墓群であると見られるが、調査区の制限から見て、とくに調査区南部にもう少し早い段階に構築された周溝墓群が展開している可能性は充分あろう。

そのような状況を考慮するにしても、A墳墓群はB墳墓群と比べた場合の違いが見られる。まず、Ａ２号墓から出土した底部に焼成後穿孔が見られる壺は、後に伊勢地内でも頻出する底部穿孔二重口縁壺の先駆的形態として、土器の形態的特徴からも評価できるものである。底部穿孔壺の出土が、比較的広い範囲を調査した島貫B墳墓群では見られないことは、A墳墓群がB墳墓群よりもこの時期優位な状態にあったことを示唆するものと考える。

島貫B墳墓群では16基あるいは17基の墳墓が確認できた。この墳墓群は一辺約６～８m前後のものを中心に構成されている。南部にみられる墳墓が、溝の重なりですらあまり見られないのに対し、北部のものは墳丘をも重複しながら築造されている。墳墓群は島貫Ｃ１期から築造がはじまり、Ｃ３期には終了している。時期的には前述の環濠から大量に出土した土器が示す時期と符合しており、居住域Bを形成した集団による造墓と考えてよかろう。

d　C期集落とD期との関係

C期における上記のような集落景観は、古墳時代後期の島貫D期に至ると、いくつかの類似点を含みながらも若干の変化が見られる。

まず、C期において島貫B墳墓群が形成されていたＢ７区周辺が、居住域として利用される。D期においては、未だ墳墓のマウンドは良好に遺存していたと考えられることから、D期の人々はそれと知り

ながら住居を建てたと考えられる。つまり、D期の人々が墳墓に対して抱いていた感覚は、C期の人々のそれとはかなり異なっていたと考えられる。

この一方で、前述のように、A６・B１区の南部には、古墳群の存在が想定できる。また、『嶋抜』Ⅰでも触れたが、B７区の西に隣接する久居市木造町五位殿地内からは、鈴木敏雄氏によって円筒埴輪の出土が報告されている[3]。このことから、島貫D期では、大きく２ヶ所の古墳群を想定することができる。墓域が２ヶ所見られるというこのあり方は、位置こそ異なるもののC期と類似した現象ということができる。

島貫C期とD期では、以上のような相違点と類似点が見られたが、これらは各々別の要因によるものと考えられる。墳墓の認識に関わる違いは、人々の感覚上の変化として現出したものであろう。一方、２ヶ所の墓域という類似点は、C期に形成されていた水田遺構がD期にまで継続していることが示すように、この遺跡周辺における地形的な制約に因るものと考えられる。

3　土地開発と検出遺構の関連～E期の動向～

a　掘立柱建物群と方位の問題

今回の調査区からは、E期に相当すると考えられる掘立柱建物や柱列が21基確認できた。しかしこれら全てが規則正しく配列しているのではない。大きくは①真北より西へ20°前後傾くもの、②真北方向ないしはそれに近いもの、③真北より東へ30°以上傾くもの、の３類に分けられる。

①はB１区の掘立柱建物ＳＢ428（『嶋抜』Ⅱ）に見られる。この掘立柱建物と関連しそうなのがA６区の大溝ＳＤ165（『嶋抜』Ⅱ）である。両者は方位としては10数度異なるものではあるが、とくにＳＤ165が狭い調査区内の状況から推し量ったものであることを考慮すれば、ＳＢ428と関連を持つ可能性も高い。飛鳥・藤原・平城京における土器編年（以下、「都城編年」と呼称）[4]の飛鳥Ⅳ～平城Ⅰにかけての時期に見られる方位の傾向と考えられる。

さて、雲出島貫町付近では、やや不整形ながら条里型地割と考えられる地割が認められる。この条里型地割は、概ねＮ24°Ｗの方位をとるものであり、厳密にはＳＢ428（N16°W）やＳＤ165（Ｎ33°Ｗ）と異なる。しかし、この８度前後の違いは、巨視的に見れば概ね同一方向と見ることも可能なのではなかろうか。そうすると、当地における条里型地割の祖形を、ＳＤ165出土土器が示す都城編年での飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ併行期に求めることができる可能性が出てくる。これは当地に見られる条里型地割について、今回検出した範囲の遺構で見た場合のことであり、確定的な要素はもちろん無いが、ひとまず可能性としては提示しておきたい。

②はA３区およびB５区西部～B７区の２地点で見られる。前者は単独で存在し、後者は何時期かの建て替えを伴って群集しているが、この差も調査面積によるものと考えられる。前者は柱掘形の規模も大きい大形の掘立柱建物（ＳＢ106、『嶋抜』Ⅰ）で、その周囲からは畿内系の暗文土師器が多く出土している。都城編年でいう平城Ⅰ～Ⅳ併行期に見られる方位の傾向と見られる。

注目したいのは、A３区が地籍図作成段階では当時存在していた神社のすぐ北部にあたることである。この神社は近代には雲出神社と呼ばれ、『伊勢路見取絵図』（『五街道分間延絵図』に含まれる。文化３（1806）年成立）[5]に「八王子」「天王」として記載されているもので、明治年間の合祀で廃社され、現在は雲出本郷町の雲出神社に合祀されている。

雲出神社の経緯について、今のところこれ以上の情報は無いが、極めて大規模な掘立柱建物と神社や伝承地とが合致する例は、近隣では森脇遺跡（上野市比自岐）でも見られるものであり[6]、全く無縁のものとすることはできない。

B5区西半からB7区にかけての掘立柱建物群は、規模はあまり大きくないものの、比較的密集して確認された点で注目できる。B７区ＳＢ591（『嶋抜』Ⅲ）に見られる布堀状柱掘形はA3区SB106とも共通し、両者が無縁ではないことを示唆している。この付近からは「隻」「申」のほか、「田井」などの墨書土器が出土しているのが特徴的である。

③はB５区およびB２区西部で見られるものである。良好な遺物が無いので、やはり正確な時期は分からない。しかし、B５区ＳＢ579（『嶋抜』Ⅲ）

付近からは平安時代に入る時期の遺構が集中しているのに対し、Ｂ５区ＳＢ578（同）付近から出土した圏脚円面硯やB2区SB577（同）出土の須恵器からは奈良時代頃と見ることができるので、③群は異なる２時期のものが含まれる可能性を考えたい。

以上のことから、①～③群の掘立柱建物については、概ね①→②・③の順に方位の異同があると考えられる。この中で最も棟数の多いのが②群の真北方位を採る時期であり、島貫Ｅ期の中心的な時期と見てよいであろう。

ｂ　墨書土器「田井」と地域開発について

古代（島貫Ｅ期）の出土遺物のうち、とくに特徴的なものとして「田井」と書かれた３点の墨書土器がある。ここではこの墨書が示す意味について、とくに地域開発の視点から眺めてみる。

三重県下において、明確に「田」と記される墨書土器は少ない。その中で、森脇遺跡（上野市比自岐）の「田中」と柚井遺跡（多度町柚井）の「田生」は注意される[7]。

森脇遺跡は飛鳥・奈良時代を中心とする遺跡で、県営圃場整備事業および市道改良事業によって都合４次にわたる発掘調査が行われている。遺跡は丘陵南裾部にあたり、遺跡の南部には比較的広い低地部が広がっている。とくに注目される検出された遺構は、当該時期の計画的に配置された掘立柱建物群であり、この遺跡が通常の古代集落ではなく、当時の中央権力とも密接に結びついていることを物語っている。

森脇遺跡からはこの他に「大井」や「千倉」と書かれた墨書土器が多く、これらの存在から当遺跡が遺跡南部に広がる低地部の土地開発拠点として位置づけることが可能である。おそらくは古代的開発のなかでの「宅」に近い存在として評価できる。

柚井遺跡は丘陵東裾部に立地しており、その環境は森脇遺跡と共通する。ここからは「田生」以外にも「大富」「加福」「平安」「大善」「福多」などの吉祥句を記したものや、「宅安」「井上」などの土地や開発に関連すると考えられる墨書土器がある。

これらの事例は奈良時代後期から平安時代後期にかけてのものであり、雲出島貫遺跡で出土した「田井」を含め、いずれも地域開発に関する見地から考察が可能と考える。柚井遺跡についてはその実態が不明であることが残念ではあるが、森脇遺跡・雲出島貫遺跡に共通するあり方として、大規模な掘立柱建物群が存在する遺跡であること、緻密な暗文を施すような精錬された土師器群が認められること、などがある。当時の地域開発の状況は明確にはできない部分が多いものの、これらの遺跡状況を踏まえると、中央権力の影響ないしはそれとの結びつきをある程度密に有した存在を考えることができる。そして、平地内の微高地、あるいは丘陵裾などのような可耕地に近接したやや安定性のある地に、彼等の居住域ないしは拠点を求めることができよう。

さて、当時の地域開発主体としては郡司・郷司層が考えられており、彼らは次第に「中央国家権力から離れて私的豪族的側面を」強めるとされている[8]。雲出島貫遺跡に即して言えば、当地が『倭名類聚抄[9]』記載の「嶋抜郷」であることや、嶋抜郷の戸主が一志君の族祖父であったとする『正倉院文書』の記載[10]から、当遺跡周辺が一志郡内でも極めて重要な地として認識されていたものと考えられる。したがって、島貫Ｅ期における当遺跡に対し、郡司層が関与していたであろうことは充分考えられる。

しかし、『嶋抜』Ⅱでも触れたように、11～12世紀代の当遺跡発では、中央権力との関係は薄れるどころか却って濃くなっている部分も見られる。すなわち、古代における地域開発の主体者は、能動的かどうかは分からないまでも、中央権力との結びつきを保っていたのではないかと推察される。律令制を受容し、耕地開発に対してある意味で理想を貫こうとした当時の国家動態を鑑みれば、地域開発とはいえそれと無縁ではないであろう。

さて、この遺跡では、奈良時代末期に「田井」の墨書が出土して以後、12世紀後半頃の段階には「田中」の墨書が見られる。両者の間には約400年の開きがあるとはいえ、同じく地域開発を目したものと考えられる。「田井」が郡司関連の開発であるとすれば、「田中」は荘園開発に伴うものと見られる。当地においてはいずれも耕地開発、とくに田圃の開発に邁進した時期を象徴する遺物として評価できると考える。

4　中世前期（Ｆ期）の遺跡動向

中世前期（島貫Ｆ期）の動向については、その中心となるＢ５～７区（第２次調査）の報告を行った『嶋抜』Ⅱで触れた。概述すると、この時期にはＢ６区南部からＢ７区にかけて、11世紀後半頃には「居館」が存在し、そこからは質・量ともに優秀かつ膨大な遺物が出土している。「居館」外縁を画する人工流路がＢ５区およびＢ６区に見られた。第３次調査では、Ｂ４区で人工流路ＳＲ337の北側延長部分を確認した。

ここでは、第３次調査区で確認したことを中心に、補足的に触れていく。

a　「居館」北東の微高地について

Ｂ２・５区では、島貫Ｆ３期に相当する時期の井戸2基（SE513・567）と土坑1基を検出している。土坑ＳＫ507埋土には焼土・炭が含まれており、この付近には小形のピットも見られることから、この土坑は建物に伴う土坑である可能性は高い。井戸ＳＥ567は縦板組の側枠とその最下段内側に横板組を持ち、底を抜いた曲物２個体を井筒としている。ＳＥ513の構造物は破壊されていたが、正方形の掘形からは方形の側枠が想定され、そして埋土内から曲物片が出土していることから、ＳＥ567とほぼ同様の構造を想定してよかろう。これら２基の井戸は、やや小形ではあるものの、「居館」部分に見られた井戸ＳＥ233・320と基本的に同じ構造である。

fig.93・94に見るとおり、この付近は畠地として利用されていた場所である。前述のように、弥生時代以降、周囲よりはやや高い微高地であったものと見られる。この状況は中世に至っても存続していたものと考えられる。そして前述の土坑・井戸の存在によって、この付近には当該時期の居住域が存在していたと考えてよかろう。

さて、井戸に見られる「居館」部分との規模の差から、Ｂ２・５区微高地の居住者層は、「居館」に従属的な集団を想定できる。具体的には「在家」と見なすことができると考える。なお、この「在家」集落は人工流路ＳＲ３３７の東側に位置している。「居館」の形成主体を木造荘の中核的人物と考えた場合、この「在家」集落はまさに嶋抜地内へと進出したものとして把握することとなる。当該期における荘園経営の拡がりを考えていくうえで示唆的な資料といえよう。

おわりに

以上、雲出島貫遺跡の３次にわたる調査を通じて明らかになったこと、あるいはそこから新たに発生した課題などについて記した。

雲出川流域が持つ豊かな歴史は、この遺跡の調査によって改めて認識できるようになったといってよい。これまで調査対象となることが少なかった低地部の状況が、丘陵地以上に豊かなものであることは、この調査からも明らかであろう。

なお、ここで記したことは、時間的な制約のなか、必要最小限のことでしかない。今後、この資料をもとに、検討を深める必要がある。

この遺跡の豊かな情報は、開発による遺跡の消滅という多大な代償を支払って得たものである。「この遺跡を残す手だては、本当に無かったのであろうか」と、今も自問自答しているが、答えは出ない。ただ、少なくともこうして得た遺跡の情報を基に、我々自身が未来へとつながる歴史像を描かなければ、消失した遺跡が報われないのは確かである。

最後にあたり、これまでこの遺跡に関わっていただいた多くの方々に対し、改めて心からの御礼を申し上げます。

＜註＞

(1) 伊藤裕偉「中世前期の「屋敷」と地域開発」(『ふびと』53 三重大学歴史学研究室　2001年)

(2) 中世後期の地割については、『嶋抜』Ⅰにおいて「当地には条里地割とは無縁の地」であるという前提のもと、真北地割が見られるものとして扱った（ｐ127左段9～19行）が、地籍図の照合を再度行った結果、中世後期の地割は地籍図の状況に近似たものとして解釈する方が妥当という結論に達した。また、条里型地割も部分的ながら存在していると考えるに至った。自身の不明を恥じつつ、ここに訂正する。

(3) 鈴木敏雄「考古学からみた一志郡」(『一志郡史』下巻 1955年)

(4) 古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(5)『伊勢路見取絵図』(東京美術　1985年)

(6) 森脇遺跡周辺には、「たれその森」「あはれその森」という信仰の対象となった森があり、西行や後鳥羽院が詠った和歌の題材になっているという。前川依久雄・田中秀和『森脇遺跡

発掘調査報告』（1995年　上野市遺跡調査会）

(7) 三重県内の墨書土器については、斎宮歴史博物館編『眠りから覚めた文字たち』（企画展図録　1997年）に集成がされており、それを活用した。森脇遺跡については、森川常厚氏からご教示いただいた。

(8) 永原慶二『日本中世の社会と国家』（日本放送出版協会　1982年）p 39

(9) 『諸本集成倭名類聚抄』外編（臨川書店　1995年）

(10) 『正倉院文書』所収「西南角領解？」（『大日本古記録』,編年之13）この史料は、年欠であるが、当史料編者は天平勝宝9（757）年と推察している。

付編１

古墳時代前期の雲出島貫遺跡

川　崎　志　乃

１．雲出島貫遺跡の古式土師器

(1) はじめに

弥生時代後期から古墳時代前期のいわゆる古式土師器の研究は、『纒向』[1]以来、列島各地において極めて精緻な成果が数多く提示されている。

ここ東海地方では、大参義一氏により後期弥生土器から古式土師器に至る編年が確立され、Ｓ字状口縁台付甕に関しては変遷だけでなく、その波及に関しても言及された[2]。また、安達厚三・木下正史両氏は飛鳥地域出土の古式土師器の変遷を追う中で、Ｓ字状口縁台付甕に注目して近畿地方と東海地方の接点を見いだした[3]。東海地方の資料として、伊勢地方出土資料が使われている点でも注目される。

伊勢湾西岸域の土器相としては、弥生時代の集落として有名な納所遺跡の調査により、弥生時代前期から古墳時代までの大まかな流れが把握された[4]。

また山城遺跡の調査において、山田猛氏は当該期の伊勢湾岸の土器群を広域様式として欠山式土器と認識し、欠山式土器の中で小地域ごとに様相が異なることから、欠山様式伊勢湾西岸型として山城編年[5]を提示した。廻間編年[6]は近年、東海地方の古式土師器編年として広く支持されている編年であるが、赤塚次郎氏は遺跡の立地する濃尾平野での様相という設定で提示しており、廻間遺跡出土の資料のみを用いていた。そして、その後あらためて濃尾平野全体の資料を検証する[7]という方法を採っている。いずれにしても伊勢湾岸に共通する広域様式があり、その中で地域ごとに様相が異なるという意識で編まれた編年であるという点では両者は一致する。

しかし、当該期の遺跡の検討から、近接した遺跡であっても遺跡ごとに異なる土器様相がみられることがあるという指摘がある。例えば河内平野では、一瀬和夫氏や若林邦彦氏が加美・久宝寺遺跡と美園遺跡の差[8]あるいは中田遺跡群との差[9]を指摘している。特に若林氏は、広域に庄内河内型甕が流通する時期にも関わらず、中田遺跡群から目と鼻の先で中河内に位置する加美・久宝寺遺跡ではそれの占める割合が低いことを指摘しており、極めて重大な問題である。同様に奈良盆地内では、極めて狭い範囲で甕の様相が異なることが小池香津江氏[10]によって指摘されている。これらの指摘は近畿地方での研究成果であるが、各々の遺跡の性格を反映している可能性があり、より従来より狭い地域内での土器様相の相違に注意を払わねばならないことを意味すると解釈できよう。伊勢湾西岸域で現在最も支持されている山城編年の欠点は、資料不足による限界の一言に尽きる。山城遺跡が亀山市に立地する遺跡であること、さほど搬入土器が見られないことは他の遺跡との比較が困難である。また、それが故に伊勢湾西岸各地の資料を用いたため、この地域内の微妙な差を読みとることができなくなってしまった。

上述の事象は雲出島貫遺跡の集落と並行する時期に起こっている現象であり、近畿地方からの搬入土器が実際に遺跡内に持ち込まれていることから、島貫編年は欠山様式雲出川下流域の雲出島貫遺跡の土器様相として認識したい。

雲出島貫遺跡で編年案を編む意味　Ｓ字状口縁台付甕をはじめとする東海西部の土器は太平洋岸沿いを中心に関東地方に搬入されている。中でも、Ｓ字状口縁台付甕は特徴的であることから、各地で抽出された資料が充実している。昨今、雲出川流域は出現期のＳ字状口縁台付甕の出土例が増加しつつあることと胎土分析の結果[11]から、にわかに注目を集めている。出土地点の分布が広域交流に直接結びつくと考えることは短絡的であるが、この地域は雲出川を遡ると大形の前方後方墳群をはじめとする前期古墳が控えている地域である。伊勢湾西岸域では、このように前期古墳が多く分布する水系は他になく、雲出川水系は明らかに突出している。雲出島貫遺跡はその水系の河口部付近に立地することから、当遺跡の土器様相の変化は必然的に注目されるものである。そして実際に、以東地域（ここでは、太平洋沿岸部を中心とする、伊勢湾西岸部よりも東の地域を指す）からの搬入土器が出土しており、太平洋沿岸を舞台

とした交流に関与していたであろうことは間違いない。またこれによって、他の地域との比較が行いやすい。

裏を返せば、これまでに以東地域で散見されてきた土器群はこの地を起点に移動している可能性があり、搬入土器を用いて他地域との接点を見出すことのできるこの遺跡で編年を編むことは使命ともいえよう。

ここでは、『島抜Ⅰ』の形式分類を骨子として改正し、新たに資料を得られた時期を補いたい。一貫して存在する形式はS字状口縁台付甕のみである。高杯は高杯Aが高杯Cに途中から取って代わられるが、これらは連続するものである。高杯Aは弥生時代後期以来の型式変化を追うことのできる稀少な存在であり、その杯端部の形態の変化は壺Cや中形壺Bにも現れる。よって、高杯A・CとS字状口縁台付甕を基軸としたい。

(2) 器種分類（fig.100～105）

高杯A（有稜高杯）（fig.95）

Ⅰ段階

杯部上半部は短く外反する。下半部は内弯してのびる。脚部は長脚で外反する。口縁端部は外面に面をもつ。

Ⅱ段階

最も盛行する段階である。杯部が大形化し、脚部は内弯する。脚部の透孔は3方向だけでなく、上方1ヶ所に透孔を開け、2段にするものもみられる。口縁端部は内面に面をもつようになる。

a型式　杯部上半部は直線的にのびるようになる。下半部は内弯してのびる。

b型式　杯部上半部は内弯し、垂直方向に大きく開く。下半部は短く、直線的になる。脚部は短脚になる兆しが見え始める。口縁端部の形態のみに注目すると、この段階から2系統が並立するようになる。前段階から続く面を持たせ続けるタイプと沈線を巡らせるタイプがある。

Ⅲ段階

脚部の櫛描直線文が省略されるようになり、退化が進む。

a型式　杯部上半部は水平方向に大きく開く。下半部はやや長くなる。

b型式　杯部は小形化し、稜が弱くなる。脚部は直線的になる。

Ⅳ段階

一段と小形化し、脚部は外反するようになる。高杯Cの影響が一段と濃くなり、周囲の遺跡ではこの型式はあまり見られなくなる。

以下は、高杯Aの形態変化を数値に置き換えて、画期の抽出を試みたものである。結果はグラフとして表現した。

fig.97は、杯部器高と脚部器高の相関関係を示したグラフである。fig.96は、外傾指数[12]と上下長指数[13]の相関関係を示したグラフである。外傾指数とは、杯上半部の水平長を高さで割り、100をかけたものである。上下長指数は、杯上半部の長さを杯上下の長さをたした数値で割り、100をかけたものである。両グラフともにⅡ段階b型式を境に変化が起こっており、それまでとは全く異なるデータが出ている。これはⅡ段階b型式が過渡期となり、Ⅲ段階には新たな形を造り出していることを反映していると考えられる。そして、この画期の発端となっているのは、近畿地方からの搬入品が以後に見られることから、庄内式の影響と考えられる。

高杯B（椀型高杯）

杯部は椀状を呈する。脚部は、細い脚上部から大きく広がる。第3次調査76と第1次調査661が相当する。この2点は、前者がSD532最下層からの出土であり、後者がSH73からの出土ということから時期差がある。脚柱部の短くなっていくことを読みとることができる。

高杯C

当初は、近畿地方からの搬入品かあるいは、極めて精巧に模倣した土器であるが、しだいに在地化した個体が登場する。在地化し、高杯Aに取って代わる器種であることから、搬入品の可能性がある個体も分類に含める。

高杯D

近畿地方からの搬入品である可能性がある。杯部は高杯Bと類似するが、脚部は脚柱部をもつ。高杯Cの脚柱部が短くなったような形状である。

脚付土器

脚台付きの壺やいわゆる小形丸底壺に脚台の付く

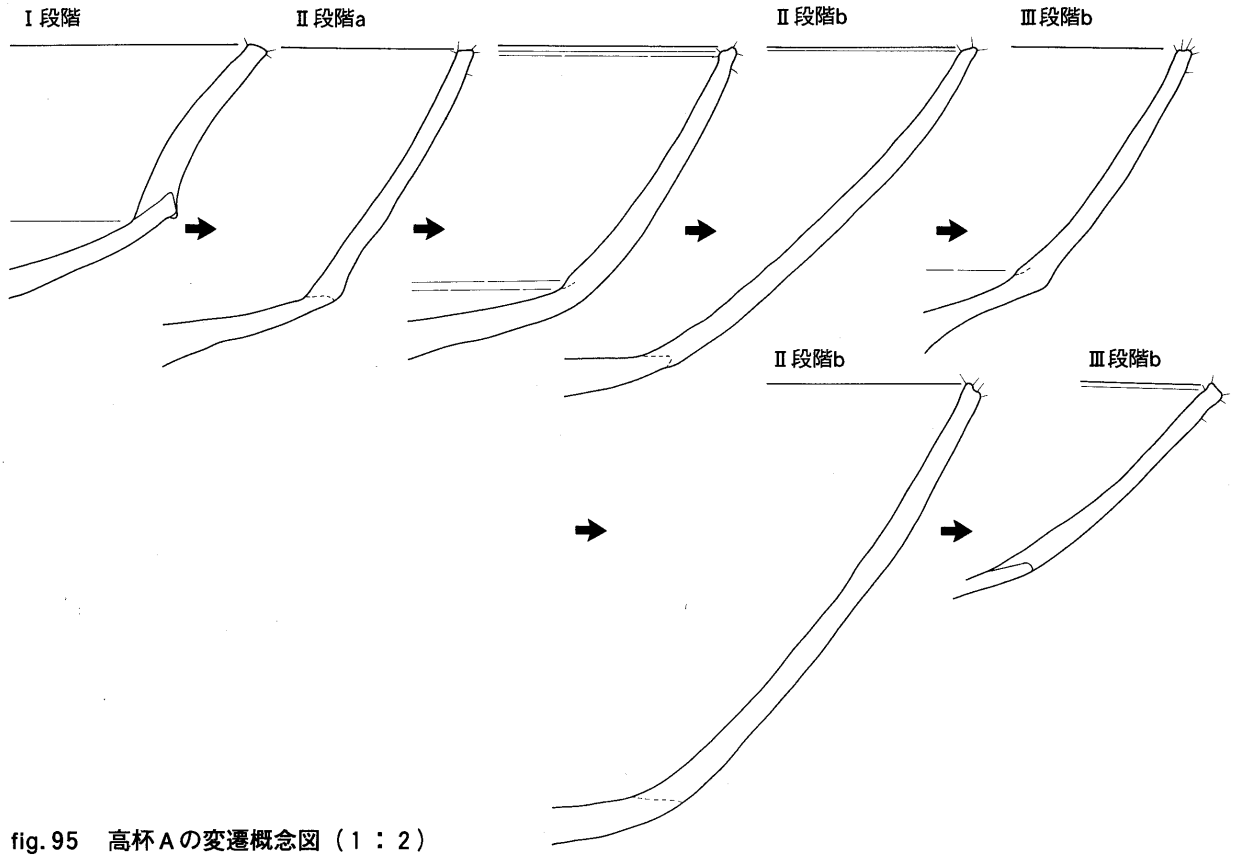


fig. 95　高杯Ａの変遷概念図（１：２）

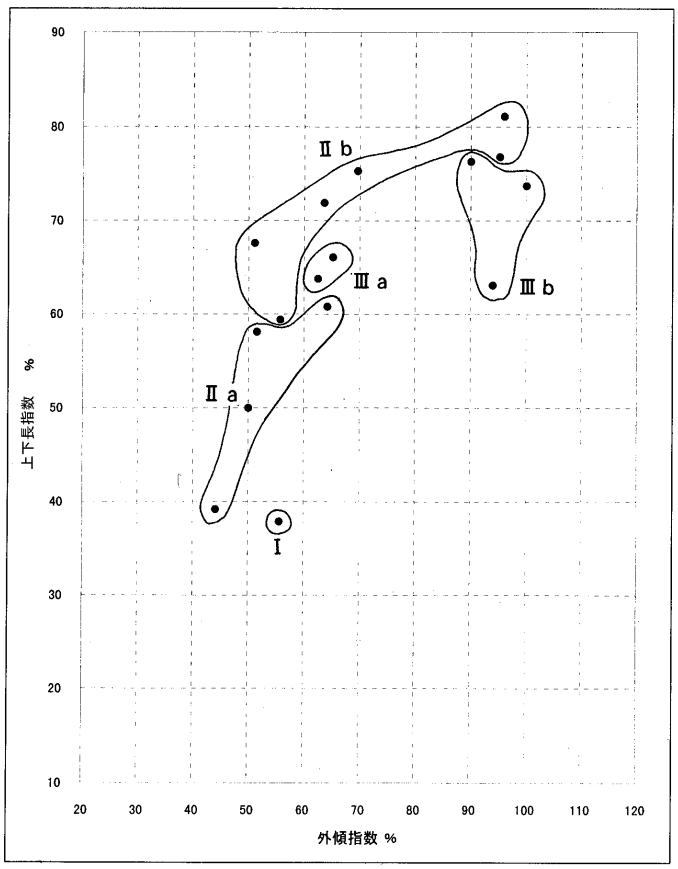


fig.96　高杯Ａの変遷①

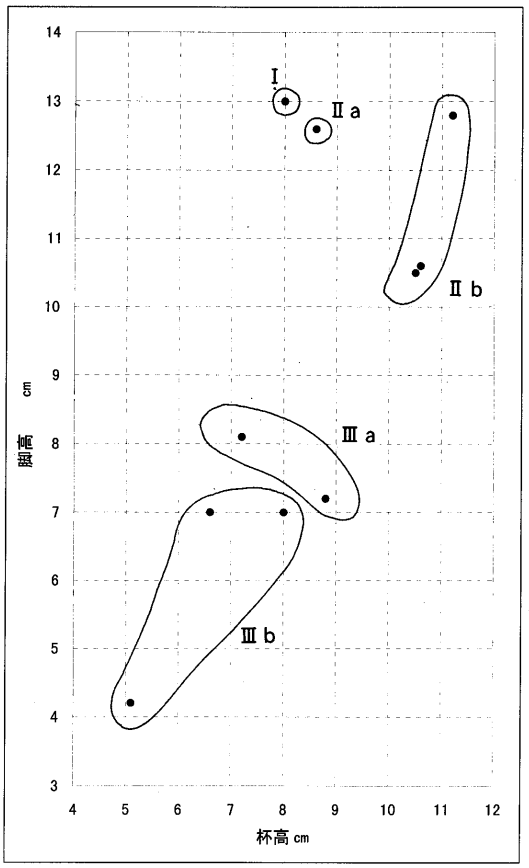


fig.97　高杯Ａの変遷②

ものやワイングラス型高杯を含む低脚高杯などを一括する。これらの土器の脚部は、有稜高杯が長脚から短脚へと変化していくのに対し、一貫して短脚である点で共通する。また、櫛描直線文や貝殻腹縁による刺突文により加飾されることが多く、脚だけでは器種の区別が付かない程に類似する。

脚付土器A（いわゆる低脚高杯の一部）

杯部の形態によって3種類程度が見られる。ただし、高杯B（椀型高杯）はそれ自身で独自の変化をすることや、脚部の形態の点で他の脚付土器と一線を画することから含めない。

脚付土器B（脚台付き壺）

口縁部径より体部径が上回る。

脚付土器C（脚台付き小形丸底壺）

口縁部径が体部径を上回る。

小形坩（いわゆる小形丸底土器）

第一次調査では、いわゆる小形丸底壺の系譜を引く個体を含めて、形態的特徴から小形鉢と分類した。しかし実際には、口縁部径に対し器高が高く変化していくことから、形態的特徴による分類では小形鉢から小形壺に移行することになる。

そこで一次概念を小型坩とし、二次概念以下に個々を分類することにする。

小形坩A（小形鉢）

a いわゆる小形丸底壺に含まれるものであるが、当地では平底状を呈している。

b 有段鉢

小形坩B（小形壺）

a 小形坩Aaと同様に、いわゆる小形丸底壺に含まれるものであるが、当地では平底状を呈している。小形坩Aaの形骸化したものが多い。

b 旧小形壺Aとしたもの（第一次調査43～45）であり、小形坩Abと同様の口縁部をもつものである。口縁部のみの出土であるが、その欠損状況から鉢状でなく壺状の形態を採ると考えられる。

器台

受部の形態から、以下のように分類することができる。

器台A

受部は脚部から広がり、端部に面をもつ。

器台B

受部は屈折し、大きく広がる。受部に透孔をもつこともある。

小形器台

器台と同様に、受部の形態から分類することができる。

小形器台A

口縁部を強くヨコナデすることにより、外反させる。器台Bが小型化したものと考えられる。

小形器台B

受部は椀状を呈する。

小形器台C

口縁端部をつまみ上げる。受部と脚部は貫通しない。近畿地方からの搬入品の可能性があるが、在地化する。

小形器台D

受部は内弯させる。受部と脚部は貫通する。近畿地方の土器の在地化したものと考えられる。

上記の中で、小形器台A・Bは受部と脚部が貫通するか否かにより細分することができる。受部に孔が空いているか否かという点は、器台という機能性に弊害をもたらさないことから、この点は二次概念として分類細分に用いることにする。

壺A（広口壺）

壺の組成の中で、主体を占めるものである。

板状工具や櫛状工具による刺突文や直線文で加飾されることが多く、頸部突帯をもつのもこの種類である。刺突文は列点文を基本とし、交差させたりあるいは羽状に刻むということもある。口縁部の形態から、2種類に分類することが出来る。

a 短い頸部をもつもの。

b 口縁部は頸部から広がり、口縁端部に面をもつもの。bの中には、加飾が少なくハケメ調整で仕上げられている一群がある。この一群はb'としておく。

端部の拡張させる形態により、以下のように細分することも可能である。

α 垂下させるタイプ。

β 上下方向に拡張させるタイプ。

γ 上方にのばすタイプ。

端部の面の向きは、主に上方を向くものと垂直に

向くものがある。全体の流れとしては、前者から後者へと移行するが、簡単に時期差と割り切ることも出来ない。

壺B（複合口縁壺）

第一次調査では、頸部の直立する型式を積極的に見い出しにくかったが、新たに確認できたことから設定したい。

a 頸部が直立するタイプである。

b 壺A（広口壺）の上に二重口縁部が付加される型式であり、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。

壺C（直口壺）

口縁部の形態変化が、高杯や中形壺Bなどの口縁部の型式変化と連動していることから、一次概念としては、内弯口縁壺を含めることにする。つまり、第一次調査で内弯口縁壺と直口壺として分離していた旧C（内弯口縁壺）と旧D（直口壺）を統合し、下位概念として細分することにする。

a 大形壺でヘラミガキによって仕上げられる。この中で、直口縁になる個体を壺Caa、内弯口縁になる個体を壺Cabとする。

b 壺Ｃａに類似するが、大きさが小振りである点やハケメ調整で仕上げられている事例しか認められない点から、独立させる。

壺D（受口状口縁壺）

受口状口縁甕の口縁部形態と類似する。脚台部が付加されている。

壺E（短頸壺）

口縁部は短く、外反する。端部は丸く収められている。

壺F（パレス壺）

量的に少ないが、垂下口縁から上方に向かっていき折り返さなくなるいわゆる柳ヶ坪型壺へと型式変化を追うことが出来る。羽状文と赤彩による加飾が特徴的なものである。棒状浮文の有無や山形文あるいはアーチ状の刺突文が施文されるという点では個体差が大きく、規則性が弱い。濃尾平野からの搬入品の可能性がある土器もある。

中形壺

器高が20～30cm程度であり、容量の少ない壺を一括する。

個体差が大きい可能性があり、単独では型式変化を追うことが困難である。しかし、口縁端部の形態変化に注目すると、高杯のそれが参考になる。

中形壺A

口縁部高が体部高よりも短く、体部最大径が中央もしくはやや上方にあるものである。

中形壺B

口縁部高と体部高は、同等あるいは口縁部高が長い。体部最大径は中央にある。口縁部の形態は、高杯Aや壺Ｃａと共通する。

中形壺C（瓢壺）

口縁部高は特に短く、体部最大径が下方にあるものである。口縁部や肩部に、貝殻腹縁による刺突文で加飾されることがある。

甕

口縁部の形態から分類する。大きくは、受口状口縁甕・く字状口縁甕・布留形甕に分類できる。

受口状口縁甕A（S字状口縁台付甕）（fig.98）

S字状口縁台付甕とその前身となる土器である。甕の主流を占める型式であり、単独で型式変化を追うことが可能であることから、高杯Aと共に編年案を作成する基軸となる。

仮A段階（0類[14]）

器壁の薄い台付甕であり、極めてS字状口縁台付甕に類似した胎土である。

頸部がゆるやかに屈曲し、口縁部は直立に近い。口縁端部は水平に近い角度で、丸く収まる。

製作技法は、体部下半に擬口縁を持つ点で、共通する。

器壁調整には、S字状口縁台付甕に独特のハケメを用いている。また、ナナメハケ＋ヨコハケ＋押し引き施文という次段階のS字状口縁台付甕と共通する施文を用いており、次段階に肩部の押し引き施文が省略されると考えれば、この段階はS字状口縁台付甕の前身ということができる。また、体部上半部に直線文と刺突文が交互に配されている一群があり、これの形骸化したものと捉えられる。この施文は、確実に櫛状工具が用られている。

脚台部は折り返しがなく、底部に砂が充填されており、左上がりの連続しない装飾的なハケメが特徴的な類が相当する。

Ⅰ段階（A類）

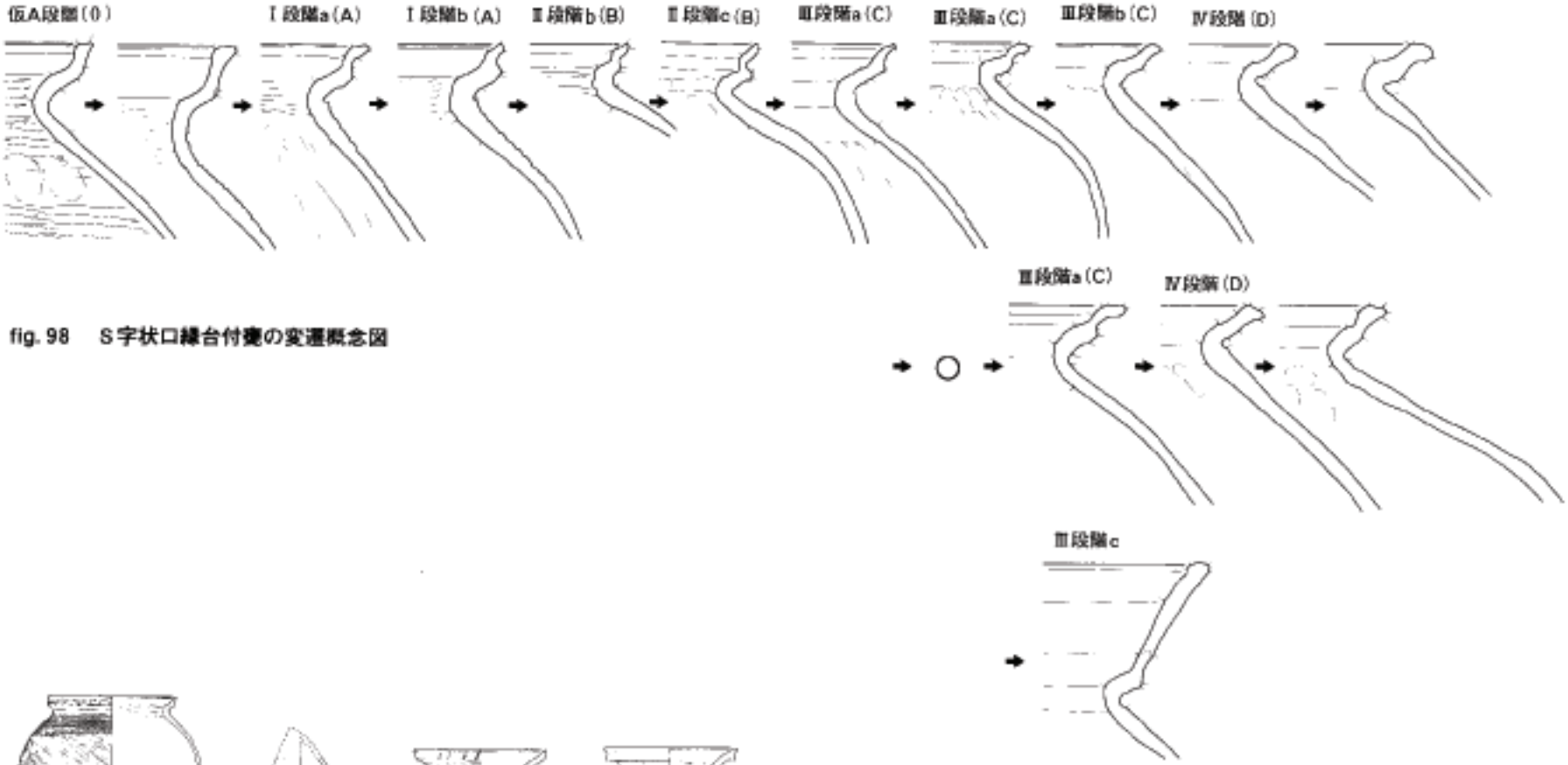


fig. 98　S字状口縁台付甕の変遷概念図

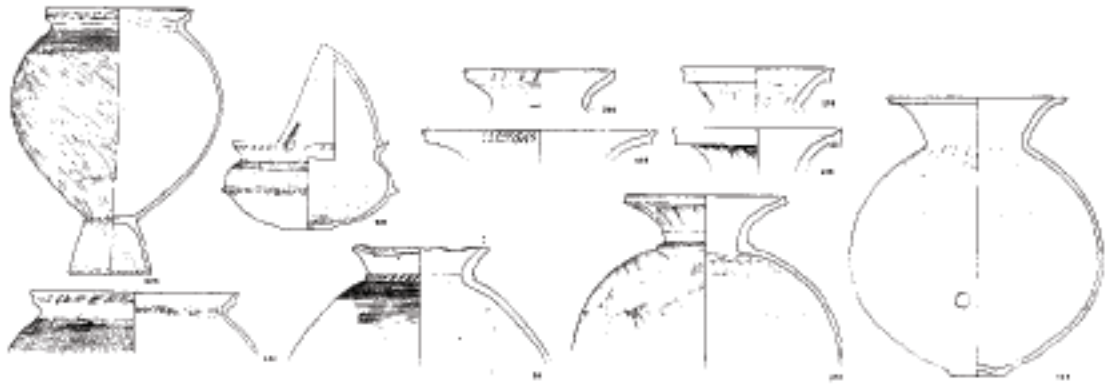


fig.99　S字状口縁台付甕と類似する土器群

口縁端部に強いヨコナデが施されることで、端部内面に傾斜するシャープな面をもつようになる。また、口縁部のヨコナデが強いために頸部が抑えられ、屈曲の度合いがきつくなる。よって、口縁部の断面が「S」字状を呈するようになる。

a型式　肩部の押し引き施文が省略される。

b型式　内面調整の点で、頸部にハケメを残すのみの仕上げとなる。

Ⅱ段階（B類）

体部のハケメ調整・脚裾部の折り返し・底部の砂粒充填が定型化する。

a型式

b型式　口縁部の押し引き施文が省略されるようになる。

c型式　頸部内面のハケメが形骸化し、工具ナデが用いられるようになる。頸部外面に口縁部から独立したヨコナデが施されるようになる。

Ⅲ段階（C類）

口縁部の立ち上がりが弱くなり、外側に向かって広がるようになる。それゆえに、口縁端部の面は上方を向くようになる。ヨコハケが頸部から離れる（独立ヨコハケ）。口縁端部の形態に注目すると、この段階から二系統が並立する。

a型式

b型式　口縁端部のヨコナデが弱まることで、面がなくなる。頸部外面のヨコナデが沈線に形骸化する。

c型式　S字状口縁台付甕の口縁上に粘土を追加し、口縁部をのばす。大型甕に限られている。

Ⅳ段階（D類）

器壁が厚くなり、ハケメも粗雑化する。

a型式

b型式　頸部外面の沈線が省略される。

受口状口縁甕B

器壁は厚い。口縁部は内弯気味に立ち上がる。頸部の屈曲はゆるやかである。刺突および体部上半部の直線文の施文には、板状工具を用いている。

受口状口縁甕C

器壁は厚い。口縁部は外側に向かって立ち上がり、端部が外側に面をもつ。頸部の屈曲は鋭利である。

受口状口縁甕D

器壁は厚い。口縁部は外側に向かって立ち上がる。頸部の屈曲は鋭利である。刺突の施文には、板状工具を用いている。

く字状口縁甕A

口縁部内外面と体部外面が粗いハケメで仕上げられている。口縁端部はわずかに外面に面をもつ。頸部はゆるやかに屈曲する。極少量ではあるが、一貫して確認される。

く字状口縁甕B

いわゆるV様式系甕であり、平底状を呈する。

布留形甕

近畿地方からの搬入品もしくは精巧に模倣されたものから、在地化したものまで認められる。どの個体も、体部内面のヘラケズリが頸部直下にまでおよんでいない点は共通する。体部上半部に刺突文の見られるものも確認されている。

小形甕

甕には通常の大きさの個体以外に、僅か十cm足らずの小形品がある。煤が付着しておらず、煮沸に使用されたとは考えられないが、ミニチュア土器と割り切れない程に精巧に造られている。

鉢

量的に少ないために、存在を確認するに留める。

鉢A

体部と口縁部の境を明瞭にもつもの。ヘラミガキで丁寧に仕上げられている。

鉢B

体部が上方に向かって広がり、頸部がないもの。口縁部は片口状になる。

手焙形土器

手焙形土器の形態分類は、研究史上、鉢部口縁の形状から細分されていることから、これに倣って分類する。

手焙形土器A

S字状口縁を有する鉢部に覆部が付加される。

手焙形土器B

受口状口縁を有する鉢部に覆部が付加される。

(3) 編年試案（C期）（fig.100～105）

高杯A・CとS字状口縁台付甕を基軸とし、一括資料を中心に変遷を概観する。

島貫Ⅰ期

高杯AはⅠ段階、S字状口縁台付甕は仮A段階に相当する。S字状口縁台付甕仮A段階の土器には、体部上半部に直線文と刺突文が交互に配されている一群があるが、これの形骸化がすすむのがこの段階と考えられる。

環濠SD572出土土器の一部が相当する。

甕は、S字状口縁台付甕以外のものの帰属時期が不確定である。しかし、S字状口縁台付甕仮A段階の土器には口縁部と肩部に刺突文が施文されているが、受口状口縁甕B・Dにも同様の施文がみられることから、これらの土器群も同時期に帰属する可能性が高い。

島貫Ⅱ期

器種が多岐にわたり豊富であり、口縁部の内弯化および肥大化する傾向が高杯A・壺C・中形壺Bなどに現れる。加飾性が高い点からも、最も盛行する時期といえよう。

古相

高杯AはⅡ段階a型式、S字状口縁台付甕は仮A段階～Ⅰ段階a型式に相当する。

環濠SD572出土土器の一部が相当する。

手焙形土器AはS字状口縁台付甕でいうⅠ段階a型式に並行すると考えられるものがある。

新相

高杯AはⅡ段階b型式、S字状口縁台付甕はⅠ段階b型式に相当する。

環濠SD532最下層(B2区)・墳墓SD54・墳墓SX475・環濠SD572出土土器の一部が相当する。

高杯Bは細い脚柱部があり、櫛描直線文が巡っている。

壺Ca(903)は口縁端部に沈線が巡っており、高杯AのⅡ段階b型式と共通する。

壺Fはいわゆる柳ヶ坪型壺がみられる。

島貫Ⅲ期

器種が限定され、加飾も簡素化される。近畿地方の土器の影響を受け始める時期である。

古相

高杯AはⅢ段階a型式、S字状口縁台付甕はⅡ段階a～c型式に相当する。

土器溜SZ575・環濠SD532下層(B2区)・竪穴住居SH78・SH96出土土器が相当する。

大和を中心とする近畿地方に系譜を求められる土器が確認される。忠実に造られていることから、搬入品の可能性が高い。小形坩Ab・小形器台C・高杯C・D・布留形甕がある。近畿地方との並行関係は、纒向遺跡辻土坑4下層[15]に並行する。

新相

高杯AはⅢ段階b型式、S字状口縁台付甕はⅢ段階a型式に相当する。

竪穴住居SH73・SH63・墳墓SD55上層・溝SD544出土土器が相当する。

高杯Bは脚柱部が短くなり、脚上部から脚裾部にかけて大きく開く形状をなす。

壺Ca(427)は口縁端部が肥厚する。

前段階に見られた近畿地方出自の土器群の模倣品がみられるようになる。近畿地方との並行関係は、平城宮SD6030下層[16]・纒向辻土坑4上層[17]に並行する。

島貫Ⅳ期

成形が粗雑化し、器壁が厚くなる。

古相

高杯AはⅣ段階、S字状口縁台付甕はⅢ段階b型式～Ⅳ段階a型式に相当する。

土器溜SZ104・SZ57出土土器が相当する。

高杯は主流が高杯Aから高杯Cへと移行する。高杯AのⅣ段階は高杯Cからの影響が大きいが、脚が直線状に開くことや透孔が高杯A以来の大きめの3方向に穿ったものである点から、高杯Aの最終段階に相当すると考えられる。高杯CはⅢ期に搬入されたものが崩れていく。杯部には稜があり、脚部を屈折させる点は維持している。

小形器台はDが見られるようになる。

壺Bbは一次口縁を誇張する類がみられるようになる。

近畿地方との並行関係は、上ノ井手SD031[18]に並行する。

新相

高杯Aはみられなくなる。S字状口縁台付甕はⅣ段階a～b型式に相当する。

環濠SD532上層出土土器の一部が相当する。良好な一括資料に恵まれないことから、表では明確な

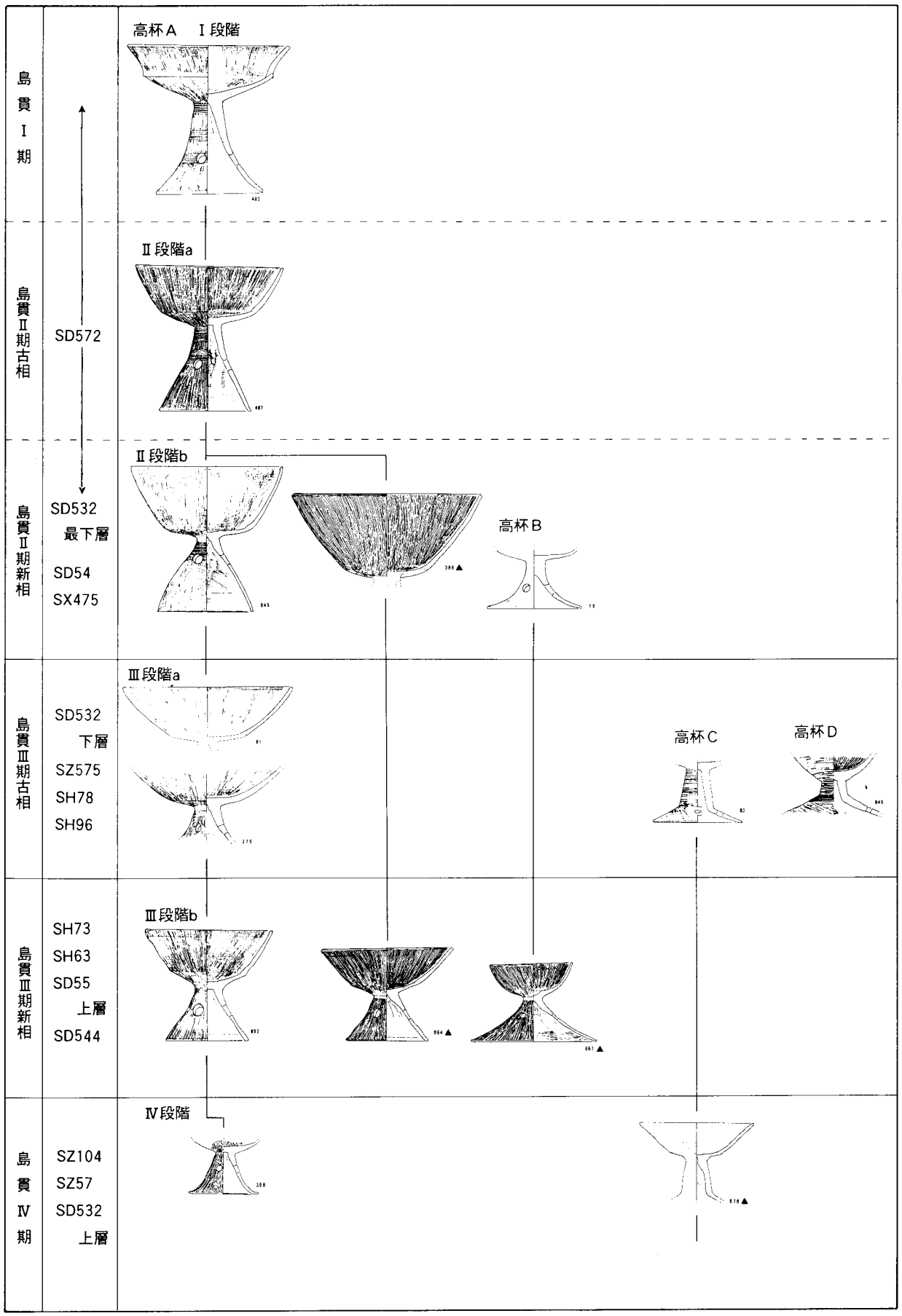


fig. 100　島貫C期土器編年案①（各数字は報告番号と対応する。数字の後に▲の付くものは第一次報告に対応する。）

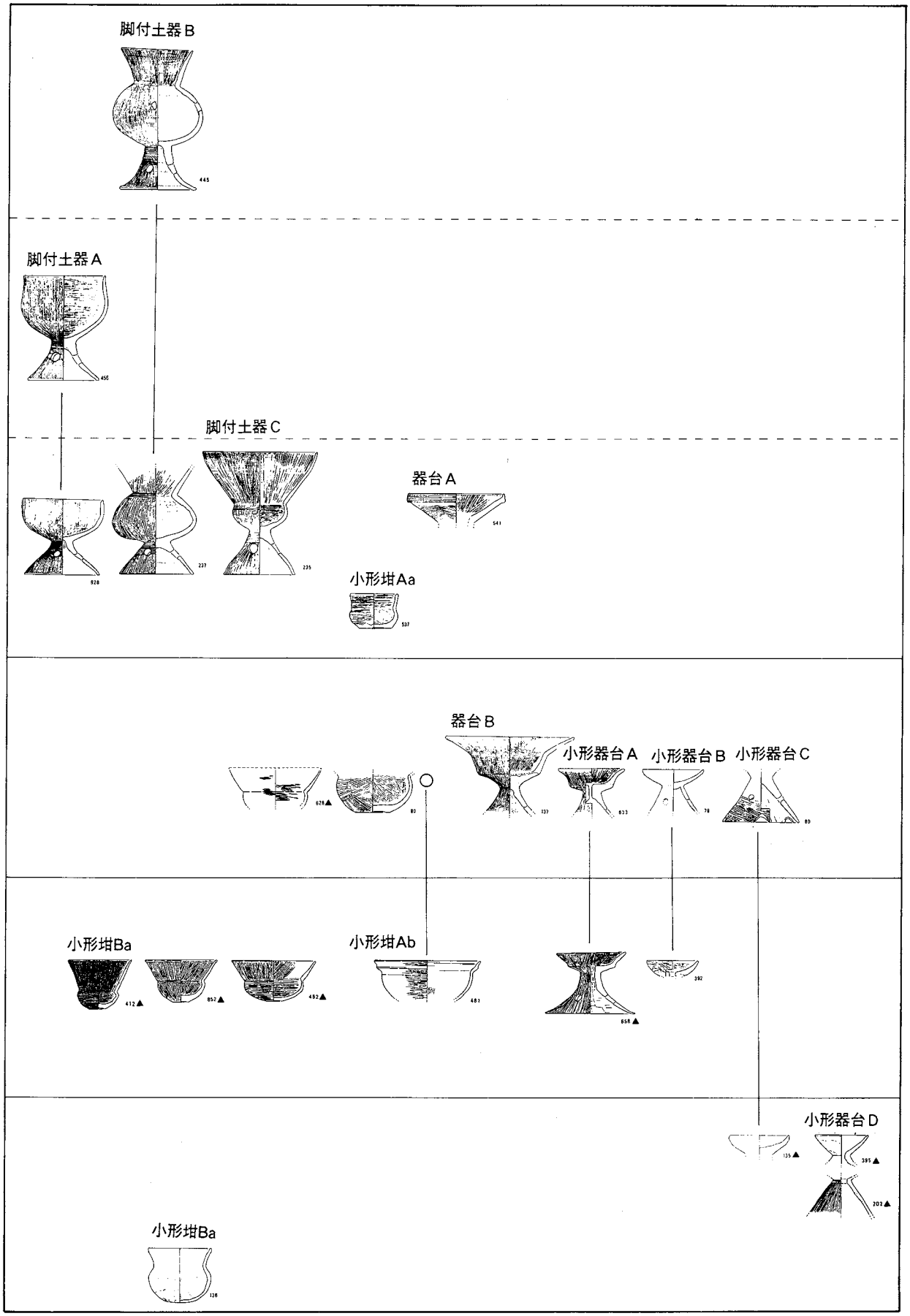


fig. 101　島貫C期土器編年案②

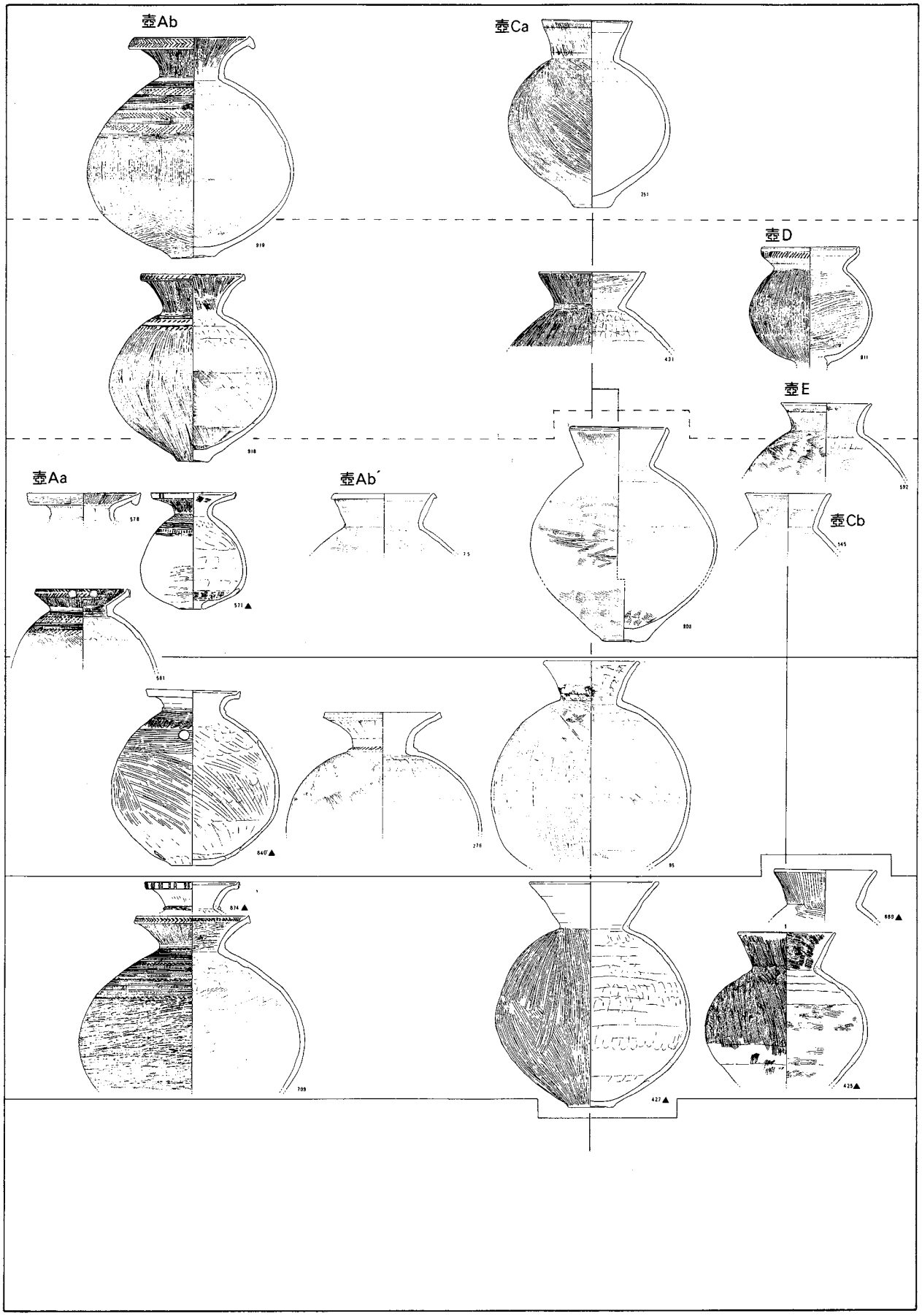


fig. 102　島貫C期土器編年案③

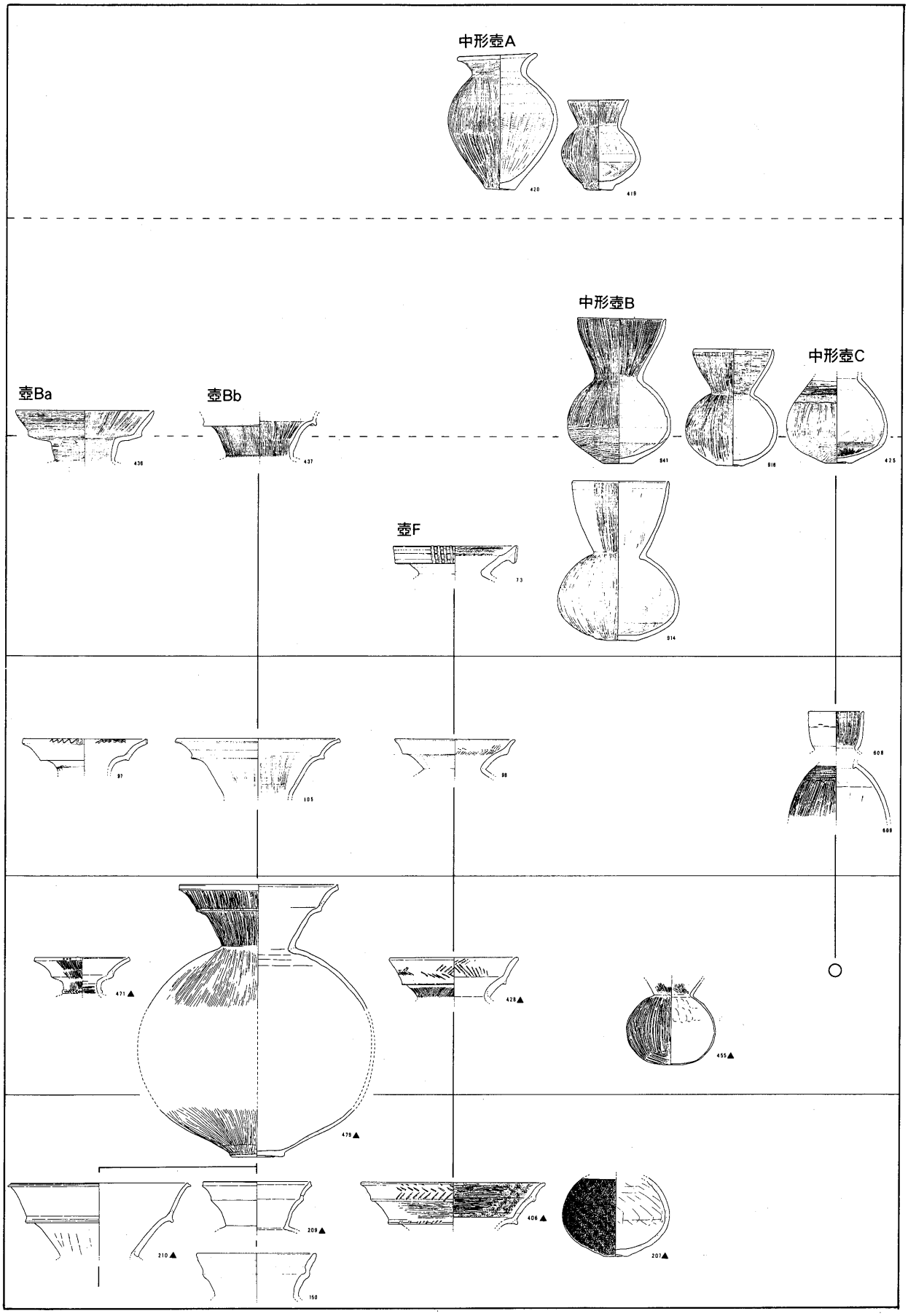


fig. 103　島貫C期土器編年案④

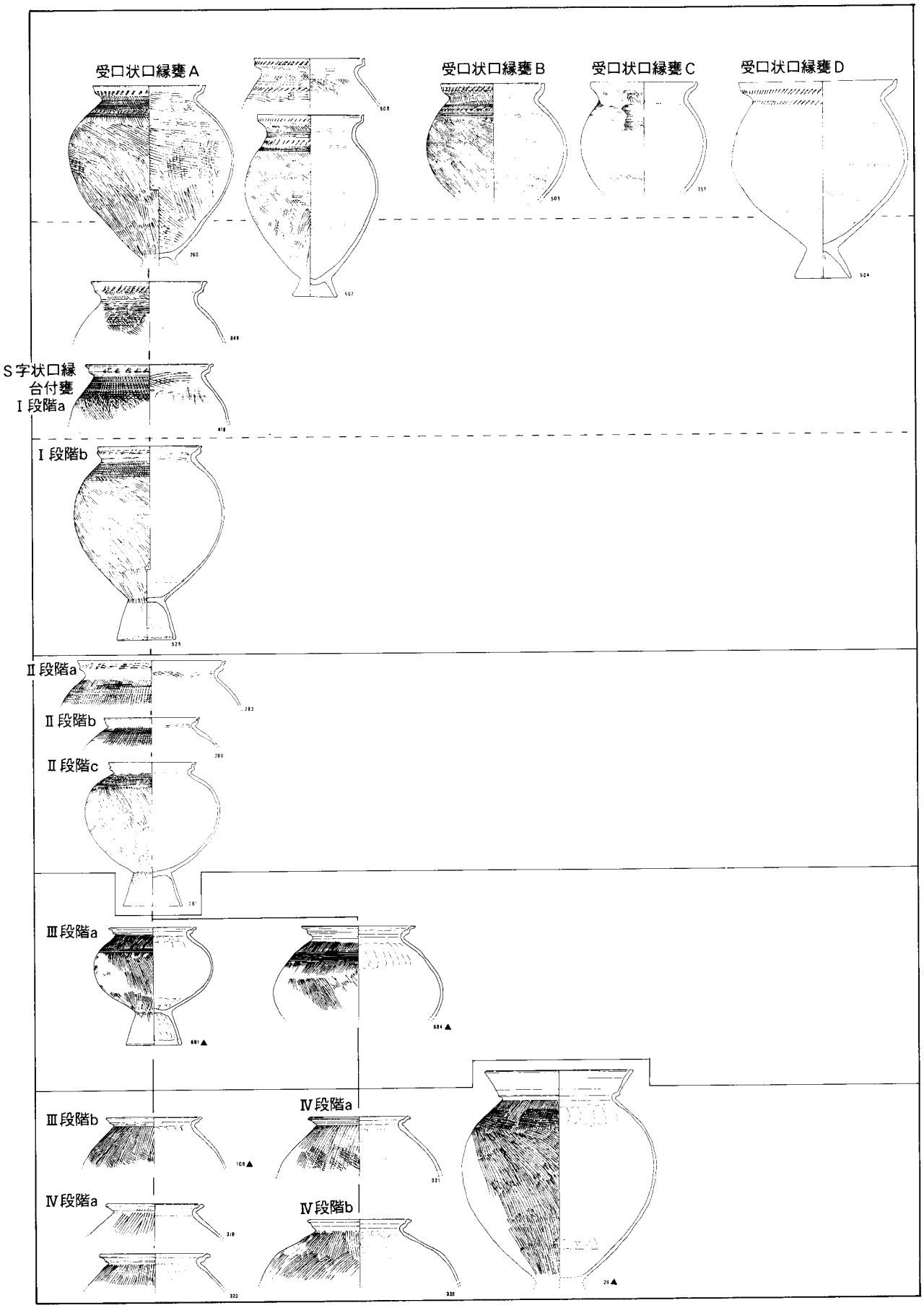


fig. 104　島貫C期土器編年案⑤

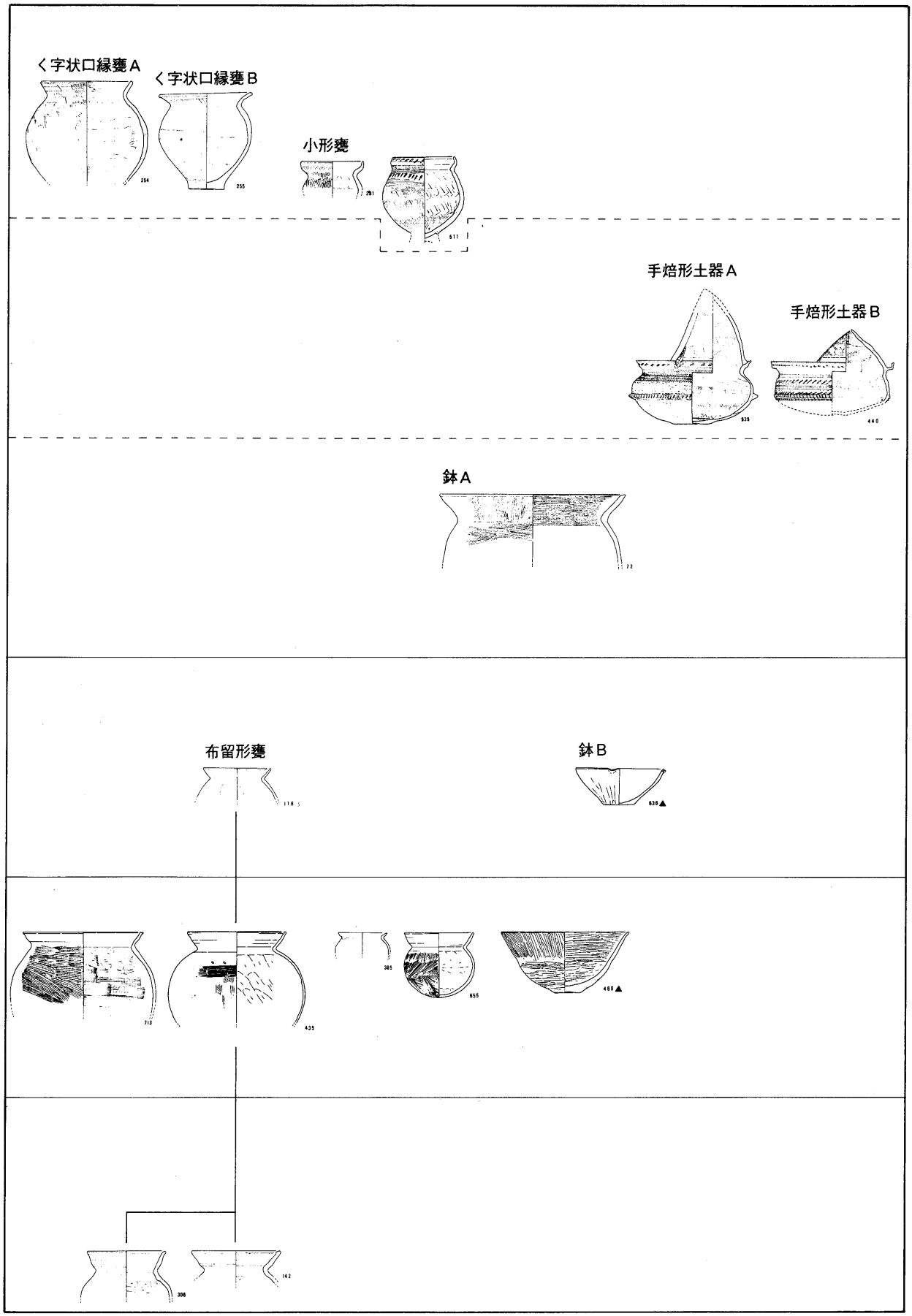


fig. 105　島貫C期土器編年案⑥

線引きを行っていない。

小形坩Ｂａは口縁部高に対し、体部高が高くなる。

壺Ｂｂは擬口縁を持たず、内面のヨコナデにより二重口縁状にみせている。

近畿地方との並行関係は、上ノ井手ＳＥ030上層[19]を中心とする時期に並行すると考えられる。

（４）土器計測分析について（tab.36）

三重県内では、すでに中世集落遺跡を対象にした計測分析が行われている。遺跡の位置や性格による差が分析に反映されており、成果を挙げている[20]。

量的にまとまりのある遺構出土土器を目前にして、土器の器種組成と器種の推移を数字で把握することを目的に、計測作業を試みた。計測方法は中世集落遺跡で計測されている方法を骨子に、宇野隆夫氏[21]や鋤柄俊夫・亀井聡両氏[22]の業績を参照し、独自の作業を試みた。

具体的には、ＳＤ572とＳＤ532出土土器を対象とし、口縁部1/12＝１を基本に計測した。ただし、脚部をもつ高杯や器台は脚上部12/12＝１として計測している。これは、脚上部の残存率が高く、抽出しやすいことから採用した。この時点で、全体の組成を客観的に判断するのは困難となった。しかし、遺構間や遺跡間といった比較に耐えうる点では有効である。また、甕に関しては、底部計測も1/12=1を基本に合わせて行った。これは、平底甕を抽出することやＳ字状口縁台付甕Ｉ段階以降とそれ以前およびその他の甕の比率を大まかに把握することを目的に行った。

中世土器の場合は、土器の器種が少ないことや研究が成熟していることにより組成が明らかである。一方、今回対象にする古式土師器の場合は、多岐に渡る器種が組成しており、なおかつ、当地の組成研究は著しく遅滞している。あらかじめ緻密な分類を確立した上で作業を行うべきであるが、それを行うことができなかったことから、前述の器種分類と齟齬が生じてしまった。この点で取り扱いには、極めて注意を払わなければならないデータとなっている。本来、提示すべき資料ではないかもしれないが、一部の器種に関しては量的な推移などを窺うこともできることから、取り扱いに注意を払うことを前提に掲載することにした。よって、今回の分析は暫定的なものであり、改良を加えていく必要がある。

以下に、若干の成果があった点を個々に記しておきたい。

甕に関しては、平底甕が僅かではあるが一定量を維持していることが分かった。また、台付甕の脚裾部に折り返しのないものからあるものへと量的に推移する点も確認することが出来た。底部を計測したfig.107と口縁部を計測したfig.106を比較すると、口縁部で計測したＳ字状口縁台付甕と底部で計測した折り返すタイプの脚裾部の割合が異なっている。この点から、仮Ａ段階からＩ段階ａ型式にかけては完存する資料が乏しいが、脚裾部に折り返しがない可能性が高いと考えられる。

器台では、小型化する点を見ることができた。

（5）Ｓ字状口縁台付甕と類似する土器群（fig.99）

Ｓ字状口縁を有する土器には、手焙形土器がある。胎土および外面調整においても共通する。手焙形土器を網羅的に研究した高橋一夫氏は、「く字状口縁」をＡ類に、「受口状口縁」をＢ類に分類し、この両者を骨子とした[23]。しかし、東海地方を中心に「Ｓ字状口縁」を有する手焙形土器が存在する。図上では「Ｓ字状口縁」を有するものと「受口状口縁」を有するものと区別が困難であるが、擬口縁をもつ製作技法やハケメの方向および頸部内面にハケメ痕跡を残すことなどＳ字状口縁台付甕との共通点は多分に見られる。前二者は鉢形土器としても存在するが、「Ｓ字状口縁」を有する鉢という器種は現状では見かけられない。しかし、鉢形土器という器種に限らず、口縁部だけに注目すると、甕の分類での「く字状口縁」「受口状口縁」「Ｓ字状口縁」を有する文化圏にそれぞれ対応する形で、各口縁を有する手焙形土器が存在していることから、「Ｓ字状口縁」を有する手焙形土器を新たに設定する必要性があろう。

壺には、Ｓ字状口縁を有するものが確認できないが、596は口縁部を直立させ端部に面をもたせる点で手法的にも共通する。また、胎土および外面調整において共通する（244・99）や胎土のみ共通する（576・438・276・104）などがある。104は底部に砂の充填が見られる点でも共通する。

（６）底部に充填のある土器

壺や台付甕の底部に粘土を充填している個体が散

器種			口縁部計測					底部計測					
			SD572	SD532最下層	SD532下層	SD532上層	SD532	SD572	SD532最下層	SD532下層	SD532上層	SD532	
壺	大形	広口壺	50	59	197	38	14						358
		直口壺	55	3	67	17	23						165
		短頸壺	0	4	14	3	6						27
		大廓式	0	0	11	1	1						13
		関東系	0	0	1	1	0						2
		受口状口縁	3	1	2	0	2						8
	中形	壺	58	24	15	8	6						111
		脚付土器B	35	0	0	1	0						36
		脚付土器C	11	0	0	0	0						11
	小形	坩?	5	0	11	1	2						19
		小形丸底壺	0	0	0	4	0						4
鉢	大形		0	1	0	0	0						1
	中形		10	0	0	0	0						10
	小形		4	2	3	3	4						16
	籠目土器		0	1	0	0	0						1
	甑		0	0	1	0	0						1
手焙り形土器			4	3	3	1	1						12
甕	受口状口縁甕	A	41	4	5	0	1						51
		B・D	38	3	1	0	1						43
		C	11	1	0	0	0						12
		その他	3	0	0	0	0						3
		小形	1	0	0	0	0						1
	S字状口縁台付甕		32	70	229	133	54						518
		小形	0	6	15	5	1						27
	く字状口縁甕		29	15	23	0	1						68
		小形	0	0	3	0	0						3
	内弯口縁甕		4	0	0	0	0						4
	近畿V様式	タタキ甕	4	0	0	0	1	12	24	12	9		62
		小形	1	0	0	0	0						1
		ハケ甕	6	0	0	0	0						6
	布留形甕		0	1	0	1	2						4
		小形	0	0	2	0	0						2
	台付甕	折り返し無	0	0	0	0	0	176	98	127		9	410
		折り返し有	0	0	0	0	0	25	62	193	97	50	427
高杯			74	64	108	23	21						290
器台	大形		1	2	0	0	0						3
	小形		0	1	6	0	2						12
		近畿系	0	0	1	0	0						1
ミニチュア土器			1	0	3	0	0	24					28
			481	265	721	243	143	237	184	332	106	59	2,771

tab.36　土器計測表（高杯・器台以外は1／12＝1として計測）

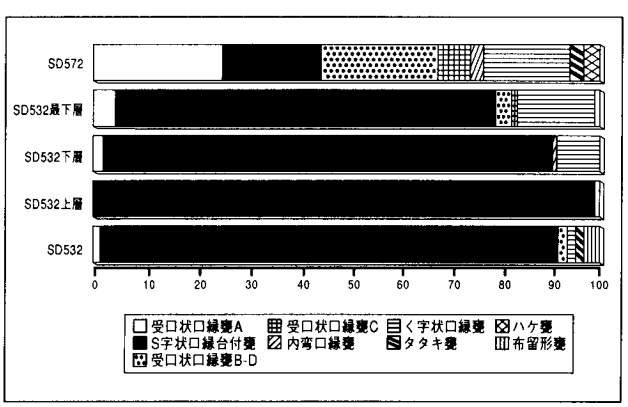


fig.106　甕口縁部の組成

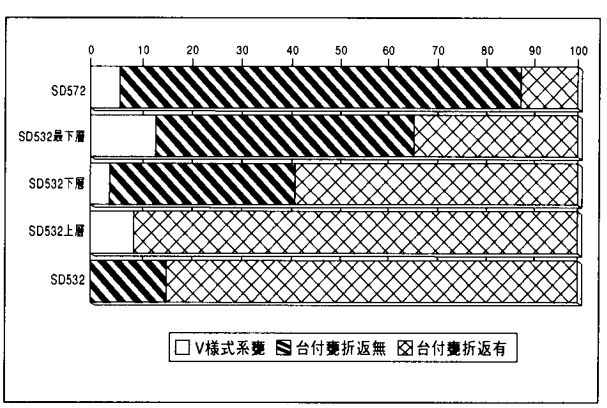


fig.107　甕底部の組成

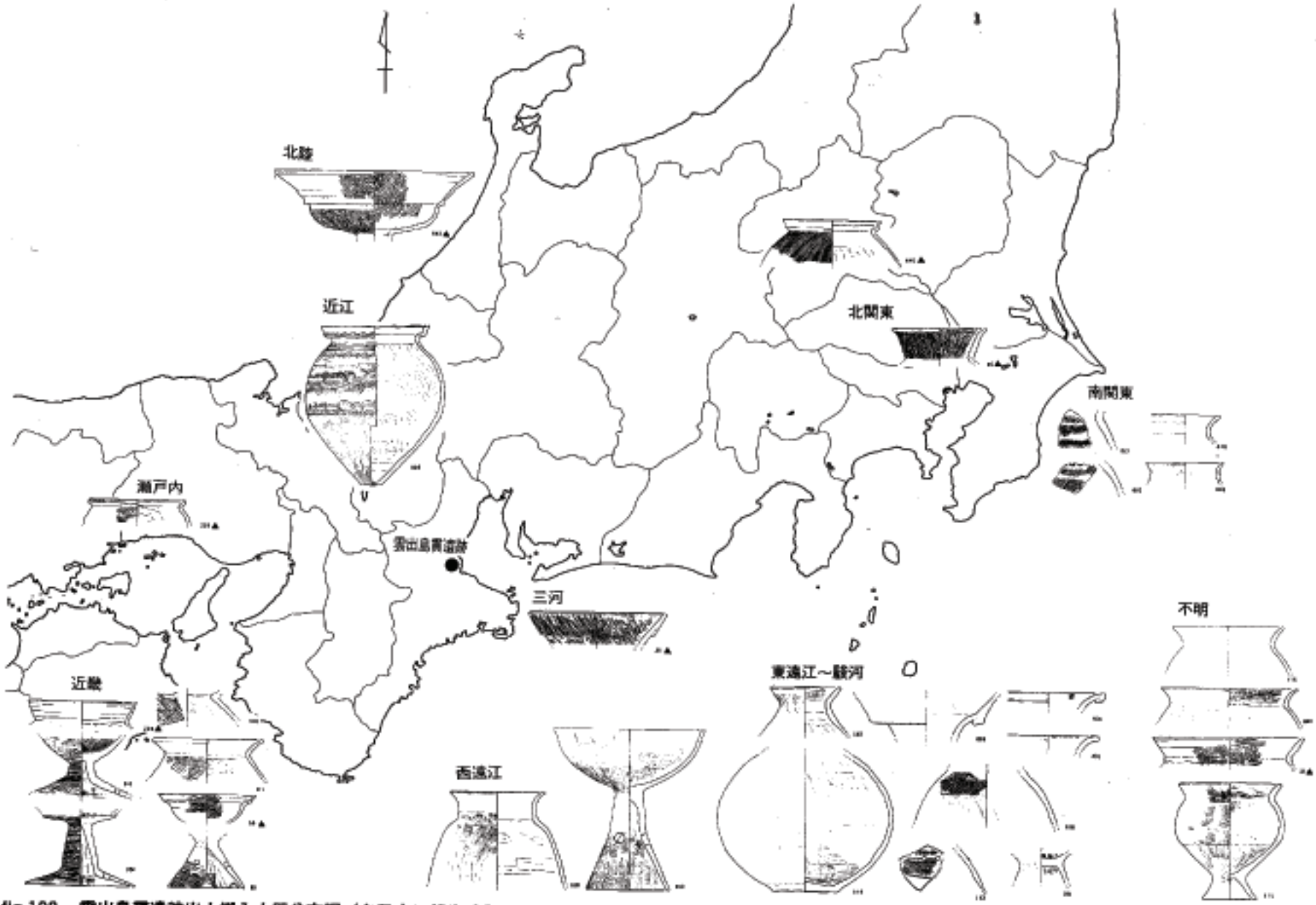


fig.108　雲出島貫遺跡出土搬入土器分布図（各数字は報告番号と対応する。数字の後に▲の付くものは第一次調査報告に対応する。）

見されることは、第一次調査において指摘した。今回の調査では、S字状口縁台付甕は仮A段階（0類）からⅢ段階（C類）までの段階で確認することが出来た。S字状口縁台付甕の底部に砂粒が充填されていることは、S字状口縁台付甕検討会により濃尾平野でも確認されており、その砂は雲出川流域のそれが使われているという[24]。

壺の場合は、基本的に大形壺の底部に充填されている。これらの砂粒は接地面から浮いた状態の部分に付く事例からも意図的な作為と判断できる。壺の底部には木葉痕の付くものもみられるが、このタイプには砂粒はみられないことから、分離されるようである。木葉痕のあるタイプは以東地域にも分布するようである[25]が、砂粒を含む粘土を充填する行為は類例が乏しい。当地では、器種を越えて確認することが出来ることから、擬口縁を積み上げていく手法[26]と共に、当地の土器の特徴として挙げられる可能性が高い。

(7) 加飾文様とその原体

加飾文様は直線文と刺突文が頻出する。その文様を刻む原体には、櫛状工具（円管状工具を束ねたもの＝連結円管状工具）・二枚貝腹縁・板状工具が推定される。(PL.52～56参照)

中勢から南勢地域はⅡ様式以来、櫛状工具（連結円管状工具）が加飾のための工具として多用される地域である。それは弥生時代中期だけにとどまらず、当該期まで残存する。刺突文だけでなく、直線文などでも土器に対して平行に近い角度で施文されていることから、工具の先端部が円管状になっていることが知られる。器種は壺・甕・高杯に確実に見られ、S字状口縁台付甕・手焙形土器なども可能性はある。

貝殻腹縁は、縄文時代から伊勢湾岸で器壁調整の原体として使用されていることが知られている。当遺跡でも、晩期の深鉢では体部のパーツごとに原体を使い分けており、装飾的な効果を挙げている。これらの貝はハイガイなどの凹凸のある類である。アサリなどのアーチ状の弧を描く類が使用されるのは弥生時代後期以降のことである。当該期には、後者がもっぱら刺突文の原体として利用され、前者が直線文および刺突文の原体として利用される事例(919・925)は極めて少ない。

(8) 搬入・外来系土器について

fig.108に示したように、太平洋沿岸地域からの搬入品が多いことが特徴といえよう。搬入品に関しては、調査担当が抽出することができるか否かにより意味合いが全く変わってくることから、慎重に扱わねばならない。しかし、調査担当の二人ともが近畿地方である大阪府下の当該期の土器を数多く見てきた経験をもつにもかかわらず、近畿地方からの搬入品よりも抽出することができた数量は以東地域からの土器のほうが上回っている。搬入品あるいは模倣品といった産地の差だけでなく、搬入されその後定着していくタイプと一過性のタイプがある。以下に、地域別に見ていきたい。

近畿

雲出川流域では極微量ではあるが、隣接する伊賀地域までが近畿地方の土器文化圏に入ることと相俟って、広義のV様式系の甕などが一定量存在している。ここで問題とするのは、そのような余波的なものではなく、明らかに外部から入ってきているものを指す。

島貫Ⅲ期古相には、大和を中心とする近畿地方に系譜を求められる土器が確認され、島貫Ⅲ期新相には、その模倣品が製作され始める。布留形甕の場合は、初期布留形甕の特徴にも指摘されている[27]体部外面に刺突文がみられるものが複数個体出土しており、忠実に規則性を守っている。この刺突文は系統毎に刺突する角度や位置が異なる[28]ことが知られているものである。また高杯Cは、島貫Ⅲ期以降に高杯の主流になる器種であるが、その後は近畿地方の土器の型式変化と並行して変化するのではなく、島貫Ⅲ期に入って以来それが崩れていく。包含層遺物ではあるが、島貫Ⅳ期新相あるいはそれ以降の資料と考えられる第一次調査70・72がその典型として挙げられる。

組成を大きく変化させている点で、他の地域からの搬入品とは、意味合いが異なる。

瀬戸内

228は体部内面をヘラケズリで仕上げる点から、近畿以西と考えられる。跳ね上げ口縁をもつことから、瀬戸内と推定した。

近江

湖南の野洲川下流域から搬入されている940がある。胎土分析を行っていないが、当地での模倣品とは考え難い。当地の共伴資料は島貫Ⅱ期古相に相当する。比較的近距離であり、受口状口縁甕が組成する点では共通する地域であるが、他の地域からの搬入土器が増加する島貫Ⅲ期以降にも明瞭な搬入土器は認められない。

北陸

841は島貫Ⅲ期新相の土器群と共伴している。明らかに当地の器形・胎土とは異なるが、北陸地方に全く同様の土器が存在するわけではない[29]。第一次調査での指摘のように縦方向のヘラミガキで仕上げている点では、当地の手法と共通する。

第一次調査63などの受部に透孔をもつ器台や器台Bは、北陸地方からの影響が考えられる。

三遠

第一次調査81の折り返し口縁は、三河地方に特徴な要素と思われるが、地域を積極的に限定する根拠を求められないことから、やや広めに推定する。

肩部の張る壺108と高杯223は、菊川式の特徴をもつと考えられる。

東遠江～駿河

大廓式土器の壺は特徴的な胎土であることから、細片にいたるまで抽出することができた。円形浮文が貼付されるものと竹管文が押されているものの2種類が確認された。他の器種は、脚台部を1点のみしか抽出することができなかった。

第一次調査670は、胎土の点では他の在地の土器と比較した場合に、際立った異質さが認められないが、手法的には大廓式土器と同様に口縁端部を折り返し、その上を強くヨコナデする。また、亀山市山城遺跡出土の大廓式土器に類似する土器[30]は、肩部の縄文が板状工具による刺突文で代用されている。この土器も中勢地域の土器の胎土とさほど変わりないことから、模倣品が近隣で製作されていると考えられる。

東遠江から駿河にかけての地域では、従来から伊勢型二重口縁壺の出土が知られていた[31]が、一方通行ではないことを窺える。

南関東

617・683は結節縄文が複雑であり、胎土が粗いことなどから大廓式土器よりも以東と考えられる。おおむね、駿河辺りから相模や房総半島西岸部と推定しているが、北関東かもしれない。輪積み痕を外面に残す特徴をもつ土器も同様の地域からの搬入品であろうか。

北関東

東京低地を利根川沿いに北上した地域を想定している。第一次調査446は口縁部の立ち上がりが深く、端部を外に拡張しない。外面のハケメは細かい。第一次調査で東日本からの搬入品の可能性を指摘しておいたが、その後、群馬県井野川流域からの搬入品の可能性があるという指摘[32]を受けている。彼の地では、元島名将軍塚などで伊勢型二重口縁壺が多く出土していることから、伊勢との結びつきが注目されていた[33]が、ここでもまた、一方通行でないことが窺える。ただ、東京低地の東京都伊興遺跡をはじめとする毛長川流域の土器[34]も図上では類似していることから、この地域からの可能性もないとは断言できない。いずれにしても南関東では、同様に北関東からの土器が確認されている[35]点や、当遺跡には太平洋沿岸部の土器が搬入されている点から、この土器もまた、太平洋岸沿いに搬入された可能性が高い。

不明

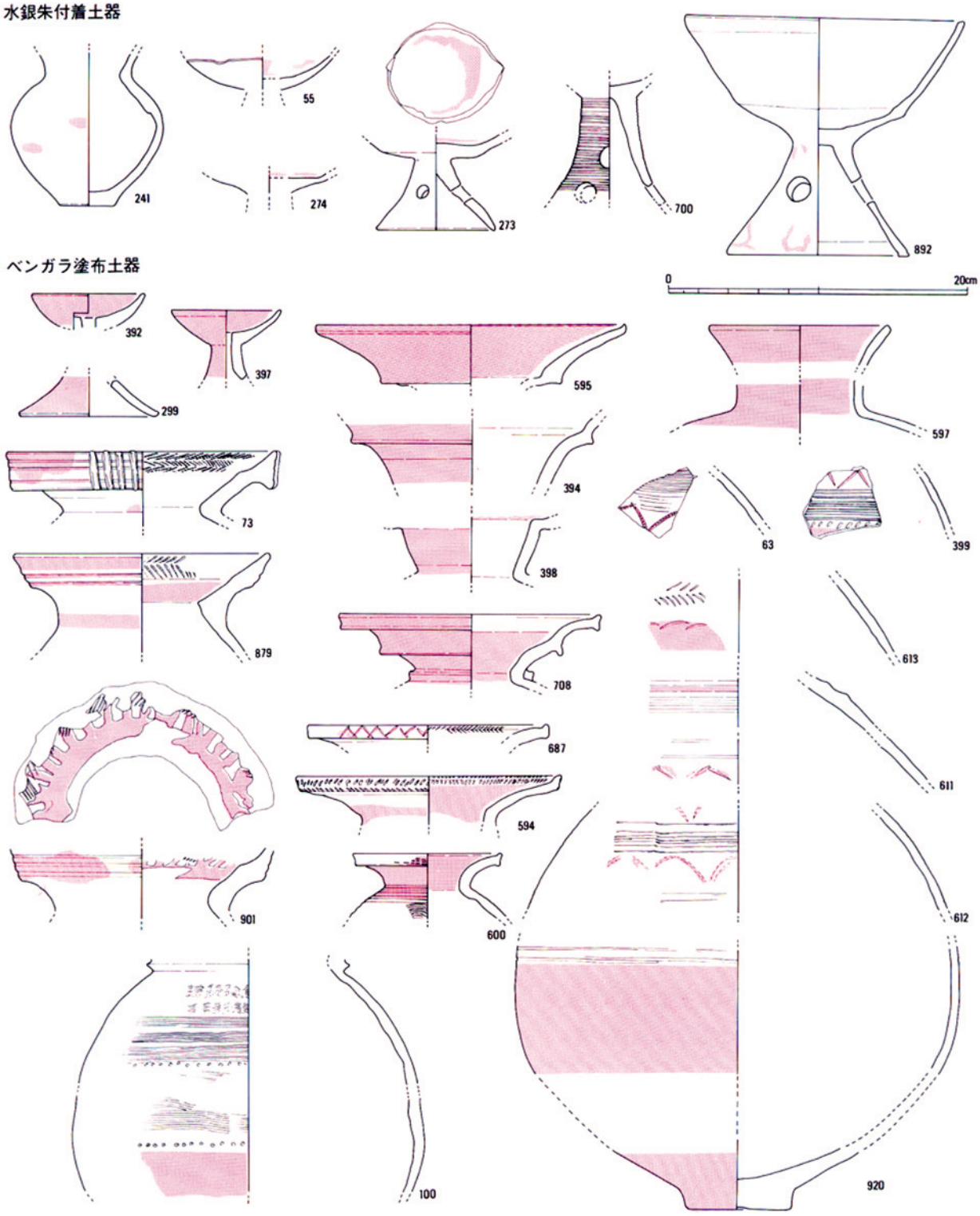
以東地域からの搬入品と考えられるが、明瞭な特徴がないことから、地域を特定することが困難である。

時期的には、島貫Ⅱ期新相を境に、一気に搬入される量が増えている。

識別の難易度にも左右されていると予想されるが、地域別では東遠江から駿河にかけての大廓式土器が多い。器種別では、以東地域からは壺や甕が目立つ傾向がみられる。

詳細はともかく、これまで太平洋沿岸の東の地域から西に向かう搬入土器は纒向遺跡[36]を除くとほとんど知られていなかった。今回雲出島貫遺跡において、この地域からの搬入土器を確認できたことにより、田口一郎氏が指摘した北関東に至る太平洋岸沿いの「津」の存在[37]は追認されよう。そして、従来知られていた東に向かう一方通行だけでなく、互いに往来

水銀朱付着土器



ベンガラ塗布土器

fig.109　赤色顔料の見られる土器（1：4）

のあったことが実証された。しかし、以東地域でS字状口縁台付甕が在地化し組成していく[38]のに対し、当地では全く以東地域の土器が組成に含まれていくことはない。若干の模倣品がみられるのみである。このことから、少なくとも当遺跡の状況を見る限りは、以東地域との往来（交流）が互いに均質なものではないことを指摘できる。

(9) 赤色顔料付着遺物について

赤色顔料の素材は、肉眼およびルーペによる観察から、その発色により水銀朱（辰砂を含む）から成るものとベンカラ（酸化鉄）から成るものの２種類と推定される（fig.109参照）。

水銀朱の付着する遺物には石器と土器がある。石器は敲石（石杵）(67・910）が出土している。いずれも端部にかすかに付着している程度であるが、敲打痕があることから粉塵化する過程で使用された道具と考えられる。土器はその付着状況から、土器の内面に付着するもの（274・55・273)と偶然に飛び火したかのように付着するもの(700・892・241)に分類できる。前者は外面に煤の付着し被熱痕跡が見られるいわゆる内面朱付着土器であり、これまで伊勢では縄文時代後期以来、鉢にしか見られなかった遺物である[39]が今回器台も使用されていることが明らかになった。しかし、かかる土器が上部に向かって大きく開口する形態を採る器種という点では、共通する。後者は高杯と壺の外面に付着している。水銀朱を扱う際に、これらの土器が間近にあったことには違いない。

いずれにせよ点数的にはごくわずかであるが、ＳD572からも出土しており当遺跡での広域的な搬入土器が多く確認される時期以前から存在することになる。よって、水銀朱の産出地は土器文化圏内の産出の可能性が高いと考えるのが妥当であろう。

ベンガラの付着する遺物は全て土器であり、加飾として彩色されているものである。パレス壺が多く、時期が下ると他の壺類や器台にも散見されるようになるが、あくまで布留式の影響力の強い土器には認められず、一定の規則性に基づいて彩色される[40]といえよう。

加飾手法に関しては、901や612は部分的に彩色することで加飾効果を高めている。全面に彩色されている場合でも顔料に浸けるのではなく工具を使って塗っている。901は放射状に彩色を行っており、先端が細くやわらかい筆状の工具を使っていると考えられる。612などは刺突等の施文の上に彩色を重ね、901は下書きとは全く関係なく彩色していくという違いがある。

2.C期の集落

出土土器の編年案では、島貫Ⅱ期新相を境とする画期を見出した。具体的には、高杯Ａの器形の変化や脚付土器の脚部と上部が独立することなどが挙げられ、その要因は外的要素に求められる。

ここで視点を変えて、居住域や墓域あるいは環濠といった遺構がどのような関係にあったのかという集落全体の景観について、土器編年に基づく遺構変遷から概観してみたい。

居住域と環濠がどのような関係にあったのかという点からみていくことにする。環濠の内側に位置する竪穴住居は削平が著しく、遺物量も少ないことから詳細な時期を特定することが困難である。しかし、島貫Ⅱ期新相以前に環濠外に居住域が広がる確実な遺構はなく、全て島貫Ⅲ期以降である。また、環濠外の墓域以外の地点で島貫Ⅱ期新相以前の遺物といえば、ＳE79と隣接するＳＺ81のみである。

地形の変換点に相当するＳD572では、溝の上層からの出土が中心であり、ＳＤ572出土土器は基本的に溝の埋没した時期を示す資料である。従って、これらの土器は溝の機能していた最終末の時期を示すことにはなるが、溝の機能していた時期は遡って考えなければならない。ＳD572とＳD532が同時に溝として機能していた可能性があるのはＳＤ572の上部に土器の堆積が始まる島貫Ⅰ期以前であることから、厳密に居住域の周囲を取り巻いている環濠と呼ぶことができるのはこの時期だけである。ＳD572の下限は島貫Ⅱ期新相であるが、ＳＤ532最下層の埋没が始まるのもこの時期のことである。ＳＤ572に隣接する水田畦畔からは島貫Ⅲ期新相の土器が出土しており、ＳD572の埋没後も水田での生産は行われている。

墓域は、Ａ・Ｂ墳墓群ともに土器の画期と関係なく、それぞれが固定された位置に連続して築かれて

いる。ただし、B墳墓群では墳墓間の切り合いがあることから、各墳丘が個々に意識されているわけでなく、全体として墓域と意識されているといえる。

以上のことから、溝が埋没しその機能に変化が生じる時期と搬入土器の流入する画期が一致する点と墓域や生産域の場所は固定されており溝の変化とは関係なく連続する点を指摘できる。

註

(1) 石野博信・関川尚功『纒向』櫻井市教育委員会　1976

(2) 大参義一「弥生式土器から土師器まで－東海地方西部の場合－（『名古屋大学文学部研究紀要ＸＬＶＩＩ』　1968）

(3) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土師器」（『考古学雑誌』60-2　1974）

(4) 伊藤久嗣『納所遺跡』（三重県教育委員会　1980）

(5) 山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994）

(6) 赤塚次郎「廻間式土器」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990）

(7) 赤塚次郎「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」（『西上免遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1997）

(8) 一瀬和夫「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」（『大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター創立１５周年記念論集－』（財）大阪文化財センター　1989）

(9) 若林邦彦「河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」（『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会（財）大阪府文化財調査研究センター　1999）

(10) 小池香津江「古墳出現期・大和の地域構造に関する予察」（『文化財学論集』文化財学論集刊行会　1994）

(11) Ｓ字甕胎土研究会「Ｓ字甕の混和材を考える」（『考古学フォーラム』９　1998）

(12) 註８文献を参照した。

(13) 註12に同じ

(14) Ｓ字状口縁台付甕の編年は、学史上アルファベットで示され、それ以前のものに付いては０で表現されている。便宜上それに倣って示したが、独自の編年観に平行させているものであり、詳細には先学のものと異なるので、注意されたい。

(15) 註１に同じ

(16) 井上和人ほか『平城宮発掘調査報告』Ｘ（奈良国立文化財研究所　1981）

(17) 註１に同じ

(18) 註３に同じ

(19) 註３に同じ

(20) 例えば、伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」（『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　2000）などがある。

(21) 宇野隆夫「食器計量の意義と方法」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館　1992）

(22) 鋤柄俊夫・亀井聡「調査区の景観復原」　（『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　1995）

(23) 高橋一夫『手焙形土器の研究』（1998）

(24) 註11に同じ

(25) 例えば、鈴木敏則『梶子遺跡Ⅷ』（財）浜松市文化協会1991）などがある。

(26) 伊藤裕偉「古墳時代前期における土器製作技法の検討－伊勢地域における事例を通して－」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991）

(27) 伊藤裕偉「城之越遺跡の古式土師器」（『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1992）

(28) 次山淳「波状文と列点文－布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布－」（『文化財論集Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1995）

(29) 福井県埋蔵文化財センター　赤沢徳明氏にご教示いただきました。

(30) 山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994）の遺物番号322の土器。

(31) 比田井克仁「二重口縁壺の東国波及」（『古代』100　早稲田大学考古学会　1995）のＤ２類を中心とする土器群が相当する。

(32) 田口一郎「北関東におけるＳ字口縁甕の波及と定着」（『Ｓ字甕を考える』第７回東海考古学フォーラム三重大会　2000）（財）群馬県埋蔵文化財事業団　深沢敦仁氏からも直接ご教示いただきました。

(33) 田口一郎『元島名将軍塚』（高崎市教育委員会　1981）

(34) 牛山英明「東京低地における土器群の画期と交流」（『庄内式土器研究』ＸⅦ　庄内式土器研究会　1998）
青木孝夫・三々島誠次男ほか『伊興遺跡』（足立区伊興遺跡調査会　1997）

(35) 西川修一「三浦半島におけるＳ字甕の諸形態について」（『庄内式土器研究』Ｖ　庄内式土器研究会　1994）

(36) 註１に同じ

(37) 註33に同じ

(38) 各地のＳ字状口縁台付甕の様相が詳細に知られる近年の成果として、以下の文献等がある。
庄内式土器研究会『庄内式土器研究』ＸⅥ・ＸⅦ　1998
第７回東海考古学フォーラム三重大会『Ｓ字甕を考える』2000

(39) 川崎志乃「水銀朱精製に関する予察～天白遺跡出土遺物を中心に～」（『研究紀要』第９号　三重県埋蔵文化財センター　2000）

(40) 川崎志乃「赤色顔料付着の土器について－津市雲出島貫遺跡出土土器を中心に－」（『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター　1999）

付編2

雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器

伊　藤　裕　偉

はじめに

雲出島貫遺跡では、古墳時代の須恵器出現以後に相当する土器類も、古式土師器と同様豊富に出土している。当遺跡とほぼ同時期に調査された高茶屋大垣内遺跡（津市城山・高茶屋地内、当遺跡の北方約3㎞）でも、この時期の土器が多量に確認されている。[1] また、当遺跡のやや上流にあたる堀田遺跡（一志郡嬉野町宮古、当遺跡の西方約5㎞）からは古墳時代前期後半以降の良好な資料が見られる。[2] 先に検討した古墳時代前期前半の土器類とともにこれらの遺跡を評価することによって、雲出川下流域における古墳時代の土器相はほぼ把握できるものと考える。

小稿では、雲出島貫遺跡における須恵器出現以後の土師器に見られる状況を把握することを目的とする。そして、将来目する上記課題検討の足掛かりとするとともに、当該時期における伊勢の状況についても、一応の目安としたい。

1　土師器類の分類と系統

雲出島貫遺跡では、田辺昭三氏による陶邑編年[3]（以下、「陶邑田辺編年」）のＴＫ23～ＴＫ43型式併行期にかけての須恵器が認められる。ここで見るのはそれに伴出する土師器類である。

a　分類

出土している土師器には、小形鉢・台付小形鉢・高杯・壺・台付甕・長胴甕・丸底甕・鉢・甑・土管などがある。

小形鉢　丸底の小形鉢Ａと、脚台部の付く小形鉢Ｂ（台付小形鉢）に細分する。いずれも口縁部は屈曲をもって短く外反する。小形鉢Ｂの脚台部は、小形鉢成形後に付加されている。

全体的な形態と、底部外面に見られる粗雑なヘラケズリといった調整手法からは、概ね古墳時代前期の小形鉢と系統的につながると考えられる。しかし、口縁部形態には須恵器短頸壺の影響も考慮する必要がある。

高杯

形態から、Ａ・Ｂの２者に区分する。高杯Ａでは、杯部は下部と上部間に屈曲を持ち、杯上部は、やや丸みを持ちながら開く。脚部は脚柱から屈曲を持って脚裾へと至る。脚裾端部は不明瞭な面をなすものが見られる。高杯Ｂは、椀状の杯部を持つものである。

壺　壺は、平底で口縁部が大きく開くもの（壺Ａ、広口壺）、丸底のもの（壺Ｂ、長頸壺）に大別する。

壺Ａ（平底壺）底部は平底。頸部から体部上半にハケメと横線文を施すもの（壺Ａ１）と、無文のもの（壺Ａ２）とがある。壺Ａ２としたものは形態差がいくつかあり、将来的には細分可能である。

壺Ｂ（丸底壺）　底部は丸底になるものと考えられる。体部に対して長い口縁部を持つもの（壺Ｂ１、長頸壺）と、短い口縁部で丸底のもの（壺Ｂ２）がある。

壺Ｂ１は、当遺跡での確認例は少ないが、当該時期における古墳の副葬品としてはよく見られるものである。

壺Ｂ２は、頸部から「く」の字形に開く口縁部を持つ。口縁部は、長頸壺ほどの長さは無いものの、短いものではない。体部外面にはハケメが施されており、丸底甕の調整手法と共通する。

甕　形態によって、甕Ａ・Ｂの２者に大別する。

甕Ａ（台付甕）　古墳時代前期から続く、いわゆるＳ字状口縁台付甕（以下、「Ｓ字甕」）の系統上にある。小形と大形の大別２法量がある。

脚台部は「ハ」の字形に開き、脚台裾の内面への折り返しはほとんど見られない。成形時の脚台上端部を外側に引き出し、それを素地粘土によって上下から挟み込むようにして体部が成形される。体部中央やや下部には成形の中断痕（擬口縁）がある。そこから体部最大径を経て口縁部まで、素地粘土輪積みにより一気に成形されている。

調整は、まず体部下半に弱いケズリないしはナデを施した後、脚台部と体部との接点部に板ナデないしはハケメによって面取り状のナデが施される。こ

れは、脚台部では右下がり方向の斜放射状に施されている。

その後、体部全体に羽状のハケメが施される。まず、体部下半には右下がりに、その後体部上半には左下がりに施される。体部外面のハケメはこの２単位に収斂しており、古墳時代前期に比べて手法的に簡略化されているといえる。

これらの調整が終了した後、体部上半に一条の横方向ナデやハケメが施されるものもある。その位置は古墳時代前期の台付甕に見られる横方向ハケメと同じところであり、両者の関連も考える必要がある。

口縁部は、その内面には屈曲を持っているものの、外側は変化点をほとんど持たない。口縁端部は上方が窪んだ面をなしている。

甕B（丸底甕）　底部が丸底をなす一群を甕Ｂとする。形態により、体部が長胴形を呈するもの（甕Ｂ１、長胴甕）と、体部が球形に近いもの（甕Ｂ２）に区分する。

甕Ｂの口縁部は、頸部から「く」の字形に開き、口縁端部外面には面を持つものである。調整は、外面はハケメ、内面上半にはハケメ、下半にはケズリを施すものもある。

甕Ｂ２は、当遺跡では良好な資料に恵まれない。上ノ庄宮ノ腰遺跡[4]の事例からは、甕Ｂ１との手法的類似が明白である。

鉢　頸部が少し締まり、外側に開く短い口縁部が付くもの（鉢Ａ）と、やや長い口縁部のもの（鉢Ｂ）とを抽出しておくが、形態的にはさらにヴァリエーションがありそうである。鉢Ａと鉢Ｂとの差は、体部外面に羽状ハケメを施すもの（鉢Ａ）と、タテハケのみのもの（鉢Ｂ）との差としても認識できると考える。口縁部および体部調整については、台付甕との関連が極めて強い。鉢Ａ・Ｂいずれも平底のもので、全体的な成形手法は広口壺と概ね共通する。また、鉢Ａには法量差を設けているようで、大形と小形のものがある。

甑　断面逆台形で、体部中央に２方向の把手が付く。体部外面と内面下部にはケズリが施される。底は、ケズリ出して通気孔としている。通気孔は「一文字」のものが圧倒的に多い。高茶屋大垣内遺跡や上ノ庄北出遺跡[5]（三雲町）では「十文字」のものも見られるが、事例は少ない。

口縁部ヨコナデ後に体部外面のケズリを行うものが多く、調整手法上の特徴としてよかろう。

土管　円筒形の体部を成形した後、上端を弧状に削り出すものである。体部の横断面形は楕円形を呈している。近隣の遺跡では、高茶屋大垣内遺跡に類例がある[6]。

b　土器群の系統

上記分類の土器群には、長胴甕・鉢・甑などのように、須恵器受容以降の生活様式上の転換によって新たに成立したと考えられる器形がある。つまり当該時期において、当地における土器組成は前代と大きく変化しているのである。

しかし、これらの土器について、その製作技法上の特徴を観察すると、概ね次の２群に区分することができる。

ひとつは、古墳時代前期以来の当該地域における手法的系統上にある土器群である。これを「手法的伝統群」とする。もうひとつは、当該地域における伝統的な手法に拠らない土器群である。これを「手法的新群」とする。

手法的伝統群は、甕Ａ（台付甕）・壺Ａ・鉢を代表とする。これらは、全体的な製作技法が前代までの伝統下にある。その他に、細部の手法で伝統性を有しているものに、小形鉢Ａ・Ｂ、甑などのほか、高杯Ａがある。

台付甕は、体部外面に羽状のハケメを施し、口縁部はそれ以前の「Ｓ」字形からの変形上に置くことができる。脚台部は、内側への折り返しが喪失しているものの、その外面に見られるハケメの施し方は、前代までと共通する。

壺Ａと鉢は、いずれも平底であり、体部最大径よりも下に擬口縁を有する。体部外面には、台付甕に見られるような羽状ハケメ（鉢Ａ）や、ナナメハケと横方向ハケメとの組み合わせ（壺Ａ１）の存在は、これらが台付甕の製作技法と共通していることを示している。

甑では、当遺跡には見られないものの、先述の上ノ庄宮ノ腰遺跡では、当該時期の台付甕の体部外面に見られるような粗いハケメを記号状に施したものがある。

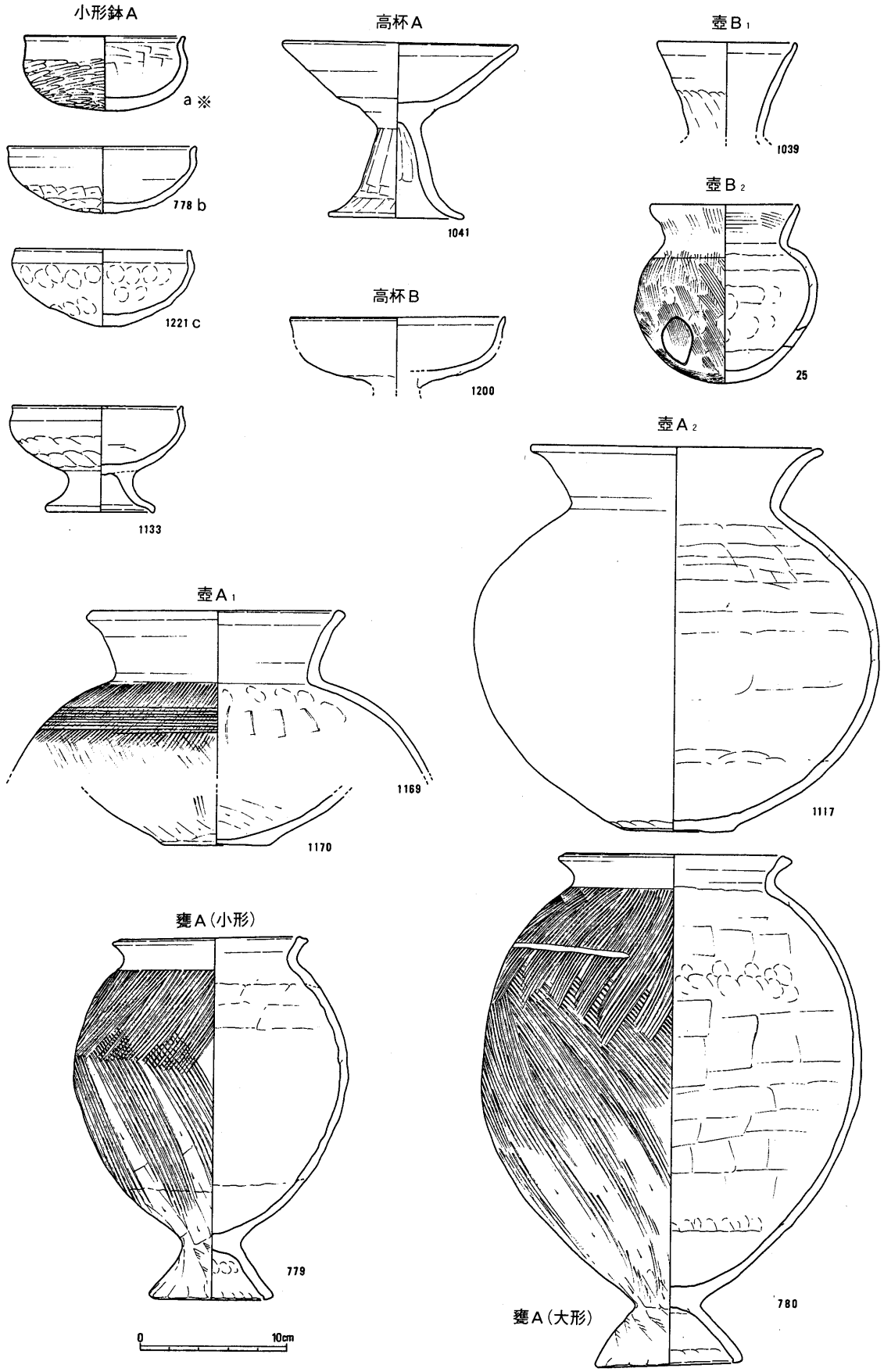


fig.110　島貫D期土師器分類図(1)（1：4）　※は上ノ庄宮ノ腰遺跡出土資料

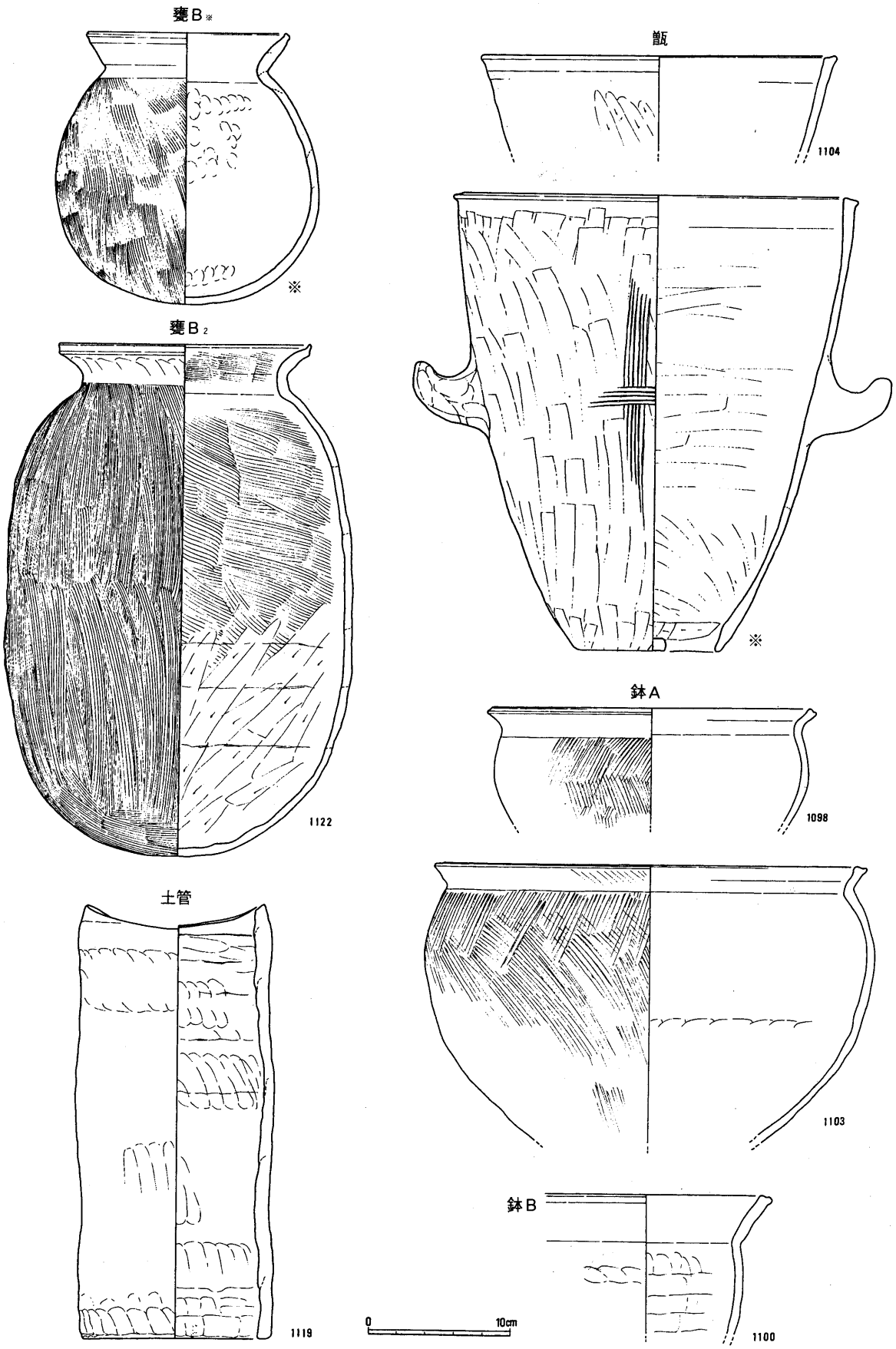


fig.111　島貫D期土師器分類図(2)（1：4）　※は上ノ庄宮ノ腰遺跡出土資料

これらのうち、鉢や甑などは日本列島における須恵器受容に伴って韓半島方面から伝来した軟質土器との関連が考えられるものである。同様な土器である甕Ｂ１（長胴甕）が、手法的伝統群には見られないことを踏まえると、当該地域における新たな土器の受容の時期にあっては、伝統的な手法を継続して用いる方法と、全く新たな手法によるものとの２者が混淆していたといえる。これは、台付甕が組成上消滅するまで継続していたと考えられる。

2　土器編年に関する予察

以上の分類と土器群の系統を考慮して作成したのがfig.112に示した雲出島貫Ｄ期における土器変遷図である。口縁部形態の変化や形態的な相違から、各器形毎での型式について、現在認識している状況を記す。ただし、これは概説的なものであり、厳密な議論を行うためにはもう少し検討の余地があることをあらかじめ断っておきたい。なお、明確な型式が現状で認識できないものについては、ここでは触れない。

島貫Ｄ期の土器群については、台付甕が中心的煮沸用具として機能している段階かどうかによって大きくＤ１・Ｄ２期に区分する。Ｄ１期は、須恵器では陶邑田辺編年のＴＫ208型式からＴＫ10型式併行期までＤ２はＭＴ85型式からＴＫ43型式までとえる。

なお、当遺跡では明確ではないものの、新相のある段階まで台付甕が存在していることが、山城遺跡（亀山市川合町）などの資料によって知ることができる。[7]

小形鉢Ａ　体部外面にヘラケズリ・ヘラミガキの施されたものが、この時期のはじめに存在するものと考えられる（ａ）。当遺跡では出土していないが、上ノ庄宮ノ腰遺跡Ａ地区ＳＲ15上層資料に見られる。[8] ついで、ヘラミガキが欠如してヘラケズリのみとなり（ｂ）、次第にヘラケズリも省略される（ｃ）、という変遷を辿るものと考えられる。ｃの段階では、口縁端部の面も喪失している。

小形鉢の系統は、続く島貫Ｅ期にも継続する。私見ではあるが、小形鉢は飛鳥・藤原・平城などの都城分類でいう杯Ａの成立にも形態的な影響を与えていると考えている。

小形鉢Ｂ　小形鉢の形態的変遷と同様な変化をたどるものと考えられるが、その判断要素に乏しいため、小形鉢の変遷にあわせて割り振った。

高杯Ａ　高杯Ａは、赤塚次郎氏が尾張地域の編年として措定した松河戸式[9]併行に相当する高杯の形態に概ね該当し、その型式的系列上に置くことのできるものである。島貫Ｃ期では、松河戸式併行の良好な資料に恵まれないが、次年度に報告予定の堀田遺跡（一志郡嬉野町宮古）ＳＤ42出土一括土器群中が雲出川流域における基準資料となる。[10]

比較的変遷のたどれる要素に脚部がある。脚部は、脚柱から脚裾にかけての屈曲が次第に強くなるが、これは島貫Ｃ期に見られたような明確な屈曲をもつものではない。

壺Ａ　明確な型式変遷は、今のところ辿ることができない。今のところ、小形鉢や高杯の変遷に合わせて振り分けているに過ぎない。

甕Ｂ　島貫Ｃ期における台付甕の型式的変遷のなかで把握できる。島貫Ｃ期との継続を示す意味からは、「台付甕Ｅ」として把握できる。

口縁部形状を見ると、口縁端部外面に面をなす要素としては台付甕Ｅ全体の特徴といえるが、その面が外側に向けられるもの（ａ）と、上方に向けられるもの（ｂ）とに大別する。

鉢　鉢Ａの口縁部形態からは、前述の甕Ｂと共通した動向が窺えるので、同様の視点からａ・ｂに区分できる。また、ａ・ｂでは体部外面に台付甕と共通する羽状ハケメが見られるが、それが喪失する段階が認識できるので、その段階をｃとする。

なお、島貫Ｅ期における土器群中には、島貫Ｄ期の大形鉢と形態的に共通するものが見られる。（fig. 112参照）手法は異なるものの、形態的には、島貫Ｅ期に至っても継続していると考えておく。

3　須恵器併行期における土師器群の特徴

ａ　壺Ａ１と鉢Ａの分布

以上で見てきたように、手法的伝統群と手法的新群の混淆が須恵器受容期における当該地域の特徴といえる。

では、このような土器群のあり方は、どの程度の

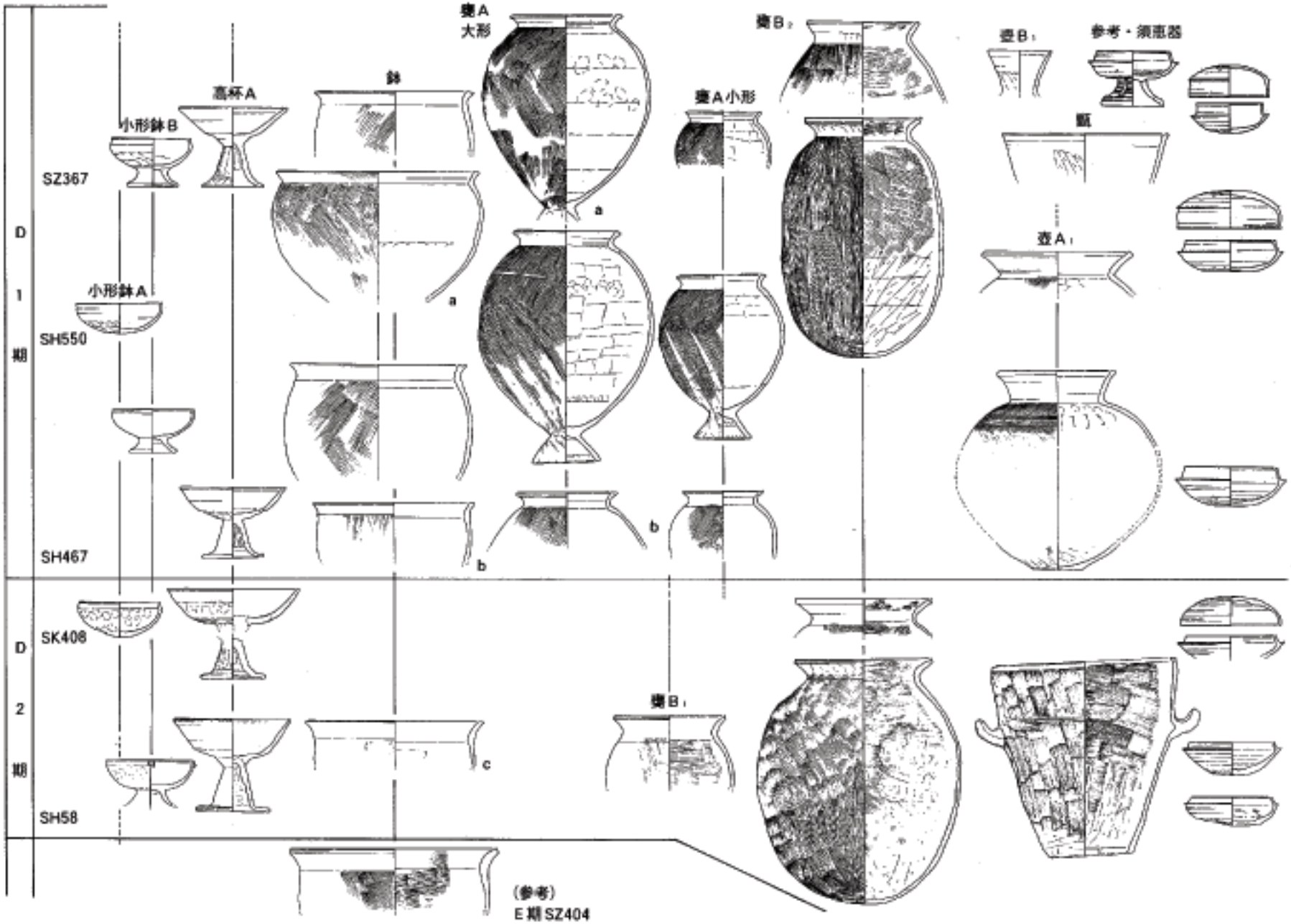
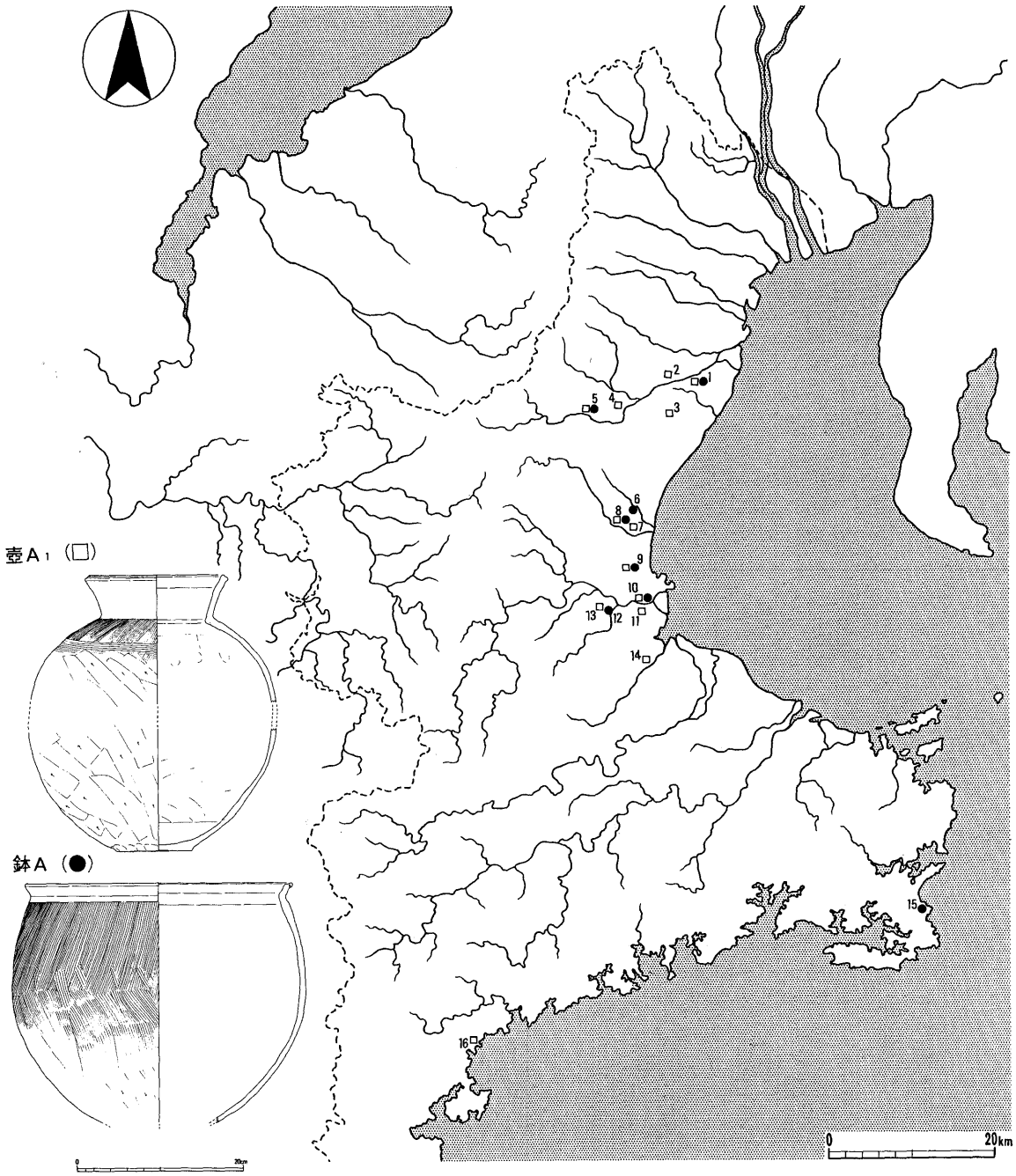


fig.112　島貫D期土器変遷図（1：8）



1．河田宮ノ北遺跡
2．石薬師東古墳群
3．伊奈富遺跡
4．山城遺跡
5．大鼻遺跡
6．六大A遺跡
7．蔵田遺跡
8．納所遺跡
9．高茶屋大垣内遺跡
10．雲出島貫遺跡
11．小野江甚目古墳群
12．天花寺北瀬古遺跡
13．片野池古墳群
14．粥鍋遺跡
15．大井の浜遺跡
16．道瀬遺跡

fig.113　島貫D期並行期における土師器壺A1、鉢Aの分布　※土器実測図は、高茶屋大垣内遺跡の資料

範囲で確認できるものなのであろうか。甕A（台付甕）についてのみ見ると、それは美濃・尾張をも含めた伊勢湾西岸地域における広域的なものとして観察することができる。[11] しかし、壺A１や鉢Aのような手法的伝統群は、美濃・尾張地域では分布を確認することができない。それに対し、伊勢では鈴鹿川流域から雲出川流域に集中し、とくに雲出川から安濃川流域にかけて顕著な分布がある。志摩半島や東紀伊方面にも見られる、という興味深い事実も見過ごせない（fig.113）。

このことは、雲出島貫遺跡における土器群の特徴が、地域的に限定された範囲で展開したものであること～すなわち、大地域「伊勢」のなかにおいても、より限定された地域のものであること～を示す。さらに、器種的な多様性とその展開範囲を中心に据えて当該時期における土器群の動向を見れば、須恵器受容期における台付甕に代表される手法的伝統群の中心的な地域が、伊勢、とくに安濃川から雲出川流域と鈴鹿川流域にあることを示していると考えられる。

このように見ると、尾張平野部を中心に議論され、現在では伊勢湾沿岸地域全体の土器様式およびその構成器種として定説化した感のある、「宇田式土器」と「宇田型甕」について、改めて検討する必要のあることは明白である。

b　「宇田型」定義の再検討

古墳時代の東海地域を中心に分布するS字甕については、大参義一氏[12]や安達厚三氏[13]らによって古墳時代前期から後期にかけての長期にわたる型式学的な検討が早くからなされている。その段階の編年では、型式学的な変化や画期の認識は明確になされたものの、須恵器出現以後に見られるこの系統に、改めて別の呼称を付与するという作業はなされなかった。

この土器を「宇田型」甕と呼称し、古墳時代前期からのS字甕との間に大きな画期を見出そうとしたのは赤塚次郎氏である。[14] 赤塚氏は「宇田型」甕について、①「S字甕の技術的延長上に位置づけられはするものの、すでにS字甕を規定する諸要素は欠損し、その象徴的なものがS字の名称の由来となった口縁部の屈曲の消失であ」（赤塚88、p209上）り、②「宇田型甕はS字甕の発展段階としてのみ位置づけられるのではなく、特に調整技法に見られたように新たな意味合いをもちつつ、特異な変遷をたどる」（同、p 211下）とする。以上によって、S字甕との隔絶を指摘する。

つぎに、この土器の特性として、③「分布の中心は明らかに濃尾平野にあ」（同、p 212上）り、④「濃尾平野での古墳時代中・後期の土器様式は（中略）その多くは畿内系の（中略）土器群によって占められており、伝統的な器形は前代の元屋敷様式の中で解体している。しかしそのような中で唯一の例外はS字甕と宇田型甕であ」（同、p212下）り、⑤「集落遺跡における代表的な日常的煮沸具という見方はどうもできそうにな」（同、p212下）く、⑥「古墳造営、あるいは古墳に伴う祭の中で使用されるひとつの道具であった可能性」（同、p213上）を指摘する。そしてこの土器が成立する背景として、⑦「独自の解釈と独特なイメージを生み出し、そのチカラを周辺諸国に広げようとする時代が、ヲホド王登場にいたる時代の「尾治」と考えたい」（同、p 214上）と認識している。

赤塚氏の視点は、それまで単にS字甕の変化形としてしか認識されてこなかった当該土器に対し、新たな視点を提示されたものとして非常に重要である。少なくとも須恵器受容期における土師器の組成的変化を積極的に評価するためには、赤塚氏の視点は極めて意義深いものがある。しかし、その認識を伊勢の土器群に当てはめようとすると、資料的に充実してきた現在ではいくつかの点で再考する必要のある部分がある。

まず、①・②では、S字甕との連続性の点から考察されている。しかし、「S字」という要素が東海西部地域における台付甕の極めて象徴的な形態であることは認めるにしても、それは長期間にわたって用いられてきた台付甕という器形のなかにおけるひとつの収斂であるとともに起点でもあると見るべきであろう。平松良雄氏[15]、あるいは山田猛氏の指摘の[16]とおり、S字甕から「宇田型」をあえて分離し、「独自なカタチ」として設定するほどの意味は無いと考える。赤塚氏のS字甕分類の０～D類を首肯すれば、さしずめE類として取り扱えば充分である。そもそも、「S字」という、型式学的な変遷系列における

ある段階の特徴によってこの台付甕を呼称し、それが定着してしまったことが問題ということもできる。

土器そのものを見て、いわゆる「S字甕」成立の背後に見える多要素の統合、あるいは台付甕の消滅という土器組成上の大転換、の大きな2つの画期のなかで当該地域における台付甕そのものの消長を把握する視点に立つべきと考える。確かに、赤塚氏のいうように「S字の名称の由来となった口縁部の屈曲の消失」により、「すでにS字甕を規定する諸要素は欠損し」ている。しかし、そのような成立当初のS字甕を規定し得る要素の欠落は、頸部内面の横ハケ（赤塚B類以降）、体部外面の装飾的横ハケ（赤塚C類新以降）などと漸次進行しているものであり、観点の相違とはいえ口縁部屈曲のみに重点を置くことはできないと考える。[17] それゆえ、「宇田型」の認識とは、型式学的には成立するものの、それは赤塚氏のいうA類とB類の差、あるいはC類とD類の差とに近いものであり、氏のいうS字甕の範疇からあえて分離する必要は無いと考える。

③・④・⑤については、前述のように伊勢・志摩地域においても濃密な分布があることは明らかであり、濃尾平野に分布の中心があるとまではいえない。とくに④は、確かに「元屋敷様式」のなかで伝統的な部分がかなり解体されていることは伊勢でも確認できる。しかし、前述の壺A_1や大形鉢の存在が示すように、濃尾平野で見られるようなS字甕と「宇田型」甕のみに収斂している状況は、逆に伊勢では見いだせない。したがって、④・⑤をベースとした⑥のような議論を伊勢で行うことはできない。

⑦については、③をベースに、古墳時代後期における尾張の政治的影響力の増加、という視点が最大の背景にあると考えられる。しかしその一方で、⑤のように「宇田型」甕は当時の尾張における代表的な煮沸具ではないという。となると、上記分布の中心という観点は再考を要することとなるし、あるいは尾張の政治的影響力が仮に強大であったとしても、それを背後から支える考古学的資料としてこの土器を用いるのは難しいといわざるを得ない。

このように、濃尾平野をその中心として考察された「宇田型」甕の認識については、伊勢に見られる状況とはあまりにも合致しない部分が多い。

では、「宇田型」甕の画期は本当に無いのであろうか。赤塚氏は別の論考で、「宇田式土器」を提唱されている。[18] 結論的に言えば、「宇田型甕」は成立し難いが、「宇田式」には一定の意味を見出し得ると筆者は考える。しかし、その「宇田式」についても、美濃・尾張における地域的様相を示す概念としては有効なのかも知れないが、それを伊勢湾沿岸地域全体、とくに伊勢・志摩地域に敷衍することは、「宇田式」には見られない（あるいは基本的器種として認識されない）形式の土器が存在していることから見ても、できないと考える。

伊勢・志摩地域における当該時期の土器相は「宇田式」の外縁部としてはとても設定できない様相を呈しているといえる。[19] とすれば、濃尾平野で措定された「宇田式」と併行関係にある伊勢の土器群を、改めて把握する必要があるといえる。

c　（仮称）高茶屋式の設定にむけて

以上のことから、雲出島貫遺跡D期の土師器については「（仮称）高茶屋式」として暫定的に認識することとする。この土器群の呼称は、高茶屋大垣内遺跡（津市）出土土器において、最も典型的に見られると考えるためである。当該土器群の特徴としては、次のように認識する。

① 須恵器受容以後、台付甕が消滅するまでの間の土器群である。実年代では5世紀後半頃から6世紀中葉頃にかけて見られる。

② 須恵器受容による生活様式的変化のなかで、旧来の手法を遵守した土器群（手法的伝統群）と、新たに加わった土器群（手法的新群）とが混淆する。

③ 構成される器種には、小形鉢（A・B）・高杯（A・B）・壺（A・B）甕A（台付甕）・甕B（丸底・長胴甕）・甑、および土管、などである。

④ 鈴鹿川から雲出川にかけての伊勢中部を中心に分布し、その典型的な様相は高茶屋大垣内遺跡で見られる。

おわりに

この土器群が持つ政治的意味合いについては、筆者は判断する術を持たない。しかし、いくつかの見通しを立てることはできる。

まず、安濃川から雲出川流域に分布の中心が見ら

れることは、久居窯跡群に代表されるように、伊勢における須恵器受容の早い地域にあたることが注目される。そして安濃川流域は、古墳時代中期から後期にかけて、渡来系文化が顕著な地域であることが指摘されている。[20] 当該土器群の成立にも、そのような韓半島からの影響が色濃く映し出される地域的背景を有していたものと考えられるのではないか。

当該土器群が、とくに高茶屋大垣内遺跡において顕著である点もそれとの関係があろう。高茶屋大垣内遺跡では不良品の須恵器や台付甕の集積遺構が見られ、[21] 先述の久居窯跡群も含め、この付近が須恵器・土師器の生産中心地であったと思われる。[22]

高茶屋大垣内遺跡付近が『日本書紀』雄略天皇17年条[23]にみえる「藤形村」と考えられ、高茶屋大垣内遺跡の東低地部には潟湖“藤潟”があり、それが後の中世港町・安濃津の原型と考えられる。[24] そのような場所に当該土器群の中心的遺跡があることは、fig.113の分布図に見られる志摩あるいは東紀伊方面での出土とは、“プレ・安濃津”から搬出された可性も考えられる。

さらに、この時期の台付甕が、大和・河内などの地域に搬出されている事実については、濃尾平野産のものではなく、伊勢産のものである可能性が改めて出てきたと考えることもできよう。

小稿は、伊勢における当該土器を検討するための極めて小さな第一歩である。古墳時代後期における伊勢の位置づけを考えるためにも、当該土器については、小稿のような極めて粗雑なものではなく、精緻な検討が必要と考える。

＜註＞

(1) 田中久生・川畑由紀子ほか『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）
(2) 平成11年度三重県埋蔵文化財センター調査、堀田遺跡第４次調査
(3) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店　1981年）
(4) 伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』Ⅰ（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
(5) 山本義浩ほか『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
(5) 註(1)文献
(7) 山田猛ほか『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）
(8) 註(6)文献
(9) 赤塚次郎「松河戸様式の設定」（『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1994年）
(10) 註(2)に同じ
(11) この状況については、第７回東海考古学フォーラム三重大会『Ｓ字甕を考える』（2000年）に詳しい
(12) 大参義一「Ｓ字状口縁土器考」（『いちのみや考古』No. 13　1967年）
(13) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』60−2　1974年）
(14) 赤塚次郎「最後の台付甕」（『古代』86　早稲田大学考古学会　1988年）
(15) 平松良雄「宇田型台付甕型土器に関する検討」（『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学　1993年）
(16) 山田猛「弥生・古墳時代の遺物」（註（７）文献）
(17) この、「Ｓ字状口縁の喪失」という、形態の最末期的要素を強調することによって「Ｓ字甕」からの区分を指摘すると、同じ意味で赤塚氏の設定する０類は、口縁部がＳ字を呈さないことによって、その設定根拠を失うことになる。いわゆる「Ｓ字甕」の前後を挟む形態として、土器分類上両者は同じ位相にあると、大枠では評価する必要がある。
(18) 註(9)文献
(19) 念のため付言するが、「宇田型」あるいは「宇田式」が伊勢にも敷衍できるとは、赤塚氏は一言も言いわれていない。それを無批判に受け入れた伊勢側の問題なのである。
(20) 田中秀和「安濃川流域の群集墳につい（『Miehistory』vol. 10　1999年）など
(21) 註（1）文献
(22) 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について」（『皇學館論叢』15-2　1982年）
(23)『日本書紀』（『日本古典文学大系』67　岩波書店）
(24) 拙稿「安濃津の成立とその中世的展開」（『日本史研究』448　1999年）

付編３

雲出島貫遺跡における古代の土器

伊　藤　裕　偉

はじめに

雲出島貫遺跡における島貫Ｅ期、すなわち飛鳥時代から平安時代中期にかけての土器は、良好な一括資料こそ少ないものの、一通りの変遷をたどれる状況にある。このような状況にある遺跡は中伊勢地域では珍しいので、大雑把ながら当該時期の土器変遷をみておく。

土器変遷の概略を把握するにあたっては、飛鳥・藤原・平城の各都城における編年（以下、「都城編年」と呼称）と形式分類を主に参照した[1]。

１　土器群の区分

島貫Ｅ期を、大きく古相・中相・新相に区分する。都城編年でいう飛鳥Ⅲ・Ⅳおよび平城Ⅰ併行期頃をＥ期古相、平城Ⅱから平城Ⅴ併行期頃をＥ期中相、平城Ⅵ（平安Ⅰ）から平安中期頃までをＥ期新相とする。

各々の段階、とくにＥ期古相と新相については、さらに細分した段階が設定できると考えられる。しかし、現状では資料的に不備なことと筆者の力量不足から、厳密な区分を示すことはできない。そのため、おおまかな傾向をここで指摘するにとどめる。

Ｅ期古相　古相は大きく２段階に区分でき、古相１・２とする。

古相１は、それ以前の島貫Ｄ２期からとの延長上にある時期。新しい段階は、都城出土土器と類似するような精緻な暗文が施される時期である。

古相２の資料としては、Ａ６区ＳＤ165・Ｂ１区ＳＨ177・Ａ６区ＳＨ149（以上、いずれも『嶋抜Ⅱ』に掲載）がある。ＳＤ165は都城編年の飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ、ＳＨ177・ＳＨ149は平城Ⅱに併行すると考えている。

Ｅ期中相　島貫Ｅ期古相２で顕著に窺われた都城との強い関係を払拭し、地域独自の傾向がはっきりと現れる段階と認識する。基準資料として、Ａ４区ＳＨ49（『嶋抜Ⅰ』）・Ｂ７区ＳＨ374（『嶋抜Ⅲ』）・Ａ５区ＳＥ50（『嶋抜Ⅰ』）・Ｂ４区ＳＺ502（『嶋抜Ⅲ』）があり、この順に中相１～４とする。

ＳＨ49は、『嶋抜Ⅰ』の報告段階では平城Ⅱ併行期と見たが、平城Ⅱ～Ⅲにかけてのものとして認識を修正する。ＳＨ374は平城Ⅳ～Ⅴに併行すると考える。ＳＥ50も『嶋抜Ⅰ』での見解を修正し、平城Ⅴに併行するものとして認識する。ＳＺ504は平城Ⅵ～平安Ⅰに併行する土器群と考える。

Ｅ期新相　古い段階の資料として、Ｂ７区ＳＺ425・Ｂ５区ＳＫ554（『嶋抜Ⅲ』）、新しい段階にはＢ５区ＳＥ522（『嶋抜Ⅲ』）がある。Ｅ期中相と新相（古）とは連続する土器群と認識できるが、新相（古）と新相（新）の間はかなり大きく、連続する土器群ではない。今回の調査では確認されなかったが、その間を充填する土器群が、調査区外に存在すると考える。

都城編年に対比させると、ＳＺ425は平安Ⅰ期中、ＳＫ554は平安Ⅰ期新から平安Ⅱ期古に併行するものと考える。

２　各器種毎の動向

ａ　小形鉢

島貫Ｄ期からの系統にあると考えられるもので、口縁部がやや内彎する形態となる。底部は丸底である。Ｅ期古相に見られるが、中相１頃に見られる杯Ａ（小形）に形態的影響を与えている可能性がある。

ｂ　杯類

都城の分類による杯Ａ・Ｂ・Ｃに相当するものが見られる。中心となる杯Ａを概観する。

杯Ａは、Ｅ期古相から存在し、内面の暗文はＥ期古相２の段階から見られる。Ｅ期古相２では、都城編年でいう飛鳥Ⅳ～平城Ⅱにかけて、比較的都城分類に合致するものが見られる。とくに飛鳥Ⅳ～平城Ⅰにかけてのものは精緻なつくりといえ、その傾向は杯Ｂについても見られる。

Ｅ期中相に至ると、内面の暗文が粗雑化し、口縁端部は、それまでの内側への肥厚から、変わって面状に成形されるようになる。

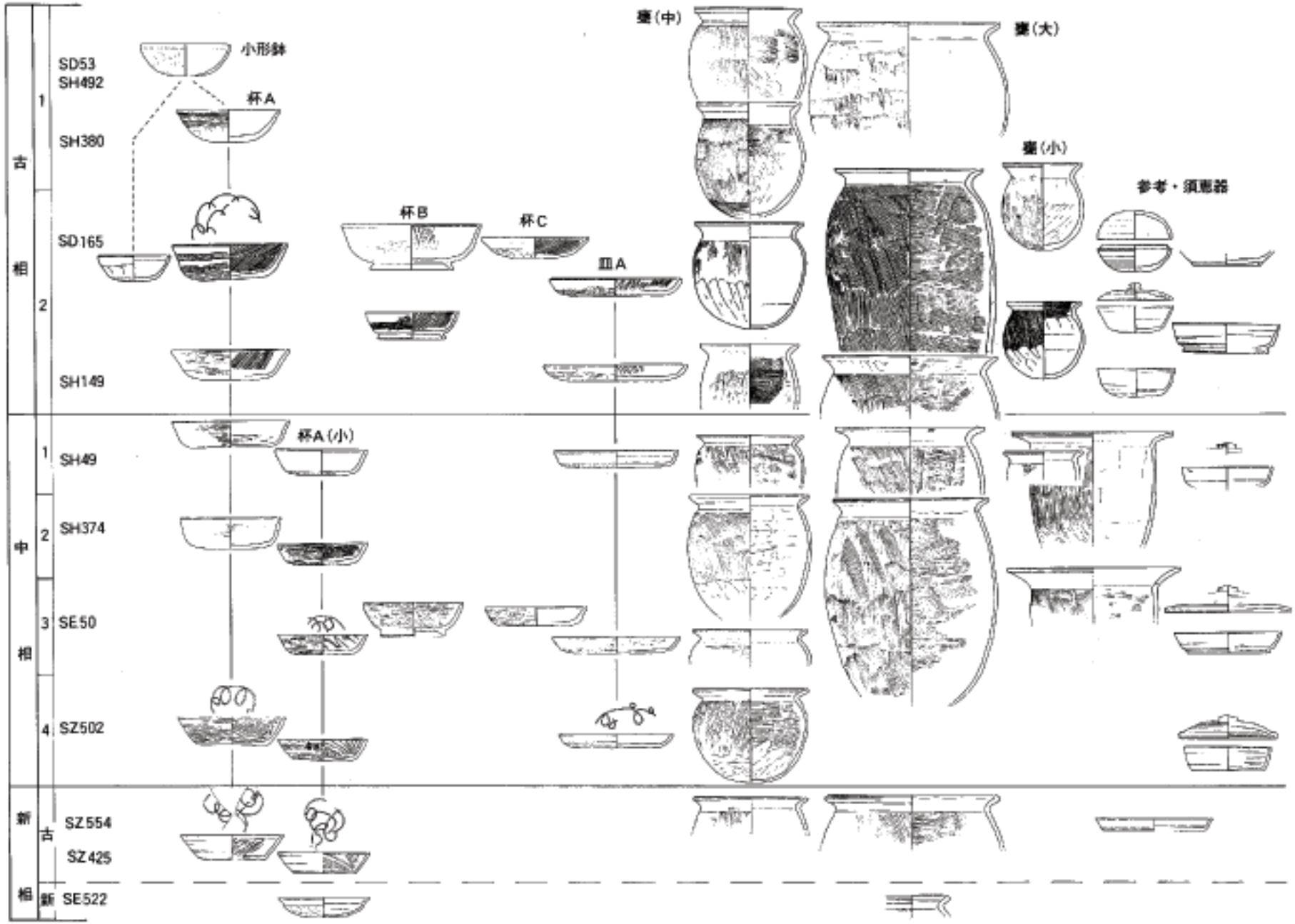


fig.114　島貫E期土器変遷図（1：8）

口縁端部の成形は、E期中相1から面状の成形がより明確となり、中相2には次第に凹線状となり、中相4では沈線状となるものも見られる。また、中相4以降、杯Aでは底部から口縁部への屈曲が明瞭となる。なお、杯Aの法量分化（大小の差）は、中相1の段階から明確に確認でき、新相（古）までは継続して見られる。

c　皿類

古相（新）から見られる。口縁端部の成形は、古相（新）の段階では内面に丸く肥厚していたものが、中相以降は面状の整形へと変化している。つまり、概ね杯Aと同様の傾向をたどるといえる。

d　甕類

丸底で、長胴のものも含め、概ね3法量が見られる。口縁部形態と体部内外面の調整手法によって、おおまかな時期的傾向が把握できる。

古相1では、口縁部は外反し、口縁端部は外面に面をなし、やや上方に突出する形態をなす。頸部内面はやや鋭利に成形されている。体部内面は縦方向のヘラケズリ、体部外面は縦方向のハケメが見られる。

古相2では、口縁部の外反傾向がやや弱まり、口縁端部外面の面はやや内傾気味となる。頸部内面はやや丸みを持って成形される。体部外面には、縦方向のハケメの後、縦方向のヘラケズリを施すものが見られるようになる。

中相では、口縁部の外反がさらに弱まる。中相2では、口縁部外面形が直線的な形状をなすようになる。外側に面をなす口縁端部はさらに内傾の度合いが増し、新相（新）では口縁端部を内側に丸め込む形状をなすようになる。この形態が発展すると、島貫F期に見られる口縁端部を内側に折り返すという手法へと変化するものと考えられる。

中相4の段階で、横方向ハケメのち斜縦方向ヘラケズリ（体部内面）、縦方向ハケメのち横方向ヘラケズリ（体部外面）という手法的特徴がほぼ統一される。体部内外面に見られるこの調整手法は、この後『嶋抜Ⅱ』でその詳細を報告した島貫F期にまで継続するものであり、その初現がE期中相4にまで遡ることが確認できたといえる。

おわりに

以上、雲出島貫遺跡E期、すなわち飛鳥時代から平安時代前期にかけての土器の変遷について概観した。

雲出島貫遺跡E期では、古相2の段階における都城の動向と極めて類似した杯皿類のあり方がまず注目できる。そして、それを変革する段階として中相の動向が評価できよう。

雲出川流域は、伊勢のなかでもとくに都城との緊密な関係が窺われる地域であるが、雲出島貫遺跡の状況を見る限り、それは恒常的なものではなく、何かの背景を有した時限的なものであることが推察される。このような状況が土器を通して窺われた意義は大きい。たとえば、墨書土器「田井」から考察できる地域開発[2]が、島貫E期中相の段階で見られることは示唆的である。当該時期における地域色形成が、都城方面との関係が緩んだ段階に行われていることを示すことになろう。

今年度には、斎宮跡の新たな編年も提示される方向にあり[3]、伊勢における当該時期の土器相を検討するための素地が固まりつつある。土器編年のベースとなるのは、各遺跡単位、あるいはその遺跡が所在する小地域の動向を把握するという視点であり、単に中心的地域との比較のみで止めてはならないと考える。小稿は極めて粗雑な検討ではあるが、そのための何らかの叩き台となれば幸いである。

＜註＞

(1) 都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XⅣ（1993年）のほか、古代の土器研究会編『古代の土器1　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(2) このことについては、当報告書第Ⅴ章および拙稿「中世前期の「屋敷」と地域開発」（『ふびと』53　三重大学歴史研究会　2001年）を参照されたい。

(3) 泉雄二「斎宮跡の土器様相」（『記念シンポジウム斎宮の土器・みやこの土器』資料集　斎宮歴史博物館　2000年）

付編4

雲出島貫遺跡のプラント・オパール分析

外山秀一

1．はじめに

植物珪酸体のなかでも、イネの機動細胞珪酸体が種まで識別できるという特徴に基づき、その化石であるプラント・オパールの分析が注目されてきた。そして、これまでに地層中や土器の胎土中から、イネのプラント・オパールが検出され、日本各地の稲作の開始とその波及、稲作の起源と伝播が明らかにされてきている。

筆者は、かかる分析法を稲作研究のみならず、地形分析の成果を併用することで、遺跡の立地環境の復原の一手段として用い、その多様な応用性についてふれてきた（外山1989・1992）。遺跡およびその周辺の微地形や埋没微地形と地層の堆積状況、そしてこれらと定量分析の結果とは密接に関わっており、土地条件や土地利用の変化を明らかにすることが可能である。

ここでは、雲出島貫遺跡（以下当遺跡）のＢ５区において採取された試料のプラント・オパール分析に基づいて、当遺跡の土地条件と土地利用について検討したい。

2．遺跡の地形環境

伊勢湾に注ぐ雲出川の下流域平野では、砂堆や旧河道、自然堤防状・中州状の微高地とそれらが地表面下に埋没した微地形とが確認される。

当遺跡は、雲出川左岸の標高2.3～3.5mに位置し、上田（1979）の地形分類によると三角州上位面から下位面にかけて、また高橋（1979）の地形面分析では沖積平野Ⅲの上位面から下位面にかけて分布する（図１）。上位面は、海岸線に平行して分布するものと、現河道や旧河道に平行するものとに大別され、これらは砂堆と自然堤防状・中州状の微高地である。

なお、雲出島貫町の池田と殿木、島貫の各集落を結ぶラインは海岸線に平行して分布する微高地で砂堆の一部とみられ、ここをかつての参宮街道が通っていた。また、島貫の集落は対岸の西小野江とを結ぶ雲出川の渡しとしても知られ、その地理的位置から古来陸上、河川、海上交通の要衝として重要であった。

前述したように、雲出川左岸の池田と殿木集落の微高地は、形態的には現海岸線に平行して分布するが、雲出川の旧河道沿いにもあたり、これらは砂堆を基層として、さらにその後の河川の営力によって形成された自然堤防状の微高地からなる。右岸の小村縄手集落の微高地も同様の形成過程を経てきているとみられる。

さらに、当遺跡の分布する島貫の集落の微高地もこうした砂堆と雲出川の堆積作用を受けて埋積された自然堤防状の微高地とからなり、現河道に平行して下流側に連続した高まりを形成している。

また、この雲出川と櫛田川の下流域平野にかけての段丘上や砂堆、自然堤防状・中州状の微高地上には、弥生時代以降の遺跡が広く分布している（高橋1979、和気2000、川崎2000）。さらに、近年の発掘調査により、低地においても遺構が確認されるようになり、今は埋没しているかつての微高地上での生活の痕跡が明らかになりつつある。

当遺跡では、東部のＡ地区と西部のＢ地区が設定されており（伊藤・川崎1998）、東側の微高地から西側の低地にかけて、幅約4m～43m、長さ約630mの範囲で発掘が進められた[1]。

また、当遺跡では五貫森式や馬見塚式の土器（伊藤・川崎1998）が、当遺跡からさらに海岸線よりの三雲町星合の前田町屋遺跡では突帯文土器や大洞式の土器が出土しており（伊藤1999）、縄文時代晩期後半における雲出川下流域の人々の生活の痕跡がみてとれる。

さらに、微高地上では馬見塚式並行期の土器棺墓や弥生時代中期頃の方形周溝墓、古墳時代前期をは

じめとする竪穴住居や井戸、溝、古墳、奈良時代や中世の掘立柱建物等が発掘されている（伊藤・川崎1998)。なお、遺跡は西側になるに従い低くなって後背低地となっており、その構成層が今回のプラント・オパール分析の試料とされた。

ところで、雲出川下流域平野においては条里型土地割が確認され、右岸のN10°Wの方向をもって広く分布するものと左岸の雲出島貫町の池田から殿木、雲出本郷町にかけて方位のやや異なるものとがある（仲見1979)。しかしながら、条里施工後の幾たびかの条里地割の再生を考えてもその分布は断片的であり、これは旧雲出川による削平や埋積作用が著しいものであったことを示している。

3．地層の堆積状況と試料の採取

Ｂ５区では地表面下約160cmまで発掘され、地層断面では畦畔状の高まりや溝状の凹地などが検出されている（図２)。地層の堆積状況は、全般的には褐灰色～暗褐灰色のシルトや細砂を主体とする細粒物質で構成され、ほぼ同様の層相を示している。雲母片を多く含有し、下位層ほどその量は多い。また、顕著な土壌化はみられない。

Ｂ５区の地層は計18層に細分され、出土する遺物から各層の時期はそれぞれ1層－奈良時代以前、14層－古墳時代中期、15～17層－古墳時代前期に比定されている。

プラント・オパール分析用として、１層では２試料、７層と８層、11層、14層～18層からは各１試料の計10試料が採取された。なお、試料10は後背低地ではなく、東側の微高地までの緩傾斜地において採取されたものである。また、地層の細分とそれに基づいた試料の採取は、三重県埋蔵文化財センターによる。

分析の対象とした地層の特徴は以下のとおりである。１層は後背低地の全面と緩傾斜地をほぼ水平に被覆し、同層の上面を奈良時代の掘立柱建物が切り込んでいる。７層は１層の下位を構成し、Ｂ５区の西側に平均20cmの厚さで堆積しており、地層の断面では大畦畔状の高まりが確認されている。８層は試料採取地点のみにみられ、下位の11層の凹地を埋めているとともに、10層を切って堆積している。11層は後背低地内を層厚10～15cmで水平に堆積しており、西側では溝状の凹地の検出をみる。14層は低地を厚く堆積し、色調は暗褐色とやや暗い。東側の緩傾斜地付近に畦畔状の高まりが、また西側では11層の直下で同様の溝状の凹地がみられる。同層からは三重県内で最も古い時期に位置づけられるTK47型式の須恵器が出土している。15層～17層は後背低地の下部層で、ほぼ均等の厚さで薄く堆積している。15層は14層と同様に暗褐色を呈し、傾斜地側に畦畔状の高まりをもつ。16層では有機物の混入がみられるとともに雲母片の含有率が高くなり、17層では細砂や雲母片が多くみられる。18層は緩傾斜地を構成する地層で、色調はやや黄灰色を帯びるが粒度組成は17層に類似している。

4．分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥－重量測定・仮比重測定－ガラス・ビーズの混入－ホモジナイザーによる分散－ストークス法による細粒物質の除去－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ（300個）とプラント・オパールとの比率から、試料１ｇあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ（乾物重）を層厚１cm・面積10aあたりの検出量で示した。

なお、火山の噴火によって降灰した火山ガラスを、そこで生成されたプラント・オパールと直接比較することはできないが、地層中の火山ガラスの含有状況ならびに出現傾向を検討するために、ここではプラント・オパールと同一基準で示した。また、動物珪酸体についても同様である。

5．分析の結果

プラント・オパールの層位的産状に基づいて区分された群集帯（ＰＯ帯）はａ帯とｂ帯である。ｂ帯

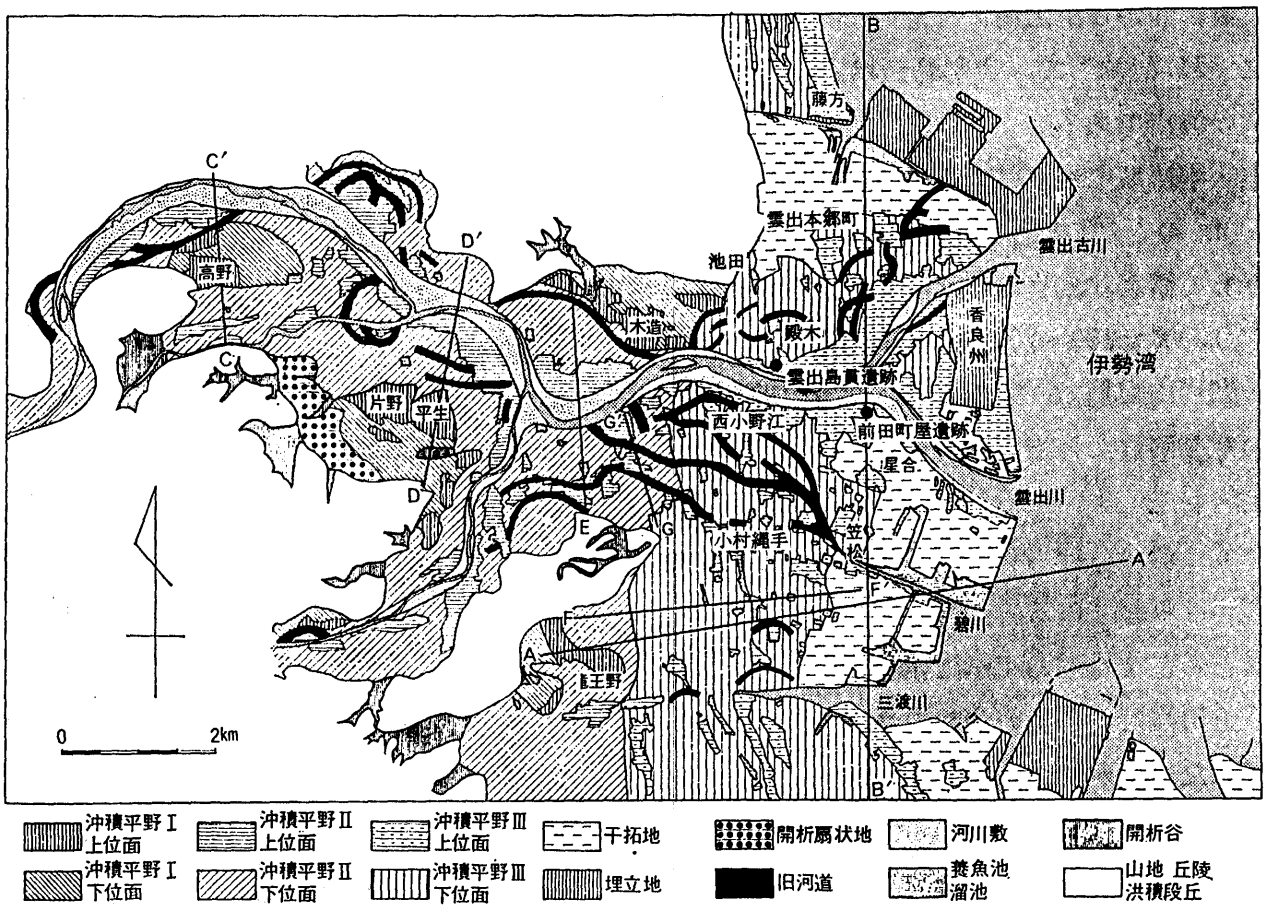
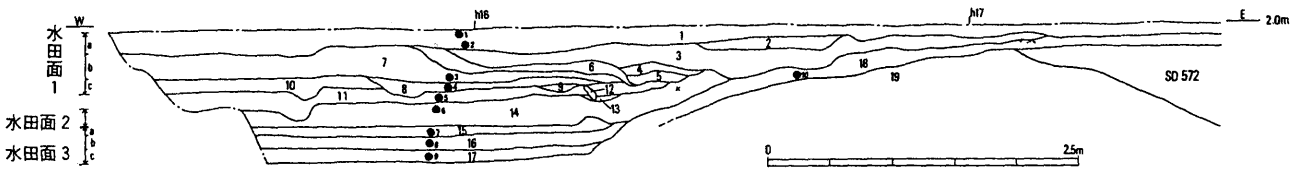


図１　地形面区分図（高橋 1979 に加筆）



1. 淡褐色シルト
2. 灰褐色シルト
3. 淡灰褐色シルト
4. 茶灰色シルト
5. 暗褐灰色シルト、黄色まじり
6. 暗灰褐色細砂質シルト
7. 黄色小ブロック含む灰褐色シルト
8. 黄色まじり灰褐色シルト
9. 暗灰褐色シルト
10. 黄色まじり灰褐色細砂質シルト
11. 灰褐まじり明黄色シルト（Ｂ４区第31層に対応）
12. 灰色細砂質シルト（杭抜き取り痕か）
13. 黄色まじり灰褐色細砂質シルト
14. 暗褐色細砂質シルト、やや粘性
15. 黄色粘含む灰褐色細砂質シルト（Ｂ４区第37層に対応）
16. 灰褐色細砂質シルト、木質含む
17. 暗灰褐色細砂質シルト
18. 黄灰色細砂質シルト
19. 淡黄灰細砂

※14層の「×」は須恵器（報告No.731）出土地点
●数字は土壌サンプル採集地点

図２　試料採取地点の地層の堆積状況（fig.15）（１：60）

からはイネが検出されるが、プラント・オパールの検出状況の僅かな違いによりb$_1$～b$_4$の4亜帯に細分される（図3）[2)]。

まず、a帯（試料10）では検出数・量ともに少なく、タケ亜科のなかでもB型とされる薄型のプラント・オパールが僅かに認められるに過ぎない。次に、b$_1$帯（試料9）では全般的にプラント・オパールの検出総数は少なく、イネも僅かに検出されるのみである。イネの増加がみられるのはb$_2$帯（試料6～8）で、検出総数も増加傾向を示す。b$_3$帯（試料2～5）ではイネが僅かに減少し、試料3では未検出であるが、試料2では検出総数とともに再び増加する。その後、b$_4$帯（試料1）ではイネをはじめとする検出総数が僅かに減少する。

イネ以外のプラント・オパールの検出状況としては、全般的に種類は多いが検出数と量が少ない。ウシクサ族がb$_3$帯とb$_4$帯で、ネザサ節をはじめとするタケ亜科や照葉樹に特徴的にみられる樹木起源の亀甲状や刺状のプラント・オパールが各試料より僅かに検出されている。また、ヨシ属やサヤヌカグサ属などの低湿な環境を好む植物は未検出である。

なお、供給源の異なる動物珪酸体と火山ガラスをプラント・オパールと同一基準で比較することはできないが、両者が僅かながら検出されている。

6．考察

1）土地条件

当遺跡は、微地形の分布状況から判断するならば、B5区東側の微高地から西側の後背低地に対応する。B5区でみられる18層は洪水堆積物によって東側の微高地とそれに続く緩傾斜地の上部を構成する地層と考えられるが、同層のプラント・オパールの検出数と量は少なく、不安定な土地条件のもとに堆積したものである。こうした微高地上では、縄文時代晩期後半の土器棺墓が発掘されており、島貫の微高地は遅くともそれ以前には形成されている。

これに対して、後背低地は地層の堆積状況やプラント・オパール分析結果からすると決して低湿な状況ではなく、むしろ周囲の微高地の影響を受けて、高燥な土地条件に繁茂するウシクサ族やタケ亜科の混入もみられる。イネをはじめとするプラント・オパールの検出状況から判断する限り、試料採取地点の土地条件は安定したものとは言えず、古墳時代前期から奈良時代以前の比較的短期間に後背低地の埋積が進んでいる。

外山（1994）は、弥生時代以降における各地の遺跡のプラント・オパール分析に基づき、沖積低地の土地条件の変化を比較検討した。その結果、不安定な時期に共通性が認められることを明らかにした。すなわち、その時期は弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期、古代末、そして中世の15・16世紀の4時期である。

そのうち、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期には、それまでに形成された河道や微凹地が埋積されて地形面は平坦化し、以後土地条件は安定化する。古墳時代以降のこうした土地の平坦化と土地条件の安定化が、古代の条里の施工を容易にした背景の一つとしてあげられる（外山1997a）。なお、一部の地域では、7世紀中葉～8世紀中葉、8世紀末～9世紀初頭の一時期に、不安定な土地条件となる（外山1997b）。

当遺跡の後背低地は、古墳時代の間に埋積が進んで奈良時代までには平坦化しており、この時期に条里制の施工される下地が整ったとみられる。これは各地でみられる地形環境の変化と同様である。

2）土地利用

当遺跡から検出されるプラント・オパールの種類は全般的には多いが、イネ以外は検出数・量ともに顕著な出現傾向はみられない。したがって、B5区西側の後背低地は水田として継続して利用されていたことが推定される。

この後背低地は、古墳時代の比較的短期間に旧雲出川による埋積作用を受けたとみられ、その埋積過程において稲が栽培されたようである。すなわち、下位から16層、15層、14層、11層、8層、1層下部の各層準である。なお、1層の試料1と2におけるプラント・オパールの検出状況に違いがみられることから、同層は上下2層に細分される可能性がある。

B5区の地層断面では、畦畔状の高まりや溝状の凹地が確認されているが、各層は顕著な土壌化を示しておらず、水田址の検出には至っていない。また、

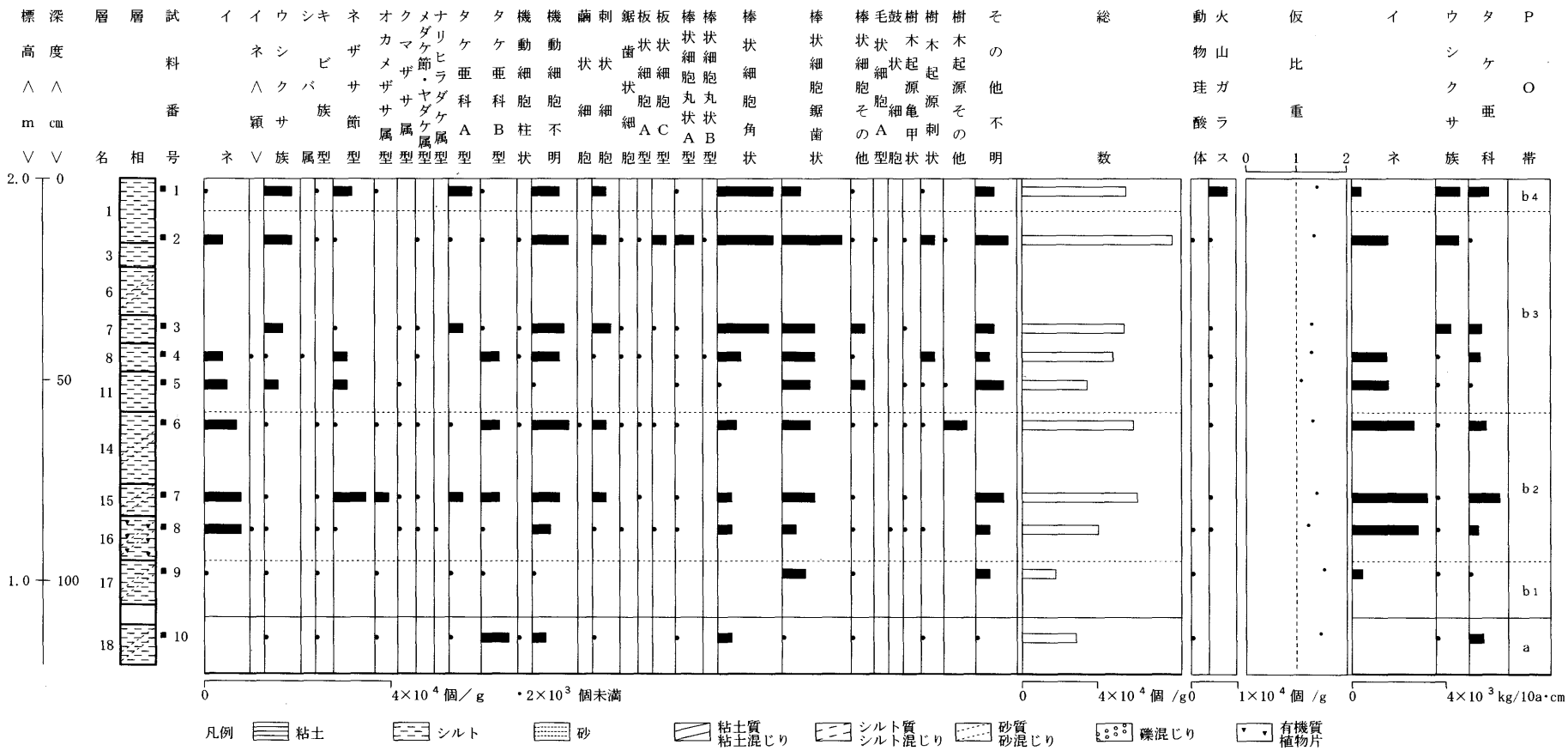


図3　プラント・オパール分析結果

西側のＢ６区にかけて生産域の拡がる可能性が考えられるが、地層の堆積状況はＢ５区と同様である。

以上のことから、当遺跡では遅くとも縄文時代晩期後半以前に形成された砂堆上に、人々は埋葬の場さらには居住の場を求めた。そして、その後旧雲出川の氾濫の及ぶ地域となる。Ｂ５区にみられる後背低地は、低湿で安定した土地条件を継続できるものではなく、絶えず河川の氾濫を受けて細砂やシルトの堆積をゆるす場であった。

Ｂ５区の微高地上では古墳時代前期を中心とする竪穴住居や井戸、古墳等が発掘されており、当時の人々はやや不安定な土地条件を有する背後の低地を生産域として選定し、主に稲の栽培を営んでいた。このように、当遺跡ではほぼ同時期の居住域と墓域、生産域とが隣接して存在していたとみられる。

また、野田（1989）は当遺跡において貝塚を発見し、島貫貝塚址としてその重要性を指摘している。そこでは、弥生土器をはじめ土錘などの漁撈具が多く出土しており、古来農耕のみならず漁撈を中心とした生業活動がおこなわれていたと推定される。

7．おわりに

当遺跡における発掘調査とプラント・オパール分析の成果により、遅くとも縄文時代晩期後半以降には人々の生活の場として選ばれ、とりわけ古墳時代における居住域、墓域、そして生産域という集落内の構造が明らかになった。

Ｂ５区の試料採取地点は、微地形分類では後背低地にあたるが、地層の堆積状況やプラント・オパールの検出状況から判断する限り低湿な環境ではなく、やや不安定な土地条件であったことがわかる。旧雲出川の沖積作用による比較的短期間に埋積を受けており、またその埋積の過程において稲の栽培が営まれた。

したがって、こうした農耕活動のみならず、当遺跡ではその地理的位置から漁撈もおこなわれており、こうした生業活動を基盤として、また陸上、河川、海上という交通の要衝として、島貫の集落は発展してきたといえる。

註

1）地層の時期や、遺物、遺構などの発掘調査の成果については、三重県埋蔵文化財センター伊藤裕偉氏ならびに川崎志乃氏のご教示による。

2）なお、試料１～９は地層断面において、ほぼ上下に連続したもの、試料10（18層）は微高地への緩傾斜地で採取されたもので採取地点は異なるが、図３では試料９（17層）の下位に図示している。

引用文献・参考文献

伊藤裕偉（1999）「三雲町の考古資料」『三雲町史　第２巻資料編１』

伊藤裕偉・川崎志乃（1998）『嶋抜　第１次調査』三重県埋蔵文化財センター

川崎志乃（2000）「祓川右岸地域の地形と弥生集落」みずほ　第34号

仲見秀雄（1979）「一志郡の条里制」弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版

野田精一（1989）『三重県郷土誌考』三重県郷土資料刊行会

高橋　学（1979）「先史・古代における雲出川下流域平野の地形環境」人文地理　第31巻第２号

外山秀一（1989）「遺跡の立地環境の復原－滋賀、比留田法田遺跡・湯之部遺跡を例に－」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第１集

外山秀一（1992）「地理学におけるプラント・オパール分析の応用」立命館地理学　４号

外山秀一（1994）「プラント・オパールからみた稲作農耕の開始と土地条件の変化」第四紀研究　第33巻第５号

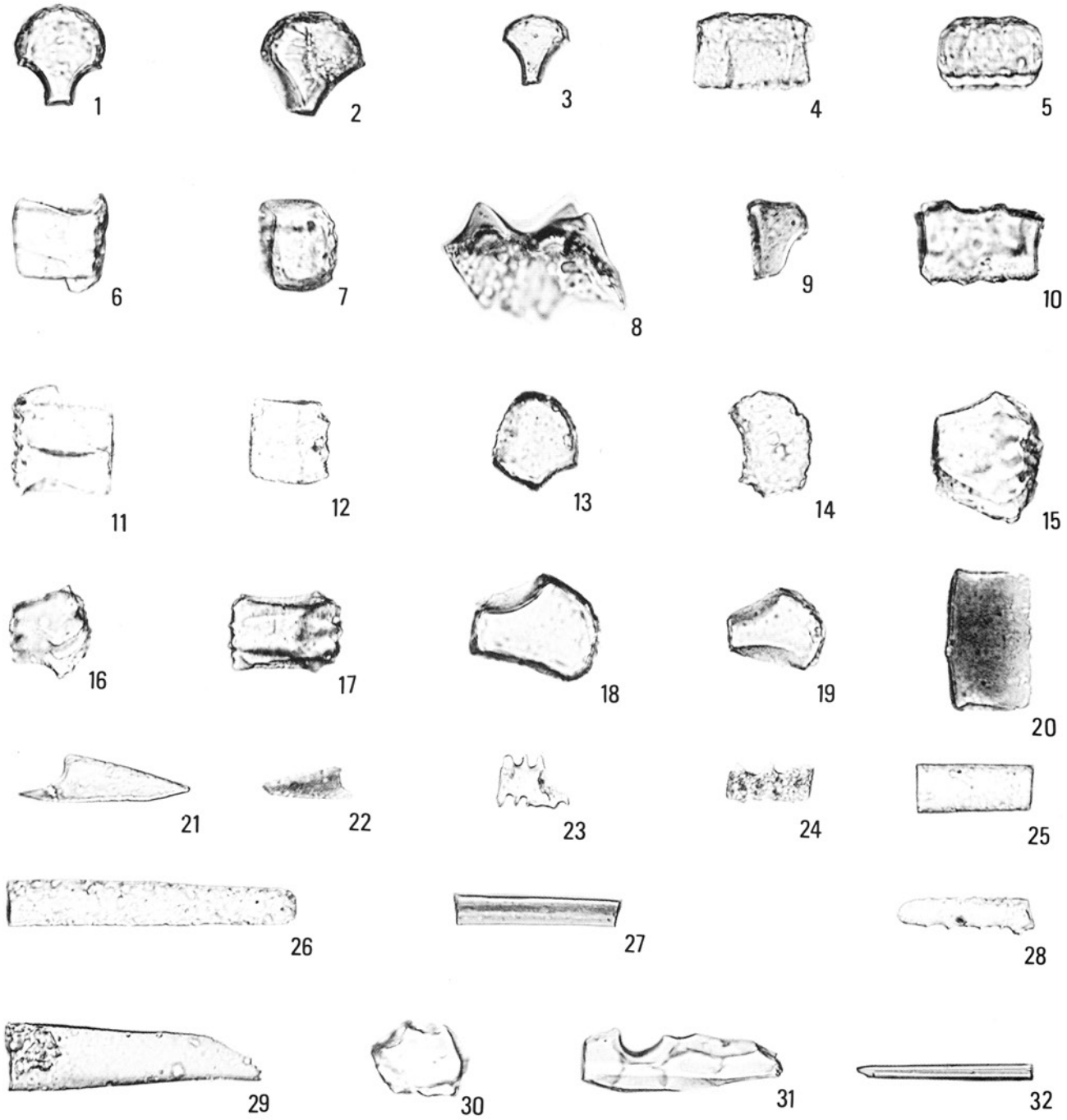
外山秀一（1997a）「弥生時代以降の自然環境の変化と土地の開発」条里制研究　第１３号

外山秀一（1997b）「野洲川下流域平野の遺跡の立地と環境」『古文化論叢－伊達先生古稀記念論集－』

外山秀一「プラント・オパールと環境考古学」安田喜憲編『環境考古学ハンドブック』朝倉書店（投稿中）

上田洋行（1979）「雲出川下流域平野における地形と条里制」弥永貞三・谷岡武雄編著『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版

和気清章（2000）「伊勢湾西岸域中部－南部の弥生時代集落について－」みずほ　第34号



1～7	イネ	8	イネモミ	9	ウシクサ族
10	キビ族型	11・12	ネザサ節型	13・14	クマザサ属型
15・16	その他タケ亜科Ａ型	17～19	その他タケ亜科Ｂ型	20	その他機動細胞柱状
21・22	刺状細胞	23・24	鋸歯状細胞	25・26	棒状細胞丸状Ａ型
27	棒状細胞角状	28	棒状細胞鋸歯状	29	毛状細胞Ａ型
30	樹木起源亀甲状	31	樹木起源刺状	32	動物珪酸体

（× 100）

写真１　プラント・オパール　その他

PLATE

Ｂ７区　周溝ＳＸ 491 出土の古墳時代前期土器

B2区　全景

西部（東から）

中央部（東から）

全景（東から）

竪穴住居ＳＨ533カマド（南から）

Ｂ２区　土坑ＳＫ507（北から）

Ｂ４区全景（東から）

落ち込みＳＺ 502　土器出土状況（南から）

調査区南壁土層（西から）

B2・B4区　環濠SD五三二

B２区側（北から）

B５区側（南から）

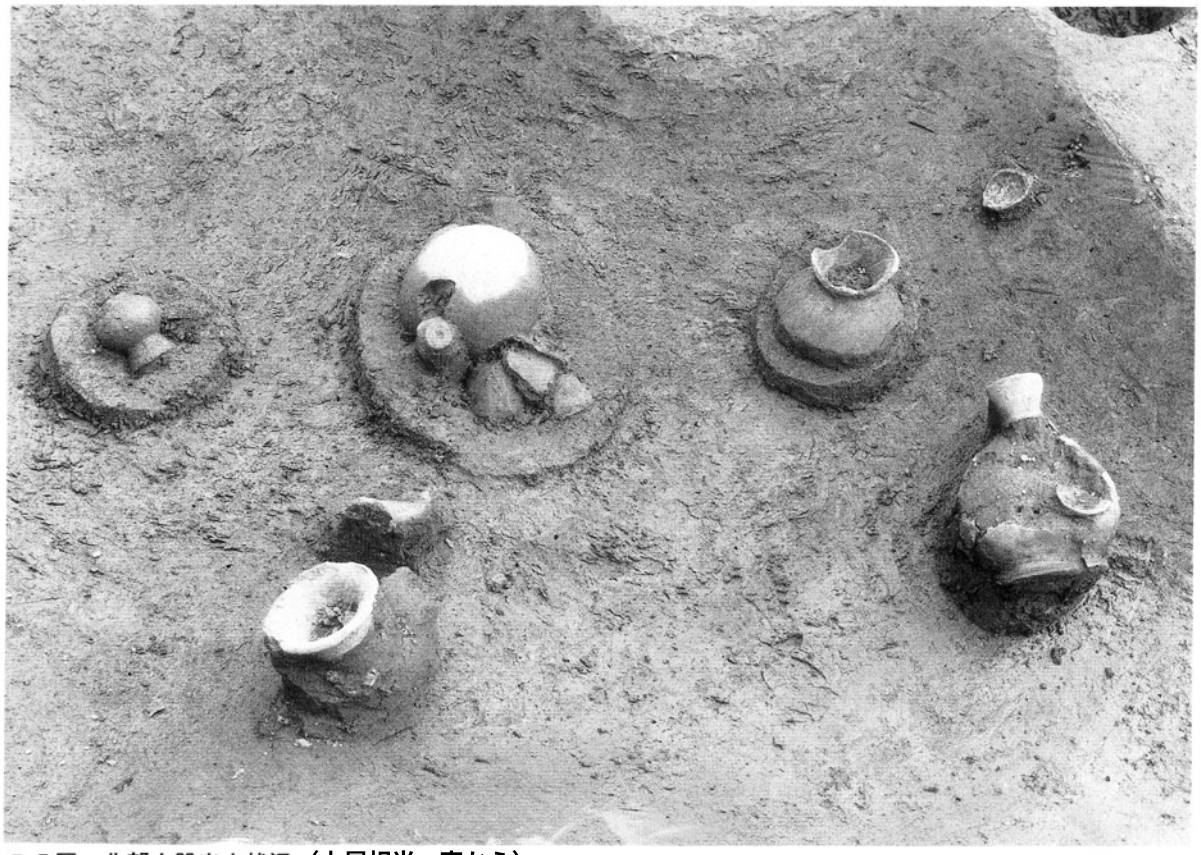
B５区側全景（西から）

B５区　水田遺構SZ504とSD572（西から）

B５区　水田遺構とＳＤ572（南から）

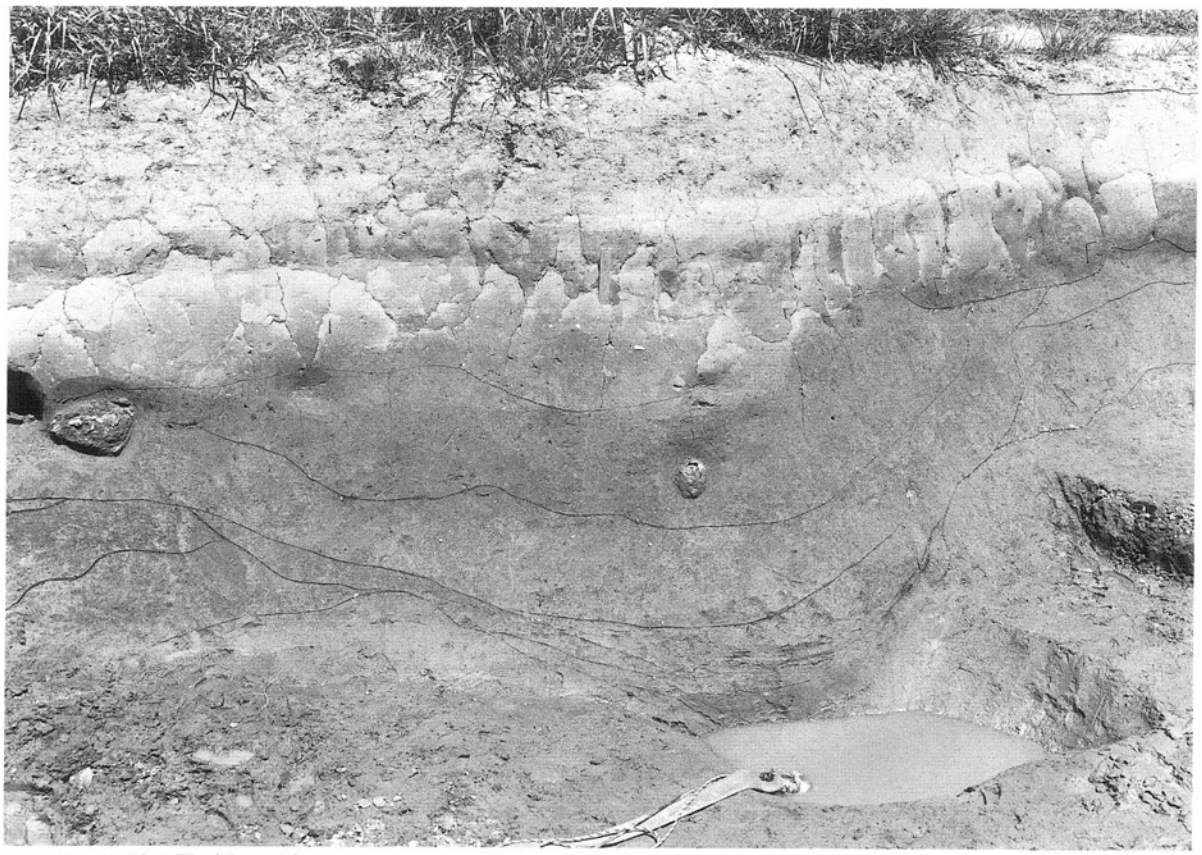
Ｂ５区側近景（南から）

B５区　南部土器出土状況（下層相当、北から）

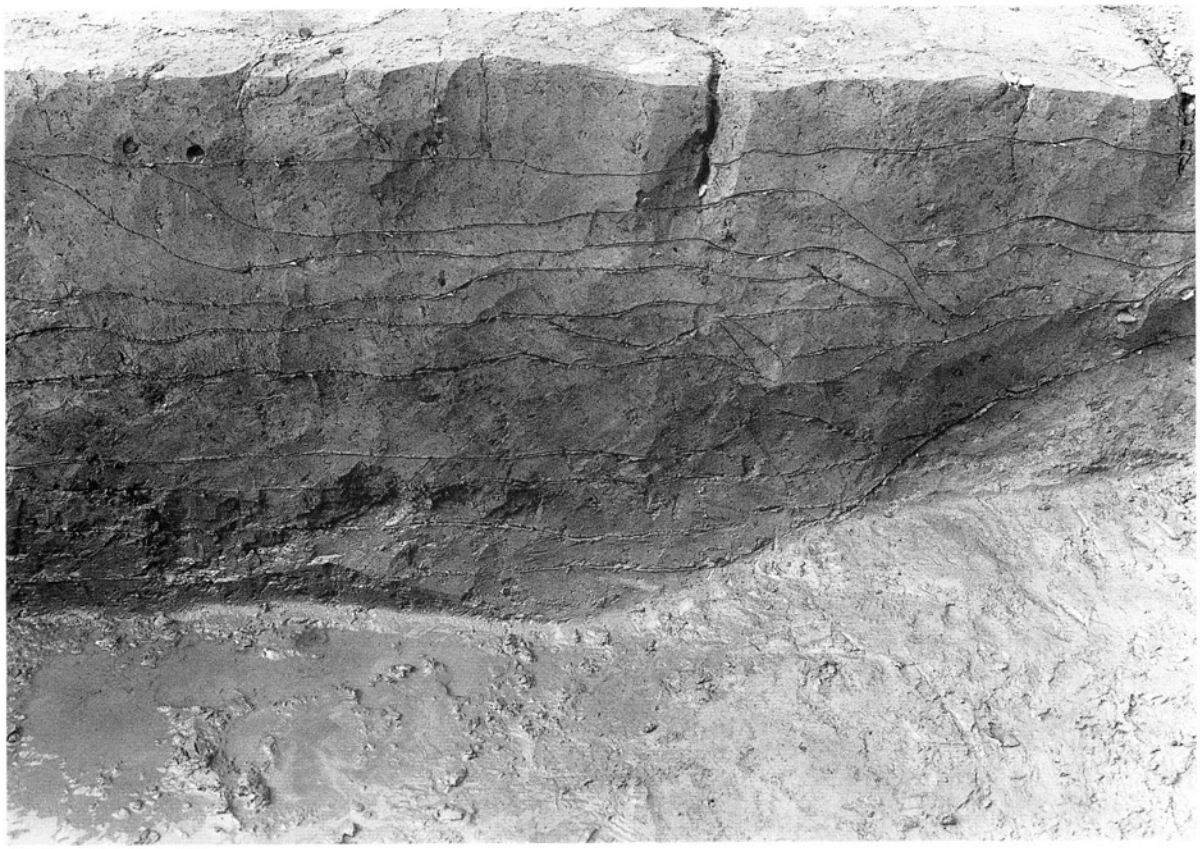


B５区　北部土器出土状況（上層相当、南から）

B４区側（北から）



B５区　北壁土層（南から）



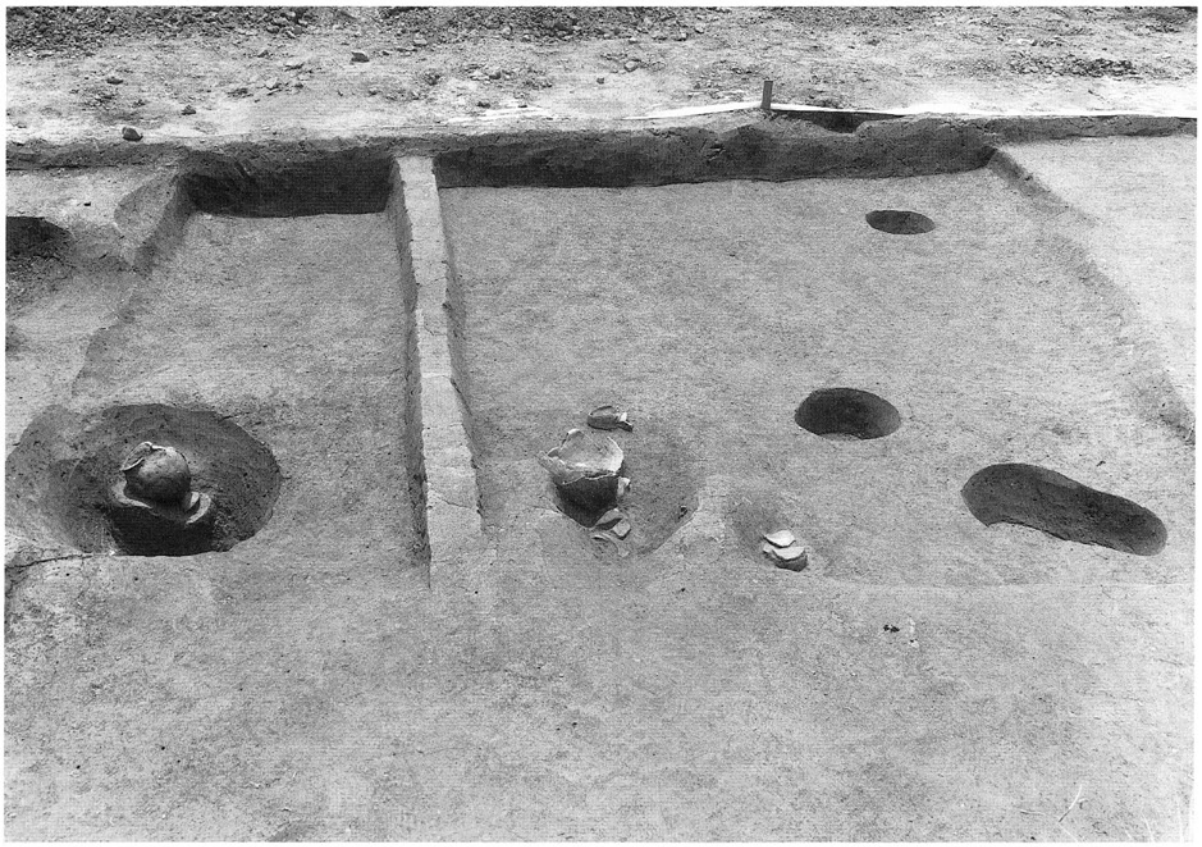
中央土層（南から）

第２面（南から）

竪穴住居ＳＨ552（北西から）

掘立柱建物ＳＢ578（南東から）

B5区　竪穴住居SH五五〇(1)



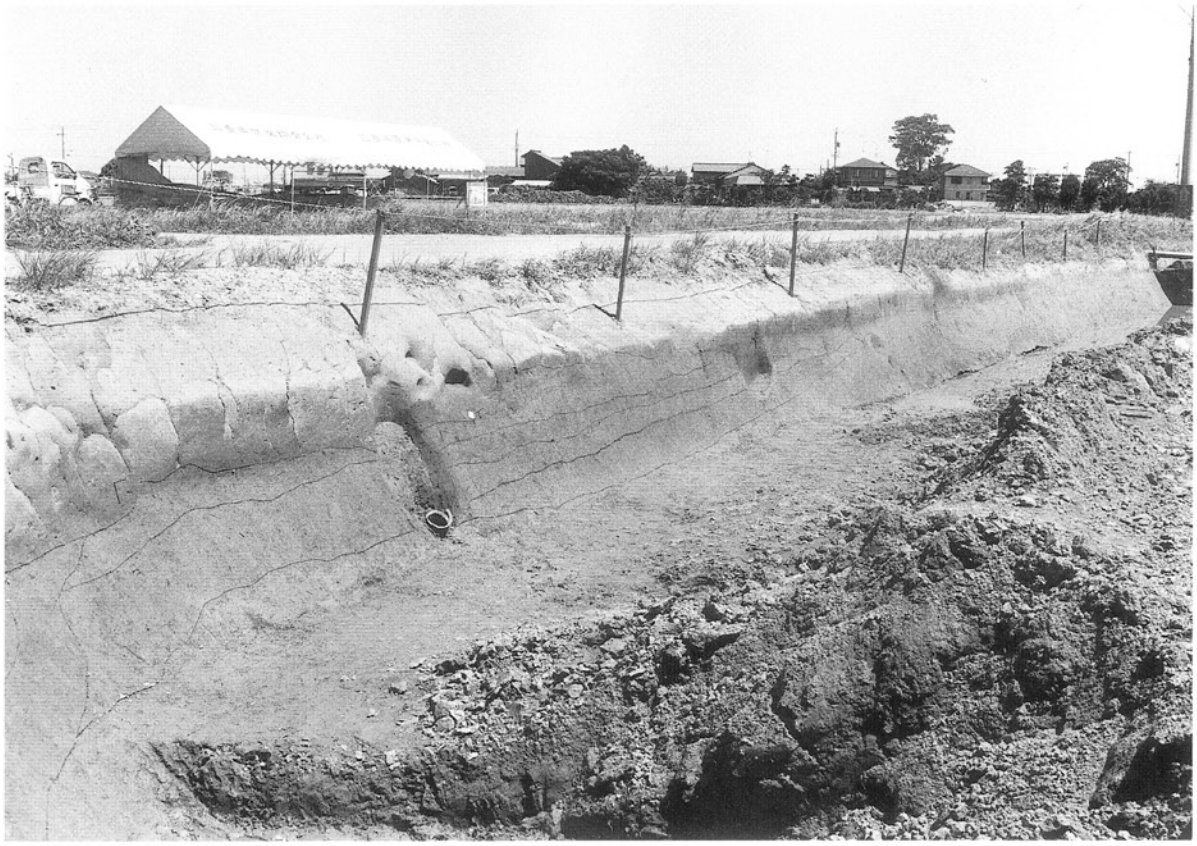
全景（北から）

カマド付近（南から）

台付甕とカマド支柱石の関係（北西から）

貯蔵穴内土器出土状況（北から）

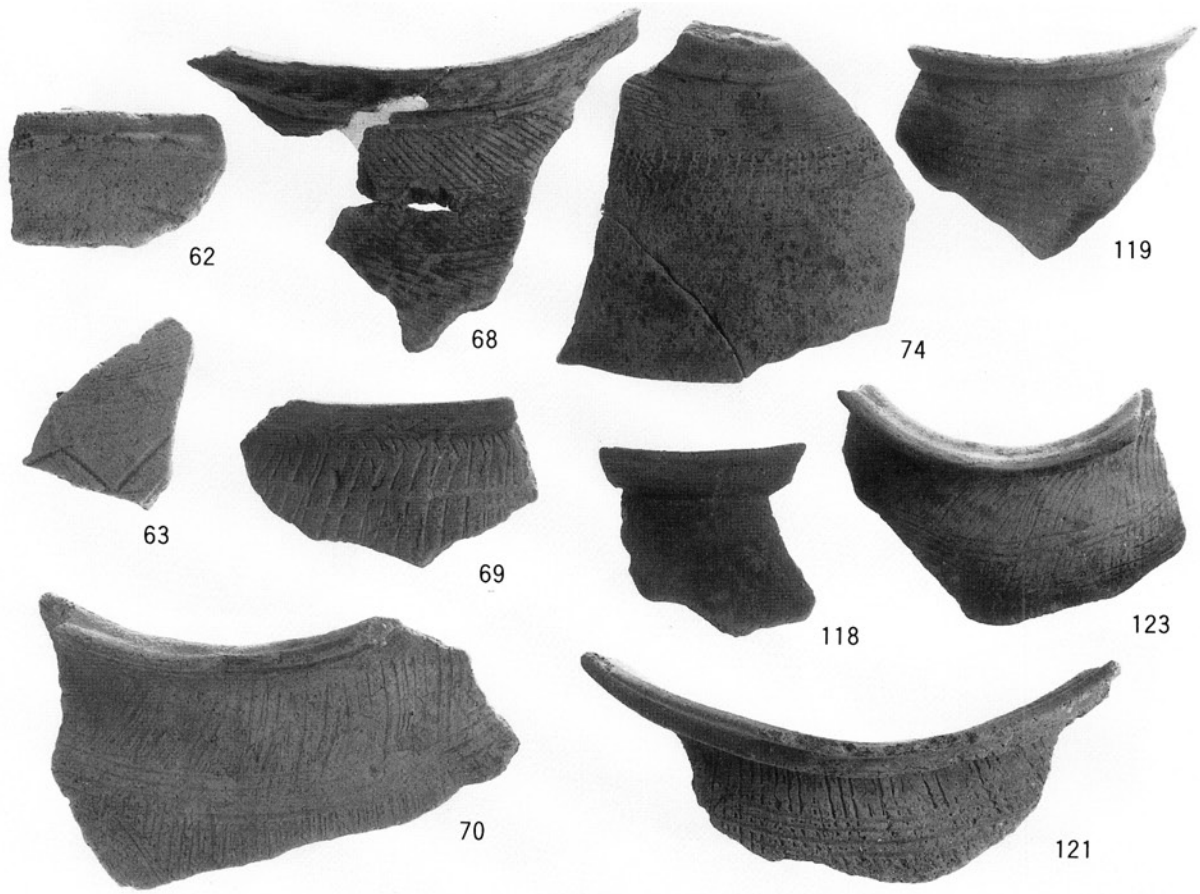
井戸ＳＥ567（北から）



調査区北壁土層・中央部（南西から）

出土遺物(3)　B2区弥土器・土師器

弥生土器



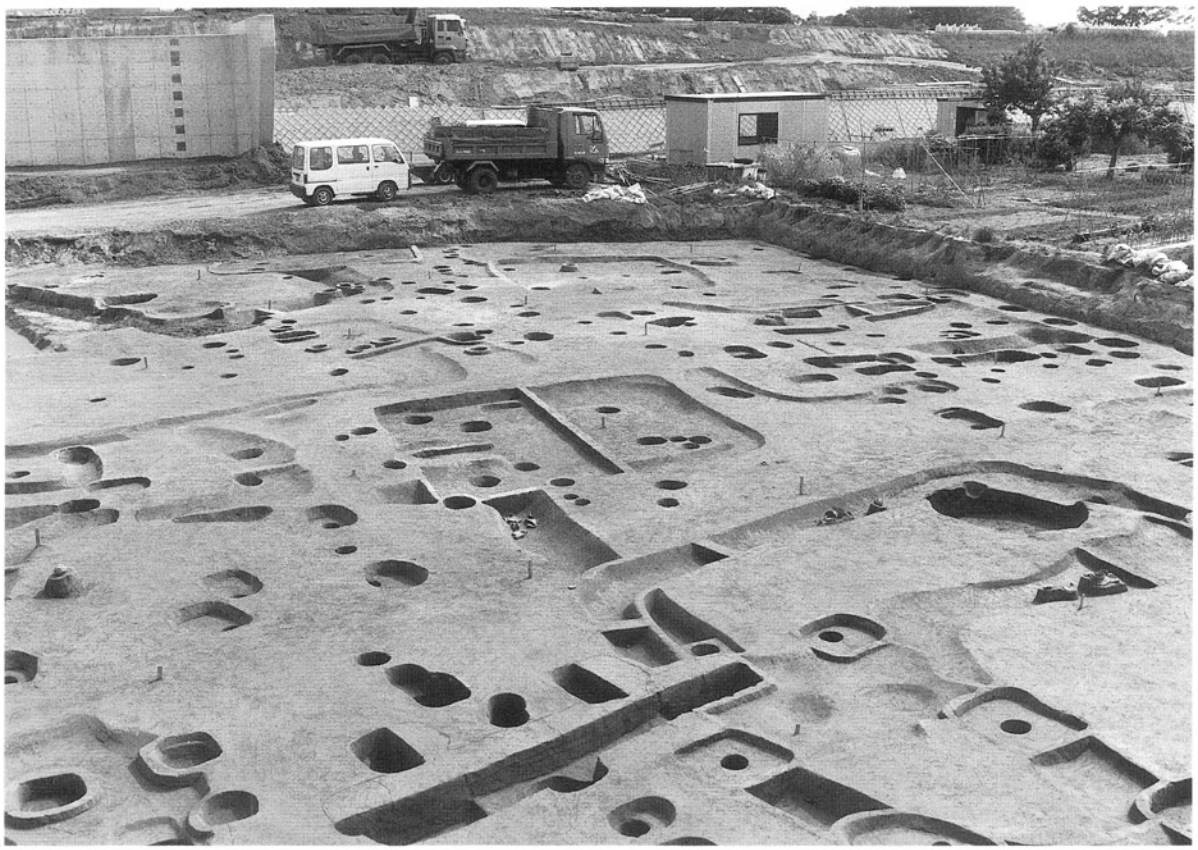
土師器

全景（東から）

土坑ＳＫ322・527・528（北から）

B7区　第二遺構面　全景

北部東半（北から）

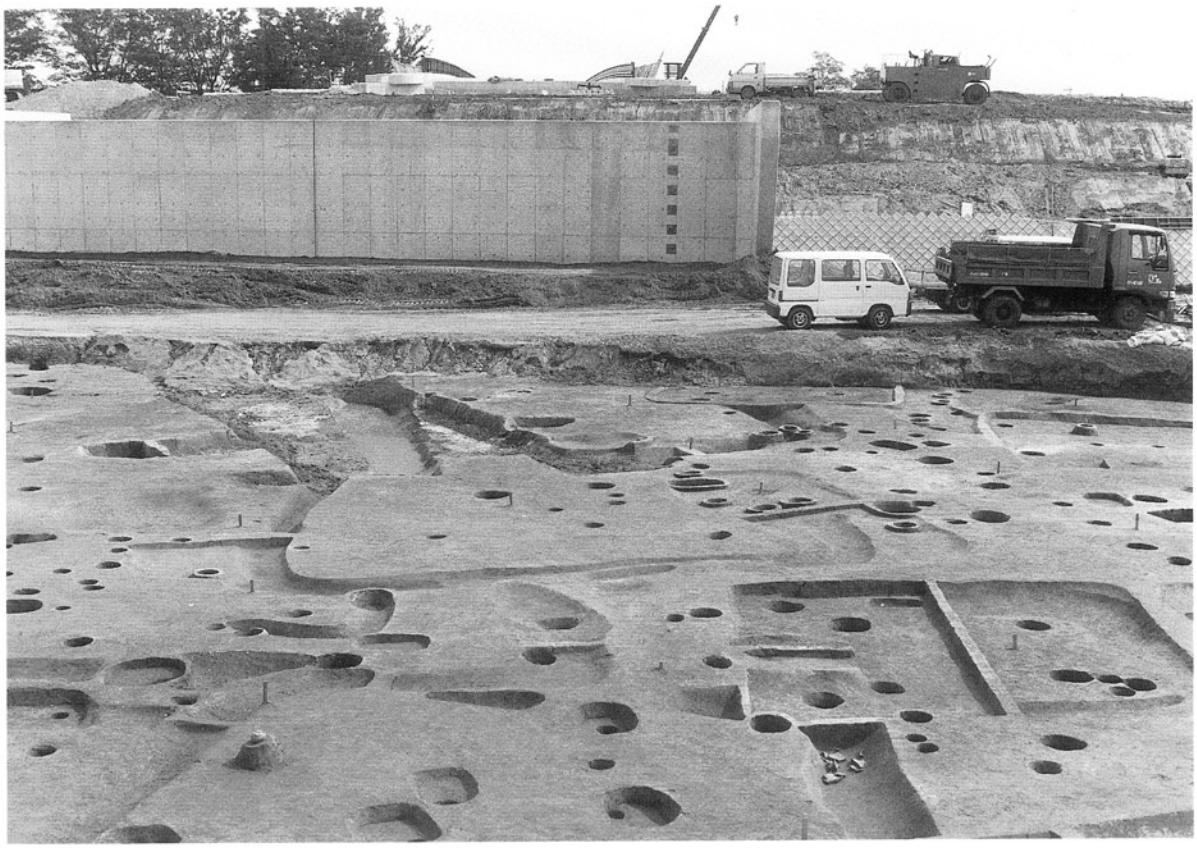


北部西半（北から）

SX364・365（東から）

SX387（東から）

B7区　第二遺構面　周溝SX四八六



全景（北から）

東側周溝外部土器出土状況（北から）

S X486 北東部（東から）

土器群 S Z396（南から）

SX 486（東から）

SX475（奥）とSX477（手前）

S X469（南から）

S X491　土器出土状況（南から）

周溝ＳＸ520・521と掘立柱建物ＳＢ594北側柱列（東から）

落ち込みＳＺ367（西から）

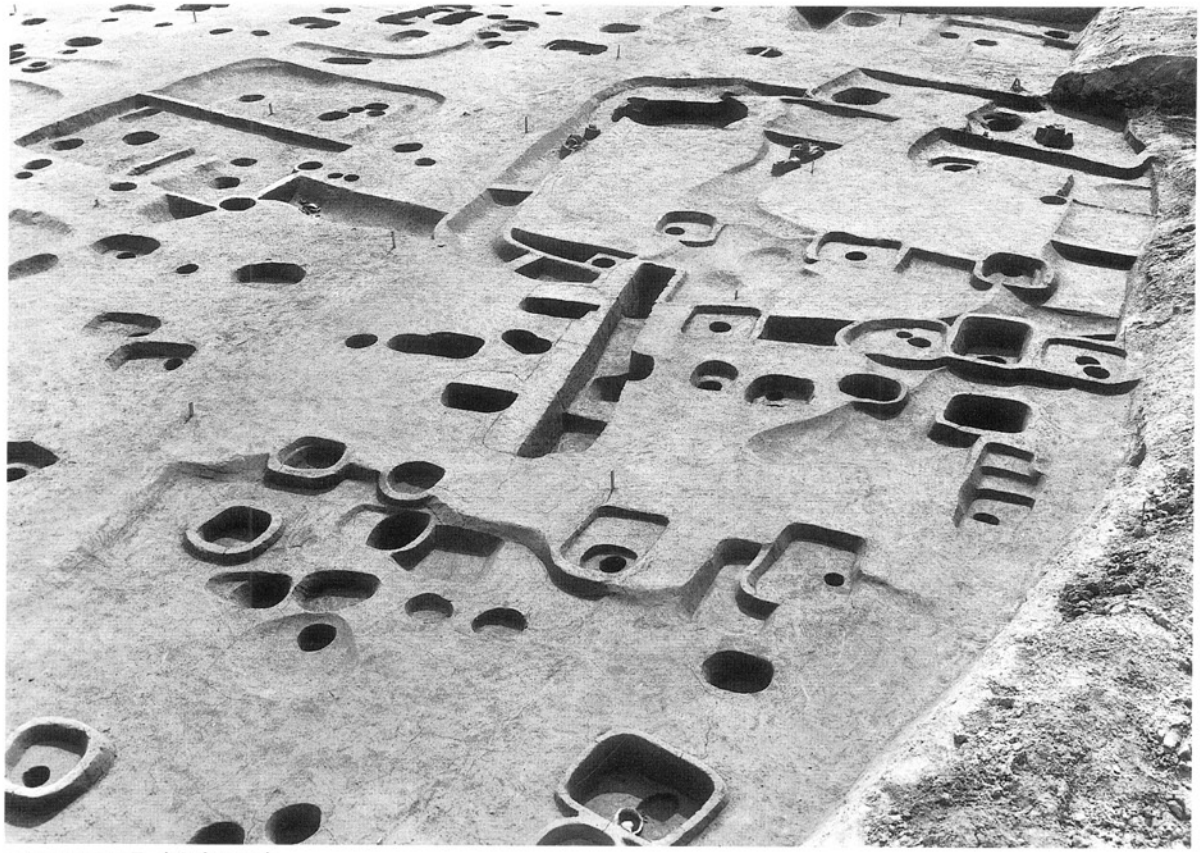
SH413（東から）

SH467・474（南西から）

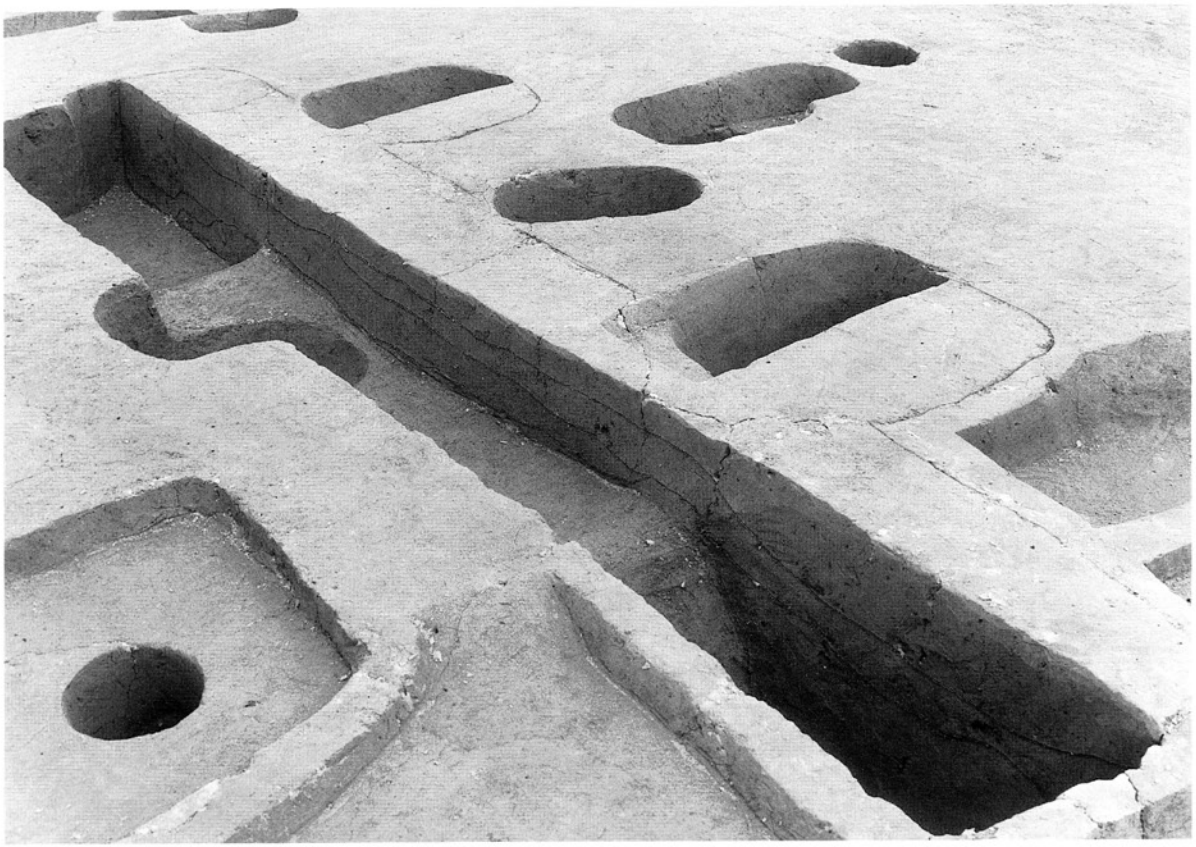
SH479（西から）

SH492カマド（南西から）

SB590・591（北から）

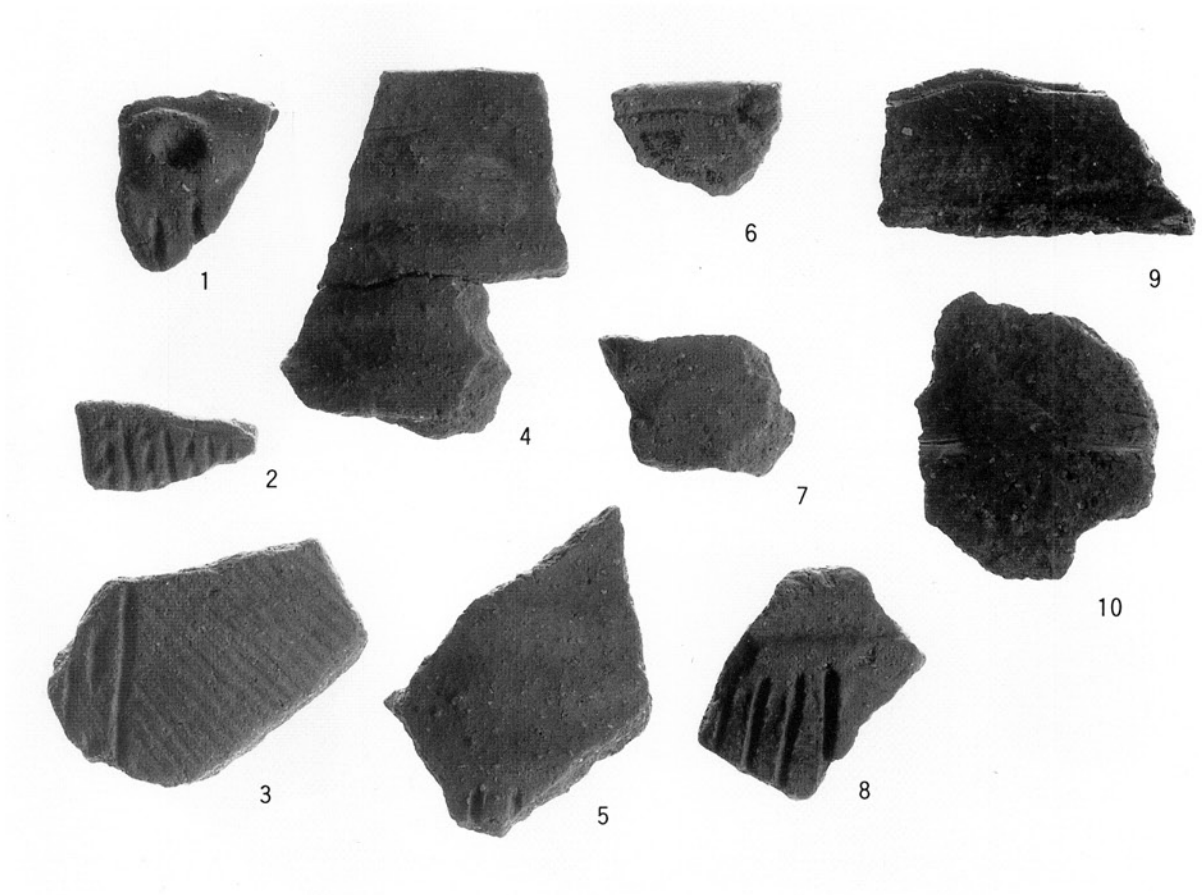


SB591周辺（北東から）

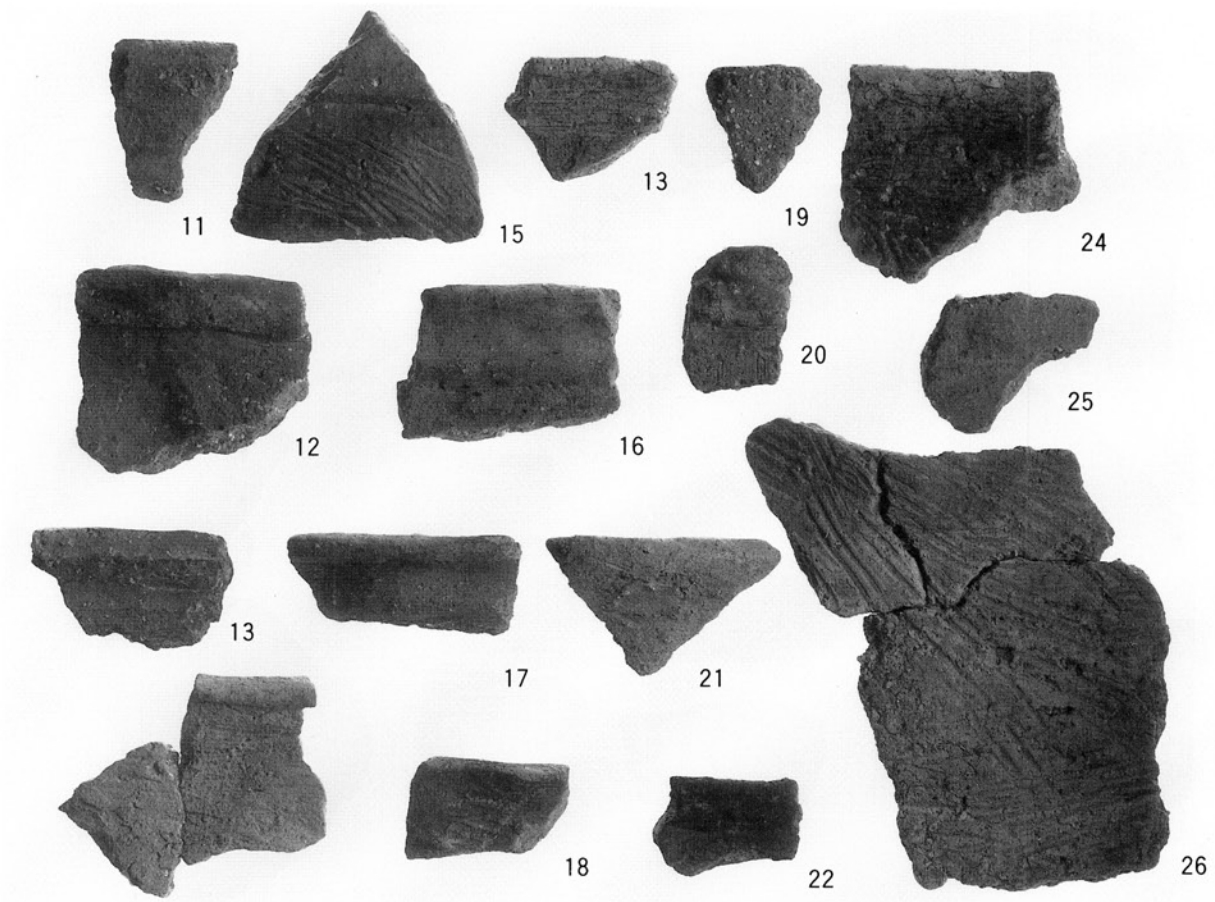


掘立柱建物ＳＢ590　布掘りピット土層（南東から）

竪穴住居ＳＨ374 煙道（南から）

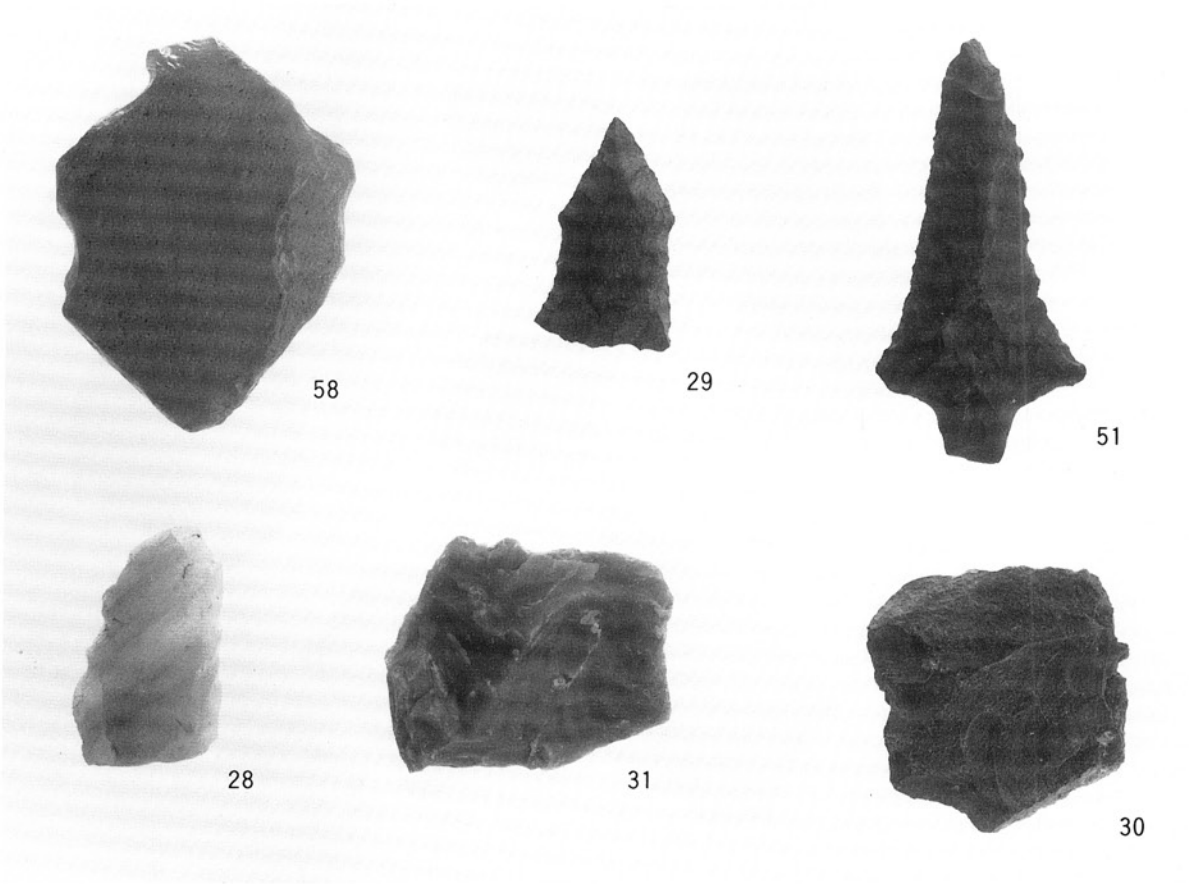


縄文土器

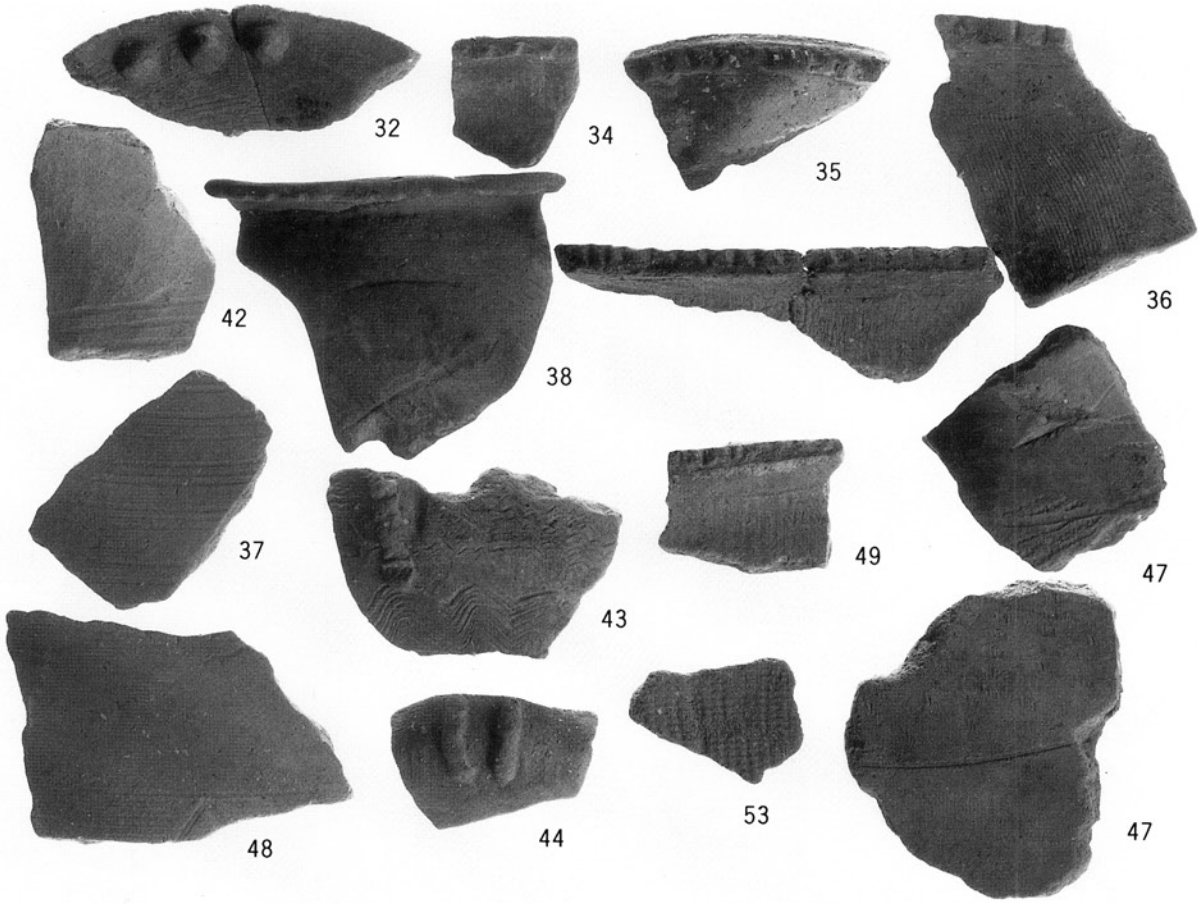


縄文土器

出土遺物(2) 石器・弥生土器

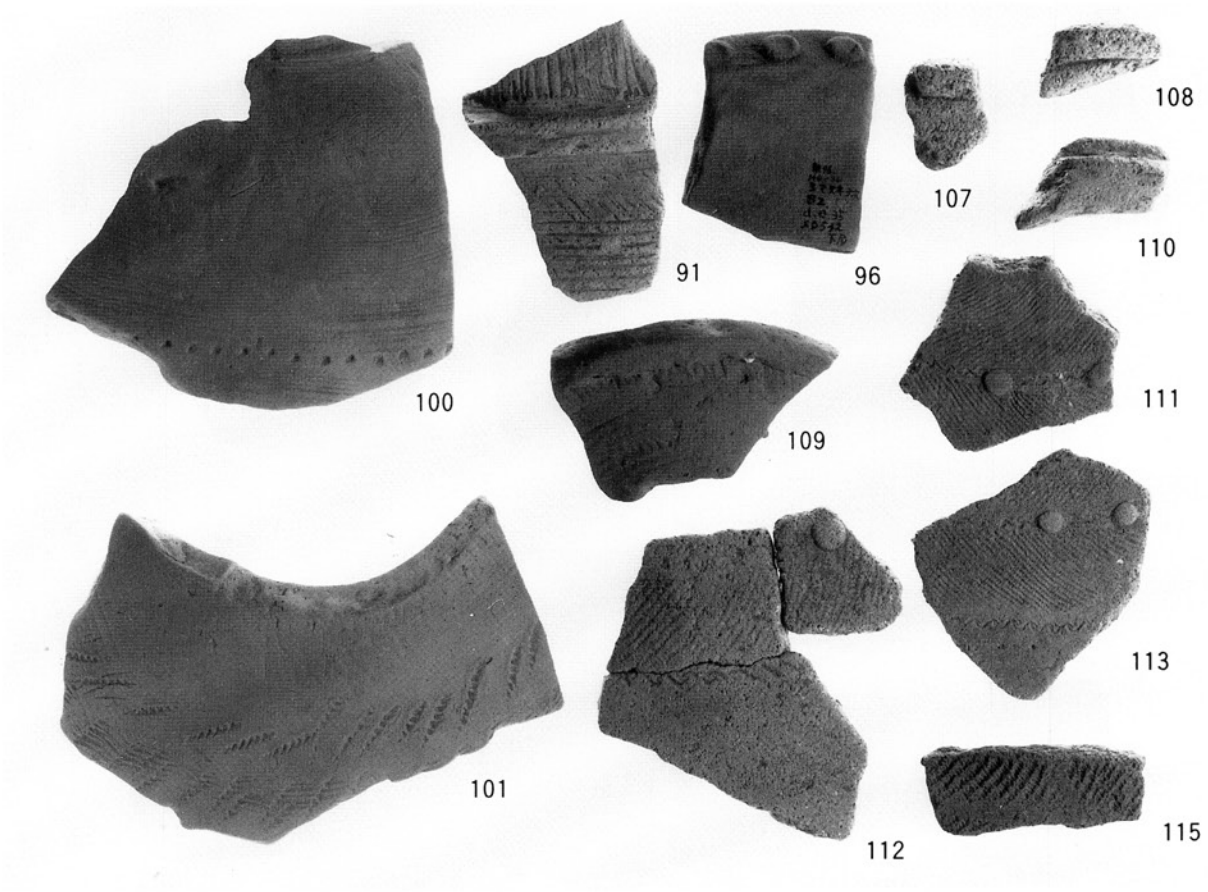


石器

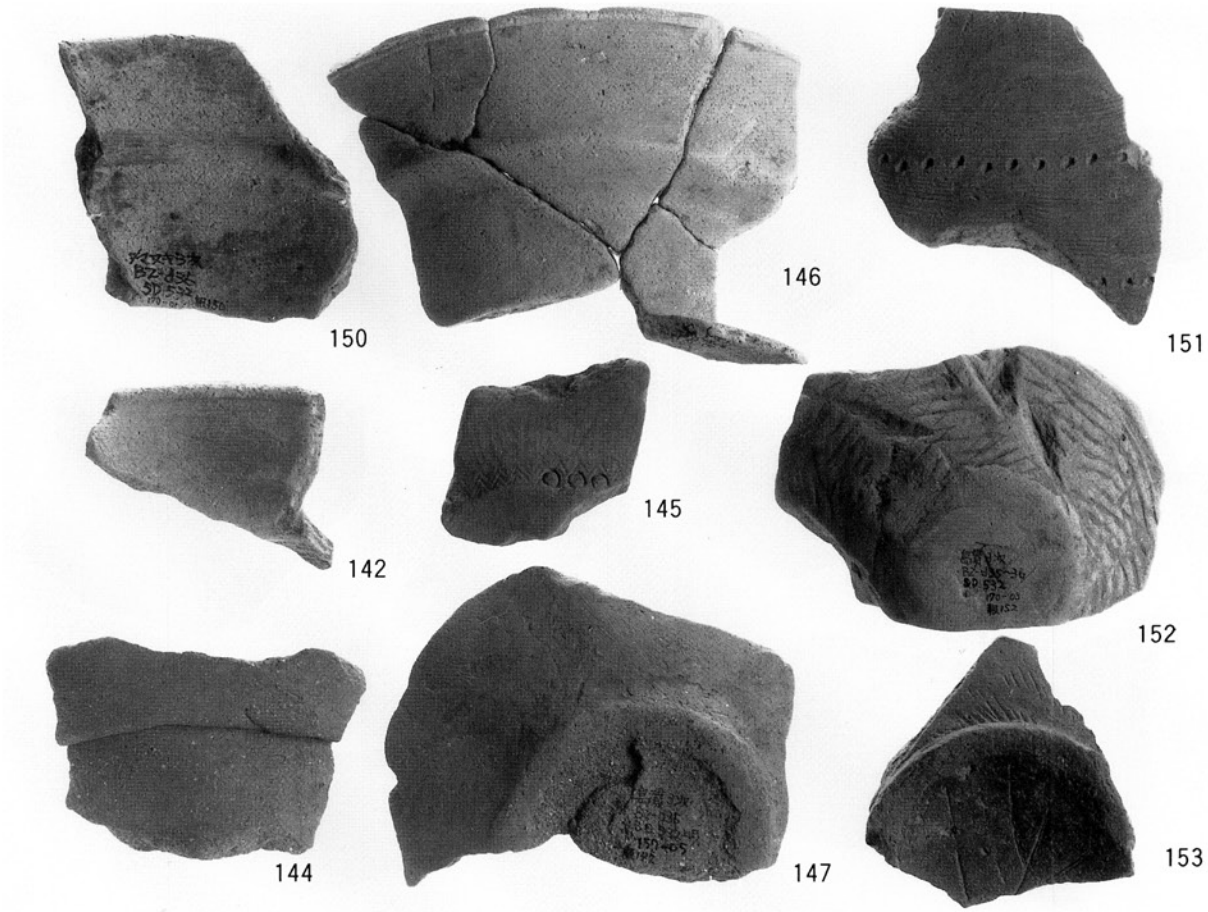


弥生土器

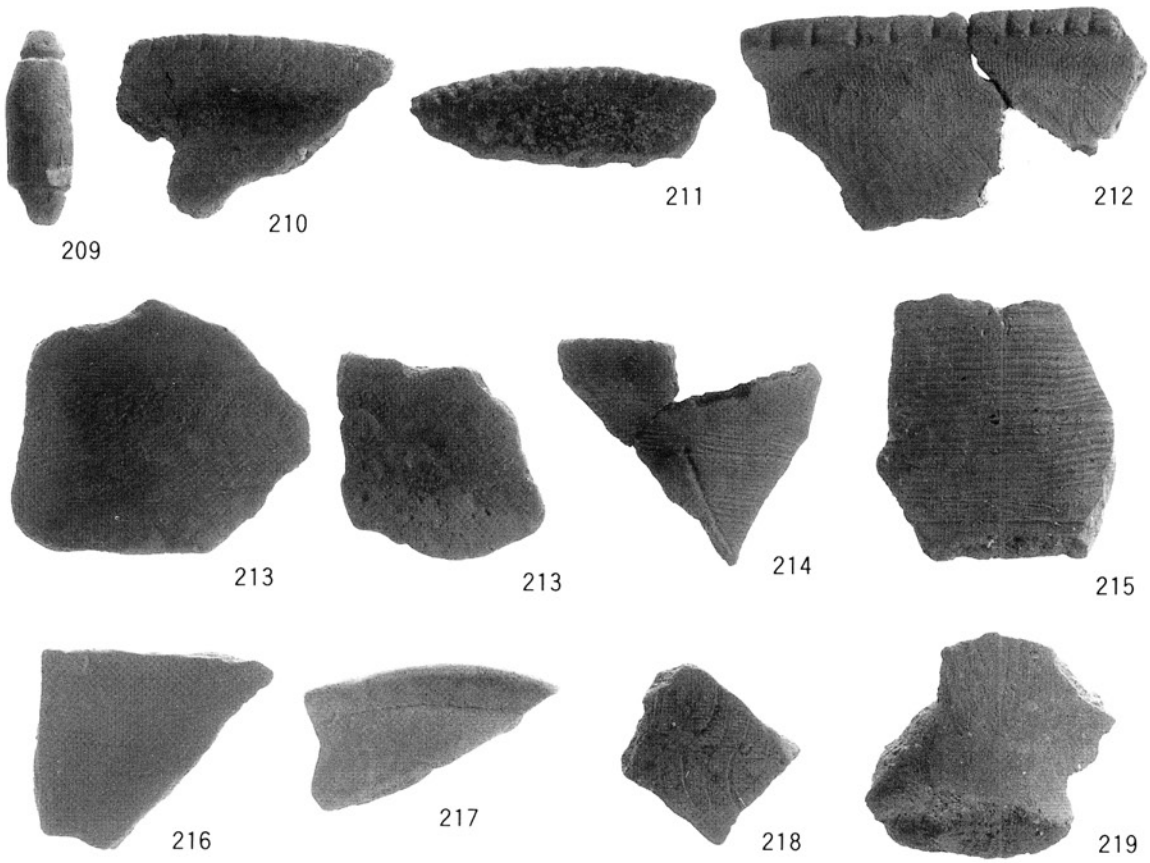
出土遺物(4)　B2区土師器



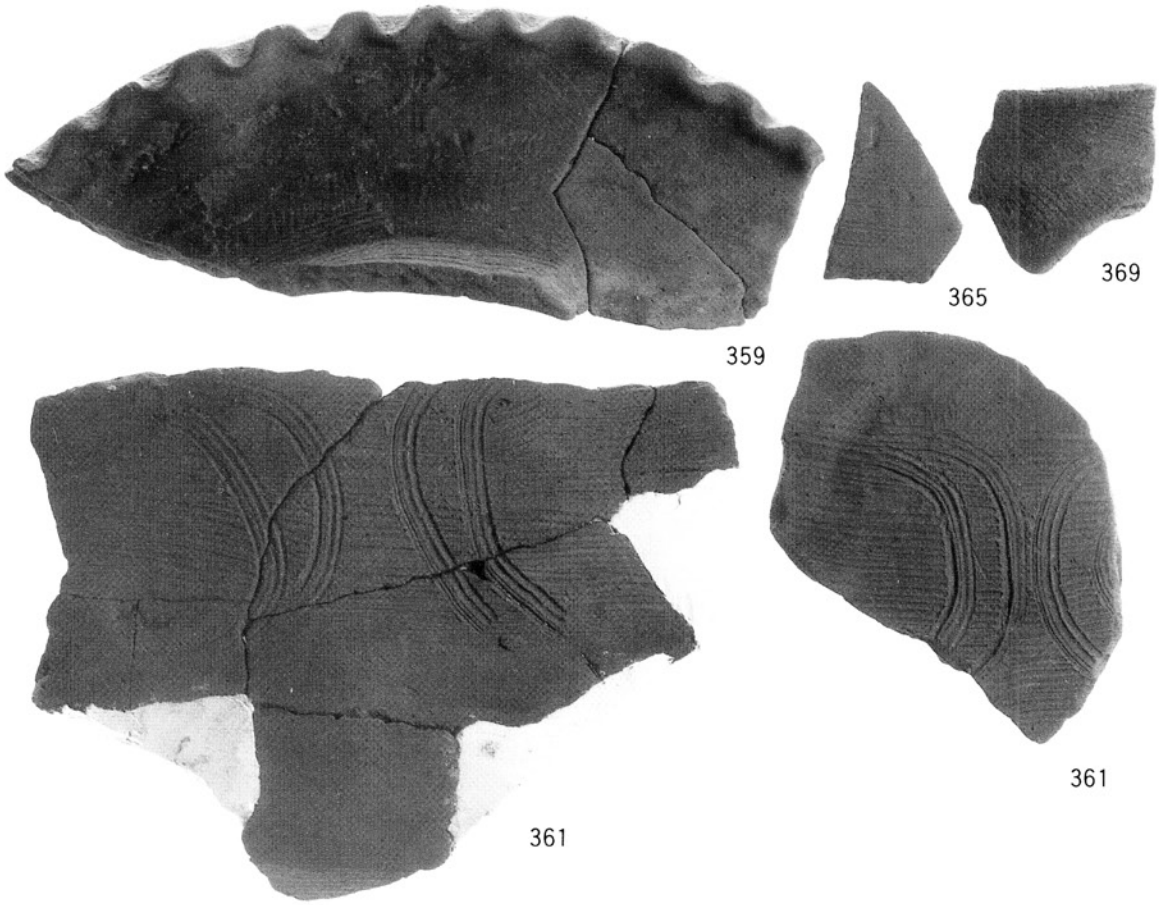
土師器



土師器



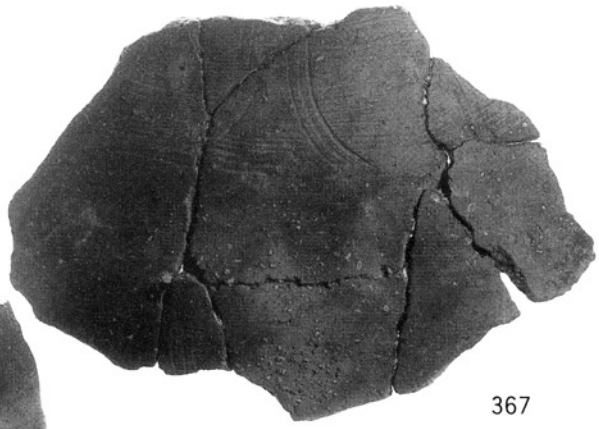
石製品・弥生土器



SH 567 出土土器

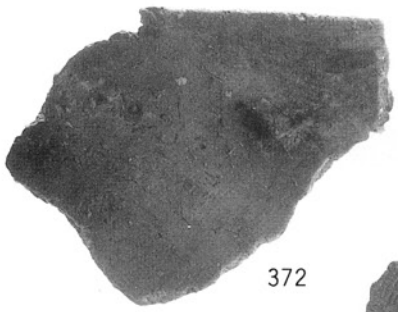
出土遺物(6)　Ｂ５区弥生・土師器

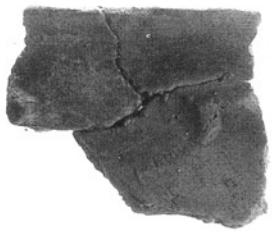
368


367

367

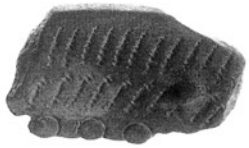
ＳＨ 569 出土土器

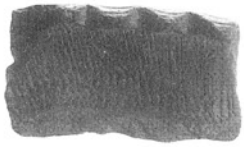

372

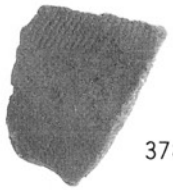

372

374

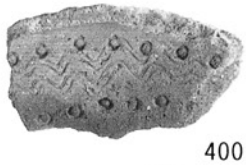
375

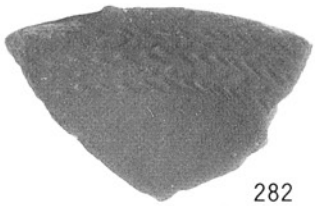

350


377


378

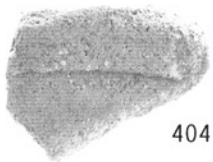
379

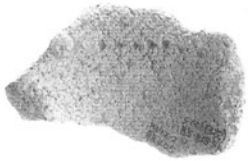

400


282

395

399

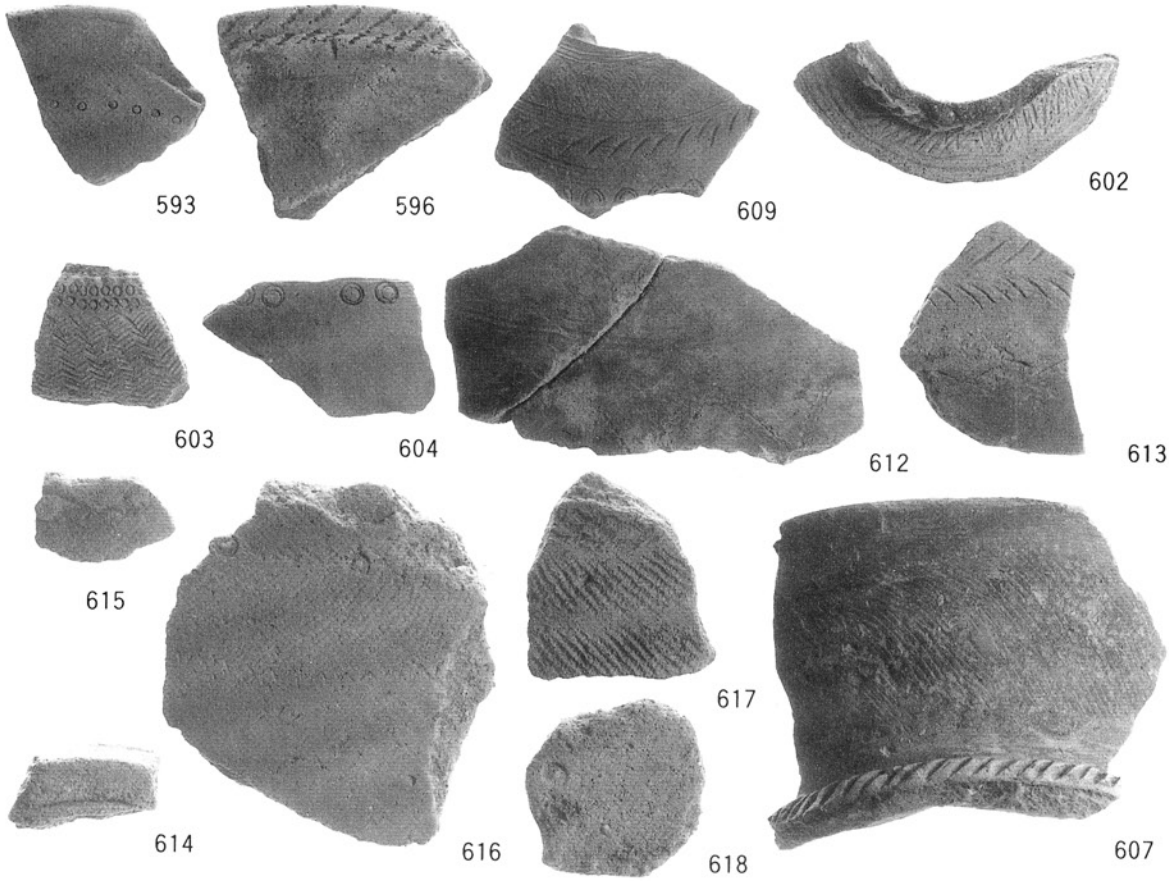

404


405

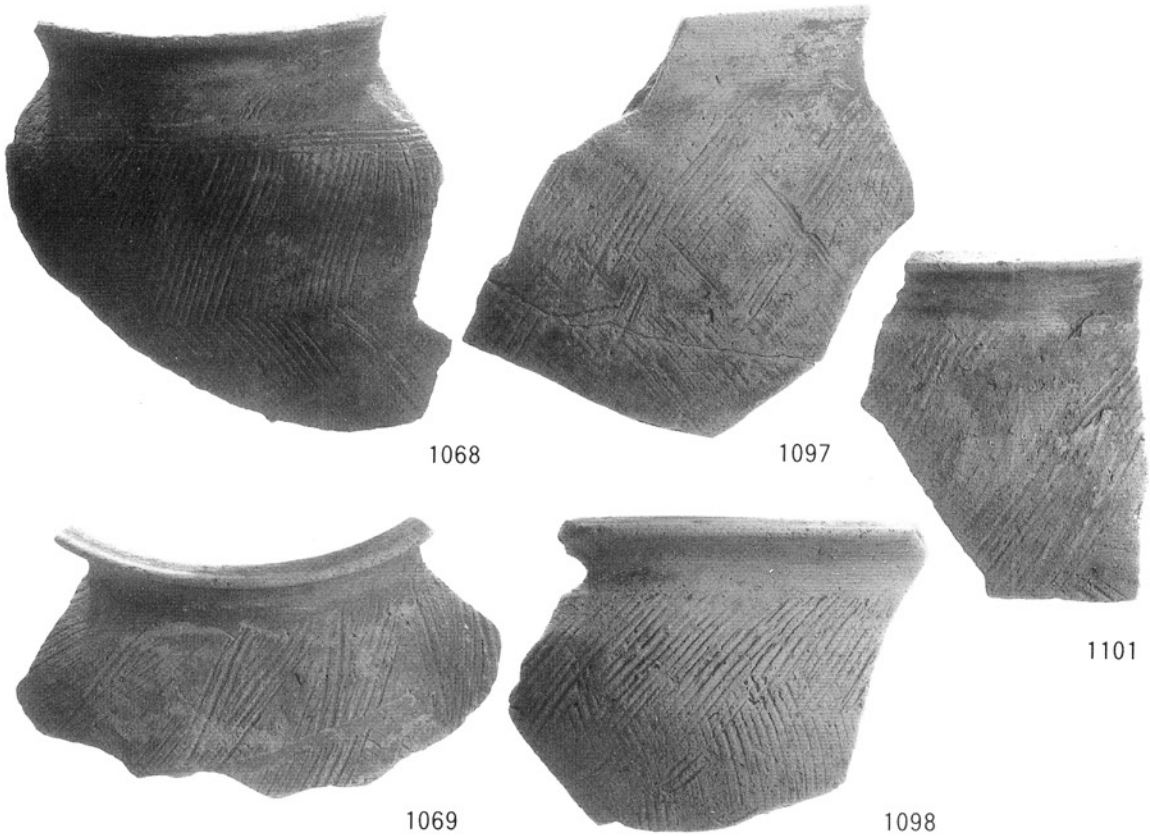
407

408

弥生土器



B5区SD532出土土器



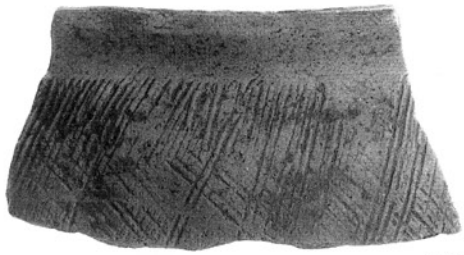
B7区SZ367出土土器

1118

1119

SZ 367 出土土管

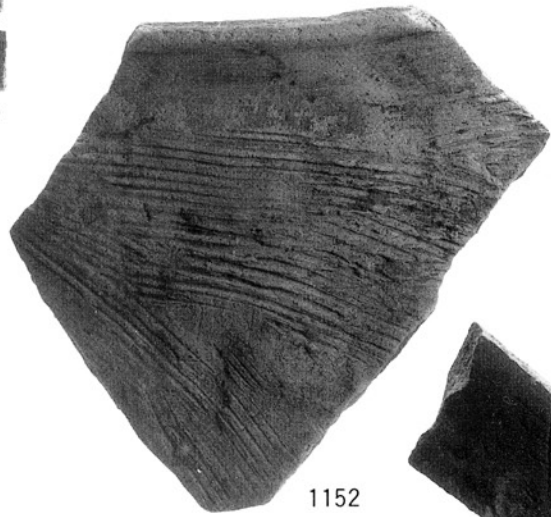
1106



1145

1188

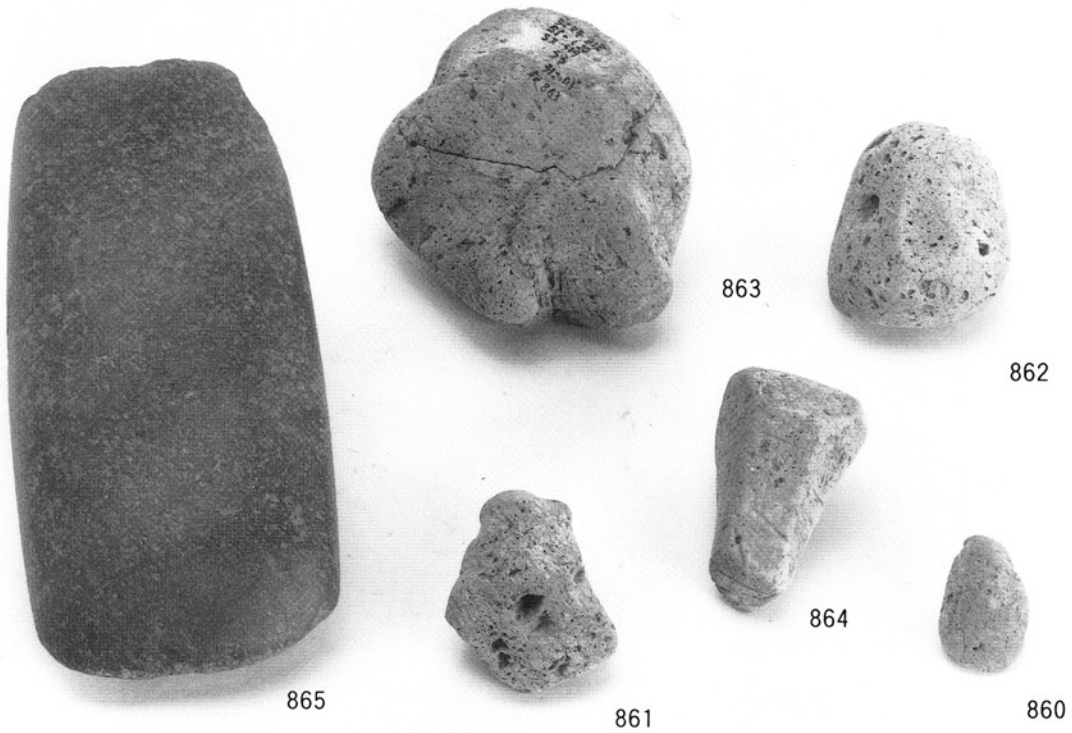
1230



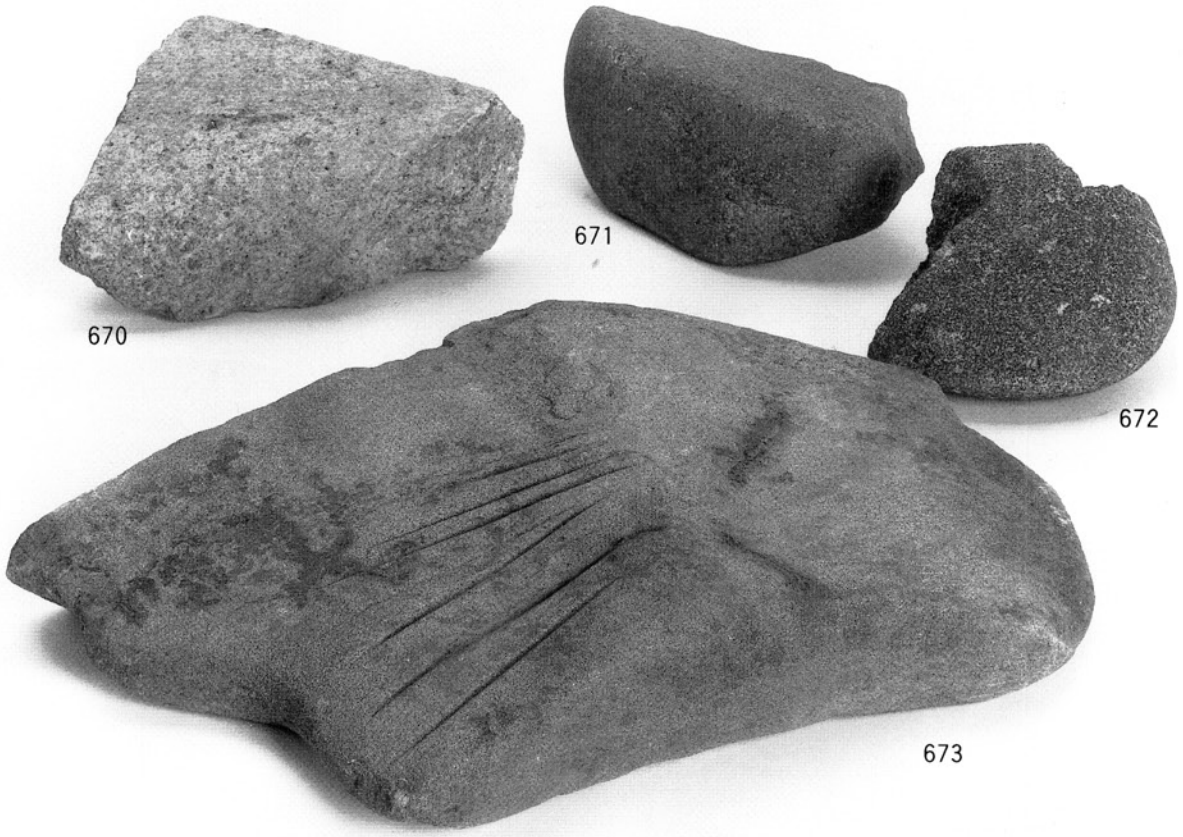
1152

1338

石製紡錘車・土師器

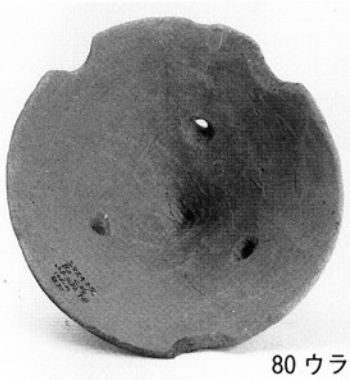


Ｂ７区ＳＺ517出土　磨製石斧・砥石



Ｂ５区ＳＤ532　出土磨石・砥石

80


80 ウラ

83

86

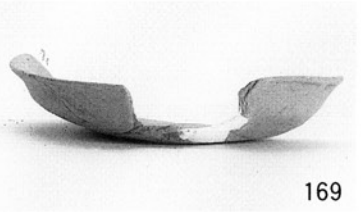
89

114

137

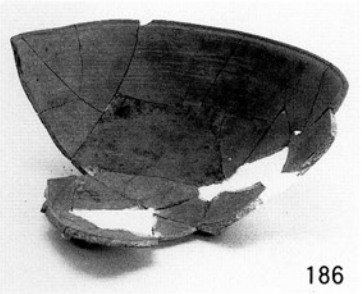
163

165


169

177

178


186

223

230

234

237

246

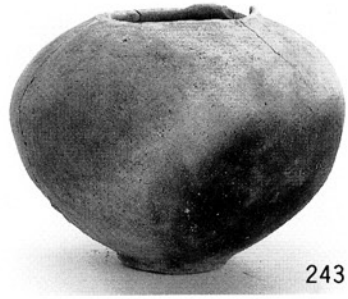
250

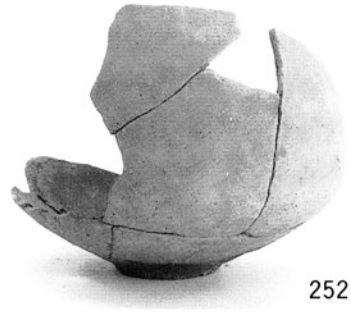
235

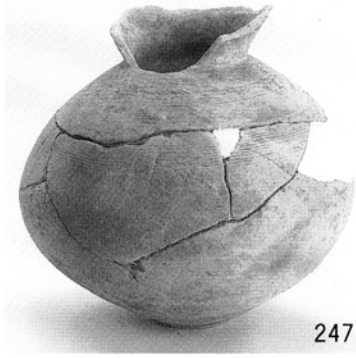
242

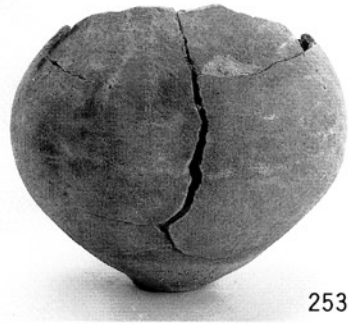
251

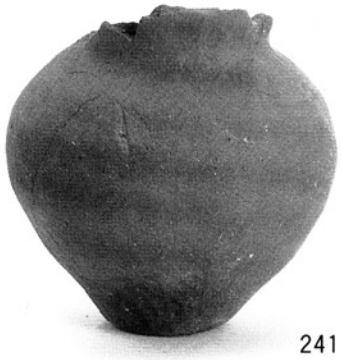
236


243


252


247


253

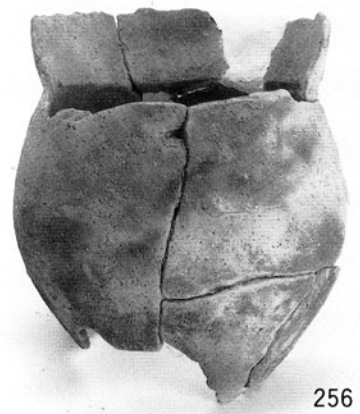

241

出土遺物(12)　B4区

255

260

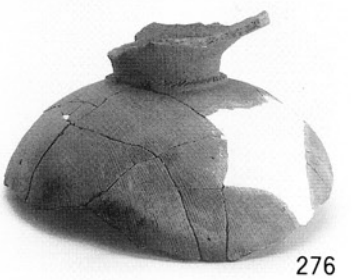
284


256

273

292

257


276

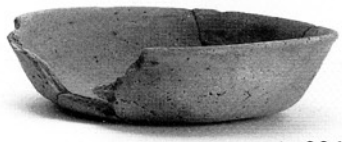
321

259

281

330

327


334

336

337

337ウラ

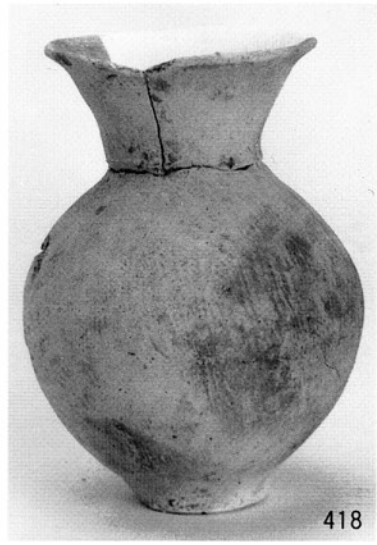
341

342

347

350

354


418

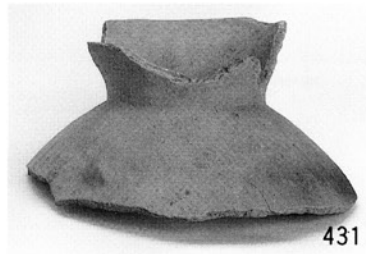
419

420

423

424

425


431

出土遺物(14)　B5区

432

445

449

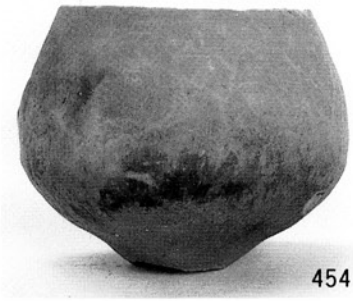
436

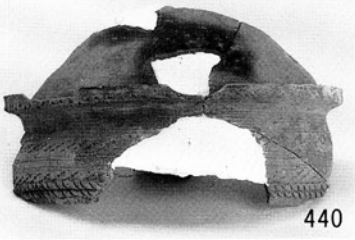
452

437

446

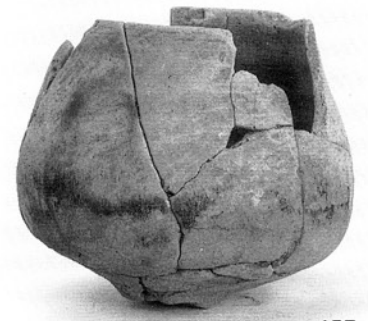
439


454


440

447

456


457

458

459

462

464

467

468

475

478

486

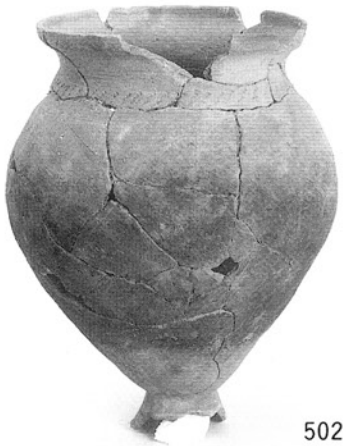
487

489

492

496

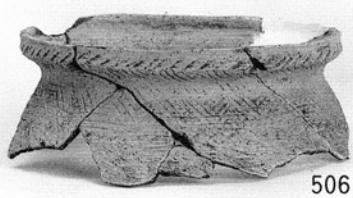
出土遺物(16)　B5区


502

503

504

505


506

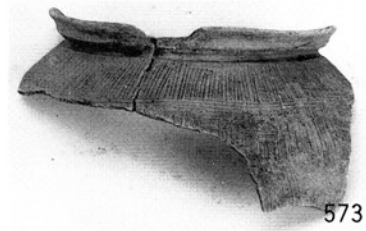
507

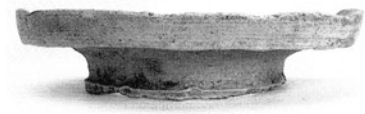
511

511

525

537

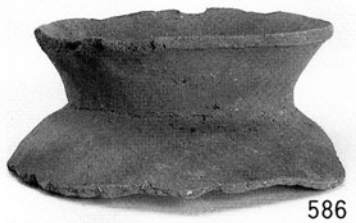

573


578

579

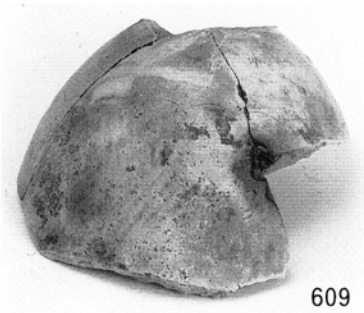
580

581


586

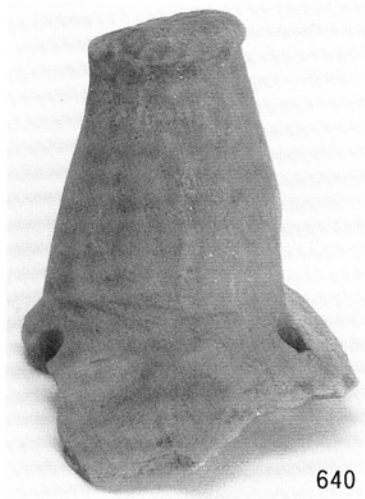
592

594


609

633

645


640

655

685

691

707

700

708

709

711

出土遺物(18)　B5区

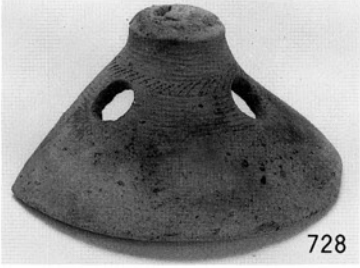
714

720

722

723

724

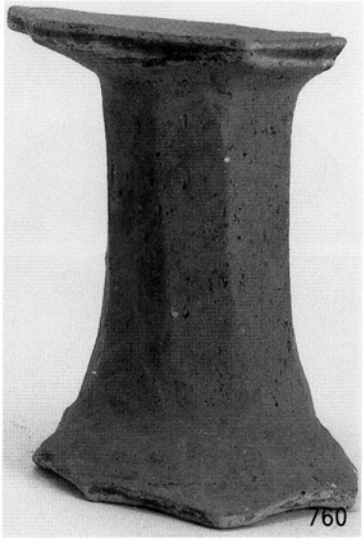

728

733

736

740

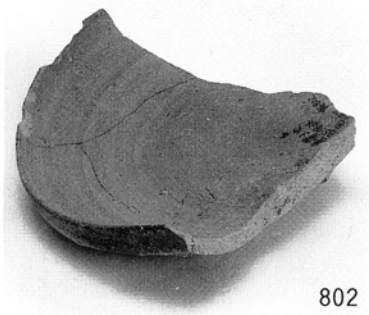
759


760

779

780

784


802

807

808

808ウラ

809

810

811

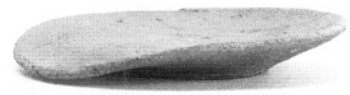
813

814

墨書「申」 824

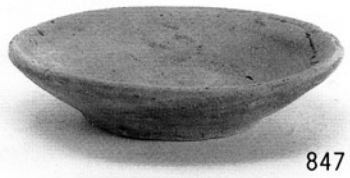
835

841


842

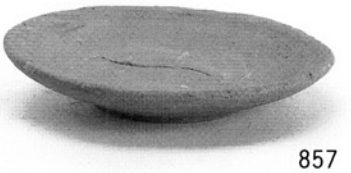
844

845


847

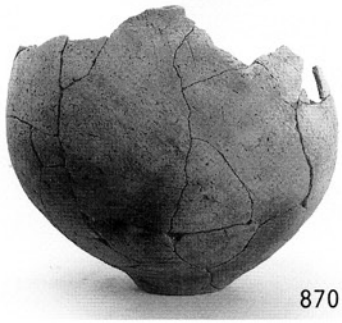
849

854

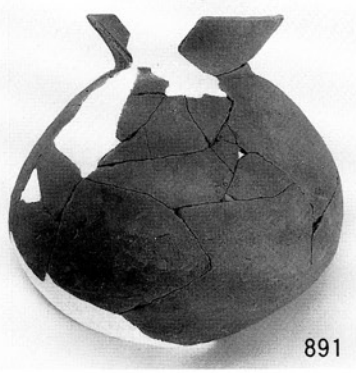

857

出土遺物(20)　B7区

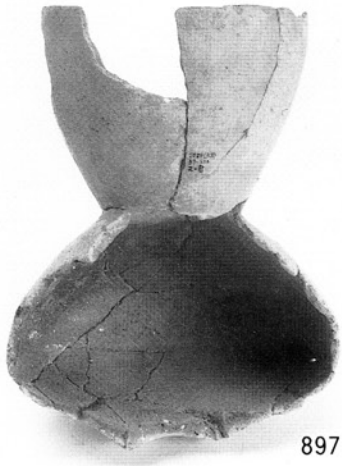
869


870

880


891

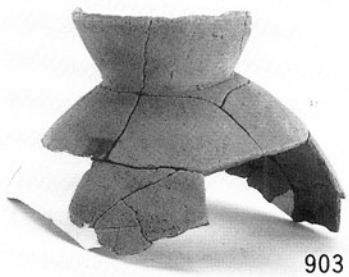
892

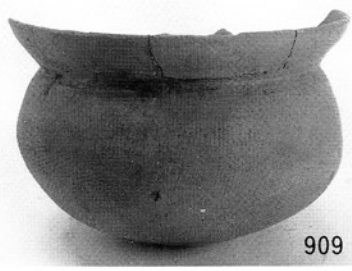

897

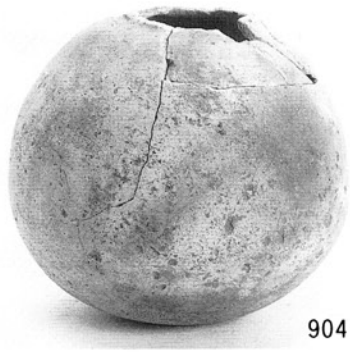
898

901

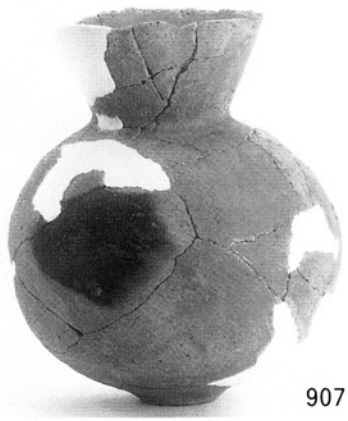
902


903


909


904

906


907

911

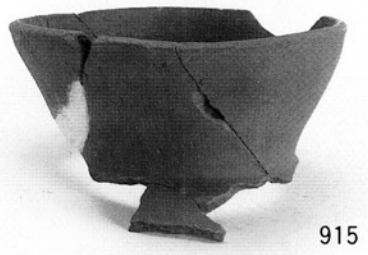
出土遺(21)

B7区

914

918

925


915

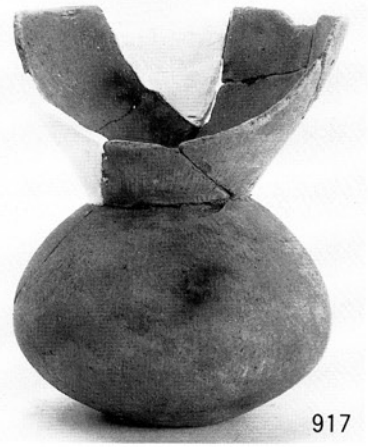
919

926

916

922

927


917

924

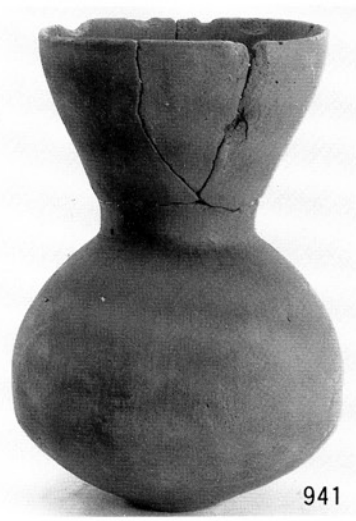
930

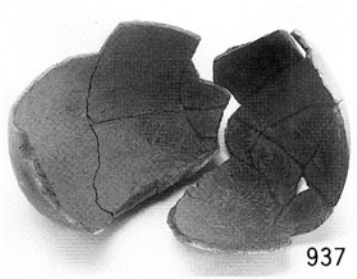
出土遺物㉒　B7区

935

939

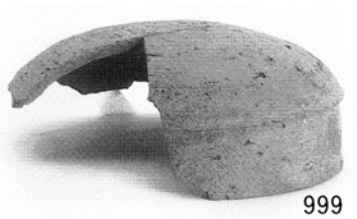
940


941


937

944

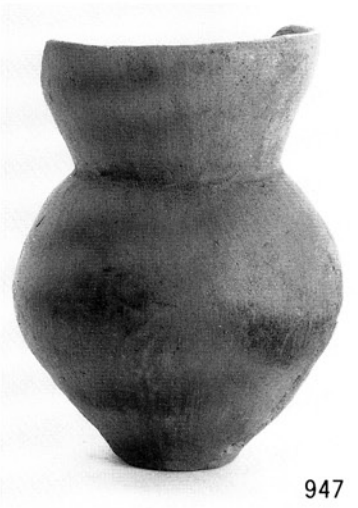
945


999

1001

1002

946


947

960

1004

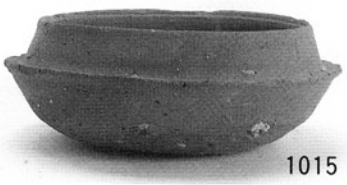
1006

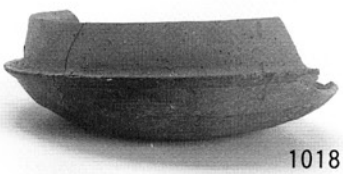
1007

出土遺物(23)　B7区

1010

1011


1015


1018

1025

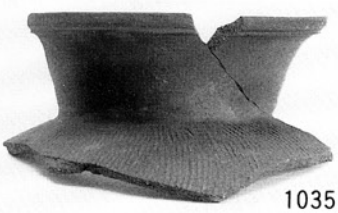
1026

1027

1028

1031

1033

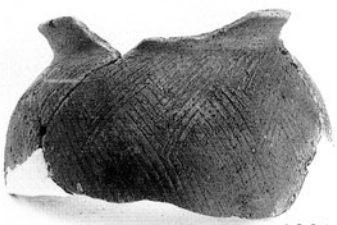

1035

1037

1041

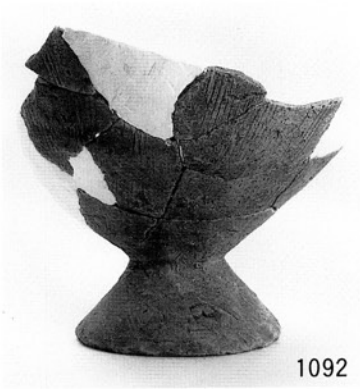
1049

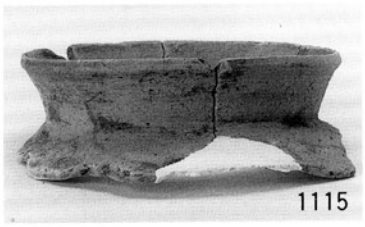
1050


1061

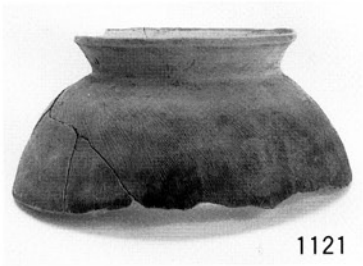
1071

1078


1092


1115

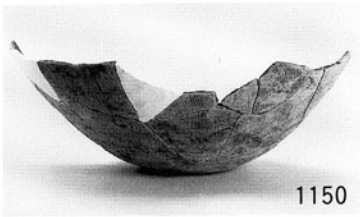
1117


1121

1122

1133

1144


1150

1154

1156

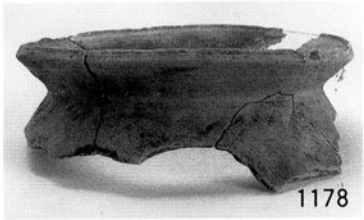
1160

1161

1169

1172

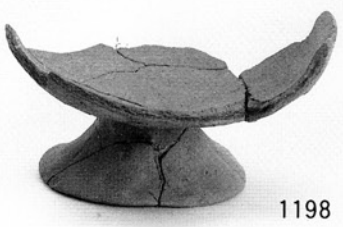
1175


1178

1181

1185

1197


1198

1204

1218

1221

1244

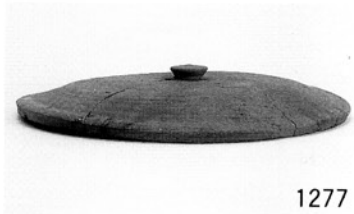
1250

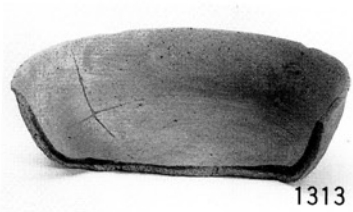
1263

1264

1270

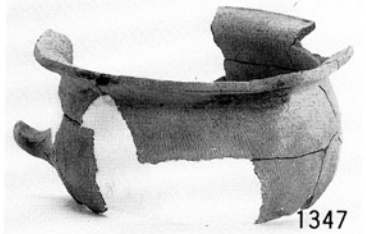
1275


1277

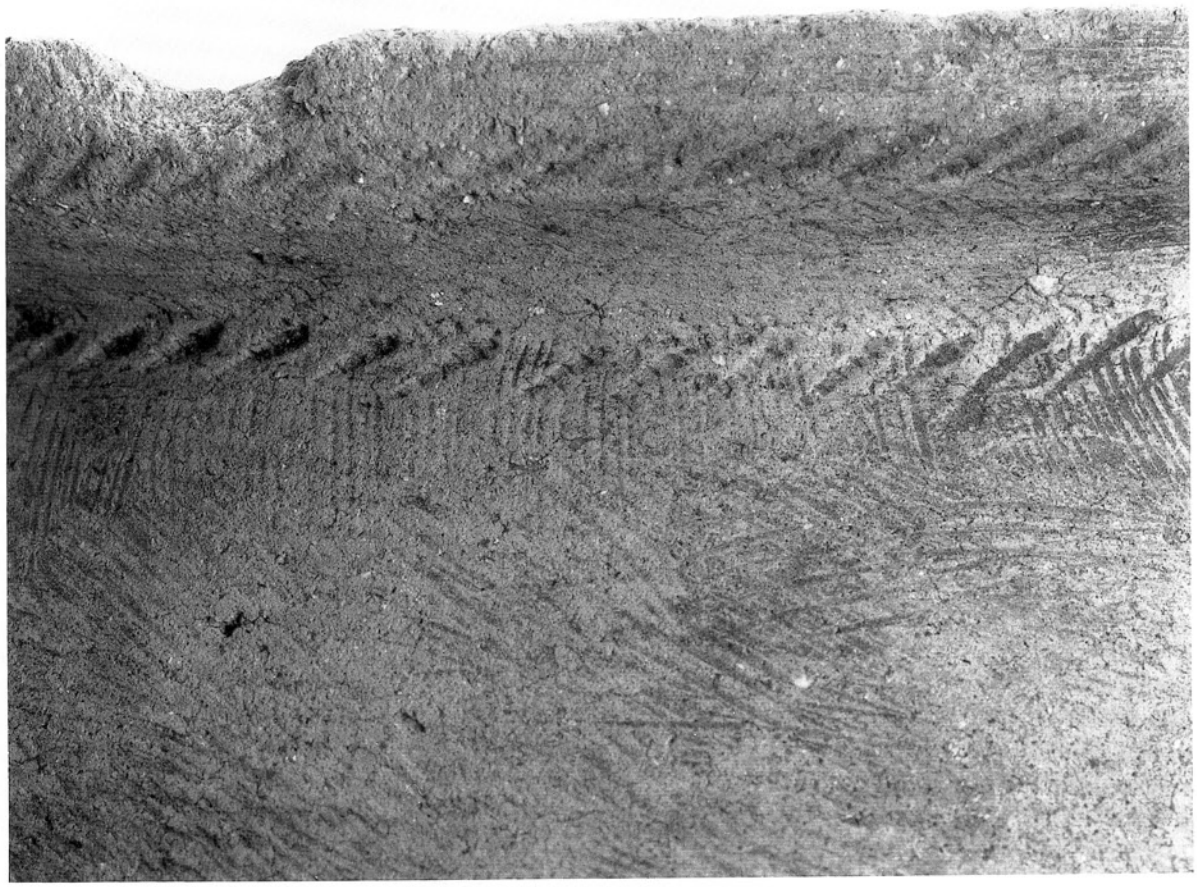

1313

1316

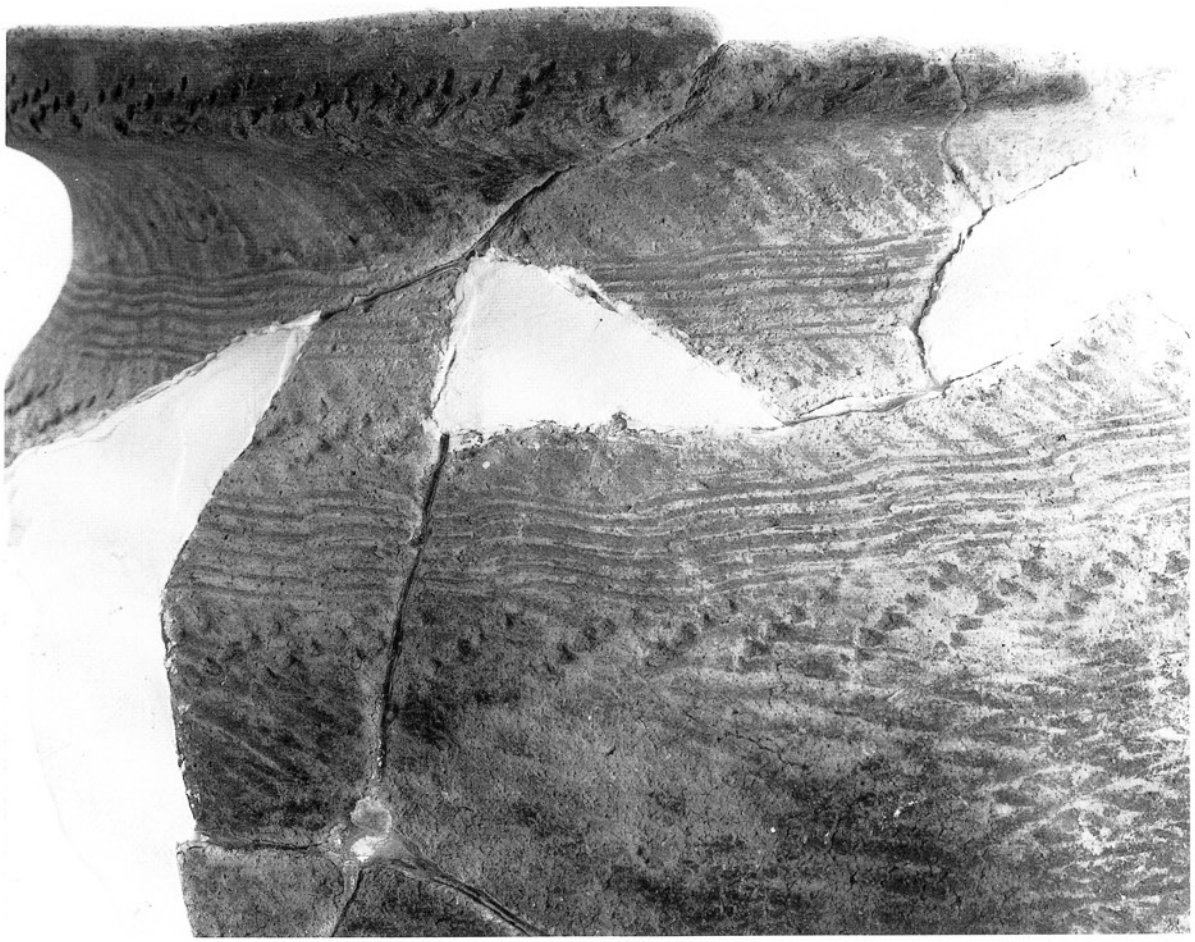
1337


1347

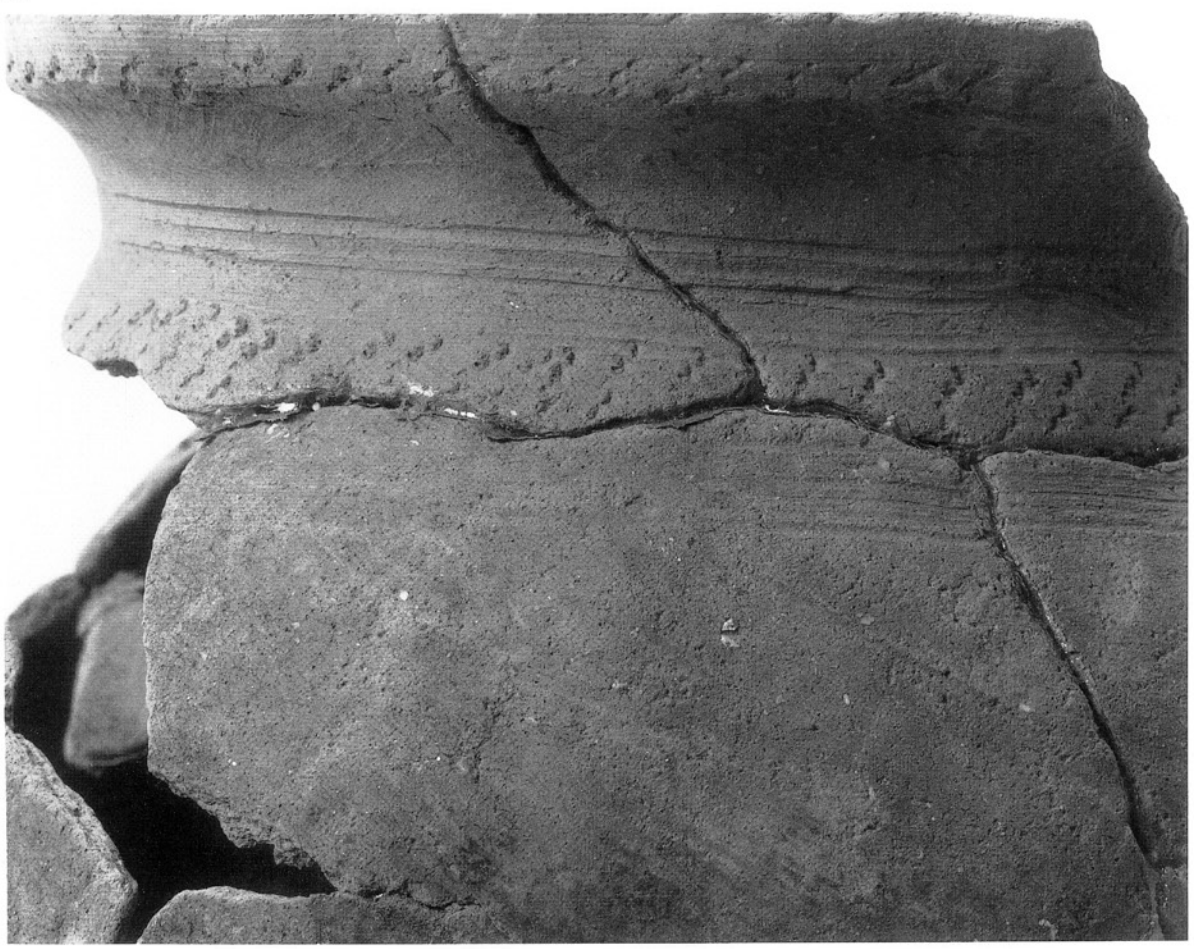
505



504



503

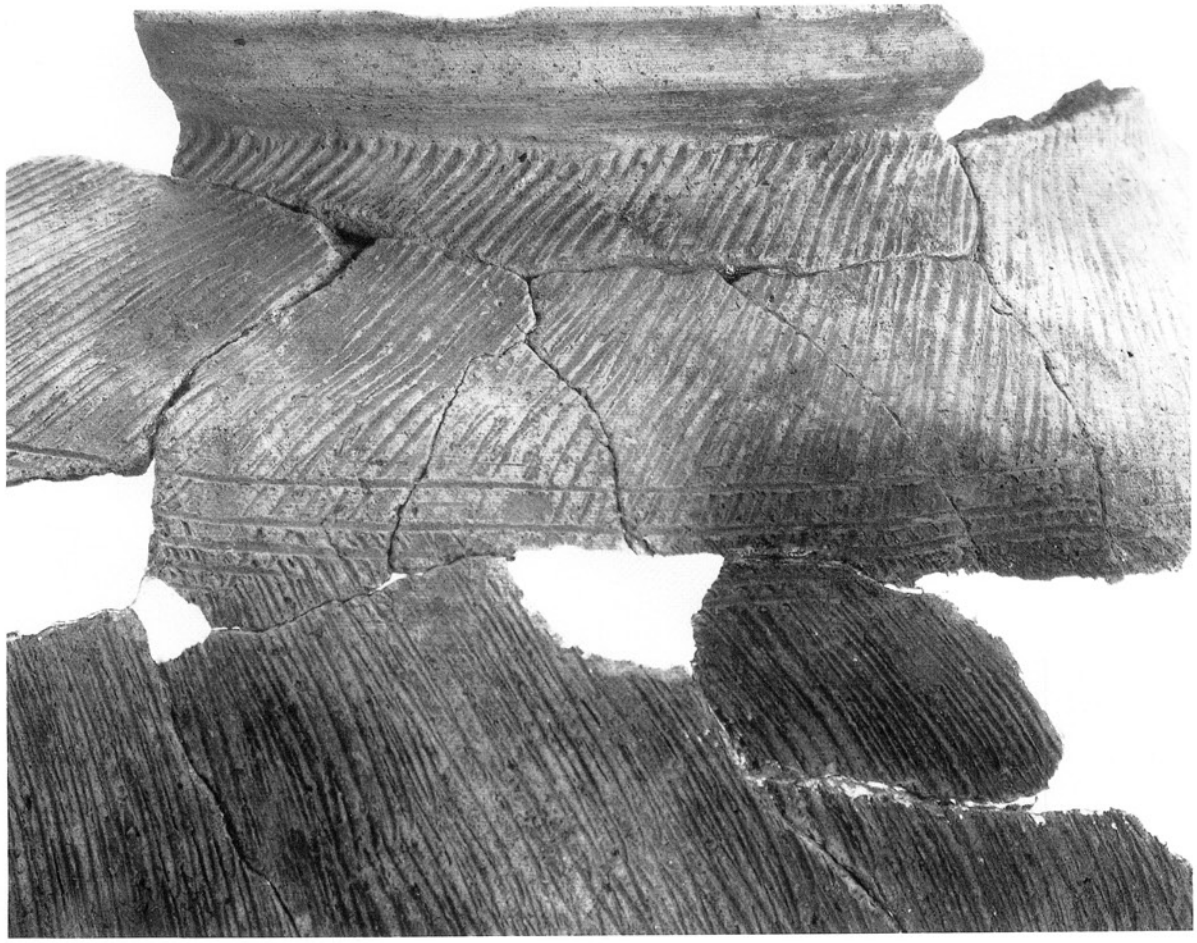


502

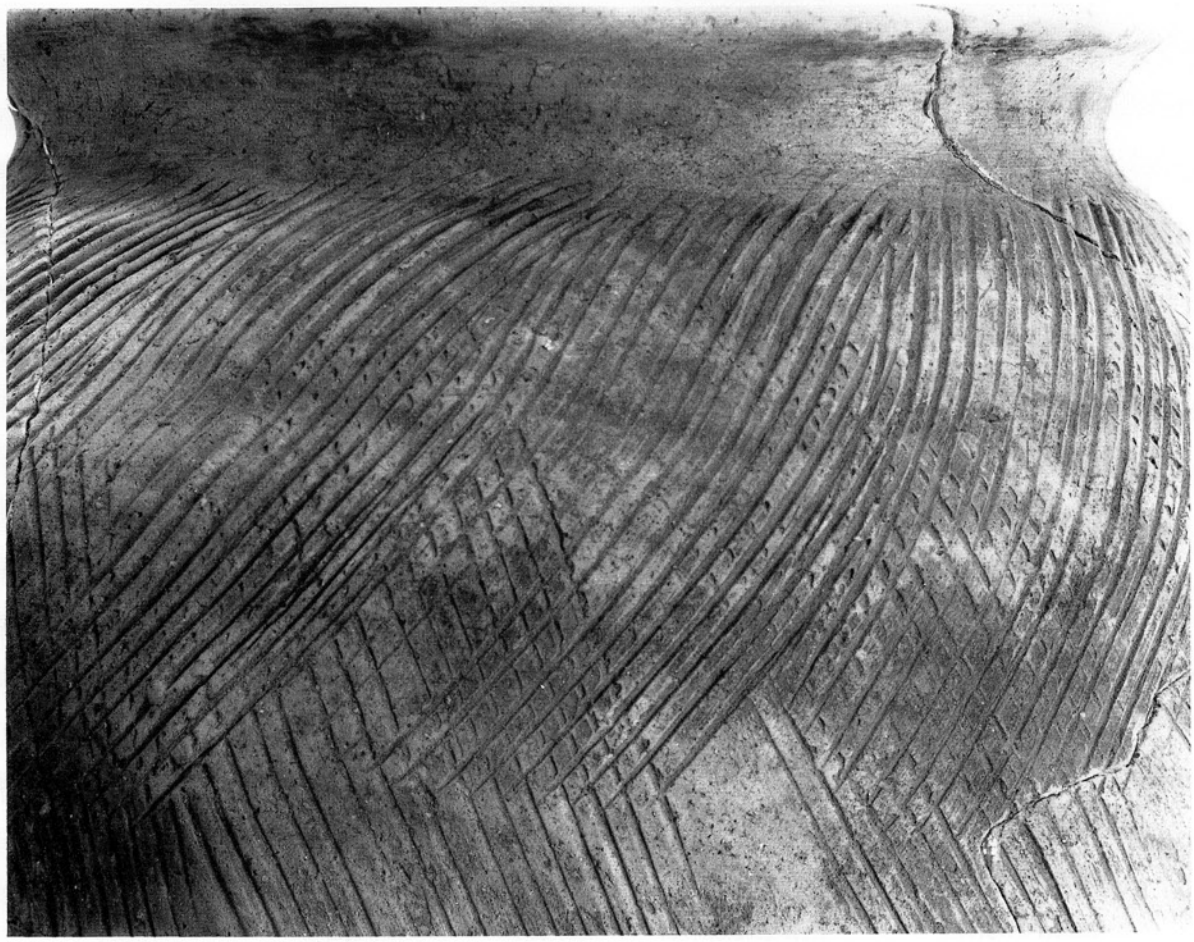
506

525

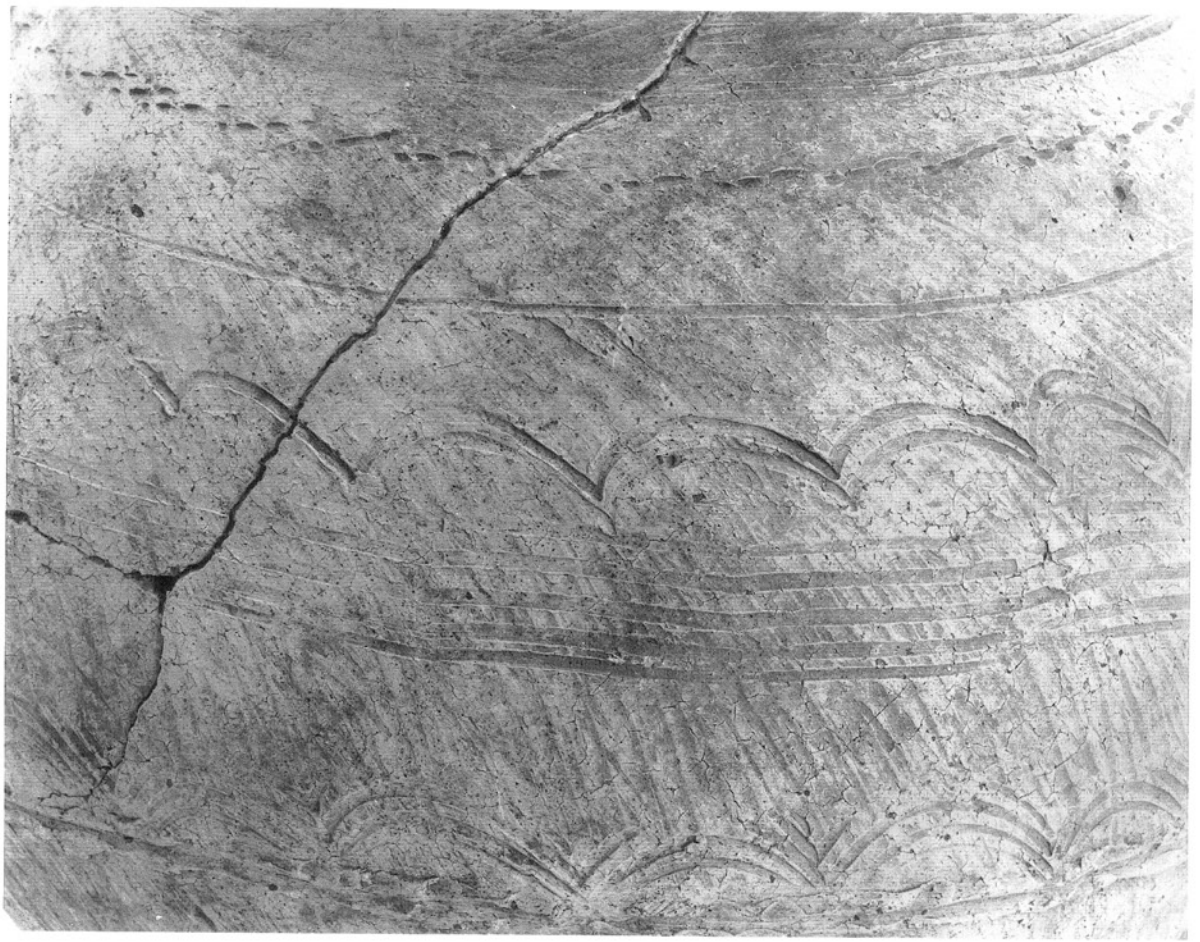
出土遺物(29)　施文・調整手法



869



779



940

919

報告書抄録

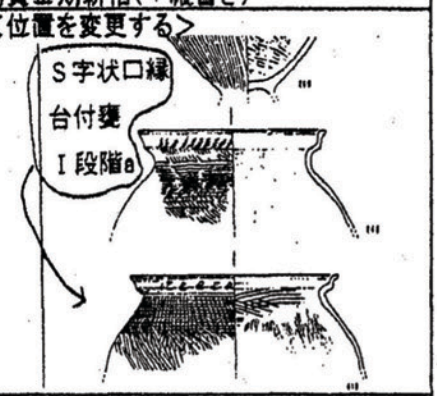
ふりがな	しまぬき さん
書名	嶋抜 Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	218
編著者名	伊藤裕偉　川崎志乃
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）7031
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
くもづしまぬきいせき 雲出島貫遺跡	つしくもづしまぬきちょう 津市雲出島貫町 あざふじもと・まちなか 字藤本・町中 ほか	24201	484	136度 31分 07秒	34度 38分 56秒	19990421～ 19990831	2,750	県道（一般地方道）嬉野津線国補橋梁整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雲出島貫遺跡	集落跡	縄文		晩期	
		弥生前期		遠賀川系土器	伊勢低地部の弥生前期
		弥生中期	竪穴住居 溝	土器	
		古墳前期	竪穴住居・環濠 方形周溝墓・水田	土師器（多量） 水銀朱付着粗製石杵	大廓式（駿河）など搬入 土器資料極めて良好
		古墳 中後期	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器 円筒形土器 石製紡錘車	台付甕とカマドの共存
		飛鳥奈良 平安	掘立柱建物（大形） 井戸・竪穴住居	土師器・須恵器 墨書土器「田井」	一志郡衙関連？
		中世前期	井戸・土坑	陶磁器・瓦器・土師器	

『嶋抜』Ⅲ　正誤表

☆ 発刊時に以下のように誤植がありました。デジタル化にあたり、誤植部分を修正しました。

ページ	位置	誤	正
106	fig.68　図内注記	B5区SZ504　1面西(728～731)	B5区SZ504　1面西(728～730)
174	fig.96　図内注記	上下数指数　%	上下長指数
177	fig.98　図内注記	Ⅱ段階a(B)	Ⅱ段階b(B)
180	fig.100　図内注記	島貫Ⅱ期新相(＊縦書き)	島貫Ⅲ期新相(＊縦書き)
184	fig.104　図内注記	S字状口縁台付甕　Ⅰ段階a	<位置を変更する> 
186	左段7行目	(4)土器計測分析につい_(tab.36)	(4)土器計測分析について(tab.36)
187	tab.36　キャプション	(高杯・　台以外は・・・・)	(高杯・器台以外は・・・・・)
187	fig.106　キャプション	甕口縁部の組織	甕口縁部の組成
187	fig.107　キャプション	甕底部の組織	甕底部の組成
PL..8	上の写真キャプション	(下層担当、北から)	(下層相当、北から)
PL..8	下の写真キャプション	(上層担当、北から)	(上層相当、北から)
PL. 32	下の写真の土器番号	400(＊右下のもの)	408(＊右下のもの)
103	土器番号	592(向かって左側の列、上から9番目)	593(向かって左側の列、上から9番目)
116	土器番号	1034(中央下方、1027の横の土器)	1032(中央下方、1027の横の土器)

平成 13(2001) 年3月に刊行されたものをもとに
平成 16(2004) 年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　２１８

嶋　　抜　　Ⅲ

２００１年3月３０日

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印 刷 者　　東 海 印 刷 株 式 会 社